志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書15

殿淵山遺跡・獅子谷遺跡（1）

― 遺構・遺物編 ―

2002年3月

国土交通省中国地方整備局
島根県教育委員会

序

当事務所では、いわゆる斐伊川・神戸川治水計画 3 点セットの一翼を担う事業として、神戸川の上流に平成 22 年度完成を目標に志津見ダムの建設事業を進めています。このダムにより、頓原町大字角井・志津見・八神にわたり面積約 2.3 km^2 もの貯水池ができることとなりますが、神戸川流域では古くからたたら製鉄が行われていたように、ダムによる水没予定地内にもこれらを含め多くの遺跡の存在が予想されたことから、ダム建設に先立ち、島根県教育委員会を始め関係各位の御協力を頂き、これら遺跡についての調査を計画的に実施してきております。

当報告書は、そのうち殿淵山遺跡・獅子谷遺跡の調査結果をとりまとめていただいたものです。殿淵山遺跡ではたたら製鉄に伴う遺物が大量に出土し、獅子谷遺跡では田部家文書にある「獅子谷鍛冶屋」と思われる近世の大鍛冶場跡が極めて良好な状態で確認できたことなど、当地でのたたら製鉄の歴史を語る上で貴重な資料が得られたのではないかと思います。

両遺跡は、ダム関連の工事に伴い全体を見渡すことはできなくなりましたが、そのような意味からも、ダム事業を契機として得られたこの貴重な資料をできるだけ正確かつ詳細に記録し後世に残すことが、せめてもの我々の務めでもあり、この報告書はその成果とも言えるものです。

最後になりましたが、当遺跡の調査並びに報告書のとりまとめに関係された皆様に深く感謝申し上げます。

平成 14 年 3 月

国土交通省中国地方整備局
斐伊川・神戸川総合開発工事事務所
所　長　田　中　　靖

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）の委託を受けて、平成元年度から志津見ダム建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しており、このたび報告書第15集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、平成10年度に実施した頓原町の殿淵山遺跡・獅子谷遺跡での発掘調査の記録です。今回の調査では、たたら製鉄に伴う大量の遺物や、江戸時代の大鍛冶場跡が確認され、この地域の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができました。本報告書が地域の歴史を解明していく糸口となり、郷土の歴史と文化財に対する理解や関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び本書を刊行するにあたり御指導、御協力いただきました地元の方々をはじめ国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所、頓原町教育委員会ならびに関係の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成14年 3 月

島 根 県 教 育 委 員 会

教 育 長　山　﨑　悠　雄

例　言

1　本書は、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局（現国土交通省中国地方整備局）より委託を受けて平成10（1998）年度に実施した、志津見ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2　本書に掲載した遺跡と地番は下記の通りである。

殿淵山遺跡　島根県飯石郡頓原町大字志津見 1－2 外

獅子谷遺跡　島根県飯石郡頓原町大字角井 1284－2 外

3　平成10（1998）年度の現地調査と13（2001）年度の報告書作成作業は、下記の組織で実施した。

平成10（1998）年度

事務局　島根県教育庁文化財課　勝部　昭（課長）、島地徳郎（課長補佐）

埋蔵文化財調査センター　宍道正年（センター長）、秋山　実（課長補佐）

調査員　埋蔵文化財調査センター　鳥谷芳雄（調査第 4 係長）、東山信治（同主事）、田中　勝（教諭兼文化財保護主事）、錦織稔之（教諭兼主事）、岩崎裕介（調査補助員）、坂根健悦（調査補助員）

調査指導（五〇音順、敬称略）

穴澤義功（たたら研究会委員）、大澤正巳（たたら研究会委員）、河瀬正利（広島大学教授）、杉原清一（島根県文化財保護指導委員）、高橋一郎（横田町文化財専門員）時枝克安（島根大学教授）

平成13（2001）年度

事務局　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田融（同総務課長）

松本岩雄（調査第 1 課長）、川原和人（調査第 2 課長）、今岡宏（総務係長）

萩雅人（調査第 6 係長）

調査員　東山信治（同主事）、越智昌二（教諭兼文化財保護主事）、糸賀五月（調査補助員）

調査指導（五〇音順、敬称略）

穴澤義功（たたら研究会委員）、時枝克安（島根大学教授）

4　発掘作業（発掘作業員雇用・重機借り上げ・発掘用具調達等）については建設省（現国土交通省）・社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会

［現場担当］金山浩司

［事務担当］市川美奈

発掘作業員

伊藤辰雄、後長寿馬子、後長　毅、立脇重富、内藤ステヨ、平田咲江、三島淳二
毛利勝子、渡部一夫、木下米子、岩田清子、井上トミ子、梅田雪夫、大沢マツヨ
沖田文恵、景山千津子、岸　秀雄、坂井愛子、新治光夫、中岡武男、原　愛子
松岡ヨシエ、渡辺武夫

5　現地調査及び資料整理に際しては、以下の方々から有意義な御指導・御助言・御協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

田中迪亮・山埼順子・石飛幹祐（頓原町教育委員会）、稲垣寿彦（庄原市教育委員会）、高崎直成（埼玉県大井町教育委員会）光永真一（岡山県古代吉備文化財センター）、松井和幸（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）

6　第 2 図は、国土地理院発行のものを使用した。また、遺跡空中写真撮影・基準点作成、および平板測量の一部に関しては、社団法人中国建設弘済会を通じて別途業者に委託した。

7　本書に掲載した写真は、主に東山が撮影した。

8　本書に掲載した実測は以下のものが行った。

（実測）東山、越智、糸賀、岩崎、佐藤幸子、青木満、野津清、佐野木信義、寺尾令、景山真二、守山博義、石橋弥生、梶谷泰子、鹿野孝博、寺本和明

9　遺物整理及び実測図の浄写は以下のものが行った。

浅井順子、大谷京子、大畑真由美、笠井文恵、門脇卓子、金森千恵子、岸美佐子、佐々木順子、瀬川恭子、山根るみ子、吉田典子、若佐裕子、和田豊子、渡部恵子

10　本書の執筆・編集は文化財課・埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て東山が行った。

11　本書掲載の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターで保管している。

12　調査に関連する自然科学的分析は次の方々・機関に依頼した。

放射性炭素年代：（財）九州環境管理協会

考古地磁気年代測定：時枝克安（島根大学）

製鉄関連遺物金属学的分析：（株）九州テクノリサーチ・TAC センター

なお、これら自然科学的な分析の結果については、次巻の『殿淵山遺跡・獅子谷遺跡（2）－分析・総括編　－』に掲載する。

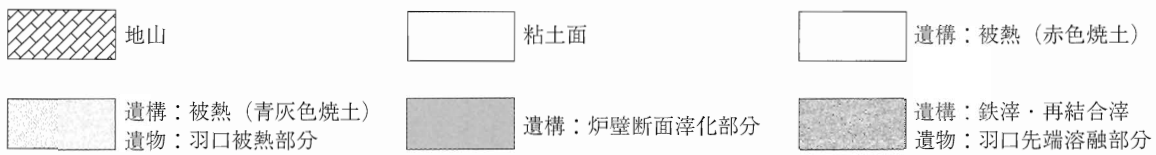
凡例

1　図中に示した方位は、測量法による第Ⅲ座標系 X 軸の方向を示している。

2　座標値は前述の第Ⅲ座標系での位置を表し、レベル高は海抜高を示す。

3　本書で用いた遺構名称は、現地調査時から振り替えを行っている。次頁の新旧遺構名対応表を参照されたい。

4　遺構・遺物実測図のスクリーントーンの表記は下図の通りである。



新旧遺跡名対応表

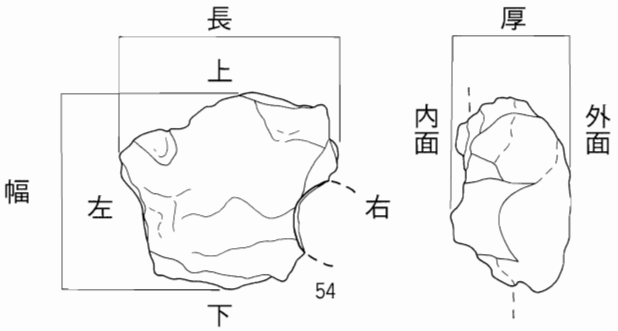
殿淵山遺跡

新遺構名（報告書）	旧遺構名（現地調査時）	備考
SB 01	P 13・14・15・16・24, SK 05	
柱穴列 1	P 32・50・51・53	
SK 01	SK 01	
SK 02	麻蒸遺構	
SK 03	SK 08	

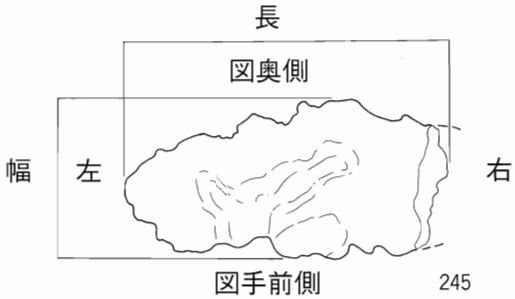
獅子谷遺跡

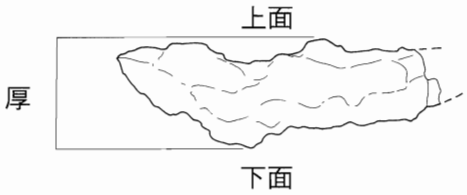
新遺構名（報告書）	旧遺構名（現地調査時）	備考
SB 01	P 22・23・38・40・48・49・54・60・61・62	Ⅱ期
SB 02	P 16・17・22・23・24・25・26・27・33, SK 22	Ⅲ期
1 号鍛冶炉	4 号鍛冶炉	Ⅰ期
2 号鍛冶炉（新）	9 号鍛冶炉	Ⅰ期
2 号鍛冶炉（中）	10 号鍛冶炉	Ⅰ期
2 号鍛冶炉（古）	11 号鍛冶炉	Ⅰ期
3 号鍛冶炉	5 号鍛冶炉	Ⅱ期
4 号鍛冶炉	SK 08・12 号鍛冶炉	Ⅱ期
5 号鍛冶炉	1 号鍛冶炉	Ⅲ期
6 号鍛冶炉	6 号鍛冶炉	Ⅲ期
7 号鍛冶炉（新）	2 号鍛冶炉	Ⅲ期
7 号鍛冶炉（古）	8 号鍛冶炉	Ⅲ期
8 号鍛冶炉	3 号鍛冶炉・7 号鍛冶炉	Ⅲ期
鉄床 1	SX 06	Ⅰ期
鉄床 2	SX 05	Ⅱ期
鉄床 3	SX 02	Ⅲ期
鉄床 4	鉄床遺構	Ⅲ期
SD 01	SD 09	Ⅰ期
SD 02	SD 06・08	Ⅱ期
SD 03	SD 07	Ⅱ期
SD 04	SD 01・02・03	Ⅲ期
SD 05	SD 04	Ⅲ期
SK 01	SX 09	Ⅰ期
SK 02	SK 09	Ⅱ期
SK 03	SK 21	Ⅲ期
SK 04	SK 15	Ⅲ期
SK 05	SK 10	Ⅲ期
SK 06	SK 17	Ⅲ期
SK 07	P 15	Ⅲ期
SK 08	SK 14	Ⅲ期
SK 09	SK 11	Ⅲ期
SK 10	SK 12	Ⅲ期
SK 11	SK 01	
SX 01	かまど状遺構 2	Ⅱ期
SX 02	かまど状遺構 1	Ⅲ期
水場遺構	SK 20・SX 04	Ⅲ期
石列 1	石列 1	Ⅲ期
石列 2	石列 2	Ⅲ期
石列 3	石列 4	Ⅲ期
石列 4	石列 3	Ⅲ期

5　製鉄・鍛冶関連遺物については遺跡別に通し番号を割り振った。製鉄・鍛冶関連遺物の番号は実測図正位置の右下に付記した。各遺物の計測値は、炉壁・鉄滓・鉄塊系遺物の場合、正位置の図の左右を長さ、上下を幅、横方向に展開したときの左右（縦方向に展開したときの上下）を厚さとし、小割鉄・鉄製品については錆部分を除いた長軸長を長さ、短軸長を幅としている。なお、本文・観察表の記述における遺物の各面の呼び方は下の凡例図のとおりである。

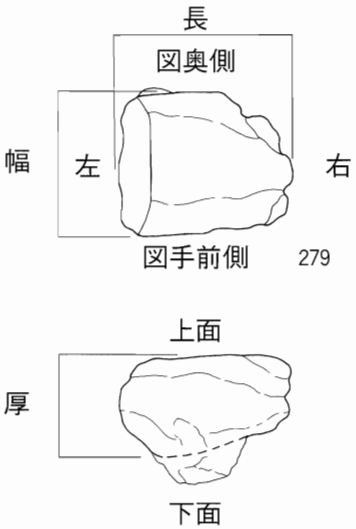


炉壁例

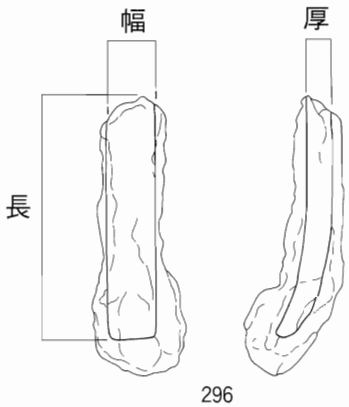




鉄滓・鉄塊系遺物例



小割鉄・鉄塊系遺物例 1



小割鉄・鉄製品例 2

6　製鉄関連遺物のうち、流動滓については実測図中に→で流動方向を示した。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……1
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境……2
　第２節　歴史的環境……3
第３章　殿淵山遺跡の調査
　第１節　概要……9
　第２節　Ⅰ区の調査……13
　　1　遺構……13
　　2　遺物……16
　第３節　排滓場の調査……16
　　1　トレンチ調査の結果……16
　　2　製鉄関連遺物……18
　第４節　小結……63
第４章　獅子谷遺跡の調査
　第１節　遺跡の概要……65
　第２節　遺構……70
　　1　大鍛冶場Ⅰ期の遺構……70
　　2　大鍛冶場Ⅱ期の遺構……77
　　3　大鍛冶場Ⅲ期の遺構……83
　　4　その他の遺構……107
　第３節　南区の調査……110
　第４節　遺物……111
　　1　陶磁器……111
　　2　古銭・銅製品……115
　　3　鍛冶関連遺物……115
　第５節　小結……191
　　1　遺構の配置と変遷……191
　　2　鍛冶炉について……192
　　3　鍛冶関連遺物……193
　　4　獅子谷遺跡の歴史的背景……194

挿図目次

第１図　殿淵山・獅子谷遺跡位置図
第２図　神戸川中流域遺跡分布図（S＝１/50,000）
第３図　殿淵山遺跡周辺地形図（S＝１/1,500）
第４図　殿淵山遺跡調査前地形測量図・調査区設定図（S＝１/500）
第５図　殿淵山遺跡遺構配置図（S＝１/300）
第６図　殿淵山遺跡１トレンチ東壁土層断面（S＝１/100）
第７図　殿淵山遺跡 SB01実測図（S＝１/80）
第８図　殿淵山遺跡柱穴列１実測図（S＝１/80）
第９図　殿淵山遺跡 SK01実測図（S＝１/30）
第10図　殿淵山遺跡 SK02実測図（S＝１/30）
第11図　殿淵山遺跡 SK03実測図（S＝１/30）
第12図　殿淵山遺跡炭窯実測図（S＝１/40）
第13図　殿淵山遺跡排滓場トレンチグリッド図（S＝１/160）・土層断面図（S＝１/80）
第14図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物分類模式図
第15図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（１）（S＝１/８）
第16図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（２）（S＝１/６）
第17図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（３）（S＝１/６）
第18図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（４）（S＝１/4，１/６）
第19図　製鉄炉模式図
第20図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（１）（S＝１/４）
第21図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（２）（S＝１/４）
第22図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（３）（S＝１/４）
第23図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（４）（S＝１/４）
第24図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（５）（S＝１/４）
第25図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（６）（S＝１/４）
第26図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（７）（S＝１/４）
第27図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（８）（S＝１/４）
第28図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（９）（S＝１/４）
第29図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（10）（S＝１/４）
第30図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（11）（S＝１/３）
第31図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（12）（S＝１/３）
第32図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（13）（S＝１/３）
第33図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（14）（S＝１/３）
第34図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（15）（S＝１/３）
第35図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（16）（S＝１/３）
第36図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（17）（S＝１/３）
第37図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（18）（S＝１/３）
第38図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（19）（S＝１/３）
第39図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（20）（S＝１/３）
第40図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（21）（S＝１/３）
第41図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（22）（S＝１/３）
第42図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（23）（S＝１/３）
第43図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（24）（S＝１/３）
第44図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（25）（S=1/3，1/2）
第45図　獅子谷遺跡調査前地形測量図・調査区設定図（S＝１/400）
第46図　獅子谷遺跡土層断面図（地表～上層粘土面上面）（S＝１/80）
第47図　獅子谷遺跡遺構配置図（S＝１/120）
第48図　獅子谷遺跡土層断面図（S＝１/50）
第49図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅰ期遺構配置図（S＝１/80）
第50図　獅子谷遺跡１号鍛冶炉実測図（S＝１/30）
第51図　獅子谷遺跡２号鍛冶炉実測図（S＝１/30）
第52図　獅子谷遺跡２号鍛冶炉地下構造実測図（S＝１/30）
第53図　獅子谷遺跡２号鍛冶炉地下構造・掘り方実測図（S＝１/30）
第54図　獅子谷遺跡鉄床１実測図（S＝１/30）
第55図　獅子谷遺跡 SK01実測図（S＝１/30）
第56図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅱ期遺構図（S＝１/80）
第57図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅱ期 SB01・SD02断面図（S＝１/80）
第58図　獅子谷遺跡３号鍛冶炉実測図（S＝１/30）
第59図　獅子谷遺跡４号鍛冶炉実測図（S＝１/30）
第60図　獅子谷遺跡４号鍛冶炉地下構造内壁実測図（S＝１/30）

第61図　獅子谷遺跡４号鍛冶炉掘り方・SK02実測図
（S＝１/30）
第62図　獅子谷遺跡鉄床２実測図（S＝１/30）
第63図　獅子谷遺跡 SX01実測図（S＝１/30）
第64図　獅子谷遺跡 SK03実測図（S＝１/30）
第65図　獅子谷遺跡 SD03実測図（S＝１/40）
第66図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅲ期遺構図
（S＝１/80）
第67図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅲ期 SB02柱穴断面図
（S＝１/80）
第68図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅲ期作業面検出状況図
（S＝１/80）
第69図　獅子谷遺跡５号鍛冶炉実測図（S＝１/30）
第70図　獅子谷遺跡６号鍛冶炉・SK04実測図
（S＝１/30）
第71図　獅子谷遺跡７号鍛冶炉新段階実測図
（S＝１/30）
第72図　獅子谷遺跡７号鍛冶炉古段階・掘り方実測図
（S＝１/30）
第73図　獅子谷遺跡８号鍛冶炉実測図（S＝１/30）
第74図　獅子谷遺跡鉄床３・鉄床４実測図（S＝１/30）
第75図　獅子谷遺跡石列３・SX02実測図（S＝１/30）
第76図　獅子谷遺跡石列１実測図（S＝１/40）
第77図　獅子谷遺跡石列２・水場遺構・階段状遺構実測図
（S＝１/40）
第78図　獅子谷遺跡 SK05,06実測図（S＝１/30）
第79図　獅子谷遺跡 SK07実測図（S＝１/30）
第80図　獅子谷遺跡 SK08実測図（S＝１/30）
第81図　獅子谷遺跡 SK09実測図（S＝１/30）
第82図　獅子谷遺跡 SK10実測図（S＝１/30）
第83図　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・
鍛造剥片分布図（１）（S＝１/100）
第84図　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・
鍛造剥片分布図（２）（S＝１/100）
第85図　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・
鍛造剥片分布図（３）（S＝１/100）
第86図　獅子谷遺跡上層粘土面実測図（S＝１/80）
第87図　獅子谷遺跡石列４実測図（S＝１/40）
第88図　獅子谷遺跡 SK11実測図（S＝１/30）
第89図　獅子谷遺跡金屋子残丘状遺構・金屋子石組遺構
実測図（S＝１/200　S＝１/40）
第90図　獅子谷遺跡金屋子石組遺構出土石製品実測図
（S＝１/８）
第91図　獅子谷遺跡南区１トレンチ北壁土層断面図
（S＝１/40）
第92図　獅子谷遺跡出土陶磁器実測図（S＝１/３）
第93図　獅子谷遺跡出土陶磁器器種構成・産地別比率
第94図　獅子谷遺跡出土古銭拓影・銅製品実測図
（S＝１/１）
第95図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物分類模式図
第96図　獅子谷遺跡鉄滓分布図（１）
（S＝１/300）
第97図　獅子谷遺跡鉄滓分布図（２）
（S＝１/300）
第98図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（１）
第99図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（２）
第100図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（３）
第101図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（４）
第102図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（５）
第103図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（６）
第104図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（７）
第105図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（８）
第106図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（９）
第107図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（10）
第108図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（１）
（S＝１/４　S＝１/３　S＝１/２）
第109図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（２）
（S＝１/４　S＝１/３）
第110図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（３）
（S＝１/３　S＝１/４　S＝１/２）
第111図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（４）
（S＝１/４　S＝１/３）
第112図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（５）
（S＝１/６）

第113図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（６）
（S＝１／６　S＝１／４）
第114図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（７）
（S＝１／６　S＝１／４　S＝１／３）
第115図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（８）
（S＝１／４　S＝１／３）
第116図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（９）
（S＝１／２）
第117図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（10）
（S＝１／４　S＝１／６）
第118図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（11）
（S＝１／６　S＝１／３）
第119図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（12）
（S＝１／４　S＝１／６）
第120図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（13）
（S＝１／６　S＝１／４　S＝１／３　S＝１／２）
第121図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（14）
（S＝１／３　S＝１／４）
第122図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（15）
（S＝１／６　S＝１／３）
第123図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（16）
（S＝１／３　S＝１／２）
第124図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（17）
（S＝１／４　S＝１／３　S＝１／２）
第125図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（18
（S＝１／４　S＝１／３　S＝１／２）
第126図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（19）
（S＝１／４　S＝１／３　S＝１／２）
第127図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（20）
（S＝１／３　S＝１／２　S＝１／４）
第128図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（21）
（S＝１／３　S＝１／４）
第129図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（22）
（S＝１／４　S＝１／３）
第130図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（23）
（S＝１／４）
第131図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（24）
（S＝１／４　S＝１／３）
第132図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（25）
（S＝１／４）
第133図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（26）
（S＝１／４　S＝１／３）
第134図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（27）
（S＝１／３　S＝１／４　S＝１／６）
第135図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（28）
（S＝１／４　S＝１／２）
第136図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（29）
（S＝１／４）
第137図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（30）
（S＝１／４　S＝１／２　S＝１／３）
第138図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（31）
（S＝１／４　S＝１／３）
第139図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（32）
（S＝１／３）
第140図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（33）
（S＝１／４）
第141図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（34）
（S＝１／４　S＝１／６）
第142図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（35）
（S＝１／６）
第143図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（36）
（S＝１／６）
第144図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（37）
（S＝１／６）
第145図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（38）
（S＝１／４）
第146図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（39）
（S＝１／４）
第147図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（40）
（S＝１／３）
第148図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（41）
（S＝１／３）
第149図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（42）
（S＝１／３）
第150図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（43）
（S＝１／４）

第151図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（44）
（S＝1／3）
第152図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（45）
（S＝1／3　S＝1／2）
第153図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（46）
（S＝1／4　S＝1／3）
第154図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（47）
（S＝1／4　S＝1／3）

表目次

第１表　神戸川中流域の遺構一覧表（その１）
第２表　神戸川中流域の遺構一覧表（その２）
第３表　志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財　関連文献一覧
第４表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（１）
第５表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（２）
第６表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（３）
第７表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（４）
第８表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（５）
第９表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（６）
第10表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（７）
第11表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（８）
第12表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（９）
第13表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（10）
第14表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（11）
第15表　殿淵山遺跡出土木炭観察表
第16表　殿淵山遺跡出土製鉄関連遺物グリッド別重量表
第17表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場粒状滓・鍛造剥片
出土地点別重量一覧表（１）
第18表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場粒状滓・鍛造剥片
出土地点別重量一覧表（２）
第19表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場粒状滓・鍛造剥片
出土地点別重量一覧表（３）
第20表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場粒状滓・鍛造剥片
出土地点別重量一覧表（４）
第21表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場粒状滓・鍛造剥片
出土地点別重量一覧表（５）
第22表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場粒状滓・鍛造剥片
出土地点別重量一覧表（６）
第23表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場粒状滓・鍛造剥片
出土地点別重量一覧表（７）
第24表　獅子谷遺跡陶磁器観察表
第25表　獅子谷遺跡出土陶磁器組成表
第26表　獅子谷遺跡古銭・銅製品観察表
第27表　獅子谷遺跡鉄滓出土地区・遺構別重量表
第28表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（１）
第29表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（２）
第30表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（３）
第31表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（４）
第32表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（５）
第33表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（６）
第34表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（７）
第35表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（８）
第36表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（９）
第37表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（10）
第38表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（11）
第39表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（12）
第40表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（13）
第41表　獅子谷遺跡出土木炭観察表（１）
第42表　獅子谷遺跡出土木炭観察表（２）

図版目次

図版１　上　殿淵山遺跡遠景（南東より）
中　同上　Ⅰ区（東より）
下　同上　SB01（北より）
図版２　上　殿淵山遺跡Ⅰ区SK01礫検出（南より）
中　同上　SK01完掘（南より）
下　同上　SK02（西より）

図版３　上　殿淵山遺跡Ⅰ区 SK03（西より）
中　同上　SK03粘土面断面（西より）
下　同上　Ⅰ区西側調査後（東より）
図版４　上　殿淵山遺跡Ⅰ区東側調査後（西より）
中　同上　炭窯跡（南より）
下　同上　排滓場調査前近景（北東より）
図版５　上　殿淵山遺跡排滓場断面イ－13～22グリッド（南東より）
中　同上　排滓場断面ウ～カ－15グリッド（東より）
下　同上　排滓場断面ア－１～12グリッド（北より）
図版６　殿淵山遺跡出土陶磁器
図版７　殿淵山遺跡製鉄関連遺物
図版８　殿淵山遺跡製鉄関連遺物
図版９　殿淵山遺跡製鉄関連遺物
図版10　殿淵山遺跡製鉄関連遺物
図版11　殿淵山遺跡製鉄関連遺物
図版12　殿淵山遺跡製鉄関連遺物
図版13　殿淵山遺跡製鉄関連遺物
図版14　獅子谷遺跡遠景（北東上空より）
図版15　上　獅子谷遺跡俯瞰写真
下　同上　調査状況（東上空より）
図版16　上　獅子谷遺跡調査前近景（南より）
下　同上　調査後写真
図版17　獅子谷遺跡１号鍛冶炉・２号鍛冶炉
図版18　獅子谷遺跡２号鍛冶炉地下構造
図版19　獅子谷遺跡２号鍛冶炉・鉄床１・３号鍛冶炉
図版20　獅子谷遺跡３号鍛冶炉・４号鍛冶炉
図版21　獅子谷遺跡４号鍛冶炉
図版22　獅子谷遺跡４号鍛冶炉・鉄床２
図版23　上　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場跡（東より）
下　同上　SB02（東より）
図版24　獅子谷遺跡５号鍛冶炉・６号鍛冶炉
図版25　獅子谷遺跡７号鍛冶炉
図版26　獅子谷遺跡７号鍛冶炉
図版27　上　獅子谷遺跡８号鍛冶炉（北より）
下　同上　８号鍛冶炉横断面（北より）
図版28　獅子谷遺跡８号鍛冶炉・鉄床３・鉄床４
SX02・SK05
図版29　獅子谷遺跡 SK07・SK08・SK10
石列２・水場遺構
図版30　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場跡・SB02－P３
上層粘土面・SK11・石列４・金屋子遺構
図版31　獅子谷遺跡金屋子遺構・南区・調査風景
製鉄関連遺物整理作業・７号鍛冶炉剥ぎ取り作業
図版32　獅子谷遺跡出土陶磁器
図版33　獅子谷遺跡出土陶磁器
図版34　獅子谷遺跡出土陶磁器・石製品・古銭
図版35　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版36　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版37　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版38　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版39　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版40　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版41　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版42　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物
図版43　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物

第 1 章　調査に至る経緯と調査の経過

第 1 節　調査に至る経緯

志津見ダムは、斐伊川・神戸川治水計画の一環として建設される洪水調節用のダムである。湛水地域は、島根県飯石郡頓原町大字角井、志津見、八神地域にまたがり、面積は230 ha に及ぶ。埋蔵文化財の調査は、建設省より委託を受け平成元年度から調査を開始している。これまでの発掘調査・分布調査により、ダム湛水地域及び生活再建地や道路付替工事など関連事業地内で、27 遺跡が調査対象となっていたが、平成 13（2001）年度をもってこれら全ての現地調査が終了した。

殿淵山遺跡は飯石郡頓原町大字志津見に所在し、殿淵カナクソ畑鈩跡として周知されていた製鉄遺跡であるが、平成 6（1994）年の分布調査時に現在の遺跡名に変更された。工事用道路の付け替え予定地に含まれていたため、事業に先立ち平成 10（1998）年度に 930㎡の発掘調査を行った。

獅子谷遺跡は飯石郡頓原町大字角井に所在する周知の遺跡で、工事残土処理場とそれに至る工事用道路の予定地に含まれていた。このため、事業に先立ち平成 10（1998）年度に発掘調査を行うこととなった。

第 2 節　調査の経過

殿淵山遺跡の本発掘調査は平成 10（1998）年 4 月 16 日から開始した。まず、遺跡中心部周辺の調査前の地形を測量したのち表土掘削、遺構精査を行った。遺構は近世以降の掘立柱建物跡、土坑、ピットなどが確認され、遺物として近世以降の陶磁器が出土したが、製鉄遺構は調査以前に壊されており検出できなかった。遺跡中心部の南側では排滓場があると考えられたため、トレンチ調査を実施し、鉄滓堆積層を確認した。製鉄関連遺物については、現地調査と並行して水洗・分類作業を行い、必要なものについては調査終了後、埋蔵文化財調査センターに持ち帰り整理をした。7 月 3 日に現地調査を終了した。なお、調査後の地形測量は（有）創互技研に委託している。

獅子谷遺跡の本調査は平成 10（1998）年 6 月 29 日から開始したが、これに先立って（有）創互技研に調査前の地形測量を委託している。発掘作業は人力で表土掘削を行い、遺構面の検出・精査をした。合計で 8 基の鍛冶炉、2 棟の建物跡などが検出され、層位的に見て 3 時期以上にわたって営まれた大鍛冶場跡があることが分かった。遺構は極めて良好な残存状態で、しかも複雑であったため調査は予想以上に難航し、翌年 1 月以降も継続して調査することとなった。冬期の山間部は大雪が来ることも予想されたため、1 月中旬には遺構の上部を大型のビニールハウスで覆い調査を進めた。途中 20㎝を超える積雪に見舞われたが、ビニールハウスのため調査に支障を来すことはなかった。2 月 3 日に現地調査を終了した。調査の過程で大量の鍛冶関連遺物が出土しているが、現地調査と並行してこれらの水洗作業を進め、調査終了後、埋蔵文化財調査センターでも分類・整理を行った。なお、9 月 20 日に現地説明会を開催し、約 40 名の見学者が来訪した。

獅子谷遺跡 7 号鍛冶炉については、鞴の羽口が原位置で遺存するなど、極めて良好な残存状態であったため京都科学（株）に剥ぎ取り複製の製作を委託した。

第 2 章　位置と環境

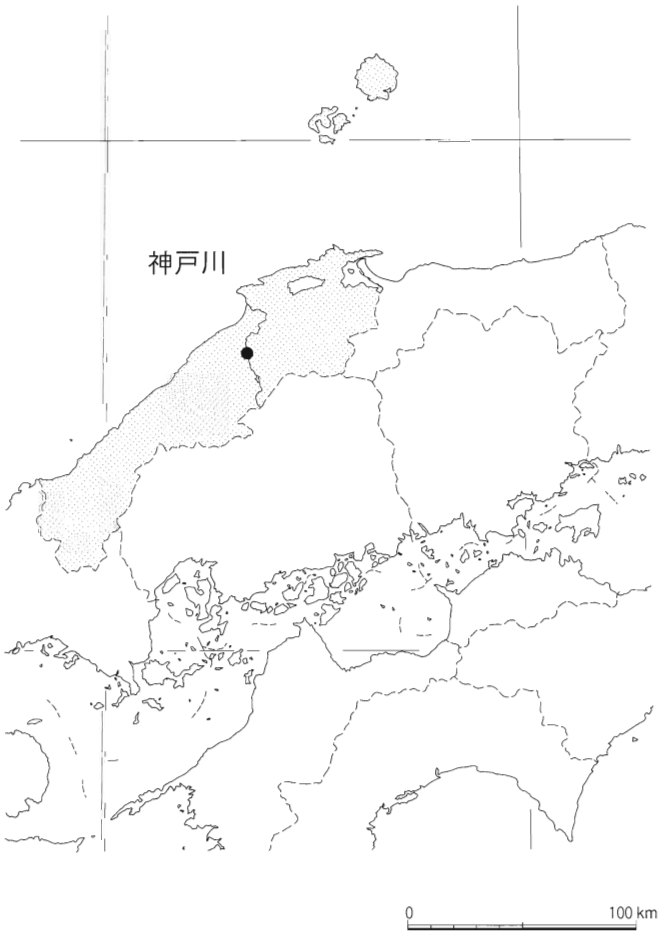
第 1 節　地理的環境

島根県と広島県の県境、中国山地の赤名峠の西方に位置する女亀山（標高 830 m）に源を発する神戸川は、赤来町・頓原町・佐田町・出雲市・大社町の 1 市 4 町を経て、日本海に注いでいる。殿淵山遺跡・獅子谷遺跡はその中流域に位置している。殿淵山遺跡は島根県飯石郡頓原町大字志津見に所在し、神戸川右岸の丘陵裾が川側へ向かって張り出して形成された平坦面上にある。獅子谷遺跡は飯石郡頓原町大字角井に所在する。神戸川の支流、角井川は神戸川の西を流れているが、さらにその支流の獅子谷川をおよそ 200 m 遡った右岸丘陵上の平坦面に位置する。遺跡は狭い谷に面しており、ここからの眺望はよくない。両遺跡とも二次堆積した火山灰や砂層、砂礫層が基盤となっており、地形の形成は河川の氾濫や土石流の影響を受けていると思われる。両遺跡周辺には起伏量 200～400 m の中起伏山地が連なっている。

神戸川流域は、西側約 5 ㎞にそびえる三瓶山（標高 1126 m）の影響を強く受けている。三瓶山は約 3600 年前まで噴火活動を繰り返した山で、それに由来する火山灰や火砕流などの堆積物や黒ボク土壌が多く見られる。この地域の基本的層序は、上層より第 1 黒色土層－第 1 ハイカ層（三瓶太平山降下火山灰：約 3600 年前）－第 2 黒色土層－第 2 ハイカ層（三瓶角井降下火山灰：約 4700 年前）－第 3 黒色土層－第 3 ハイカ層－三瓶浮布降下火山灰層－三瓶浮布降下軽石層の順になっている。第 3 黒色土層上層部ではアカホヤ降下灰層準が認められており、その年代は 6300 B.P. 前後であることが確認されている。

気候は、日本海岸気候に属し、低温・多雨・多雪の寒冷地帯である。

遺跡周辺の植生は、コナラ林、アカマツ林や、スギ、ヒノキの人工林が見られる。



第 1 図　殿淵山・獅子谷遺跡位置図

第 2 節　歴史的環境

神戸川上・中流域における遺跡は、砂礫段丘や谷底氾濫原などの僅かな平坦地を中心に展開しており、時期的にかなり長期にわたって営まれている複合遺跡が多い。これは急峻な山が多く、利用できる平坦地が少ないという地理的制約によるところが大きいと思われる。

以下、時代を追って頓原町及び周辺地域の主要な遺跡を取り上げ、この地域の歴史的環境を概観する。

縄文時代　頓原町及び周辺地域においては、旧石器時代の遺跡は今のところ見つかっておらず、人間の活動の跡が見られるのは縄文時代以降である。代表的な縄文時代の遺跡としては、五明田遺跡、森遺跡、門遺跡、板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡、貝谷遺跡があげられる。板屋Ⅲ遺跡では縄文時代の遺構・遺物と三瓶火山灰との層位的な関係が初めて確認され、第 3 黒色土層が草創期末～前期末、第 2 黒色土層が前期末～後期前葉、第 1 黒色土層が後期中葉以降の包含層であることが明らかとなり、周辺の遺跡を調査する際の基準となっている。五明田遺跡からは縄文時代後期初頭から前葉の竪穴住居が確認されたほか、後期前葉の磨消縄文土器が良好な状態で多量に出土している。下山遺跡では東北地方からもたらされた「屈折像土偶」や後期の配石遺構が、また門遺跡では後期の土偶や後期から晩期の墓坑群などが検出され、縄文時代の祭祀形態や墓制を知る上で貴重な資料が得られた。貝谷遺跡では後期の竪穴住居跡 2 棟や土壙墓 1 基が検出された。

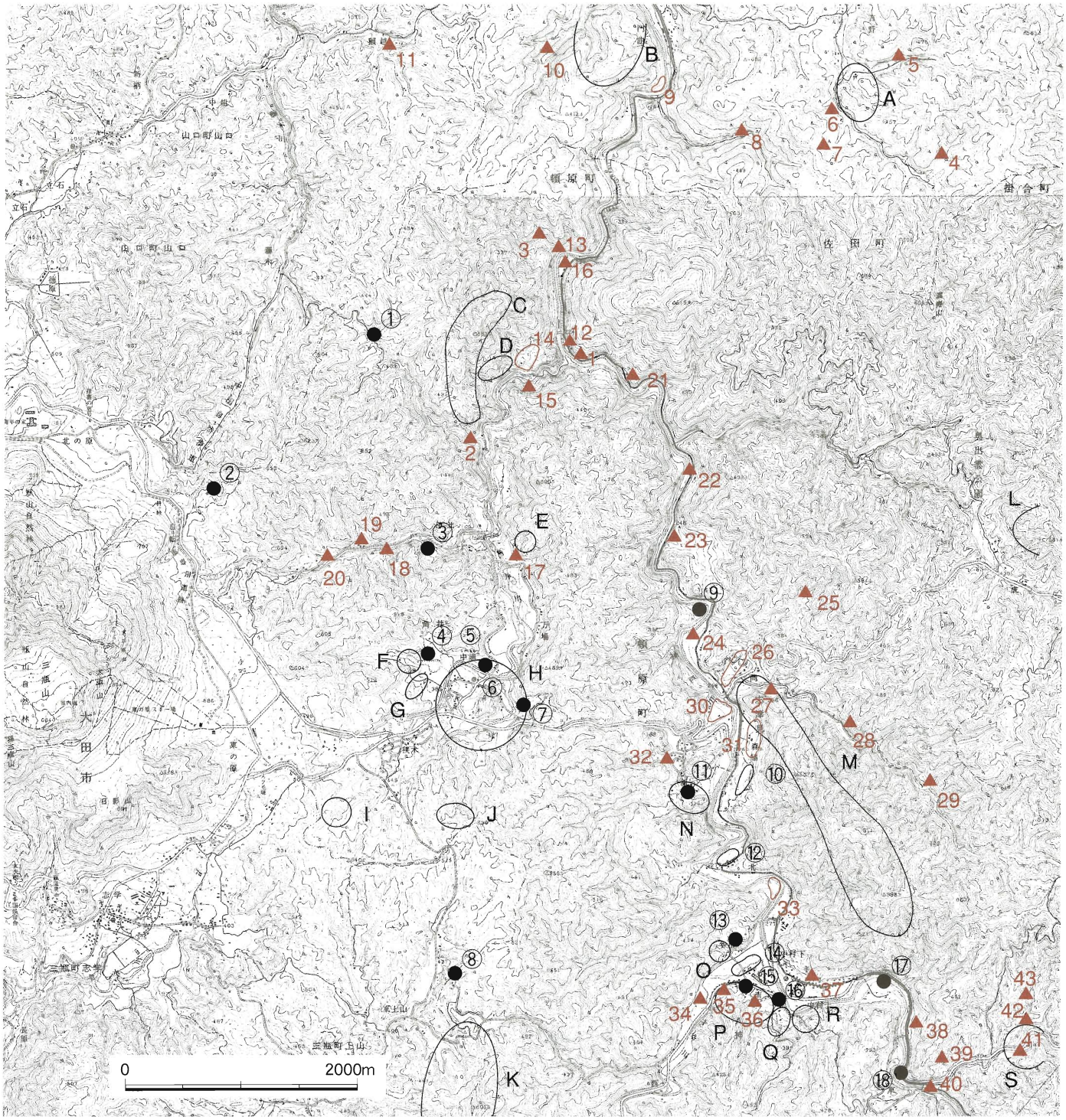
弥生時代　前期まで遡る遺跡は、森遺跡、五明田遺跡、板屋Ⅲ遺跡、下山遺跡などがあるが、出土する遺構・遺物は多くない。板屋Ⅲ遺跡では前期後半の配石遺構群が確認されている。中期の遺跡は、拠点的な集落で、多くの竪穴住居跡が検出された門遺跡のほか、森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡、小丸遺跡等があり、継続して営まれているものが多い。後期の遺構・遺物を多く検出している森遺跡群では、竪穴住居や溝状遺構、住居に隣接して土坑墓群が検出され、集落と墓域の様相を考える上で貴重な資料を提供した。また、弥生時代後期の遺構に伴って鉄器が出土しており、当該期の鉄器の普及状況を示す好資料といえる。

古墳時代　前期初頭には、弥生時代後期から継続して営まれる集落もあるが、前期・中期とも目立った遺跡は確認されておらず、下山遺跡で中期後半の竪穴住居が知られるのみである。後期後半になると、集落跡や古墳の検出が顕著となってくる。森遺跡、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡、小丸遺跡などで集落が営まれ、方形の竪穴住居の壁に石組の造り付け竈を設けるものが多く見られる。小丸遺跡では 3 棟の竪穴住居から炭化した建築材が出土し、焼失住居の好資料が得られた。また、横穴式石室を内蔵した古墳や横穴墓も各地域で造られており、八神地域では中原古墳・比丘尼塚古墳が、志津見地域では門 1・2 号墳、角井地域では堂ノ原横穴墓がそれぞれ知られている。

奈良・平安時代　古墳時代後期の集落から継続して営まれるものが多く、森遺跡、門遺跡からは時期が明確でないが大規模な掘立柱建物が確認されている。門遺跡では 7 世紀代の竪穴住居内から鉄塊や鉄滓、鍛造が採取されており、鍛冶が行われていたことが分かる。神原Ⅱ遺跡では、奈良時代の竪穴住居が検出され、紡錘車・鉄鎌などの鉄製品や銅製の腰帯金具も出土している。

中　　世　森脇山城跡は地形測量によって、典型的な戦国期の山城であることが分かっている。森遺跡、門遺跡、板屋Ⅲ遺跡からは 13～16 世紀の貿易陶磁や信楽・美濃・備前等の国産陶器も検出さ

れており、石見銀山や国境に近いこの地域が交通・交易・軍事の要衝であったことがうかがえる。森Ⅴ遺跡では土師質土器とともに鉄製品が埋納された中世後半の土坑が 7 基されており、これらは祭祀遺構と考えられている。志々地区においては、高殿鈩成立以前と推定される製鉄遺跡のうち、製錬遺跡と考えられるところは 18 ヶ所あり、板屋Ⅲ遺跡、門遺跡、戸井谷尻遺跡、弓谷たたら跡、戸井谷遺跡、貝谷遺跡で製錬炉が発掘調査されている。炉の地下構造は、板屋Ⅲ遺跡 4 号炉、弓谷鈩旧製鉄炉跡のように本床状遺構の両側に小舟状遺構をもつものと、板屋Ⅲ遺跡 1 号炉、門遺跡 1 号炉、戸井谷遺跡のように本床状遺構のみもつものがあり、中国山地の他地域と同様にこれら 2 つの類例が認められる。



第 2 図　神戸川中流域遺跡分布図（S＝ 1/50,000）

第 1 表　神戸川中流域の遺跡一覧表（その 1）

NO	遺跡名	種　　別	備　　考	文献・調査年次
1	殿淵山遺跡	製鉄遺跡	排滓場	平成 10 年
2	獅子谷遺跡	製鉄遺跡	3 時期の近世大鍛冶場（鍛冶炉 8）	24
3	戸井谷遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉 1	28
4	堂の本鈩跡	製鉄遺跡		
5	水谷鈩跡	製鉄遺跡		
6	梅ヶ谷尻鈩跡	製鉄遺跡	製鉄炉 2	6
7	梅ノ木谷鈩跡	製鉄遺跡		
8	保井谷鈩跡	製鉄遺跡		
9	檀原遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉 2・精錬鍛冶炉 1・鍛冶炉 2	10
10	柳瀬鈩跡	製鉄遺跡		
11	獺越鈩跡	製鉄遺跡		
12	殿淵山毛宅前鈩跡	製鉄遺跡	製鉄炉 1	10
13	戸井谷尻遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉 2・精錬鍛冶炉 1・大鍛冶場（鍛冶炉 2）	16
14	下山遺跡	複合遺跡	製鉄炉 2・縄文時代集落・配石遺構群など	13・19・20
15	権現上鈩跡	製鉄遺跡	鉄滓	
16	長老畑遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉 1	16
17	向原鈩・鍛冶跡	製鉄遺跡	鉄滓	
18	伊比谷 1 号鈩跡	製鉄遺跡	鍛冶炉・鉄滓	
19	伊比谷 2 号鈩跡	製鉄遺跡	精錬跡・鉄滓	
20	伊比谷 3 号鈩跡	製鉄遺跡	鉄滓	
21	大槙鈩跡	製鉄遺跡	製鉄炉 2・炉 5・近世掘立柱建物跡	17
22	丸山遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉 1	17
23	貝谷遺跡	複合遺跡	製鉄炉・縄文時代集落など	26・29・平成 13 年
24	徳原遺跡	製鉄遺跡	鉄滓・炉壁片	
25	板屋奥鈩跡	製鉄遺跡		
26	板屋遺跡群	複合遺跡	製鉄炉 2・精錬鍛冶炉 2・縄文～奈良時代集落など	7・8・11 平成 13 年
27	弓谷鈩跡	製鉄遺跡	高殿鈩・製鉄炉　文献 No.2 では「弓谷尻鈩跡」	15
28	弓谷鈩跡	製鉄遺跡		
29	弓谷奥鈩跡	製鉄遺跡		
30	門遺跡	複合遺跡	製鉄炉 1・鍛冶炉 4・横穴式石室 2・弥生～奈良時代集落など	9
31	神原Ⅱ遺跡	複合遺跡	大鍛冶場・縄文～奈良時代・近世集落など	14・21・25・27 平成 13 年
32	鉄井迫遺跡	製鉄遺跡		平成元年
33	中原遺跡	複合遺跡	大鍛冶場跡 1・横穴式石室 1 など	12
34	坂根鍛冶跡	製鉄遺跡	鉄滓	
35	土居ノ上鈩跡	製鉄遺跡	鉄滓・羽口	
36	段原鍛冶跡	製鉄遺跡		
37	慶雲寺鈩跡	製鉄遺跡	野鈩・鉄滓	
38	鈩原鈩跡	製鉄遺跡	野鈩・鉄滓	
39	獅子尻鈩跡	製鉄遺跡	野鈩・鉄滓・炉壁片	
40	落合精錬所跡	製鉄遺跡	精錬所跡（近代）	
41	獅子古鈩跡	製鉄遺跡		
42	梅ヶ迫製鉄遺跡	製鉄遺跡	製鉄炉 1	平成 12 年
43	梅ヶ迫谷鈩跡	製鉄遺跡	鉄滓	

※第 1 表の文献欄の数字と、第 2 表に掲載した関連文献の番号とは、同一のものである。

第 2 表　神戸川中流域の遺跡一覧表（その 2）

NO.	遺　跡　名	種　　別	備　　考	文献・調査年次
①	獅子谷遺跡	遺物散布地	石斧・石錘・土器片	
②	枡ヶ峠遺跡	遺物散布地		
③	伊比谷遺跡	遺物散布地	磨製石斧	
④	堂ノ原横穴墓	横穴墓	横穴墓 1	
⑤	角井堂ノ原遺跡	遺物散布地	磨製石斧・縄文土器	
⑥	角井遺跡	遺物散布地	磨製石斧	
⑦	杉戸遺跡	遺物散布地	石器	
⑧	才倉遺跡	遺物散布地	土師器	
⑨	後平遺跡	遺物散布地	宝篋印塔片	
⑩	神原Ⅰ遺跡	集落跡	縄文～古墳時代・近世集落など	14
⑪	阿丹谷辻堂跡	古墓	石塔 2	8
⑫	小丸遺跡	集落跡	弥生～古墳時代集落など	22・23
⑬	谷川遺跡	集落跡	縄文土器・弥生土器・土師器等	10
⑭	森遺跡群	集落跡	弥生～奈良時代・近世集落など	8・18
⑮	段原遺跡	遺物散布地	須恵器	
⑯	五明田遺跡	集落跡	縄文時代集落など	4・5
⑰	与一原遺跡	遺物散布地	縄文土器・弥生土器	
⑱	比丘尼塚古墳	古墳	横穴式石室 1	
A	吉野丈山城跡	城館跡	郭・竪堀・堀切	
B	柳瀬城跡	城館跡	郭・堀切・櫓台	
C	トヤガ丸城跡	城館跡	郭	
D	権現西城跡	城館跡	郭・土塁	
E	向原城跡	城館跡	郭	
F	父木城跡	城館跡	郭・腰郭・堀切	
G	大前先城跡	城館跡	郭・堀切	
H	角井城砦跡群	城館跡	郭・土塁・堀切・連続竪堀・虎口・櫓台	
I	東原小丸城跡	城館跡	郭・土塁	
J	東原南城跡	城館跡	郭・土塁	
K	勘の裏城跡	城館跡	腰郭・土塁・堀切・竪堀・櫓台	
L	比丘尼城跡	城館跡	郭・堀切	
M	白旗城跡	城館跡	郭	
N	森脇山城跡	城館跡	郭・堀切・竪堀・櫓台	8
O	坂根城跡	城館跡	郭・土塁	
P	段原城砦跡群	城館跡	郭	
Q	宇杉越城跡	城館跡	郭・帯郭	
R	宇杉城	城館跡	郭・腰郭・土塁・虎口	
S	長谷城跡	城館跡	郭・堀切・土塁	

また、この地域では平安時代末から室町時代の精錬鍛冶炉もまとまって確認されている。板屋Ⅲ遺跡 2・3 号炉は、半地下式竪形炉の系譜を引くもので、大形で外面に簀巻き状の痕跡を残す板屋形羽口を伴っている。精錬鍛冶炉は、門遺跡、戸井谷尻遺跡、板屋Ⅰ遺跡、貝谷遺跡でも確認されており、近隣の佐田町檀原遺跡でも調査されている。こうした精錬鍛冶炉の存在は、近世鈩製鉄法に見られる間接製鋼法的な生産体制が古代末から中世にまで遡ることを示している。

近世・近代　集落遺跡では、長方形または長楕円形の柱穴を伴う大型の掘立柱建物が板屋Ⅲ遺跡、神原Ⅰ・Ⅱ遺跡などで確認されており、当該期の建物構造を知る上で貴重な資料となる。さらに、麻

蒸施設と考えられる焼石充填土坑が神原Ⅰ・Ⅱ遺跡などで多数検出されているのも当地域の特色といえる。

この地域では、豊富な山林資源と砂鉄に恵まれており、製鉄業は近世においては主要な産業となっていた。高殿鈩は17世紀末に成立したとされているが、これ以降の製鉄炉の地下構造が確認された遺跡は、長老畑遺跡・殿淵山毛宅前鈩跡・丸山遺跡・大槇鈩跡・下山遺跡・弓谷鈩跡があり、佐田町檀原遺跡でも製鉄炉の地下構造や鉄池状遺構、排滓場などが調査されている。本床・小舟が残存する大槇鈩跡 1 号炉・2 号炉、檀原遺跡、弓谷鈩跡はいずれも本床が小舟よりも40～50cm程度高いところ位置するもので、山陽地域などとは様相が異なる。なお、大槇鈩跡 1 号炉は脇小舟が設けられており、石見地域との技術的な交流を窺わせるものである。

大鍛冶場跡で発掘調査されたものは中原遺跡、戸井谷尻遺跡、神原Ⅱ遺跡、獅子谷遺跡がある。大鍛冶場は左下場、本場に相当する 2 基の鍛冶炉が共存するものが一般的である。発掘調査された遺跡を見る限りでは、高殿たたらから離れて単独で立地しているものが多いようである[1]。

なお、この地域では製鉄業は明治時代前半まで続いたことが史料から知られる。

弓谷鈩と獅子谷鍛冶屋について　田部家文書の中には「獅子谷鍛冶屋」関係の史料が見られ、これによれば弓谷鈩に付属する鍛冶屋として設けられたことが知られる。弓谷鈩は飯石郡志津見村（現飯石郡頓原町大字志津見）に所在した鈩で、平成10（1998）年に頓原町教育委員会が調査した弓谷鈩跡にあたる。

田部家文書などの史料によれば、弓谷鈩は寛政12（1800）年から稼働を開始し、天保10（1839）年に朝原村郷城（現簸川郡佐田町大字朝原）に移転するまで39年間稼働を続けている。この後、文久元（1861）年に再開し、少なくとも明治中期まで続いたことが分かっている。

万延元（1860）年に弓谷鈩の再興願が田部長右衛門から郡奉行所、鉄方役所等へ出されているが、これとあわせて角井村獅子谷に弓谷鈩付きの鍛冶屋の設置の願い出がされている。

この後の明治 5（1872）年に田部長右衛門から県に提出された田部家所属の鈩・鍛冶屋に記録には弓谷鈩などとともに、獅子谷鍛冶屋の名前も見られる。この中で、獅子谷鍛冶屋については弓谷鈩と同様、「再興　安政七申四月御許容」とある[2]。

こうしたことから、獅子谷鍛冶屋は近世のある段階まで稼働していたが一旦操業を終え、幕末になって田部家の経営する弓谷鈩付属の鍛冶屋として再興し、少なくとも明治 5 年までは操業が続いたことが分かる。獅子谷は弓谷鈩から直線で3.4km北西に位置しており、必ずしも近い距離にあるとは言えない。このような距離的な条件があるにもかかわらず、弓谷鈩から獅子谷鍛冶屋に鉄が運ばれた理由が何であるのか興味深いところである。

（1）文献番号12では大槇鈩跡や佐田町檀原遺跡について、「高殿鈩に大鍛冶場が付属するもの」と理解されている。しかし、大槇鈩跡の「鍛冶炉」については炉内から粒状滓・鍛造剥片が採取されていないため鍛冶炉ではない可能性が考えられる。佐田町檀原遺跡のⅡ区 1 号炉は近世の大鍛冶炉とは構造が異なるように思われる。

（2）以上の史料については文献番号15の史料・史料解析編を参照した。なお、安政 7 年は 3 月18日をもって万延元年に改元されている。

第 3 表　志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財　関連文献一覧

NO	書　　名	発　行　年	発　　行　　者
1	頓原町の遺蹟―志々地区―	平成元(1989)年	島根県頓原町教育委員会
2	増補改訂島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）	平成 5 (1993)年	島根県教育委員会
3	島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第 2 集〉 出雲・隠岐の城館跡	平成 10(1998)年	島根県教育委員会
4	五明田遺跡	平成 3 (1991)年	島根県頓原町教育委員会
5	五明田遺跡発掘調査報告書	平成 4 (1992)年	島根県頓原町教育委員会
6	梅ヶ谷尻たたら跡	平成 4 (1992)年	島根県佐田町教育委員会
7	板屋Ⅱ遺跡＜１＞	平成 5 (1993)年	島根県教育委員会
8	森遺跡・板屋Ⅰ遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡 ＜２＞	平成 6 (1994)年	島根県教育委員会
9	門遺跡＜３＞	平成 8 (1996)年	島根県教育委員会
10	檀原遺跡・谷川遺跡・殿淵山毛宅前鈩跡＜４＞	平成 9 (1997)年	建設省斐伊川神戸川総合開発工事事務所 島根県教育委員会
11	板屋Ⅲ遺跡＜５＞	平成 10(1998)年	建設省中国地方建設局島根県教育委員会
12	中原遺跡＜６＞	平成 11(1999)年	建設省中国地方建設局 島根県教育委員会
13	下山遺跡（１）―製鉄関連遺構の調査―＜７＞	平成 12(2000)年	建設省中国地方建設局 島根県教育委員会
14	神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡＜８＞	平成 12(2000)年	建設省中国地方建設局 島根県教育委員会
15	弓谷たたら	平成 12(2000)年	建設省中国地方建設局 島根県頓原町教育委員会
16	戸井谷尻遺蹟・長老畑遺跡＜９＞	平成 13(2001)年	国土交通省中国地方整備局 島根県教育委員会
17	丸山遺跡・大槙鈩跡＜10＞	平成 13(2001)年	国土交通省中国地方整備局 島根県教育委員会
18	森Ⅴ遺跡	平成 13(2001)年	国土交通省中国地方整備局 島根県頓原町教育委員会
19	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅳ 下山遺跡	平成 8 (1996)年	島根県教育委員会
20	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ 下山遺跡	平成 9 (1997)年	島根県教育委員会
21	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ 神原Ⅱ遺跡	平成 10(1998)年	島根県教育委員会
22	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ 小丸遺跡	平成 10(1998)年	島根県教育委員会
23	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ 小丸遺跡	平成 11(1999)年	島根県教育委員会
24	島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ 獅子谷遺跡	平成 11(1999)年	島根県教育委員会
25	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ 神原Ⅱ遺跡	平成 12(2000)年	島根県教育委員会
26	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅷ 貝谷遺跡	平成 12(2000)年	島根県教育委員会
27	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ 神原Ⅱ遺跡	平成 13(2001)年	島根県教育委員会
28	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ 戸井谷遺跡	平成 13(2001)年	島根県教育委員会
29	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ 貝谷遺跡	平成 13(2001)年	島根県教育委員会

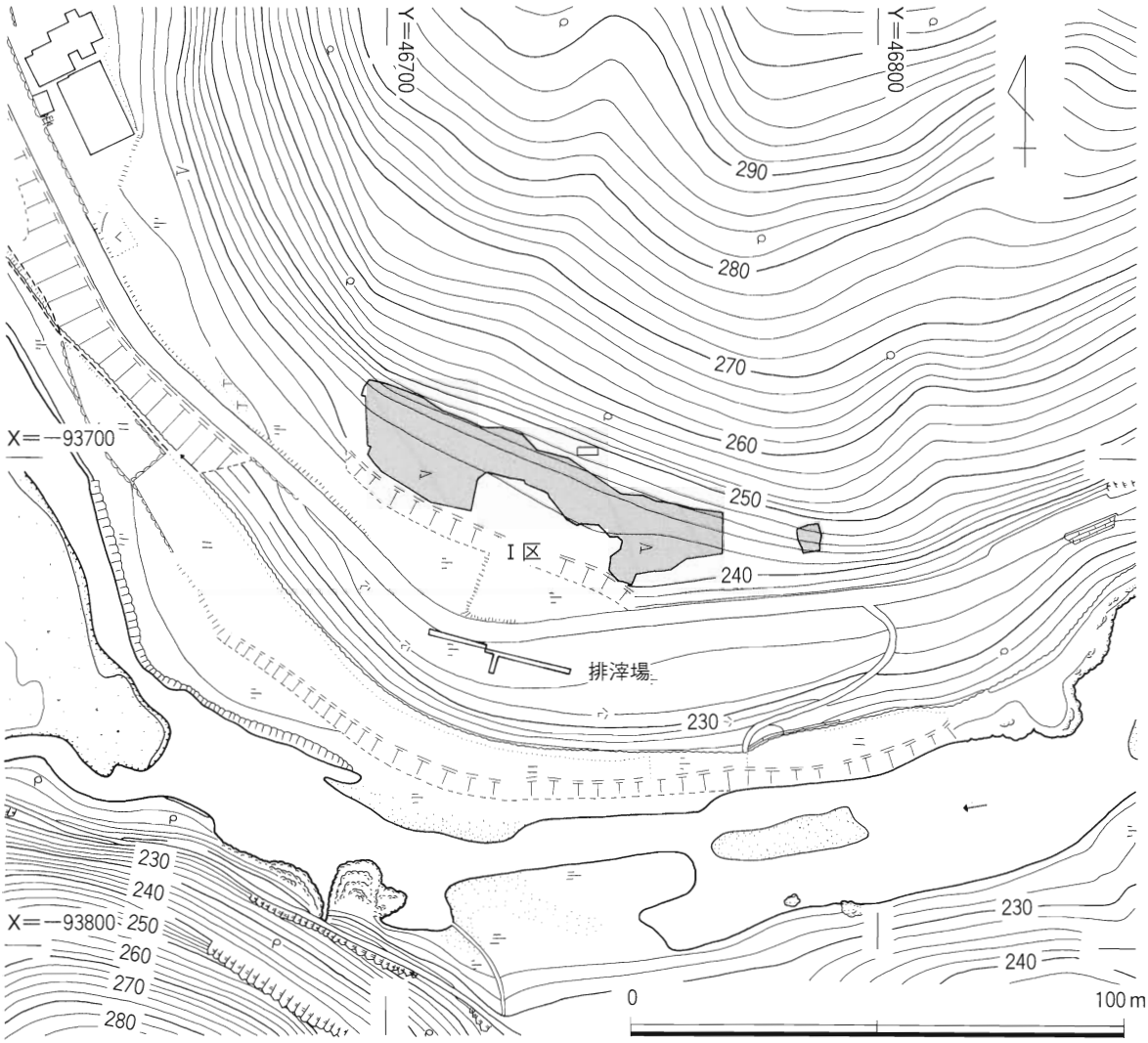
＜＞内は、県教委発行の志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書の通し番号

第 3 章　殿淵山遺跡の調査

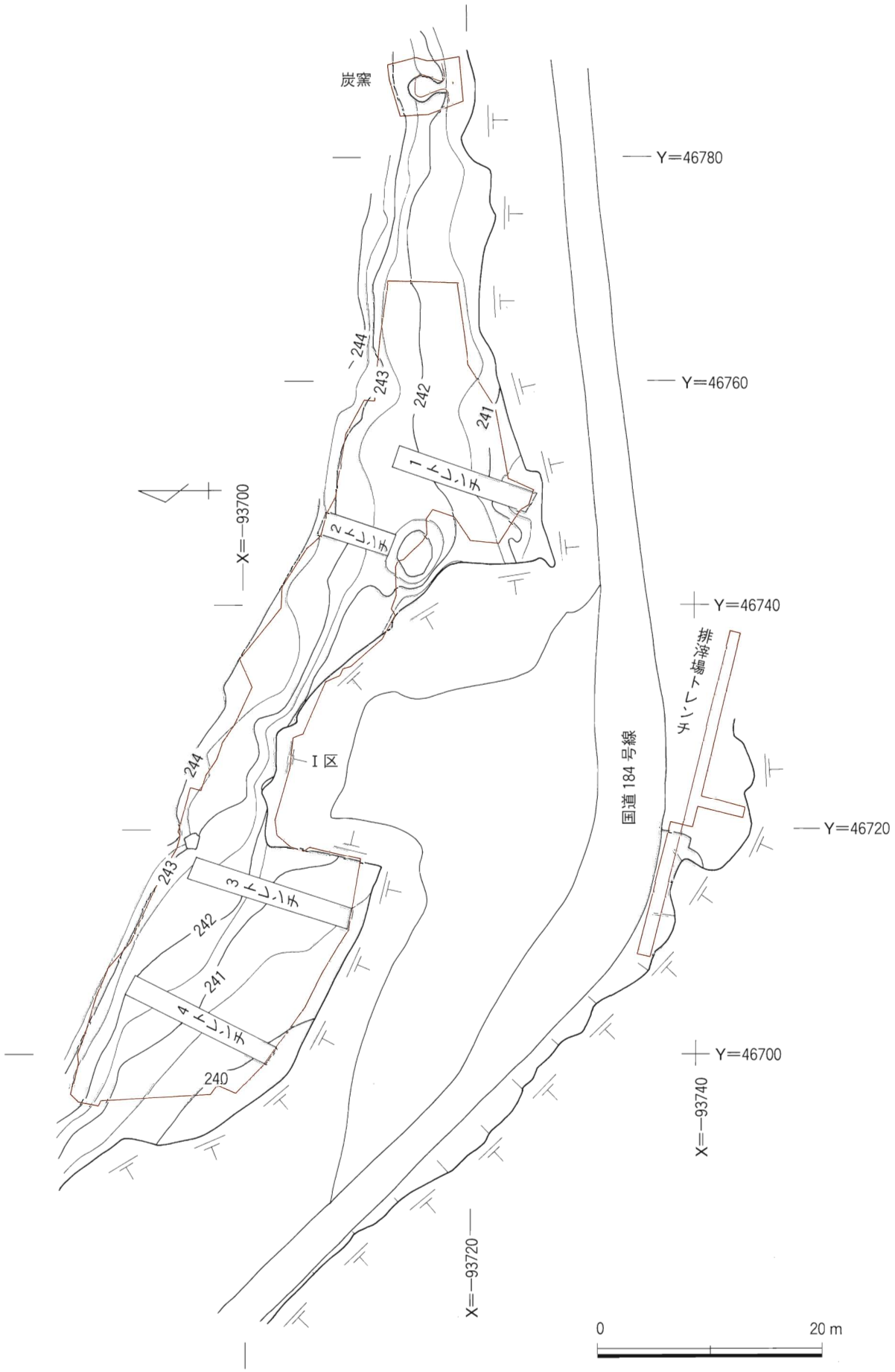
第 1 節　概要

神戸川右岸の丘陵上、標高約 240 m のところに位置する。神戸川が蛇行するのに伴って南側に丘陵が張り出しており、丘陵裾付近で東西 90 m、南北約 20 m の平坦面が広がる。この部分が遺跡の中心部になると思われたが、中央は土取りによって大きく削られ、平坦面から南側の斜面も国道 184 号線に切られており、遺跡の遺存状態はあまり良くないと考えられた。国道 184 号線の南側の道路脇や斜面に多くの鉄滓・炉壁が散布することから、たたら製鉄に関わる遺跡であり、平坦面から南側の斜面に鉄滓を排出したと推測された。なお、本遺跡は「殿淵カナクソ畑鈩跡」と周知された遺跡であるが、分布調査結果などから、現在の殿淵山遺跡へ名称を変更している。

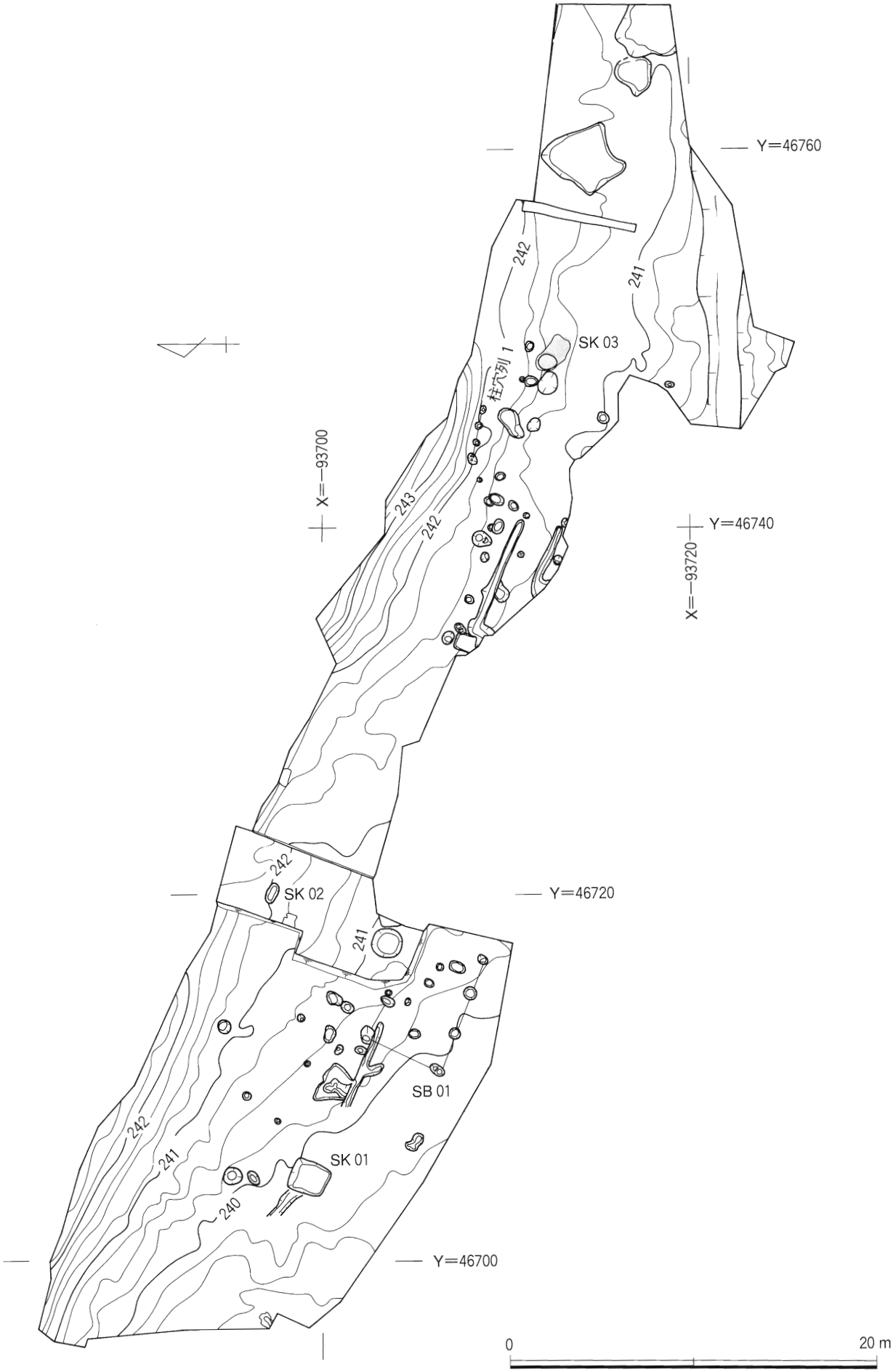
平成 10（1998）年に志津見ダム建設に伴う道路の付け替え工事に先立ち、本遺跡の発掘調査を行うこととなった。北側の平坦面をⅠ区として面的に発掘調査し、国道 184 号線南側はトレンチで排滓場の土層と範囲を確認し、製鉄関連遺物を回収することとした。調査面積は 930㎡である。



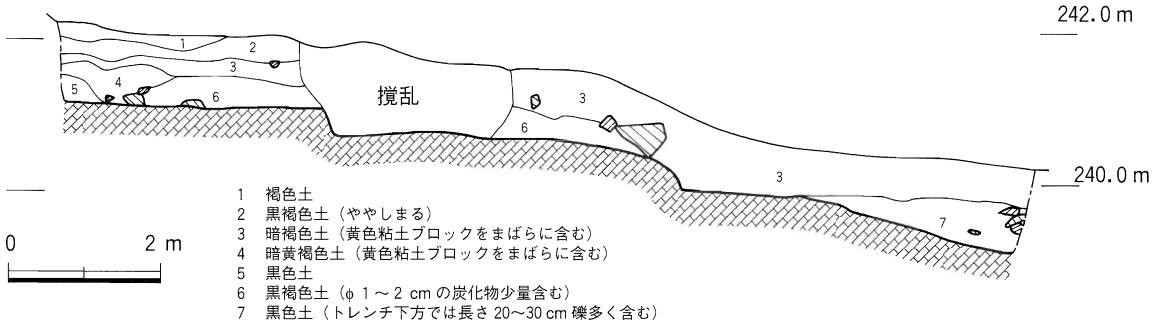
第 3 図　殿淵山遺跡周辺地形図（S= 1/1500）



第 4 図　殿淵山遺跡調査前地形測量図・調査区設定図（S＝ 1/500）



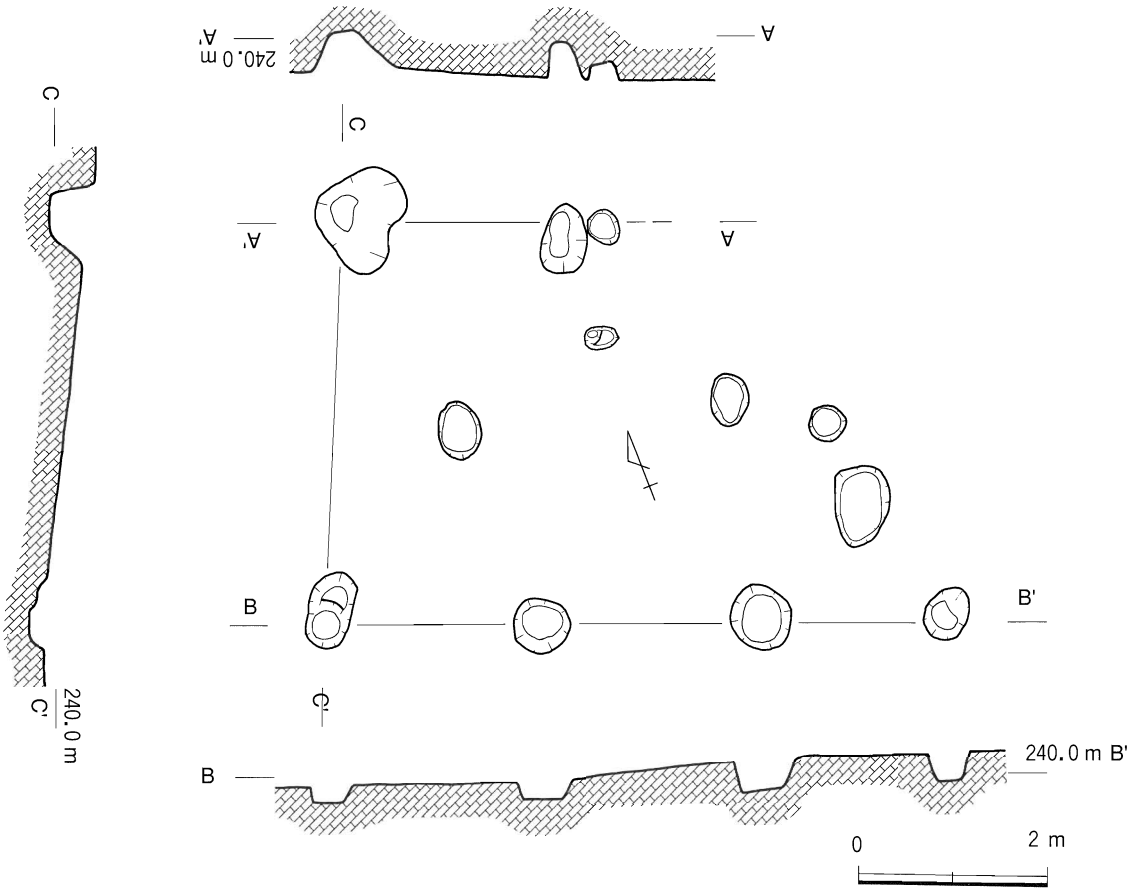
第 5 図　殿淵山遺跡遺構配置図（S= 1/300）



第 6 図　殿淵山遺跡トレンチ東壁土層断面図（S＝ 1/100）

Ⅰ区では、基盤層である灰色砂層・砂礫層の上に黒褐色から黒色の土層が 1 m前後堆積していた。この中から近世以降の陶磁器片などが出土している。遺構は、掘立柱建物跡 1・ピット列・土坑・粘土貼土坑・溝・炭窯などが検出された。遺構の年代は周辺から出土している陶磁器から見て近世以降で、中にはガラス片などを含むものもあることから近現代まで下る遺構もある。当初予想された製鉄関連遺構はここでは確認できず、すでに掘削により壊されたと思われると考えられる。なお、製鉄関連遺構の残存していたり、近世よりもさかのぼる遺構・遺物は存在する可能性は低いと思われたため、Ⅰ区の一部分については黒色土を残して調査を終えた。

南側の排滓場トレンチでは鉄滓堆積層が確認でき、多くの製鉄関連遺物が出土した。

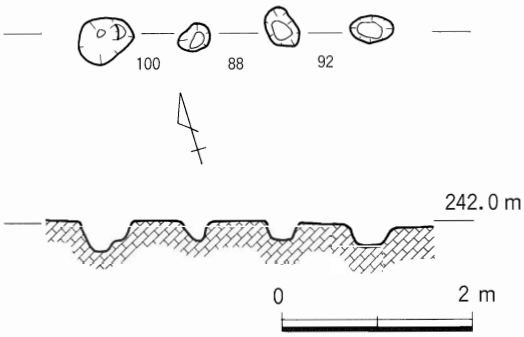


第 7 図　殿淵山遺跡 SB 01 実測図（S＝ 1/80）

第 2 節　Ⅰ区の調査

1　遺構

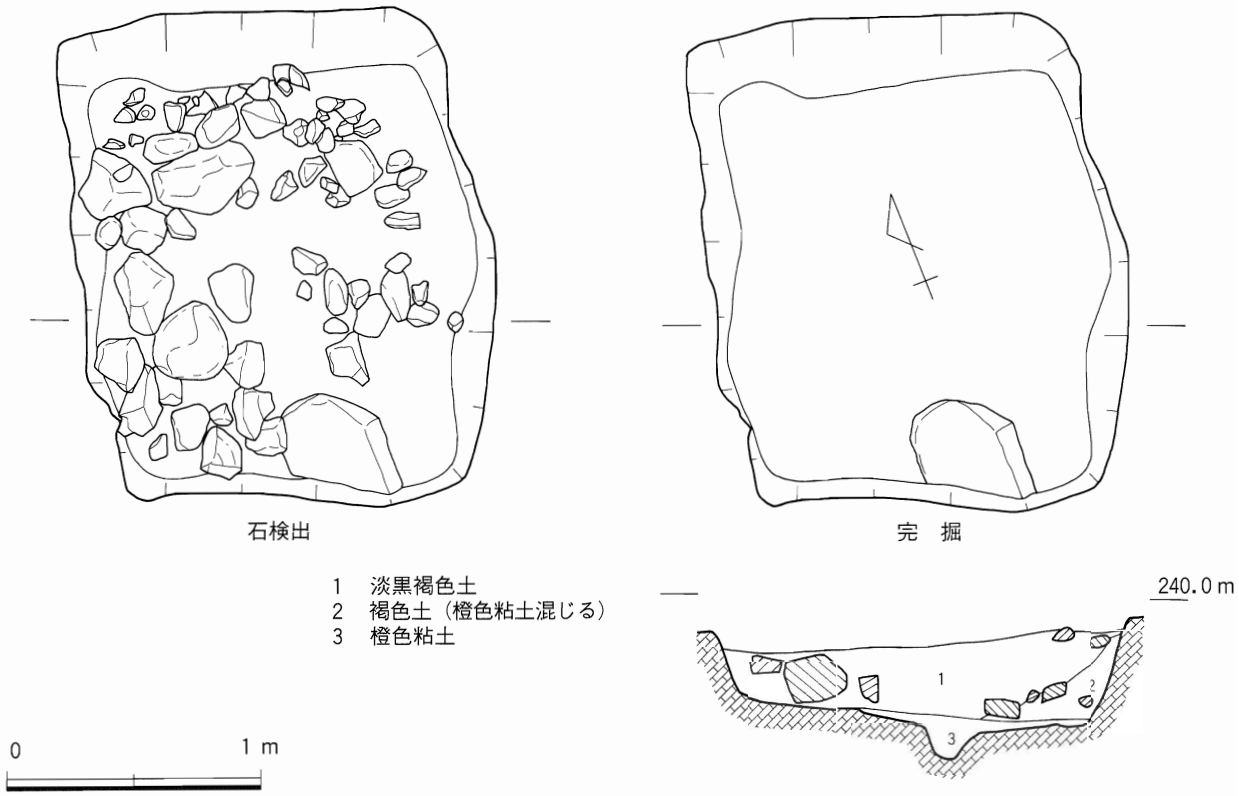
SB 01（第 7 図・図版 1）　Ⅰ区の中央部からやや西よりに位置する。桁行 3 間（6.6 m）、梁行 1 間（4.24 m）以上の掘立柱建物と考えられ、桁行の柱間は 7.5 尺、梁行の柱間は 14 尺を指向しているようである。建物の主軸方向は N－69°－W である。柱穴は基盤層である灰色砂層で検出された。建物北側の柱穴の並びについては P 1・P 2 のほかは確認できていないが、黒色土を掘り残している部分に柱穴が隠れている可能性が考えられる。遺構に直接伴う遺物はなく、時期は特定できない。



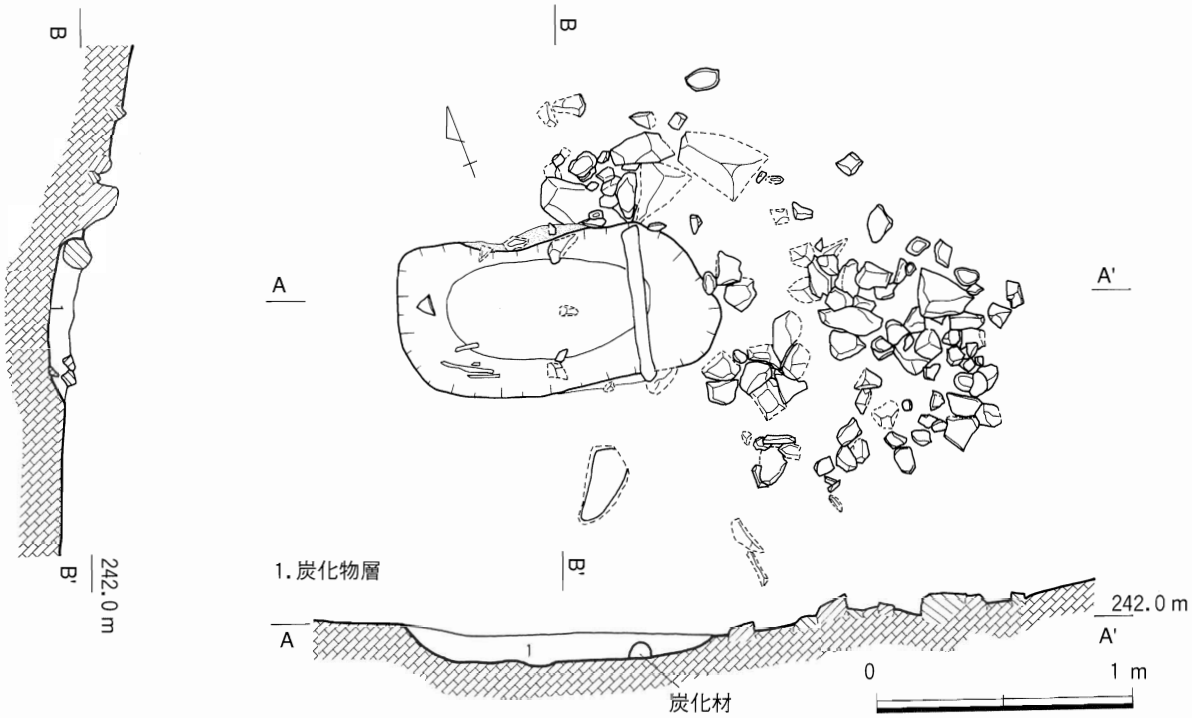
第 8 図　殿淵山遺跡柱穴列 1 実測図（S＝ 1/80）

柱穴列 1（第 8 図）Ⅰ区中央部のやや東よりに位置する。4 基の柱穴が N－74°－W の方向に一列に並んでおり、各柱穴の間隔は 0.9 m から 1.0 m、P 1 から P 4 の間は 2.8 m になる。遺構に直接伴う遺物がないため明確な時期は特定できない。

SK 01（第 9 図、図版 2）　Ⅰ区の西側に位置する長さ 1.98 m、幅 1.66 m、深さ 0.4 m の長方形の土坑である。基盤層である灰色砂層上面で検出した。土坑内を掘り下げていく過程で拳大から最大で長さ 40㎝代の石を多く検出した。遺物は、鉄滓が出土しているが、陶磁器などは出土していない。詳細な時期は不明だが、近世～近代の遺構と思われる。

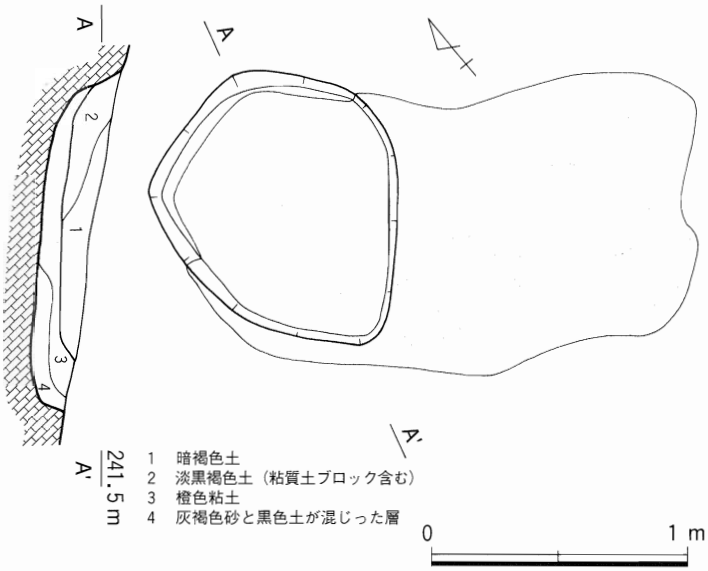


第 9 図　殿淵山遺跡 SK 01 実測図（S＝ 1/30）



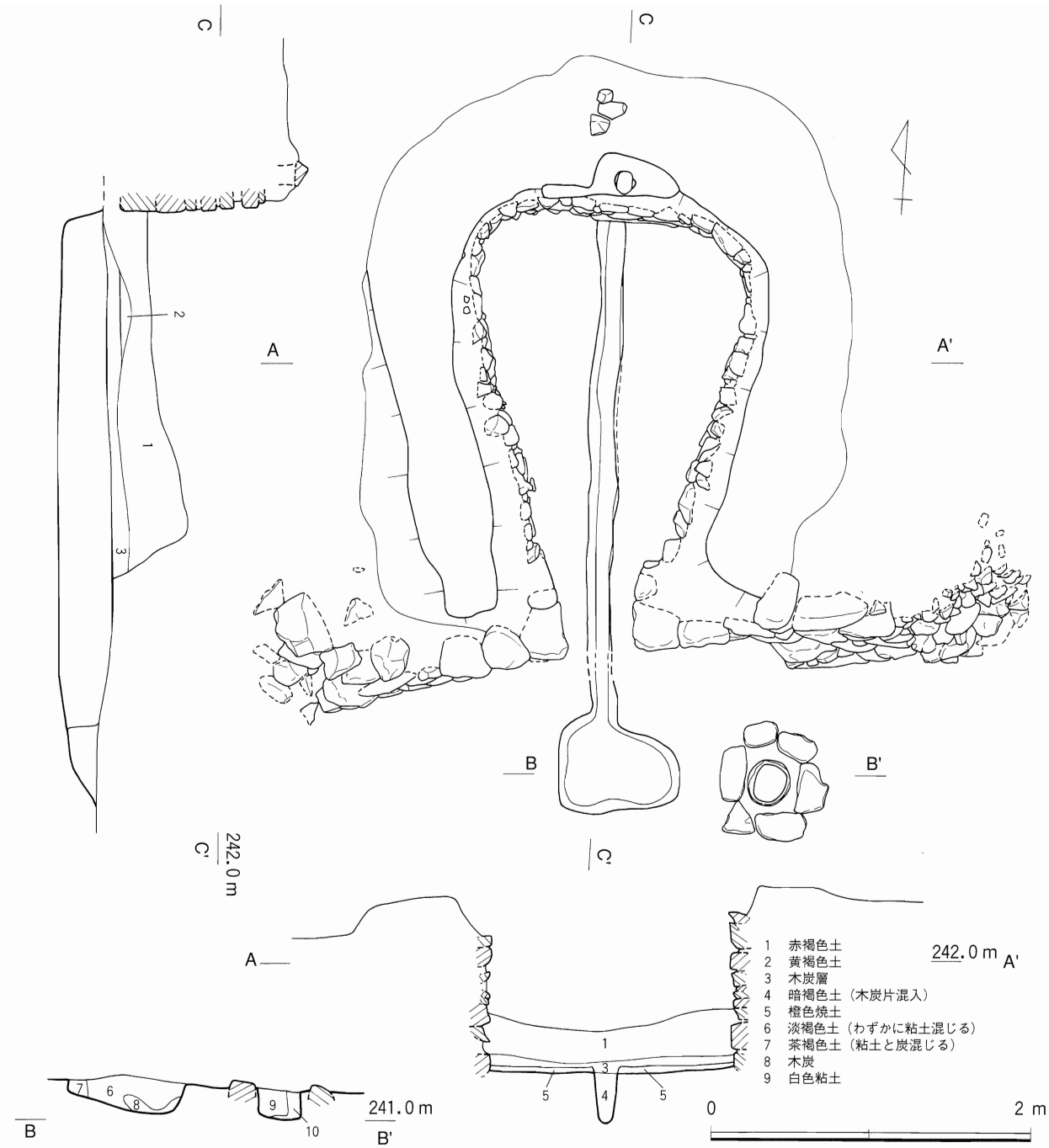
第 10 図　殿淵山遺跡 SK 02 実測図（S＝ 1/30）

SK 02（第 10 図、図版 2）　Ⅰ区の中央部付近に位置する、長さ 1.25 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m の長楕円形の土坑である。黒色土を掘り下げている段階で検出された。遺構の周囲には拳大以上の礫が多く見られる。土坑内には粉状の木炭が充填されており、土坑中央から東よりの位置には棒状の炭化材が横たわっていた。土坑を検出する前にはこの上部に被熱を受けたと思われる礫も見られた。こうした状況から、この土坑は麻蒸し土坑であったと思われる。遺物を伴わないが、近世～近代の遺構と思われる。



第 11 図　殿淵山遺跡 SK 03 実測図（S＝ 1/30）

SK 03（第 11 図、図版 3）　Ⅰ区中央からやや東よりに位置し、基盤層である砂礫層上面で検出された。長径 1.2 m、短径 1 m の土坑である。土坑底面や周囲には 2×1 m の範囲で橙色の粘土面が見られるが、SK 03 はこの西側に偏った部分に設けられている。遺構の性格については、粘土貼土坑であることから考えると水溜等の機能を持っていたと思われる。遺構に伴う遺物はないため、詳細な年代については不明であるが、近世～近代と考えてさしつかえないであろう。



第12図　殿淵山遺跡炭窯実測図（S＝ 1/40）

炭窯（第12図、図版４）　Ⅰ区の平坦面の東の外れに位置する。焚き口から奥壁までの長さ2.7m、横幅1.7mで、奥壁がやや丸みを持つ三角形をしている。窯の壁面は長さ20cm前後の角礫を用いて積み上げられ、現状で約１mの高さまで残存している。奥壁の中央部には煙道が設けられており、煙道の外部の排気口には15cm大の石で蓋がされていた。窯内部には天井部の崩落土と考えられる赤褐色土、粉状の木炭層などが堆積し、その下から橙色に焼けた床面が検出できた。奥壁の煙道側から焚き口に向かって深さ35cmの溝がのび、窯外にある長さ80cmの土坑につながっている。この土坑の東側には、周囲を石で囲み、内部に鉄製の缶を埋め込んだ土坑がある。本遺構については製鉄遺構と関連する可能性も考えていたが、鋳物製の焚き口や、ガラス製品が周辺で出土していること、地元住民からの聞き取りなどから、近現代に営まれたことがわかった。

2　遺物

陶磁器（図版 6）　殿淵山遺跡Ⅰ区では、遺物として近世から近代・現代にかけての陶磁器がコンテナで 3 箱分出土した。これらうち近世の陶磁器について触れておきたい。

図版 6－1～8 は肥前系の陶器碗である。1～6・8 は肥前系の陶胎染付で、18 世紀代の遺物である。7 は外面底部及び内面には釉が塗られていない。これも 18 世紀代と思われる。9～11 は肥前系磁器皿で見込に蛇ノ目釉ハギがされ、この部分に薬品が塗られている。19 世紀初頭～幕末のものである。13 は広東碗蓋、14・15 は広東碗で、18 世紀末～19 世紀前半のものである。12・16・17 は肥前系の磁器で、端反り碗と呼ばれるものである。19 世紀前半から中葉のものである。18 は肥前系磁器の湯呑みで 18～19 世紀代のものと思われる。19 は肥前系の磁器皿である。底部は蛇ノ目凹形高台のもので 18 世紀代のものと思われる。

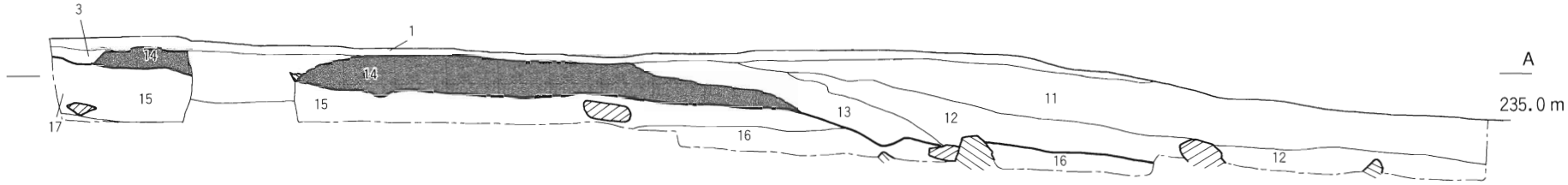
なお、14・15 に破面に漆つぎの跡が見られる。また、17・19 は熱を受けて褪色している。

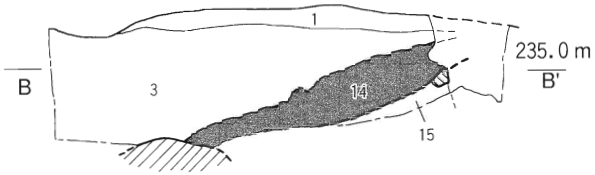
第 3 節　排滓場の調査

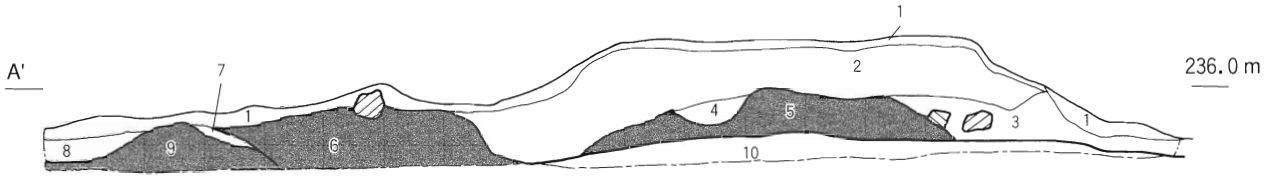
1　トレンチ調査の結果（第 13 図）

排滓場は鉄滓の分布状況から、国道 184 号線の南側の道路脇から斜面にかけて広がると予想されたが、排土処理の場所が十分に確保できないことや、斜面を発掘することは危険を伴うことから、国道 184 号線南側の排滓場の範囲と土層の堆積状況の確認、製鉄関連遺物の回収を目的とする東西 2 か所のトレンチを設定するにとどめた。製鉄関連遺物の取り上げに当たっては 1 m グリッドを採用し、北から南へア、イ、ウ…、西端から東へ 1、2、3…と記号番号をつけ、南北－東西の記号番号を組み合わせて（例えばア－1 など）グリッドを呼ぶこととした。西トレンチは国道 184 号線の道路法面に当たる部分に東西の長さ 12 m のトレンチ（ア－1～ア－12）を設定し、法面を垂直に落として土層を観察した。東トレンチは国道 184 号線の道路脇の平坦面に東西 18 m、幅 1 m で設定し（イ－13～イ－30）、これに南北の長さ 4 m（ウ－15～カ－15）の枝トレンチをつけた。

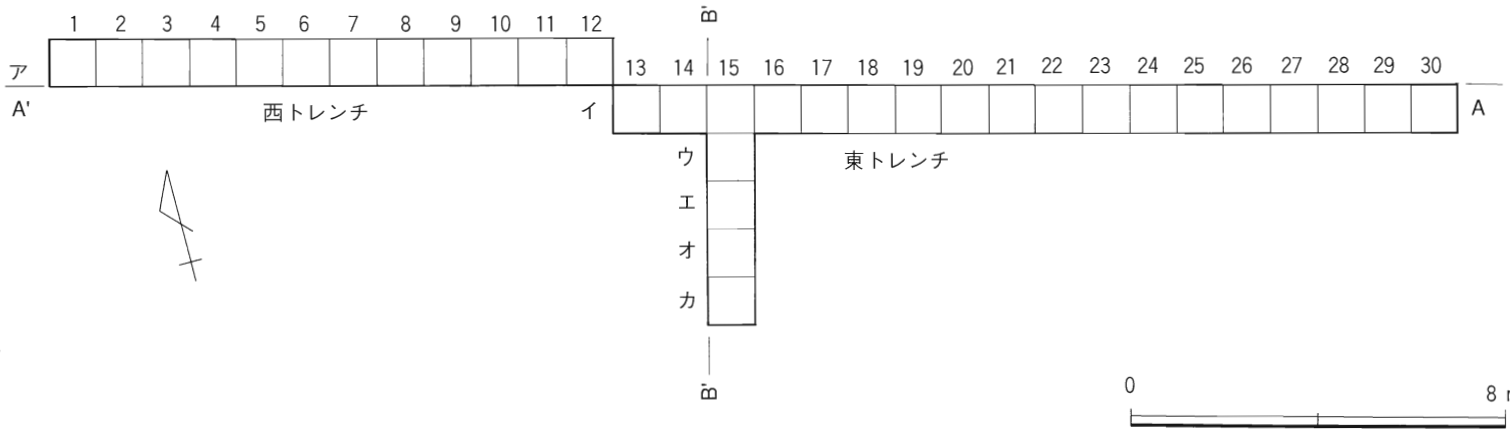
調査の結果、東トレンチではイ－13 からイ－21 にかけての東西 8.8 m、イ－15 からオ－15 にかけての南北 3.6 m で、厚さ 0.5 m の鉄滓堆積層を確認した。鉄滓堆積層上面の標高は 235.3 m であるが、周辺が削平されており、本来の排滓場上面の標高はこれよりも高かったと思われる。この層は、土をほとんど含んでおらず、製鉄遺構から排出された鉄滓・炉壁が一次的に堆積した状態で残存していると考えられる。この下層には、鉄滓が廃棄される前の旧表土と思われる黒色土・暗黄褐色土層、さらに基盤層と考えられる黄褐色砂層が確認できた。このことから、少なくともこの部分では下層に鉄滓堆積層はないといえる。西トレンチでもア－3 からア－10 にかけて鉄滓層を確認したが、東トレンチの鉄滓層と比較して土の混入が多く、小形の鉄滓が目立つことから、排滓場でも端の部分か、二次堆積の可能性が考えられる。陶磁器が排滓場に伴って出土していないため操業年代は明確でないが、排滓場における遺物の密度が高いこと[1]、炉壁の被熱がかなり強いこと[2]から、近世まで下る可能性を考えておきたい。なお、排滓場出土の木炭について、C 14 年代測定を実施しているが、この結果については次刊に掲載することとしたい。







1　表土
2　淡黒褐色土（鉄滓まばらに入る）
3　褐色土（鉄滓まばらに入る）
4　褐色土（黄褐色砂含む、鉄滓まばらに入る）
5　鉄滓層（鉄滓との間に褐色土を含む）
6　鉄滓層
7　黄褐色砂層
8　淡黒褐色（鉄滓やや多く入る）
9　鉄滓層
10　黒色土（鉄滓含まず）
11　暗褐色（鉄滓まばらに含む）
12　淡黒褐色（鉄滓やや多く含む）
13　黒褐色（鉄滓をかなり多く含む）
14　鉄滓層（土をほとんど含まない）
15　黒色土（鉄滓含まず、旧表土か）
16　暗黄褐色土（φ 5 mmの黄色礫含む、鉄滓含まず）
17　黄褐色砂（鉄滓含まない）



第13図　殿淵山遺跡排滓場トレンチグリッド図（S＝ 1/160）・土層断面図（S＝ 1/80）

2　製鉄関連遺物

排滓場に設定したトレンチから大量の製鉄関連遺物が出土した。これらはこの遺跡における製鉄の操業状況を明らかにする上で有効な情報を持っていると考え、トレンチで出土したものは基本的には全量取り上げ、洗浄・分類・記録といった一連の作業を実施した。製鉄関連遺物の分類・整理作業は第14図に示した手順で行った。分類項目は大別して「炉壁類」・「鉄滓類」・「鉄塊系遺物」・「木炭」・「砂鉄」が挙げられる。

なお、整理作業の過程で情報量が多く重要性が高いと思われる遺物と情報量が少ない遺物とを選別し、重要性の高いものから分析遺物、報告書掲載遺物、屋内保管遺物、屋外保管遺物にそれぞれ仕分けした。分析遺物については金属学的な分析調査を実施し、屋外保管遺物については最終的に現地処分とした。

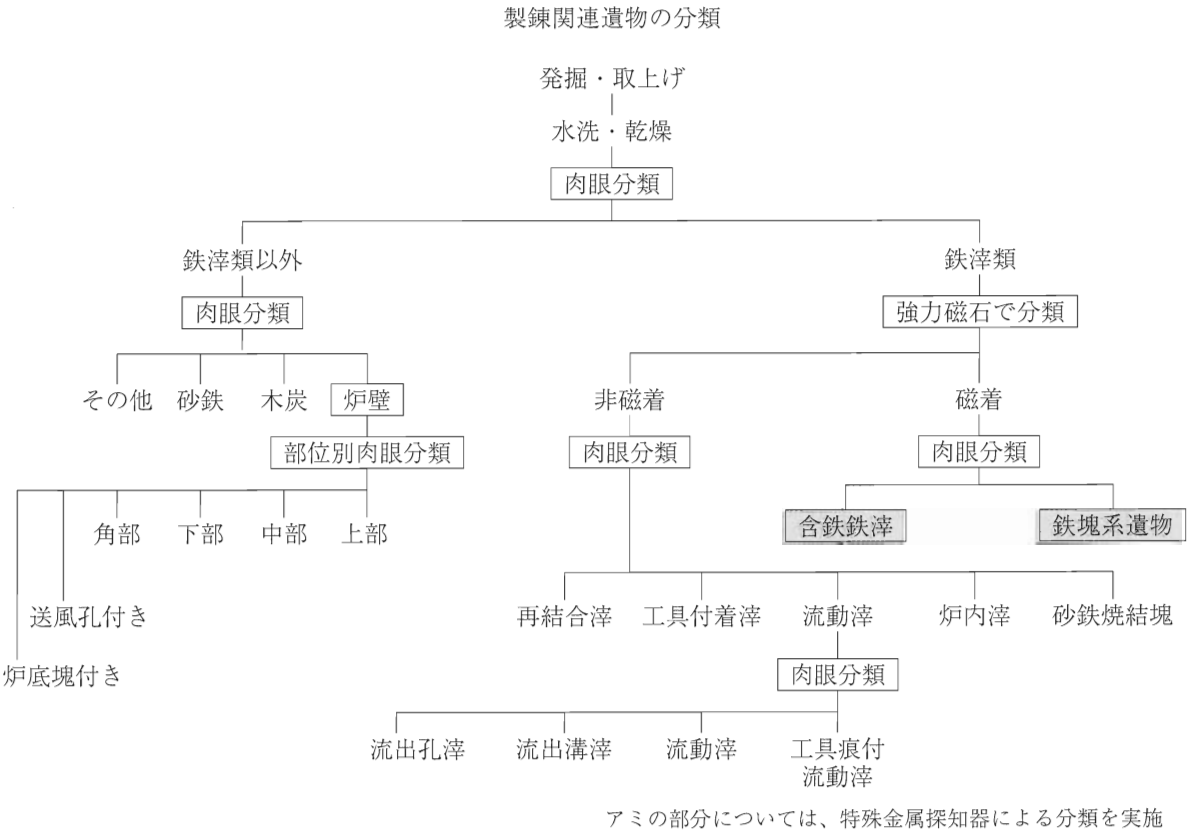
以下に、各遺物分類ごとについて内容を述べる。本文では個々の遺物については特徴的なものについてのみ記述することとしたい。個別の詳細については製鉄遺物観察表を参照されたい。

炉壁類（第15・20～29図、図版 7～9）

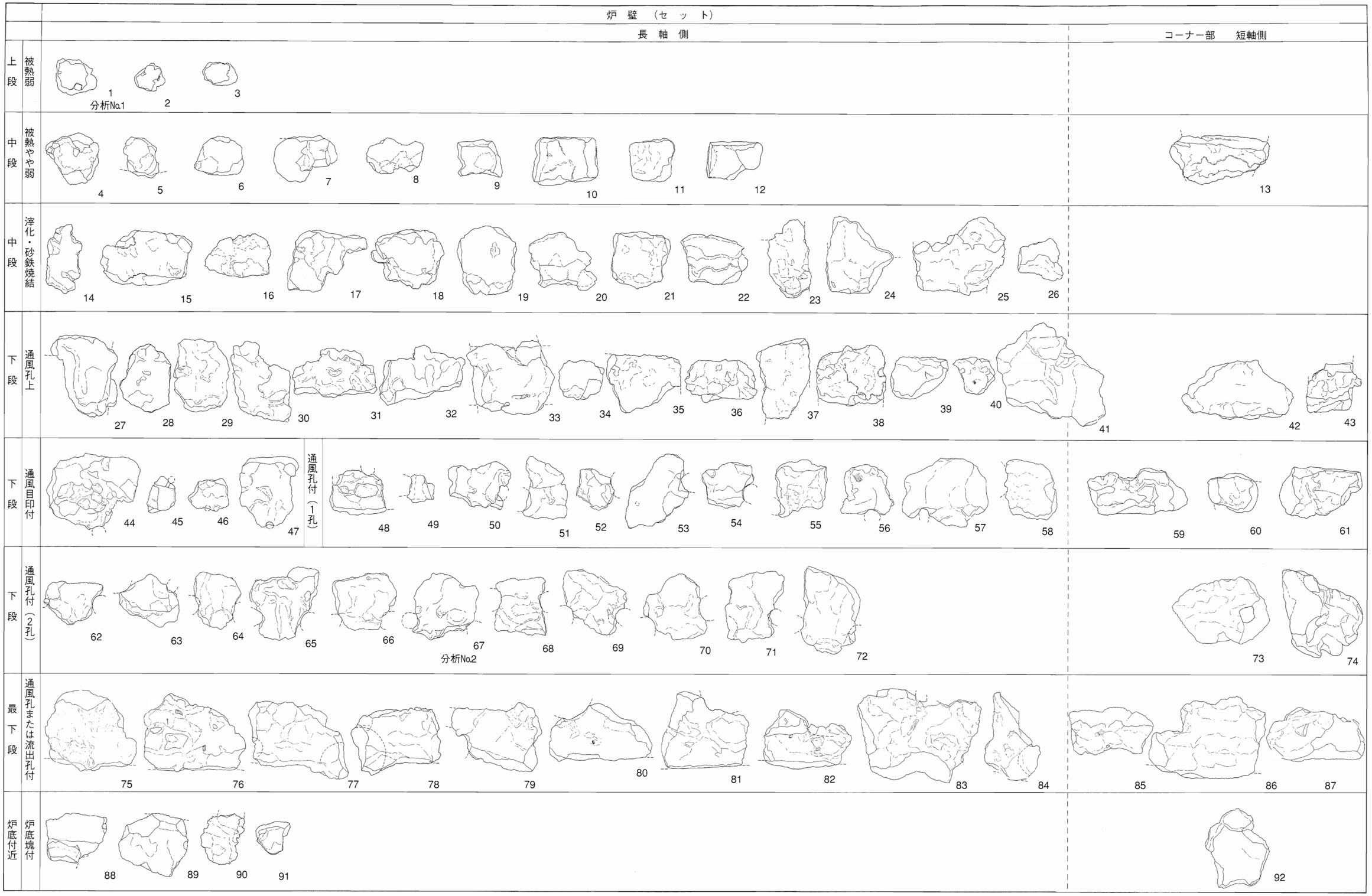
被熱状況や遺物に残された属性から製鉄炉における各部位を推測した。製鉄炉の各部位の呼称については第19図製鉄炉模式図を参照されたい。

上段（被熱弱）　1～3 は製鉄炉上段の炉壁片と考えられる。内面側は灰色から暗褐色に変色しているが、被熱の度合いは弱い。胎土には 5㎜以下の砂礫を含むが、これより下部の炉壁片と比べると砂礫の入り方は少ないように見える。いずれにもスサの痕跡や木炭痕がわずかだが見られる。

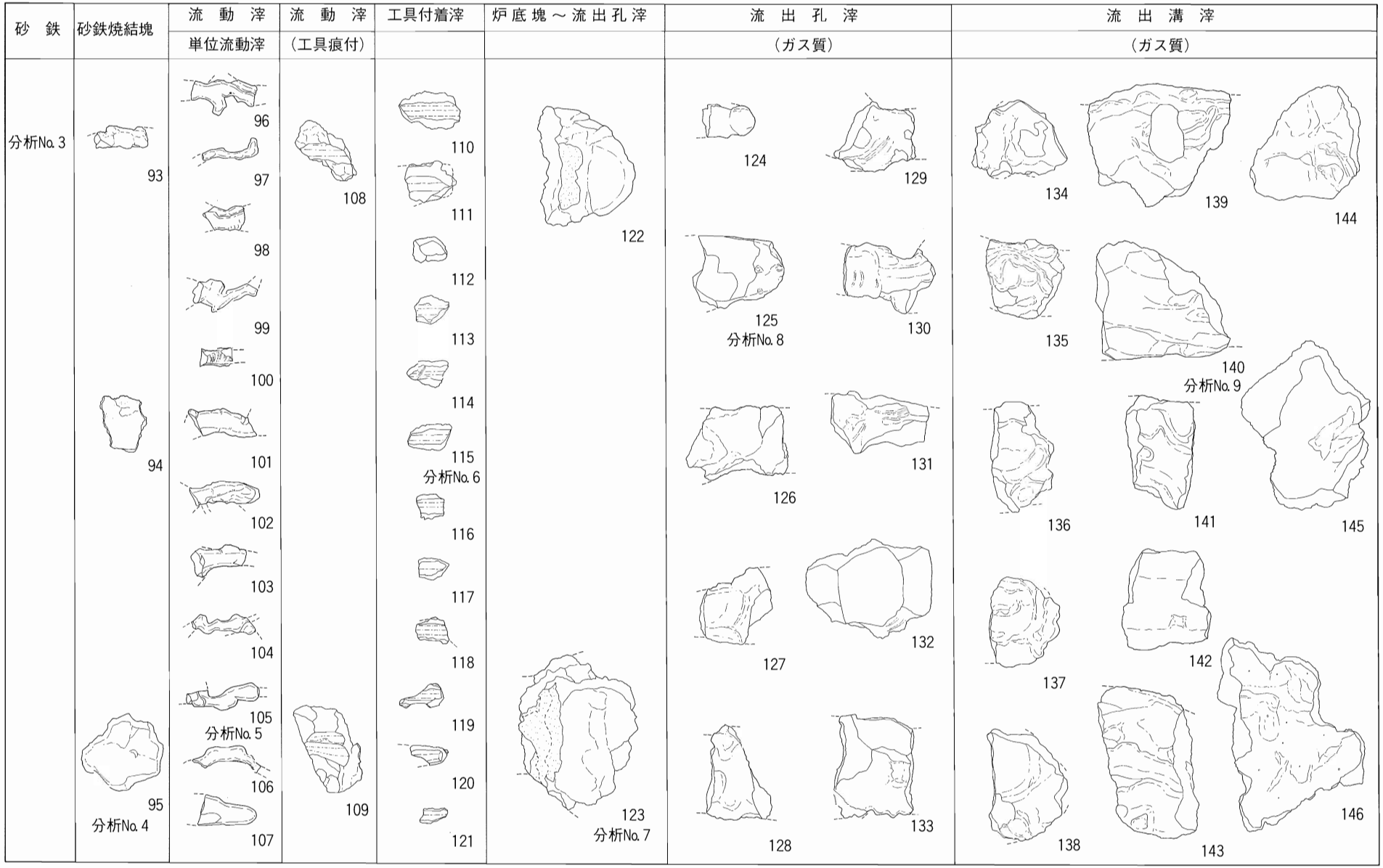
なお、1 は分析資料（TON－1）である。



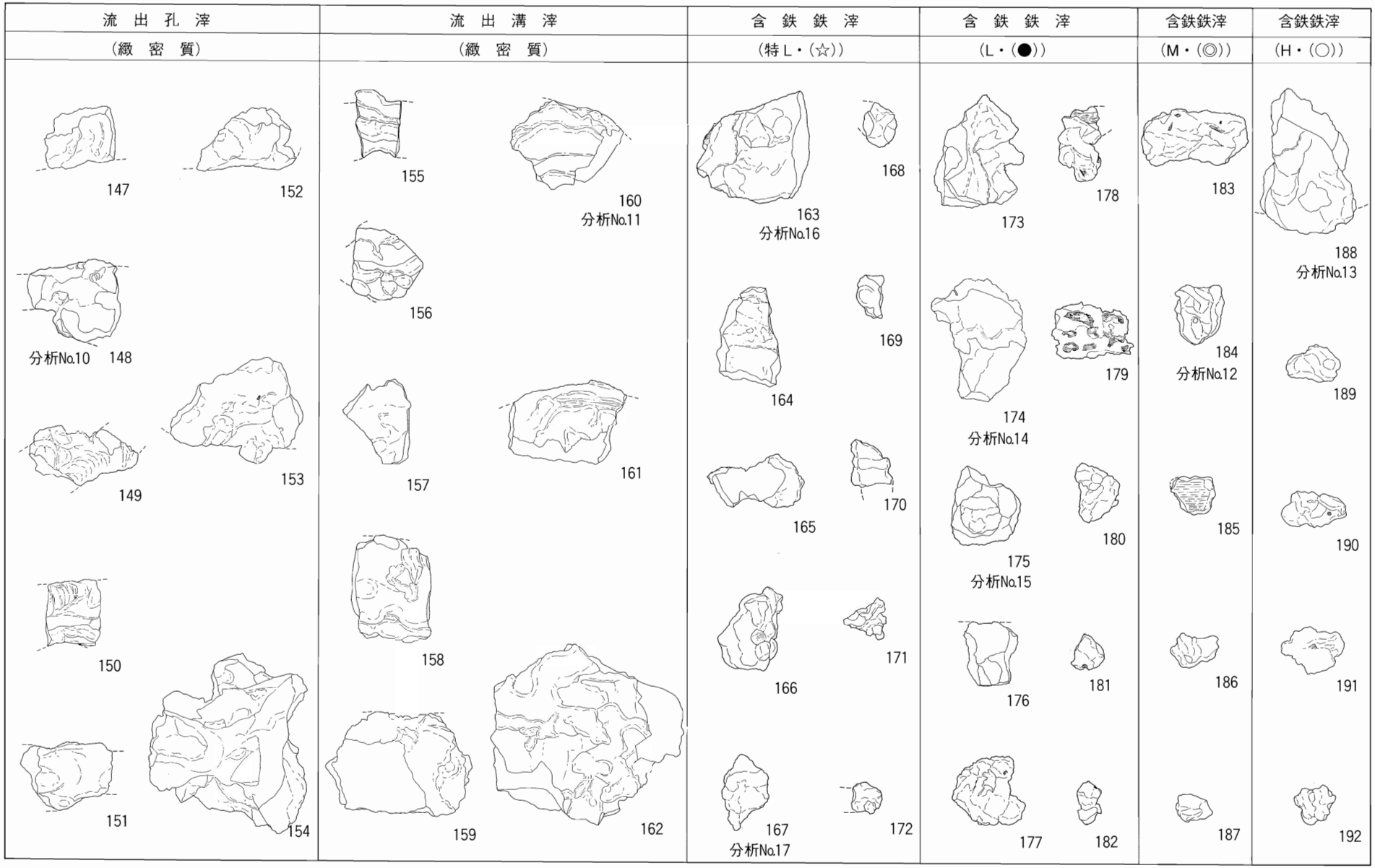
第14図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物分類模式図



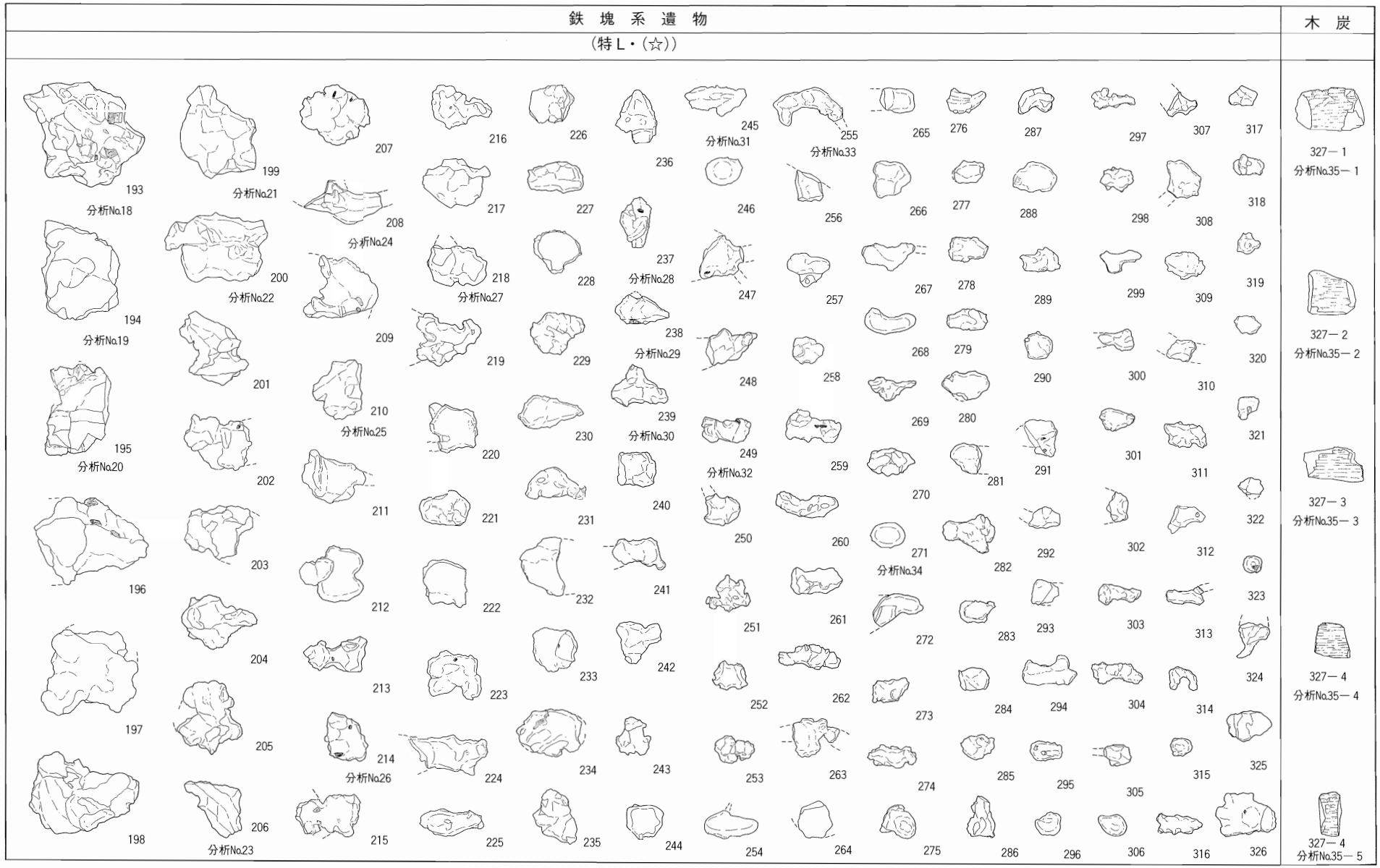
第 15 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（1）（S＝1／8）



第 16 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（2）（S= 1/6）



第17図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（3）（S= 1/6）



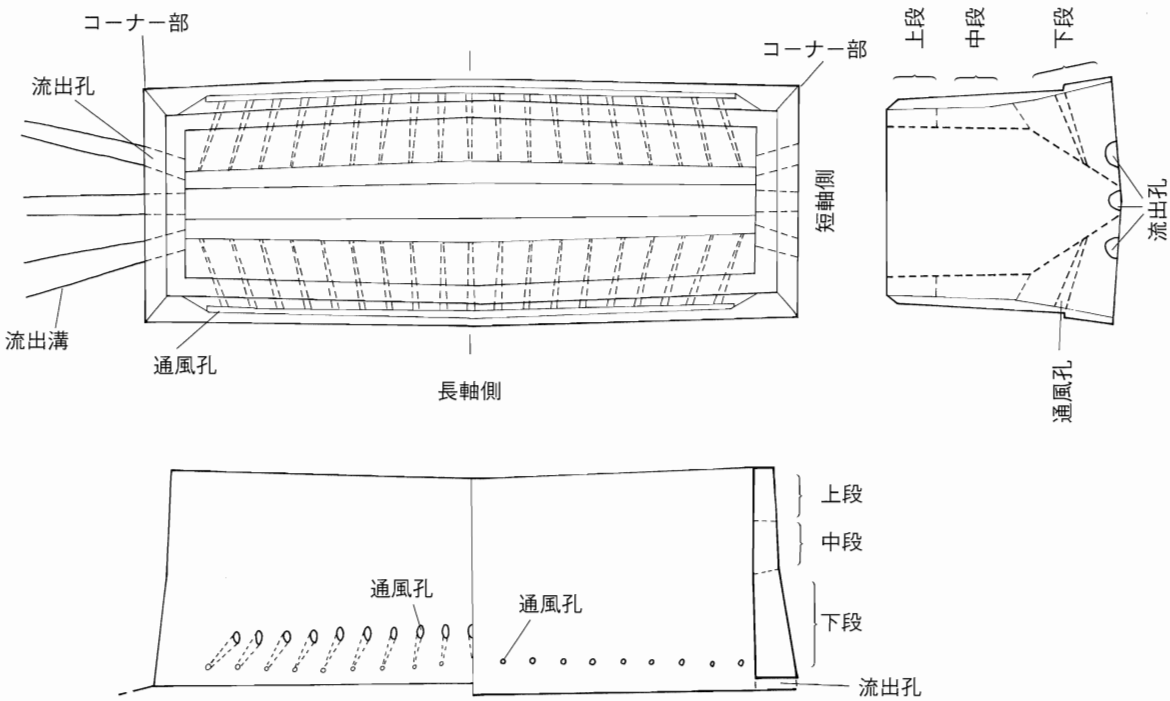
第18図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物構成図（4）（193～326 S＝ 1/6、327－1～5 S＝ 1/4）

中段（被熱やや弱）　4～13は製鉄炉中段でも上部の炉壁片と考えられる。4～6・8は内面側は橙褐色、もしくは灰褐色から暗褐色に変色する程度で、滓化しておらず被熱度は弱い。4・5・8には内面に砂鉄焼結塊が付着している。7・9～12は内面が薄くガラス質に滓化している程度で、被熱はやや弱い。7は外面側に砂鉄焼結塊が付着している。13は内面が滓化しており、上面および左右側面には炉壁材接合痕が残る。図示していないが上から見ると内面が緩やかな弧状になっており、短軸側の炉壁片と思われる。

中段（滓化・砂鉄焼結）　14～26は中段の炉壁片と考えられるものである。いずれも内面がガラス質に滓化しており、そこから外面側は灰褐色もしくは赤褐色に被熱した部分が見られる。14・16～23・25・26には砂鉄焼結塊が見られる。14は砂鉄焼結塊が内面に全体に厚く固着している。21・22・26のように炉壁材接合痕の間に砂鉄焼結塊が付くものも見られる。

下段（通風孔上）　27～41は製鉄炉下段の通風孔上の破片と思われる。内面は比較的強く滓化しており、外面に向かって灰白色から灰褐色、黄橙色から赤褐色などに変化した被熱部分が見られる。42は下面側から見ると内面が緩やかな弧状を示しており、短軸側の破片と思われる。43は上面側から見ると「く」の字状に折れ曲がっており、これも短軸側かコーナー部分の破片と思われる。

下段（通風孔目印付）　44～47は製鉄炉下段で、通風孔を設ける際に位置の目安とした目印穴の付く炉壁片である。内面は比較的強くガラス質に滓化しており、そこから外面に向かって灰褐色、桃白色に被熱している。目印穴はいずれも断面円形の棒状工具であけられている。44・45・47は内面から外面に向かって斜め上に向かって付けられており、47の場合では壁面に対し10°前後の傾斜度になる。46は内面に対してやや左斜め上方向に開けられている。穴の径は46は1.4㎝、47は1.7㎝になる。44は目印の約3㎝下に通風孔の一部が残っており、目印穴と通風孔の位置関係が分かる興味深い資料である。



第19図　製鉄炉模式図（俵國－1933『古来の砂鐵製錬法』丸善株式会社から一部改変）

下段（通風孔付（１孔））　48～58は製鉄炉下段の炉壁片で、通風孔が１ヶ所残っているものである。内面はいずれも強く滓化している。通風孔の部分が突出し、これよりも下の部分が抉れるように溶けているものが多く見られる。通風孔は全体の形が残っているものはないが、破片から見る限りでは、縦長の楕円形をしているようである。長径3.5cm～５cm、短径はおよそ２～３cmになると思われる。49の通風孔は残存部分から見る限り、隅円方形もしくは小判形になるようである。58は上面が炉壁材接合痕で、砂鉄焼結塊が付着している。

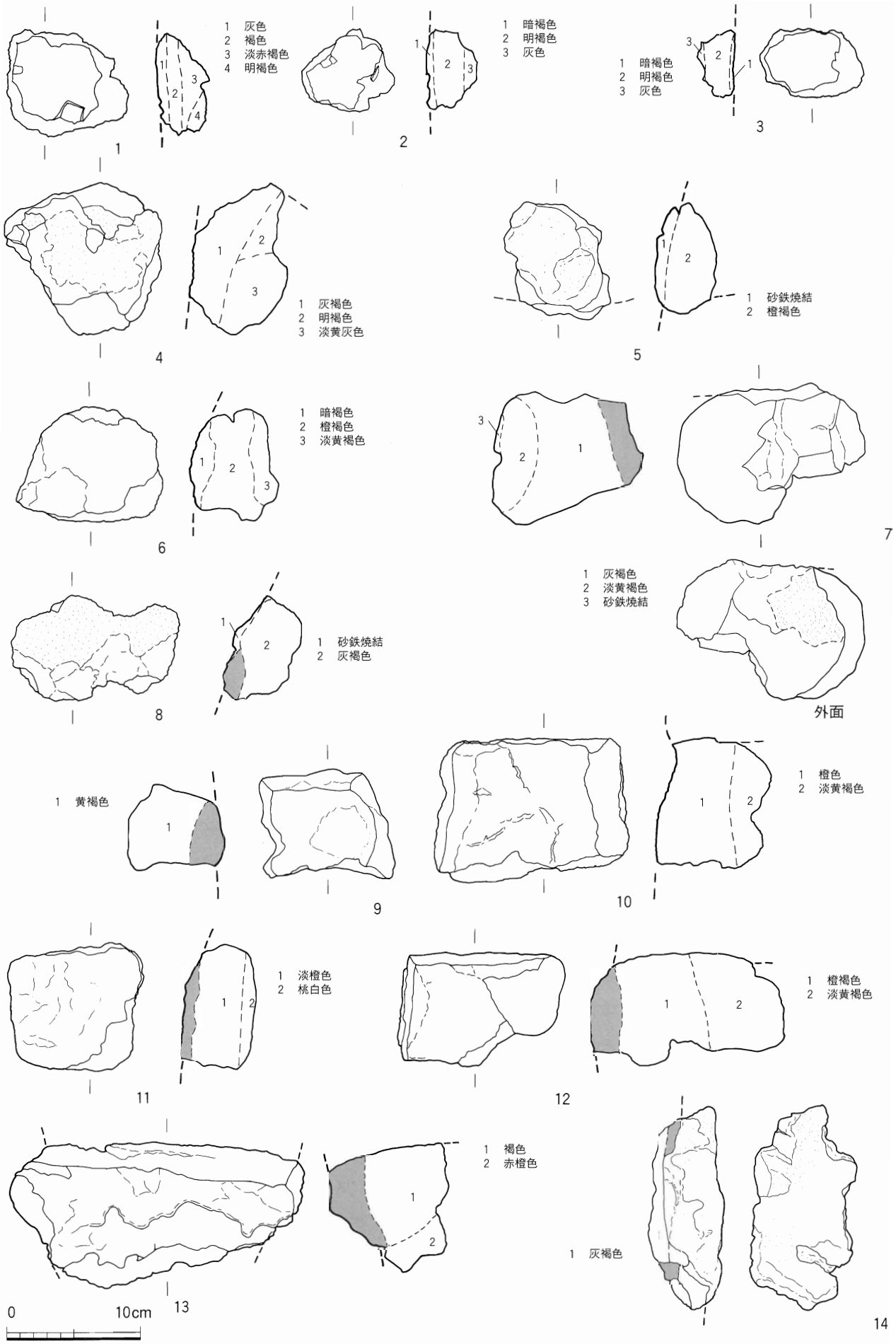
59～61は製鉄炉の下段のコーナー・短軸に相当する部分と考えられ、通風孔の上半部とほぼ等しい高さに位置したと思われる炉壁片である。それぞれ上から見ると内面側が弧状になっていたり、「く」の字状に曲がったりしている。59・61は内面に厚く滓化した部分もしくは、滓が付着している部分が見られる。60は外面側に直径1.2cmの棒状工具の痕跡が見られる。これは、この資料がコーナー部分に位置しており、通風孔目印を付けるときにかなり斜め方向から工具が差し込まれてきたことを示すものと思われる。

下段（通風孔付（２孔））　62～72は製鉄炉下段の炉壁片で、通風孔が２ヶ所に残っているものである。内面はいずれも強く滓化しており、外面に向かって灰褐色、赤褐色から淡赤褐色の被熱が見られる。通風孔部が内側に向かって突出し、通風孔よりも下の部分が抉れるように溶けているものが多く見られる。これは通風孔の下部にに空気が送り込まれたため、この部分の温度が上昇したことによるものである。中には通風孔部に薄く滓がつまりかかっているものもある。通風孔は全体の形が残っているものは見られないが、破片を見る限りでは、縦長の楕円形もしくは小判形になりそうであり、孔径が長径で3.5cm～５cm強になりそうである。通風孔短径を３cmと想定した場合の通風孔間隔はおよそ11～14cmになる。

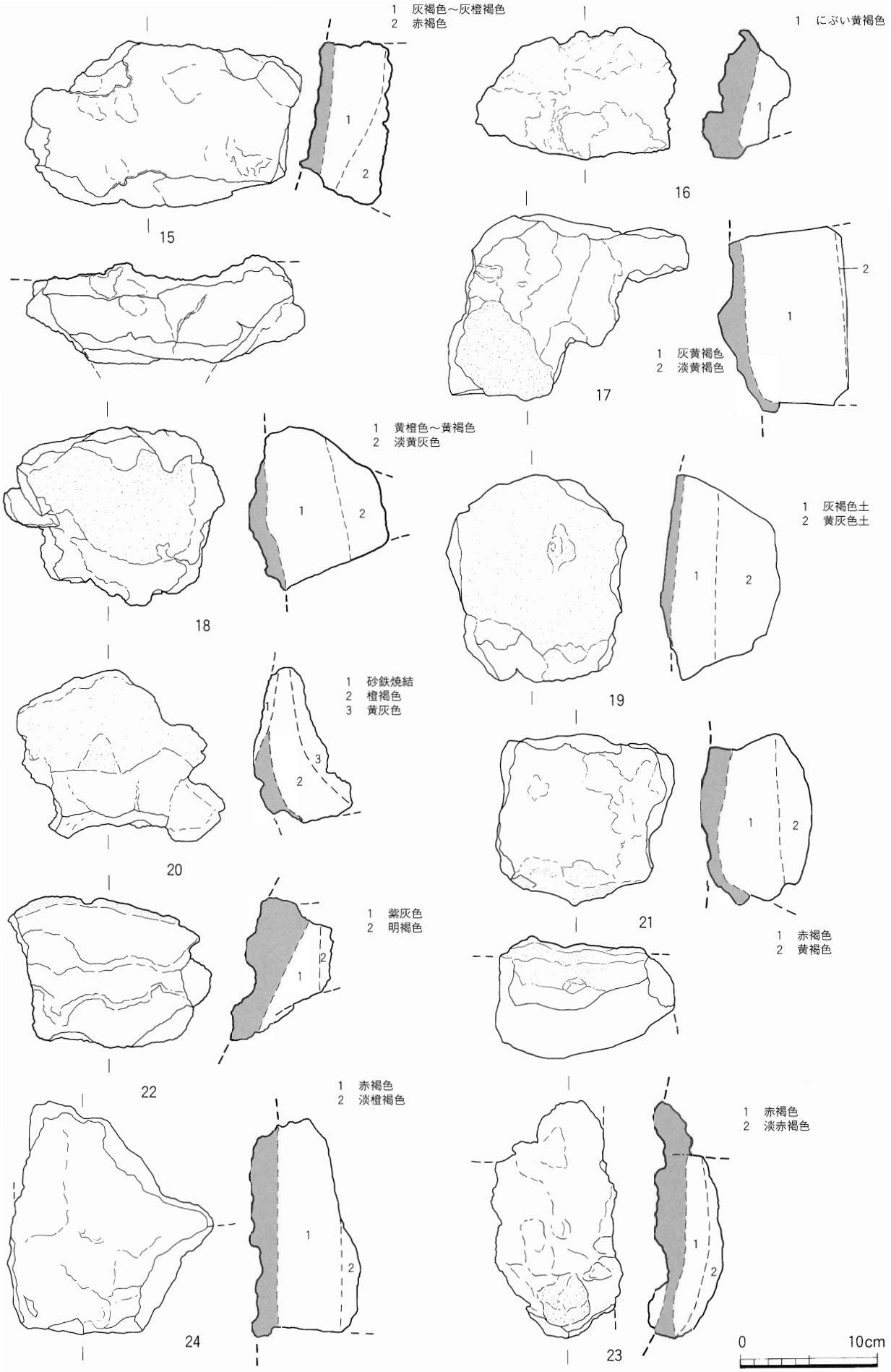
なお、67は分析資料（TON－２）である。

73・74は製鉄炉の下段のコーナーもしくは短軸部に相当する炉壁片で、通風孔とほぼ同じ高さに位置していたと思われるものである。73は上から見ると「く」の字状に曲がっており、右側面に通風孔が残されている。炉壁コーナー部に当たる破片で、通風孔のついている部分が長軸壁の端になると考えられる。74は内面の滓化が著しい。

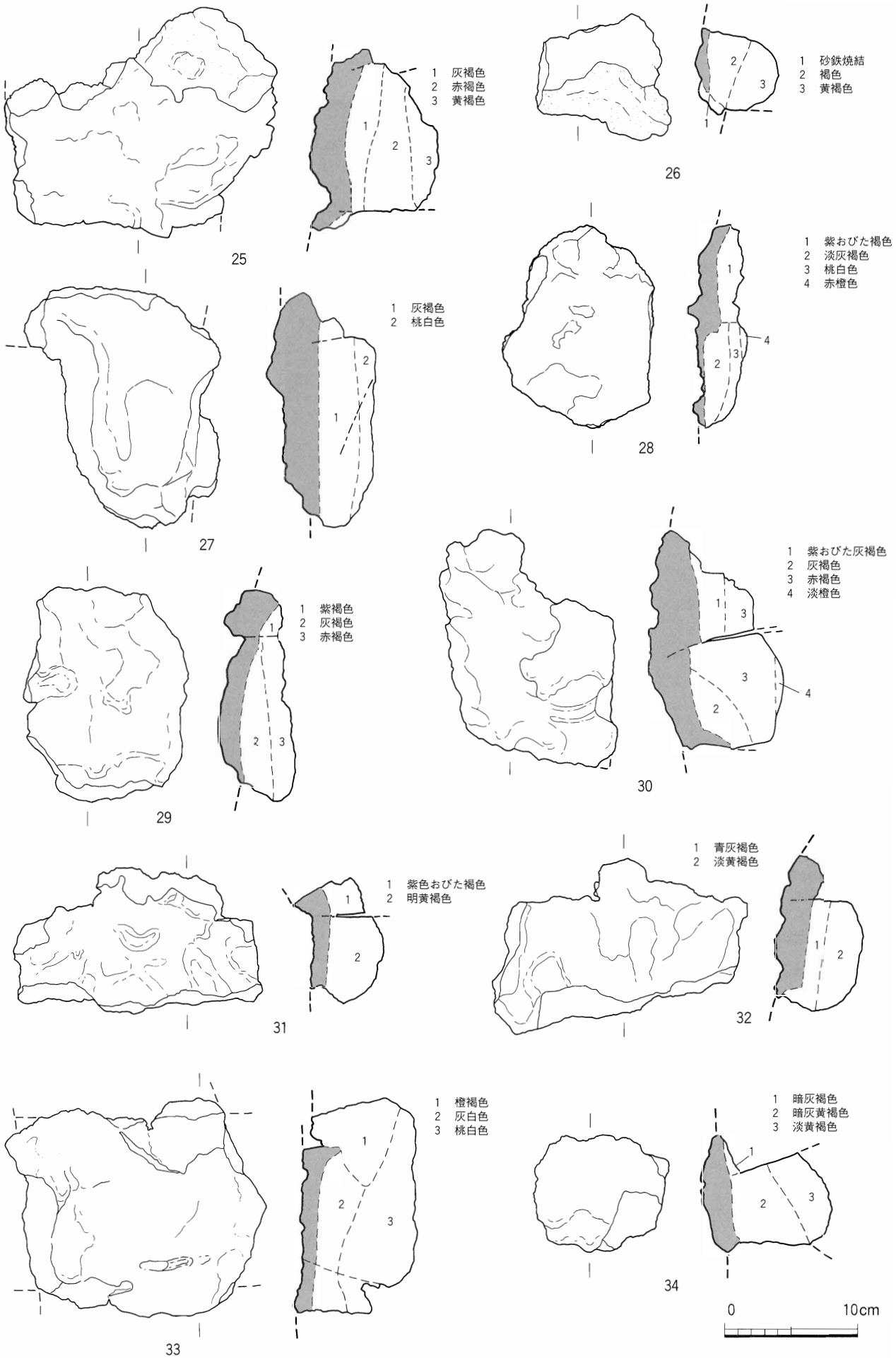
最下段（通風孔または流出孔付）　75～87は製鉄炉の最下段の炉壁片である。いずれも下面は接地面となっており、中には接地面に薄く滓が貼り付いたものも見られる。炉壁の溶融、滓化が著しく進んでいるものが多く、中には壁面が抉れるように溶融・滓化しているものや、炉壁の自重に耐えきれず変形したと思われるもの（83・85・87）もある。77・78・79・84は流出孔が残るもので、その意味では炉壁短軸側に含めて考えるべきものである。77・78・84は内面側から見ると流出孔の存在に気付かないが、外面側から見ると流出孔に滓が詰まっている様子が見て取れる。77は大小２ヶ所の流出孔が見られる。大きい方が復元径９cm前後で孔の中央部に接地面が来るのに対し、小さい方が径約５cmで流出孔の少し下に接地面が来るようである。78は流出孔の径が11～12cmで、流出孔の下から1/3のところに接地面がくる。79は左側に流出孔が残る。推定される直径は９cmで、孔の中央に接地面が来る。孔には滓の付着が見られないが、径が大きく、接地面に近い位置に設けられていることから流出孔と考えられる。上面および左右側面は炉壁材接合痕である。なお、図では接地面が右下がりになっているが、実際は水平になると考えられる。84は径７cm以上の流出孔が１ヶ所見られ、流出孔の下に接地面がくる。80～81は接地面から６～12cm上に、推定径８cm以上の大



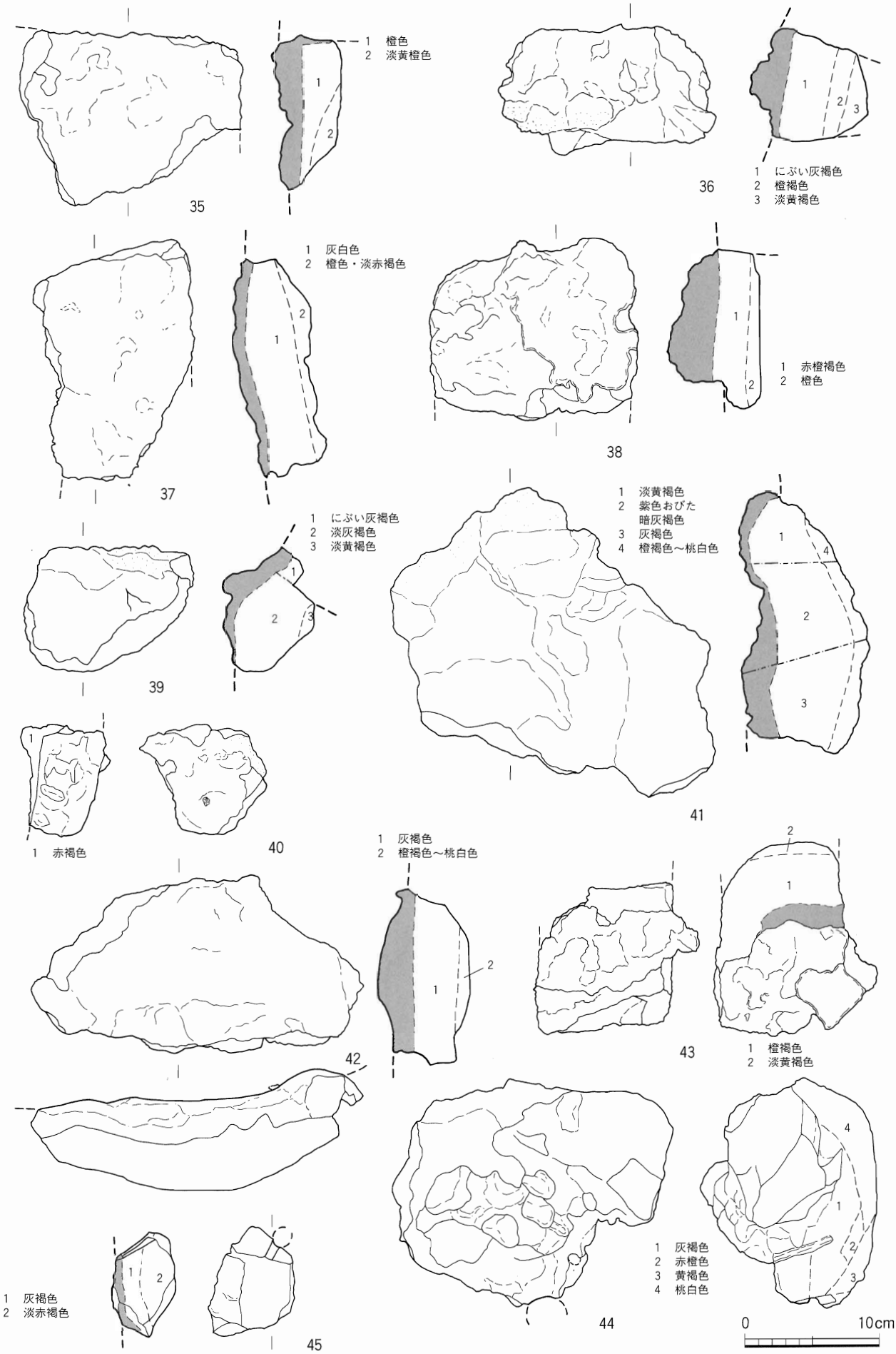
第 20 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（1）（S＝ 1/ 4 ）



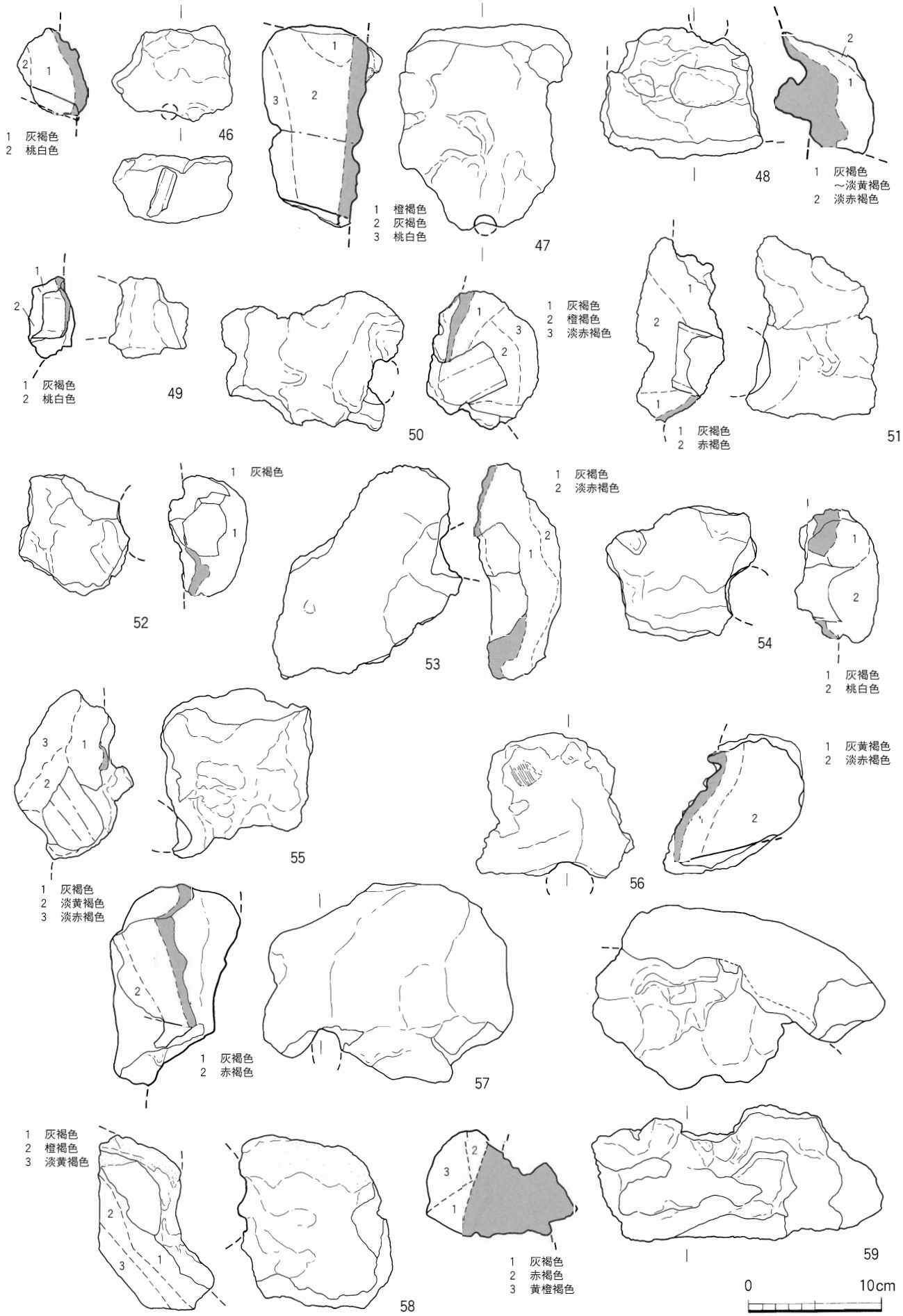
第 21 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（2）（S＝ 1/ 4 ）



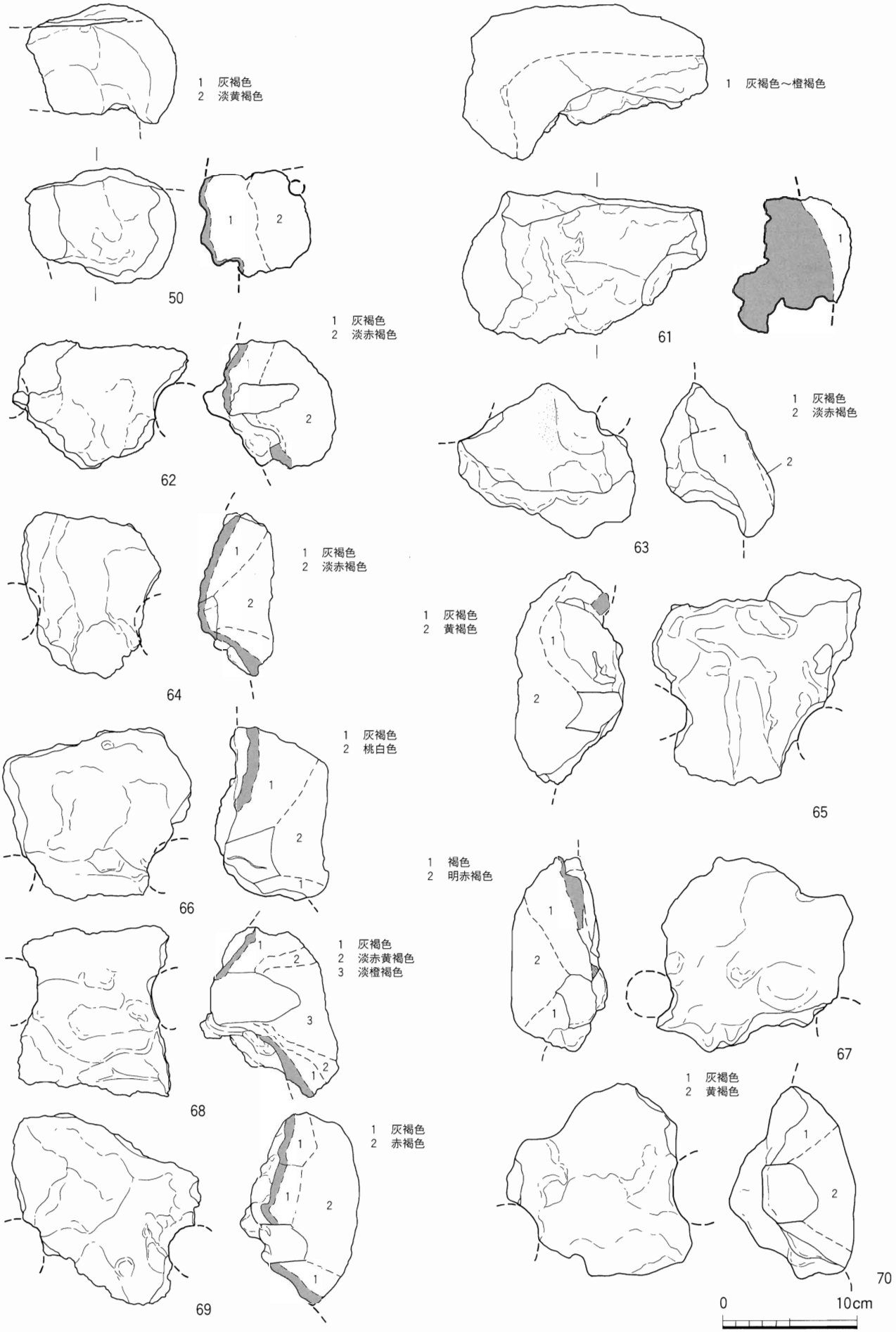
第 22 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（3）（S＝ 1/ 4 ）



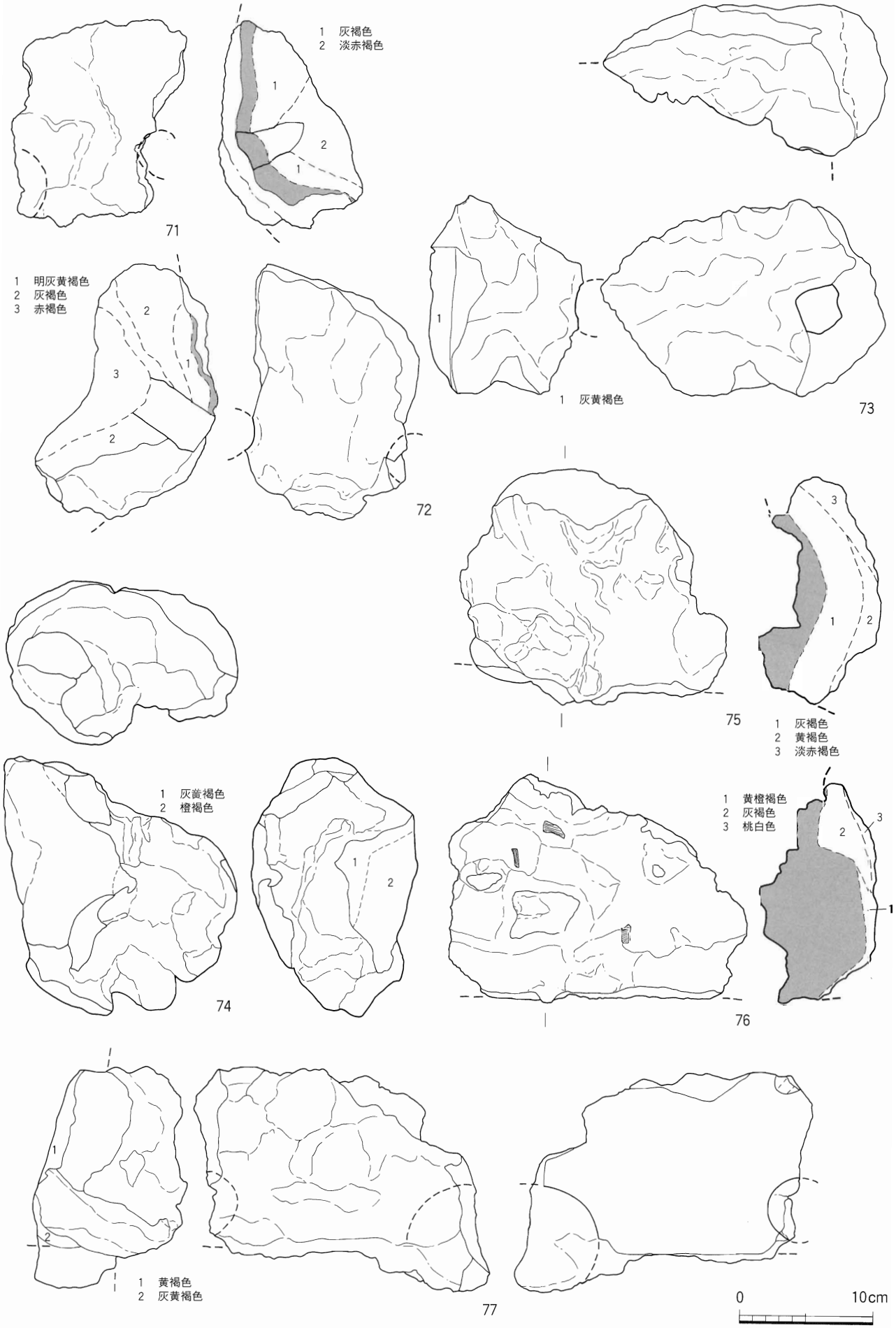
第 23 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（4）（S＝ 1/ 4 ）



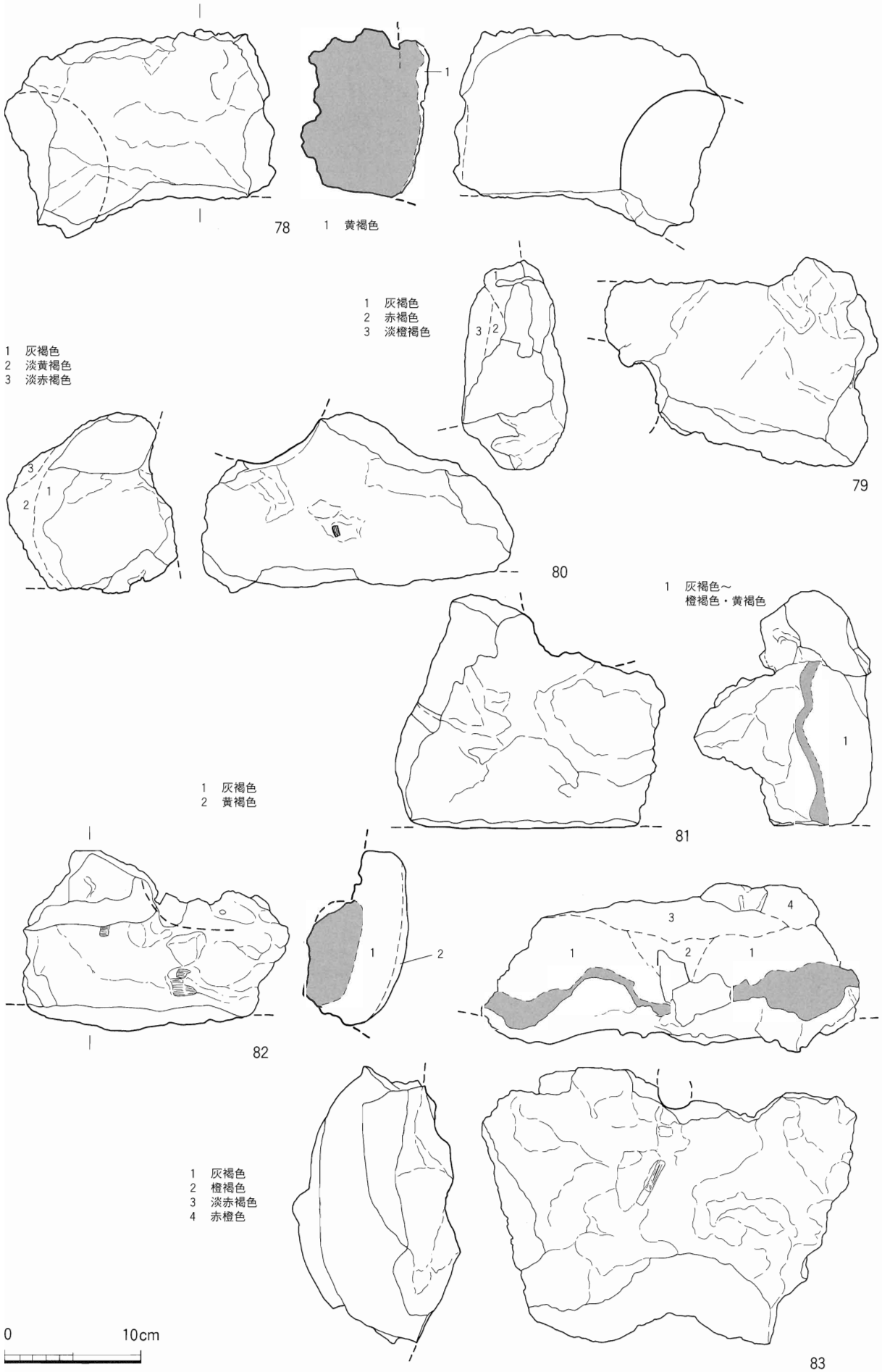
第 24 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（5）（S＝ 1/ 4 ）



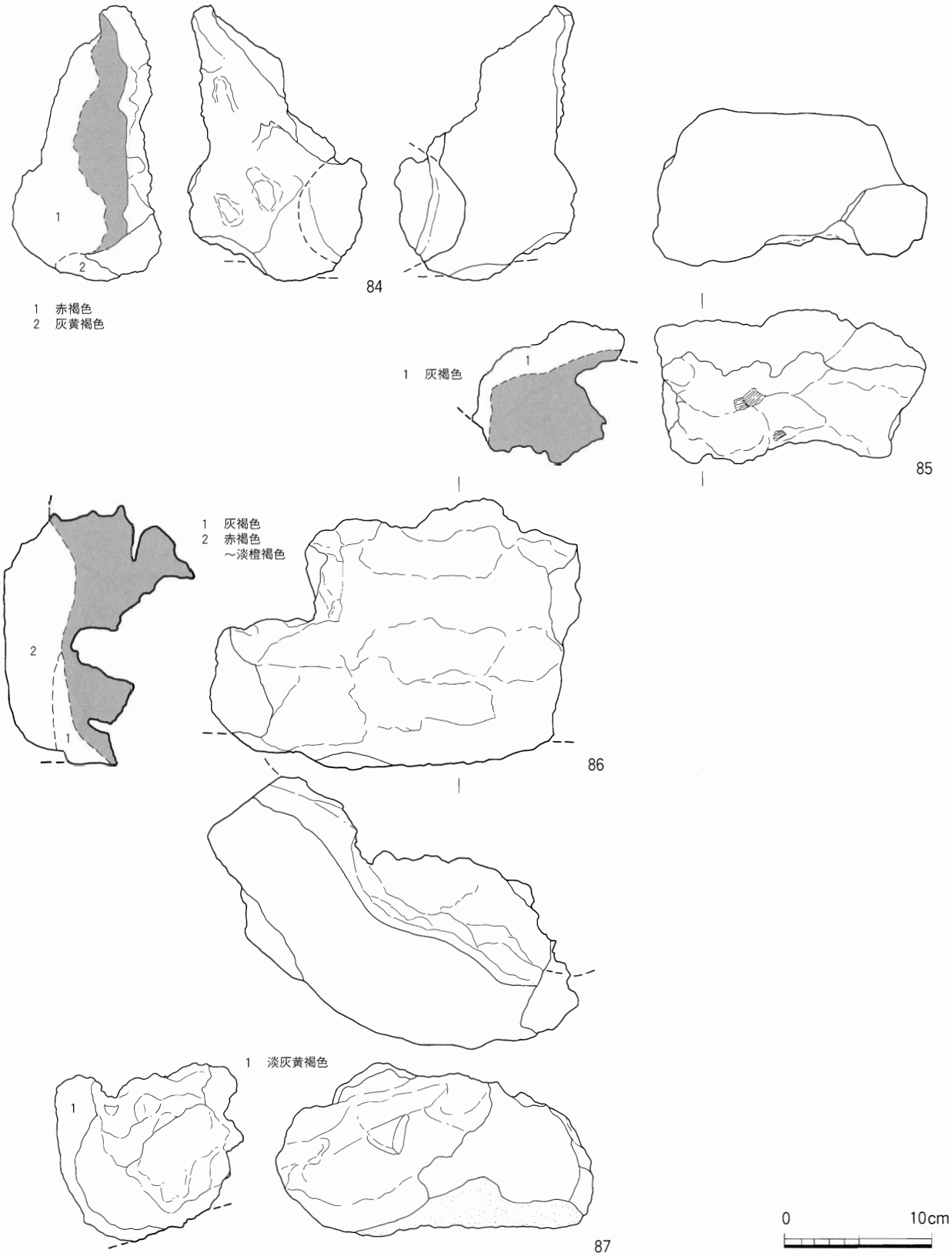
第 25 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（6）（S＝ 1/ 4 ）



第 26 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（7）（S＝ 1/ 4 ）

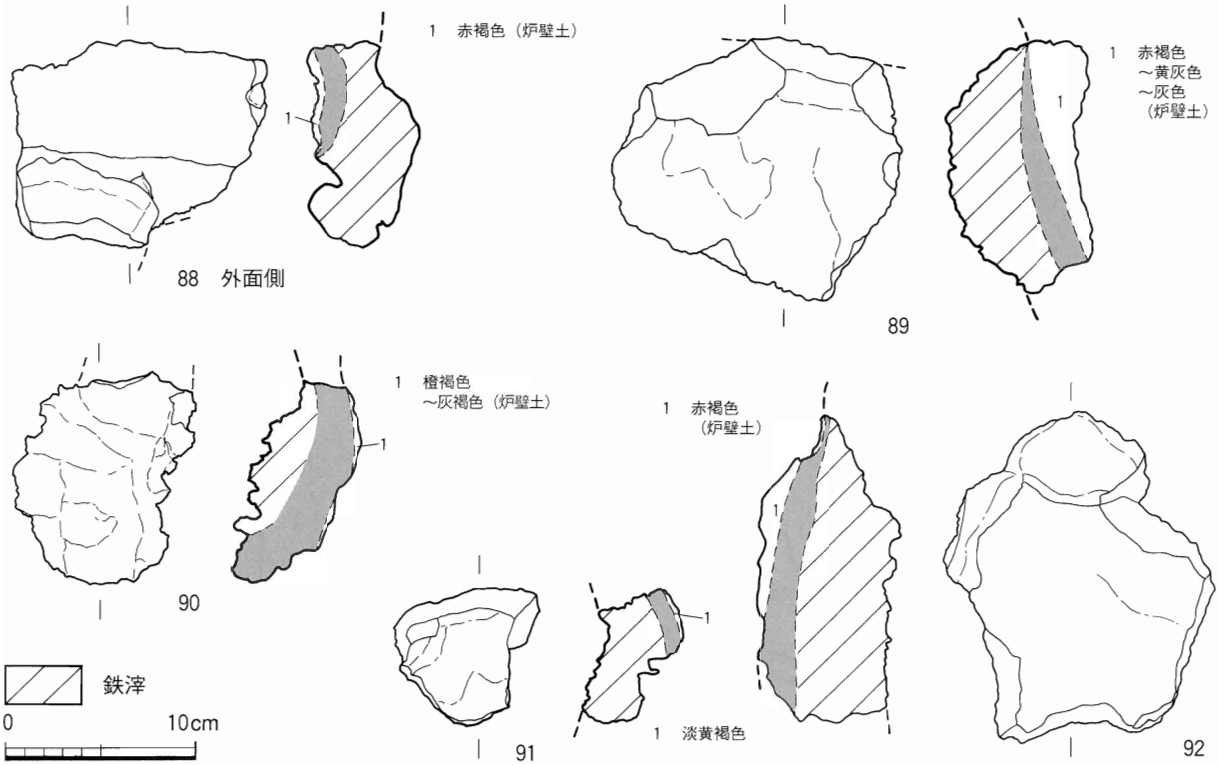


第 27 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（8）（S＝ 1/ 4 ）



第 28 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（9）（S＝ 1/ 4 ）

きな孔があけられている炉壁片である。この孔の機能については通風孔と流出孔の 2 つが考えられる。ただし、通風孔と考える場合は孔の径が大きすぎる点が問題であり、流出孔と考える場合は接地面からかなり高い位置にあけられている点と、滓の付着が見られない点が疑問点となる。今のと



第29図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（10）（S＝ 1/4）

ころは両者の可能性を保留しておきたい。83は上面に 1 ヶ所通風孔が残る。実測図では接地面である下面が大きく外傾するように表示しているが、本来の接地面は水平になっていたものと考えられる。この場合、炉壁は大きく内側に倒れた状態になるが、これは熱により変形した結果であると思われる。接地面から通風孔までの間隔はおよそ11cmであるが、炉壁の変形も考慮すると実際はこれよりも大きくなるであろう。

85～87はコーナー部から短軸に相当する部分と思われる。上から見た場合いずれも曲がっていたり、内面が弧状になっている。

炉底付近（炉底塊付）　88～92はいずれも炉底付近の炉壁部で、イガイガした質感を持つ多孔質の炉底塊が内面側に固着している。88は外面側を図示しているが、外面の上半部にのみ炉壁土が見られる。92は右下側面に断面方形の工具痕が見られる。

砂鉄・砂鉄焼結塊　（第16・30図、図版10）

砂鉄　排滓場の鉄滓堆積層の土の一部を水洗・磁選して、採取したものである。ルーペで観察すると、0.5～0.2㎜大のものが主体で、熱を受けたと思われる砂鉄粒子も含まれ、光沢のある鉄粒子は少ない。色調は黒褐色。なお、20ｇを分析に用いている（TON－３）。

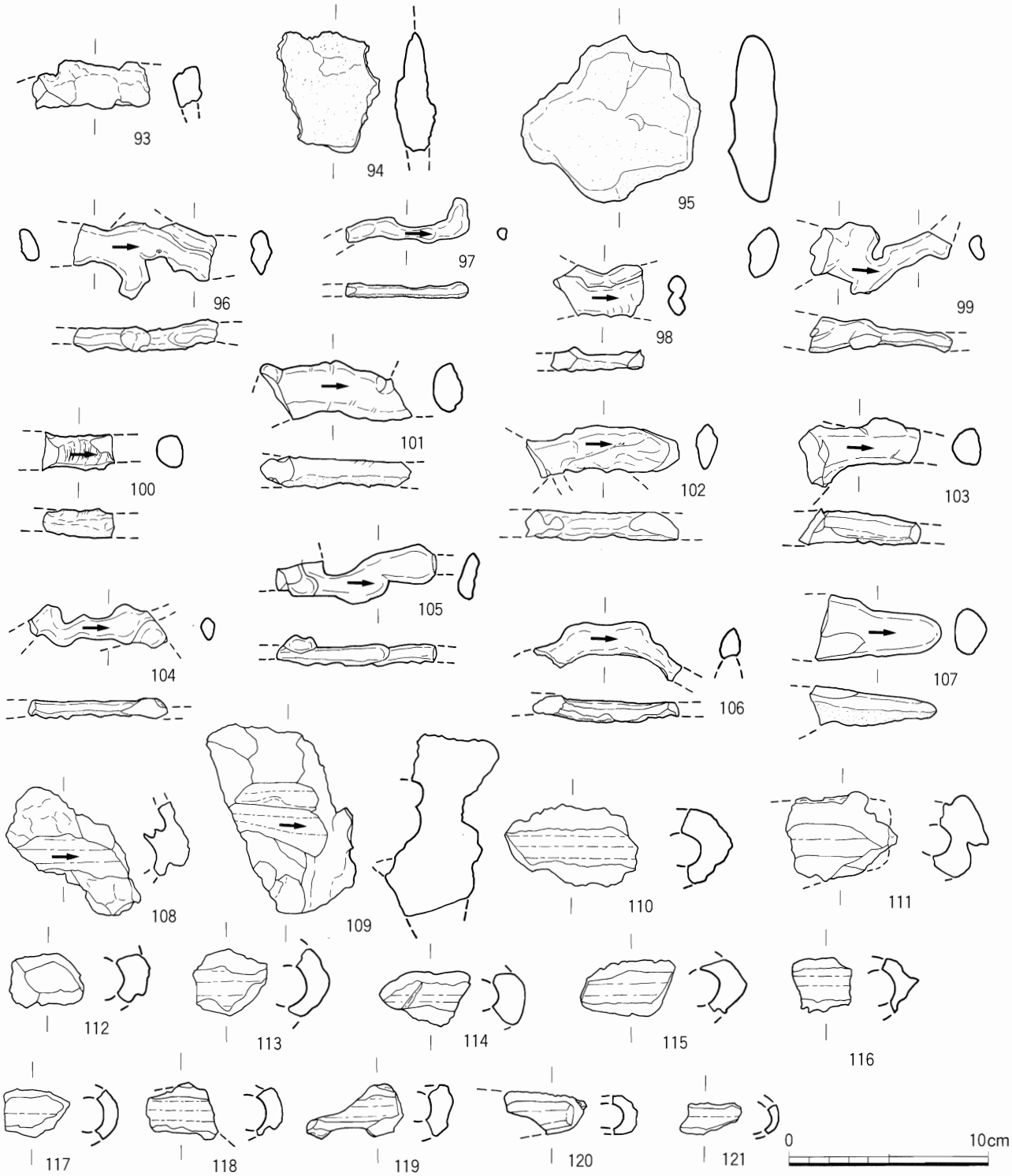
砂鉄焼結塊　93～95は製鉄原料として炉内に投入された砂鉄が被熱により固まったものである。粒度は0.1～0.2㎜大のものが目立つ。いずれも裏面は炉壁から剥離した面と思われる。なお、95は分析資料（TON－４）である。

鉄滓類　（第17・18・30～38図、図版10～12）

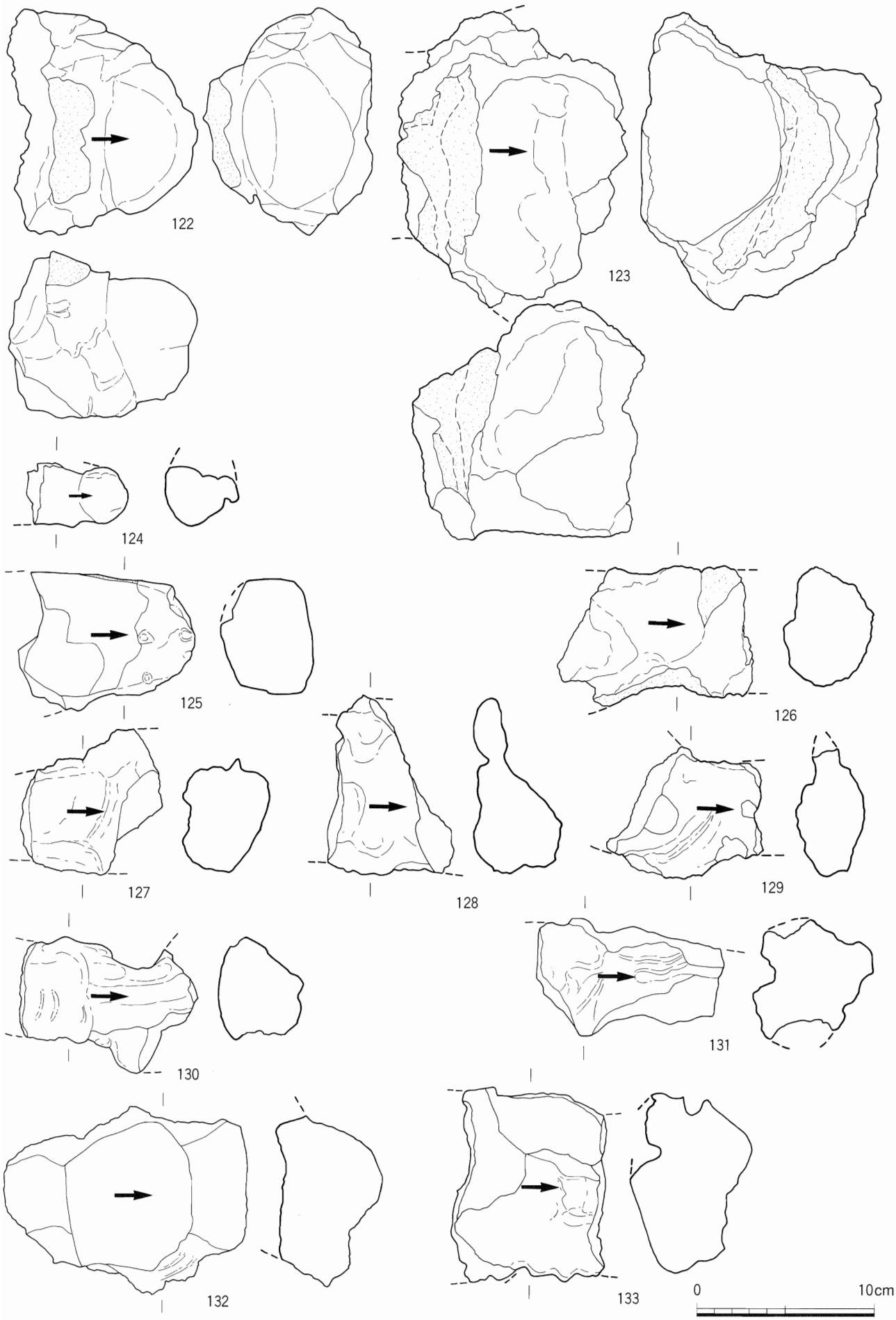
流動滓（単位流動滓）　96～107は細長くのびる流動滓で、単位流動滓と呼ばれるものである。このうち105は分析資料（TON－５）である。流動単位は 1 本のものや 2 本のものがあり、1 本の単位が 3 本に枝分かれしていると思われるもの（99）もある。いずれも滓質は緻密質である。これらは流動滓の末端に近い部分と思われるが、中には操業当初に生成されたものがあるかもしれない。

流動滓（工具痕付）　108・109は工具痕が表面に残る流動滓である。工具痕はいずれも直径約 2 cmの丸棒状のもので108には 1 ヶ所、109には 2 ヶ所見られる。工具痕は流出孔などに詰まった滓を掻き出すときについたものかもしれない。

工具付着滓　110から121は工具に一度付着した鉄滓が冷え固まり、再び工具から離れた鉄滓である。滓に残された工具の痕跡はいずれも丸棒状のもので直径は1.2～1.5cmある。120はやや丸みを持った工具の先端の痕跡が残っている。工具痕のまわりの滓の厚みは、厚いもので 2 cm、薄いもので0.3 cm程度である。なお、115は分析資料（TON－６）である。

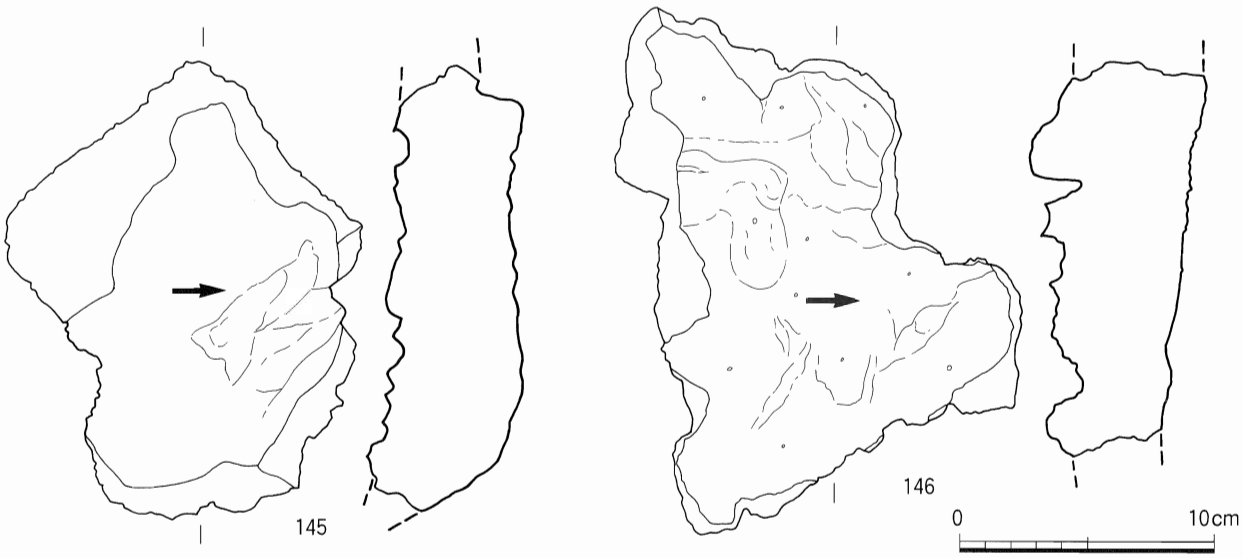


第30図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（11）（S＝ 1/3）



第 31 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（12）（S＝ 1/3）

第 32 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（13）（S＝ 1/3）



第33図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（14）（S＝ 1/3）

炉底塊～流出孔滓　122・123は炉底から流出孔にかけて生成された鉄滓である。

122は上面左側に流出孔部の炉壁土が付着している。流出孔は幅約12cm、高さ約 8 cmの大きさになる。右側面で鉄滓の流れが止まり、丸く収まっている。

123は左右で大きく質感が異なる。上面左側に流出孔部の炉壁土が付着しているが、これより左側の部分では錆色が強く内部に木炭痕が残る炉内滓的な様相であるのに対し、右側では不規則な気孔を多量にもつガス質の流動滓になっている。流出孔は幅13cm前後、高さ7.5cm前後の大きさになると思われる。なお、123は分析資料（TON－７）である。

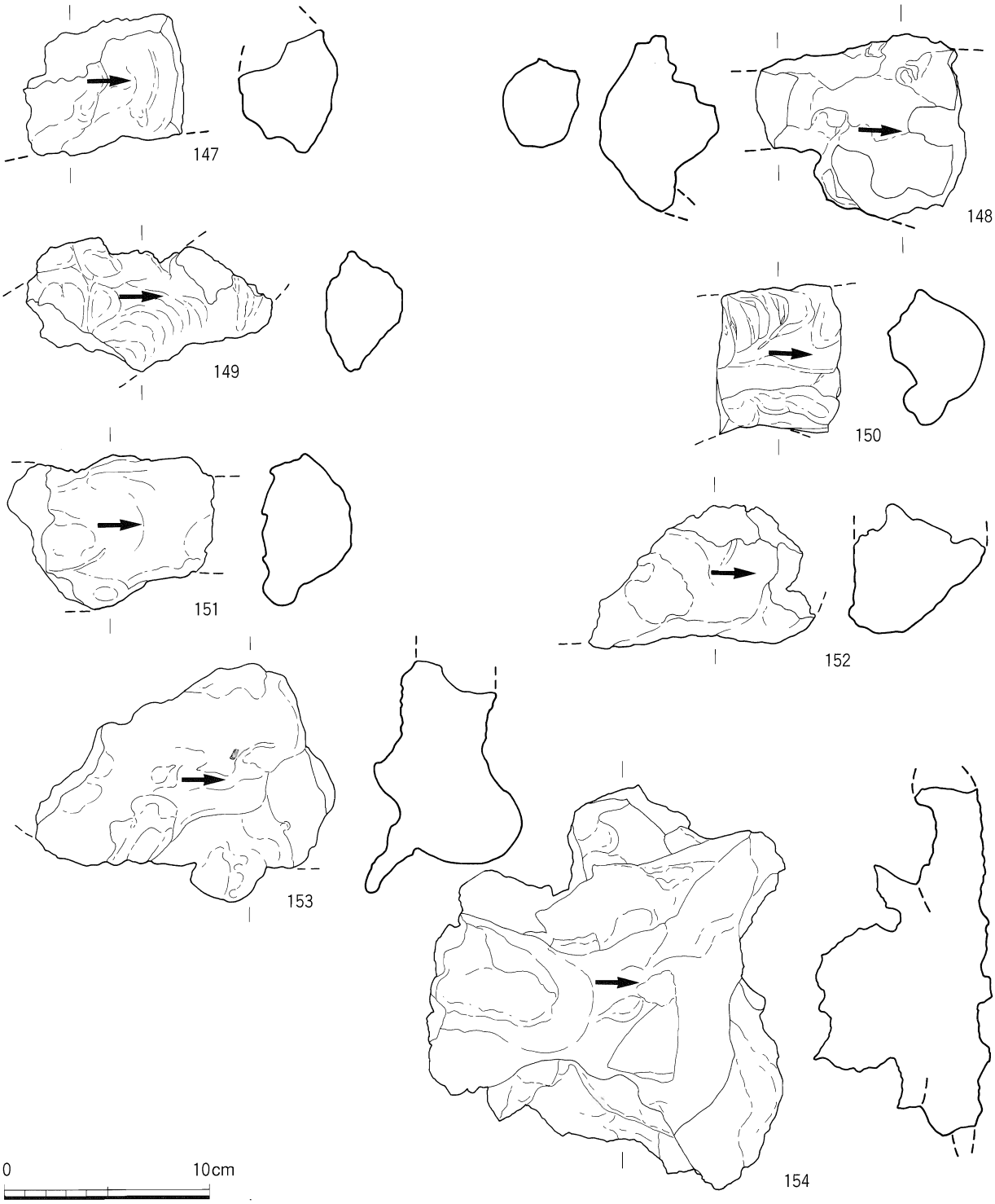
流出孔滓（ガス質）　124～133は、その形状から炉内で生成された滓が炉外へ流出する途中に流出孔で固まったと考えられるもので、いずれも内部に気孔を多く含むガス質の鉄滓である。断面形は丸みをもったやや不整形な横長の楕円形や、下面が樋状になっている。126は流動方向に対して左右の側面に、127は片側の側面に炉壁土が付着している。このことから流出孔滓であることは確実であり、流出孔の幅はそれぞれ 8 cm程度であったことが分かる。このほかについては炉壁土の付着は見られないため厳密な意味で流出孔滓とするにはやや疑問も残る。124・125は図右端で鉄滓の流動が途切れたかたちになっている。128は図奥側が板状に張り出している。133は 2 本の流動単位が重なったように見える。

なお、125は分析資料（TON－８）である。

流出溝滓（ガス質）　134～146は炉外で滓を排出する溝の形状を残しているもので、いずれも内部に気孔を多く含むガス質の滓である。下面は多少いびつなものもあるが、樋状もしくは緩やかな樋状になっているものが多い。145は下面が平らで側面の立ち上がりは緩やかな皿状になっており、146は図奥・手前側を欠くため立ち上がりの形状は分からないが、下面は平坦になっている。145・146は他のものと比べて幅広であるが、こうした傾向から、流出溝の幅の狭い部分は底面が樋状になっているのに対し、幅の広い部分では底面が平らになっていたということも考えられる。

なお、これらのうち140は分析資料（TON－９）である。

流出孔滓（緻密質）　147～154は、その形状から炉内で生成された滓が炉外へ流出する途中に流出孔で固まったと考えられるもので、いずれも内部に気孔をあまり含まない緻密質な鉄滓である。下

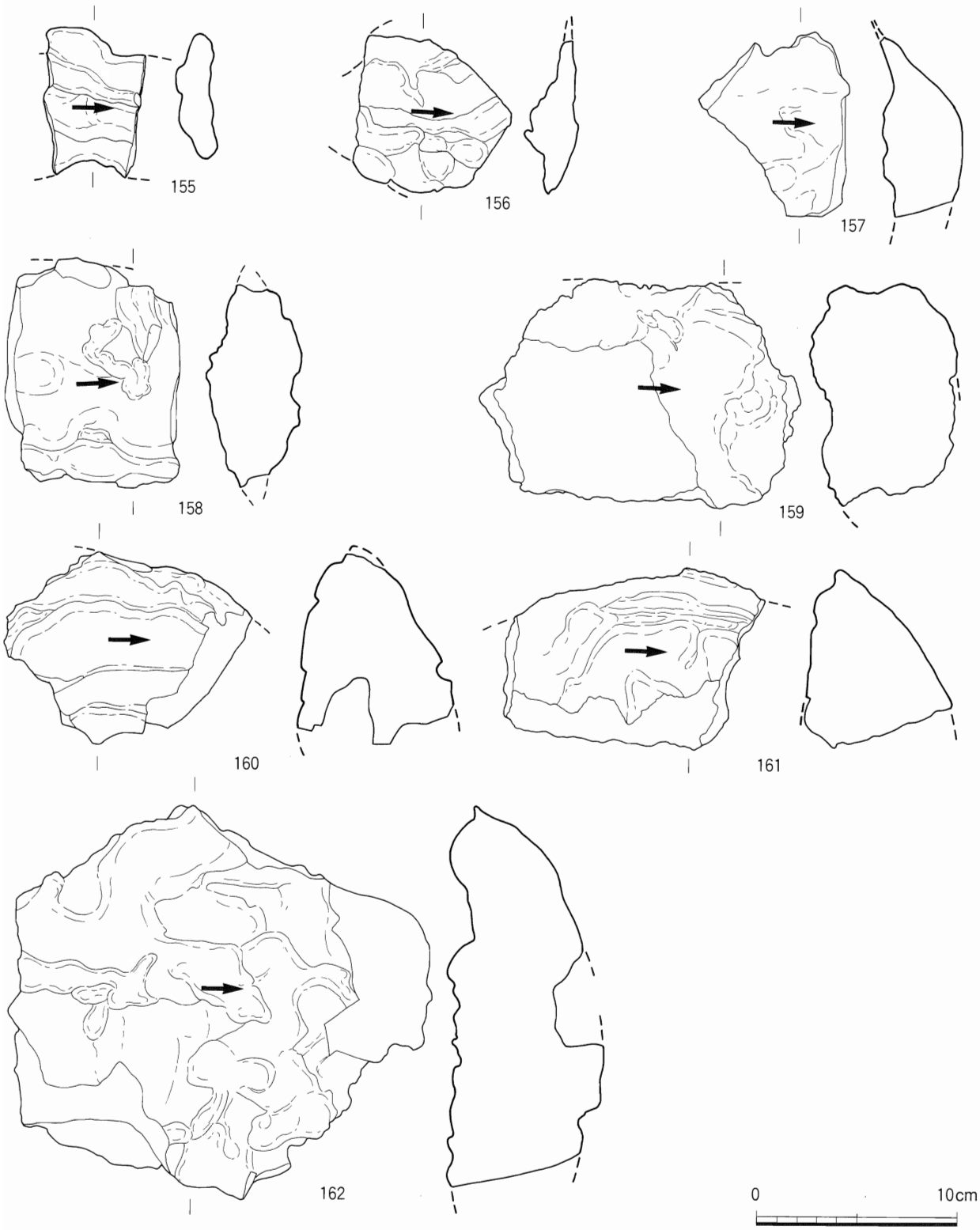


第 34 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（15）（S＝ 1/3）

面が樋状に丸みをもつものが多く、一見流出孔の痕跡をとどめているかのように見える。ただし、154 は下部と上部で異なる流動単位が重層したものと思われるが、下面が平坦であり、上面・側面も丸みを欠いているため流出孔滓とするには疑問が残る。また、154 以外の資料についても流出孔の炉壁土が付着しているものは見られず、厳密に流出孔滓といってよいものかどうか分らない。

各資料の形態についてみてみると、148～151・153 は流動方向に対しての左右側面が突出したり、広がる横断面形をしている。また、148 は図左側が棒状に突出している。

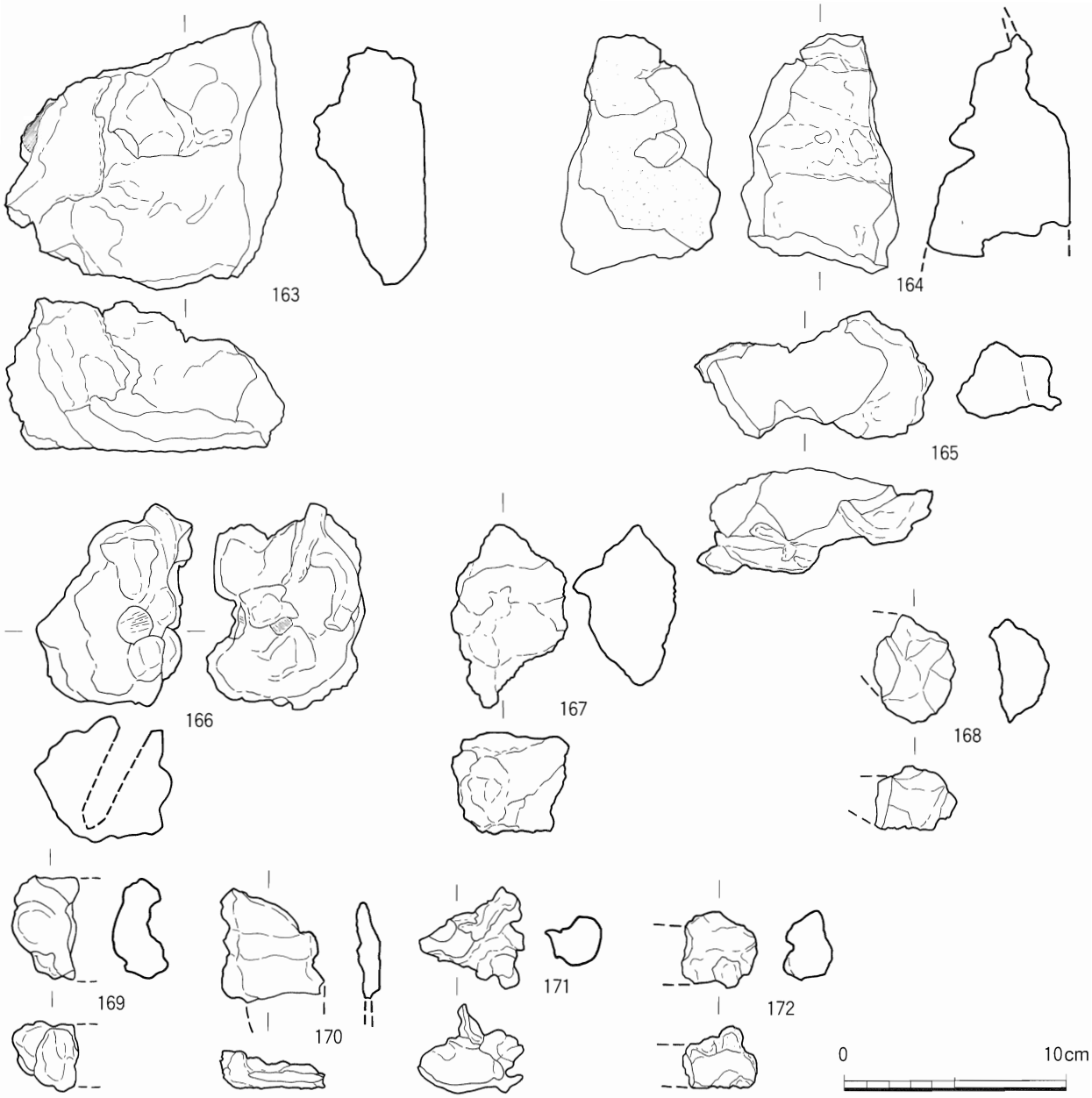
なお、148 は分析資料（TON－10）である。



第 35 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（16）（S＝ 1/3）

流出溝滓（緻密質）　155～162 は炉外へ滓を排出した溝の痕跡を残しているもので、いずれも内部に気孔をあまり含まない緻密質な鉄滓である。下面は平らなもの（155）、比較的緩やかな弧状のもの（156・158・162）、樋状になるもの（157・159～161）が見られる。滓の流れを見ると、複数の流動単位が重層しているものが多い。

なお、160 は分析資料（TON－11）である。

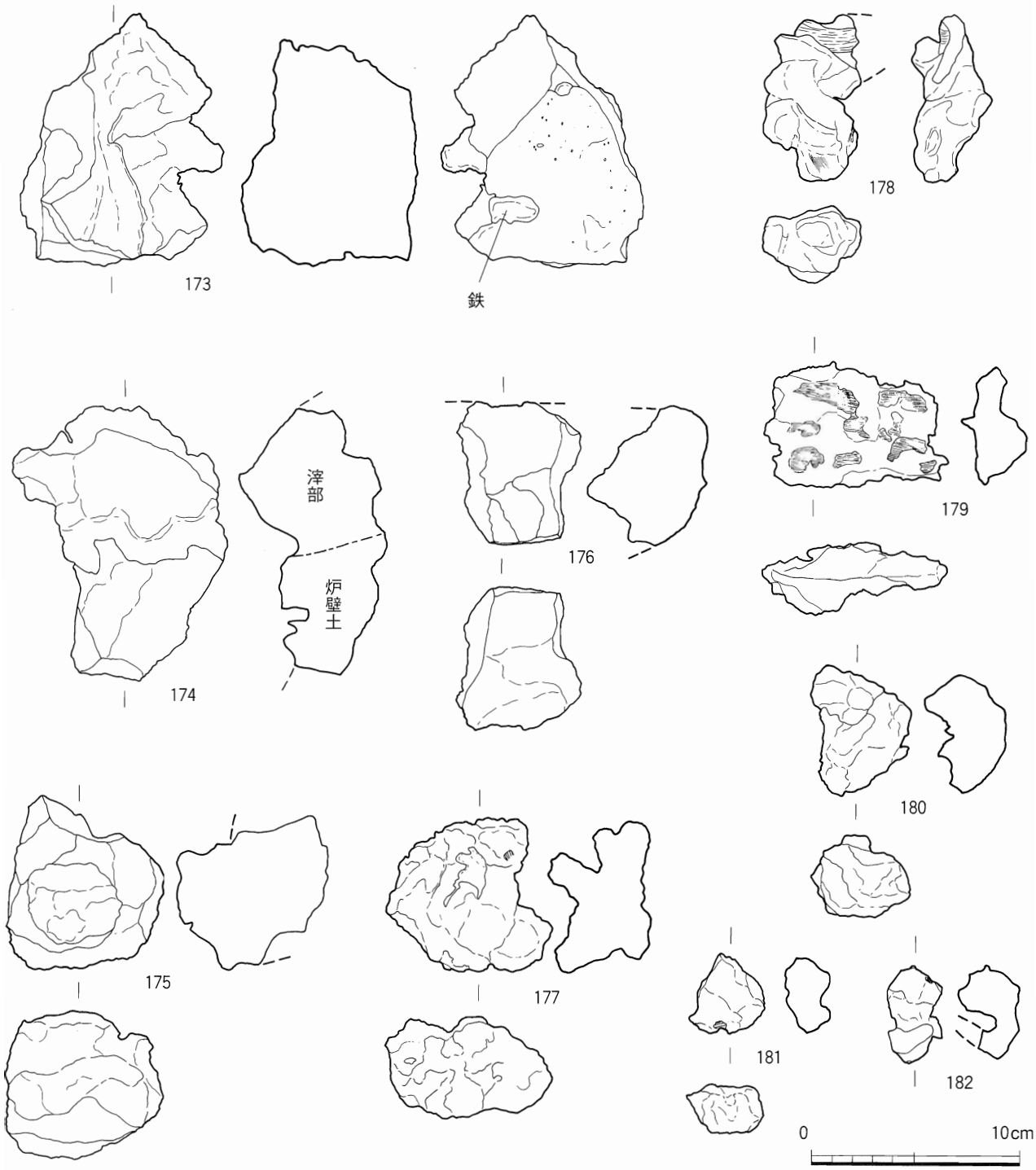


第 36 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（17）（S＝ 1/3）

含鉄鉄滓（メタル度特Ｌ（☆））　163～172 は金属部分を含む鉄滓で、特殊金属探知器が最も感度の低い特Ｌ（☆）の設定になっている場合でも反応した（つまり金属部分が非常に大きく残っている）資料である。外観や形状から炉内滓と思われるもの（163・165～172）と流動滓（164）と思われるものに分けられる。

163 は下面が緩やかな樋状になった流動状の滓であるが、一部に木炭痕が見られ、滓質もやや不均質な印象を受けるため、ここでは炉内滓になると考えておく。166 は上面中央に円形に穴があいたような木炭痕が見られる。170 のように薄板状のものや、171 のように不整形で各部が突出するようなものもいられるが、これらは炉内の木炭の間で生成された可能性が考えられる。また、鉄部の割合が比較的大きいものの中には、167 のように炉底塊が割分けられたときに生じた破片と思われるものもある。

164 は炉外へ流れ出したと思われる流動滓で、下面には玉状の銑鉄系の鉄部が滓部に包まれている



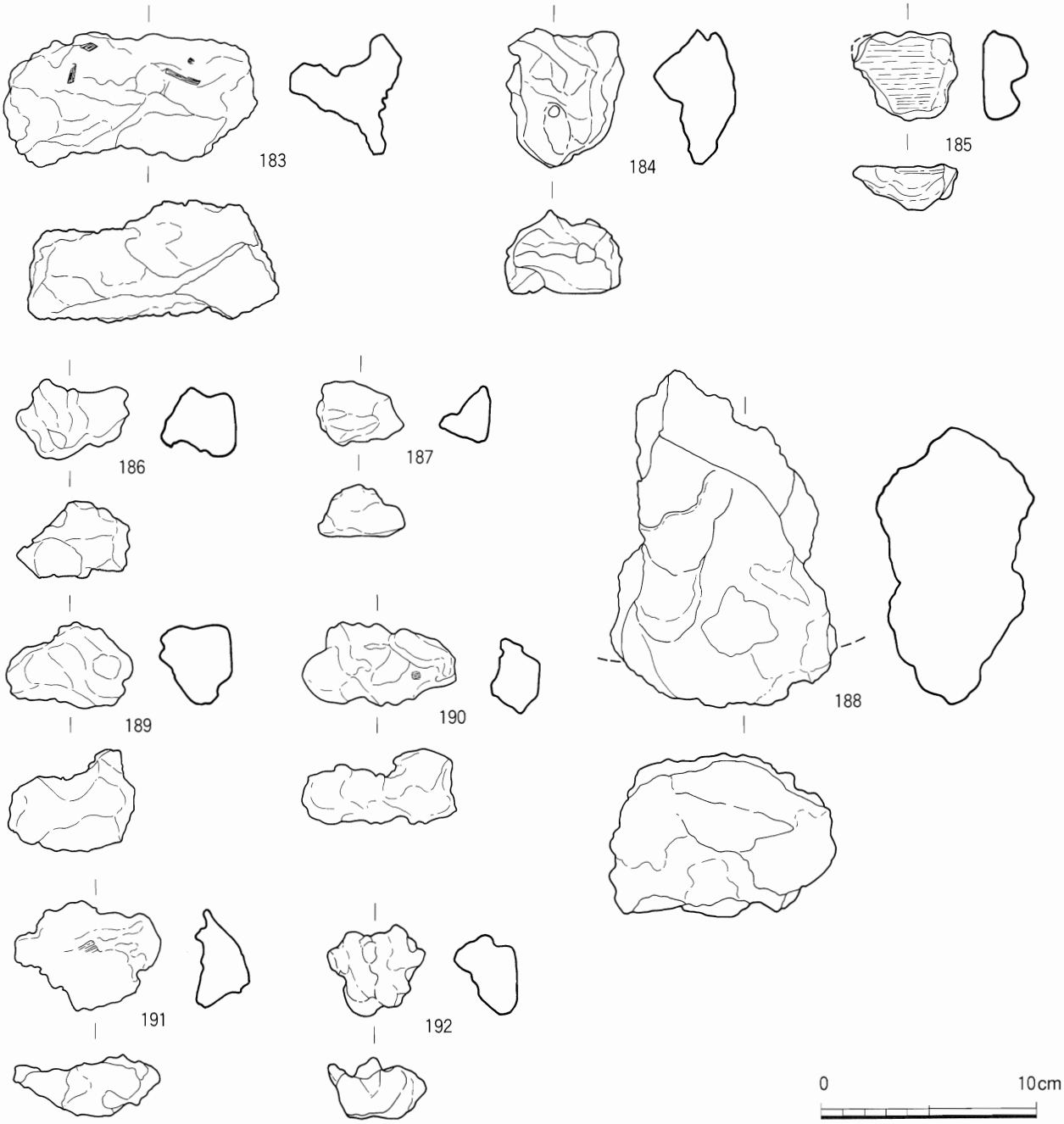
第 37 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（18）（S＝ 1/3）

様子が観察できる。銑鉄系の鉄塊の中には、滓と一緒に炉外へ流出したものもあることがこの資料から分かる。

なお、163・167 は金属学的な分析に用いている（TON－16・17）。

含鉄鉄滓（メタル度 L（●））　173～182 は、特殊金属探知器が L（●）の設定になっている場合でも反応した比較的大きな金属部分をもつ鉄滓である。外観や形状から炉内滓と思われるもの（174～182）と流動滓（173）と思われるものに分けられる。

174 は図手前側に炉壁土が付着しているが、この部分が本来炉内で上方になっていたと思われる。



第38図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（19）（S＝ 1/3）

178・179は木炭痕や木炭が多く表面に見られ、木炭に挟まれた状態で生成されたと思われる。

174は、前述の164と同様に下面に玉状の銑鉄系の鉄部が観察できるものであり、銑鉄が大きくまとまらない状態で滓に巻き込まれ、炉外へ流出したものと思われる。

なお、174・175を金属学的な分析に用いた（TON－14・15）。

含鉄鉄滓（メタル度M（◎））　183～187は、特殊金属探知器がM（◎）の設定になっている場合に反応する程度の金属部分をもつ鉄滓である。ここに挙げた資料はいずれもその外観や形状から炉内滓と思われるものである。183・185には木炭痕が顕著に認められる。184はほとんどが砂鉄焼結層で、一部が還元して鉄となっている。

なお、184を金属学的な分析に用いた（TON－12）。

含鉄鉄滓（メタル度H（○））　188～192は、特殊金属探知器がH（○）の設定になっている場合に

反応する程度の小さな金属部分をもつ鉄滓である。ここに挙げた資料はいずれもその外観や形状から炉内滓と思われるものである。

なお、188を金属学的な分析に用いた（TON－13）。

鉄塊系遺物（メタル度特L（☆））（第18・39～44図、図版 9 ・12・13）

本遺跡ではメタル度特L（☆）の鉄塊系遺物は134点出土しているが、全てのものを図化した。193～326がそれらに当たる。

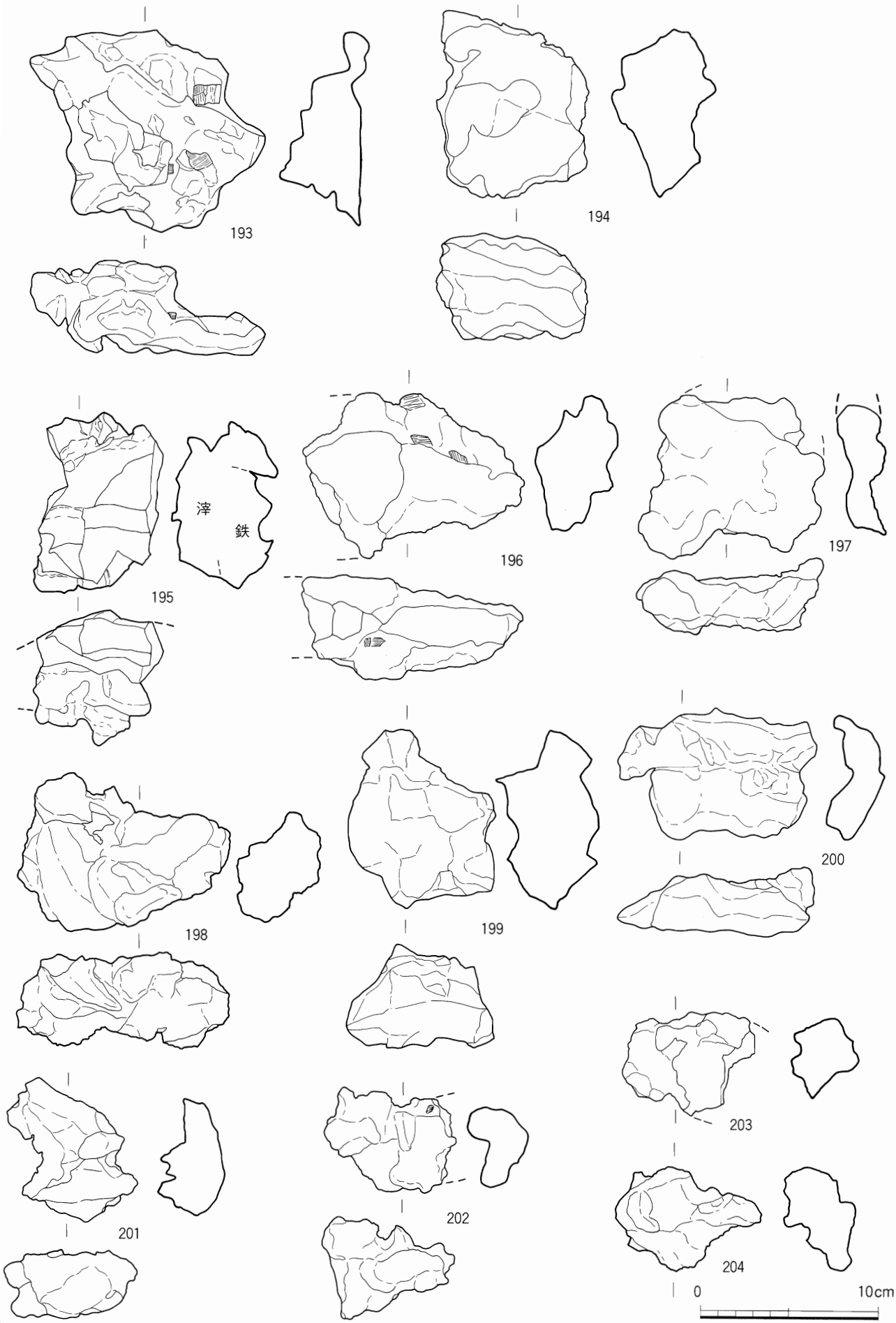
以下に各資料ついて述べるが、本文および観察表の内容はは調査者の観察に基づくものであり、金属学的な分析を経ていないことを断っておく。

本遺跡で見られる鉄塊系遺物には、（軟鉄系～）鋼系と思われる鉄塊と、銑鉄系と思われる鉄塊がそれぞれ一定量存在する。

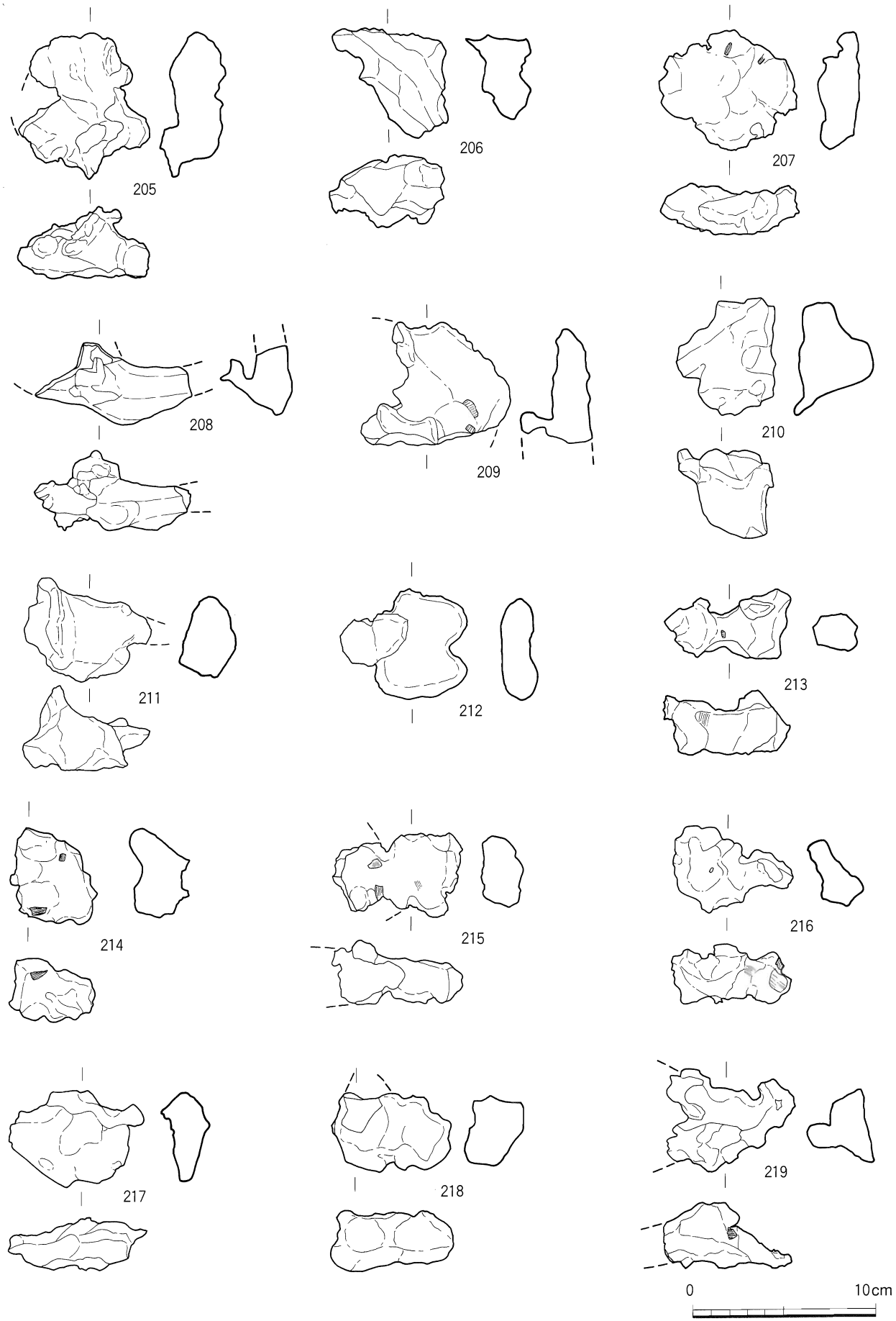
鋼系と思われる鉄塊は表面がイガイガした質感を持ったり、こぶ状の凹凸が目立つものが多く、X線写真を見ると気孔や隙間が不規則に見られる。また鉄部のまとまりが弱く、顆粒状や葡萄状の外観を示すものもある。194はイガイガとした質感を持ち、顆粒状もしくは葡萄状の鉄部が散在しており、鋼系に鉄塊になると思われる。炉底塊から割られたものであろう。196・199なども比較的大形の鋼系と思われる鉄塊で、194と同様炉底塊から割られたものと思われる。また、多少小ぶりであるが209もこれらに類似すると思われる。198などは外面の凹凸が大きく、木炭痕と思われる部分がひだ状に突き出ており、木炭に挟まれた状況で生成したと考えられる。同様の状況で生成したと思われるものはほかに、237・243・245・259・294などがあり、ひだ状に突出した部分を持ったり、厚みが薄く波状や翼状にひずんだ形をしている。200はいくつもの鉄が葡萄状に集まった外観をしており、砂鉄層が還元し部分的に炭素量が上がり始めているようである。210は鉄部に隙間が目立ち、まとまりはあまりよくないようである。

銑鉄系と思われる鉄塊は、軟鉄～鋼系と思われる鉄塊と比べて、肌がなめらかで丸みを持ったものが多い。ただし、ものによってはこぶ状の凹凸を持つものや、木炭痕が残るものなどもあり一様ではない。X線写真を見ると鉄部のまとまりはよく、丸い気孔が見られるのが特徴である。193は、表面に木炭痕や凹凸が目立つが、それ以外では比較的なめらかで下面は平坦な面を持っている。銑鉄系の鉄塊と推測されるが、流動化はあまり進んでいないようであり、炉外へは流出していなかったのかもしれない。197は上面は比較的なめらかで凹凸が少ないが、下面は破面と思われる。上面には炉壁土が、付着しており炉壁からはがれた可能性が考えられる。各面に木炭が付着している。流動化は進んでいないように見えるが、X線写真を見ると内部には丸い気孔が観察でき、銑鉄系の鉄塊であることが窺われる（図版12）。翼状にゆがんだ外観を持つ224や、いびつに曲がりくねった形をしている314も、X線写真を見ると内部に丸い気孔を持ち、流動化が進んでいない銑鉄系の鉄塊と思われる。これらも炉内で炉壁や木炭に挟まれた状況で生成したものと思われる。

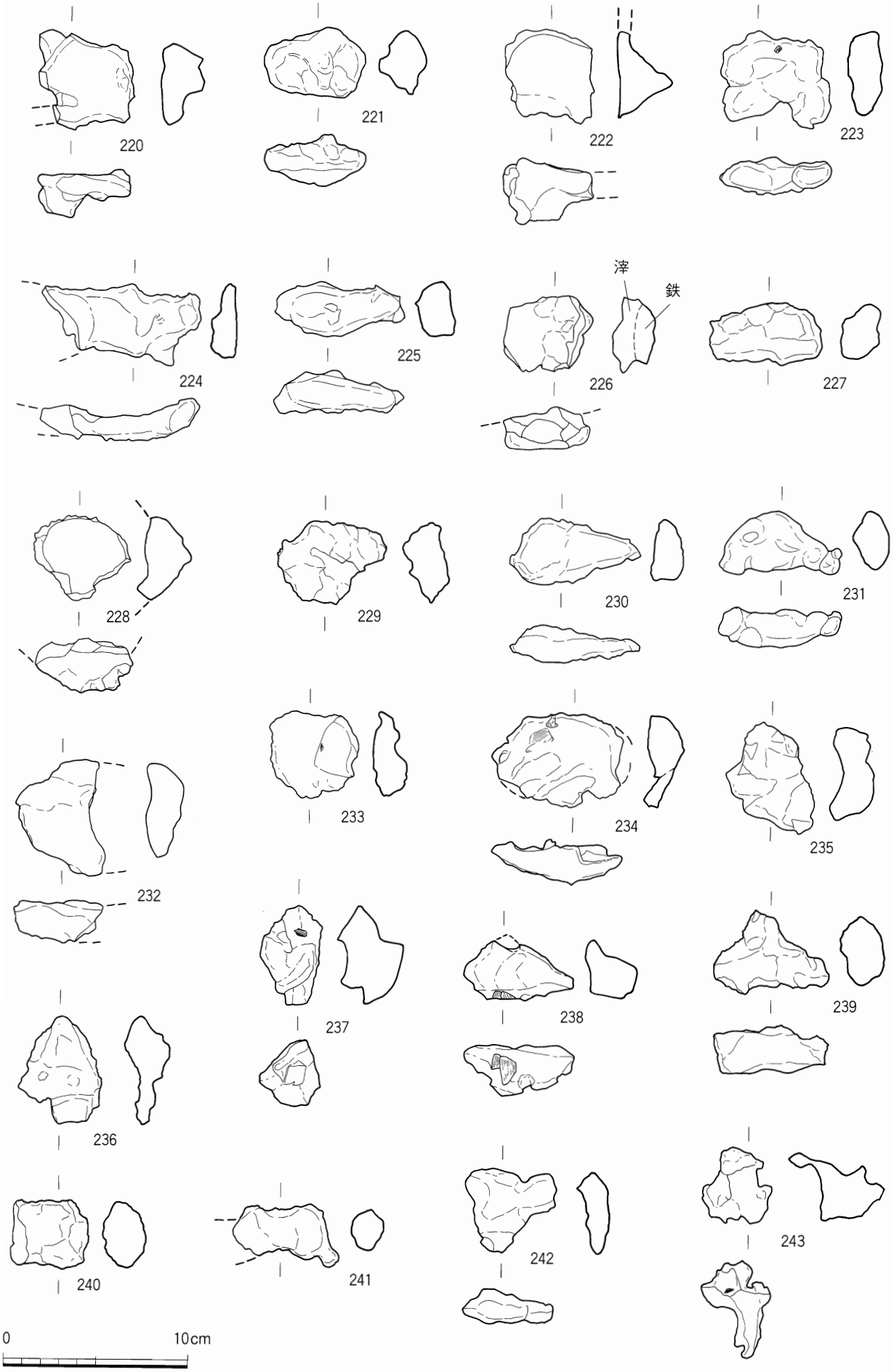
195は上部が流動状の滓部で、下部が流動化が進んだ丸みを持った鉄部になっている。鉄部は長さ6.7㎝、幅6.5㎝、厚さ 3㎝以上ある比較的大きいものであるが、滓の付着している状況からみて銑鉄系の鉄塊が流動滓とともに炉外へ排出された可能性が考えられる。このように流動化の進んだ銑鉄系と思われる鉄塊に流動滓が付着しているものは、212・226・272などがあり、これらも同じような状況で生じたものと思われる。含鉄鉄滓の中には164・173のように流動滓の中に玉状の銑鉄系と思われる鉄塊を含む資料もあり、鉄塊の大小の差はあるがこれらの類似資料といえよう。246・271



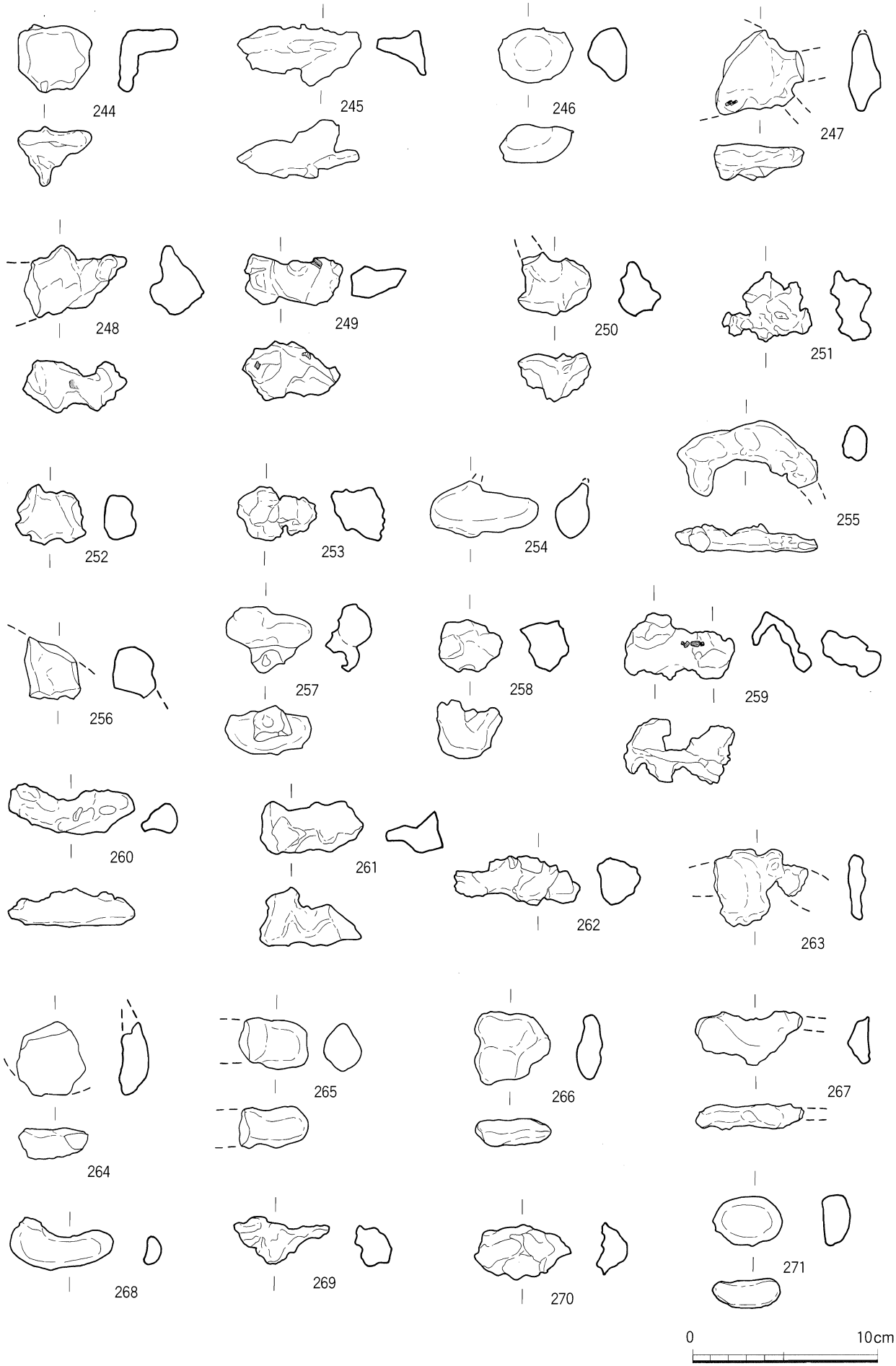
第 39 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（20）（S＝ 1/3）



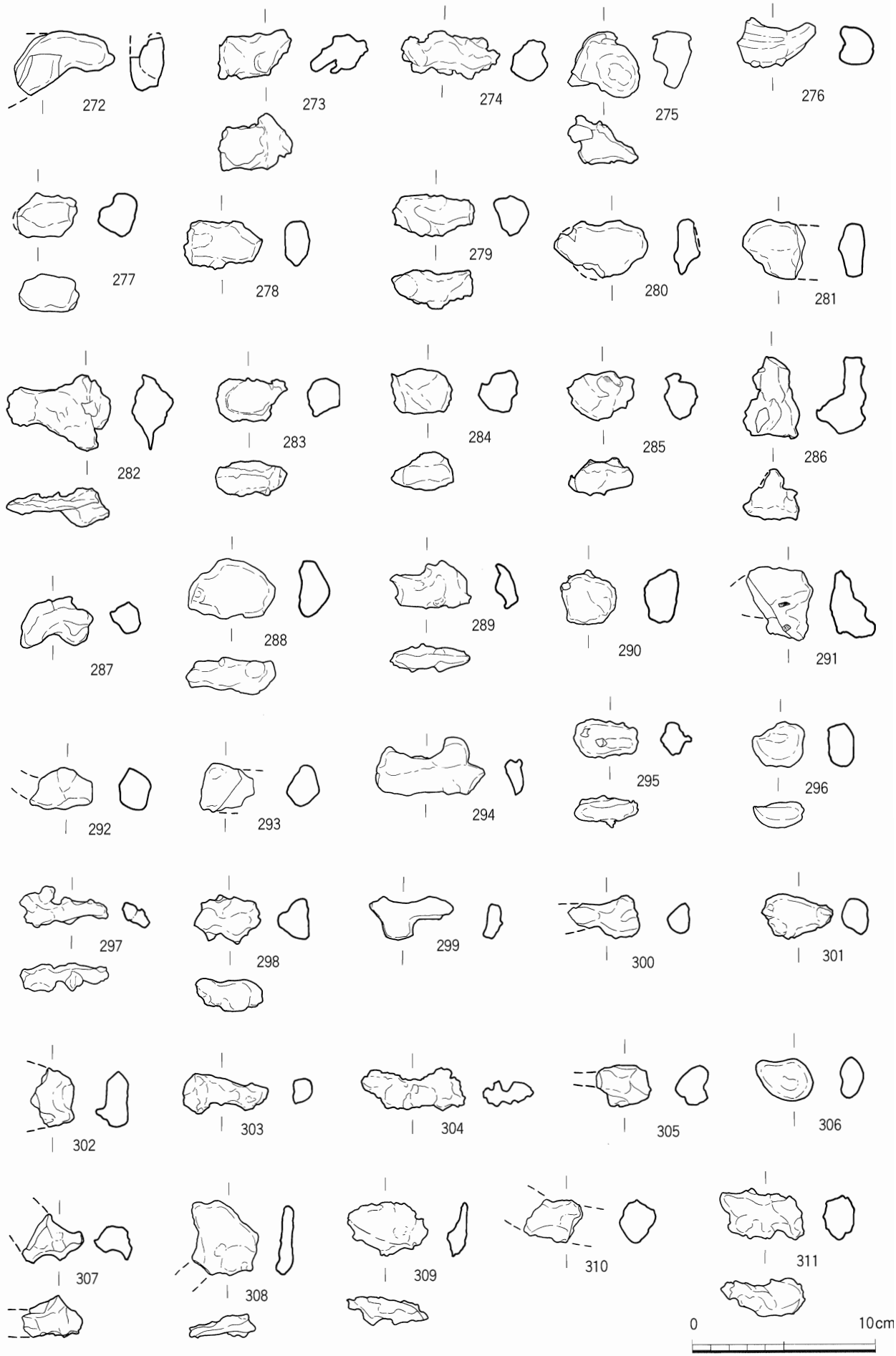
第 40 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（21）（S＝ 1/3）



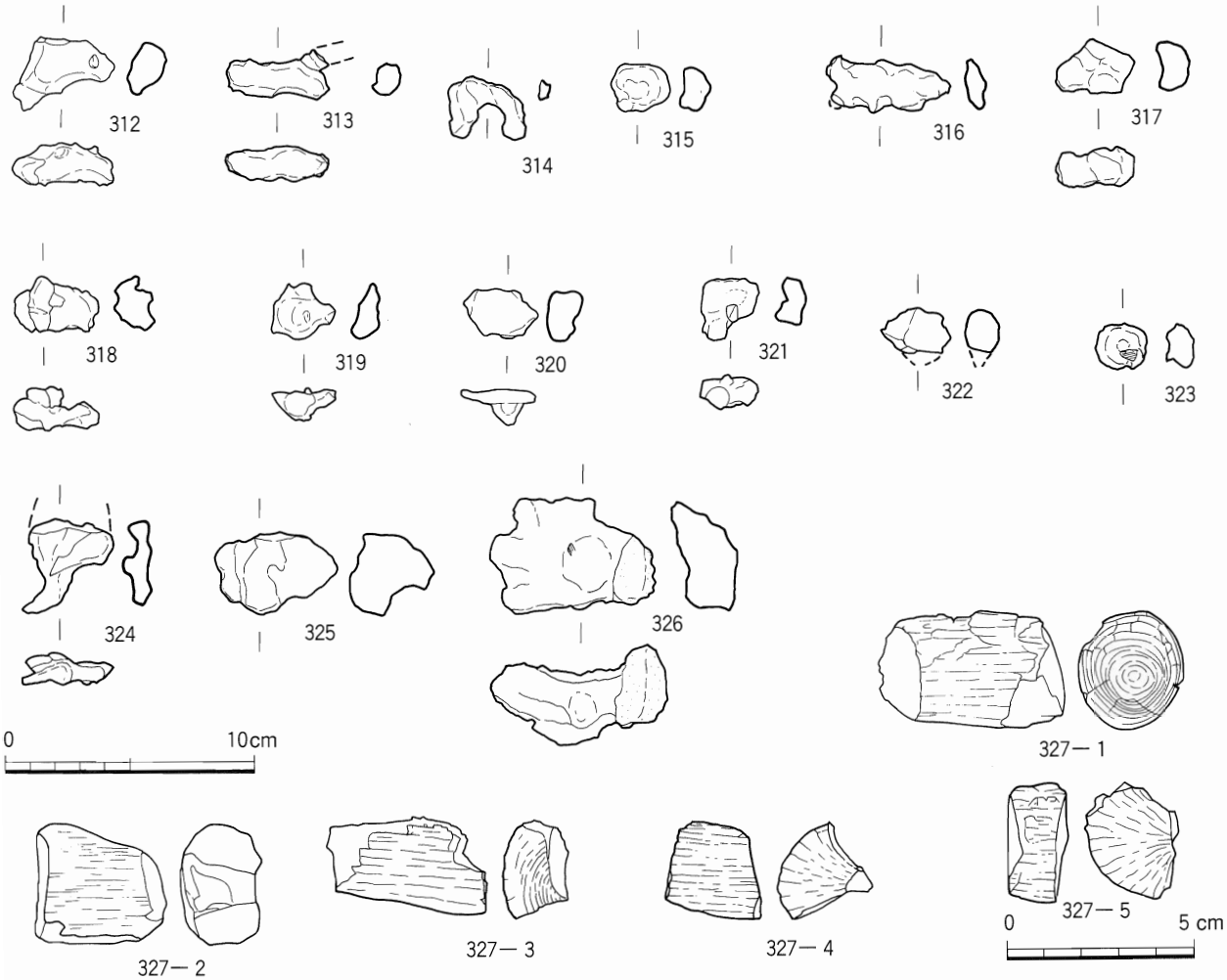
第 41 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（22）（S＝ 1/3）



第 42 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（23）（S＝ 1/3）



第 43 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（24）（S＝ 1/3）



第 44 図　殿淵山遺跡製鉄関連遺物実測図（25）（312～326　S＝ 1/3、327－ 1 ～ 5　S＝ 1/4）

・283・284・290・295・296・301・306・315・319・323 のように平面形が長楕円形もしくは不整形な玉状の銑鉄系と思われる小形の鉄塊が見られるが、これらは流動滓に巻き込まれて炉外に排出され、滓部が欠け落ちたため鉄部が露出した可能性がある。

230・231・254・255 などは流動化が進んだ銑鉄系と考えられる鉄塊が細長くのびるもので、炉外へ流出したものと想定される。X 線写真で見ると丸い気孔が観察でき、この点においても銑鉄系の特徴を持っている。本遺跡出土の流動状の鉄塊は流れが途切れたためか、長さが短く、端部が丸く収まっているものが目に付く。これらの中にも滓とともに炉外へ流出したものが含まれるのかもしれない。

鉄塊系遺物のうち、193～195・199・200・206・208・210・214・218・237～239・245・249・255・271 は分析資料（TON－18～34）である。

木炭（第 18・44 図）

330－ 1 ～ 5 は　排滓場のトレンチから滓類とともに回収された木炭である。樹種はいずれも広葉樹と思われる。1 ははっきりと年輪が見える環孔材、3 は散孔材で年輪を持つものであり、2・4・5 は散孔材で年輪をよみとることのできない散孔材で同一材もしくは類似材と思われる。少なくとも 3 種類以上の材が燃料に用いられたと考えられる。

なお、これらは分析に用いた（TON－35－ 1 ～ 5）。

第 4 表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（1）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
20		1	炉壁、上段　被熱弱	イ－18	9.1	8.1	4.1	235.90	2	なし	胎土に 2 mm 以下の砂粒など含み、木炭痕も見られる。	1
20	7	2	炉壁、上段　被熱弱	イ－18	6.9	6.1	3.8	98.88	2	なし	胎土は3mm以下の砂礫を含む粘土。中には2cm大の礫や1cm以下の木炭痕もまばらに見られ、中には別の炉壁片も入る。被熱弱い。	
20		3	炉壁、上段　被熱弱	イ－18	7.7	5.1	2.3	77.45	2	なし	胎土は0.1mm～6mm大の長石を含み、長さ1cm以下のスサの痕跡もまばらに見える。被熱は弱い。	
20	7	4	炉壁、中段　砂鉄焼結	イ－16	11.8	11.5	7.4	739.23	5	なし	上面、炉壁材接合痕。表面には砂鉄焼結塊が3mm くらいの厚さで固着している。胎土には砂礫多く含むが、5mm 前後の長石・石英礫のが目立つ。2cm 前後の礫もまばらに入り、木炭痕も少し見られる。	
20		5	炉壁、中段　砂鉄焼結	イ－19	7.9	8.9	4.7	280.05	5	なし	内面約1cm の厚さで砂鉄焼結。下面は炉壁材接合痕みられる。胎土には5mm 前後の礫多く含まれる。	
20		6	炉壁、中段	イ－18	11.0	8.6	6.9	511.38	3	なし	胎土中に3mm 前後の砂礫多く含む。	
20		7	炉壁、中段　砂鉄焼結	イ－16	13.9	10.5	11.3	1047.03	4	なし	内面、滓化。上面は炉壁材接合痕みられる。外面側は砂鉄焼結塊が付着している。胎土には石英・長石など5mm 前後の礫が多く含まれる。	
20		8	炉壁、中段　砂鉄焼結	イ－14	12.5	8.0	6.0	394.89	6	なし	内面の上部は厚さ2mm～5mm くらい砂鉄焼結。下部は若干滓化している。5mm 前後の礫が胎土中に多く含まれ、2cm 以上の礫もまばらに入る。	
20		9	炉壁、中段	ウ－15	10.0	8.2	7.5	553.92	3	なし	上面・及び右側面は炉壁材接合痕。内面は若干滓化がおきている。胎土中に5mm 前後の礫多く含む。	
20		10	炉壁、中段		14.5	10.9	8.5	1192.25	2	なし	内面のごく表面のみ紫紅色に滓化。上面、及び右側面に炉壁材接合痕残る。	
20		11	炉壁、中段	イ－17	10.2	9.7	5.6	505.36	4	なし	内面、うすく滓化。胎土中に5mm 前後の礫多含む。長さ3㎝、幅0.4cm の枝状の木炭痕もみられる。左側面炉壁材接合痕	
20		12	炉壁、中段	イ－18	12.4	8.6	14.3	1033.32	2	なし	内面滓化している。上面、及び左側面には炉壁材接合痕みられる。胎土中には5mm 以下の礫多く含む。	
20		13	炉壁、中段　短軸側	イ－20	21.9	11.0	8.8	1760.76	2	なし	内面滓化。上面及び左右の側面には炉壁材接合痕みられる。胎土には5mm 前後の礫もまばらに入る。上から見ると内面はゆるやかな弧状になっており、短軸側の炉壁の可能性がある。	
20		14	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	ウ－15	8.0	15.3	5.7	465.07	12	H（○）	内面に砂鉄焼結塊が厚く固着。下部では砂鉄の溶解がすすみ滓化している。胎土には5mm 前後の砂礫やや多く含む。	
21		15	炉壁、中段　滓化	イ－14	20.3	12.3	8.0	1514.29	4	なし	内面、滓化。上下面及び左右側面は炉壁材接合痕みられ、下面から見た場合、台形状になる。砂礫の混入も多い。	
21		16	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	イ－19	14.6	9.7	7.5	666.67	5	なし	内面上部・砂鉄焼結塊固着し、下部は強く滓化している。下面は炉壁材接合痕。胎土中に砂礫多く含み、鉄滓も混入している。	
21		17	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	エ－15	17.6	13.7	11.1	1769.05	5	なし	内面、滓化し、下部には砂鉄焼結部みられる。上・下面、及び右側面は炉壁材接合痕。右側面の接合面は弧状になっている。	
21	7	18	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	イ－15	16.1	13.3	11.3	1551.35	3	なし	内面、厚い部分で 8 mm くらい砂鉄焼結。上下面は炉壁材接合痕であるが、断面形をみると内面が広い台形になっている。胎土中には砂礫をやや多く含み、3㎝をこえる大きな礫もみられる。	
21		19	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	イ－21	13.2	15.3	8.8	1426.75	2	なし	内面、厚さ約5mm 砂鉄焼結部、滓化層見られる。砂鉄焼結部はかなり砂鉄の溶解がすすみ粒の状態は殆ど分からなくなっている。下面、炉壁材接合痕。胎土、5mm 以下の砂礫やや多く入り、スサの痕跡も少しみられる。	
21		20	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	イ－19	15.2	12.7	7.9	858.68	4	なし	内面・上部に厚さ5mm 程度の砂鉄焼結部、下部は滓化している。胎土、5mm 前後の礫やや多く含み、滓片なども入る。	
21		21	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	イ－18	13.1	12.6	9.0	1294.06	5	なし	内面、滓化。下面、炉壁材接合痕だが、ここから内面の下部にかけて砂鉄焼結。φ5 mm 弱の礫多く含む。	
21		22	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	イ－18	14.9	11.2	7.6	955.16	7	なし	炉壁下面、右側面、上面は炉壁構築の際の粘土単位の痕跡である。下面は炉の内側に向って傾斜している。上面には砂鉄が焼結している。	
21		23	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	イ－19	9.8	17.4	5.5	666.09	4	なし	上部と右側面に炉壁材接合痕。炉壁表面下部と砂鉄焼結塊。砂鉄焼結塊は滓化がすすみ砂鉄本来の粒の形状は殆どとどめていない。5 mm 以下の砂礫やや多く含む。	
21		24	炉壁、中段　滓化	エ－15	15.0	17.2	8.5	1516.78	2	なし	下面に平坦な炉壁材接合痕残る。また、図面の右側に弧状の面が見られ、左側の直線的な面も接合痕の可能性がある。	
22		25	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	ア－6	20.2	17.4	10.3	2200.00	2	なし	各側面に炉壁材の接合痕が残っている。図右上には砂鉄焼結塊が認められる。	

第 5 表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（2）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
22		26	炉壁、中段　滓化　砂鉄焼結	エ－15	10.1	9.5	7.1	408.77	8		下面、炉壁接合痕。炉壁表面下部には砂鉄焼結塊付着。胎土には 3 mm 以下の砂礫やや多く入る。	
22		27	炉壁、下段　通風孔上	エ－15	14.7	18.2	8.3	1630.33	5	なし	上面と断面に炉壁材の接合痕がみとめられる。上面の接合痕は少し凹凸があるがほぼ水平で断面中の接合痕は内面に向ってかなり傾斜している。右側面にもあきらかな接合痕があり、左側面も滓化の様子から接合痕の可能性ある。	
22		28	炉壁、下段　通風孔上	エ－15	11.4	15.3	4.9	549.42	3	なし	断面で見ると上面から 7.5 cm のところで炉壁材接合痕がみられる。水平に積み上げられているようである。	
22		29	炉壁、下段　通風孔上	イ－20	12.3	16.2	6.2	1117.47	3	なし	上から 3.5～ 4 cm のところで水平な炉壁材接合痕認められる。	
22	7	30	炉壁、下段　通風孔上	イ－16	13.2	17.9	10.8	1559.89	6	なし	断面を見るとやや内側に傾斜した炉壁材接合痕あり。右側面、下面にも炉壁材接合痕残る。 5 ～10 mm の礫まばら、 5 mm 未満の礫かなり多く含む。	
22		31	炉壁、下段　通風孔上	エ－15	18.6	10.9	6.8	1037.55	2	なし	上面と左右側面には炉壁材接合痕残る。	
22		32	炉壁、下段　通風孔上	イ－18	18.9	13.2	7.8	1221.46	5	なし	上面に炉壁材接合痕。また、左右側面も接合面の可能性がある。胎土中には 5 mm 以下の砂礫を多く含む。	
22		33	炉壁、下段　通風孔上	イ－17	19.4	16.4	9.3	2680.70	6	なし	各面に炉壁材接合痕残る。上面の接合面は内面に向って傾斜し下面の接合面は外部に向って傾斜している。胎土中に 5 mm 以下の砂礫多く含む。	
22		34	炉壁、下段　通風孔上	イ－14	10.1	8.8	9.8	748.80	5	なし	表面の上部はやや砂鉄焼結気味の滓がはり付き、下部は黒色ガラス質に滓化。上下面及び、左側面は炉壁接合痕である。	
23		35	炉壁、下段　通風孔上	イ－17	16.6	13.1	7.5	1178.01	4	なし	内面強く滓化している。上面、及び右側面は炉壁接合痕。接合面は平坦。胎土中に 5 mm 前後の長石・石英礫多く含む。	
23		36	炉壁、下段　通風孔上	イ－22	16.0	9.7	9.2	999.35	4	なし	内面は滓化し、下部左には砂鉄焼結より若干溶融進んだ滓が付着。上下面及び左右側面は炉壁材接合痕。胎土中に 5 mm 前後の礫多く含む。 2 cm 以上の大粒の礫も入る。	
23		37	炉壁、下段　通風孔上	イ－17	12.0	18.0	7.9	1205.09	4	なし	内面、ガラス質に滓化。上面、及び左右側面に炉壁材接合痕みられる。上下方向が正しいとすれば縦長の炉壁材ということになる。胎土 3 mm 前後の礫多く含み、 2 cm 以上の礫もまばらに混入する。	
23		38	炉壁、下段　通風孔上	イ－18	15.6	13.3	6.9	1312.42	4	なし	内面、滓化。上面、及び左右側面は炉壁材接合痕である。 3 mm 前後の長石・石英粒多く含む。 5 mm～ 1 cm 大の礫もやや多く含む。	
23		39	炉壁、下段　通風孔上	オ－15	12.9	9.5	6.8	695.45	2	なし	内面滓化。内面の右上には砂鉄焼結部みられる。断面上部には炉壁材接合痕みられる。 5 mm 以下の砂礫やや多く含む。	
23		40	炉壁、下段　通風孔上	イ－18	9.5	8.3	6.7	368.05	6	なし	内面、厚く滓化。内面右上、砂鉄焼結。胎土 2 mm 前後の砂粒やや多い。	
23		41	炉壁、下段　通風孔上	エ－15	24.1	23.0	10.6	3600.00	7	なし	被熱状況から炉壁下段の破片と考えられる。三段の炉壁材にわかれる。色調の違いは異なる胎土を用いているからかもしれない。上部には砂鉄焼結塊固着。	
23		42	炉壁、下段　通風孔上	エ－15	24.6	13.2	9.0	1870.64	3	なし	内面、滓化。下面からみると緩やかな弧状で炉壁短軸付近の可能性あり。下面・右側面に炉壁材接合痕が残る。 3 mm 前後の砂粒多く含む。	
23		43	炉壁、下段　通風孔上	エ－15	12.2	11.4	14.1	1386.23	1	なし	炉壁短軸側の破片。上面からみるとくの字状に折れ曲がっており、その間に、厚くガラス質の滓が固着している。左右側面は炉壁材の接合痕。 ϕ 3 mm 位の砂礫を多く含む。	
23		44	炉壁、下段　通風孔・目印付	イ－17	20.7	17.0	13.1	3300.00	3	なし	右側に通風孔目印、右側面下端に通風孔の一部が残る。通風孔の目印は炉壁表面から外傾するようにあけられており通風孔もこれと平行する角度になっている。	
23		45	炉壁、下段　通風孔・目印付	イ－18	6.3	8.1	5.1	145.34	3	なし	上面に通風孔目印。炉壁内側から斜め上方にあけられている。	
24	8	46	炉壁、下段　通風孔・目印付	イ－14	9.1	7.3	5.5	273.62	3	なし	下面に通風孔目印はさし込まれている。孔の径 1.4 cm。	
24		47	炉壁、下段　通風孔・目印付	エ－15	13.0	15.7	9.1	1301.82	3	なし	下面に通風孔目印が見られる。壁面に対し斜め上方にあけられている。上面は接合部のはがれ。また、破片中央にも接合痕がみられる。	
24		48	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	エ－15	12.4	10.1	7.6	758.60	3	なし	上面に通風孔がかろうじて残る。孔の下部は抉れるようにとけている。図では孔が内側にむかって上がっていくようになっているが、実際の炉壁の傾きは図よりも内傾していたかもしれない。	
24		49	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	ア－2	6.0	6.3	3.5	98.09	3	なし	左側面に通風孔見られる。残存部分では隅円方形のようにみえる。	
24		50	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	イ－18	13.9	10.8	8.5	708.06	4	なし	通風孔が右側面に見られる。孔径 3.8 cm。通風孔部の壁面は高く突き出しており、孔下部は抉れたように溶けている。	

第 6 表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（3）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
24		51	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	イ－18	14.1	10.0	6.8	619.60	4	なし	左側面に通風孔見られる。通風孔部はやや壁面盛り上り、下部は抉れたようになる。通風孔は隅が少し角ばったような長楕円形。	
24		52	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	エ－15	8.5	9.3	6.0	337.04	4	なし	右上側部に通風孔。上辺部は炉壁材接合痕と考えられるが、この面には段が見られ、水平になっていない。	
24		53	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	エ－15	14.4	16.3	6.5	863.29	4	なし	通風孔はやや縦長の楕円形か。	
24		54	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	イ－21	11.5	10.3	6.3	568.23	4	なし	右側面に通風孔。孔は長径 3.8 cm 以上の長楕円形と思われる。上面、右側面、炉壁材接合痕残る。	
24		55	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	エ－15	11.4	13.1	9.1	835.47	3	なし	左側面に通風孔。孔径は 3.5 cm 以上。通風孔のまわりは高くとびだしている。	
24		56	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	イ－20	11.9	11.1	10.7	818.65	4	なし	下面に通風孔あり。炉壁表面に木炭痕。	
24		57	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	イ－18	19.0	15.4	9.9	1833.32	3	なし	通風孔は短径 2.2 cm の縦長の楕円形。孔下部は抉れるように溶けている。	
24		58	炉壁、下段　通風孔付（1 孔）	イ－18	11.8	13.3	8.8	842.79	1	なし	通風孔が左側面に見られる。一見大きな径の孔のように思えるが、炉壁表面に対して斜めにあけられているためと思われる。上面は炉壁接合痕と思われるが、砂鉄焼結塊が固着している。	
24		59	炉壁、下段　短軸側	エ－15	22.1	10.4	11.4	2200.00	2	なし	製錬炉のコーナー部、下部の炉壁片。炉壁内面は弧状になっている。表面は炉壁が溶融して滓化した部分が厚い。下面、左側面は炉壁材接合痕と思われる。	
25		60	炉壁、下段　短軸側	イ－16	11.3	8.7	8.3	742.73	4	なし	上からみると右側が屈曲する。炉壁コーナー部か。通風孔目印と思われる孔が炉壁表面に平行に近い角度で差し込まれている。上面及び左側面は炉壁材接合痕で、上面は凹凸がある。	
25	8	61	炉壁、下段　短軸側	イ－20	18.3	11.5	8.8	1731.86	2	なし	炉壁コーナー部（短軸側）の破片で、中央付近で大きく屈曲する。内面は滓化激しく、下部が抉れるように溶融している。	
25		62	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－16	13.1	9.8	10.0	770.28	3	なし	左右の側面に通風孔の一部残る。通風孔の下部は抉れるように溶融している。孔は縦長の楕円形のようである。	
25		63	炉壁、下段　通風孔付（3 孔）	イ－19	13.4	11.7	8.5	709.82	3	なし	上面の左右に通風孔見られる。下半部の抉れるように溶融している。通風孔部の間には砂鉄焼結部が見られる。	
25		64	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－14	10.6	12.5	5.8	487.47	3	なし	左、右両側面に通風孔が見られる。通風孔部は壁面から飛び出しており、下部は大きく抉れる。通風孔は小判形のようである。	
25		65	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－20	15.6	16.1	8.2	1235.07	4	なし	両側面に通風孔残る。左の孔長径は 3.5 cm くらいか。そうとすれば、通風孔間隔は 12 cm となる。通風孔のまわりが高まり、孔下部は抉れるように溶けている。	
25		66	炉壁，下段　通風孔付（2 孔）	イ－15	14.1	13.1	8.6	1238.76	2	なし	左右側面下部に通風孔が見られる。孔径は 3.5 cm 以上で、通風孔間隔は 12 cm 以上になりそうである。孔の下部は抉れるように溶けている。	
25		67	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	エ－15	14.7	14.5	7.2	1145.86	4	なし	両側面に通風孔残る。通風孔間隔は 14 cm 程度。	2
25		68	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－20	11.5	12.9	10.5	1044.47	3	なし	通風孔の径は長径 4.4 cm 以上。通風孔間隔は約 12 cm になる。孔はやや縦長の楕円形になりそうである	
25	8	69	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－17	14.1	14.5	9.6	1160.02	4	なし	両側面に通風孔残る。下部は抉れるように溶けている。	
25		70	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－16	14.0	14.6	9.3	1160.76	2	なし	左右側面に通風孔。通風孔のまわりは飛び出したように高くなり、下部は溶融し、抉れている。通風孔はやや縦長の楕円形になりそう。	
26		71	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－14	13.2	15.8	11.0	1298.24	5	なし	両側面に通風孔みられる。孔には薄く滓がつまりかかっている。下部は抉れたようになっている。	
26		72	炉壁、下段　通風孔付（2 孔）	イ－16	13.2	19.4	13.7	2000.00	7	なし	通風孔の径は推定 4.5～5 cm。推定通風孔間隔は 14～15 cm。図右側の通風孔には滓が被っている。	
26		73	炉壁、下段　短軸側	イ－14	21.4	15.0	11.5	2300.00	2	なし	右側の破面に通風孔が 1 つ見られる。上から見ると中程で折れ曲がっている様に見え、炉壁のコーナー部分の破片と考えられる。	
26		74	炉壁、下段　短軸側	エ－15	17.6	19.6	12.5	3000.00	2	なし	製錬炉短軸側の炉壁片である。内部が激しく溶融しており、炉壁が内面の滓部を巻き込むような形で折れ曲っている。	
26	8	75	炉壁、最下段	イ－15	20.2	17.8	9.9	2400.00	3	なし	溶融により断面は弧状に変形している。下面は接地面。	
26		76	炉壁、最下段	イ－18	22.5	17.4	9.0	2500.00	2	なし	炉壁内面は強く被熱、滓化しており、炉壁の最下段と考えられる。表面には木炭痕見られる。下面は炉壁の接地面。炉壁の溶融が進み滓化部分は厚い。	

第 7 表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（4）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
26	9	77	炉壁、最下段	エ－15	22.5	16.9	11.7	3500.00	2	なし	表面は滓化著しい。裏面には流出孔が左右に見られるがいずれも滓が目づまりしている。下面は炉壁の接地面。左側面は炉壁材接合痕。	
27		78	炉壁、最下段	エ－15	19.6	15.2	10.4	2800.00	1	なし	表面には滓が厚く固着している。裏面には流出孔が見られ、流動状の滓が詰まっている。下面は接地面で、右側面は炉壁材接合痕。	
27		79	炉壁、最下段	イ－20	20.0	15.3	7.7	1938.53	2	なし	左側面下半に推定で直径 9 cm 以上の流出孔がある。上面及び左・右側面は炉壁材接合痕と思われる。下面は接地面で鉄滓がはり付いている。	
27	9	80	炉壁、最下段	ア－10	22.7	13.1	12.5	2500.00	1	なし	上面左に通風孔もしくは流出孔みられる。孔は通風孔と考えるには孔径が大きく低い位置であることから、流出孔の可能性高い。左面は炉壁材接合痕と思われる。下面は接地面である。	
27		81	炉壁、最下段	イ－20	19.6	17.0	13.1	2800.00	3	なし	上面右肩部には通風孔もしくは流出孔が見られる。炉壁表面は強い被熱で厚く滓化している。下面は接地面。	
27		82	炉壁、最下段	エ－15	19.5	13.2	9.9	1761.90	3	なし	下面は炉壁接地面。上面右側には通風孔もしくは流出孔が見られる。右側面は炉壁材接合痕。炉壁下半部が膨らむように強く滓化している。	
27		83	炉壁、最下段	イ－19	27.4	20.2	12.3	4800.00	3	なし	上面には通風孔がみられる。下面は平坦な接地面であるが、熱のため変形してしまい、内側に向って上がるような形になっている。	
28		84	炉壁、最下段	イ－17	12.3	18.8	10.2	1428.19	2	なし	右側面に流出孔の一部が残る。孔の中には鉄滓が詰まり、孔の径はっきり分からないが少なくとも、7 cm 以上あるように思える。下面は接地面。	
28		85	炉壁、下段　短軸側	イ－19	18.7	10.6	10.4	1714.77	2	なし	上から見るとやや弧状になっておりコーナー部分の破片と思われる。炉壁下部が大きく抉れるように溶け、黒色ガラス質に滓化。表面には木炭痕見える。下面は接地面。	
28		86	炉壁、下段　短軸側	エ－15	25.3	18.8	18.7	4800.00	3	なし	下面から見ると弧状になっており、製錬炉の短軸側の炉壁片である。内面は強く滓化している。上面は平坦な面になっており、炉壁材接合痕と思われる。下面は接地面。	
28		87	炉壁、下段　短軸側	エ－15	21.8	12.0	13.0	2800.00	2	なし	炉壁最下部の破片で、断面丸みを持った滓が固着している。滓は炉壁が溶融してできたガラス質の滓が主体である。下面は接地面。壁面は溶融して大きく変化している。	
29		88	炉壁、炉底付近　炉底塊付	表採	13.3	11.0	6.0	991.12	4	なし	炉壁土が一部付着する炉底塊である。全体に 2 mm 前後の気孔が多く入り下半部には 5 mm 前後の気孔も目立つ。下面は樋状になっている。炉壁土は赤褐色に被熱し、2 mm 前後の砂礫多く見られる	
29		89	炉壁、炉底付近　炉底塊付	エ－15	15.1	13.9	7.7	1521.26	4	なし	下面に炉壁付着した炉底塊。イガイガした質感をもつ。胎土中には 5 mm 以下の砂礫多く含む。	
29		90	炉壁、炉底付近　炉底塊付	エ－15	9.7	11.2	6.7	538.98	5	H（○）	断面樋状の炉底塊。イガイガした質感もつ。下面に炉壁土が付着し、炉壁土が溶融してできたガラス質の滓が主体であるが、上面の一部に含鉄部あり。炉壁土は 4 mm 以下の砂礫多く含む。	
29		91	炉壁、炉底付近　炉底塊付	イ－16	7.7	7.3	5.2	227.05	2	なし	下面に炉壁土が付着した炉底塊。7 mm 以下の気孔多く見られ、上面はイガイガしている。炉壁には 3 mm 以下の砂礫多く入る。	
29	9	92	炉壁、炉底付近　炉底塊付	イ－21	14.2	17.6	7.6	1868.20	12	△	下面に炉壁貼り付いた炉底塊。イガイガした質感もつ。図手前側の右隅には断面方形の工具痕みられる。炉壁土には 1 ～ 7 mmn 砂礫がやや多く入る。	
30		93	砂鉄焼結塊	イ－20	5.8	2.5	1.4	18.57	5	△	約 0.2 mm 大の砂鉄粒子が焼結、裏面は炉壁からの剥離面。	
30		94	砂鉄焼結塊	イ－20	5.2	6.0	2.0	52.35	5	△	0.1～0.2 mm の砂鉄粒子が焼結。裏面は炉壁面からの剥離面。	
30	10	95	砂鉄焼結塊	イ－18	8.9	8.3	2.4	185.70	7	なし	0.1～0.2 mm の砂鉄粒子が焼結。裏面は炉壁からの剥離面。	4
30		96	流動滓（単位流動滓）	イ－25	7.2	3.9	1.6	35.45	2	なし	2 本の流動単位重なる。1 本は枝分かれしている。緻密な滓。	
30		97	流動滓（単位流動滓）	イ－24	6.1	2.4	0.9	9.90	1	なし	1 本の流動単位からなる。緻密な滓。	
30		98	流動滓（単位流動滓）	イ－24	4.6	2.6	1.2	17.40	1	なし	2 本の流動単位重なる。緻密。	
30		99	流動滓（単位流動滓）	イ－20	7.1	3.6	1.8	36.70	1	なし	1 本の単位が 3 つに枝わかれ緻密質。	
30		100	流動滓（単位流動滓）	イ－20	3.6	2.0	1.4	16.38	1	なし	1 本の流動単位からなる。上面ひだ状に流れの跡が見える。緻密な滓。	
30		101	流動滓（単位流動滓）	イ－20	7.6	3.0	1.5	51.92	1	なし	図左側が太く、2 本の流動単位が重なっていたかもしれない。緻密な滓。	
30		102	流動滓（単位流動滓）	イ－19	7.6	2.6	1.4	42.81	2	なし	2 本の流動単位が重なったものか。緻密な滓。	

第 8 表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（5）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
30		103	流動滓（単位流動滓）	イ－20	6.0	4.0	1.8	44.10	1	なし	1 本の流動単位。緻密。	
30		104	流動滓（単位流動滓）	イ－13	7.0	2.2	1.0	18.06	1	なし	2 本の流動単位が重なったもの。緻密。	
30	10	105	流動滓（単位流動滓）	イ－13	7.9	3.0	1.5	30.60	1	なし	2～3 本の単位が接して流れている。緻密。	5
30		106	流動滓（単位流動滓）	エ－15	7.4	3.0	1.3	22.01	2	なし	現状では 1 本の流動単位しかみられないが、図手前にもう 1 本別の単位があり、はがれてしまっている。緻密な滓。	
30		107	流動滓（単位流動滓）	エ－15	6.3	3.3	2.1	50.51	1	なし	1 本の流動単位からなる。右端で流れが止まる。緻密な滓。	
30		108	流動滓（工具痕付）	イ－21	6.9	6.4	2.6	50.55	2	なし	ガス質の流動滓。上面に直径約 2 cm の丸棒状の工具痕あり。	
30		109	流動滓（工具痕付）	イ－20	7.5	9.4	5.7	220.00	3	なし	ガス質の流動滓。上面に直径約 2 cm の丸棒状の工具痕が 2 本。	
30		110	工具付着滓	ア－7	6.7	4.1	2.6	53.83	3	なし	ガス質の滓。直径約 2 cm の丸棒状の工具痕。	
30		111	工具付着滓	イ－18	5.6	4.0	2.8	48.04	4	なし	2 mm 以下の気孔多く入るガス質の滓。直径 1.5 cm の丸棒状の工具痕あり。	
30		112	工具付着滓	カ－15	3.7	2.7	1.8	18.58	3	なし	ガス質の滓。直径約 2 cm の丸棒状の工具痕。	
30		113	工具付着滓	イ－16	3.8	3.4	2.1	16.26	1	なし	φ 3 mm 以下の気孔多く入るガス質の滓、直径 2 cm くらいの丸棒状の工具痕あり。下面に 1 cm 大の木炭痕みえる。	
30		114	工具付着滓	ウ－15	4.5	2.8	1.8	18.22	2	なし	4 mm 以下の気孔入るガス質の滓。丸棒状の工具痕あり。	
30		115	工具付着滓	イ－23	4.8	2.8	2.3	23.91	2	なし	径 1.7 cm の丸棒状の工具痕。	6
30		116	工具付着滓	ア－2	3.1	2.7	1.9	11.14	2	なし	3 mm 以下の気孔がまばらに入る。径 2 cm 弱の丸棒状の工具痕あり。	
30		117	工具付着滓	イ－19	3.3	2.45	1.2	8.83	1	なし	φ 2 mm 以下の気孔まばらに入る滓。直径 2 cm 弱の丸棒状の工具痕。	
30		118	工具付着滓	イ－23	3.6	2.7	1.8	10.07	1	なし	φ 1 mm 前後の気孔をまばらに含む。直径 2 cm 弱の丸棒状の工具痕あり。	
30	10	119	工具付着滓	エ－15	4.9	2.7	1.6	12.62	2	なし	φ 1 mm くらいの気孔がまばらに入る滓。直径 1.5 cm くらいの丸棒状の工具痕あり。	
30	10	120	工具付着滓	イ－21	4.2	2.1	1.4	9.68	1	なし	φ 1 mm 以下の気孔やや多く入る滓。先端の太さ 1.2 cm の丸棒状の工具痕みられる。先端は少し丸みを持つ。	
30		121	工具付着滓	イ－18	3.0	1.6	0.8	3.31	1	なし	1 mm 以下の気孔をわずかに含む緻密な滓。丸棒状の工具痕あり。	
31	10	122	炉底塊～流出孔滓	イ－19	10.7	12.9	9.5	989.11	6	なし	上面左側に流出孔の炉壁残っている。流出孔は幅 12 cm、高さ 8 cm くらいの横長の楕円形と推測される。右端部で滓の流れがとぎれる。	
31		123	炉底塊～流出孔滓	イ－15	13.0	16.7	13.6	2300.00	2	なし	左半分に流出孔の炉壁付着。左右で滓の質が異なる。	7
31		124	流出孔滓（ガス質）	イ－16	5.7	3.7	4.4	73.50	2	なし	断面はやや歪な楕円形。図面右側はとぎれた形になっている。	
31		125	流出孔滓（ガス質）	不明	10.1	7.9	5.3	539.90	2	なし	右側で滓の流れが途切れた形になる。	8
31	10	126	流出孔滓（ガス質）	イ－18	11.1	8.0	5.0	506.32	6	なし	両側部には橙褐色の通風孔部の炉壁土が付着。下面は樋状になっている。	
31		127	流出孔滓（ガス質）	イ－18	8.0	8.2	4.9	348.88	3	なし	下面、樋状になっている。上半は径 3 mm くらいの気孔が多くみられるが下面はやや緻密質である。	
31		128	流出孔滓（ガス質）	イ－19	7.2	10.3	5.8	339.00	2	なし	図面の手前側は樋状、奥側はうすく板状になっている。	
31		129	流出孔滓（ガス質）	イ－15	8.9	7.5	4.8	198.94	2	なし	下面は樋状になっている。	
31		130	流出孔滓（ガス質）	イ－19	10.0	7.8	5.0	334.62	4	なし	下面、樋状になっている。上部は流動方向に対してやや左右に開き気味。	
31		131	流出孔滓（ガス質）	イ－17	10.6	6.8	6.9	350.67	3	なし	下面は樋状になっている。上半部気孔多く、下部にいくとやや緻密質になる。	
31		132	流出孔滓（ガス質）	イ－22	13.8	10.7	6.9	725.10	2	なし	上面は全面破面。下面は樋状になっており両側部の上半は開がっている。	
31		133	流出孔滓（ガス質）	イ－17	8.8	11.1	7.0	580.60	4	なし	下面樋状になっている。下半の幅 5～6 cm の単位と上半の幅 11 cm の単位が重なっているように思われる。やや茶褐色おびる。	

第 9 表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（6）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
32		134	流出溝滓（ガス質）	イ－19	10.4	8.2	5.7	393.53	2	なし	下面は樋状になっている。上半部は気孔多くみられるが下半はやや緻密。	
32		135	流出溝滓（ガス質）	イ－20	8.6	8.5	5.2	428.01	2	なし	下面、樋状になっている。上半は径 5 mm 前後の気孔多く見られるが下半はやや緻密になる。	
32		136	流出溝滓（ガス質）	イ－16	6.9	12.0	8.5	574.18	3	なし	下面、樋状になっている。	
32		137	流出溝滓（ガス質）	イ－18	7.8	9.8	5.2	320.66	2	なし	下面緩やかな樋状になっている。図面の右側で滓の流れはとぎれている。	
32		138	流出溝滓（ガス質）	イ－22	8.9	12.1	7.8	654.94	4	なし	下面、樋状になっている。図面の右側で流れが途切れている。	
32		139	流出溝滓（ガス質）	イ－17	15.7	13.2	6.1	1524.61	3	なし	下面は平らである。	
32		140	流出溝滓（ガス質）		14.6	12.9	9.0	1553.50	3	なし	下面、樋状。気孔かなり多い。	9
32		141	流出溝滓（ガス質）	イ－16	7.7	12.2	9.1	813.16	2	なし	上半は気孔多いが、下半はかなり緻密。下面は緩やかな樋状。	
32		142	流出溝滓（ガス質）	イ－19	9.7	10.9	9.7	1057.33	2	なし	下面、樋状。	
32	10	143	流出溝滓（ガス質）	エ－15	10.8	16.3	13.7	1525.13	2	なし	下面、緩やかな樋状。	
32		144	流出溝滓（ガス質）	イ－17	11.8	12.5	8.2	1423.03	3	なし	下面、樋状になっている。滓上半は気孔多く見られるが下半は緻密。図面左よりも右側の方が気孔少ない。	
33		145	流出溝滓（ガス質）	ウ－15	14.1	18.2	6.2	1231.74	2	なし	下面は、平らである。	
33		146	流出溝滓（ガス質）	イ－18	16.0	20.8	7.0	1815.90	3	なし	下面平らである。下面だけでなく上面にも炉壁粉が多く付着している。	
34		147	流出孔滓（緻密質）	エ－15	7.8	6.8	4.8	230.24	2	なし	下面、樋状になっている。	
34		148	流出孔滓（緻密質）	イ－19	10.2	8.9	5.7	499.60	3	なし	下面、樋状。左側部は棒状に突出。	10
34		149	流出孔滓（緻密質）	イ－18	12.0	6.6	3.7	301.80	2	なし	下面、樋状。上部、流動方向に対して左右が広がる。	
34	10	150	流出孔滓（緻密質）	イ－19	6.0	7.3	4.7	286.96	2	なし	下面、樋状。上部、流動方向に対して左右が広がる。	
34		151	流出孔滓（緻密質）	エ－15	10.1	7.6	4.4	396.41	2	なし	下面、樋状。上部、流動方向に対して左右が広がる。	
34		152	流出孔滓（緻密質）	イ－14	11.0	6.9	6.4	552.06	3	なし	下面、樋状。破面、光沢のある濃い茶褐色。	
34		153	流出孔滓（緻密質）	イ－19	14.5	11.6	8.6	1118.84	3	なし	下面はやや手前側が円形になっている。流動方向に対して左右が翼状に広がっている。木炭痕わずかに見られる。	
34		154	流出孔滓（緻密質）	ウ－15	17.3	19.6	9.9	3300.00	2	なし	下半部と上半部で異なる滓の流れが重層している。炉壁が溶融してできた黒色のガラス質の滓も付着しており、炉内滓の可能もある。	
35		155	流出溝滓（緻密質）	イ－20	5.1	7.5	2.1	114.46	2	なし	下面はかなり平ら。3 ないし 4 本の単位が重なりあっている。	
35		156	流出溝滓（緻密質）	イ－16	7.8	7.8	3.2	201.27	3	なし	下面は緩やかな弧状。平べったい形をしている。	
35		157	流出溝滓（緻密質）	イ－18	7.6	9.0	4.2	246.10	2	なし	下面、樋状。上面にも炉壁粉多く付着。	
35		158	流出溝滓（緻密質）	エ－15	8.8	11.5	4.8	791.99	2	なし	下面、ゆるやかな弧状。下面に長さ 3.5 cm、幅 1.5 cm の木炭痕見られる。	
35		159	流出溝滓（緻密質）	エ－15	15.9	11.4	7.3	1060.00	3	なし	下面は手前側半分欠損しているが、断面隅丸の箱形のようである。	
35		160	流出溝滓（緻密質）	エ－15	12.3	9.6	7.7	851.70	3	なし	図奥側の側面から下面は弧状。上面に複数の単位が重層。	11
35		161	流出溝滓（緻密質）	イ－21	13.0	9.2	7.5	991.37	2	なし	下面、樋状になっている。	
35	10	162	流出溝滓（緻密質）	イ－20	21.1	19.6	7.8	3300.00	2	なし	下面緩やかな樋状。いくつもの流動単位が重なっている。	
36		163	含鉄鉄滓	イ－17	12.3	12.1	7.0	1003.28	8	特L（☆）	炉内滓の砂片。やや流動状になっている。	16
36	11	164	含鉄鉄滓	ウ－15	7.0	10.8	6.7	457.17	3	特L（☆）	下面、樋状の流動滓。下面には長さ 2.5 cm×1.5 cm 以上の楕円形の銑鉄塊が流動滓につつみ込まれた形で見られる。	

第10表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（7）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
36	11	165	含鉄鉄滓	イ－17	10.6	5.7	4.7	204.03	7	特L（☆）	上部、ガラス質の鉄滓で、下部は鉄塊である。	
36	11	166	含鉄鉄滓	イ－20	7.1	9.2	7.0	406.75	11	特L（☆）	滓の表面には木炭痕まばらに見られ炉内滓と思われる。上面に直径1.7 cm深さ 6 cmくらいの円形の木炭痕。	
36		167	含鉄鉄滓	イ－19	5.2	8.2	4.6	216.86	12	特L（☆）	塊状の含鉄炉内滓。炉底塊が割り分けられたものか。	17
36	11	168	含鉄鉄滓	エ－15	3.7	4.8	2.9	52.65	6	特L（☆）	イガイガとした質感を持つ。鉄と若干の滓分からなる炉内滓と思われる。	
36	11	169	含鉄鉄滓	イ－16	3.0	4.7	3.2	52.69	7	特L（☆）	やや流動状の含鉄鉄滓。鉄部と滓部ははっきり分れていない。ややガラス質の部分もあるようだ。炉内滓と思われる。	
36	11	170	含鉄鉄滓	ア－1	4.6	5.1	1.7	40.11	7	特L（☆）	薄い板状の含鉄鉄滓。	
36	11	171	含鉄鉄滓	イ－18	4.7	4.6	4.1	46.22	7	特L（☆）	不整三角形をした含鉄鉄滓。炉内の木炭の間で生成されたものか。鉄部の割合が大きく鉄塊系遺物とすべきかもしれない。	
36	11	172	含鉄鉄滓	イ－15	3.4	3.4	2.8	38.11	7	特L（☆）	鋼系の鉄部と滓部からなり、炉内滓と思われる。鉄塊系遺物としてもよいと思われる。	
37	11	173	含鉄鉄滓	エ－15	9.8	12.3	8.6	807.95	2	L（●）	下面に玉状の鉄部をもつ流動滓。	
37		174	含鉄鉄滓	イ－18	10.3	13.3	7.4	771.72	8	L（●）	炉内滓。図手前側は炉壁部分。	14
37		175	含鉄鉄滓	エ－15	7.4	8.4	7.2	505.96	8	L（●）	炉内滓。炉底塊の滓部分の破片。	15
37	11	176	含鉄鉄滓	イ－17	5.9	7.0	6.0	264.15	7	L（●）	ガス質の滓と鉄部が混在する。鉄部は少しイガイガしている。炉内滓と思われる。下面に特に大きな鉄部みられる。	
37	11	177	含鉄鉄滓	イ－14	8.0	7.5	5.0	239.26	5	L（●）	木炭痕を含むイガイガした炉内滓。図の右手前に直径 3 cmの鉄塊がある。	
37	11	178	含鉄鉄滓	イ－20	4.8	8.1	3.8	116.50	13	L（●）	木炭痕が顕著にみられる含鉄炉内滓。	
37	11	179	含鉄鉄滓	イ－18	8.9	6.2	3.6	95.93	9	L（●）	木炭痕、木炭が多く見られる含鉄炉内滓。	
37	11	180	含鉄鉄滓	イ－20	4.8	6.4	4.0	99.85	9	L（●）	ややガラス質の滓の肩部に鉄部つく炉内滓。	
37	11	181	含鉄鉄滓	イ－18	3.7	3.8	2.4	36.44	9	L（●）	含鉄の炉内滓と思われる。	
37	11	182	含鉄鉄滓	イ－13	2.6	4.7	3.0	29.20	7	L（●）	含鉄の炉内滓と思われる。木炭痕や木炭がまばらに見られる。	
38	12	183	含鉄鉄滓	イ－13	11.7	6.3	5.7	304.44	5	M（◎）	含鉄の炉内滓。長さ 2 cm以下の木炭痕がみられる。	
38		184	含鉄鉄滓	イ－19	5.4	6.4	3.9	130.05	10	M（◎）	炉内滓。還元の進んだ砂鉄焼結部。	12
38	12	185	含鉄鉄滓	イ－18	4.8	4.1	2.2	48.38	11	M（◎）	含鉄炉内滓。上面に広く木炭痕。下面にも大形の木炭痕あり。	
38	12	186	含鉄鉄滓	イ－18	5.3	3.8	3.6	72.56	8	M（◎）	含鉄炉内滓。	
38	12	187	含鉄鉄滓	イ－20	4.0	3.0	2.4	24.85	9	M（◎）	含鉄炉内滓。	
38		188	含鉄鉄滓	イ－17	10.5	15.6	4.6	1109.62	12	H（○）	含鉄炉内滓。炉底塊側部の破片と思われる。	13
38	12	189	含鉄鉄滓	ア－3	5.9	4.0	4.7	84.70	11	H（○）	含鉄炉内滓。	
38	12	190	含鉄鉄滓	イ－14	7.1	3.9	3.5	83.57	8	H（○）	含鉄炉内滓。表面ややイガイガした質感もつ。微小な木炭痕あり。	
38	12	191	含鉄鉄滓	イ－16	6.8	5.1	2.9	71.77	11	H（○）	含鉄炉内滓。	
38	12	192	含鉄鉄滓	イ－28	4.5	4.2	2.8	52.33	9	H（○）	含鉄炉内滓。	
39	12	193	鉄塊系遺物	イ－17	13.2	11.5	5.3	918.99	9	特L（☆）	銑鉄系と思われる。木炭痕が見られ、流動化弱い。	18
39	12	194	鉄塊系遺物	イ－16	8.5	10.6	6.0	839.56	11	特L（☆）	鋼系と思われる。炉底塊が割り分けられたものか。	19
39	12	195	鉄塊系遺物	イ－18	7.1	10.2	7.7	520.75	8	特L（☆）	銑鉄系と思われる。流動化進んでいる。上面に流動滓付着。	20

第11表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（8）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
39		196	鉄塊系遺物	イ－17	12.4	9.3	5.9	524.95	10	特L（☆）	鋼系と思われる。ややイガイガした質感を持つ。	
39	12	197	鉄塊系遺物	イ－14	10.5	9.2	4.2	501.98	11	特L（☆）	銑鉄系と思われる。だが、流動化は進んでいない。炉壁土付着。	
39		198	鉄塊系遺物	ウ－15	12.0	8.9	5.6	494.90	12	特L（☆）	鋼系と思われる。表面の凹凸が大きく、木炭痕が目立つ。	
39	13	199	鉄塊系遺物	イ－16	8.2	10.1	5.9	482.70	11	特L（☆）	鋼系と思われる。密度の高い部分と低い部分がある。	21
39	13	200	鉄塊系遺物	イ－17	11.2	7.55	4.0	384.05	11	特L（☆）	軟鉄～鋼系と思われる。表面は顆粒状になっている。	22
39		201	鉄塊系遺物	イ－16	7.5	8.2	3.9	256.79	11	特L（☆）	軟鉄～鋼系の鉄塊か？下面に土が付着。イガイガしている。	
39		202	鉄塊系遺物	イ－22	7.5	5.9	5.7	232.19	11	特L（☆）	鋼系と思われる。イガイガした質感を持ち、いびつな形をしている。	
39		203	鉄塊系遺物	ア－4	7.5	5.8	5.0	227.16	10	特L（☆）	鋼系と思われる。イガイガした質感を持ち、木炭痕と思われるくぼみあり。	
39		204	鉄塊系遺物	イ－25	8.2	5.8	5.8	197.78	12	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感を持つ。滓を多く含むようである。	
40		205	鉄塊系遺物	イ－18	7.2	8.0	4.0	205.45	10	特L（☆）	鋼系と思われる。こぶ状の凹凸あり。	
40	13	206	鉄塊系遺物	イ－17	6.3	6.1	4.0	196.90	9	特L（☆）	鋼系と思われる。鉄部のまとまりは良さそうである。	23
40		207	鉄塊系遺物	イ－16	7.5	6.6	2.8	180.33	10	特L（☆）	鋼系か。上面に微細な木炭痕あり。やや丸みをもつが、小さなこぶ状の凹凸あり。	
40		208	鉄塊系遺物	イ－18	8.5	4.5	4.2	159.93	9	特L（☆）	銑鉄系と思われる。左右で質感異なり。左側は流動化進んでいない。	24
40		209	鉄塊系遺物	イ－18	8.1	6.8	4.2	169.23	8	特L（☆）	鋼系か。上面に木炭痕。小さなつぶ状の凹凸あり。	
40	13	210	鉄塊系遺物	イ－14	5.5	6.9	4.7	159.49	8	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？滓を多く含むようである。	25
40		211	鉄塊系遺物	イ－17	6.9	5.8	4.7	148.44	12	特L（☆）	銑鉄系と思われる。歪な形で流動化は弱い。	
40		212	鉄塊系遺物	イ－19	6.9	6.1	2.9	153.51	9	特L（☆）	銑鉄系と思われる。左側部に流動滓付着。丸みをもち、表面はなめらかだが、流動化は進んでいる。	
40		213	鉄塊系遺物	イ－19	6.9	3.8	3.5	115.19	8	特L（☆）	鋼系か。上面に炉壁土付着。歪な形で、こぶ状の凹凸がみられる。	
40		214	鉄塊系遺物	イ－17	4.7	5.4	3.5	118.74	7	特L（☆）	鋼系と思われる。こぶ状の小さな鉄部が連なる。	26
40		215	鉄塊系遺物	イ－19	7.1	4.6	3.5	115.38	9	特L（☆）	軟鉄～鋼系か。木炭痕みられる。イガイガした質感を持つ。	
40		216	鉄塊系遺物	イ－19	6.6	4.8	3.3	113.97	8	特L（☆）	軟鉄～鋼系か。木炭痕みられる。イガイガした質感を持つ。	
40		217	鉄塊系遺物	イ－19	7.3	5.3	2.9	117.51	12	特L（☆）	鋼系か。小さなこぶ状の凹凸が目立つ。	
40		218	鉄塊系遺物	イ－22	6.6	4.6	3.35	209.62	9	特L（☆）	銑鉄系と思われる。わずかに滓が残る。	27
40		219	鉄塊系遺物	イ－13	7.0	5.6	3.6	102.18	7	特L（☆）	鋼系か？下面、平坦な面をもつ。木炭に接して生成したためか。	
41		220	鉄塊系遺物	オ－15	5.2	5.4	2.6	95.47	9	特L（☆）	銑鉄系か。表面はなめらかだが、歪な形で流動化は弱そう。	
41		221	鉄塊系遺物	イ－19	5.4	3.8	2.8	88.49	9	特L（☆）	不明。銑鉄系ように見えるが、X線写真で丸い気孔ははっきり見えない。二次被熱を受けたためか、紫色になっていない。	
41		222	鉄塊系遺物	イ－18	4.8	5.2	3.6	93.90	9	特L（☆）	鋼系か。上面は平坦な面。	
41		223	鉄塊系遺物	表採	6.0	5.3	1.9	91.47	8	特L（☆）	銑鉄か。丸みを持つが流動化はやや弱い。	
41		224	鉄塊系遺物	ア－11	8.6	4.5	2.3	75.92	10	特L（☆）	銑鉄系と思われる。翼状の外観をしており、流動化は弱い。	
41		225	鉄塊系遺物	イ－18	6.6	3.0	2.3	90.06	5	特L（☆）	銑鉄系と思われる。流動化は強く、丸みをもった棒状。	
41		226	鉄塊系遺物	イ－18	4.9	4.1	2.3	71.90	6	特L（☆）	銑鉄系か。上面に流動滓付着。鉄部、長楕円形で流動化は強い。	
41		227	鉄塊系遺物	イ－24	5.9	3.3	2.0	78.00	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。上面に鉄滓付着。鉄部、丸みをもち、流動化は進んでいる。	
41		228	鉄塊系遺物	イ－19	5.1	4.6	3.0	88.51	8	特L（☆）	銑鉄系か？鉄部丸みをもつが流動化は弱く、こぶ状に突き出た部分がみられ、上面は鉄滓から剥離。	

第12表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（9）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
41		229	鉄塊系遺物	イ－19	5.9	4.5	3.1	85.28	7	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感を持つ。	
41		230	鉄塊系遺物	イ－20	7.0	3.6	2.1	83.83	8	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもち流動化が進んでいる。	
41		231	鉄塊系遺物	カ－15	6.3	3.4	2.0	79.48	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。流動化は若干進んでいるよう。	
41		232	鉄塊系遺物	イ－18	4.8	6.4	2.3	82.31	8	特L（☆）	銑鉄系と思われる。右半分を欠く。上面に平坦な面をもつ。	
41		233	鉄塊系遺物	イ－19	4.6	4.6	2.5	84.68	8	特L（☆）	鋼系か？上面に平坦な面みられ、下面はやや丸みをもつ。表面に小さな凹凸がみられる。	
41		234	鉄塊系遺物	ア－4	7.1	5.1	2.2	77.29	7	特L（☆）	銑鉄系か。滓分多く含む。上面に木炭痕付着。下面は丸みをもつ。	
41		235	鉄塊系遺物	イ－19	4.9	6.5	2.5	74.21	7	特L（☆）	鋼系か？ややイガイガした質感をもつ。	
41		236	鉄塊系遺物	ア－3	4.5	5.8	2.8	76.95	7	特L（☆）	鋼系か？イガイガした質感をもつ。	
41	13	237	鉄塊系遺物	イ－18	3.4	5.4	3.6	75.97	8	特L（☆）	鋼系と思われる。木炭の隙間で形成されたものか。	28
41		238	鉄塊系遺物	イ－25	5.9	3.3	2.85	71.45	8	特L（☆）	鋼系～銑鉄系と思われる。	29
41		239	鉄塊系遺物	イ－18	6.1	4.1	2.5	69.63	7	特L（☆）	鋼系と思われる。	30
41		240	鉄塊系遺物	イ－23	4.2	3.8	2.7	61.19	7	特L（☆）	鋼系か。ややごつごつした質感をもつ。	
41		241	鉄塊系遺物	イ－26	5.8	3.5	2.1	66.60	6	特L（☆）	銑鉄系と思われる。表面がなめらかで、丸みがあるがやや歪な形。	
41		242	鉄塊系遺物	イ－22	4.9	4.6	1.9	69.20	8	特L（☆）	鋼系か。鉄部は丸みをもつが、X線透過像には気孔は目立たない。	
41		243	鉄塊系遺物	イ－22	3.8	4.2	5.3	60.17	9	特L（☆）	軟鉄～鋼系か。イガイガした質感を持ち、表面の凹凸大きい。	
42		244	鉄塊系遺物	イ－18	4.0	3.7	3.2	61.87	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもつが、下面に大きくこぶ状に突き出た部分がある。	
42		245	鉄塊系遺物	イ－20	6.7	3.4	3.2	66.08	9	特L（☆）	鋼系と思われる。大きな木炭痕が目立つ。	31
42		246	鉄塊系遺物	イ－18	4.0	2.9	2.1	64.05	7	特L（☆）	銑鉄系か。長楕円形の玉状。	
42		247	鉄塊系遺物	イ－25	4.9	4.6	2.1	66.79	9	特L（☆）	銑鉄系か？やや丸みをおびる。X線透過像では丸い気孔がわずかに見られる。	
42		248	鉄塊系遺物	イ－14	5.6	4.0	2.9	65.38	9	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？こぶ状に突き出た部分が目立つ。	
42		249	鉄塊系遺物	イ－18	5.4	2.8	3.3	59.16	8	特L（☆）	鋼系と思われる。炉底塊から分離されたものか。	32
42		250	鉄塊系遺物	イ－13	4.0	3.5	2.7	53.60	8	特L（☆）	鋼系か。鉄としてはかなりまとまっているようである。こぶ状に突き出た部分目立つ。	
42		251	鉄塊系遺物	イ－18	4.9	3.8	3.4	50.06	7	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感を持つ。	
42		252	鉄塊系遺物	イ－18	3.8	3.3	1.8	49.05	7	特L（☆）	鋼系か。こぶ状に突き出た部分が目立つ。	
42		253	鉄塊系遺物	イ－17	4.35	2.95	3.0	47.77	6	特L（☆）	鋼系か。こぶ状に突き出た部分が目立つ。	
42		254	鉄塊系遺物	カ－15	5.8	3.1	1.8	57.46	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。かなり流動化が進み、丸みをおび、棒状に長くのびる。	
42	13	255	鉄塊系遺物	イ－18	7.6	4.1	1.4	53.10	9	特L（☆）	銑鉄系と思われる。流動化進んでいる。	33
42		256	鉄塊系遺物	イ－24	3.1	3.4	2.6	58.40	6	特L（☆）	鋼系か。こぶ状に突き出た部分が目立つ。	
42		257	鉄塊系遺物	イ－18	4.7	3.8	2.7	54.56	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。流動化が進み、丸みをもつ。鉄滓（流動滓？）付着。	
42		258	鉄塊系遺物	カ－15	3.5	2.9	3.2	52.37	7	特L（☆）	鋼系か。こぶ状の突出が見られる。炉壁土付着。	
42		259	鉄塊系遺物	イ－19	6.0	3.7	3.7	52.75	8	特L（☆）	鋼系か？厚みは薄く、波状に曲がった形をしている。木炭の間で生成されたものか。	
42		260	鉄塊系遺物	イ－20	7.0	2.8	2.1	52.26	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。曲がった棒状の銑鉄。丸みをもち、流動化が進んでいるようだが、断面は歪な形をしている。	
42		261	鉄塊系遺物	イ－13	5.5	2.9	3.2	59.12	7	特L（☆）	鋼系か？部分的にこぶ状の突出が見られ、歪な形をしている。下面、平坦。	

第13表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（10）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
42		262	鉄塊系遺物	イ－18	7.0	2.8	2.6	48.15	7	特L（☆）	銑鉄系か。流動化が進んで、丸みをもった棒状になっている。右端部に滓付着。	
42		263	鉄塊系遺物	イ－16	5.2	4.25	17.5	43.27	8	特L（☆）	銑鉄系か？平べったいが、こぶ状の突出あり。	
42		264	鉄塊系遺物	イ－18	3.6	4.0	1.5	41.53	7	特L（☆）	鋼系か。上面は平らで、下面は丸みをもつが、X線透過像では丸い気孔見られない。	
42		265	鉄塊系遺物	イ－18	3.7	2.8	2.3	42.70	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもち、流動化は進んでいるようである。左側欠損。	
42		266	鉄塊系遺物	イ－23	3.8	3.7	1.5	48.07	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。平べったく丸みをもつ。流動化は進んでいるようである。	
42		267	鉄塊系遺物	イ－18	5.8	3.0	1.4	39.17	8	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもった棒状。流動化はかなり進む。	
42		268	鉄塊系遺物	オ－15	5.6	3.0	1.3	58.52	8	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもった棒状。流動化はかなり進む。	
42		269	鉄塊系遺物	エ－15	5.1	2.6	2.2	41.27	8	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感を持つ。	
42		270	鉄塊系遺物	イ－16	5.3	3.0	1.7	47.02	8	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感を持ち、微細な木炭痕見られる。鉄部のまとまりが弱く、ぶどう状の外観を示す。	
42	13	271	鉄塊系遺物	イ－19	3.8	2.7	1.6	40.40	8	特L（☆）	銑鉄系と思われる。流動化進み、玉状になっている。	34
43		272	鉄塊系遺物	イ－23	5.5	3.6	1.9	47.26	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。流動化が進み、丸みをもつ。上面に流動滓付着。	
43		273	鉄塊系遺物	イ－18	4.0	2.7	3.1	47.32	7	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感を持ち、微細な木炭痕見られる。	
43		274	鉄塊系遺物	イ－23	5.4	2.7	2.15	41.19	7	特L（☆）	鋼系か？こぶ状の突出が目立ち、ややイガイガしている。	
43		275	鉄塊系遺物	イ－18	4.0	3.6	2.7	43.07	6	特L（☆）	銑鉄系と思われる。やや丸みをもつが、歪な形で流動化弱い。	
43		276	鉄塊系遺物	イ－23	4.4	2.8	1.9	22.59	7	特L（☆）	鋼系と思われる。ひだ状、突起状に突き出た部分あり。	
43		277	鉄塊系遺物	イ－20	3.4	2.5	2.2	32.96	7	特L（☆）	鋼系か？ややイガイガした質感をもち、こぶ状に突き出た部分もある。	
43		278	鉄塊系遺物	イ－20	4.4	2.7	1.8	38.66	6	特L（☆）	銑鉄系か？丸みをもっている。周囲には滓が付着している。	
43		279	鉄塊系遺物	イ－17	4.3	2.1	2.1	32.33	7	特L（☆）	銑鉄系か？丸みをもつ。酸化土砂の付着目立つ。	
43		280	鉄塊系遺物	イ－25	5.2	3.2	1.5	32.05	7	特L（☆）	錆化のため詳細不明。	
43		281	鉄塊系遺物	イ－28	3.4	3.3	1.7	37.64	7	特L（☆）	銑鉄系か？やや平べったく、流動化は進んでいるように見える。。	
43		282	鉄塊系遺物	イ－14	5.7	4.3	2.35	34.53	7	特L（☆）	鋼系か？全体として薄く平べったい形をしている。木炭の間で生成されたものか。	
43		283	鉄塊系遺物	イ－16	3.8	2.3	2.0	33.75	6	特L（☆）	銑鉄系か。楕円形の玉状で流動化が進んでいるように見える。まわりには滓が付着している。	
43		284	鉄塊系遺物	イ－18	3.4	2.5	2.1	34.87	6	特L（☆）	銑鉄系か？楕円形の玉状で、X線写真では小さな気孔が若干見られる。	
43		285	鉄塊系遺物	イ－18	3.6	2.8	2.1	30.23	6	特L（☆）	鋼系か。こぶ状の凹凸見られる。	
43		286	鉄塊系遺物	イ－21	3.1	4.6	2.8	36.80	7	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感を持つ。木炭痕付き。	
43		287	鉄塊系遺物	ア－3	4.1	2.6	2.4	37.61	7	特L（☆）	鋼系と思われる。こぶ状の突出が目立つ。	
43		288	鉄塊系遺物	イ－13	4.8	3.3	2.1	36.50	6	特L（☆）	銑鉄系か。やや丸みをもつ。土砂の付着が著しい。	
43		289	鉄塊系遺物	ア－6	4.4	2.7	1.6	32.03	7	特L（☆）	銑鉄系か。X線写真では若干丸い気孔見られるが、流動化は弱く、こぶ状の突出あり。	
43		290	鉄塊系遺物	イ－19	3.05	3.05	1.95	37.56	6	特L（☆）	銑鉄系か。玉状で流動化が進んだように見える。	
43		291	鉄塊系遺物	イ－19	3.7	4.2	2.5	37.57	6	特L（☆）	鋼系か。小さな木炭痕が見られる。	
43		292	鉄塊系遺物	ア－1	3.5	2.3	1.8	34.10	6	特L（☆）	鋼系か？こぶ状に隆起した部分あり。	
43		293	鉄塊系遺物	イ－19	3.0	2.7	1.9	21.34	5	特L（☆）	鋼系か？こぶ状に隆起した部分あり。	
43		294	鉄塊系遺物	イ－25	5.9	3.1	1.6	25.48	7	特L（☆）	鋼系と思われる。歪な形をした板状。木炭の間で生成されたものか。	

第 14 表　殿淵山遺跡製鉄関連遺物観察表（11）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備　考	分析番号
43		295	鉄塊系遺物	イ－19	3.5	2.2	2.8	22.52	7	特L（☆）	銑鉄系か。不整形な玉状をしている。流動化が進んでいる。	
43		296	鉄塊系遺物	イ－18	2.8	2.5	1.4	21.52	6	特L（☆）	銑鉄系か。不整形な玉状。流動化が進んでいる。	
43		297	鉄塊系遺物	イ－19	4.9	2.3	1.6	18.60	5	特L（☆）	銑鉄系と思われる。歪な棒状の銑鉄塊。こぶ状の突出が見られ、流動化は弱い。	
43		298	鉄塊系遺物	イ－19	3.7	2.7	1.8	27.50	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもつが、やや凹凸目立ち流動化はさほど進んでいないようである。	
43		299	鉄塊系遺物	イ－18	4.6	2.9	1.1	20.24	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもち、かなり流動化が進んだようである。	
43		300	鉄塊系遺物	ア－3	4.1	2.2	1.7	22.38	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。丸みをもち、かなり流動化は進んでいるようであるが、若干凹凸もみられる。	
43		301	鉄塊系遺物	イ－19	3.8	2.4	1.7	27.44	6	特L（☆）	銑鉄系と思われる。不整形な玉状。ある程度流動化したと思われる。	
43		302	鉄塊系遺物	イ－14	2.4	3.3	1.9	25.70	7	特L（☆）	鋼系と思われる。こぶ状の突出が見られる。	
43		303	鉄塊系遺物	イ－13	4.7	2.2	1.6	21.00	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。うすく滓が付着。丸みをもち、かなり流動化は進んでいるよう。	
43		304	鉄塊系遺物	イ－17	5.65	2.35	2.9	28.06	7	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガしており、木炭痕みられる。	
43		305	鉄塊系遺物	イ－19	3.0	2.3	1.9	26.35	5	特L（☆）	鋼系と思われる。こぶ状の凹凸あり。	
43		306	鉄塊系遺物	不明	3.1	2.3	1.3	23.14	6	特L（☆）	銑鉄系か。不整形な玉状。流動化は進んでいる。	
43		307	鉄塊系遺物	イ－24	3.3	2.7	2.3	22.92	7	特L（☆）	鋼系と思われる。こぶ状の突出が見られる。	
43		308	鉄塊系遺物	イ－13	3.7	4.1	1.3	23.71	7	特L（☆）	銑鉄系と思われる。平べったく丸みをもつが、流動化はあまり進んでないようにも見える。	
43		309	鉄塊系遺物	イ－19	4.4	3.0	1.6	25.02	7	特L（☆）	鋼系か？平べったく、ややイガイガしている。	
43		310	鉄塊系遺物	イ－19	3.1	2.3	2.2	24.67	6	特L（☆）	鋼系と思われる。ややごつごつしている。	
43		311	鉄塊系遺物	イ－19	4.6	2.8	2.1	41.10	7	特L（☆）	鋼系か。こぶ状の突出が目立つ。	
44		312	鉄塊系遺物	イ－18	4.1	3.0	1.7	22.51	6	特L（☆）	鋼系か？歪な形をしており、こぶ状の突出も見られる。	
44		313	鉄塊系遺物	イ－18	3.9	2.0	1.3	20.34	6	特L（☆）	銑鉄系か。丸みをもち、流動化は進んでいるように見える。鉄滓付着。	
44		314	鉄塊系遺物	イ－13	3.1	2.1	1.3	11.84	5	特L（☆）	銑鉄系と思われる。歪に曲がりくねっている。流動化は弱い。木炭の間で生成されたものか。	
44		315	鉄塊系遺物	イ－18	2.4	1.9	1.3	15.06	5	特L（☆）	銑鉄系か。玉状。流動化進んでいるようである。上面くぼむ。	
44		316	鉄塊系遺物	イ－18	5.0	2.3	1.5	18.54	7	特L（☆）	鋼系か。厚みが薄く、翼状に反りかえる。	
44		317	鉄塊系遺物	イ－16	3.2	2.2	1.6	15.60	6	特L（☆）	銑鉄系と思われる。。凹凸が目立ち流動化は進んでいない。	
44		318	鉄塊系遺物	不明	3.4	2.2	1.5	15.81	6	特L（☆）	軟鉄～鋼系か？イガイガした質感をもつ。	
44		319	鉄塊系遺物	イ－19	2.6	2.3	1.3	12.02	4	特L（☆）	銑鉄系か。やや不整形な玉状。	
44		320	鉄塊系遺物	イ－18	3.0	2.0	1.45	7.06	5	特L（☆）	銑鉄系と思われる。上面平坦で、下面突起状にはり出す。流動化は弱いようである。	
44		321	鉄塊系遺物	不明	2.1	2.5	1.0	10.42	5	特L（☆）	銑鉄系か。不整だが、丸みもつ。上面に滓付着。	
44		322	鉄塊系遺物	エ－15	2.7	1.7	1.4	13.31	5	特L（☆）	鋼系か？少しごつごつしている。	
44		323	鉄塊系遺物	イ－17	2.0	1.9	1.2	14.10	5	特L（☆）	銑鉄系か。玉状。流動化は進んでいるようである。	
44		324	鉄塊系遺物	イ－21	3.6	3.8	1.3	16.87	8	特L（☆）	銑鉄系と思われる。歪な形をしており、流動化は弱い。	
44		325	鉄塊系遺物	イ－17	5.0	3.3	3.5	54.59	8	特L（☆）	鋼系と思われる。ごつごつしている。	
44		326	鉄塊系遺物	イ－19	6.4	4.4	4.1	100.20	7	特L（☆）	鋼系か？木炭痕が見られる。滓分を多く含むようである。	

第 15 表　殿淵山遺跡木炭観察表

挿図番号	遺物番号	地区名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	樹　種	年　輪	炭化	菊割れ	木取り	分析番号
44	327－1	イ－14	5.0	3.1	2.9	17.0	広葉樹の環孔材	12 年生	あまい	なし	丸のまま。	35－1
44	327－2	イ－21	3.6	3.3	2.2	9.9	広葉樹の散孔材	なし	あまい	なし	ミカン割り後縦平割り	35－2
44	327－3	イ－24	4.3	2.7	1.7	5.9	広葉樹の散孔材	厚さ 2.2 cm の間に 13 本	悪い	なし	ミカン割り 1／4 縦割り	35－3
44	327－4	イ－18	2.6	2.6	2.6	6.6	広葉樹の散孔材	年輪なし	良好	なし	ミカン割り 1／4 縦割り	35－4
44	327－5	イ－24	1.6	3.2	2.5	4.7	広葉樹の散孔材	年輪なし	あまい	なし	ミカン割り縦 1／3	35－5

第 4 節　小　結

殿淵山遺跡では、遺跡中心部が削られていたため製鉄関連遺構は確認することができなかったが、排滓場の調査で多くの製鉄関連遺物を回収することができた。排滓場には陶磁器が出土していないため製鉄が行われた時期は明らかではないが、鉄滓堆積層における鉄滓の密度が高いこと、中世の製鉄炉の炉壁と比べて炉壁の滓化が進んでいることから近世に下る可能性を考えている。なお、製鉄遺構に関わるものか不明であるが、Ⅰ区では18世紀代から近代の陶磁器が出土している。

以下に、本遺跡の製鉄関連遺物の組成と分布についてまとめておきたい。また、今後こうした整理・分類作業の結果と金属学的な分析結果を踏まえた上で本遺跡の鉄生産のあり方を検討することになるが、その課題となる点についてもふれることとしたい。

製鉄関連遺物の組成　本遺跡では排滓場のトレンチ調査を実施し、遺物については 1 m グリッドで回収した。各グリッドにおける各種製鉄関連遺物の出土重量をまとめたのが第16表である。製鉄関連遺物の全体量は3780.3 kg で、このうち炉壁が1089.4 kg、流動滓が2451.9 kg を占める。炉内滓に分類されたものは6.2 kg とわずかだが、これは分類上の問題である。本来は含鉄鉄滓も炉内滓と流動滓に区別するべきであったが、一まとめにした結果このような少量になっているのであり、実測遺物を見る限り含鉄鉄滓の多くは炉内滓に含まれるものと思われる。鉄塊系遺物（メタル度特L（☆））が12.8 kg と多く回収でき遺跡で生成された鉄の内容を知る上で重要な資料になる。

流動滓はガス質ものが1410.9 kg、緻密質のものが1020.4 kg あり、両者の割合はおよそ1.4：1になる。ガス質の流動滓が多いほど高温で操業され、銑鉄が生産されやすいと指摘されている[3]。銑鉄が主体として生産されたとされる瑞穂町中ノ原遺跡では 3：1 でガス質の滓が多く、各種の鉄塊が生産されたとされる瑞穂町タタラ山遺跡では 1：1 で両者の割合はほぼ等しい[4]。

製鉄関連遺物の分布　第16表を見るとイ－13～21、ウ～オ－15グリッドで特に多くの遺物が出土しており、この部分は排滓場の中心で製鉄遺構に近かったと部分と思われる。鉄塊系遺物やメタル度特L（☆）・L（●）の含鉄鉄滓の出土量は、排滓場の中心部でも特にイ－16～20に集中しており、またこれらのグリッドは他のグリッドと比べて、製鉄関連遺物に占める鉄塊系遺物・含鉄鉄滓の割合が高い。製鉄炉で生産された鉄塊類がこの周辺で荒割・小割後に選別されたと推測される。

今後の検討課題　製鉄遺跡で生産された鉄の多くが出荷され、逆に排滓場で出土した鉄塊系遺物は生産されたが取りこぼされたもの、生成したが質が悪く回収されなかったもの、あるいは小さすぎるなどの理由で回収できなかったものであると思われる。これらをどのように峻別し、どのような鉄を目的として生産されたのか明らかにすることが課題となる。また、鉄の生産体系を考える上では、原料となった砂鉄や燃料の木炭の性質、製鉄炉の機能・性能などについて総合的に検討するべきかと考えられる。

（1）中世の製鉄遺跡である頓原町戸井谷遺跡と比較して鉄滓堆積層にあまり土を含んでいない。

（2）通風孔部の炉壁について比較した場合、中世の戸井谷遺跡やタタラ山遺跡のものと比べて滓化・溶融の度合いが強く、近世の佐田町檀原遺跡のものと近いように思われる。

（3）穴澤義功氏の御教示による。

（4）島根県教育委員会　1993『父ヶ平遺跡・中ノ原遺跡・タタラ山第 1・第 2 遺跡』

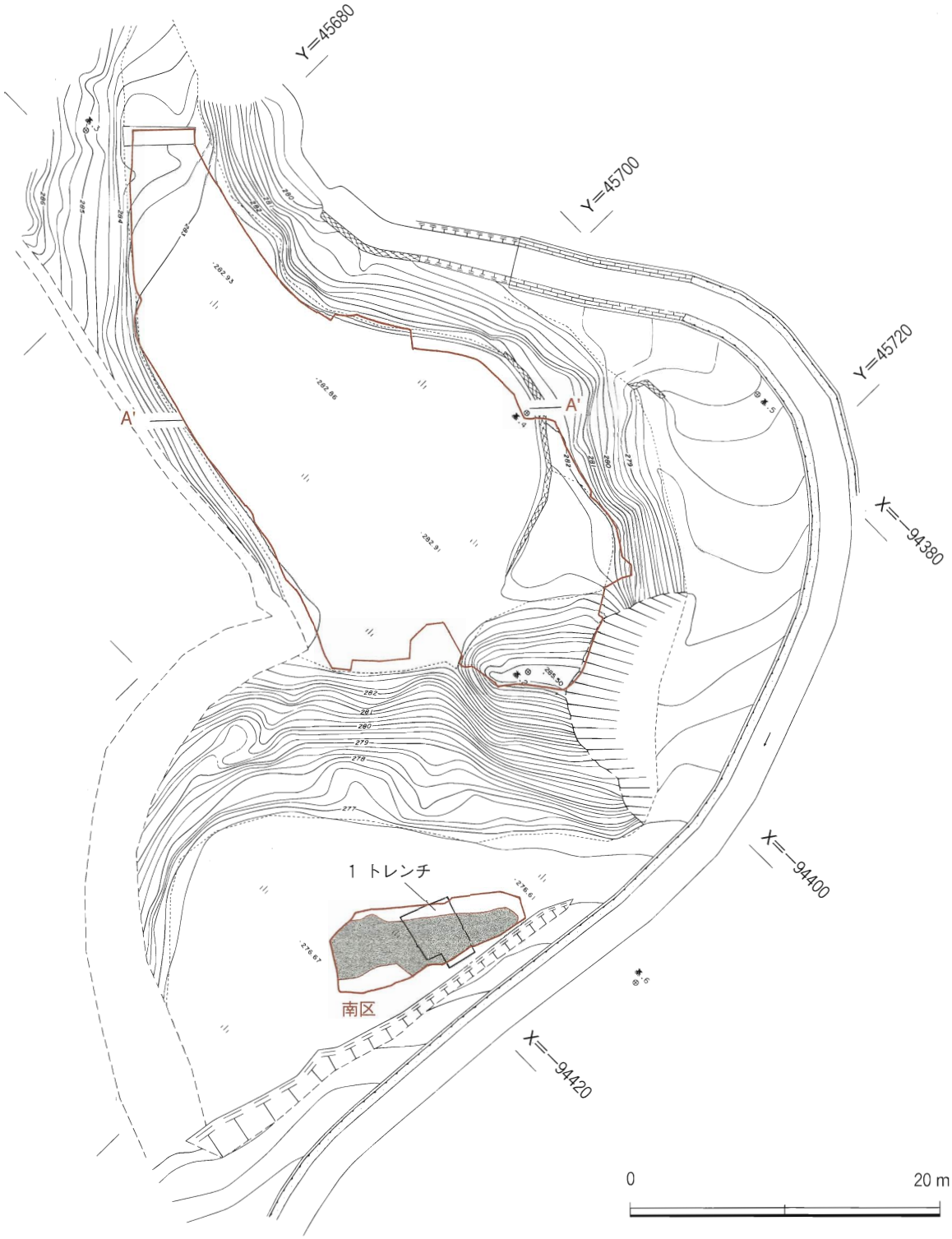
殿淵山遺跡出土製鉄関連遺物グリッド別重量表（単位　kg）

グリッド名	炉　壁	流動滓(合計)	流動滓(緻密滓)	流動滓(ガス質)	炉内滓	鉄塊系遺物(特L(☆))	含鉄鉄滓(特L(☆))	含鉄鉄滓(L（●))	含鉄鉄滓(M（◎))	含鉄鉄滓(H（○))	含鉄鉄滓(銹化（△))	合計
アー 1		2.700	0.300	2.400		0.034	0.040	0.030			0.220	3.024
アー 2	10.113	26.001	6.650	18.690	0.025		0.047	0.045		0.060	1.030	37.321
アー 3	1.690	29.035	4.900	24.135	0.245	0.136	0.588	0.145	0.055	0.225	1.640	33.759
アー 4	2.500	12.010	4.000	8.010		0.304		0.225		0.090	0.280	15.409
アー 5	2.590	5.170	0.740	4.430	0.045		1.765	0.105			0.340	10.015
アー 6	6.900	4.820	0.270	4.550		0.032		0.105		0.030	0.030	11.917
アー 7	4.000	16.489	4.200	12.235	0.075		0.095	0.085			0.390	21.134
アー 8	5.340	17.515	2.600	14.900			0.358	0.195		0.980	2.500	26.888
アー 9	2.500	6.420	2.100	4.320				0.035			1.070	10.025
アー 10	6.535	7.740	1.500	6.240				0.120		0.010	0.650	15.055
アー 11	2.630	9.250	2.200	7.050		0.075		0.065		0.420	0.170	12.610
アー 12	0.640	8.420	3.930	4.490				0.380				9.440
イー 13	12.990	67.339	33.000	33.640	0.220	0.307	0.115	1.359	0.304	0.010	1.880	84.524
イー 14	80.057	177.667	105.052	72.380	0.445	0.787	0.838	1.374	0.250	0.114	9.550	271.082
イー 15	36.389	120.399	53.500	64.599	0.250		0.216	0.435	1.975	3.190	0.550	163.404
イー 16	90.907	214.753	76.801	132.061	0.786	1.899	1.097	3.100	0.170	1.872	6.930	321.514
イー 17	114.987	154.024	37.500	115.879	0.235	2.468	1.535	1.279		1.500	22.560	298.588
イー 18	137.434	316.847	112.218	203.992	1.811	2.383	1.903	6.570	0.466	3.570	24.220	495.204
イー 19	100.386	259.241	112.905	144.804	0.570	1.551	1.393	2.382	0.130	0.010	12.500	378.163
イー 20	115.867	249.977	93.414	153.628	0.176	0.273	4.280	2.642	3.215	1.640	9.760	387.830
イー 21	48.013	86.002	40.271	44.830	0.125	0.053	0.063	0.660	0.165	1.640	3.330	140.051
イー 22	22.234	40.805	17.780	23.010	0.050	0.571	0.071	1.190	0.030	0.030	1.380	66.361
イー 23	1.515	84.194	47.930	36.230	0.300	0.220	0.226	0.670	0.230	0.590	2.840	90.785
イー 24	1.100	44.837	26.700	18.020	0.095	0.159	0.019	0.170			0.690	47.070
イー 25	2.990	36.295	13.500	22.750	0.035	0.393	0.078	0.125	0.920	0.660	1.440	115.526
イー 26	1.000	11.670	4.170	7.500		0.066		0.080			0.120	12.936
イー 27	1.000	3.310	2.500	0.810							0.080	4.390
イー 28	0.360	6.780	4.180	2.600	0.025	0.037		0.040		0.052	0.240	7.534
イー 29		1.540	1.140	0.400								1.540
イー 30	0.550	1.425	1.000	0.425				0.030			0.120	2.125
ウー 15	49.639	146.625	74.300	72.292	0.220	0.494	0.834	1.155	0.065	0.980	4.490	204.502
エー 15	150.023	133.311	60.830	70.455	0.050	0.054	0.060	3.839		0.900	3.500	291.737
オー 15	46.345	65.480	31.300	34.000	0.205	0.153	0.321	2.150	0.040	0.800	5.190	120.684
カー 15	17.700	55.974	24.350	30.000	0.180	0.189	0.562	0.741	0.056	0.280	5.620	81.302
表　採	11.566	12.144	5.490	6.654	0.030	0.091	1.212	0.070		2.210	14.960	42.283
出土位置不明	0.920	15.650	7.190	8.460		0.049					0.520	17.139
合　計	1089.410	2451.859	1020.411	1410.869	6.198	12.791	17.727	31.596	8.071	21.863	140.790	3780.305

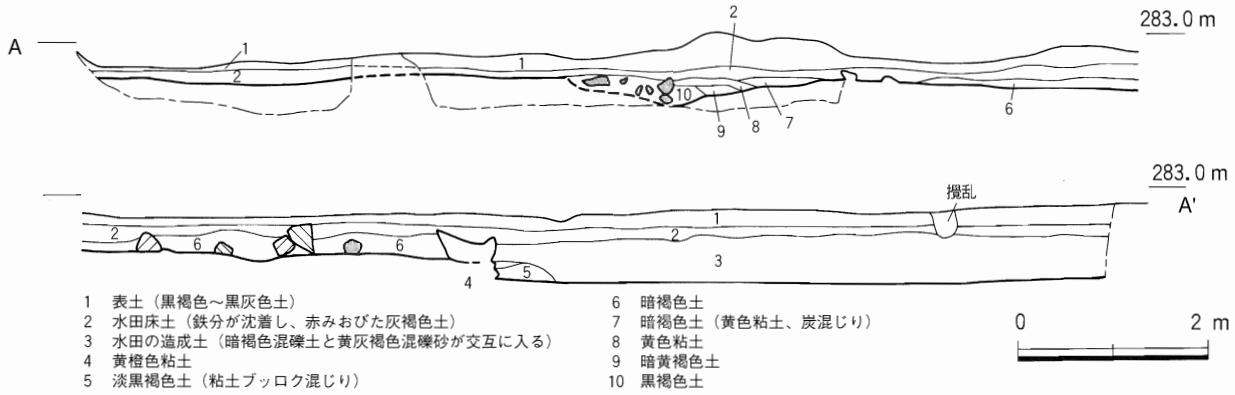
第 4 章　獅子谷遺跡の調査

第 1 節　遺跡の概要

概要　獅子谷遺跡は、神戸川の支流である角井川に合流する獅子谷川を約 200 m 遡った右岸の川縁



第 45 図　獅子谷遺跡調査前地形測量図・調査区設定（S= 1/400）



第46図　獅子谷遺跡土層断面図（地表～上層粘土面上面）（S＝ 1/80）

から丘陵尾根上の平坦面にかけて位置する。遺跡の中心部は南西から北東方向にのびる丘陵尾根上に位置する南北約40 m、東西約20 mの平坦面で、標高は約282 mである。この部分は調査前には杉が植林されていたが、さらにそれ以前は水田として利用されていた。平坦面の南端には頂上の標高285 mの残丘状の高まりがあり、その麓には金屋子祭祀に関連する石組が見られた。遺跡の中心部から南側へ下った川縁付近では平成 6（1994）年の範囲確認調査で椀形鍛冶滓などを含む鉄滓堆積層の上面が検出されており、この遺跡は大鍛冶場跡になる可能性が考えられた。

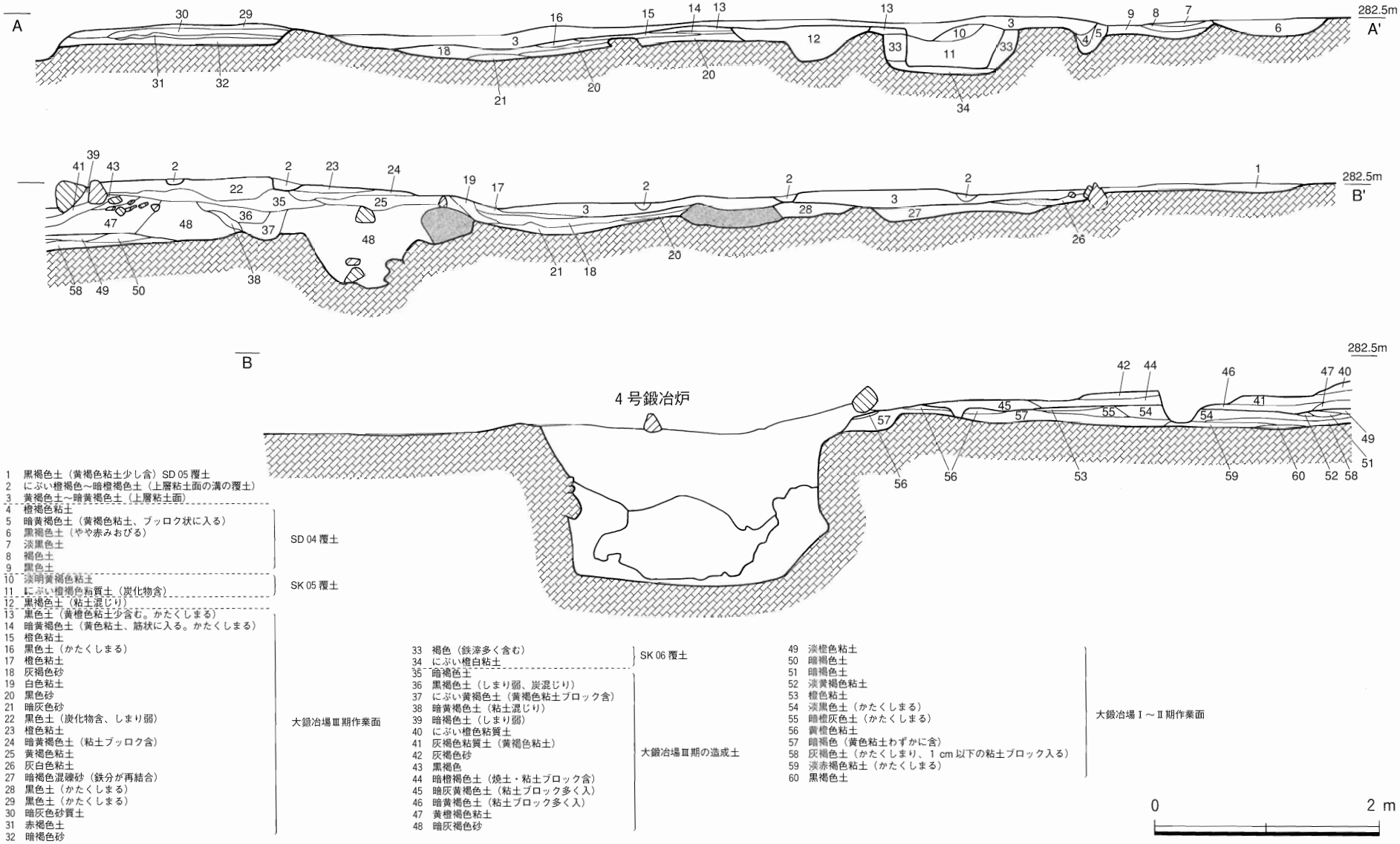
この谷の奥に志津見ダム建設に伴う工事残土の処理場とそこに至る工事用道路が開設されることとなり、本遺跡もその予定地内に含まれるため、平成10（1998）年に全面的な発掘調査を行うこととなった。調査面積は590㎡で、平成10年 6 月29日から平成11年 2 月 3 日にかけて調査を実施した。調査の結果、作業場となる 2 棟の掘立柱建物跡、鍛冶炉 8 基（作り替えを除く）、鉄床、水場遺構、性格不明の焼土遺構、石列・溝・土坑などを検出し、層位的に見て 3 時期に分かれる大鍛冶場跡を確認した。遺構の残存状態は極めて良好で、当時の作業状況・作業空間の利用法を考える上で貴重な資料が得られた。また、鍛冶炉の中には鞴の羽口が原位置で残されているものや、複雑な地下構造をもつものもあり、防湿のために伏樋状の地下構造が設けられたものもあった。

遺跡中心部から南側の川縁の部分については、排滓場になる可能性が考えられたため 1 トレンチで土層・鉄滓の堆積状況を確認し、さらにその周辺の表土を重機で除去し、鉄滓の分布範囲を確認することとした。この調査区を本報告では南区と呼ぶこととする。

調査の方法　遺跡中心部の調査は、人力により表土掘削を行い、遺構検出・精査、記録といった手順をとった。表土掘削時にはグリッド設定をしていなかったが、水田床土の高さまで掘り下げたところで鍛冶関連遺物が多く出土してきたため、任意で 2 mグリッドを設定して遺物の取り上げを行った。その後大鍛冶場跡を検出したため、遺構の軸にあわせて 2 mのグリッドを設定し直して遺物を回収した。

遺跡中心部の層序（第46～48図）　遺跡中心部の平坦面の層序は、上から黒褐色から黒灰色の表土、水田床土、水田の造成土、9 m×8 mの民家等の土間と思われる粘土面（以下、上層粘土面）の順に確認され、上層粘土面の直下に建物跡（SB 02）や石列を伴う大鍛冶場跡が検出された。この大鍛冶場の造成土の下層で、SB 02から東側にずれた位置に建物跡（SB 01）を伴う大鍛冶場跡が検出され、その下層から遺跡の基盤である砂層・砂礫層に遺構が掘り込まれた古い段階の大鍛冶場跡が確認できた。大鍛冶場は層位的に見て 3 時期に分けることができ、最下層の時期をⅠ期、その上層の時期をⅡ期、さらにその上層の大鍛冶場最終段階の時期をⅢ期と呼ぶこととする。

第 47 図　獅子谷遺跡遺構配置図（S=1/120）



1 黒褐色土（黄褐色粘土少し含）SD 05 覆土
2 にぶい橙褐色～暗橙褐色土（上層粘土面の溝の覆土）
3 黄褐色土～暗黄褐色土（上層粘土面）
4 橙褐色粘土
5 暗黄褐色土（黄褐色粘土、ブッロク状に入る）
6 黒褐色土（やや赤みおびる）
7 淡黒色土
8 褐色土
9 黒色土
10 淡明黄褐色粘土
11 にぶい橙褐色粘質土（炭化物含）
12 黒褐色土（粘土混じり）
13 黒色土（黄橙色粘土少含む。かたくしまる）
14 暗黄褐色土（黄色粘土、筋状に入る。かたくしまる）
15 橙色粘土
16 黒色土（かたくしまる）
17 橙色粘土
18 灰褐色砂
19 白色粘土
20 黒色砂
21 暗灰色砂
22 黒色土（炭化物含、しまり弱）
23 橙色粘土
24 暗黄褐色土（粘土ブッロク含）
25 黄褐色粘土
26 灰白色粘土
27 暗褐色混礫砂（鉄分が再結合）
28 黒色土（かたくしまる）
29 黒色土（かたくしまる）
30 暗灰色砂質土
31 赤褐色土
32 暗褐色砂

SD 04 覆土：4～9
SK 05 覆土：10～12
大鍛冶場Ⅲ期作業面：13～32

33 褐色（鉄滓多く含む）
34 にぶい橙白粘土
35 暗褐色土
36 黒褐色土（しまり弱、炭混じり）
37 にぶい黄褐色土（黄褐色粘土ブロック含）
38 暗黄褐色土（粘土混じり）
39 暗褐色土（しまり弱）
40 にぶい橙色粘質土
41 灰褐色粘質土（黄褐色粘土）
42 灰褐色砂
43 黒褐色
44 暗橙褐色土（焼土・粘土ブロック含）
45 暗灰黄褐色土（粘土ブロック多く入）
46 暗黄褐色土（粘土ブロック多く入）
47 黄橙褐色粘土
48 暗灰褐色砂

SK 06 覆土：33～34
大鍛冶場Ⅲ期の造成土：35～48

49 淡橙色粘土
50 暗褐色土
51 暗褐色土
52 淡黄褐色粘土
53 橙色粘土
54 淡黒色土（かたくしまる）
55 暗橙灰色土（かたくしまる）
56 黄橙色粘土
57 暗褐色（黄色粘土わずかに含）
58 灰褐色土（かたくしまり、1 cm 以下の粘土ブロック入る）
59 淡赤褐色粘土（かたくしまる）
60 黒褐色土

大鍛冶場Ⅰ～Ⅱ期作業面：49～60

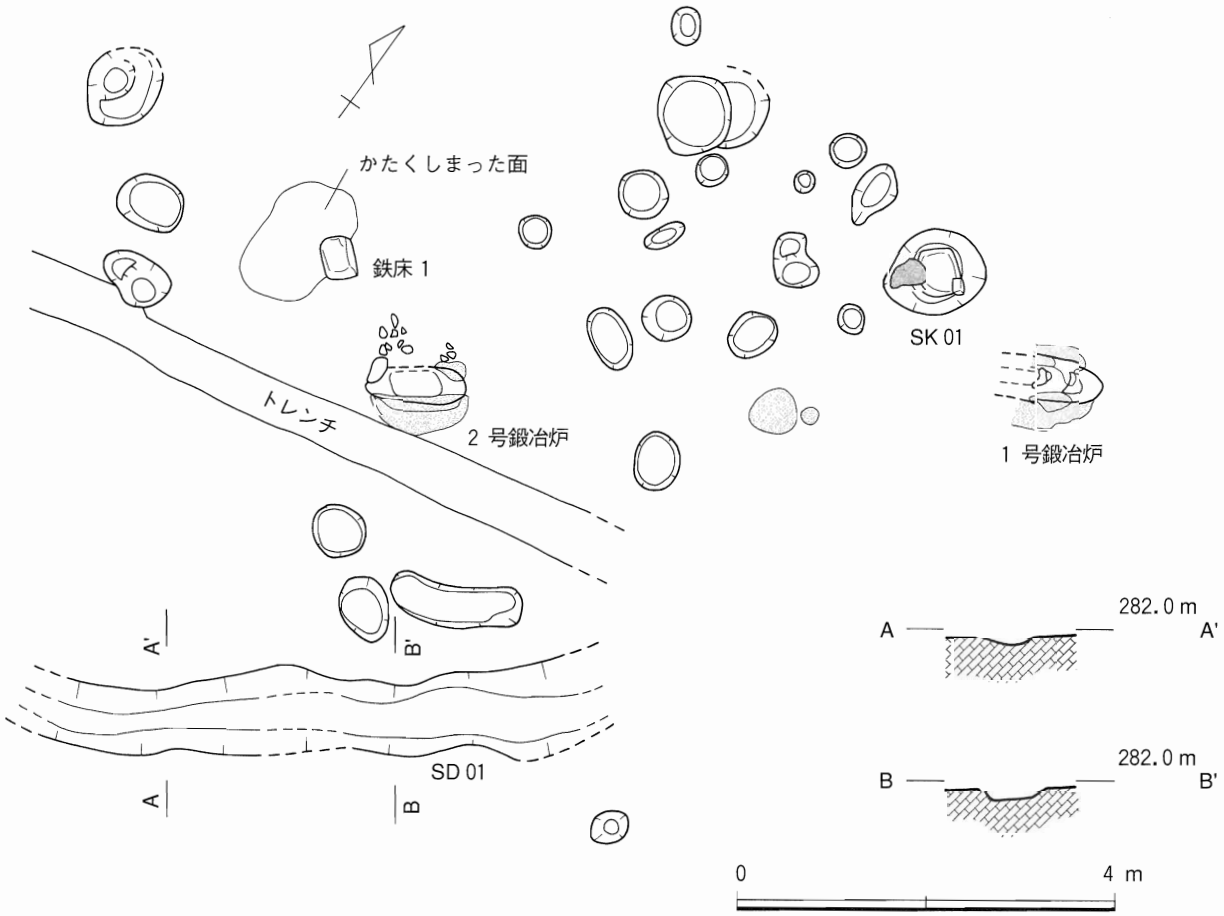
第 48 図　獅子谷遺跡土層断面図（S＝ 1/50）

第 2 節　遺構

1　大鍛冶場Ⅰ期の遺構

遺構配置（第 47～49 図）　大鍛冶場Ⅰ期の遺構は平坦面の東よりに位置しており、1・2 号鍛冶炉、鉄床 1、SD 01、SK 01 などが確認されている。遺構面は、Ⅱ期の貼床面・作業面の土を除き、遺跡の基盤層である砂層・砂礫層上面で遺構面が検出でき、2 号鍛冶炉上面で標高は 281.85 m になる。ただし、上層にこまかな貼床土があり、これらの一部でこの時期に伴うものがあるかもしれない。建物跡は確認できなかったが、2 基の鍛冶炉は主軸をそろえて直線的に配置されていることから、両者は同一の作業場内に設けられたと思われる。

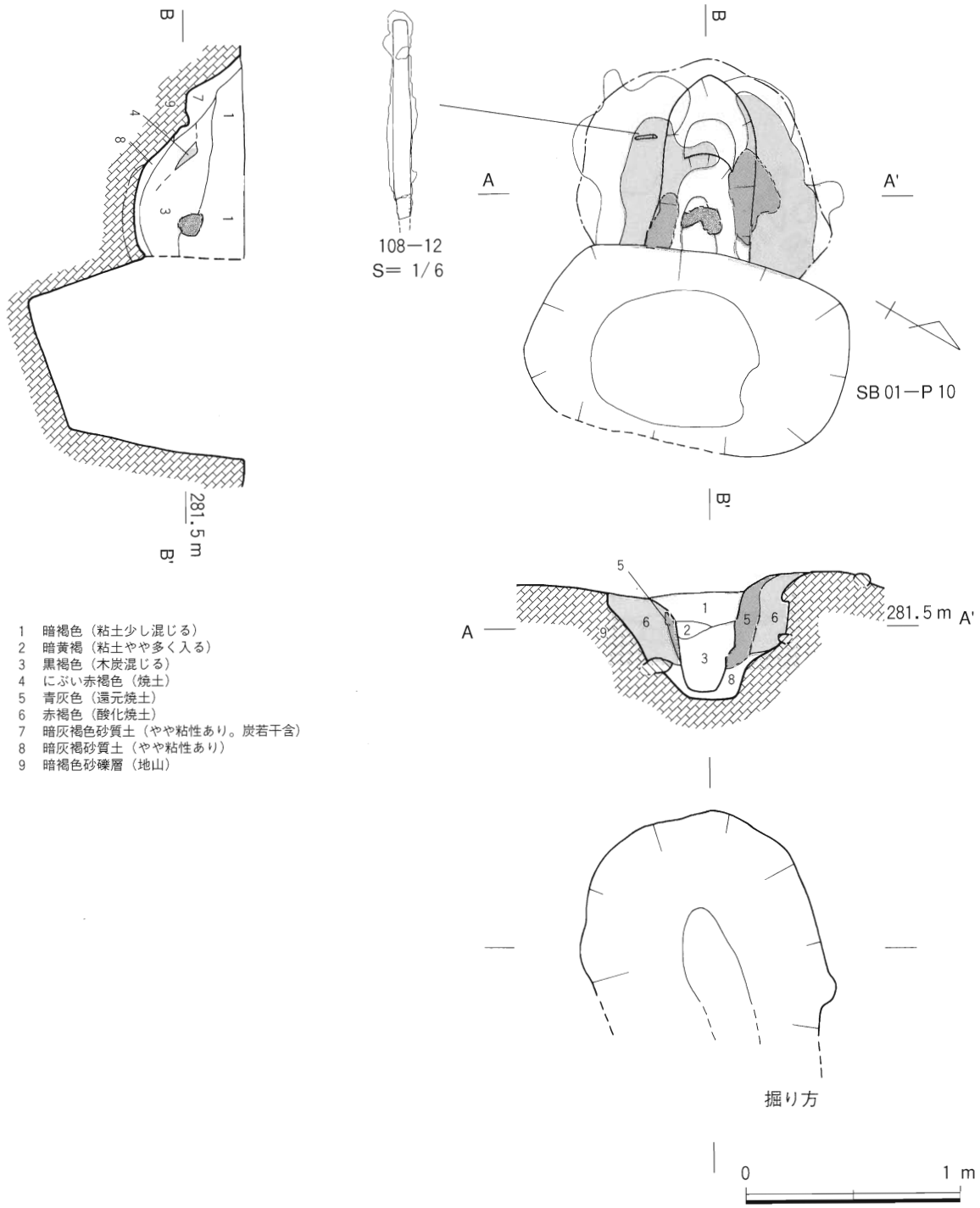
1 号鍛冶炉（第 50 図、図版 17）　平坦面の東端に位置している。この東側は急な斜面になっているが、操業後に地崩れがおきたものと思われる。火窪は現存長 0.6 m、幅 0.45 m、深さ 0.55 m で、主軸方向は N－59°－E である。鍛冶炉の西半分は大鍛冶場Ⅱ期の建物柱穴（SB 01－P 10）に切られている。鍛冶掘り方の規模は、現状で長さ 1.05 m、幅 1.1 m、深さ 0.6 m で、この内側に粘土を貼り付けて火窪が作られている。ただし、掘り方底面には粘土は貼られていない。なお、掘り方周辺には長さ 20～40㎝の礫が見られるが、これは基盤層の礫で、人為的なものではないと考えられる。火窪の炉壁は被熱により内側は青灰色に還元し、外側は赤く酸化している。火窪内側の炉壁土には粉炭が混ぜられている。火窪内の深さ 0.3 m の部分には椀形鍛冶滓（108－4）が残されており、実



第 49 図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅰ期遺構配置図（S＝ 1/80）

際に鉄を加熱していたのはこの深さまでであったと考えられる。炉壁北長辺の東よりの位置には、「箸摺止め釘」[1]と思われる鉄製品（108－12）が原位置で残っており、東側から送風されたと推測される。なお、この鍛冶炉については年代決定のため熱残留磁気の測定を実施した。

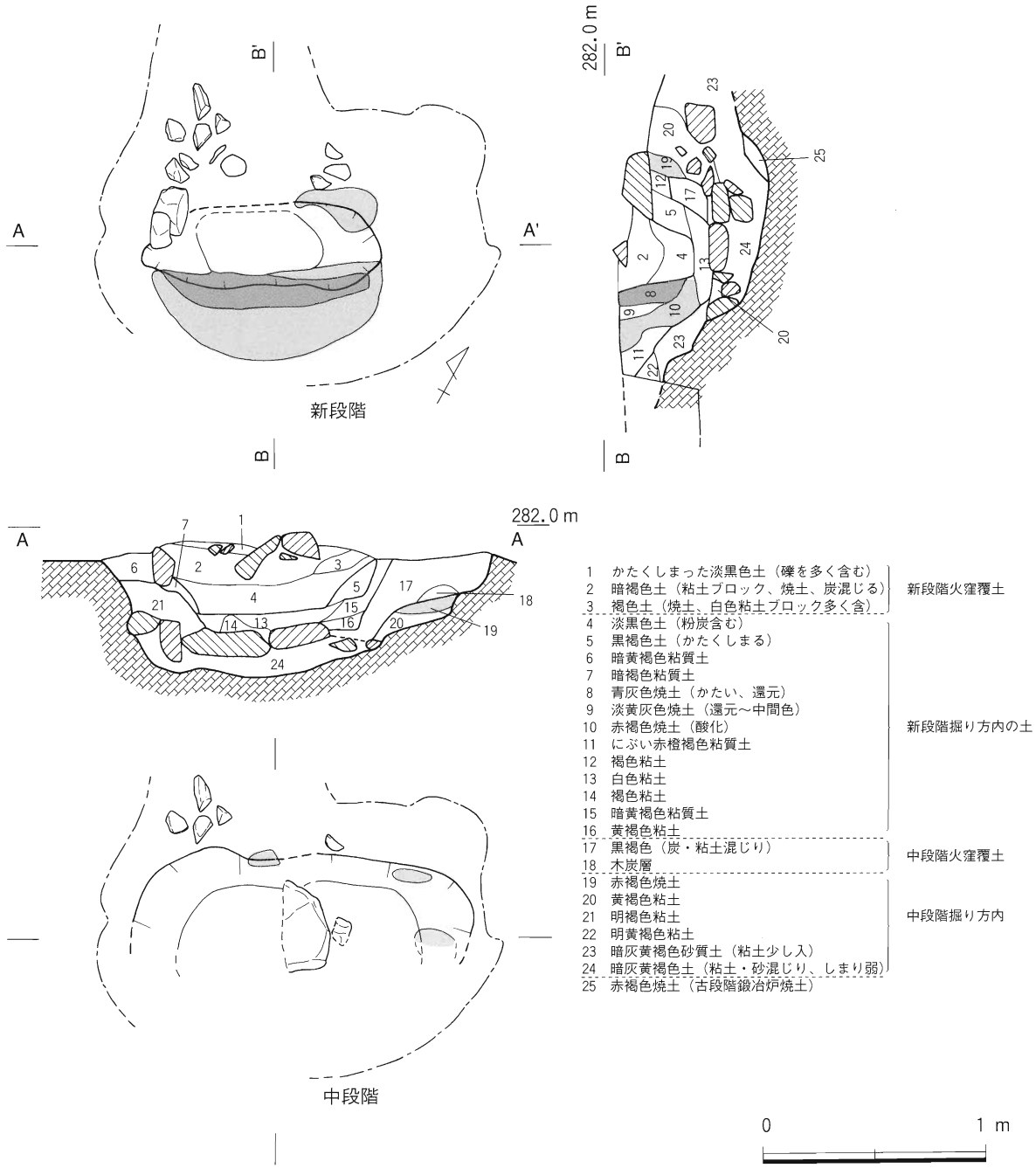
2 号鍛冶炉（第 51～53 図、図版 17・18）　1 号鍛冶炉から西へ 5.8 m のところに位置する。土層を見る限り、2 度の造り直しが認められる。新段階の火窪は長さ 1.1 m、幅 0.4 m、深さ 0.25 m で、炉の主軸方向は N－57°－E である。東端から北長辺にかけての炉壁には 10～20㎝の石が埋め込まれていた。南長辺の火窪壁は被熱により内側が還元して青灰色になり、外側が酸化して赤褐色になっている。火窪内部には粉炭を含む淡黒色土が入っていた。送風方向は断言できないが、羽口



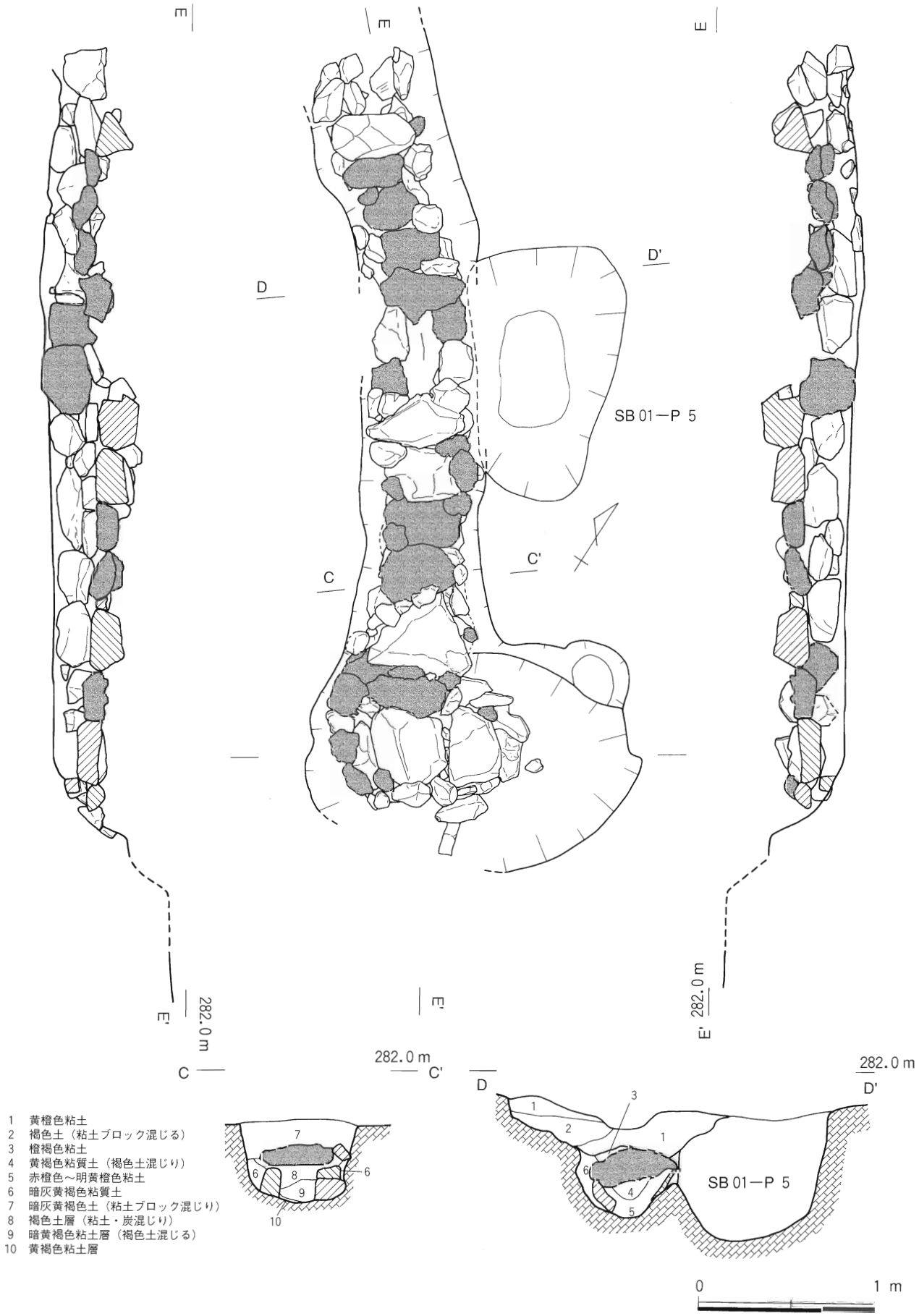
第 50 図　獅子谷遺跡 1 号鍛冶炉実測図（S＝ 1/30）

片が火窪東端付近の覆土中から出土しており、これがこの炉に伴うものならば東側から送風されたと考えられる。鉄床 1 との位置関係を考慮すると、さらにその可能性が高いと思われる。

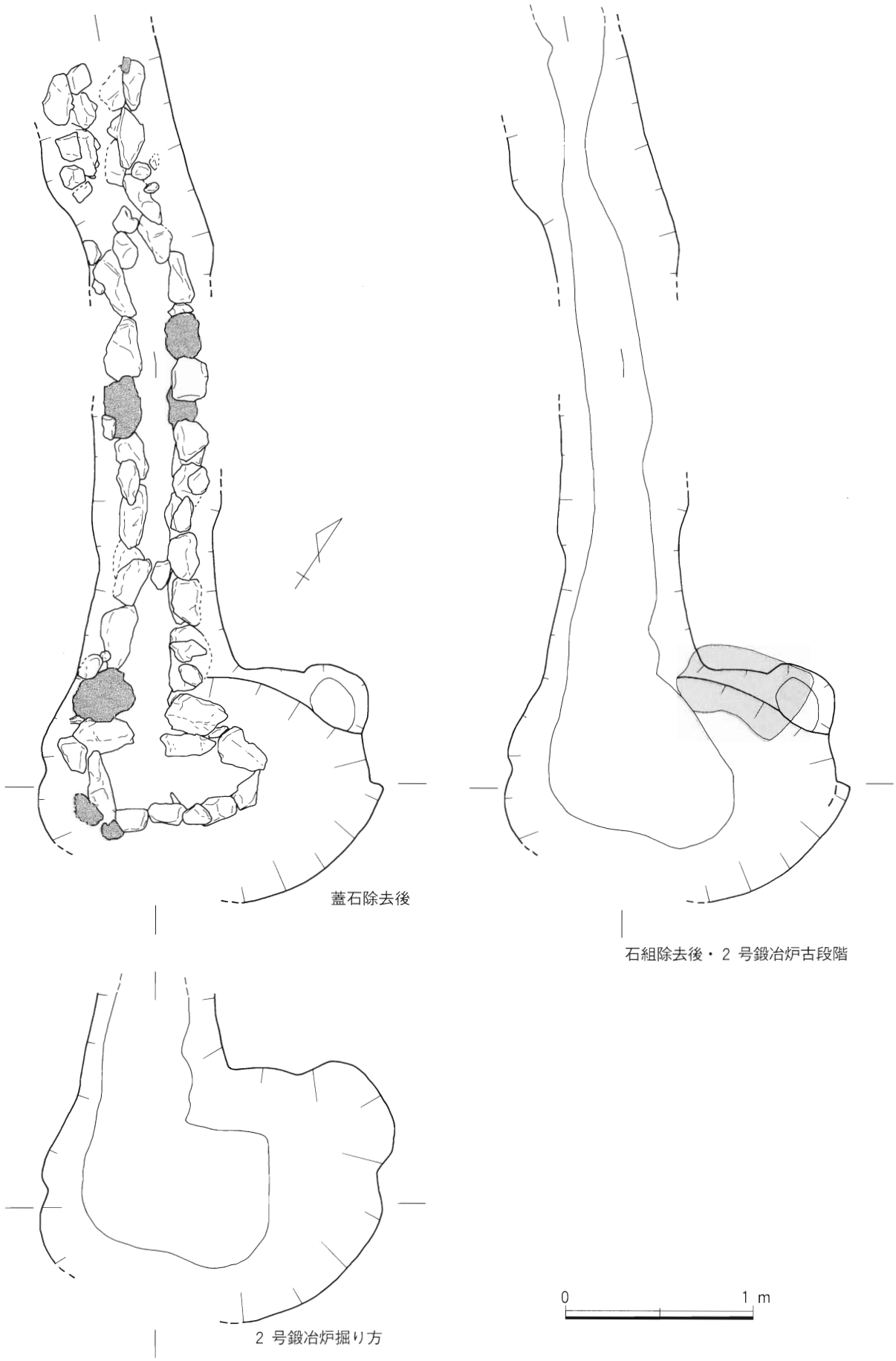
中段階の鍛冶炉は、新段階の鍛冶炉に切られているため全体の形ははっきり分からないが、炉壁北長辺が残っており、新段階の鍛冶炉よりも 20cmほど北側に位置していたと思われる。炉壁は内側が赤褐色に焼けているが、被熱の程度はやや弱いように思われる。中段階の鍛冶炉を造る時点で石や鉄滓を用いた地下構造が設けられている。地下構造を造るにあたっては、まず長さ 1.7 m、幅 1.2 m、深さ 0.5 m 程度の掘り方が掘られ、さらに掘り方北側に長さ 3.4 m 以上、幅 0.6 m の溝が取り付けられている。そして、鍛冶炉掘り方内に長方形の空間を作るようにして石・鉄滓が置かれ、また北側の溝にも壁面に沿って石や鉄滓が並べられ、これらの上に大形の石や鉄滓で蓋がされている。鍛



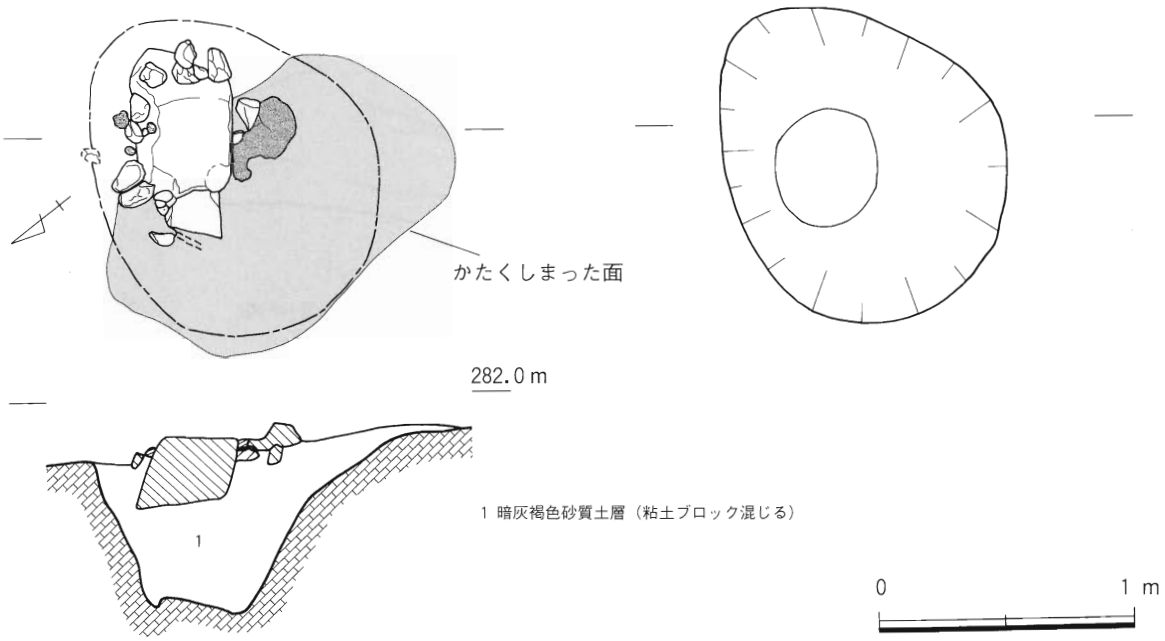
第 51 図　獅子谷遺跡 2 号鍛冶炉実測図（S＝ 1/30）



第 52 図　獅子谷遺跡 2 号鍛冶炉地下構造実測図（S＝ 1/30）



第 53 図　獅子谷遺跡 2 号鍛冶炉地下構造・掘り方実測図（S= 1/30）



第 54 図　獅子谷遺跡鉄床 1 実測図（S＝ 1/30）

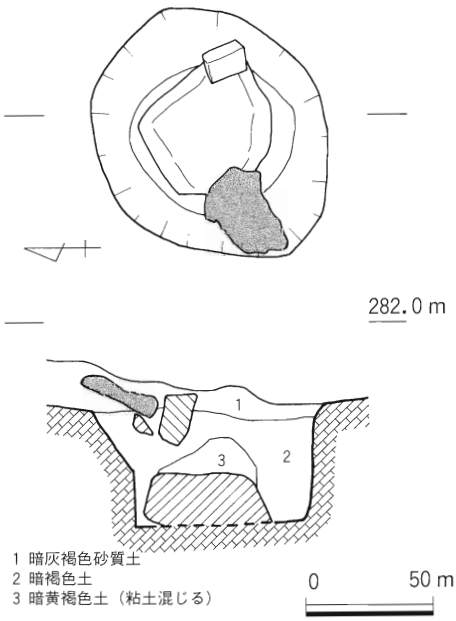
冶炉掘り方底面の標高は 281.27 m、溝の北側の底面の標高は 281.25 m でほとんど傾斜していないため、地下に浸透した水を排出するよりもむしろ、湿気の排除を目的にしたと思われる。このような構造は近世のたたらの地下構造に見られる伏樋と類似している。こうした施設を鍛冶炉の地下に設ける例は文献[2]では伝えられているが、実際に発掘調査で確認された例は初めてである。

古段階の鍛冶炉は中段階の鍛冶炉の掘り方で大部分が壊されてほとんど分からないが、地下構造の石の下に赤褐色焼土が見られることからその存在が推測される。

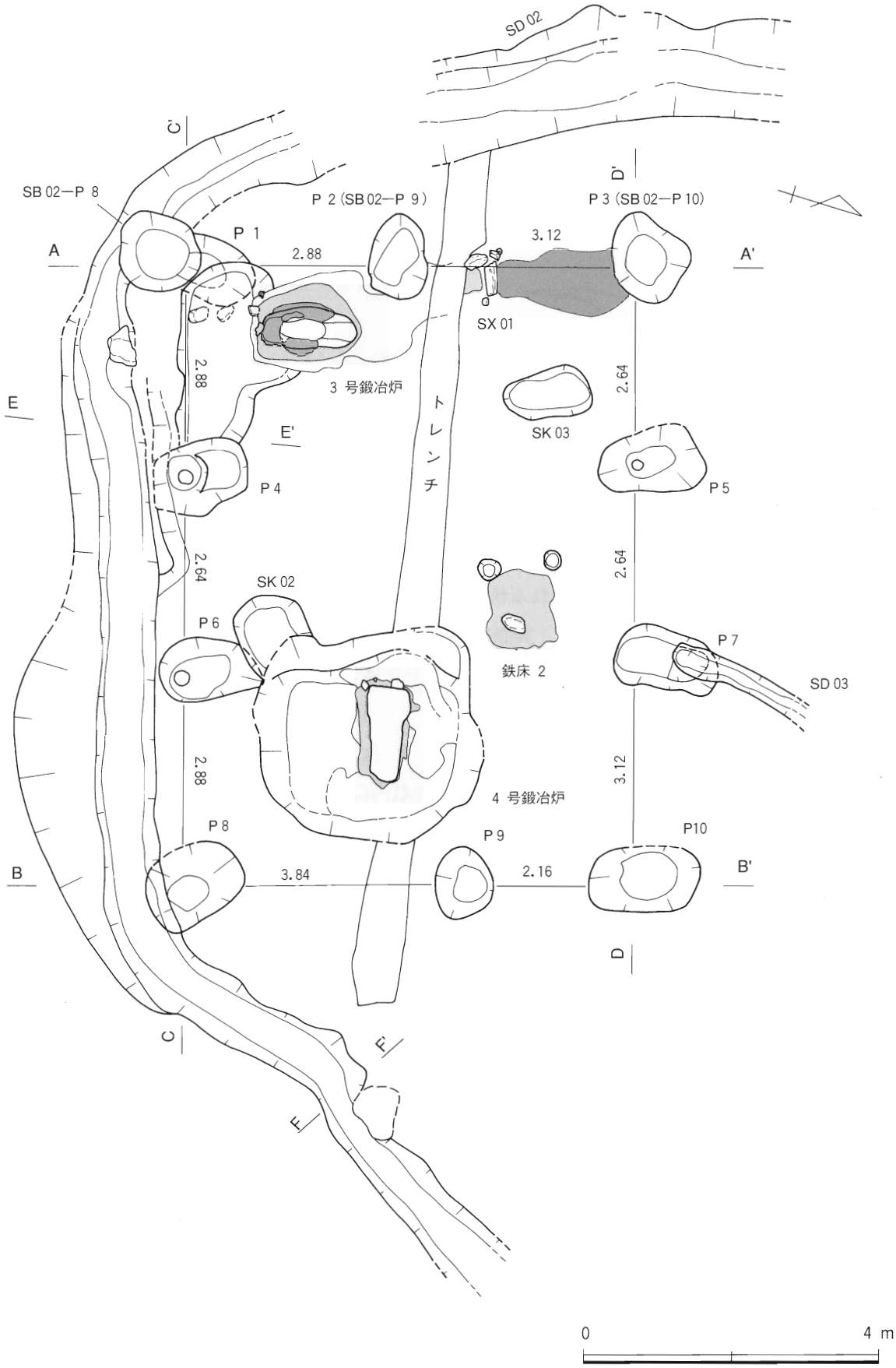
鉄床 1　（第 54 図、図版 19）　2 号鍛冶炉から北西へ 1.5 m に位置し、Ⅱ期の SK 03 の下から検出された。長径 1.35 m、短径 1.1 m、深さ 0.7 m の土坑内に、長さ 62.1cm、幅 39.6cmの鉄床石（114－44）が据え付けられている。鉄床石は被熱のためか赤みを帯びた色をしており、上面には小判形にくぼんだ光沢を持つ部分が認められる。これはこの上に置かれた鉄床の痕跡か、もしくはこの石の上で直接鍛打された鉄の痕跡と考えられる。鉄床石周辺の土は鍛冶作業で踏み固められたためか硬くしまっていた。

SD 01（第 49 図）　SD 01 は 2 号鍛冶炉の 3 m 南側で検出された。Ⅱ期大鍛冶場跡の建物柱穴や 4 号鍛冶炉掘り方に切られている。1・2 号鍛冶炉の主軸方向と平行してのびていることから、これらと共存したと考えている。Ⅰ期の大鍛冶場を区画する溝だったと考えられる。

SK 01（第 55 図）　1 号鍛冶炉の北西 1.2 m に位置する長径 1.1 m、短径 0.9 m、深さ 0.45 m の土坑である。土坑底面には長さ 0.5 m の石が置かれ、その上に長さ 20～40cmの石や再結合滓が置かれていた。再結合滓はこの部分で形成されたものではなく二次的に運ばれたものである。土坑埋土のしまりはあまり強くなかった。土坑の性格は不明だが、何らかの鍛冶作業に関わった可能性も考えられる。



第 55 図　獅子谷遺跡 SK 01 実測図（S＝ 1 /30）

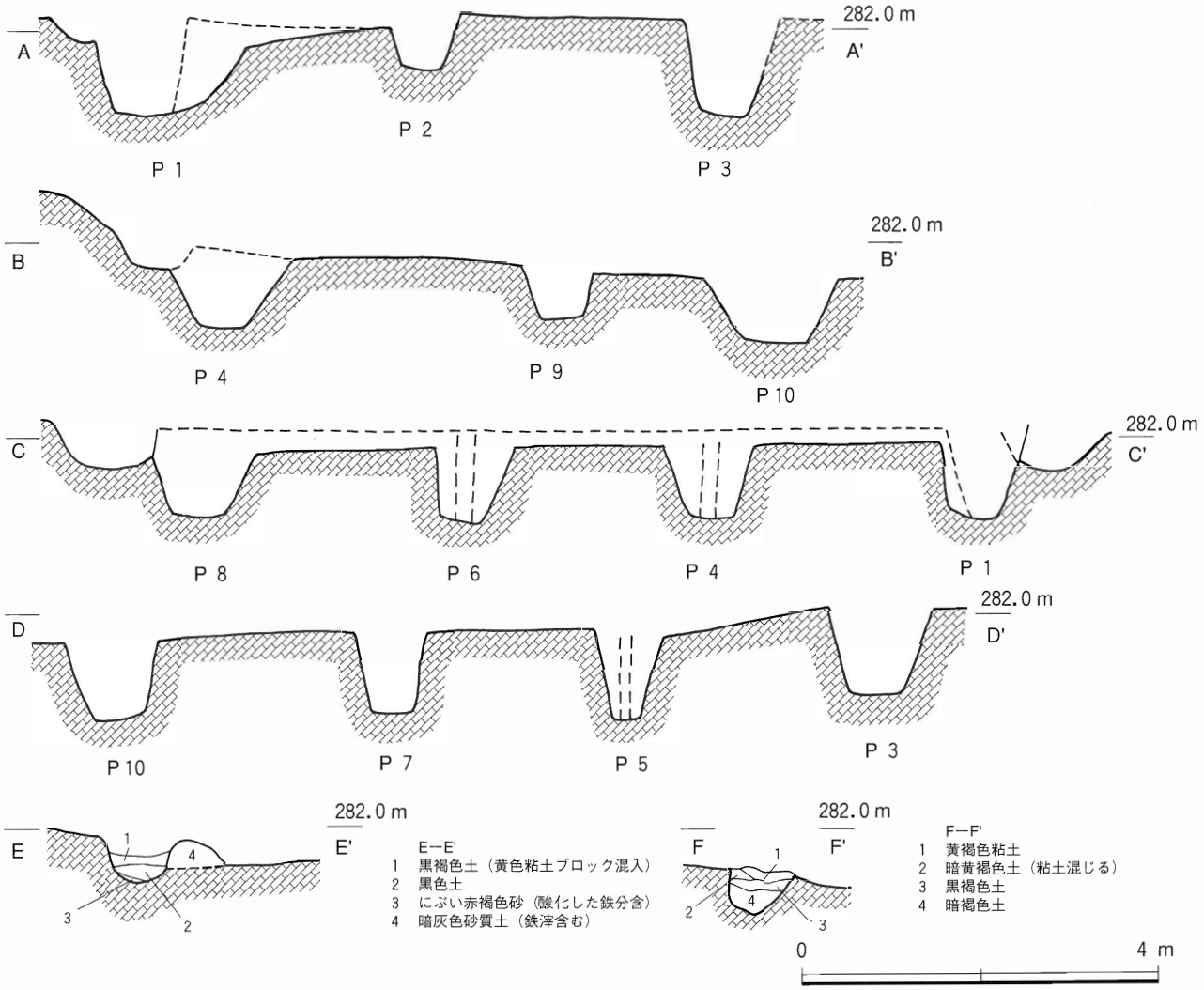


第 56 図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅱ期遺構図（S＝ 1/80）

2　大鍛冶場Ⅱ期の遺構

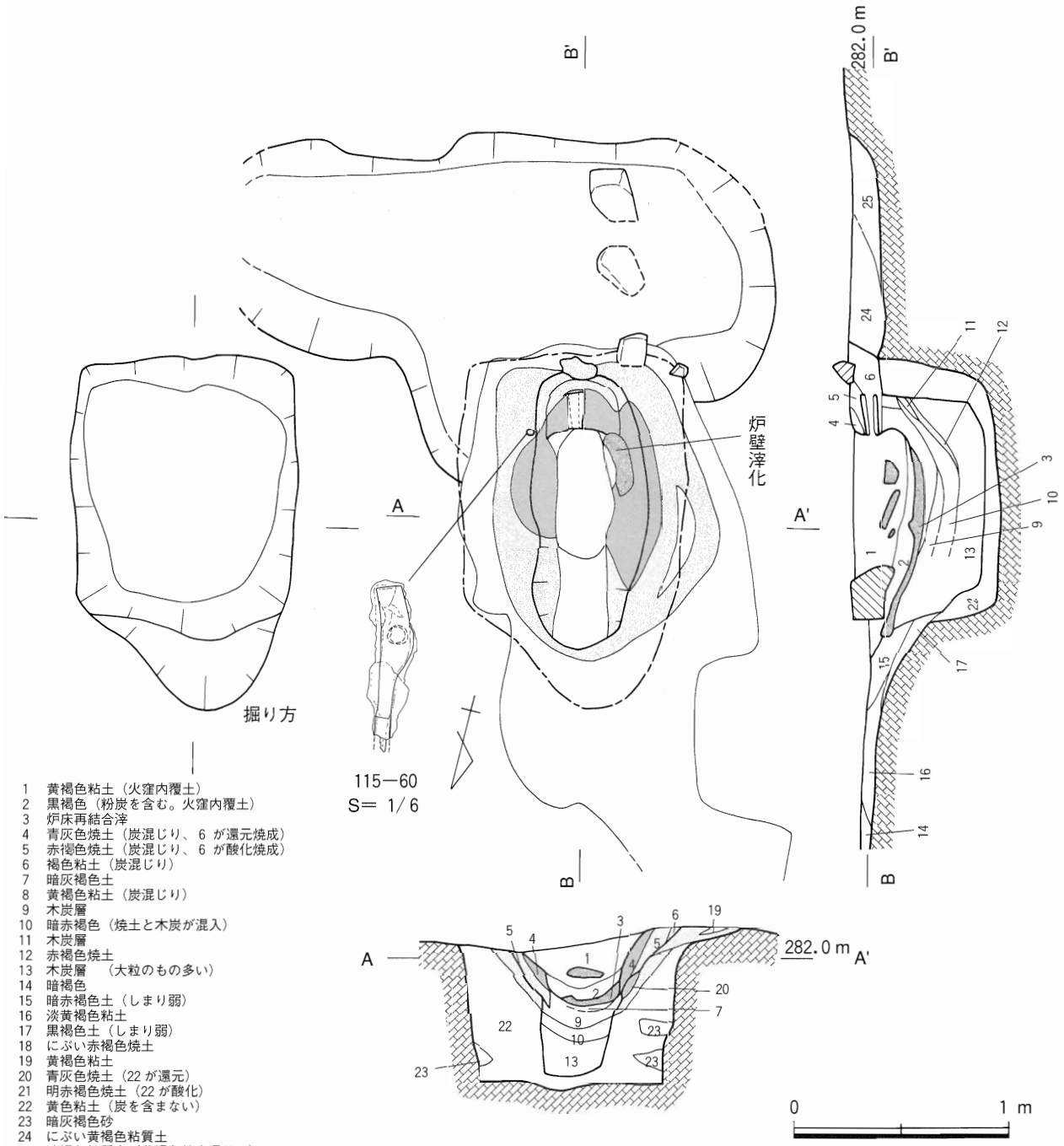
SB 01（第47・48・56・57図）　Ⅱ期の大鍛冶場は平坦面の東よりに位置する東西 3 間×南北 2 間の掘立柱建物（SB 01）で、この内部に 1・2 号鍛冶炉や鉄床 2、SK 02、建物外に SD 03 がある。桁行長は8.4 m、梁行長6.0 m で、棟方向はN－73°－Eになる。西辺のＰ１・２・３はⅢ期の SB 02 の柱穴と重複している。柱間はＰ１－Ｐ２－Ｐ３が10尺－10尺、Ｐ１－Ｐ４－Ｐ６－Ｐ８が9.5尺－９尺－9.5尺、Ｐ10－Ｐ７－Ｐ５－Ｐ３が10尺－９尺－９尺、Ｐ８－Ｐ９－Ｐ10が13尺－７尺を指向したと思われる。Ｐ８－Ｐ９の柱間は広く、この部分に入口が設けられた可能性も考えられる。柱穴は0.5～１ m前後の深さで、拳大以上の礫を多く含む砂礫で埋められており、Ｐ４、Ｐ５、Ｐ６には柱痕が空洞状になって残っていた。作業面は、Ⅰ期の遺構面上に整地土や貼床がされて形成されており、その標高は282.0 m になる。柱穴内や作業場の貼床土、整地土から鍛冶関連遺物のほか近世の陶磁器が出土した。Ｐ７では近代の磁器も１点出土したが混入の可能性もある。

SB 01 の西から南東側にかけては排水・区画用と考えられる SD 02 が巡っていた。SD 02 は、SB 01 の西側の部分ではⅠ期の SD 01 と直交する方向にのびており、Ⅰ期に掘られていた可能性も考えられる。SB 01－Ｐ１からＰ６の間では、SD 02 の内側が作業面よりも約 30cm土手状に高くなっている部分があった。SD 02 覆土中から近世の陶磁器や多くの鍛冶関連遺物が出土している。



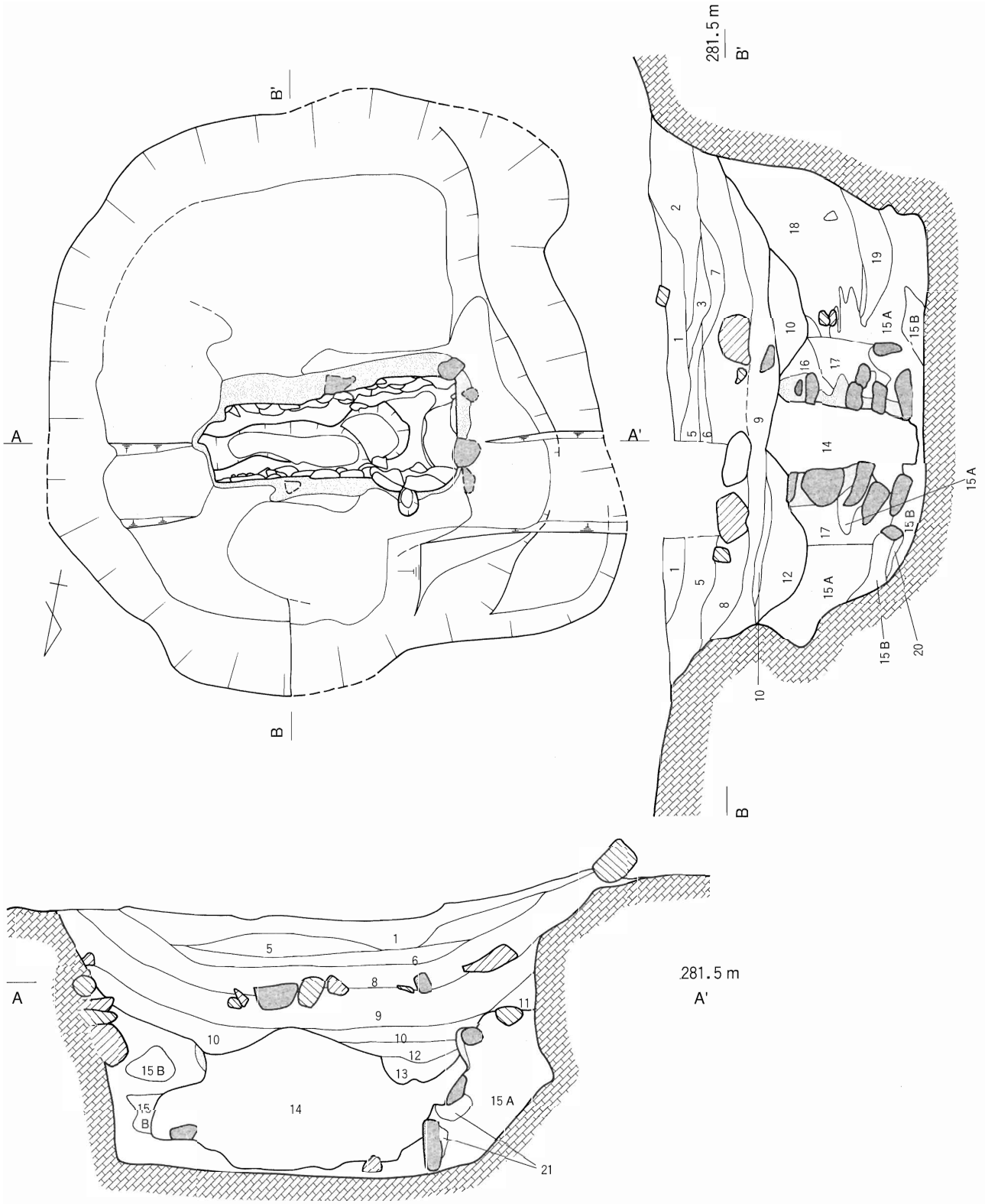
第57図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅱ期 SB 01・SD 02 断面図（S＝ 1/80）

3 号鍛冶炉（第 58 図、図版 19・20）　SB 01 の南西隅近くに位置する。火窪は長さ 1.05 m、幅 0.55 m の長楕円形をしており、主軸方向は N－14°－W である。鍛冶炉の掘り方は長さ 1.3 m、幅 1.05 m、深さ 0.7 m の隅円方形に掘られており、北辺にはさらに擂鉢を半分にしたように窪んだ部分がとりついている。掘り方の内側には均質な粘土が貼られているが、火窪内壁となる部分には粉炭を多く混ぜた粘土が用いられている。火窪の深さは 0.6 m で下半部には木炭が充填されており、上面から 0.3 m 深さで炉床再結合滓[3]が認められた。このことから、実際に鉄を加熱していた部分は火窪の上半部であったことが分かる。炉の南端部では鞴の羽口（115－53）が原位置で確認されており、南側から送風されたことが明らかになった。羽口の設置角度は 5°である。3 号鍛冶炉の南側では東西 2.4 m 以上、南北 1.1 m の範囲で深さ 15cm の窪みがあった。この窪みの中には、25cm 前後の石が 2 つ入っており、にぶい黄褐色から暗褐色粘質土で覆われていた。羽口の位置からこの部分が鞴座



1　黄褐色粘土（火窪内覆土）
2　黒褐色（粉炭を含む。火窪内覆土）
3　炉床再結合滓
4　青灰色焼土（炭混じり、6 が還元焼成）
5　赤褐色焼土（炭混じり、6 が酸化焼成）
6　褐色粘土（炭混じり）
7　暗灰褐色土
8　黄褐色粘土（炭混じり）
9　木炭層
10　暗赤褐色（焼土と木炭が混入）
11　木炭層
12　赤褐色焼土
13　木炭層　（大粒のもの多い）
14　暗褐色
15　暗赤褐色土（しまり弱）
16　淡黄褐色粘土
17　黒褐色土（しまり弱）
18　にぶい赤褐色焼土
19　黄褐色粘土
20　青灰色焼土（22 が還元）
21　明赤褐色焼土（22 が酸化）
22　黄色粘土（炭を含まない）
23　暗灰褐色砂
24　にぶい黄褐色粘質土
25　暗褐色粘質土（黄褐色粘土混じり）

第 58 図　獅子谷遺跡 3 号鍛冶炉実測図（S＝ 1/30）



1　淡黒色土
2　暗褐色土
3　炭化物層
4　黒褐色土（粘土ブロック混じる）
5　暗灰褐色土（粘土砂混じり）
6　灰黄褐色粘質土
7　暗灰黄褐色砂質土（粘土混じり）
8　暗黄褐色土（φ 1 cm 大の粘土ブロックや石、鉄滓多く入る）
9　暗褐色土（粘土ブロック混じる）
10　にぶい黄褐色粘土（焼土ブロック、木炭含）
11　褐色砂（粘土ブロック少し含）
12　木炭層　（粘土ブロック、焼土ブロック混入）
13　粘土・焼土ブロック

撹乱層

14　木炭層（粘土・焼土を含まない）
15 A　黄褐色粘土
15 B　淡黄色粘土
16　褐色砂
17　灰褐色砂
18　暗褐色砂
19　黒褐色砂
20　暗灰褐色砂
21　灰褐色砂

0　1 m

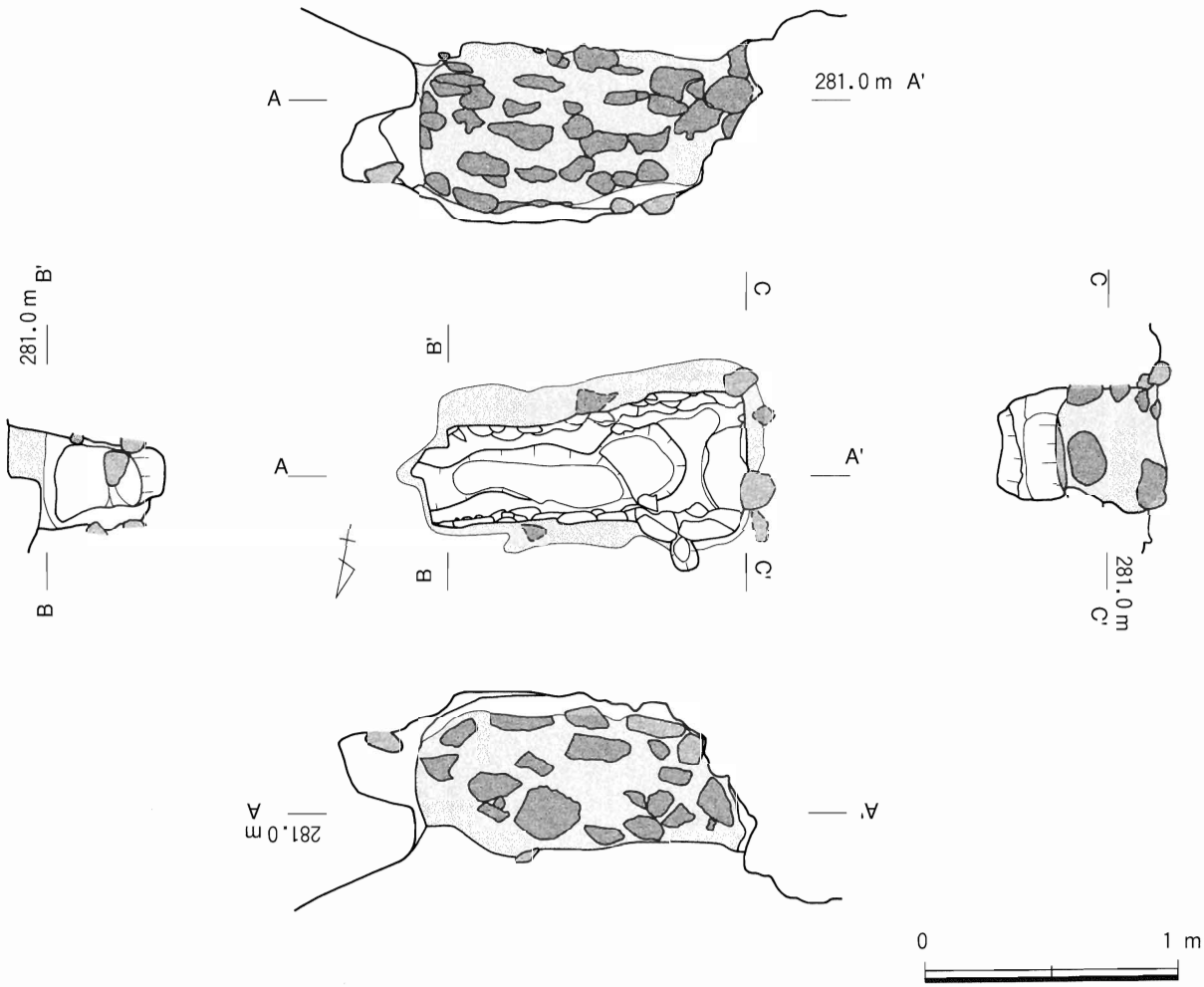
第 59 図　獅子谷遺跡 4 号鍛冶炉実測図（S＝ 1/30）

になると考えられる。窪みと鍛冶炉との間には、長さ18cmの石が置かれており、被熱により赤く変色していた。鍛冶炉の熱から鞴を守るための土壁の痕跡は確認できていないが、もし設けられていたとすればこの石よりも南側にあったと思われる。西側長辺の羽口付近の炉壁は滓化が進んでおり、東西の長辺の内側、南側の羽口上部にあたる範囲までが被熱により青灰色に還元し、その外周や火窪の北側が赤褐色に酸化していた。鍛冶炉の横断面では青灰色焼土が 2 層に分かれており、鍛冶炉の造り直しがされた可能性も考えられる。鍛冶炉短軸側の炉壁は、羽口の装着されている南側はオーバーハングをするような急な立ち上がりをしているのに対し、北側は炉床から緩やかに上がっている。炉の東長辺の南端付近には「箸摺り止め釘」と思われる鉄製品（115－60）が残っていた。

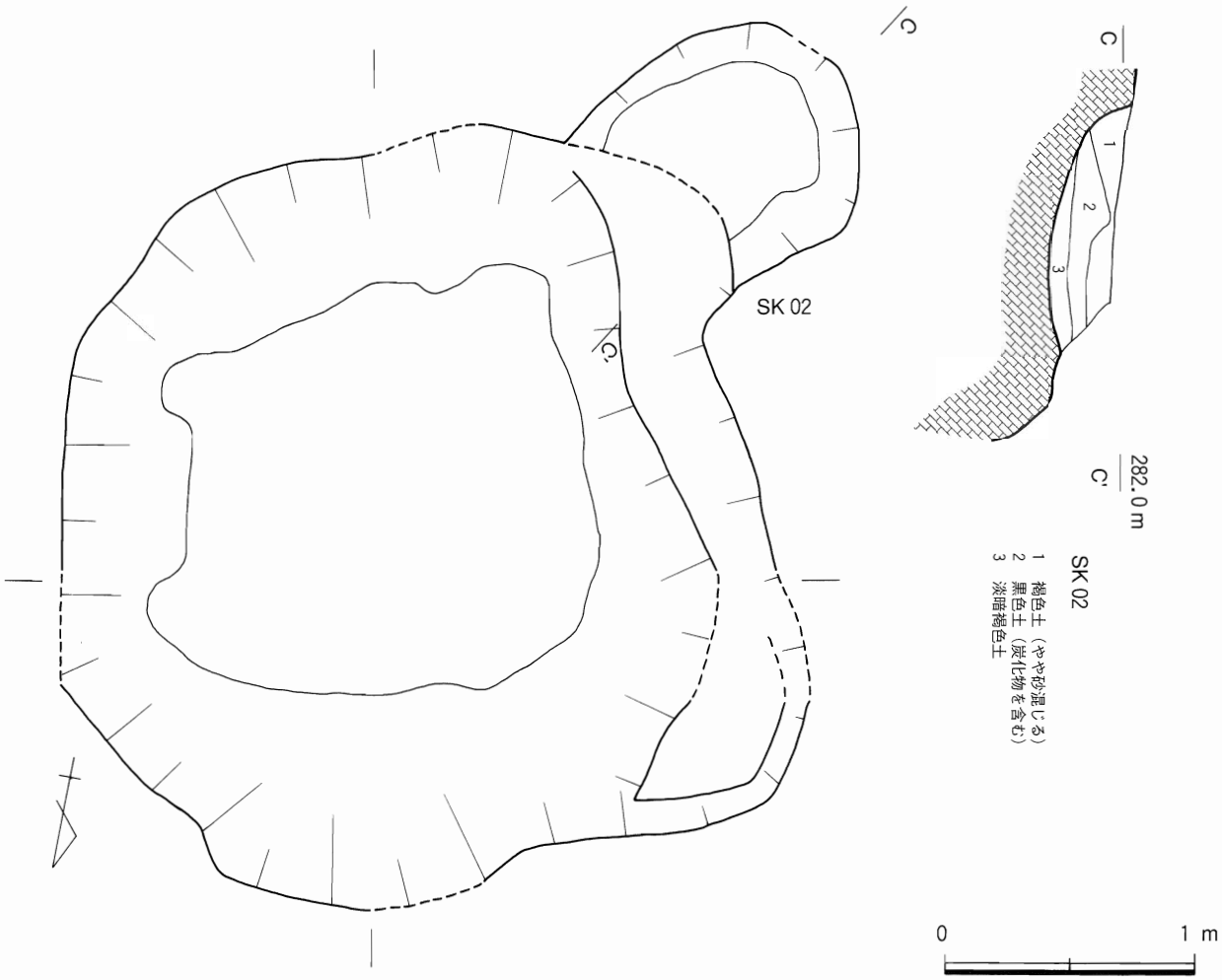
なお、3 号鍛冶炉については年代決定のため熱残留磁気の測定を実施した。

4 号鍛冶炉（第 59～61 図、図版 20～22）　SB 01 の中央よりも東寄り、3 号鍛冶炉の約 4 m 東に位置する。操業後に、遺構面から約 0.7 m の深さまで掘り込まれて壊され、その後で土砂や石などで埋め戻されていた。ただし、鍛冶炉地下構造の下半部は残存していた。地下構造は、東西 2.85 m、南北 3.1 m、深さ 1.45 m の掘り方内部を粘土や砂で埋めながら、その中央に長さ 1.2 m、幅 0.4～0.5 m の長方形の空間を造るように鉄滓や粘土ブロックを積み上げて構築されている。この主軸方向は N－75°－E である。なお、このような構造の鍛冶炉はこれまで報告されていないが、大鍛冶場における位置関係や、地下構造の平面形態が鍛冶炉の火窪に類似していることから鍛冶炉と判断した。

地下構造の築き方は長辺側と短辺側とで大きく異なっている。短辺側は、鉄滓を地下構造の壁体



第 60 図　獅子谷遺跡 4 号鍛冶炉地下構造内壁実測図（S＝ 1/30）



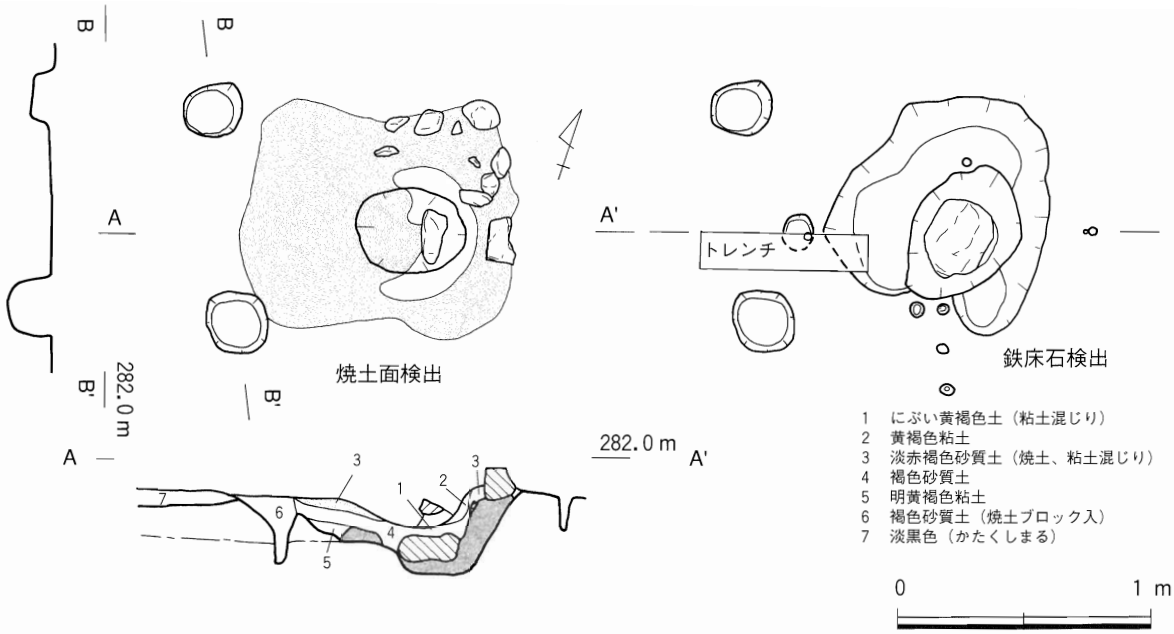
第61図　獅子谷遺跡 4 号鍛冶炉掘り方・SK 02 実測図（S＝ 1/30）

にあまり用いておらず、また掘り方の壁面から地下構造壁体まで粘土だけで埋められて砂は用いられていない。東短辺は鉄滓がほとんど用いられておらず、地下構造の内壁面は大きくオーバーハングした形になっているが、これは鍛冶炉を築いた後で粘土が内側へ崩れたためかもしれない。長辺側では、掘り方の壁面側が粘土で埋められる一方で、地下構造の壁体は鉄滓と粘土塊を交互に積み上げられ、粘土部分と壁体の間が砂で埋められていた。地下構造の内壁は構築されたのち焼き締められており、被熱により赤褐色に酸化している。ただし底面は被熱の跡が見られない。地下構造内部は 3 ㎝前後の木炭で充填されていた。地下構造は現状で掘り方の底面から 0.75 m の高さまで残存していたが、そこから上部は破壊されていたためどのように造られていたのか明らかではない。ただし、この部分は他の鍛冶炉の火窪と同じような平面形態や規模を持つことから、同様のかたちで作業面まで築き上げられ、火窪が造られたのではないかと思われる。4 号鍛冶炉やその周辺には送風方向を示す直接的な手がかりは残されていなかったが、東側は建物の壁が近く鍛打作業に適していないのに対し、北西には鉄床 2 があることから、東側に鞴が置かれ、送風されたと思われる。

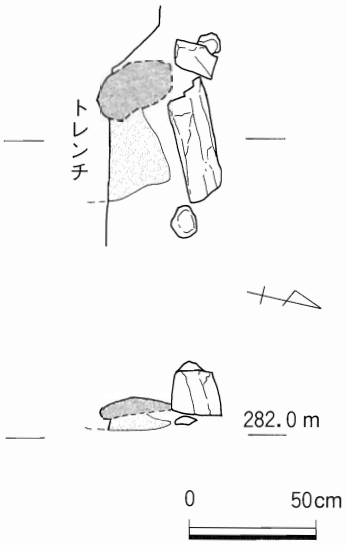
上層の埋戻し土中から鍛冶関連遺物や近世陶磁器が出土しており、また地下構造に転用された鉄滓類も回収されている。

なお、鍛冶炉掘り方は、南西に位置する長さ 1.1 m 以上、幅 1 m、深さ 0.3 m の土坑、SK 02 を切っている。SK 02 はⅡ期の作業面から掘り込まれているが、その性格については不明である。

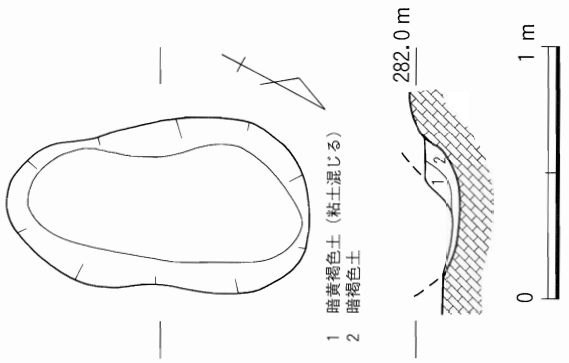
鉄床 2（第 62 図、図版 22）　鉄床 2 は 4 号鍛冶炉の北西 1.6 m に位置する。Ⅱ期の作業面を掘



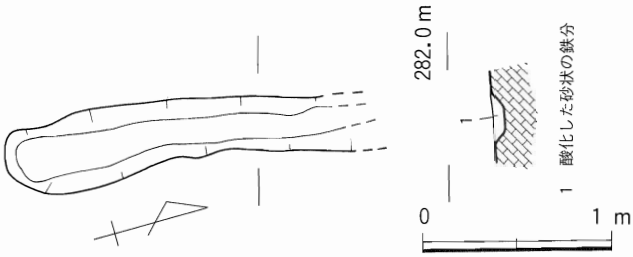
第 62 図　獅子谷遺跡鉄床 2 実測図（S＝ 1/30）



第 63 図　獅子谷遺跡 SX 01
実測図（S＝ 1/30）



第 64 図　獅子谷遺跡 SK 03 実測図（S＝ 1/30）



第 65 図　獅子谷遺跡 SD 03 実測図（S＝ 1/40）

り下げたところ、標高約 281.9 m の面で、1.1 m×0.9 m の範囲で弱く赤変した焼土が検出できた。焼土面中央部は被熱しておらず、周囲に黄褐色粘土が貼られた 0.4 m×0.3 m の長楕円形の浅い窪みが見られた。この部分に鉄床が置かれた可能性が考えられる。さらに焼土面を掘り下げたところ、0.8 m×0.85 m の落ち込みの中に鉄床石（121－84）が据え付けられていた。鉄床石の上面には小判形の窪みをもった再結合滓が付着していた。これは、この上に置かれた鉄床の痕跡か、この石の上で直接鍛打された鉄の痕跡ではないかと思われる。再結合滓が物体の形状をとどめて形成されていることから考えると前者の可能性が高いと思われ、この場合、鉄床石は上に置かれ鉄床が鍛錬によって沈み込まないようにするための礎石のような役目をもっていたと考えられる。鉄床石上面の窪みの

形状は鉄床 1 の状況と類似しており、また、鉄床石上面にこうした再結合滓が付着している例は岡山県大成山たたら遺跡群においても報告されている[4]。鉄床石の周囲にも再結合滓（121－82）が見られるが、これは鉄に含まれていた滓や、鍛打されて飛び散った粒状滓・鍛造剥片が鉄床石の周囲で再結合して形成されたものと思われる。鉄床石の周囲には径 5 ㎝前後、深さ 20㎝以下の小さな穴が見られ、この遺構に伴うと思われるが、性格については不明である。鉄床 2 の東側には径約 20㎝の 2 基のピットが 80㎝の間隔をあけて並んでいたがこれはこの遺構に伴うものか分からない。

なお、鉄床 2 は検出標高が低いためⅠ期に伴う可能性も残るが、Ⅰ期には鉄床 1 があること、鉄床石が鍛打により沈み込んだ可能性もあること、鉄床石の上に鉄床を置いたとすればⅡ期の作業面よりも高い位置に鉄床の上面が現れると想定できることから、ここではⅡ期の遺構と考えた。

SX 01（第 63 図、図版 22）　SB 01 の西辺で、P 2 の北側に位置する。赤く酸化した焼土面とその周りに埋め込まれた鉄滓、北側の立石で構成される。焼土は東西 35㎝の範囲で広がっているが、南北の広がりや、焼土南側の立石の有無については遺構を検出する前にトレンチで掘り抜いてしまったため分からない。遺構の性格は断定できないが、竈跡や加熱した鉄を仮置きした場所などの可能性が考えられる。遺構の構造や作業場内の位置関係は後述するⅢ期の SX 02 と類似している。

SK 03（第 64 図）　SB 01 の北東隅付近に位置する長さ 1.2 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 m の土坑で、Ⅱ期の作業面から掘り込まれている。位置的にⅠ期の鉄床 1 の上に設けられており、Ⅲ期の SD 04 に切られている。遺構の性格については不明である。土坑内から鉄塊（123－100）が出土している。

SD 03（第 65 図）　SB 01 北側の建物外部に位置し、P 7 を切って造られている。南北にのびる幅 30㎝、深さ 8 ㎝の浅く細長い溝で、現状で長さ 1.4 m あるが、北側は調査の都合上発掘できず、さらに長くなるようである。溝内には酸化した砂状の鉄分が沈殿しており、水が流されたと思われる。大鍛冶場における位置や溝内の堆積物は後述するⅢ期の水場遺構と類似している。

3　大鍛冶場Ⅲ期の遺構

SB 02（第 47・48・66～68 図、図版 23・30）　Ⅲ期の大鍛冶場は、Ⅰ・Ⅱ期の大鍛冶場よりも西側の平坦面のほぼ中央に設けられた掘立柱建物、SB 02 を中心としている。Ⅲ期の大鍛冶場作業面は、Ⅱ期の溝である SD 02 を埋め戻し、またⅡ期の作業面の上に整地土した上に貼床などをして形成されている。また、Ⅲ期の大鍛冶場は操業を終えた直後に、民家など大鍛冶場とは別の目的の建物にに造り替えられたためか、作業面が上層粘土面に覆われており、遺構によっては内部までこの粘土で埋められているものもあった。このため、この時期の遺構は非常に残存状態がよかった。

SB 02 は東西 3 間×南北 2 間の掘立柱建物で、桁行長 8.64 m、梁行長 6.3 m、棟方向は N－72°－E である。P 3 には柱根が残っており、P 6・8・9・10 には柱の腐った部分が空洞状になって残っていた。柱間は、P 1－P 2－P 3 及び P 8－P 9－P 10 は 10.5 尺－10.5 尺、P 1－P 4－P 6－P 8 及び P 3－P 5－P 7－P 10 は 9.5 尺－9.5 尺－9.5 尺前後を指向したものと思われる。建物東辺の柱穴である P 8・9・10 は、Ⅱ期の SB 01 の柱穴と重なり合っており、このことから SB 01 から SB 02 の建て替えは時期を隔てずに行われたと思われる。P 7・8 はⅡ期の SD 02 の埋土を掘り込んでおり、P 2 はⅢ期の 5 号鍛冶炉を切っている。このことから 5 号鍛冶炉は SB 01 が建てられる以前の遺構であったことが分かる。

遺構の重なりや土層から、柱穴が掘られて柱が埋設された後に、整地土が盛られ、石列・水場遺

A—A'ライン
1　淡黒褐色土（鉄滓を多く含む）
2　暗灰褐色土（鉄滓を多く含む）
3　にぶい黄褐色土（粘土ブロックを含む）
4　暗黄褐色土
5　黒色土

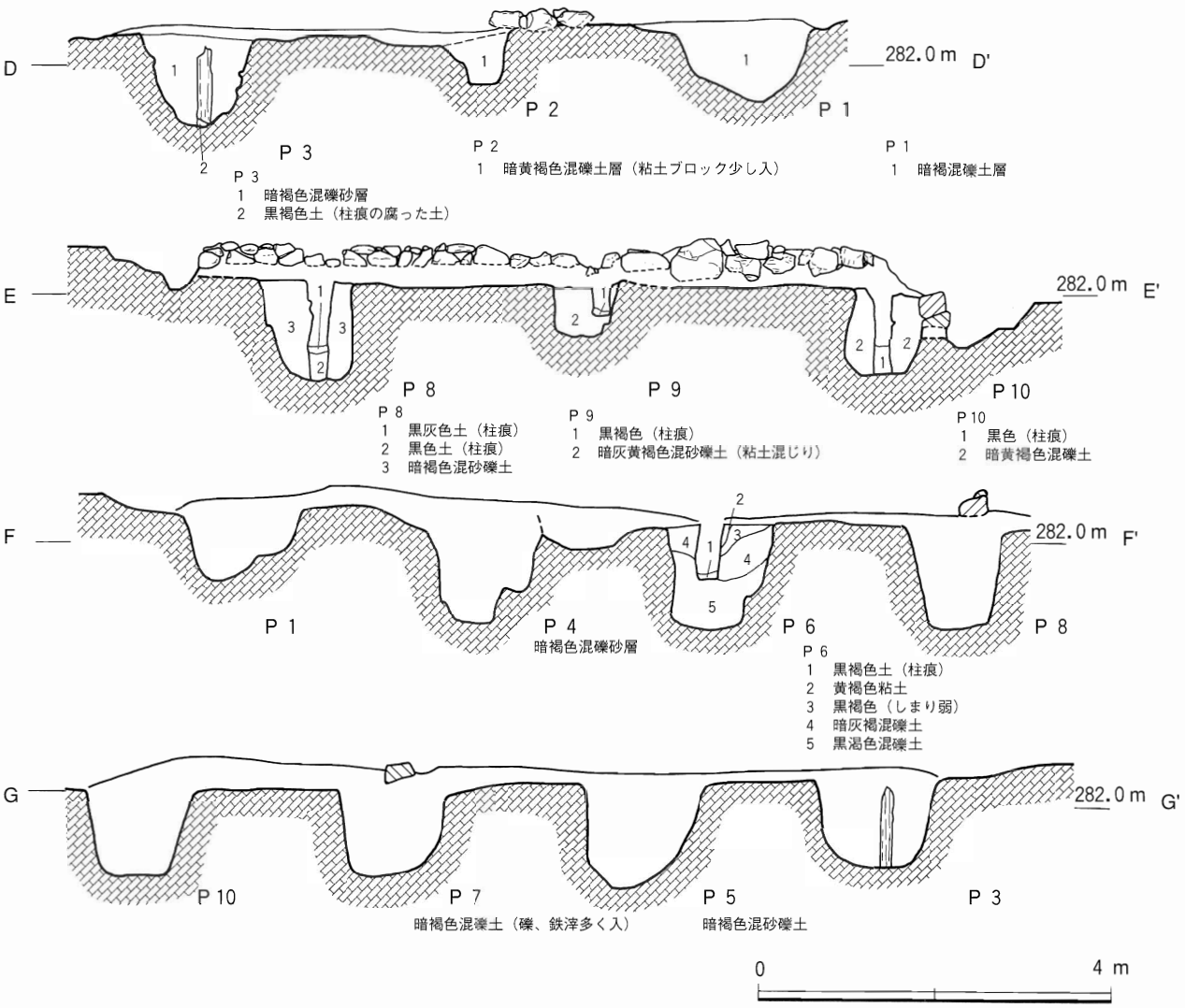
B—B'
1　暗褐色土
2　淡黒色土
3　暗黄褐色土
4　淡黒色土
5　暗黄褐色土（粘土含む）
6　暗赤褐色土（酸化した鉄分含む）
7　黒褐色土

第 66 図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅲ期遺構図（S＝1 /80）

構などが設けられたことが分かる。SB 02 東辺のＰ８－Ｐ９－Ｐ10 の並びに沿って石列 1 が、北辺のＰ７－Ｐ10 の並びに沿って石列 2 が築かれ、水場遺構などが設けられている。西辺中央付近に石列 3 が並べられていた。

建物内部には、5・6・7・8 鍛冶炉のほか、鉄床 3・4、SX 02 や土坑などが確認できた。これらのうち、5 号鍛冶炉・6 号鍛冶炉などについては、Ⅲ期の大鍛冶場の作業面を掘り下げて検出された遺構で、基盤層から掘り込まれており、層位的にみてⅡ期の遺構との前後関係は分からない。これらはⅢ期とした中でも古い遺構と位置づけられる。特に 5 号鍛冶炉は SB 02－Ｐ 2 に切られ、SB 02 の西縁に並ぶ石列 3 の下にあることなどから SB 02 よりも明らかに古い鍛冶炉である。これらを一まとめにⅢ期と呼ぶには躊躇する面もあるが、ここではⅡ期の遺構よりも西側に遺構がまとまっていることなどを重視し、ひとまずは一つの時期として大きく捉えることとしたい。

作業面には、鍛冶炉周辺に黄色粘土を用いた貼床面が見られ、建物の中央部、特に 7 号鍛冶炉の北西側には、鍛冶作業によって踏み固められたためか、黒色のしまった土の部分が広がる。作業面の高さは一定ではなく、SB 02 の北東隅や南西隅周辺が標高約 282.5 m と高くなっているのに対し、7 号鍛冶炉の北西では標高 282.25 m と低くなってる。この部分は鉄床 2・3 が検出されたところ

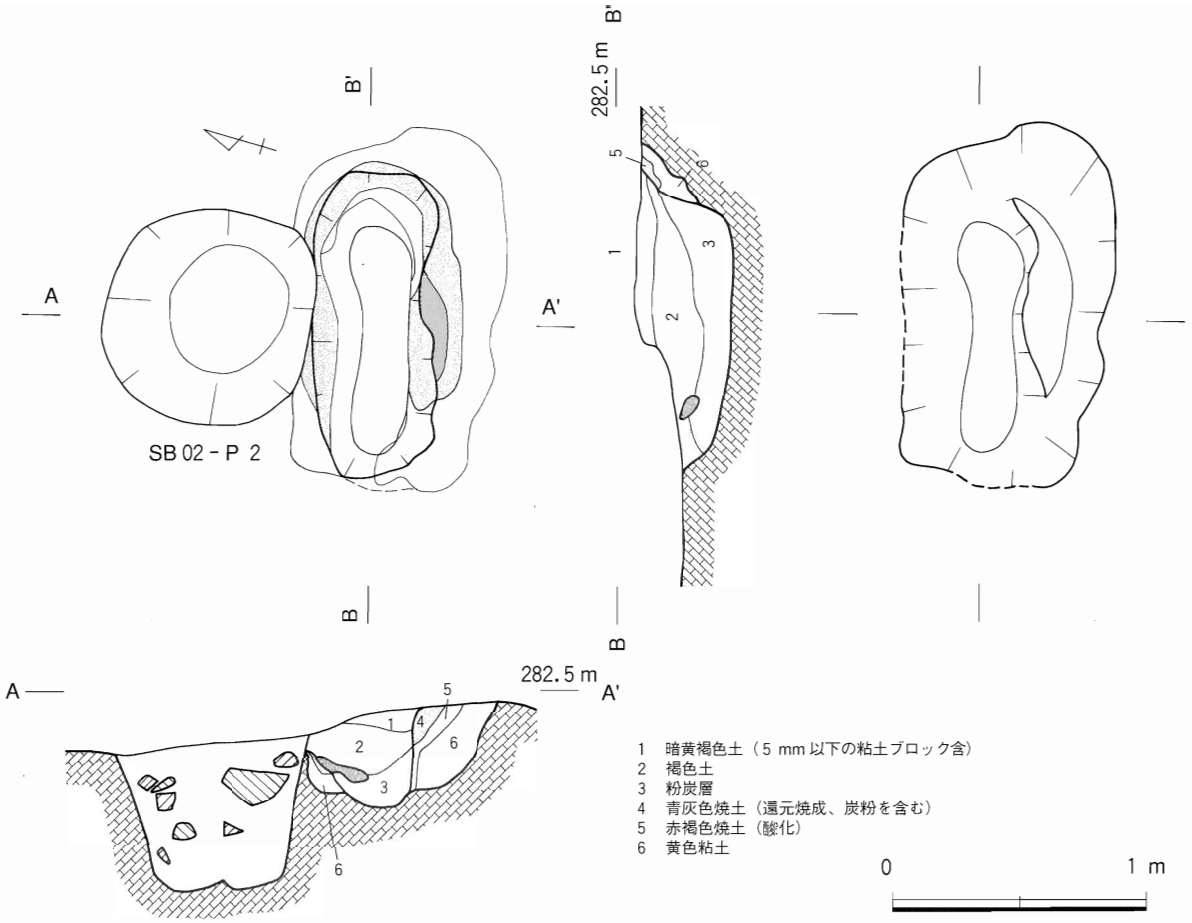


第 67 図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅲ期 SB 02 柱穴断面図（S＝ 1/80）

第 68 図　獅子谷遺跡大鍛冶場Ⅲ期作業面検出状況図（S＝ 1/80）

で、鍛冶作業によって踏みしめられたために作業面が窪んだと思われる。この窪んだ部分と黒色のしまった面と対応しており興味深い。7 号鍛冶炉の北東にも黒色の固くしまった部分があり、ここには送風作業に従事した鞴指（鞴を操作する人）がいたと思われる。SB 02 の南辺の東半分は、西半分と比べて作業面が 0.5 m ほど南側へ突出しており、木炭が散布していた。このことから、炭置き場であった可能性が考えられる。この部分は柱配置から見ると建物の軒下にあたる。

SD 04 は SB 02 の南側から東側にかけて巡る溝である。SD 04 は水場遺構と別の調査段階で掘り下



第69図　獅子谷遺跡 5 号鍛冶炉実測図（S＝ 1/30）

げられたため両者の直接のつながりは確認されていないが、溝の走行方向から見てSB 02の東側で水場遺構と連続していた可能性が高いと思われる。SB 02の南側では、新旧の溝が切り合っている様子が確認できる。南側の西よりには長さ5.6 m、幅2.7 mの不整形な溝が取り付き、この部分で比較的まとまって鍛冶関連遺物が出土している。

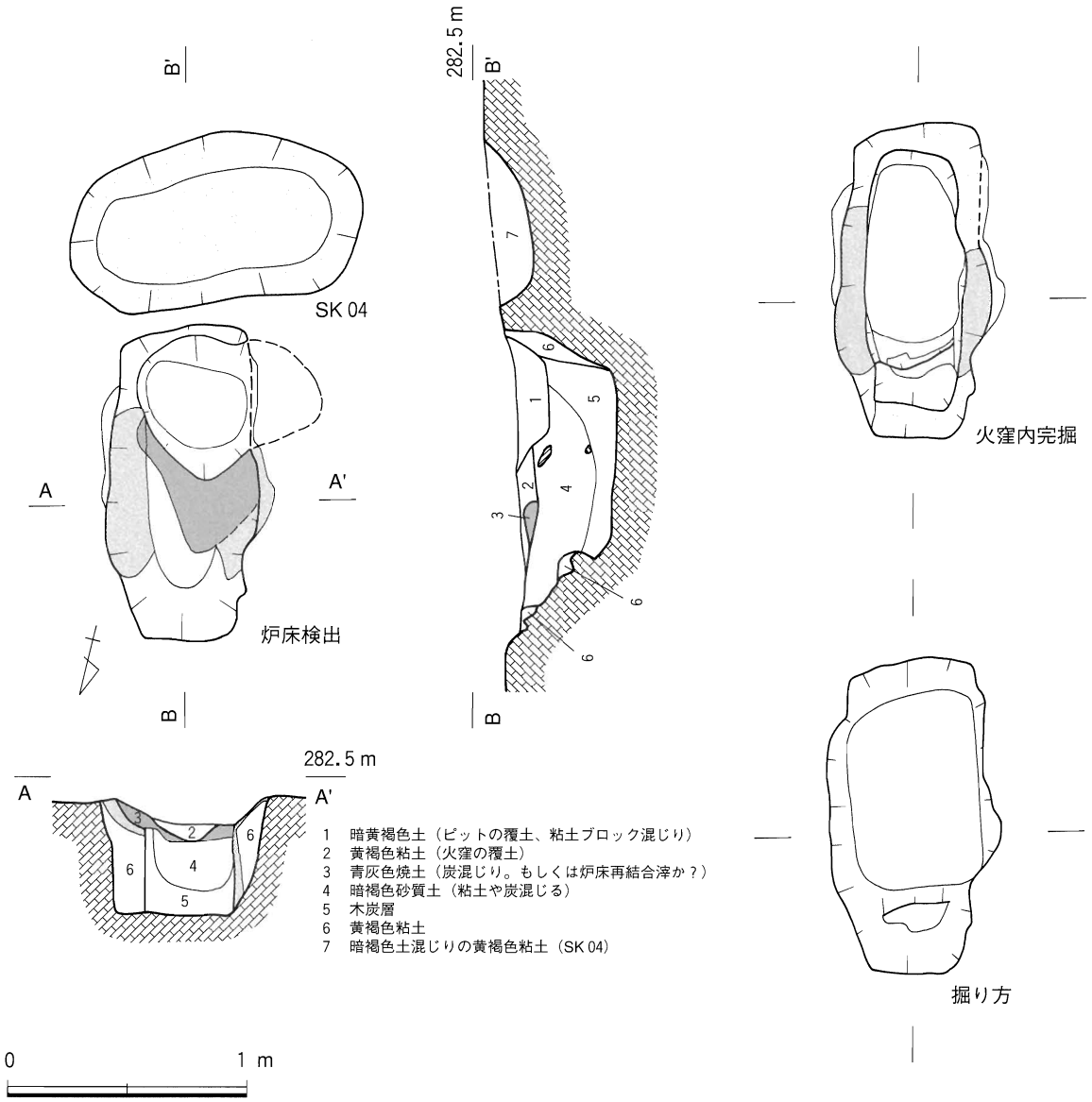
Ⅱ期の溝であるSD 02は、Ⅲ期の大鍛冶場と重なる部分は造成土によって埋め戻されているが、これと重ならない東西方向にのびる部分は黒褐色土や黒色土などが堆積し、人為的に埋められた様子はない。この部分はSD 04とつながってⅢ期にも機能した可能性が考えられる。

SB 02の東辺から0.7 m東の部分には幅0.5 mの浅く溝状に窪む部分が見られ、SB 02の雨落ち溝と考えられる。また、SB 02の右側SD 05は幅約0.9 m～1.9 m、深さ約20㎝の緩やかに窪んだ溝で、はっきりした掘り込みは見られず、これもSB 02の雨落ち溝と考えられる。

SB 02のＰ３－Ｐ５－Ｐ７の北側は、作業面から続いて平面台形状の空間があり、その北辺で高さ0.3 mの段差が付いている。

なお、大鍛冶場の整地土やSB 01の柱穴埋土中、溝覆土中などから製鉄関連遺物や近世の陶磁器が出土している。

5 号鍛冶炉（第69図、図版24）　Ⅲ期の大鍛冶場跡の西側に位置する。鍛冶炉の西端は検出する前にサブトレンチにかかったため掘りすぎてしまった。SB 02－Ｐ２に切られ、上には石列３が設けられている。またSB 02の雨落ち溝であるSD 05の覆土を取り除いた段階で検出された。これらのことからSB 02よりも古い段階の遺構であることは明らかである。掘り方は基盤層から掘り込まれて



第 70 図　獅子谷遺跡 6 号鍛冶炉・SK 04 実測図（S＝ 1/30）

おり、Ⅱ期の遺構との前後関係も層位的には不明である。

火窪の部分は長さ 1.2 m、幅 0.45 m、深さ 0.4 m で、主軸方向は N－75°－E である。後述する 7 号鍛冶炉と主軸方向がほぼ同じで、しかも主軸のほぼ延長線上に位置している。このことから、5 号鍛冶炉は 7 号鍛冶炉と密接な関係があった可能性も考えられる。長さ 1.4 m、幅 0.85 m の掘り方の内縁に粘土を貼り付けて火窪が造られているが、掘り方の底面には粘土貼りはなく、火窪内の下半部には木炭が充填されていた。炉壁は南長辺の内側が被熱により青灰色に還元し、両長辺と東側が酸化して赤褐色になっている。火窪の内壁の炉壁土には炭粒が混ぜられており、その外側には均質な粘土が用いられていた。火窪上面から深さ 0.3 m の部分で炉床再結合滓が形成されており、実際に鉄を加熱していたのはこの深さまでであったことが分かる。

5 号鍛冶炉の西 1 m には南北 2.6 m、東西 1 m の範囲で粘土面が広がっており、さらにこの西側で椀形鍛冶滓がまとまって出土している部分が見られた。

なお、5 号鍛冶炉については年代決定のため熱残留磁気の測定を実施した。

6 号鍛冶炉（第 70 図、図版 24）　SB 02 内の南西隅付近で、8 号鍛冶炉の東に位置する。8 号鍛

冶炉に伴う貼床粘土を除き、基盤層である暗褐色砂礫層上面で検出された。また、後述する 8 号鍛冶炉 3 段階の掘り方よりも古いピットに 6 号鍛冶炉は切られていることから、少なくとも 8 号鍛冶炉 3 段階よりも古いことが分かる。層位的には SB 02 に伴うのかどうかは判断できない。

火窪は、長さ 1.3 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m で、主軸方向は N－14°－W で、8 号鍛冶炉とほぼ平行している。他の鍛冶炉と比べて炉床までの深さは浅いように思われる。長さ 1.3 m、幅 0.7 m、深さ 0.5 m の掘り方の底面には粘土を貼らず、内縁にのみ粘土を貼り付け、木炭や砂質土を充填したのち、その上に粉炭を含む粘土を薄く貼り付けて炉床が造られている。炉床の粘土は部分的にしか確認できなかったが、これは鍛冶作業などで剥がれたためだと思われる。炉の中央部では炉床再結合滓と炉床粘土とを明確に区別することはできなかった。

6 号鍛冶炉の南には SK 04 がある。長さ 1.25 m、幅 0.8 m、深さ 0.2 m で、内部は粘土で埋められていた。他の鍛冶炉の状況を考えあわせると、6 号鍛冶炉の鞴座の可能性が高いと考えられる。

7 号鍛冶炉（第 71・72 図、図版 25・26）　SB 02 の中央から東よりに位置する。Ⅲ期遺構検出面で確認でき、火窪の上部は上層粘土面で埋められていた。このことからⅢ期の最終段階まで営まれた遺構であることは明らかである。

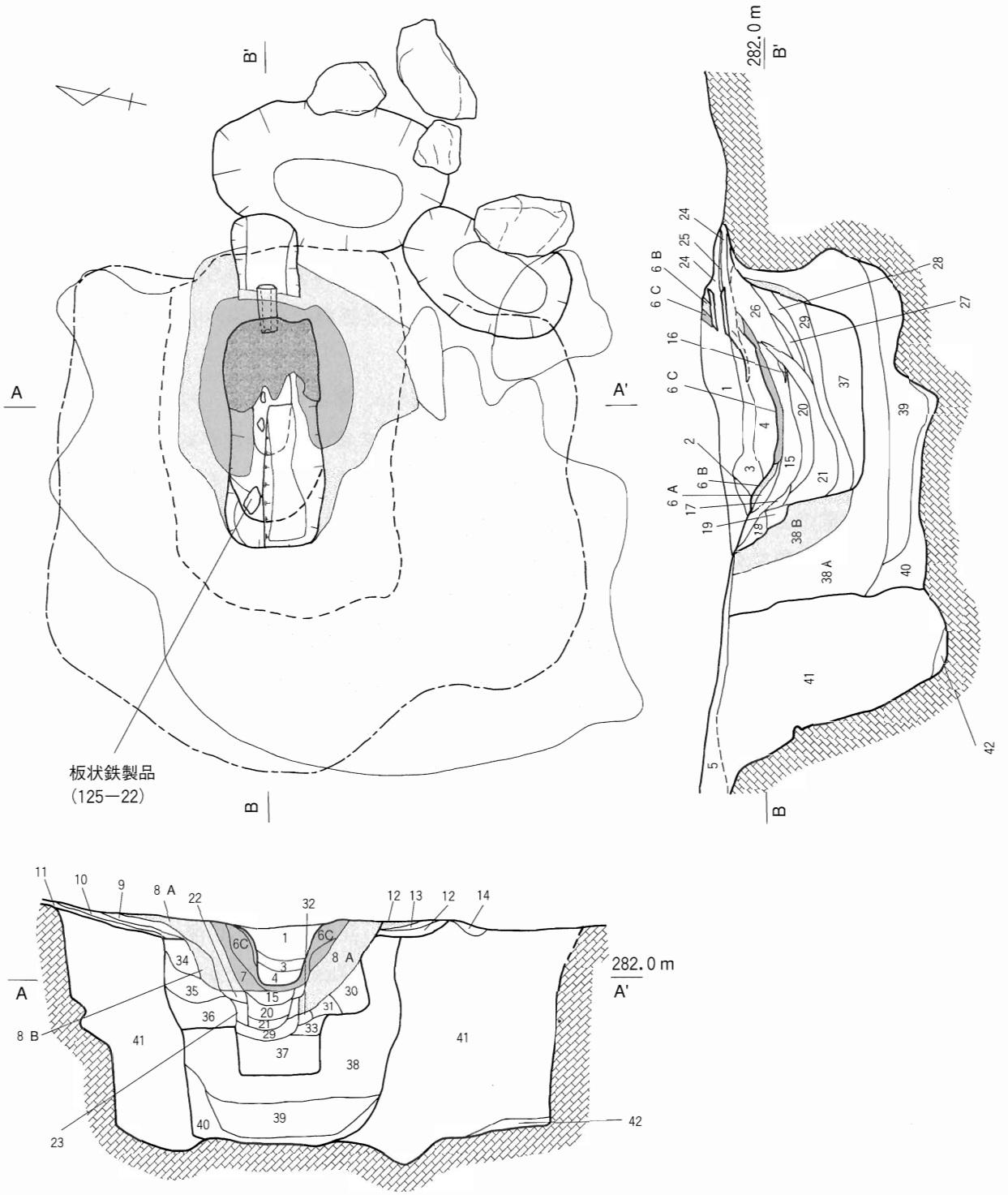
土層断面の観察からを少なくとも新旧 2 段階の操業が考えられる。新段階は、火窪の部分で長さ 1.1 m、幅 0.45 m、深さ 0.3 m で、主軸方向は N－78－E° である。古段階の鍛冶炉の上から長さ 1.5 m、幅 1.05 m の 2 段掘りの掘り方を掘り込んで、掘り方下部に砂を充填し、その上に粉状の木炭を入れている。それから掘り方上段の壁面には均質な粘土が貼られ、さらにこの内側の火窪壁となる部分や木炭の上には、粉炭混じりの粘土が貼り付けられて炉が造られる。

鍛冶炉の東端には鞴の羽口（125－118）が原位置で残存していた。羽口の設置角度は 7° である。羽口は鍛冶炉の東端に幅 30㎝の溝を掘って据え付けられおり、この溝を埋めた粘土はあまり熱を受けていない。鍛冶炉の東側には長さ 1.15 m、幅 0.7 m の浅く窪んだ部分があり、この部分は鞴座であったと考えられる。この窪みの上面にも粘土が見られたが、窪みを意図的に埋めたものか、上層粘土面に伴うものか区別がつかなかった。窪み周辺には 20㎝～50㎝前後の石が見られたが、これも鞴の設置等に関わる可能性がある。窪みの北側には 0.9 m×0.4 m の固くしまった部分が確認できたが、これは鞴指が作業をした場所と考えられる。

羽口前面の火窪壁は半円形に強く滓化しており、火窪長辺の内側は被熱により青灰色に還元し、その外側は赤色に酸化していたが、羽口から遠い西短辺は被熱が弱く、あまり酸化が進んでいない。火窪の長辺の炉壁は炉床からの立ち上がりが急になっているが、短軸側は炉床から緩やかに立ち上がっている。羽口の装着されている東端部も緩やかな立ち上がりをしており、前述したⅡ期の 3 号鍛冶炉の羽口の装着された炉壁がほぼ直立していたのと対照的である。この違いは炉の機能差を表しているかもしれない。

火窪の西端には板状鉄製品（125－122）が埋め込まれていた。鉄製品は被熱のため赤紫色に酸化し、剥片状の割れが著しく起こっている。この鉄製品がいかなる意図で埋め込まれたものか、今のところ明らかではない。

古段階の鍛冶炉は、新段階の鍛冶炉掘り方によって長側辺の上部は破壊されていたものの、火窪のおおよその構造は分かる状態で残存していた。確認できた火窪の規模は長さ 1.4 m、幅 0.35 m、深さ 0.75 m で、主軸方向は N－69°－E である。7 号鍛冶炉古段階の掘り方には、掘り方①とそれよ



1 黄褐色粘土
2 部分的に被熱した黄灰色粘土ブロック
3 炭化物層（黄褐色粘土・焼土混じり）
4 炭化物層
5 黄色粘土（貼床粘土）
6 A 黄灰色粘土（粉炭混じり）
6 B 赤褐色焼土（6 A が酸化）
6 C 青灰色焼土（6 A が還元）
7 青灰色焼土（炭含まない）
8 A 赤褐色焼土（炭含まない）
8 B 淡赤褐色焼土（炭含まない）
9 暗赤褐色粘質土
10 橙色粘土
11 黒褐色粘質土（やや赤みおびる）
12 暗赤褐色焼土
13 橙褐色粘土

新段階 火窪覆土

新段階 掘り方内

14 黄褐色粘土
15 かたくしまった木炭層
16 赤褐色焼土
17 しまり弱い木炭層
18 板状鉄製品（赤紫色に酸化）
19 にぶい橙褐色粘質土
20 淡暗褐色砂
21 にぶい淡黄褐色砂
22 暗赤灰色土（かたくしまる）
23 暗灰色土（かたくしまる）
24 にぶい黄橙褐色粘土（炭混じり）
25 暗黄褐色土
26 暗赤褐色土
27 暗灰褐色砂
28 淡暗褐色砂

新段階 掘り方内

29 黒褐色砂質土（木炭含む）
30 暗褐色砂
31 橙褐色粘土
32 橙灰褐色砂（かたくしまる）
33 暗灰褐色砂（かたくしまる）
34 橙褐色粘土
35 暗褐色砂
36 にぶい黄褐色粘土
37 暗褐色砂

新段階掘り方内

38 A 黄色粘土
38 B 38 A が酸化被熱
39 暗褐色砂
40 黄橙色粘土（やや砂礫含む）

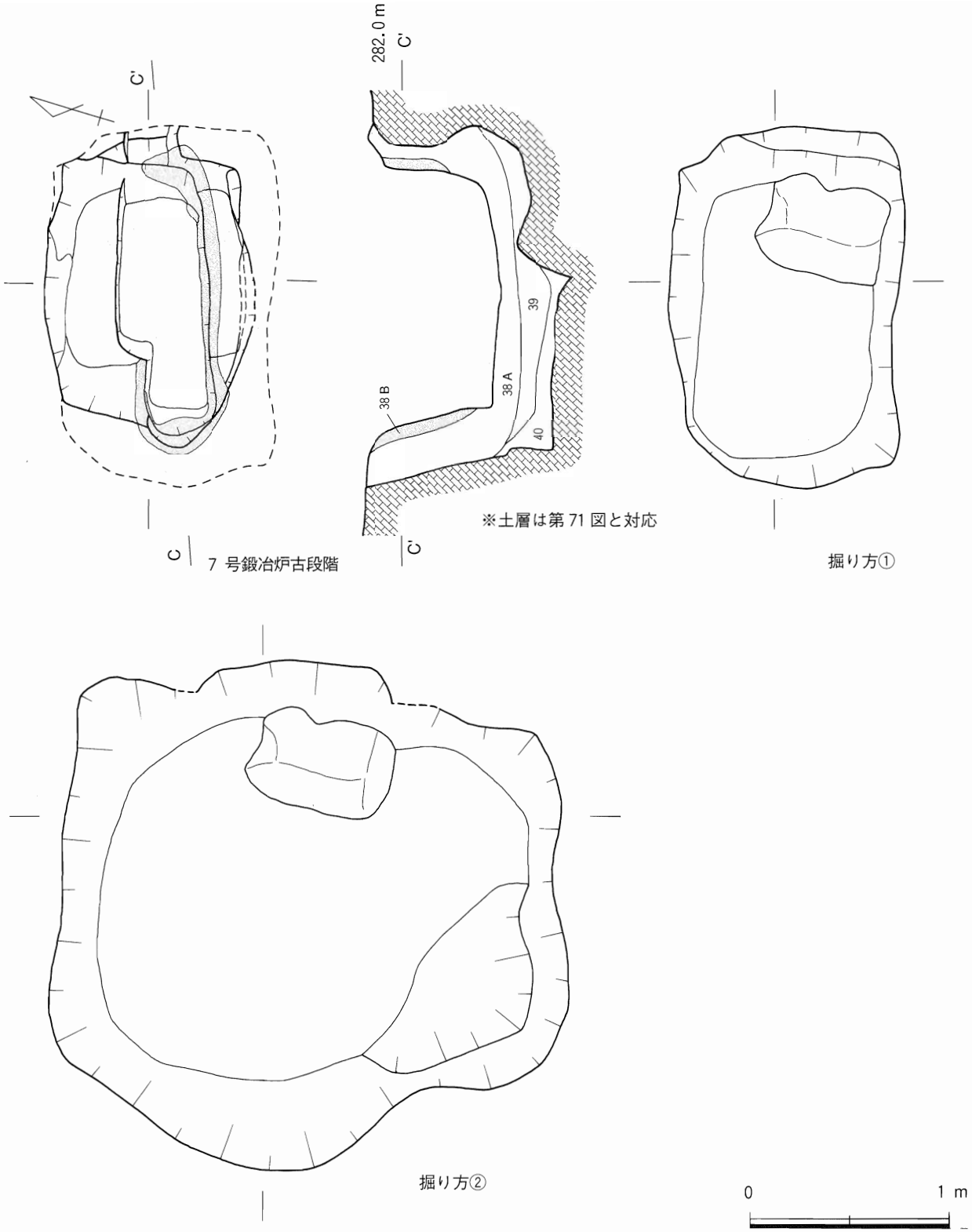
古段階掘り方①内

41 黒褐色土
42 黄橙色粘土

掘り方②内

0 1 m

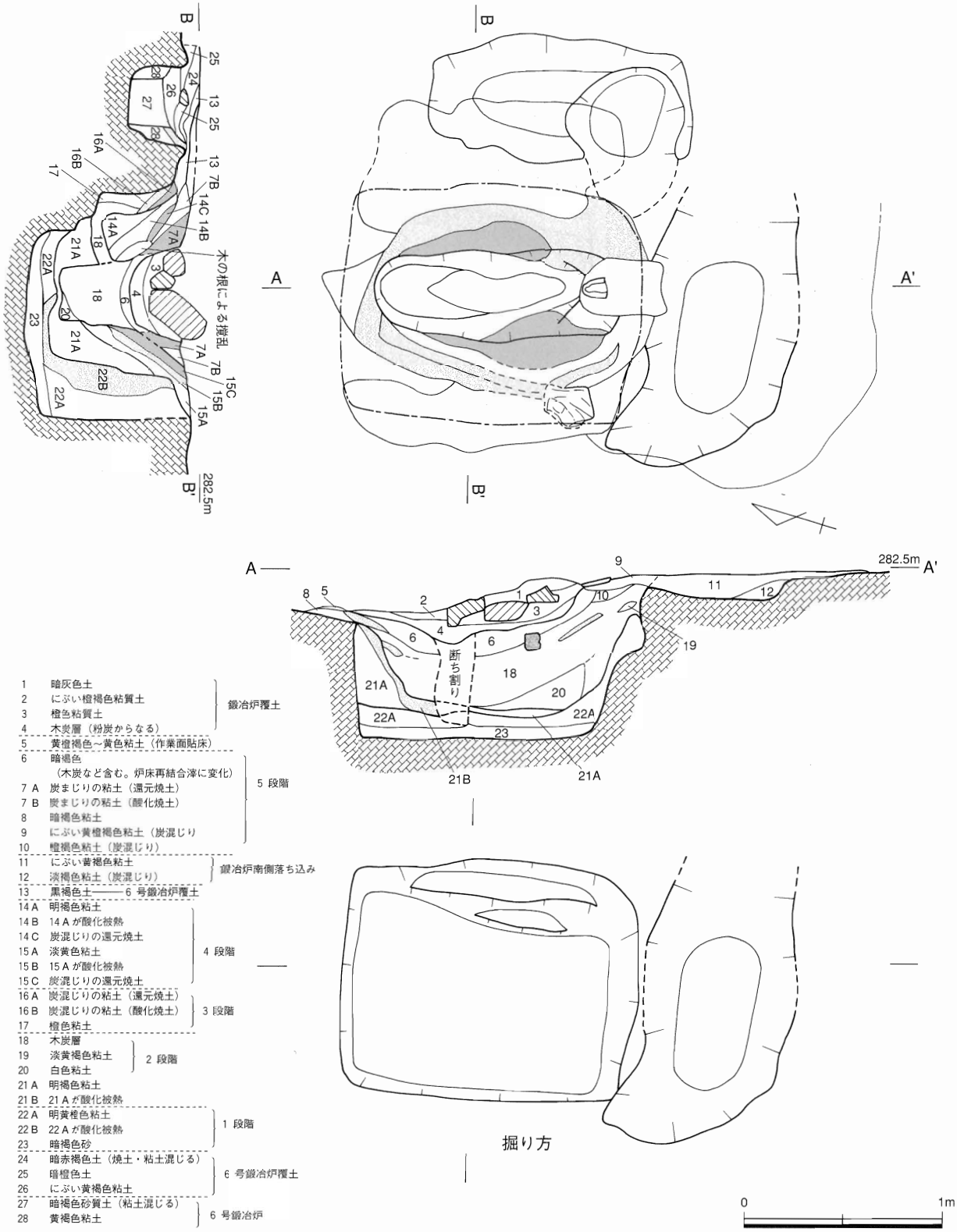
第 71 図　獅子谷遺跡 7 号鍛冶炉新段階実測図（S＝ 1/30）



第 72 図　獅子谷遺跡 7 号鍛冶炉古段階・掘り方実測図（S＝ 1/30）

りも大きな掘り方②の 2 つが確認できた。掘り方②は、東西 2.25 m、南北 2.6 m、深さ 1.1 m の大きさに掘られて、しまりの弱い黒褐色土で埋め戻されている。次に、掘り方①が、掘り方②の中心から南東にやや偏った位置に、東西 1.8 m、南北 1.15 m、深さ 1.1 m の大きさで掘られ、底面が砂礫を含む黄橙色粘土、暗褐色砂の順で埋められ、その内側に炭を含まない均質な粘土が貼り込まれて火窪が造られている。古段階の鍛冶炉には炭混じりの粘土を貼った部分は残っていなかったが、新段階の鍛冶炉を造るときに削られた可能性もある。

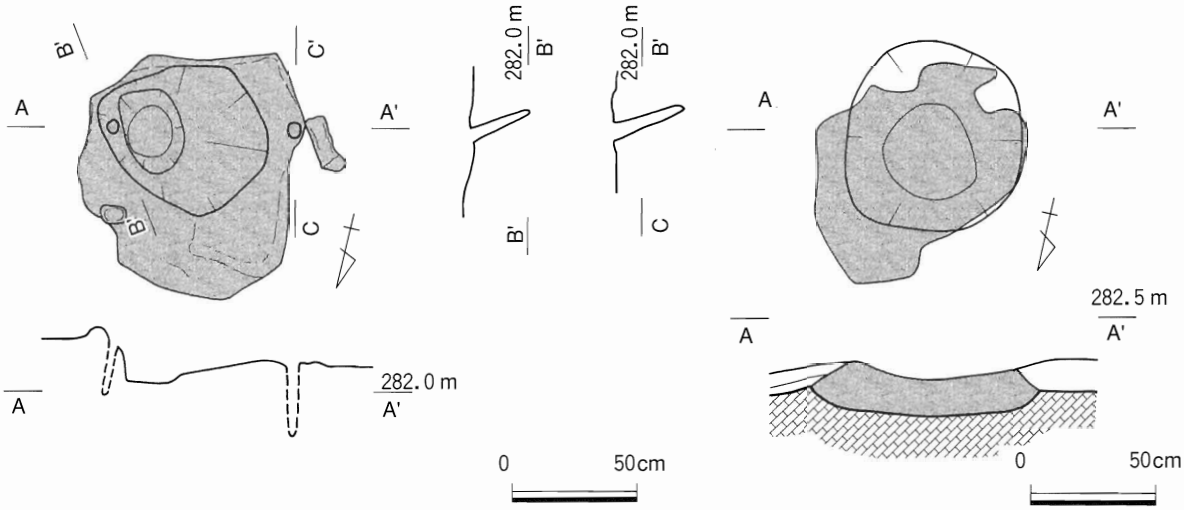
火窪壁面は被熱により酸化して赤橙色に変色しているが、底面は変色していなかった。このことから、古段階の鍛冶炉は火窪が造られてから一度焼き締めがされ、そののち底面の焼けた部分が削られて取り除かれた可能性も考えられる。壁面の焼け方が全体的に均質であること、鍛冶作業で直接熱影響を受けないような火窪の下部まで赤く酸化していることから、古段階の鍛冶炉の被熱は鍛冶作業によるものではなく、焼き締めによるものと考えるべきであろう。



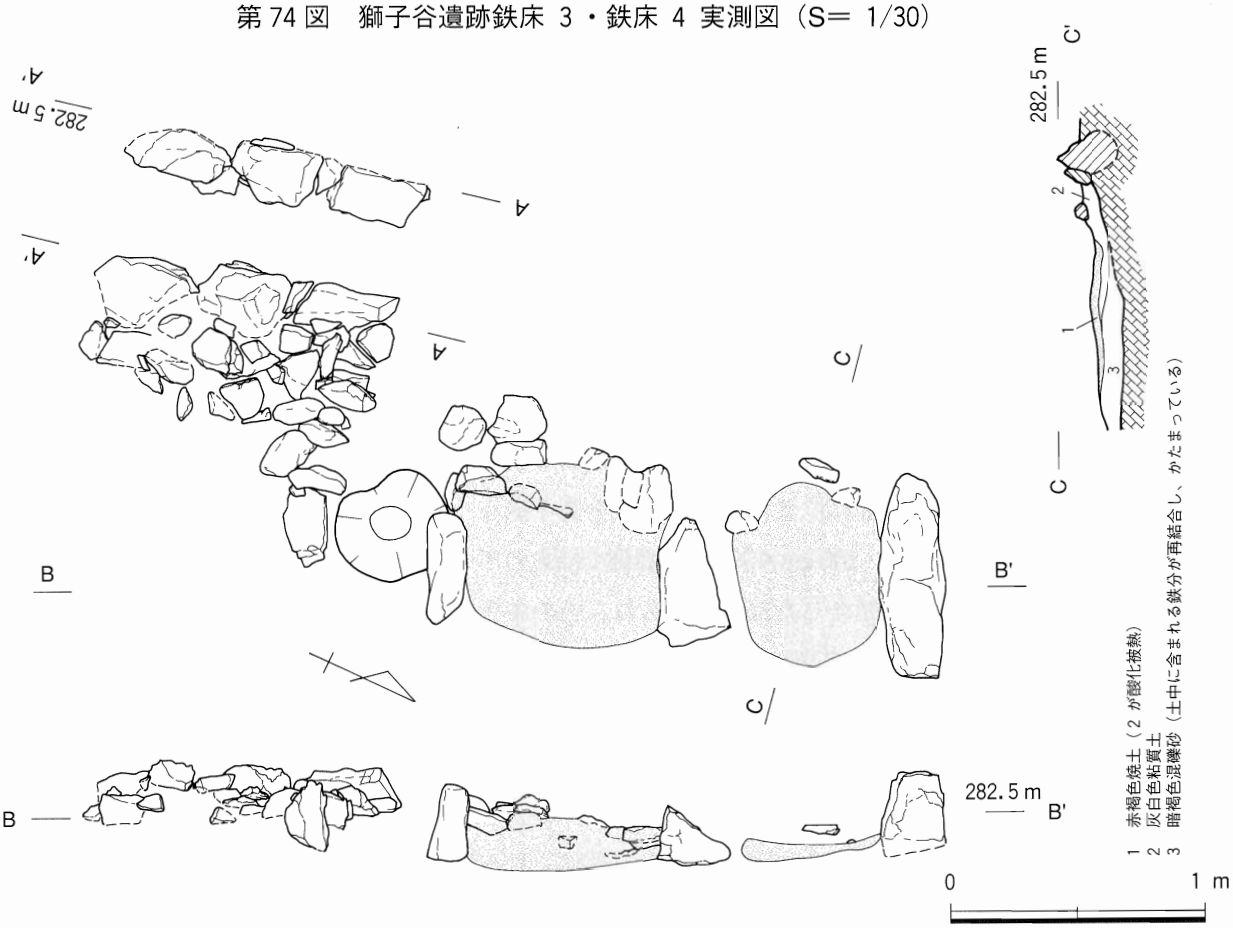
第 73 図　獅子谷遺跡 8 号鍛冶炉実測図（S＝ 1/30）

8 号鍛冶炉（第 73 図、図版 27・28）　SB 02 の南西隅近く、7 号鍛冶炉の西約 5 m に位置する。Ⅲ期の大鍛冶場の検出面で確認できたことから、Ⅲ期の最終段階まで営まれていたと考えられる。検出時には、鍛冶炉の上面は石で埋められた状態（図版 28・1 段目左）であったが、これは操業終了後の鍛冶炉の廃棄に伴って行われたものと考えられる。石の投入により若干変形している部分があるかもしれないが、遺構の残存状況はかなり良好である。

土層断面を観察したところ、4 回の造り直し（5 段階の操業）が確認でき、1→2→3→4→5 段階の順に鍛冶炉の構築がされたと考えられる。最古段階の 1 段階の鍛冶炉は、掘り方が最も大きく、深く掘られており、底面には暗褐色砂が敷かれ、その後に掘り方底面や内面に粘土が貼られて



第 74 図　獅子谷遺跡鉄床 3・鉄床 4 実測図（S＝ 1/30）



第 75 図　獅子谷遺跡石列 03・SX 07 実測図（S＝ 1/30）

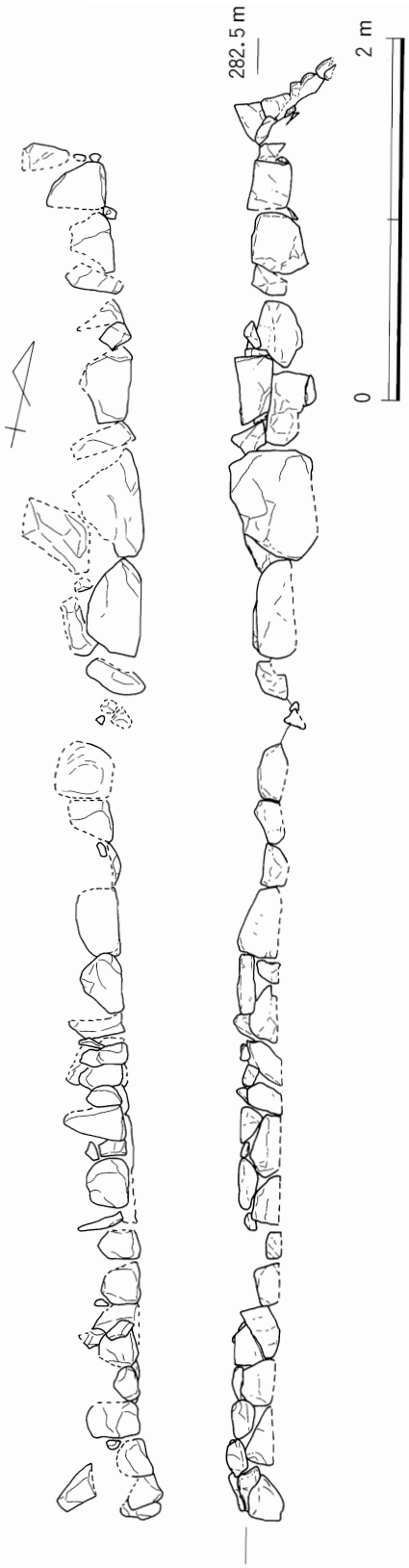
地下構造が造られている。地下構造の内壁は焼き締めがされている。1 段階の鍛冶炉が操業を終えた後、2～5 段階の鍛冶炉が前段階の地下構造を掘り込んだり、粘土で埋め戻したり、壁面の粘土を貼り替えたりして築かれている。完掘時の鍛冶炉掘り方の規模は、長さ1.5m、幅1.2m、深さ0.8mになる。なお、3 段階の東長辺の南寄りの炉壁土中にはかすがい（126－134）が埋め込まれていたが、何を目的としたものか不明である。

最終の 5 段階の火窪は、長さ1.05m、幅0.5m、深さ0.25mで、主軸方向はN－18°－Wである。長軸を 7 号鍛冶炉とほぼ直交させている。深さ60cmの地下構造下半部に木炭を充填し、その上に炭混じりの土を貼って炉床が造られている。炉床は固く変化しており、炉床再結合滓のようになっている。火窪の周囲は被熱により長辺内側の方が還元して青灰色になり、その外周は酸化して赤褐色に変化している。火窪の内壁には粉炭混じりの粘土が貼られていた。鍛冶炉の南端部には羽口片（126－129）が残存していた。現状での羽口の設置角度は11°であったが、この上に大形の石が投げ込まれていたため本来の設置角度と異なる可能性も考えられる。羽口は炉の端に幅30cmの溝を掘って据え付けられており、この部分には被熱が見られない。

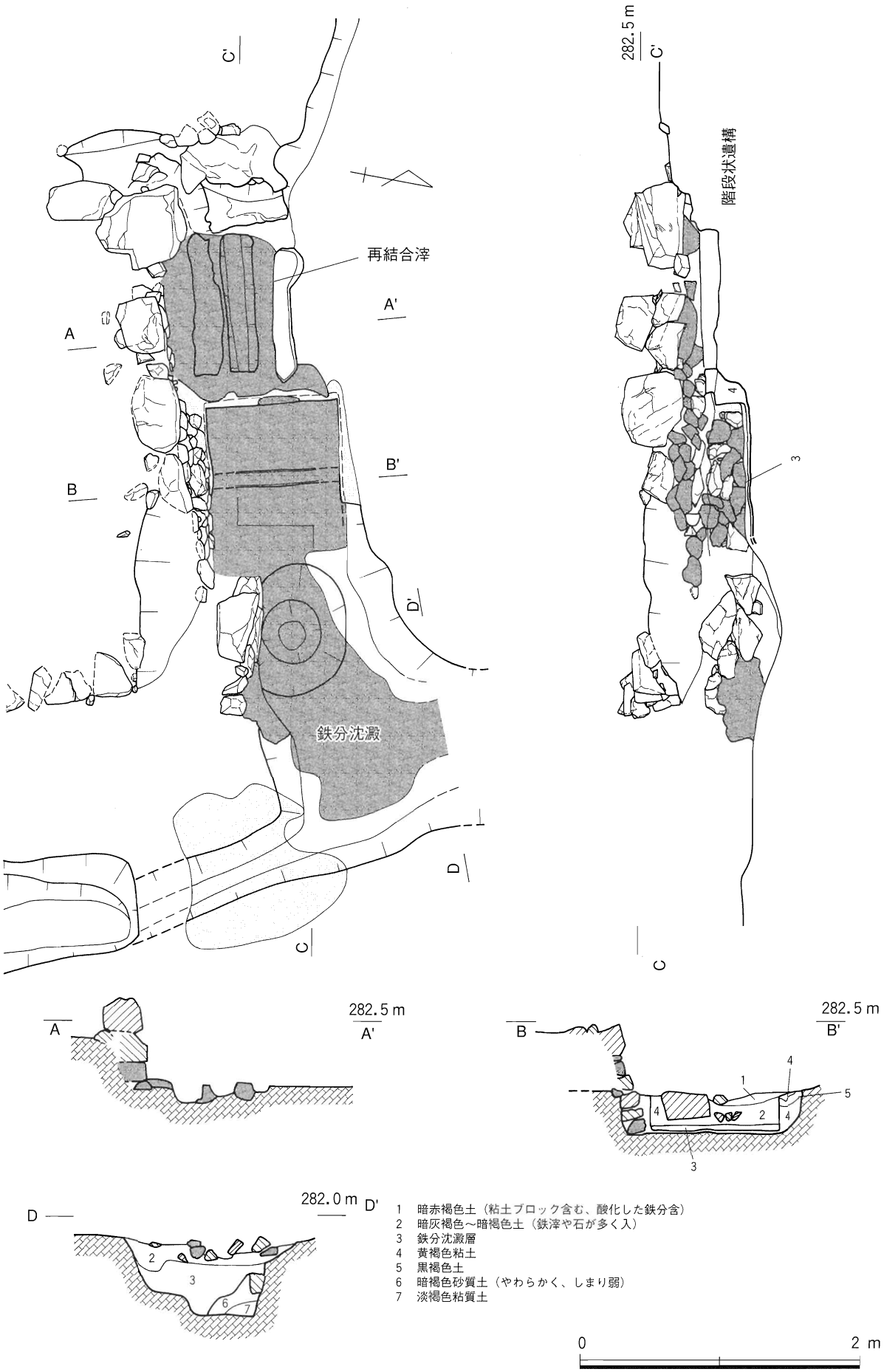
6号鍛冶炉との前後関係は、4・5段階の貼床面が6号鍛冶炉の上面を覆っていること、6 号鍛冶炉を掘り込むピットが3段階の掘り方に切られていることから、少なくとも3段階よりも 6号鍛冶炉の方が古いと考えられる。

なお、8 号鍛冶炉については年代決定のため熱残留磁気の測定を実施した。

鉄床 3（第74図、図版28）　SB 02の中央から北寄り、7号鍛冶炉から北西約1.5mに位置する。作業面を若干掘り下げた段階で検出された。100cm×90cmの範囲で隅丸の不整台形状に鉄分や滓が再結合した部分が見られ、その中央付近は32cm×22cmの楕円形に窪んでいる。この部分は鉄床を置いた痕跡となる可能性も考えられる。中央付近の窪みを挟んだ再結合滓の東・西端部には、円形の棒もしくは杭が斜め方向に地中に入っていた痕跡が残っている。こうした状況は、鉄床 2 の周辺に小さな穴が見られたことと共通しているようであり、鉄床の設置に関わるものと思われる。なお、鉄床 3 の周辺は大鍛冶場の中でも低く窪み、作業面が黒色に固くしまっていたが、これは鍛打作業の際に、作業者によって強く踏みしめられたためと考えられる。



第76図　獅子谷遺跡石列 1 実測図（S＝ 1/40）



第 77 図　獅子谷遺跡石列 2・水場遺構・階段状遺構実測図（S＝ 1/40）

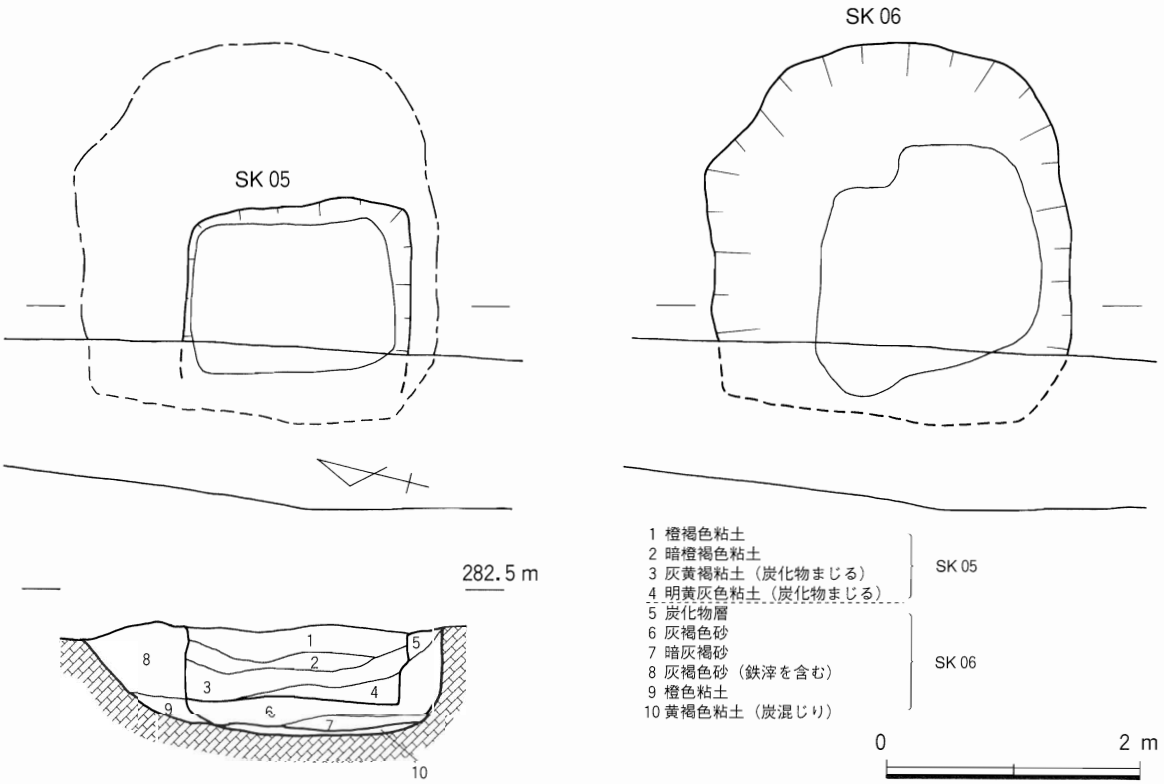
鉄床 4（第74図、図版28）　SB 02の中央からやや北寄り、3 号鍛冶炉の北東約 2 mに位置し、Ⅲ期の遺構検出面で確認できた。中心部には円形に近い74cm×68cmの浅い窪みになっており厚さ10～20cmの再結合滓が形成されている。この周囲の土も堅くなっており、再結合気味の状態であった。このことからこの周辺でも鉄の鍛打がされた可能性が考えられる。

SX 02（第75図、図版28）　SB 02の西辺の中央から北に寄ったところに位置し、大鍛冶場検出面で確認できた。2 か所の焼土面とその両脇に立てらた石、西側の粘土面に埋め込まれた石・鉄滓で構成される。遺構の構造は前述のSX 01と類似している。焼土面は、もとは灰白色粘土が貼られたが、上面が強く熱を受け赤褐色に酸化している。灰白色粘土の下層では再結合滓が形成されており、中には鉄部をもつものも見られる。この遺構の性格は明らかではないが、今のところ竈跡と、鍛冶炉で加熱した鉄を仮置きした場所の 2 つの可能性が考えている。ただし、竈跡とするには立石に熱を受けた痕跡が見られないこと、一番北側の立石を除いて立石の根本が埋られていない点で難点がある。また、鉄を仮置きした場所と考えるには被熱の度合いが強すぎるように思われる。

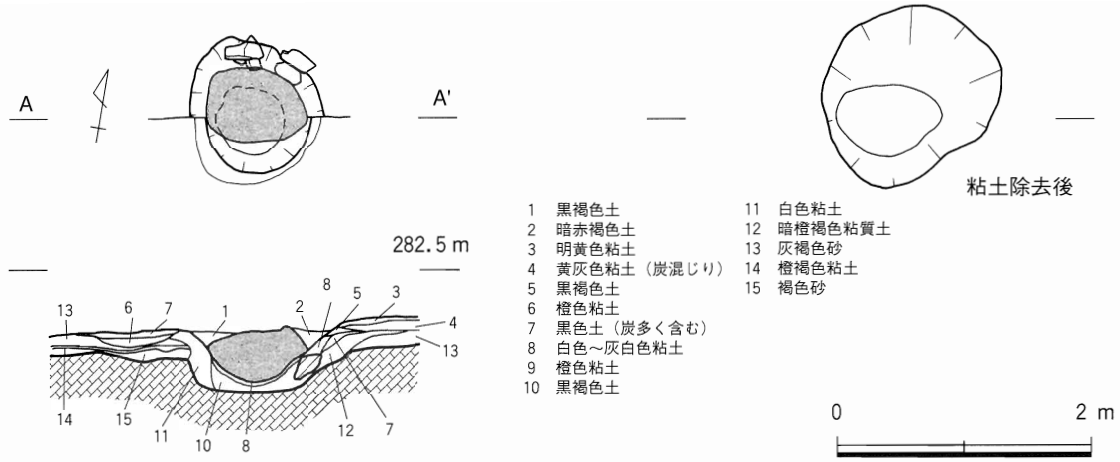
なお、この遺構については年代決定のため熱残留磁気の測定を実施した。

石列 1（第66・76図）　SB 02の東辺に設けられた石列で、7.6 mの長さで南北にのびる。北側については石列 2 と連続していたと思われるが、崩れて残存していない。柱穴が埋め戻された後に整地土が盛られその上に石を並べて設けられている。南側では25cm前後の石が 2 段に積まれているのに対し、北側では大形の石が用いられており、石列の構築法が南北で異なるように思われる。

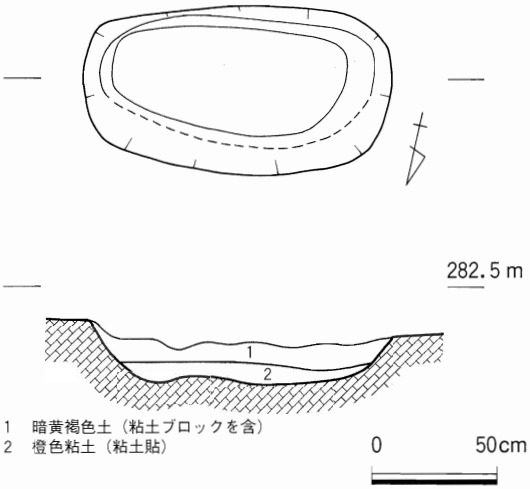
石列 3（第66・75図、図版24）　SB 02の西辺の中央からやや南で確認できた。P 2 に柱が埋設された後に設けられている。現状では 3 個の30cm前後の石とその隙目を埋める小さな石が確認できただけであるが、本来はもっと長い列をなしていたかもしれない。東側に長さ10～25cmの石が密集しているが、この石列と関連するものか不明である。



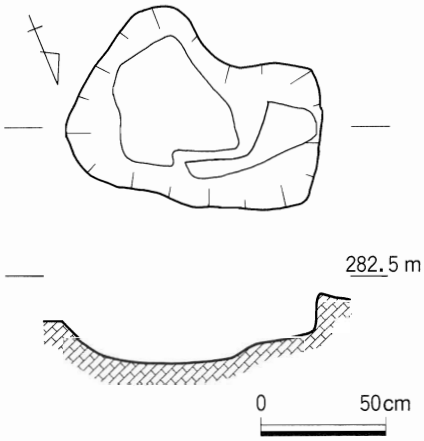
第78図　獅子谷遺跡 SK 05・SK 06 実測図（S＝ 1/30）



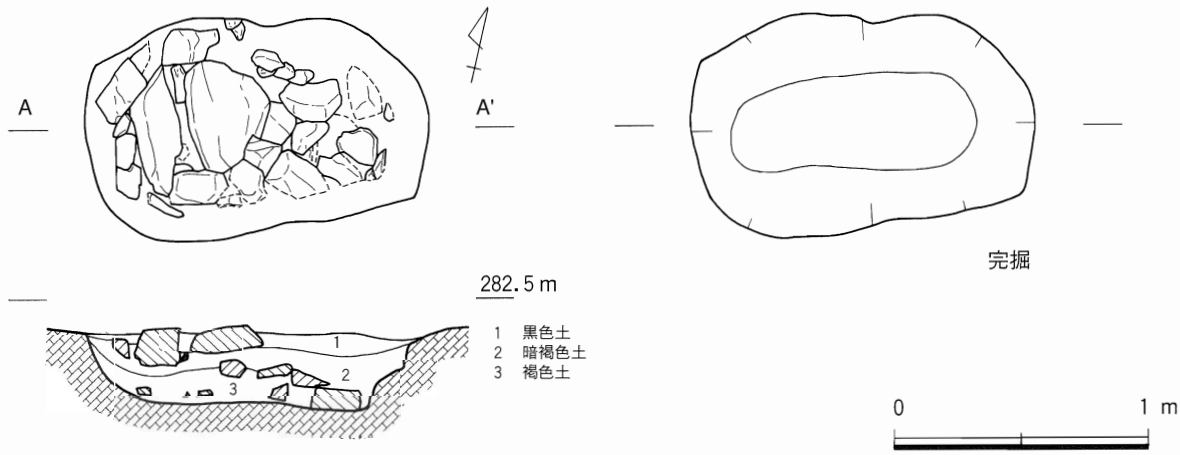
第 79 図　獅子谷遺跡 SK 07 実測図（S＝ 1/30）



第80図　獅子谷遺跡SK08実測図（S＝ 1/30）



第81図　獅子谷遺跡SK09実測図（S＝ 1/30）



第 82 図　獅子谷遺跡 SK 10 実測図（S＝ 1/30）

石列 2・水場遺構（第 77 図）　石列 2 は SB 02 の北辺の P 7 －P 10 の並びに沿って東西約 4 m の長さで築かれており、この北側には、東から水場遺構、東西 1.2 m×南北 1.1 m の再結合滓、階段状遺構がある。石列 2 は、P 7・10 に柱が埋設され、水場遺構の掘り方が掘り込まれた後、水場遺構の掘り方底面や整地面から築かれている。下半部は椀形鍛冶滓が主に用いられているのに対し、上部は長さ 30㎝以上の大形の石で積み上げられている。SB 02 の北東隅で石列は途切れた形になっているが、本来は石列 1 と連続したと考えられる。水場遺構覆土中には鉄滓や石が多く含まれおり、水

場遺構が不要になったときに石列 2 を崩して埋め戻された可能性もある。

水場遺構は、石列 2 や掘り方の内面・底面に粘土を貼って、長さ3.4 m、幅0.9 m、深さ0.25 mの長方形の箱状に造られた遺構である。東側には南北に溝がのびており、SD 04 とつながっていた可能性は強いと思われる。粘土貼りは遺構の西側では明確に確認できたが、東側に行くにつれて遺存状態が悪くなっており、どの範囲まであったのか明確ではない。西側の粘土貼りされた壁面はきれいに整っており、やや内傾気味に立ち上がっていたことから粘土貼りの内面には板があてられたと考えられる。遺構底面の西端から東へ60㎝のところでは、幅10㎝の板もしくは角材が置かれた痕跡が見られる。底面には砂状の鉄分が沈澱していたが、東側に行くとその厚みが増し、固く再結合していた。水場遺構中部から東側にかけては再結合滓を掘り下げるのが困難であったため本来の底面は確認できていない。

水場遺構の西側の再結合滓が広がる範囲には、3 本の溝のような落ち込みが見られた。3 本の落ち込みのうち左右の 2 本は断面が方形で、中央の 1 本が円弧状の断面形をしていた。これらの落ち込みは、水場遺構の足場として敷かれた木材の痕跡と思われる。ここからさらに西側には、石や土で 3 段の階段状に造られた遺構があり、建物から水場へ移動するための階段であったと考えられる。このように考えると作業場の入り口は、建物の北側にあったと推測される。

SK 05・06（第 78 図、図版 28）　SB 02 南辺側の中央に位置する。それぞれ西側はトレンチのため失われている。SB 05 は南北 0.9 m、東西 0.6 m 以上、深さ 0.3 m の方形の土坑である。Ⅲ期の遺構検出面で確認でき、内部は上層粘土面の粘土によって埋め戻されていた。このことからⅢ期の最終段階の遺構と考えられる。SK 06 は SK 05 に切られた南北 1.4 m、東西 1.35 m 以上、深さ 0.45 m の土坑で底面には薄く粘土が貼られている。これらの土坑は貯水を目的としたものであろうか。

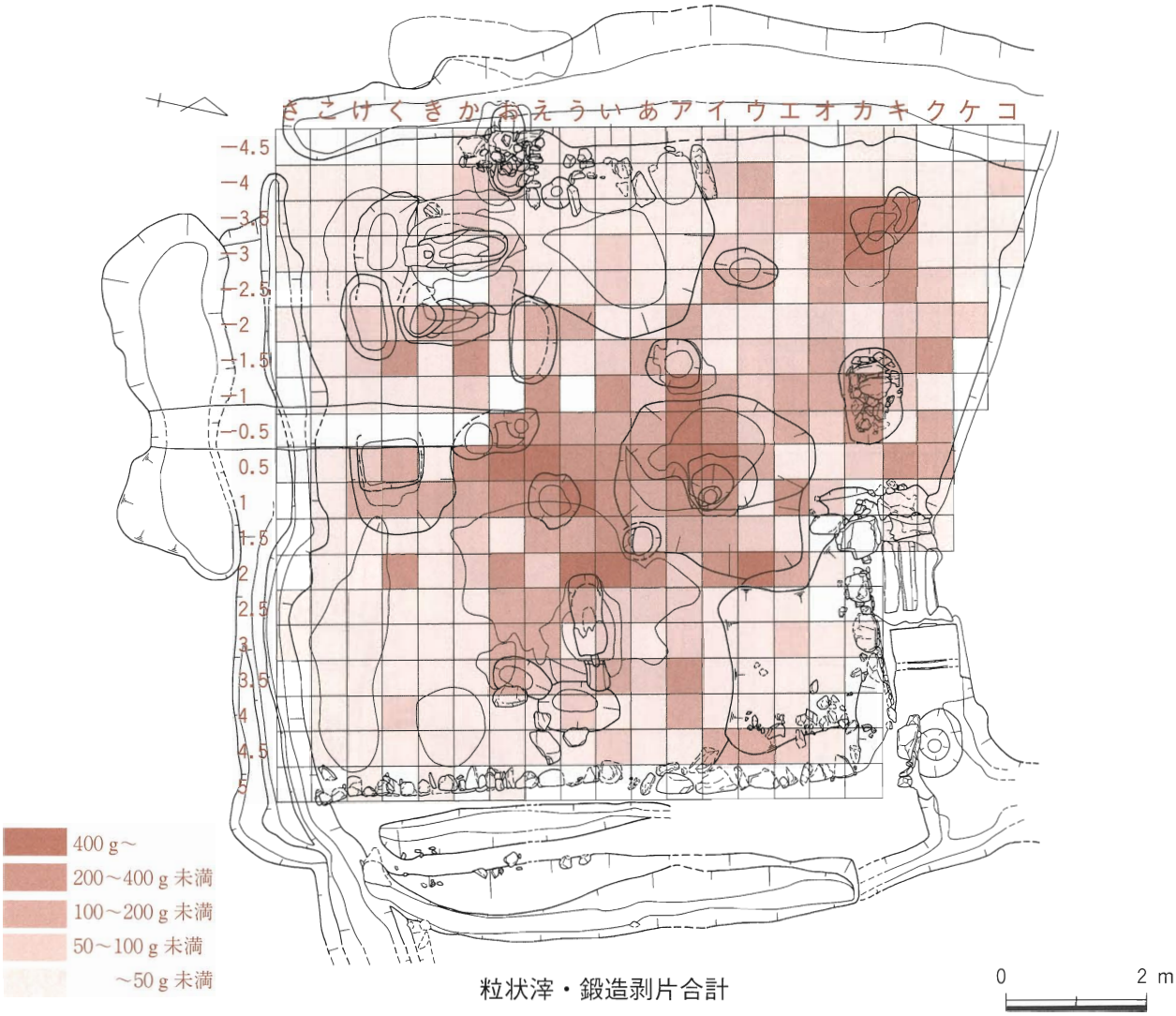
SK 07（第 79 図、図版 29）　SB 02 の中央付近、7 号鍛冶炉の北西約 0.8 m に位置する。作業面を掘り下げた段階で遺構と認識できたが、Ⅲ期の遺構検出面に設けられていたと考えられる。径 0.7 m の掘り方が掘られ、その内側に周囲の貼床と同時に粘土が貼られて径 0.5 m、深さ 0.2 m の土坑が造られている。遺構内には長さ 0.4 m、厚さ 0.2 m の再結合滓が詰まっていた。

SK 08（第 80 図、図版 29）　SB 02 の中央からやや西寄り、6 号鍛冶炉の北に位置する。作業面を掘り下げた段階で検出できた。長さ 1.2 m、幅 0.65 m、深さ 0.2 m の長楕円形の土坑で、底面には 5 ㎝の厚さで橙色粘土が貼られている。貯水などの機能を持っていたと推測される。

SK 09（第 81 図）　SB 02 の外部、P 3 －P 5 の北側で検出された。長さ 1.0 m、幅 0.75 m、深さ 0.25 m の不整形な土坑である。覆土は微細な鍛造剥片を多く含む黒色土であった。大鍛冶場内が掃除されたときにこの部分に土が出されたのかもしれない。なお、上面の一部が橙色粘土面に覆われていたが、この粘土面はⅢ期のものか、大鍛冶場が廃絶後に貼られたものか分からない。

SK 10（第 82 図、図版 29）　SB 02 の外部、P 5 －P 7 の北側に位置する長さ 1.35 m、幅 0.9 m、深さ 0.3 m の長楕円形の土坑である。上面の固くしまった黒色土を取り除いて確認できた。土坑の西側の上層では、被熱によりやや赤変した上面の平坦な石が割れた状態で検出された。鉄床石と似ているが、建物の外部にあるためここで鍛打されたとは考えづらい。鉄床石が割れて使えなくなったものをこの位置に埋めたと考えておきたい。

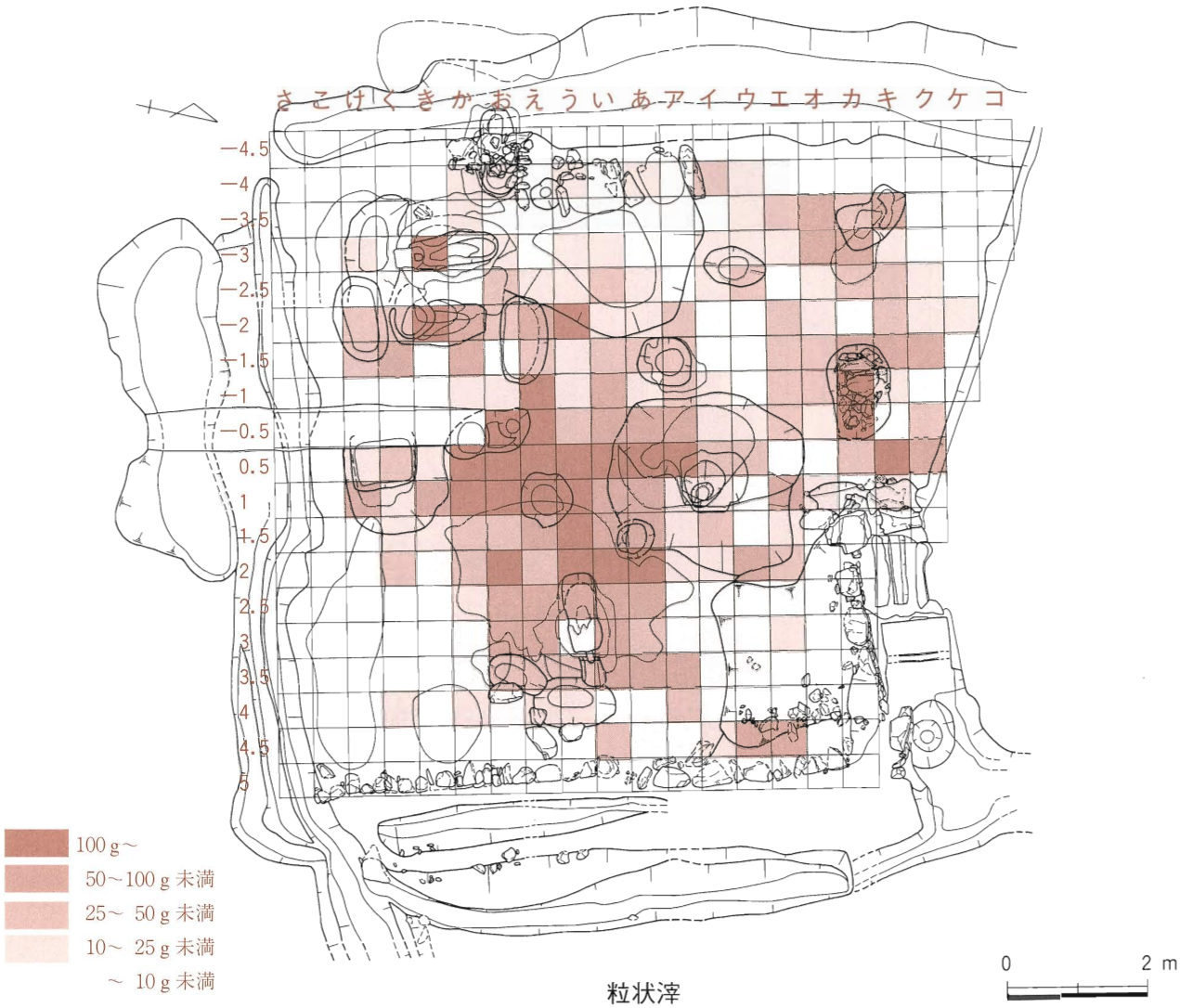
粒状滓・鍛造剥片の分布（第 83～85 図）　大鍛冶場Ⅲ期については鍛冶作業状況の復元を行うため、50㎝メッシュで作業面の土を回収し、水洗、磁石による選別、肉眼分類を通じて粒状滓・鍛造剥片



第 83 図　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片分布図（1）（S＝ 1/100）

を抽出し、それらの分布密度を調べることにした。作業面の土は基本的に全量回収するようにしていたが、大鍛冶場検出時の遺構精査や、写真撮影前の清掃時で出た土には回収されていない分もある。また、鍛冶炉や土坑の覆土はメッシュで取り上げたものと、遺構名のみで回収したものの両方があり、遺構名で回収された土は各メッシュの分布密度に反映されないことを断っておく。なお、粒状滓・鍛造剥片の抽出作業は磁着物の出土量の少ない（約 20 g 以下）メッシュは全量解析したが、磁着物の多いメッシュについては 5 ～50% 程度の解析にとどめた。

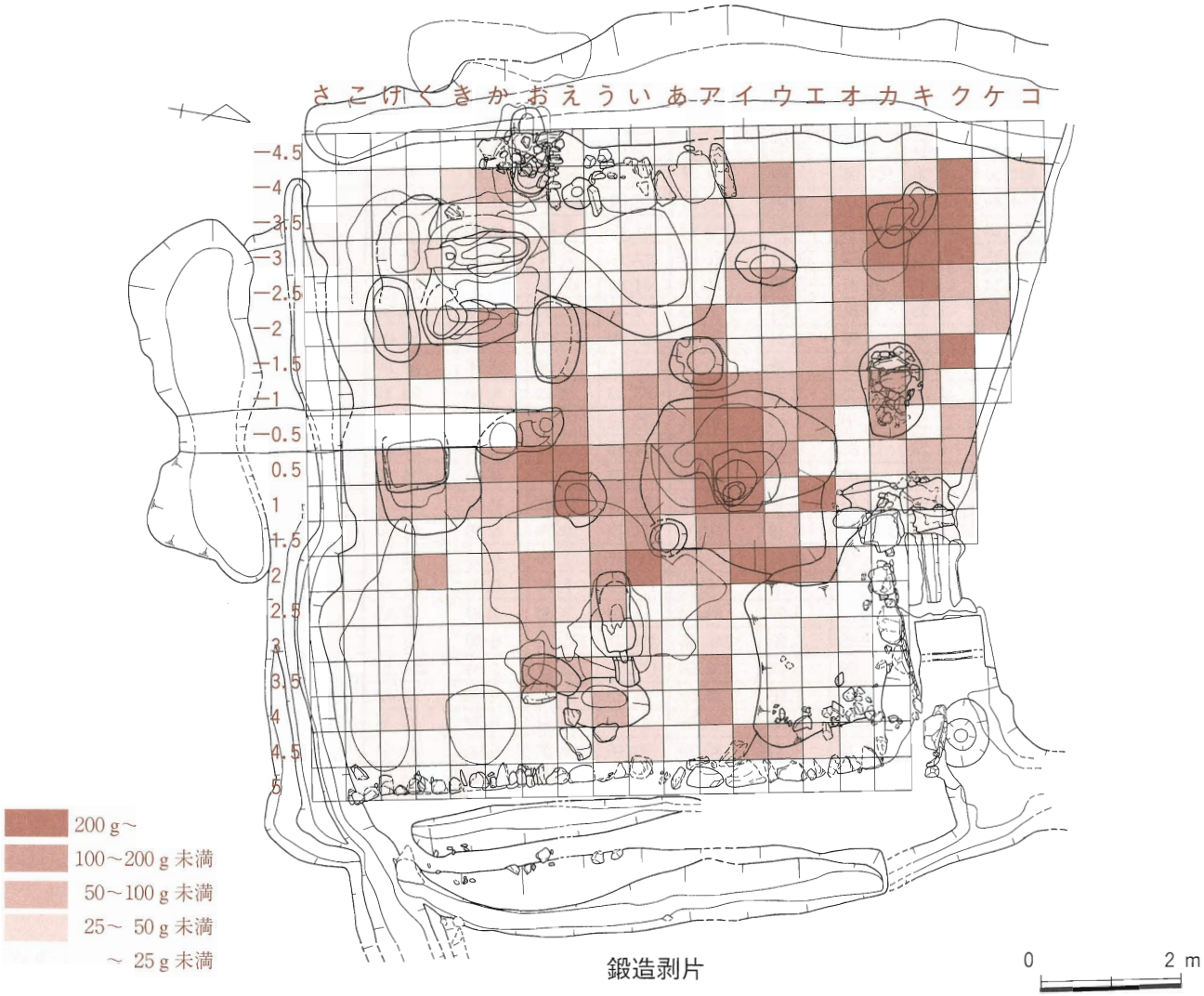
第 83～85 図及び第 17～24 表が抽出作業を行った結果である。前述のように資料採取の方法に問題は残るが、それにしても粒状滓・鍛造剥片の偏在が見て取れる。粒状滓・鍛造剥片の合計を見た場合、鉄床 3 周辺を中心に、7 号鍛冶炉の西側や建物外部の SK 09・10 周辺で多く出土している。これは第 68 図に示した固くしまった黒色土の範囲とほぼ重なる。こうした傾向から鉄床 3 周辺が鍛打作業の中心の場で、7 号鍛冶炉が鍛錬作業時に用いられる「本場」になると推測される。また、北側の建物外部に多くの粒状滓・鍛造剥片が見られるのは、人の出入りに伴なって運ばれたり、作業場内の清掃された土がこの部分に排出されたためと考えられる。こうしたことから、SB 02 の北側に入口があった可能性は高いと思われる



第 84 図　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片分布図（２）（S＝ 1/100）

第 17 表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓　鍛造剥片出土地点別重量一覧表（１）

出土位置	微小遺物合計 (g)	粒状滓推定量（g）				推定量（g）				粒状滓・鍛造剥片合計（g）	その他の微小遺物（g）
		～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計	～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計		
あ、0.5	1070.03	42.80	141.78	22.65	207.23	71.51	78.47	3.21	153.19	360.42	709.61
あ、1	812.76	17.47	53.44	4.47	75.38	48.36	32.71	3.05	84.12	159.50	653.26
あ、1.5	348.48	5.58	18.64	4.18	28.40	20.39	23.70	0.87	44.95	73.36	275.12
あ、2	799.75	24.79	151.55	10.00	186.34	54.58	28.39	5.80	88.77	275.11	524.64
あ、2.5	442.68	12.93	47.28	3.19	63.39	11.16	12.04	1.42	24.61	88.00	354.68
あ、3	91.21	5.75	22.07	1.64	29.46	0.73	5.93	0.64	7.30	36.76	54.45
あ、3.5	255.77	4.60	39.90	2.73	47.23	4.09	1.53	1.36	6.99	54.22	201.55
あ、4	38.38	1.23	2.84	1.15	5.22	2.30	0.42	0.54	3.26	8.48	29.90
あ、4.5	22.66	1.04	3.15	0.11	4.31	2.31	1.20	0.09	3.60	7.91	14.75
あ、−0.5	523.36	11.69	47.97	4.71	64.37	101.18	21.81	0.87	123.86	188.24	335.12
あ、−1	224.44	5.69	12.87	2.09	20.65	44.89	4.79	0.90	50.57	71.22	153.22
あ、−1.5	351.39	18.10	18.80	0.53	37.42	60.61	19.33	0.00	79.94	117.36	234.03
あ、−2	333.57	4.50	9.34	1.33	15.18	6.50	1.17	2.00	9.67	24.85	308.72
あ、−2.5	279.04	10.23	10.42	2.60	23.25	12.65	1.12	1.86	15.63	38.88	240.16
あ、−3	59.90	0.90	2.70	0.66	4.25	4.07	0.42	0.00	4.49	8.75	51.15
あ、−3.5	5.91	0.39	0.11	0.00	0.50	0.42	0.07	0.00	0.49	0.99	4.92



第 85 図　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片分布図（3）（S＝ 1/100）

第 18 表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表（2）

出土位置	微小遺物合計 (g)	粒状滓推定量 (g)				推定量 (g)				粒状滓・鍛造剥片合計 (g)	その他の微小遺物 (g)
		～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計	～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計		
あ、－4	192.61	6.93	4.62	1.35	12.90	26.19	1.54	0.00	27.74	40.64	151.97
あ、－4.5	144.54	2.46	3.76	0.00	6.22	20.96	1.88	0.00	22.84	29.05	115.49
い、0.5	743.18	25.64	78.03	3.34	107.02	84.17	57.04	4.09	145.29	252.31	490.87
い、1	668.39	43.16	42.59	2.29	88.04	108.28	77.53	4.97	190.78	278.81	389.58
い、1.5	860.49	7.46	59.09	1.34	67.88	78.02	71.52	1.15	150.68	218.56	641.93
い、2	1811.75	45.29	218.22	14.70	278.20	235.53	33.82	3.82	273.17	551.38	1260.37
い、2.5	643.24	11.21	60.28	4.04	75.53	13.42	4.59	1.84	19.85	95.38	547.86
い、3	257.07	13.88	39.42	3.26	56.56	24.85	4.80	0.00	29.65	86.20	170.87
い、3.5	165.09	35.16	29.55	4.13	68.84	33.84	2.81	1.82	38.47	107.31	57.78
い、4	9.37	0.51	1.50	0.42	2.43	2.52	0.26	0.05	2.83	5.26	4.11
い、4.5	229.60	3.98	24.80	12.70	41.48	26.33	2.30	0.00	28.62	70.10	159.50
い、－0.5	273.13	45.16	41.52	6.92	93.59	25.13	28.04	2.55	55.72	149.31	123.82
い、－1	679.43	27.57	55.52	2.14	85.22	111.04	42.32	1.55	154.91	240.13	439.30
い、－1.5	141.43	13.15	12.59	0.99	26.73	20.37	14.28	0.71	35.36	62.09	79.34
い、－2	149.16	9.25	7.76	0.89	17.90	19.24	7.91	0.00	27.15	45.05	104.11
い、－2.5	139.25	10.86	14.76	0.00	25.62	14.90	12.53	0.97	28.41	54.03	85.22

第19表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表（3）

出土位置	微小遺物合計 (g)	粒状滓推定量 (g)				推定量 (g)				粒状滓・鍛造剥片合計 (g)	その他の微小遺物 (g)
		～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計	～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計		
い、－3	190.64	7.82	7.43	0.00	15.25	24.97	15.06	0.00	40.03	55.29	135.35
い、－3.5	152.78	6.57	2.75	0.00	9.32	15.74	1.22	0.00	16.96	26.28	126.50
い、－4	6.49	0.09	0.19	0.00	0.28	0.24	0.06	0.00	0.30	0.58	5.91
い、－4.5	64.63	2.33	1.94	0.45	4.72	3.62	1.36	0.26	5.24	9.95	54.68
う、0.5	867.95	78.50	107.05	3.09	188.63	38.77	54.20	1.54	94.51	283.14	584.81
う、1	969.49	43.63	154.15	7.56	205.34	126.03	68.25	0.78	195.06	400.40	569.09
う、1.5	577.10	21.16	85.41	3.65	110.23	58.86	8.66	0.00	67.52	177.75	399.35
う、2	793.55	36.90	169.42	14.68	221.00	112.49	72.61	0.40	185.49	406.50	387.05
う、2.5	350.14	13.31	54.97	3.50	71.78	34.84	17.33	1.75	53.92	125.70	224.44
う、3	56.68	1.93	9.81	1.81	13.55	9.41	1.36	0.11	10.88	24.43	32.25
う、3.5	138.19	7.32	19.90	1.24	28.47	20.59	11.06	0.41	32.06	60.53	77.66
う、4	151.81	5.31	16.85	0.76	22.92	57.69	11.54	0.76	69.98	92.91	58.90
う、4.5	97.31	4.09	5.35	0.29	9.73	35.52	2.63	0.00	38.15	47.88	49.43
う、－0.5	220.60	11.32	34.56	1.03	46.91	35.15	14.41	0.00	49.56	96.48	124.12
う、－1	119.76	6.23	11.86	0.12	18.20	14.85	13.41	0.00	28.26	46.47	73.29
う、－1.5	79.40	2.38	9.05	2.46	13.90	6.67	3.97	0.56	11.20	25.09	54.31
う、－2	504.90	16.96	89.67	6.46	113.10	54.53	22.22	0.61	77.35	190.45	314.45
う、－2.5	87.59	5.17	5.61	0.18	10.95	11.12	0.79	0.09	12.00	22.95	64.64
う、－3	76.41	4.97	5.43	0.61	11.00	6.27	1.76	0.15	8.18	19.18	57.23
う、－3.5	132.53	4.51	4.11	0.66	9.28	4.51	5.70	0.00	10.20	19.48	113.05
う、－4	473.73	9.66	13.45	0.57	23.69	12.70	3.60	1.33	17.62	41.31	432.42
え、0.5	1378.82	71.11	269.85	5.52	346.48	344.31	135.32	0.00	479.63	826.11	552.71
え、1	615.24	53.53	92.29	6.77	152.58	173.70	39.17	1.44	214.31	366.89	248.35
え、1.5	224.52	18.71	64.36	1.50	84.57	31.13	12.72	0.00	43.86	128.43	96.09
え、2	98.82	4.05	29.94	1.58	35.58	31.42	5.44	0.30	37.16	72.73	26.09
え、2.5	370.01	44.22	32.75	3.33	80.29	39.96	9.07	0.00	49.03	129.32	240.69
え、3	294.04	64.49	26.07	3.53	94.09	4.90	4.12	0.39	9.41	103.50	190.54
え、3.5	164.97	7.59	19.30	2.31	29.20	49.16	7.42	1.32	57.90	87.10	77.87
え、4	128.63	3.86	8.23	2.57	14.66	30.74	2.83	0.26	33.83	48.49	80.14
え、4.5	33.77	0.44	1.08	0.14	1.65	5.67	0.30	0.00	5.98	7.63	26.14
え、－0.5	429.31	26.79	112.31	4.98	144.08	77.28	32.80	0.17	110.25	254.32	174.99
え、－1	659.72	84.44	64.46	0.38	149.29	139.48	24.32	0.00	163.80	313.08	346.64
え、－1.5	375.68	10.71	27.61	3.01	41.32	30.24	21.98	1.50	53.72	95.05	280.63
え、－2	332.50	9.48	43.56	1.16	54.20	48.38	32.92	0.33	81.63	135.83	196.67
え、－2.5	40.39	5.61	4.60	0.00	10.22	3.64	0.48	0.00	4.12	14.34	26.05
え、－3	48.59	3.55	3.89	0.53	7.97	10.11	0.78	0.24	11.13	19.10	29.49
え、－3.5	79.17	2.30	6.49	0.79	9.58	20.43	4.99	0.00	25.41	34.99	44.18
え、－4	65.59	2.69	2.89	0.66	6.23	11.08	2.75	0.46	14.30	20.53	45.06
え、－4.5	16.55	0.93	0.72	0.21	1.86	2.20	0.36	0.03	2.59	4.45	12.10
お、0.5	623.89	49.55	142.43	5.53	197.51	194.30	14.26	1.25	209.81	407.31	216.58
お、1	525.51	30.13	121.57	5.08	156.78	80.93	32.76	0.18	113.86	270.64	254.87
お、1.5	95.94	7.96	19.96	2.21	30.13	12.66	3.74	0.19	16.60	46.72	49.22
お、2	284.03	37.68	81.80	3.41	122.89	72.71	46.20	0.76	119.67	242.56	41.47
お、2.5	313.83	33.27	30.55	31.17	94.99	50.21	35.57	0.21	85.99	180.98	132.85
お、3	275.68	13.78	68.74	4.78	87.30	39.51	13.97	0.55	54.03	141.33	134.35
お、3.5	386.96	28.44	16.64	1.35	46.44	77.97	22.06	0.58	100.61	147.04	239.92
お、4	152.44	3.96	5.18	0.46	9.60	13.87	0.76	0.00	14.63	24.24	128.20
お、4.5	34.60	2.39	0.97	0.03	3.39	2.21	0.83	0.00	3.04	6.44	28.16
お、5	23.02	1.50	3.15	0.32	4.97	3.31	1.17	0.14	4.63	9.60	13.42
お、－0.5	543.18	37.66	124.93	12.13	174.72	73.51	40.92	2.72	117.15	291.87	251.31
お、－1	55.64	7.73	3.89	0.17	11.80	15.91	1.89	0.06	17.86	29.66	25.98
お、－1.5	30.23	2.39	2.30	0.42	5.11	5.80	2.15	0.33	8.28	13.39	16.84
お、－2	240.77	24.56	11.56	1.93	38.04	28.89	4.98	0.48	34.35	72.39	168.38
お、－2.5	228.26	8.07	18.41	0.00	26.48	44.89	0.76	0.00	45.65	72.13	156.13
お、－3	157.60	4.41	9.30	0.95	14.66	39.24	3.31	0.79	43.34	58.00	99.60
お、－3.5	66.64	2.00	2.33	0.47	4.80	5.06	0.33	0.00	5.40	10.20	56.44

第20表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表（4）

出土位置	微小遺物合計 (g)	粒状滓推定量 (g)				推定量 (g)				粒状滓・鍛造剥片合計 (g)	その他の微小遺物 (g)
		～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計	～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計		
お、－4	201.52	18.14	5.64	0.20	23.98	42.72	3.63	0.00	46.35	70.33	131.19
お、－4.5	45.77	2.33	1.69	0.73	4.76	6.22	3.48	0.41	10.12	14.88	30.89
か、0.5	683.50	38.67	160.13	7.81	206.61	141.19	35.54	0.59	177.32	383.93	299.57
か、1	265.69	48.53	50.48	2.48	101.49	42.86	12.58	0.00	55.44	156.93	108.76
か、1.5	144.85	8.11	28.10	1.01	37.23	30.13	9.70	0.14	39.98	77.21	67.64
か、2	237.84	7.29	33.93	1.11	42.34	30.44	13.79	0.32	44.56	86.89	150.95
か、2.5	108.67	2.93	10.11	0.87	13.91	27.60	6.41	0.54	34.56	48.47	60.20
か、3	30.90	4.36	5.01	0.49	9.86	3.99	2.10	0.19	6.27	16.13	14.77
か、3.5	68.51	1.23	5.07	0.27	6.58	10.14	0.82	0.00	10.96	17.54	50.97
か、4	72.26	3.32	7.44	0.29	11.06	21.46	1.66	0.14	23.27	34.32	37.94
か、4.5	26.32	0.58	1.47	0.16	2.21	3.61	0.11	0.03	3.74	5.95	20.37
か、－1	108.33	2.60	16.68	0.11	19.39	24.05	18.63	0.32	43.01	62.40	45.93
か、－1.5	603.93	23.15	52.94	12.48	88.58	116.76	33.22	2.82	152.79	241.37	362.56
か、－2	519.53	14.96	50.91	2.08	67.95	66.71	47.17	1.25	115.13	183.08	336.45
か、－3	82.65	1.49	6.69	0.74	8.93	7.03	3.06	0.00	10.08	19.01	63.64
か、－3.5	111.60	2.90	6.58	2.46	11.94	44.75	3.01	0.22	47.99	59.93	51.67
か、－4	183.02	10.25	6.77	0.00	17.02	43.01	8.05	0.37	51.43	68.45	114.57
か、－4.5	15.16	0.31	1.22	0.29	1.82	1.25	1.05	0.03	2.33	4.15	11.01
き、0.5	374.68	3.18	7.49	2.06	12.74	7.31	7.49	3.00	17.80	30.54	344.14
き、1	214.39	8.79	40.09	0.00	48.88	55.74	2.36	0.00	58.10	106.98	107.41
き、1.5	110.59	0.88	16.04	1.55	18.47	19.24	1.55	3.21	24.00	42.47	68.12
き、2	28.61	1.29	2.95	0.11	4.35	4.01	0.20	0.00	4.21	8.55	20.06
き、2.5	26.53	0.21	0.58	0.00	0.80	5.28	0.08	0.24	5.60	6.39	20.14
き、3	29.30	0.38	1.03	0.12	1.52	8.06	0.12	0.15	8.32	9.84	19.46
き、3.5	57.65	0.40	1.50	0.06	1.96	12.11	0.17	0.06	12.34	14.30	43.35
き、4	47.43	3.32	3.70	0.05	7.07	17.17	0.85	0.05	18.07	25.14	22.29
き、4.5	16.24	0.27	0.45	0.06	0.78	3.74	0.09	0.07	3.90	4.68	11.56
き、5	2.44	0.01	0.02	0.05	0.08	0.34	0.01	0.01	0.36	0.44	2.00
き、－1	52.19	1.04	1.62	0.21	2.87	9.34	0.42	1.25	11.01	13.88	38.31
き、－1.5	50.25	2.21	7.74	0.00	9.95	19.10	5.83	0.00	24.92	34.87	15.38
き、－2	365.44	75.28	57.37	6.76	139.42	12.97	29.24	0.18	42.39	181.81	183.63
き、－3	46.32	0.19	1.67	0.14	1.99	19.22	0.42	0.09	19.73	21.72	24.60
き、－3.5	26.13	0.08	0.91	0.05	1.05	13.67	0.13	0.10	13.90	14.95	11.18
き、－4	89.06	4.01	2.94	0.00	6.95	29.39	3.12	0.45	32.95	39.90	49.16
く、0.5	191.21	4.40	27.53	1.34	33.27	74.57	2.49	0.57	77.63	110.90	80.31
く、1	311.66	1.25	20.15	2.08	23.48	86.85	1.25	6.03	94.12	117.60	194.06
く、1.5	70.36	4.64	17.03	2.25	23.92	10.20	2.18	0.07	12.45	36.38	33.98
く、2	458.18	11.36	29.32	0.55	41.24	154.86	18.33	0.00	173.19	214.43	243.75
く、2.5	22.62	0.63	3.37	0.05	4.05	10.74	2.56	0.00	13.30	17.35	5.27
く、3	48.08	1.44	1.83	0.10	3.37	5.48	0.10	0.00	5.58	8.94	39.14
く、3.5	41.35	1.08	1.28	0.12	2.48	15.34	0.04	0.00	15.38	17.86	23.49
く、4	131.77	1.71	12.12	0.00	13.84	40.32	3.56	0.00	43.88	57.72	74.05
く、4.5	12.56	0.20	0.13	0.00	0.33	1.13	0.01	0.00	1.14	1.47	11.09
く、－1	13.65	0.07	0.54	0.45	1.06	1.43	0.11	0.09	1.63	2.69	10.96
く、－1.5	523.51	7.15	76.61	4.36	88.12	142.57	14.48	2.79	159.85	247.97	275.54
く、－2	174.73	5.82	25.69	3.49	35.00	38.62	10.31	0.52	49.45	84.45	90.28
く、－2.5	40.11	0.08	1.80	0.72	2.61	7.74	0.12	0.08	7.94	10.55	29.56
く、－3	139.70	0.28	4.61	0.14	5.03	23.19	0.42	1.96	25.57	30.59	109.11
く、－3.5	20.43	0.02	0.76	0.02	0.80	4.47	0.04	0.14	4.66	5.45	14.98
く、－4	5.25	0.06	0.08	0.00	0.14	1.24	0.10	0.03	1.37	1.51	3.74
け、0.5	190.70	0.95	23.65	0.00	24.60	61.98	10.30	0.00	72.28	96.88	93.82
け、1	249.64	3.66	59.25	0.33	63.24	75.56	3.00	0.00	78.55	141.80	107.84
け、1.5	60.10	0.06	9.38	0.12	9.56	19.17	2.22	1.56	22.96	32.51	27.59
け、2	108.91	0.33	8.60	0.65	9.58	22.98	1.63	0.00	24.61	34.20	74.71
け、2.5	23.04	0.14	2.97	0.12	3.23	6.70	0.23	0.00	6.94	10.16	12.88
け、3	33.93	0.20	1.36	0.17	1.73	7.23	0.37	0.00	7.60	9.33	24.60

第21表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表（5）

出土位置	微小遺物合計 (g)	粒状滓推定量（g）				推定量（g）				粒状滓・鍛造剥片合計（g）	その他の微小遺物（g）
		～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計	～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計		
け、3.5	38.44	0.08	0.42	0.00	0.50	4.31	0.23	0.19	4.73	5.23	33.21
け、4	92.25	1.20	1.20	0.00	2.40	28.41	1.85	0.00	30.26	32.66	59.59
け、4.5	27.22	0.03	1.09	0.27	1.39	7.89	0.68	0.08	8.66	10.04	17.18
け、5	6.12	0.00	0.03	0.01	0.04	0.86	0.03	0.02	0.91	0.95	5.17
け、－1	147.07	1.03	1.32	1.76	4.12	25.59	3.38	0.44	29.41	33.53	113.54
け、－1.5	233.91	0.16	32.44	0.31	32.90	38.83	2.03	6.86	47.72	80.62	153.29
け、－2	120.50	3.49	33.38	0.48	37.36	26.63	4.22	0.24	31.09	68.44	52.06
け、－2.5	7.69	0.01	0.02	0.07	0.10	0.56	0.01	0.06	0.63	0.73	6.96
け、－3	75.35	0.30	6.78	0.98	8.06	18.39	1.66	1.36	21.40	29.46	45.89
け、－3.5	1.95	0.01	0.04	0.00	0.05	0.65	0.01	0.00	0.66	0.71	1.24
け、－4	3.84	0.02	0.10	0.02	0.14	0.96	0.02	0.00	0.98	1.12	2.72
こ、0.5	12.89	0.02	0.06	0.04	0.12	1.32	0.05	0.00	1.37	1.49	11.40
こ、1	4.88	0.02	0.12	0.05	0.19	1.16	0.03	0.01	1.20	1.39	3.49
こ、1.5	78.39	0.08	1.02	0.00	1.10	17.72	1.18	0.00	18.89	19.99	58.40
こ、2	30.05	0.00	0.90	0.06	0.96	2.67	3.10	0.00	5.77	6.73	23.32
こ、2.5	25.96	0.00	0.65	0.10	0.75	4.05	0.26	0.03	4.34	5.09	20.87
こ、3	48.07	0.53	1.73	0.00	2.26	14.47	1.06	0.00	15.53	17.79	30.28
こ、3.5	14.28	0.07	0.81	0.10	0.98	5.30	0.23	0.00	5.53	6.51	7.77
こ、4	55.02	0.11	1.65	0.00	1.76	16.62	0.66	0.00	17.28	19.04	35.98
こ、4.5	9.00	0.04	0.34	0.15	0.53	3.06	0.58	0.00	3.64	4.17	4.83
こ、－1	7.21	0.03	0.16	0.00	0.19	0.56	0.05	0.01	0.62	0.81	6.40
こ、－1.5	35.05	0.67	4.73	0.11	5.50	7.01	1.16	0.00	8.17	13.67	21.38
こ、－2	58.67	0.82	4.93	0.06	5.81	8.10	1.11	0.00	9.21	15.02	43.65
こ、－2.5	0.70	0.00	0.05	0.00	0.05	0.12	0.04	0.00	0.16	0.21	0.49
こ、－3	4.40	0.01	0.29	0.06	0.36	1.38	0.03	0.01	1.42	1.78	2.62
こ、－3.5	0.79	0.01	0.01	0.00	0.02	0.24	0.01	0.00	0.25	0.27	0.52
こ、－4	4.02	0.01	0.03	0.00	0.04	1.03	0.10	0.00	1.13	1.17	2.85
さ、2.5	3.59	0.00	0.02	0.00	0.02	0.27	0.01	0.00	0.28	0.30	3.29
さ、3	12.23	0.11	0.04	0.01	0.16	1.60	0.01	0.01	1.62	1.78	10.45
さ、－2	1.16	0.02	0.02	0.00	0.04	0.29	0.02	0.00	0.31	0.35	0.81
さ、－3	11.93	0.01	0.20	0.00	0.21	1.17	0.10	0.00	1.27	1.48	10.45
さ、－3.5	4.07	0.01	0.03	0.00	0.04	1.14	0.06	0.00	1.20	1.24	2.83
さ、－4	2.11	0.01	0.01	0.01	0.03	0.33	0.01	0.00	0.34	0.37	1.74
ア、0.5	3231.85	25.95	130.20	3.32	159.47	300.56	130.57	1.48	432.61	592.07	2639.78
ア、1	1150.73	4.99	17.84	0.38	23.21	283.85	61.56	5.37	350.78	373.99	776.74
ア、1.5	209.63	3.56	11.11	0.21	14.88	76.31	42.35	0.63	119.28	134.16	75.47
ア、2	278.55	1.86	7.43	1.11	10.40	41.97	19.31	0.00	61.28	71.68	206.87
ア、2.5	279.44	2.05	5.59	0.00	7.64	78.43	6.89	0.00	85.32	92.96	186.48
ア、3	89.82	1.98	7.01	0.81	9.79	39.34	2.25	0.18	41.77	51.56	38.26
ア、3.5	452.18	13.57	60.05	1.81	75.42	115.94	36.36	0.00	152.29	227.72	224.46
ア、4	282.68	3.20	37.88	3.96	45.04	109.11	28.08	0.57	137.76	182.80	99.88
ア、4.5	14.89	0.02	0.93	0.45	1.40	1.97	0.46	0.04	2.47	3.87	11.02
ア、－0.5	1692.08	3.58	75.25	2.79	81.62	633.24	113.67	2.79	749.69	831.31	860.77
ア、－1	1231.58	4.74	24.06	0.19	28.99	638.53	115.96	0.95	755.43	784.42	447.16
ア、－1.5	283.31	5.10	26.63	1.70	33.43	38.53	14.92	1.89	55.34	88.77	194.54
ア、－2	642.28	6.06	34.87	0.18	41.11	122.95	10.09	1.65	134.70	175.80	466.48
ア、－2.5	84.30	0.42	3.03	0.42	3.88	18.88	0.59	0.25	19.73	23.60	60.70
ア、－3	89.58	0.27	2.78	0.00	3.05	21.41	1.07	0.09	22.57	25.62	63.96
ア、－3.5	83.50	1.17	2.84	0.17	4.18	24.63	2.84	0.00	27.47	31.65	51.85
ア、－4	143.82	0.58	7.05	0.72	8.34	14.09	3.31	0.14	17.55	25.89	117.93
ア、－4.5	48.07	2.16	7.07	0.05	9.28	20.53	4.71	0.00	25.24	34.51	13.56
イ、0.5	1216.73	5.68	23.32	2.23	31.23	455.26	85.78	1.22	542.26	573.49	643.24
イ、1	1042.74	2.65	14.22	2.28	19.15	266.75	14.79	12.70	294.24	313.39	729.35
イ、1.5	306.36	13.28	12.05	2.45	27.78	81.90	37.17	2.25	121.32	149.10	157.26
イ、2	556.90	5.01	18.75	0.19	23.95	206.98	21.90	4.08	232.97	256.92	299.98
イ、2.5	11.46	0.30	0.56	0.03	0.89	2.35	0.23	0.39	2.97	3.86	7.60

第22表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表（6）

出土位置	微小遺物合計 (g)	粒状滓推定量（g）				推定量（g）				粒状滓・鍛造剥片合計（g）	その他の微小遺物（g）
		～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計	～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計		
イ、3	4.49	0.07	0.12	0.00	0.19	1.84	0.05	0.05	1.94	2.13	2.36
イ、3.5	5.65	0.05	0.30	0.00	0.35	2.83	0.15	0.35	3.33	3.68	1.97
イ、4	15.46	0.35	1.91	0.00	2.26	1.94	0.58	0.00	2.52	4.78	10.68
イ、4.5	481.55	1.73	15.22	1.35	18.30	125.20	9.82	2.70	137.72	156.02	325.53
イ、−0.5	740.25	5.92	15.55	1.67	23.13	238.55	54.59	2.59	295.73	318.86	421.39
イ、−1	337.72	3.55	19.93	0.00	23.47	118.37	23.64	0.00	142.01	165.48	172.24
イ、−1.5	97.48	0.10	1.95	0.19	2.24	13.65	1.95	1.36	16.96	19.20	78.28
イ、−2	136.18	1.23	4.49	0.54	6.26	15.93	3.40	0.27	19.61	25.87	110.31
イ、−2.5	344.00	11.52	7.91	4.13	23.56	66.39	17.03	0.17	83.59	107.16	236.84
イ、−3	102.59	6.16	13.23	0.51	19.90	34.78	10.57	0.00	45.34	65.25	37.34
イ、−3.5	102.36	1.23	3.79	0.00	5.02	28.56	0.61	0.00	29.17	34.19	68.17
イ、−4	456.17	5.84	18.79	0.36	25.00	41.97	18.79	0.00	60.76	85.76	370.41
イ、−4.5	4.59	0.01	0.09	0.00	0.10	0.91	0.02	0.00	0.93	1.03	3.56
ウ、0.5	455.07	12.56	16.93	0.36	29.85	124.51	24.57	0.36	149.44	179.30	275.77
ウ、1	49.11	0.69	0.59	0.00	1.28	11.49	1.08	0.00	12.57	13.85	35.26
ウ、1.5	191.57	1.34	6.70	0.00	8.05	45.40	3.64	1.53	50.57	58.62	132.95
ウ、2	2110.94	17.49	73.58	7.44	98.51	684.55	110.98	7.44	802.96	901.47	1209.47
ウ、2.5	93.86	0.09	0.09	0.09	0.28	0.56	0.09	0.00	0.66	0.94	92.92
ウ、3	3.95	0.02	0.09	0.04	0.15	0.68	0.12	0.03	0.83	0.98	2.97
ウ、3.5	4.82	0.01	0.11	0.04	0.16	0.84	0.14	0.00	0.98	1.14	3.68
ウ、4	1.13	0.00	0.00	0.00	0.00	0.22	0.02	0.01	0.25	0.25	0.88
ウ、4.5	205.75	8.44	34.77	8.23	51.44	38.68	39.71	1.65	80.04	131.47	74.28
ウ、−0.5	148.72	2.68	10.71	0.59	13.98	56.81	5.65	2.23	64.69	78.67	70.05
ウ、−1	186.77	2.24	6.16	0.37	8.78	67.42	4.30	16.44	88.16	96.93	89.84
ウ、−1.5	126.18	1.77	3.28	0.00	5.05	43.28	3.28	3.15	49.71	54.76	71.42
ウ、−2	78.31	1.72	3.45	1.80	6.97	5.72	1.64	0.55	7.91	14.88	63.43
ウ、−2.5	393.22	2.56	29.49	4.72	36.77	116.98	12.39	8.65	138.02	174.79	218.43
ウ、−3	104.64	4.50	7.43	0.52	12.45	37.98	9.94	0.10	48.03	60.48	44.16
ウ、−3.5	157.66	8.67	8.20	0.00	16.87	65.74	13.72	0.00	79.46	96.33	61.33
ウ、−4	547.94	3.65	9.13	0.18	12.97	146.85	4.38	0.00	151.23	164.20	383.74
ウ、−4.5	1.92	0.03	0.06	0.00	0.09	0.40	0.10	0.00	0.50	0.59	1.33
エ、0.5	75.90	3.64	1.90	1.14	6.68	8.58	0.46	0.00	9.03	15.71	60.19
エ、1	799.63	17.39	34.18	3.60	55.17	300.66	39.18	0.80	340.64	395.82	403.81
エ、1.5	166.54	16.99	2.66	0.00	19.65	12.32	2.50	0.00	14.82	34.47	132.07
エ、2	584.28	11.88	22.98	0.00	34.86	116.47	35.64	0.00	152.11	186.97	397.31
エ、2.5	39.06	1.91	0.82	0.00	2.73	9.88	1.80	0.00	11.68	14.41	24.65
エ、3	97.74	4.20	14.17	0.59	18.96	36.46	2.64	0.00	39.10	58.06	39.68
エ、3.5	1.54	0.24	0.18	0.00	0.42	0.74	0.24	0.00	0.98	1.40	0.14
エ、4	1.33	0.20	0.07	0.00	0.27	0.36	0.16	0.00	0.52	0.79	0.54
エ、4.5	192.53	28.30	19.06	2.70	50.06	22.53	7.32	1.35	31.19	81.25	111.28
エ、−0.5	348.28	11.49	13.41	2.09	26.99	102.39	32.04	0.17	134.61	161.60	186.68
エ、−1	368.82	9.04	20.84	0.00	29.87	117.10	49.24	1.29	167.63	197.50	171.32
エ、−1.5	171.93	7.74	19.26	2.41	29.40	48.66	15.99	1.20	65.85	95.25	76.68
エ、−2	77.35	15.24	5.96	3.40	24.60	15.08	4.72	0.08	19.88	44.48	32.87
エ、−2.5	42.04	4.62	1.09	0.17	5.89	4.79	1.05	0.00	5.84	11.73	30.31
エ、−3	67.29	8.34	2.02	0.27	10.63	14.60	4.64	0.00	19.24	29.88	37.41
エ、−3.5	125.90	14.23	11.33	0.63	26.19	35.50	26.31	0.25	62.07	88.26	37.64
エ、−4	132.47	4.64	3.71	0.00	8.35	22.92	5.43	0.00	28.35	36.69	95.78
エ、−4.5	3.75	0.23	0.22	0.00	0.45	1.25	0.18	0.00	1.43	1.88	1.87
オ、0.5	91.15	3.55	3.28	0.00	6.84	18.59	4.56	0.00	23.15	29.99	61.16
オ、1	185.10	5.18	10.74	0.37	16.29	41.09	5.74	0.00	46.83	63.12	121.98
オ、2	34.82	1.01	3.24	0.24	4.49	10.31	0.97	0.00	11.28	15.77	19.05
オ、3	85.98	4.64	1.46	0.17	6.28	16.68	0.09	0.00	16.77	23.04	62.94
オ、3.5	8.07	0.28	0.43	0.00	0.71	1.93	0.28	0.02	2.23	2.94	5.13
オ、4.5	27.20	0.57	1.25	0.00	1.82	4.57	0.63	0.00	5.20	7.02	20.18
オ、−0.5	103.00	3.61	12.77	1.75	18.13	26.27	9.58	0.10	35.95	54.08	48.93

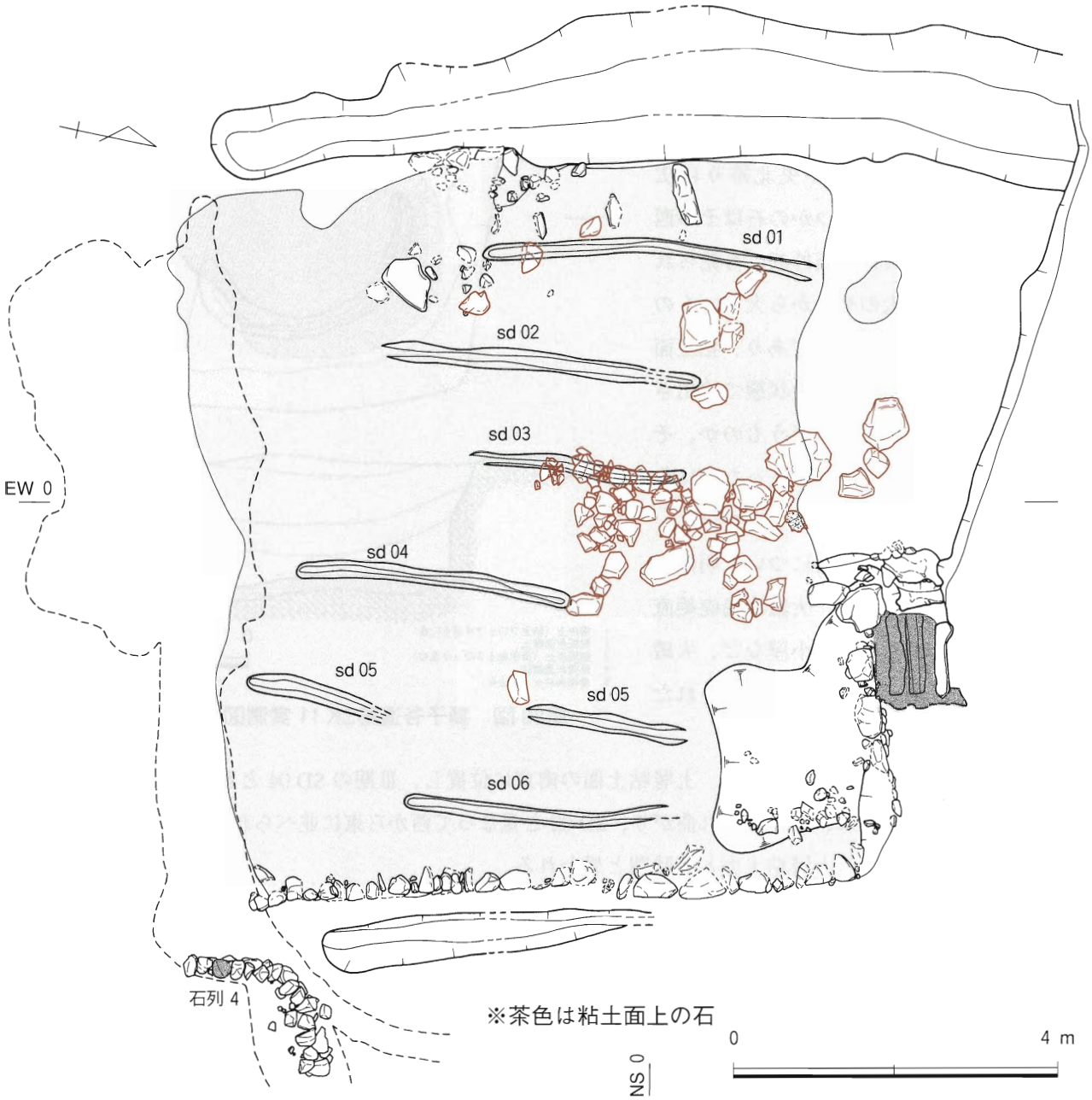
第23表　獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場　粒状滓・鍛造剥片出土地点別重量一覧表（7）

出土位置	微小遺物合計 (g)	粒状滓推定量（g）				推定量（g）				粒状滓・鍛造剥片合計（g）	その他の微小遺物（g）
		～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計	～1㎜	1～2㎜	2～5㎜	合計		
オ、－1	236.02	8.97	29.58	6.61	45.16	63.57	21.71	0.00	85.28	130.44	105.58
オ、－1.5	142.66	11.41	31.53	2.71	45.65	38.66	15.84	0.43	54.92	100.58	42.08
オ、－2	82.04	5.99	6.97	0.25	13.21	43.56	6.56	0.08	50.21	63.42	18.62
オ、－2.5	141.46	5.09	10.33	1.56	16.98	74.97	15.70	0.71	91.38	108.36	33.10
オ、－3	397.53	50.09	32.40	2.19	84.67	118.86	34.98	2.58	156.43	241.10	156.43
オ、－3.5	458.25	15.40	37.58	3.85	56.82	284.85	62.51	0.92	348.27	405.09	53.16
オ、－4	67.68	5.41	2.98	0.00	8.39	28.56	5.08	0.00	33.64	42.03	25.65
カ、0.5	114.91	3.56	21.60	0.11	25.28	14.25	11.61	0.00	25.85	51.13	63.78
カ、1	20.60	0.41	0.25	0.10	0.76	2.39	0.02	0.00	2.41	3.17	17.43
カ、3	61.19	0.92	3.98	0.37	5.26	12.30	0.73	0.24	13.28	18.54	42.65
カ、－0.5	452.83	12.14	103.97	15.40	131.50	92.02	60.86	2.54	155.41	286.91	165.92
カ、－1	507.24	46.87	107.13	23.54	177.53	126.61	39.56	2.43	168.61	346.14	161.10
カ、－1.5	154.42	5.10	40.46	7.41	52.97	34.13	11.89	0.31	46.33	99.29	55.13
カ、－2	35.43	1.49	5.56	0.64	7.69	10.63	4.00	0.21	14.85	22.53	12.90
カ、－2.5	221.12	12.09	21.37	1.92	35.38	96.11	27.42	0.15	123.68	159.06	62.06
カ、－3	545.24	23.63	34.90	0.36	58.89	325.69	68.70	0.91	395.30	454.18	91.06
カ、－3.5	495.98	12.70	24.01	0.60	37.30	325.36	81.14	2.38	408.89	446.18	49.80
カ、－4	15.99	0.41	0.78	0.05	1.24	4.96	1.29	0.02	6.27	7.51	8.48
カ、－4.5	24.03	1.47	1.78	0.00	3.24	3.89	3.12	0.00	7.02	10.26	13.77
キ、0.5	657.54	71.77	74.21	6.20	152.17	75.90	22.54	0.19	98.63	250.80	406.74
キ、1	120.99	2.18	10.53	3.02	15.73	24.68	8.59	0.97	34.24	49.97	71.02
キ、1.5	62.81	1.70	5.09	2.70	9.48	5.53	6.03	0.75	12.31	21.80	41.01
キ、－0.5	41.66	1.33	6.54	0.67	8.54	13.04	3.75	0.04	16.83	25.37	16.29
キ、－1	115.46	1.50	15.13	0.69	17.32	32.68	20.21	0.23	53.11	70.43	45.03
キ、－1.5	298.16	16.70	50.49	12.52	79.71	52.48	12.32	1.99	66.79	146.50	151.66
キ、－2	92.40	4.53	20.05	2.13	26.70	27.07	18.02	0.28	45.37	72.07	20.33
キ、－2.5	618.60	6.39	22.89	2.06	31.34	190.74	49.08	0.82	240.64	271.98	346.62
キ、－3	374.19	9.35	13.28	1.31	23.95	228.26	58.19	0.94	287.38	311.33	62.86
キ、－3.5	1254.21	16.40	49.01	0.19	65.60	817.74	232.90	1.16	1051.80	1117.40	136.81
キ、－4	57.32	1.43	2.52	0.06	4.01	31.47	11.98	0.11	43.56	47.58	9.74
キ、－4.5	16.36	3.30	1.31	0.07	4.68	3.55	2.08	0.08	5.71	10.39	5.97
キ、－7	61.94	4.83	14.31	2.17	21.31	24.78	9.66	0.43	34.87	56.18	5.76
ク、0.5	195.57	24.64	24.84	0.78	50.26	50.46	27.18	1.56	79.21	129.47	66.10
ク、1	21.27	0.26	0.32	0.02	0.60	2.64	1.79	0.00	4.42	5.02	16.25
ク、1.5	25.39	2.89	5.05	0.33	8.28	0.71	0.15	0.00	0.86	9.14	16.25
ク、－0.5	313.88	13.18	34.95	1.67	49.80	80.14	19.25	0.00	99.40	149.20	164.68
ク、－1	19.70	2.20	2.36	0.15	4.71	4.63	0.67	0.05	5.35	10.06	9.64
ク、－1.5	446.01	5.89	56.20	5.53	67.62	178.40	37.82	0.00	216.23	283.84	162.17
ク、－2	100.22	6.71	16.74	1.10	24.55	21.85	8.22	0.00	30.07	54.62	45.60
ク、－2.5	199.11	9.96	11.95	0.80	22.70	46.39	16.33	0.40	63.12	85.82	113.29
ク、－3	22.95	0.96	1.77	0.30	3.03	7.73	2.80	0.05	10.58	13.61	9.34
ク、－3.5	3.16	0.06	0.09	0.00	0.16	0.58	0.16	0.01	0.75	0.91	2.25
ク、－4	24.02	0.50	1.83	0.36	2.69	5.79	1.44	0.00	7.23	9.92	14.10
ケ、1	23.41	0.05	0.35	1.26	1.66	0.33	0.12	0.23	0.68	2.34	21.07
ケ、1.5	110.98	7.66	15.76	0.00	23.42	59.49	17.65	0.00	77.13	100.55	10.43
ケ、－2	148.43	2.97	16.77	1.34	21.08	52.99	15.73	1.34	70.06	91.14	57.29
ケ、－2.5	37.12	1.34	5.23	0.19	6.76	14.03	5.49	0.00	19.53	26.28	10.84
ケ、－3	60.93	1.83	6.46	1.28	9.57	19.07	8.41	0.49	27.97	37.53	23.40
ケ、－3.5	46.15	1.43	4.43	0.92	6.78	14.58	7.11	0.28	21.97	28.75	17.40
ケ、－4	14.56	1.15	0.89	0.33	2.37	5.39	1.03	0.06	6.48	8.85	5.71
コ、－3	0.54	0.01	0.06	0.00	0.07	0.17	0.15	0.00	0.32	0.39	0.15
コ、－3.5	31.62	0.82	4.46	0.13	5.41	5.85	3.73	0.03	9.61	15.02	16.60
コ、－4	73.69	4.20	6.63	1.40	12.23	32.35	6.26	0.22	38.83	51.07	22.62
グリッド合計	72180.08	2663.43	6650.79	543.04	9857.26	16300.75	4337.53	227.10	20865.38	30722.65	41457.43

4　その他の遺構

上層粘土面（第48・86図、図版30）　Ⅲ期の建物内の全面を覆う東西 9 m、南北 8 m の範囲で、厚さ10～20 cm の粘土面が確認され、建物の土間面であったと考えられる。Ⅲ期の作業面と上層粘土面との間には間層が認められず、7 号鍛冶炉や SK 05 は遺構内部まで粘土で埋められていることから、大鍛冶の操業が停止した直後に上層粘土面が貼られたことが分かる。SB 02 の南側に当たる部分では、Ⅲ期の SD 04 が粘土ブロックの入った土で埋め戻されており、その上面は粘土面で覆われていた。このため上層粘土面の南側は SB 02 よりも広くなっている。

上層粘土面に伴う上屋は SB 02 がそのまま使われた可能性も考えられるが、この場合、粘土面の南端は建物外部の軒下に位置することになり、また粘土面全体を上屋が覆っていたとすれば、柱穴をもたない構造の建物になると考えられる。上層粘土面が貼られた段階でも石列 1・2・3 は機能し



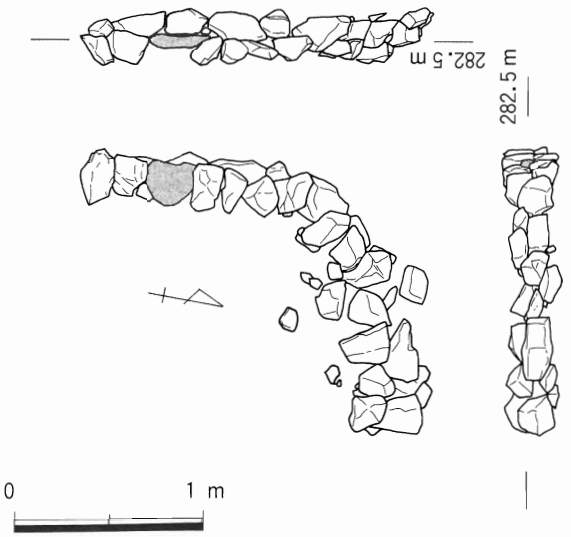
第86図　獅子谷遺跡上層粘土面実測図（S＝ 1/80）

ていたと思われる。ただし、SB 02の北東に位置した水場遺構は、大鍛冶の操業停止とともにその機能は失われ、この段階で石列 2 の一部が崩されて埋め戻されたと考えることもできる。

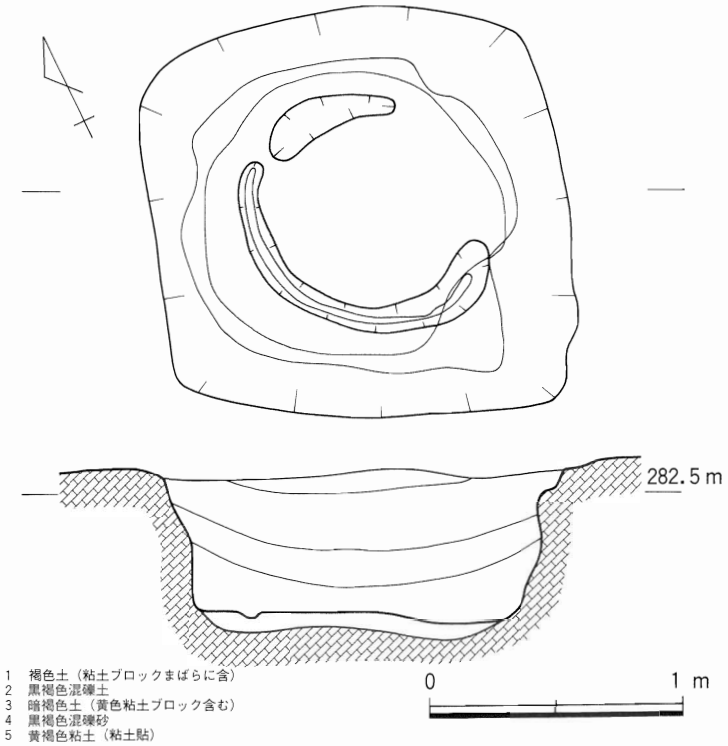
上層粘土面上には大鍛冶にかかわる痕跡は認められず、南北方向にほぼ平行に走る 6 条の溝と、3.6×2.2 m の範囲に広がる集石が認められるだけであった。溝はいずれも幅 20cm前後、深さ 10cm前後で、sd 01 と sd 02 との間が 1.5 m 前後、sd 02 と sd 03 との間隔が 1.3 m 前後、sd 03 と sd 04 との間隔が 1.5 m 前後、sd 04 と sd 05 との間隔が 1.4 m 前後、sd 05 と sd 06 との間隔が約 1.3 m 前後ある。この溝の性格については畑の耕作によるものとも思われるが、sd 03 は集石の下にものびており断言はできない。

集石は粘土面の中央北寄りに広がっており、いくつかの石はその西側や、北側の粘土面外部にも見られる。石は拳大のものから大きいもので長さ 80cmのものまであり、粘土面の直上や石に重なった状態で検出されている。粘土面に伴うものか、それとも粘土面が機能を失った後に集められたものか断定はできない。

上層粘土面の性格について明確なことは言えないが、大鍛冶場廃絶直後に民家もしくは山小屋など、大鍛冶場とは別の用途に造り替えられたものと考えられる。



第87図　獅子谷遺跡石列 4 実測図（S＝ 1/40）

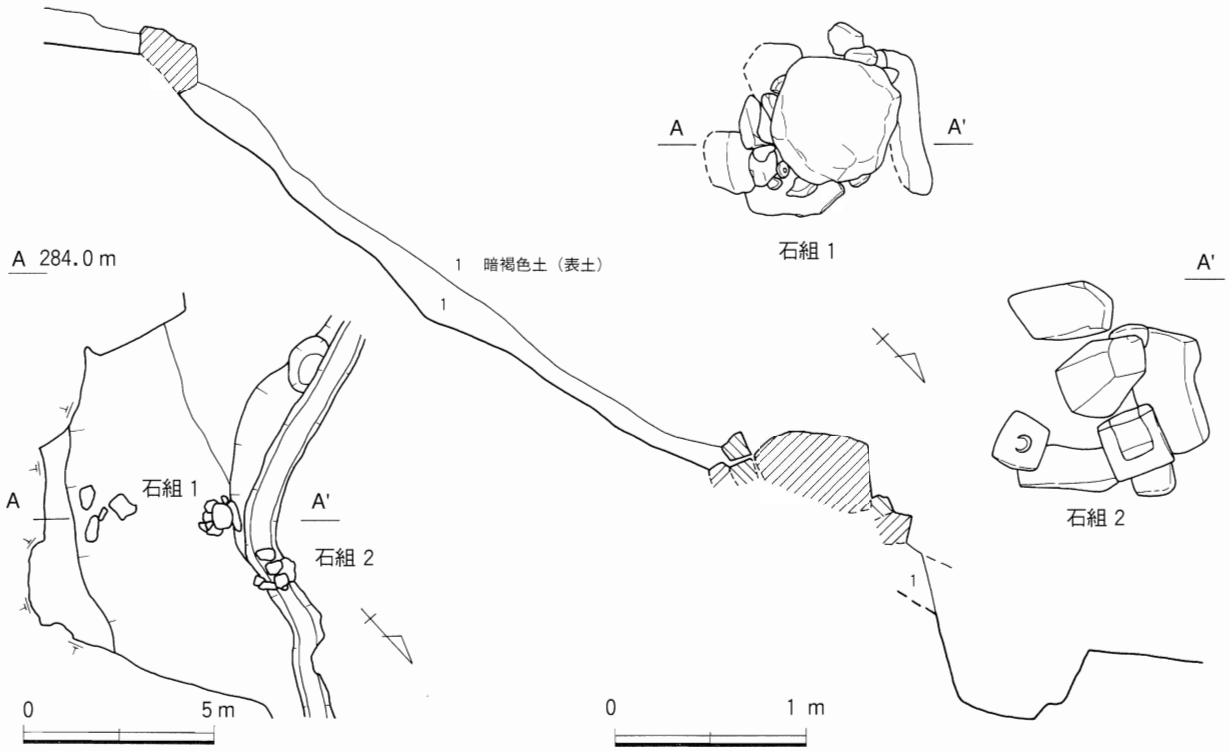


第88 図　獅子谷遺跡SK 11 実測図（S＝ 1/30）

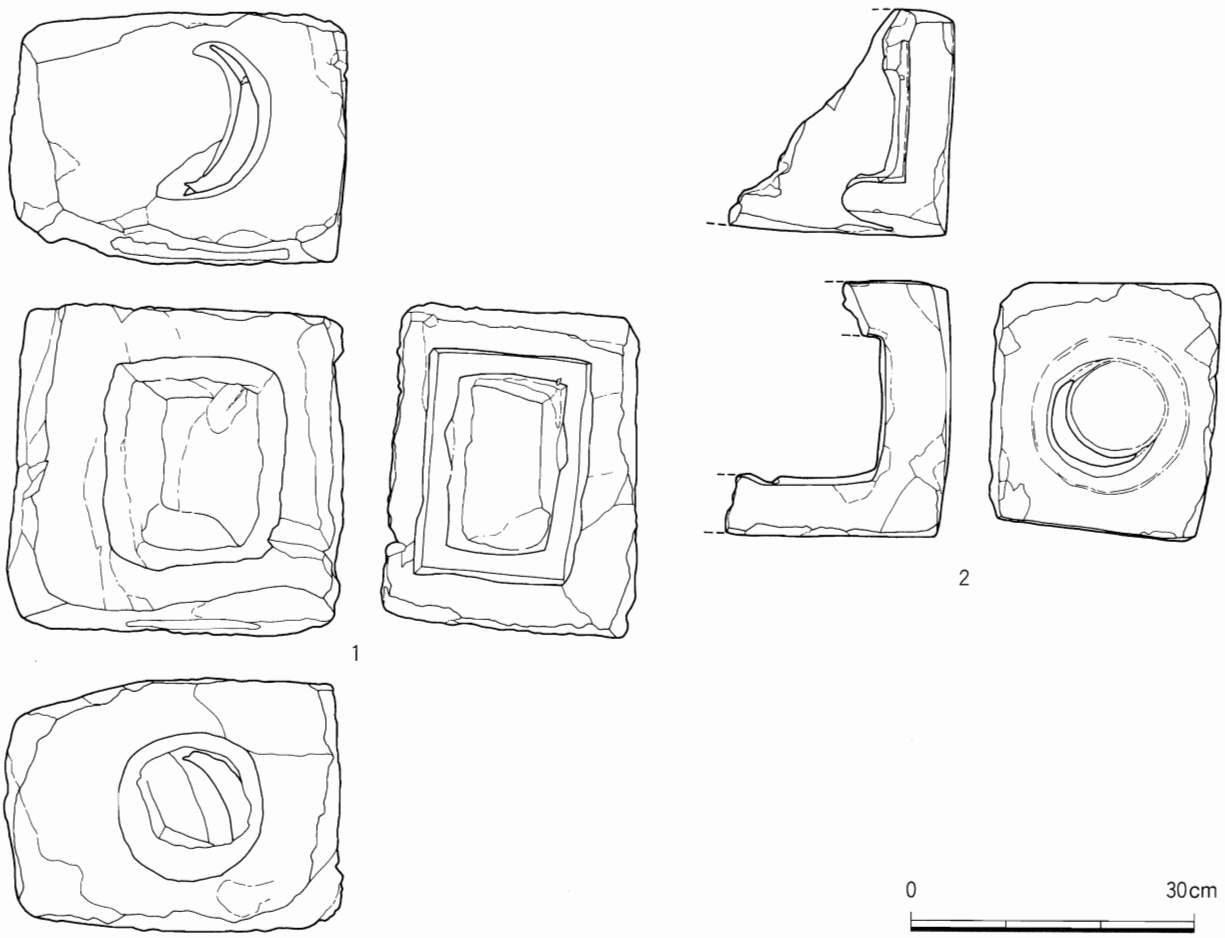
石列 4（第 87 図、図版 30）　上層粘土面の南東に位置し、Ⅲ期の SD 04 と重なるかたちで南から北に石が並べられ、中程で折れ曲がり、SD 02 と重なって西から東に並べられている。SD 02・04 の埋没後の遺構で、上層粘土面と同時期と思われる。

SK 11（第 88 図、図版 30）　平坦面の西側で、Ⅲ期の大鍛冶場から 10 m 近く離れた場所に位置する。砂礫層に掘り込まれた 1.6 m×1.6 m、深さ 0.6 m の隅円方形の土坑で、底面には 5 cmの厚さで粘土が貼られている。粘土面の上面には輪状の落ち込みが見られ、ここには桶が据え付けられていたと思われる。ただし、土層断面には桶の痕跡が認められないことから、桶は引き抜かれたものと思われる。遺構の性格について断定はできないが、水溜もしくは便所の可能性が考えられる。

覆土中から肥前系の磁器 2 点、産地不明の陶器 1 点が出土している。



第89図　獅子谷遺跡　金屋子残丘状遺構（平面 S＝ 1/200 断面 S＝ 1/40）
金屋子石組遺構実測図（S＝ 1/40）



第90図　獅子谷遺跡　金子屋石組遺構出土石製品実測図（S＝ 1/ 8 ）

なお、Ⅲ期の大鍛冶場の西側ではピットが10基確認されている。建物跡は確認できなかったが、大鍛冶場に伴う簡易な施設があった可能性も考えられる。

金屋子遺構（第89・90図、図版30・31・34）　平坦面の南東隅に標高285ｍの残丘状遺構が見られたが、その北側の麓に金屋子祭祀にかかわる石組遺構が 2 基確認できた。石組遺構 1 は、長さ20～80cmの石を集めた上部に、60cm×60cm、厚さ40cmの石を積み上げて造られている。石組遺構 2 は立石を中心に石が配置され、なかには灯籠の火袋も 2 点出土しているが、灯籠の棹石や笠石は確認できなかった。石組遺構の周辺には御神体として祭られたと思われる鉄板（137－196）や、ろうそく立て状の銑鉄（137－190～192）、流動状の銑鉄塊（136－188・189）などが出土している。

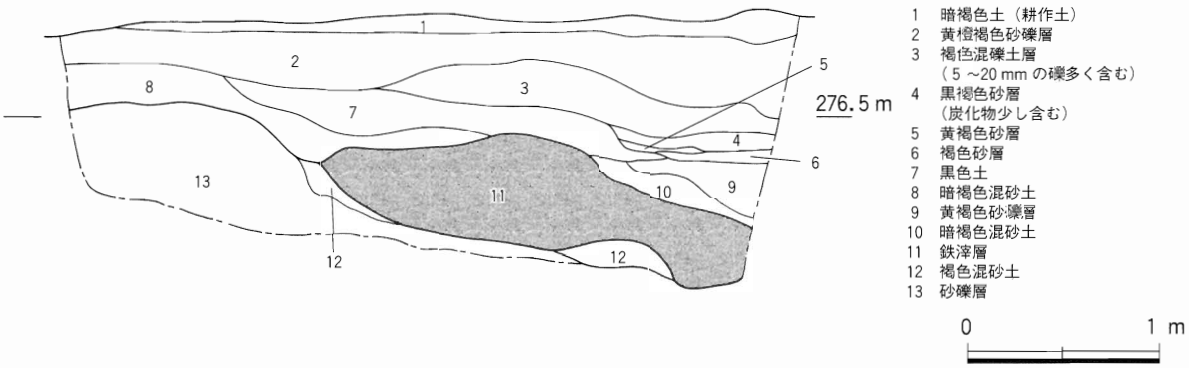
石組遺構 1 はⅡ期のSD 02に近接し、石組遺構 2 はSD 02と重なる位置に設けられていることから、それぞれ古くともⅡ期の大鍛冶場が廃止後に築かれたと考えられる。ただし、残丘状遺構から考えて、これ以前にも周辺に金屋子祭祀に関わるものがあったと考えて良いであろう。なお、地元住民の聞き取りによれば、昭和30年代頃まではここで金屋子神が祭られていたとのことである。

90－1・2 は灯籠の火袋石で石組遺構 2 で出土している。1 は長さ35.2cm、幅34.4cm、高さ26.8cmで、上面には長方形に穴があけられ、側面には三日月形、有段の長方形、円形の窓を持つ。2 は大部分を欠損しており、現存の長さ27.2cm、幅22.4cm、高さ23.8cmで、上面には長方形の穴、側面には有段長方形の窓と三日月形の窓が開いている。三日月形の窓の面には割付線が残されている。

第 3 節　南区の調査

遺跡中心部の平坦面から南へ下った獅子谷川の縁に位置し、調査前は水田であった。平成 6（1994）年の範囲確認調査で、4 m×3 mの 1 トレンチから鉄滓堆積層上面が検出されたため、排滓場の可能性があると考えられた。本調査では 1 トレンチの鉄滓堆積層を掘り下げ、鉄滓の堆積状況を確認することとした。鉄滓堆積層は上面の標高275.9ｍで、最大で0.6ｍの厚さがあったが、土層の状況から鉄滓堆積層の上下も含めて水性堆積したようであり、ここから出土した遺物は大鍛冶場から排出されたものが二次的に移動した可能性が高いと考えられた。鍛冶関連遺物の多くは銹化や再結合したり、摩滅しており、遺存状態は良くない。

トレンチで土層の状況を確認したのち、南北12.5ｍ、東西 5 mの範囲で上層の耕作土を取り除き、鉄滓堆積層を面的に検出した。鉄滓堆積層は、調査区内では南北12ｍ、東西3.4ｍの範囲に広がっていたが、調査区からさらに南側にも広がりそうである。ただし、南へ行くほど遺物の密度は散漫になっている。



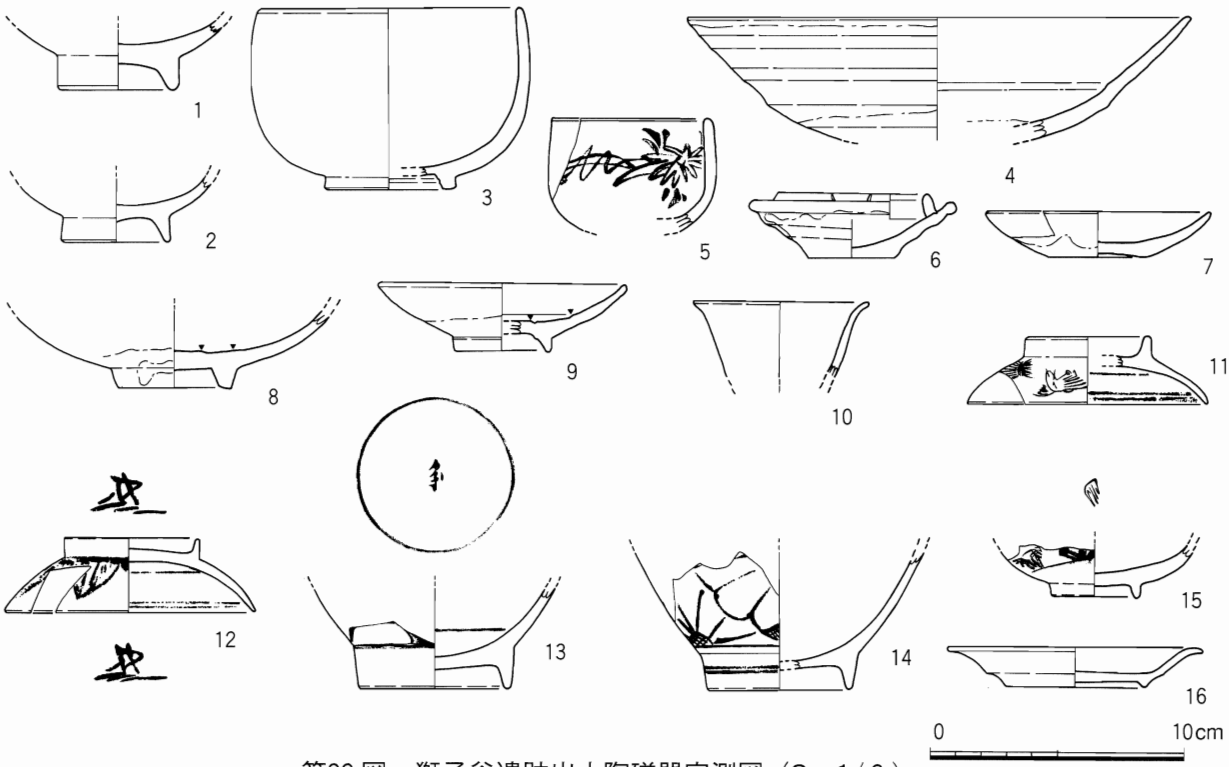
第91図　獅子谷遺跡南区 1 トレンチ北壁土層断面図（S＝ 1/40）

第 4 節　遺物

1　陶磁器（第 92・93 図、図版 32～34）

獅子谷遺跡では、同一個体と思われるものは 1 点とし、また、個体が異なる可能性のあるものは小片を含めて数えた場合、109 点の陶磁器が出土している。これらを器種別、遺構の段階に基づく遺物群別に分けたものが第 25 表である。

器種構成・産地　器種構成比を第 93 図左に示した。これを見ると碗・皿といった食膳具が大半を占めており、これに若干の土瓶・袋物などを伴っていることが分かる。こうした器種構成から鍛冶作業の合間に飲食をしていたと思われる。



第92 図　獅子谷遺跡出土陶磁器実測図（S= 1/ 3 ）

第24 表　獅子谷遺跡出土陶磁器観察表

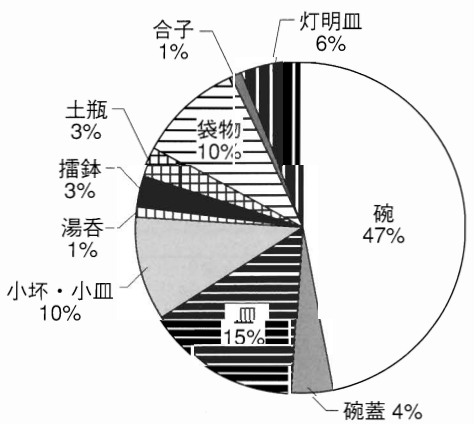
挿図番号	図版番号	遺物番号	地区名	遺構名	遺物群	種類	器種	計測値（cm）			特徴および文様・施釉	推定生産地
								口径	底径	器高		
92	32	1		SD 02	C	陶器	碗	—	4.6	—	内外面施釉	肥前系
92	32	2		Ⅲ期整地土	E	陶器	碗	—	4.2	—	内外面施釉	肥前系
92	32	3	N 2, E 6	石列外盛土中	E	陶器	碗	10.2	5.0	7.2	内外面施釉	肥前系
92	32	4	S 4, E 2	SD 02	C	陶器	皿	19.6	—	—	外）白色の釉 内）銅緑釉	肥前系
92	32	5	S 2, E 10	4 号鍛冶炉上層覆土中	D	陶器	小坏	6.2	—	—	外）草花文	不明
92	34	6		金屋子石組遺構周辺	G	陶器	皿	5.8	3.4	2.6	内面及び口縁外面鉄釉	在地系
92	34	7		金屋子石組遺構周辺	G	陶器	皿	8.9	2.9	1.8	内面及び口縁外面鉄釉	在地系
92	32	8	N 2, EW 0	SD 02	C	磁器	皿	—	4.7	—	見込み）蛇ノ目釉ハギ	肥前系
92	32	9	NS 0, EW 0	Ⅲ期造成土	E	磁器	皿	9.8	3.7	2.7	見込み）蛇ノ目釉ハギ	肥前系
92	32	10		8 号鍛冶炉火窪覆土中	F	磁器	小坏	7.0	—	—		肥前系
92	32	11	NS 0, E 6	Ⅲ期整地土	E	磁器	蓋	9.4	—	2.7	外）稲束と雀 内）3 条の圏線	肥前系
92	33	12	G－8		H	磁器	蓋	9.9	5.3	3.0	外）芭蕉文　底に舟 内）見込みに舟、3 条の圏線	肥前系
92	32	13		4 号鍛冶炉覆土中	D	磁器	碗	—	5.8	—	見込み）寿	肥前系
92	32	14	NS 0, E 2	Ⅲ期作業面	F	磁器	碗	—	5.6	—	外）菊花氷裂文	肥前系
92	33	15	K－6		H	磁器	碗	—	3.5	—		肥前系
92	34	16		金屋子石組遺構	G	磁器	皿	10.1	5.5	1.6		肥前系

なお、第93図右に陶磁器の産地別の割合を示した。これを見ると肥前系の陶磁器が大半を占めることが分かる。在地系と思われるものは擂鉢、土瓶および灯明皿などが見られる。

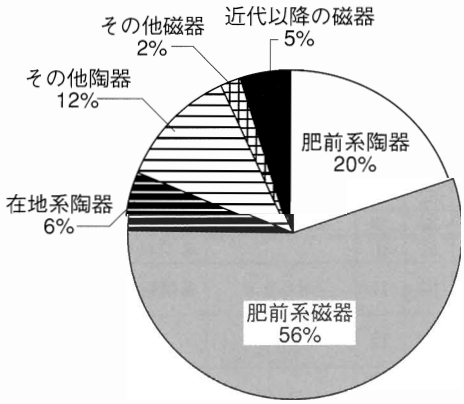
遺物群と年代　遺物群は、Ⅰ期の操業時もしくは操業後ほどなく埋まったと思われるⅠ期の遺構覆土中出土遺物（A群）、Ⅰ～Ⅱ期の操業中に施された整地土・貼床土中及びSB 01の柱穴内出土遺物（B群）、Ⅱ期の操業中から操業後に埋まったと考えられるSD 02覆土中出土遺物（C群）、Ⅱ期の操業後に埋没した3・4号鍛冶炉覆土中出土遺物（D群）、Ⅲ期の大鍛冶場を造るときに盛られた整地土中及びSB 02の柱穴内出土遺物（E群）、Ⅲ期の作業面上及び遺構覆土中出土遺物（F群）、金屋子遺構周辺で出土したもの（G群）、大鍛冶場以外の遺構に伴うもの・遺構外出土のもの（H群）、南区出土のもの（I群）というかたちで整理した。理論上では、A群からF群へ行くほど新しくなるのだ

第25表　獅子谷遺跡出土陶磁器組成表

産地・種別	器種	A群 Ⅰ期遺構内	B群 Ⅰ～Ⅱ期 作業場貼床内 Ⅱ期SB 01	C群 Ⅱ期 SD 02	D群 Ⅱ期 3・4号鍛冶炉覆土	E群 Ⅲ期造成土 SB 02 柱穴内	F群 Ⅲ期 作業面 遺構覆土	G群 金屋子	H群 大鍛冶場以外の遺構・遺構外	I群 南区	合計
肥前系陶器	皿（17c初）								1		1
	Ⅲ（17c後半～18c前半）			1					1		2
	碗		1		2	2	1		8		14
	陶胎染付					1			2		3
	擂鉢		1								1
	不明				1						1
肥前系磁器	皿（蛇の目釉はぎ）			1		2					3
	皿		1					1			2
	碗					3			3	2	8
	広東碗		2		1	2	1		1		7
	広東碗蓋					1	1		1		3
	小坏・小皿	1		2			2		1		6
	湯呑								1		1
	合子								1		1
	袋物	1						1	3		5
	不明	1	1	2		11	9		1		25
在地系陶器	灯明皿							2	1	1	4
	土瓶								1		1
	擂鉢								1		1
その他陶器	皿					1			2		3
	碗								1		1
	小坏				1						1
	土瓶									1	1
	袋物		1						1		2
	不明			1	1		1		2		5
その他磁器									2		2
近代以降の磁器			1					4			5
合計		3	8	7	6	23	15	8	35	4	109



器種構成比率（不明は除く）



産地別比率

第93図　獅子谷遺跡出土陶磁器　器種構成・産地別比率

が、古い段階の遺物が遺構の造り替えに伴って新しい遺構の中に混入することもあり、単純にはいかないようである。

A 群（図版 32）では陶磁器片はわずか 3 点しか出土しておらず、しかもいずれも小片であり、時期決定は難しい。SD 01 からコバルト色の染付磁器が 1 点出土しているが、新旧の遺構の切り合いが激しかったため混入したものかもしれない。

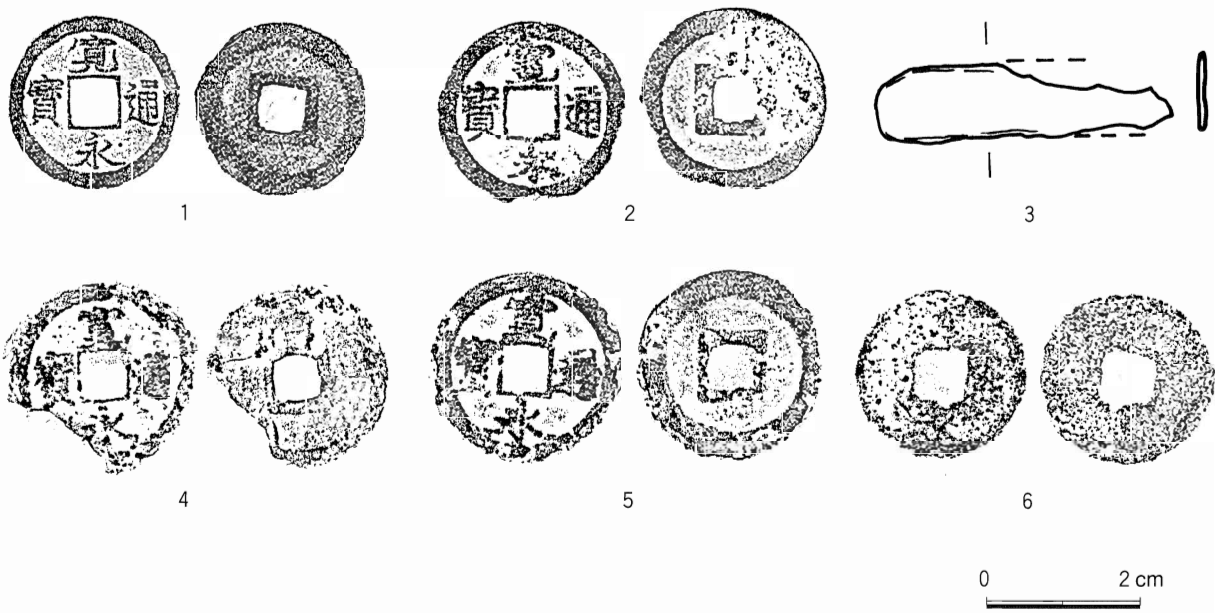
B 群（図版 32）では 8 点の陶磁器が出土している。17 世紀後半～18 世紀前半の陶器碗もあるが、18 世紀～19 世紀前半にかけて生産された広東碗、19 世紀前半の皿片などが含まれる。なお、SB 01 の柱穴内から近代まで下るような磁器片が 1 点出土しているが、混入の可能性も考えられる。

C 群（図版 32）では内面に銅緑釉が施された皿（92－4）、肥前系磁器の小坏、見込みに蛇の目釉はぎがされた肥前系磁器の皿（92－8）などが出土しており、これらは 17 世紀後半～18 世紀前半に位置づけられる。なお、これらが出土した位置は SD 02 が南北にのびている部分で、Ⅰ期の SD 01 の直角方向にのびており、これとつながっていた可能性も考えられる。

D 群（図版 32）は、4 号鍛冶炉が壊されて埋め戻された覆土中から出土した遺物である。17 世紀後半～18 世紀前半の肥前系陶器碗もあるが、18 世紀末～19 世紀前半の広東碗（92－13）も出土している。このほか産地不明の陶器小坏（92－5）もある。

E 群（図版 32）には、肥前系陶器の碗（92－1・2）、蛇の目釉はぎがされた肥前系磁器の皿（92－9）など 17 世紀後半～18 世紀前半までさかのぼる遺物も見られるが、18 世紀末～19 世紀前半の広東碗・蓋（92－11）や、19 世紀中葉まで下りうるものも出土している。

F 群（図版 32）には、17 世紀後半～18 世紀前半に位置づけられる肥前系の陶器碗（92－3）や磁器



第94 図　獅子谷遺跡出土古銭択影・銅製品実測図（S＝ 1/1）

第26 表　獅子谷遺跡古銭・銅製品観察表

挿図番号	図版番号	遺物番号	出土地点	遺構時期	種類	遺物名	計測値（cm）			重量（g）
							長（径）	短（径）	厚さ	
94	34	1	Ⅲ期整地土	Ⅲ	古銭	新寛永銅一文銭	2.30	2.28	0.09	2.51
94	34	2	Ⅲ期整地土	Ⅲ	古銭	古寛永銅一文銭	2.47	2.41	0.13	2.71
94	34	3		Ⅲ	銅製品	板状銅製品	3.81	0.94	0.13	1.55
94	34	4	金屋子遺構周辺		古銭	古寛永銅一文銭	2.44	2.42	0.11	2.09
94	34	5	D－7		古銭	古寛永銅一文銭	2.51	2.49	0.12	2.46
94	34	6	南区		古銭	寛永銅一文銭	2.26	2.25	0.07	1.38

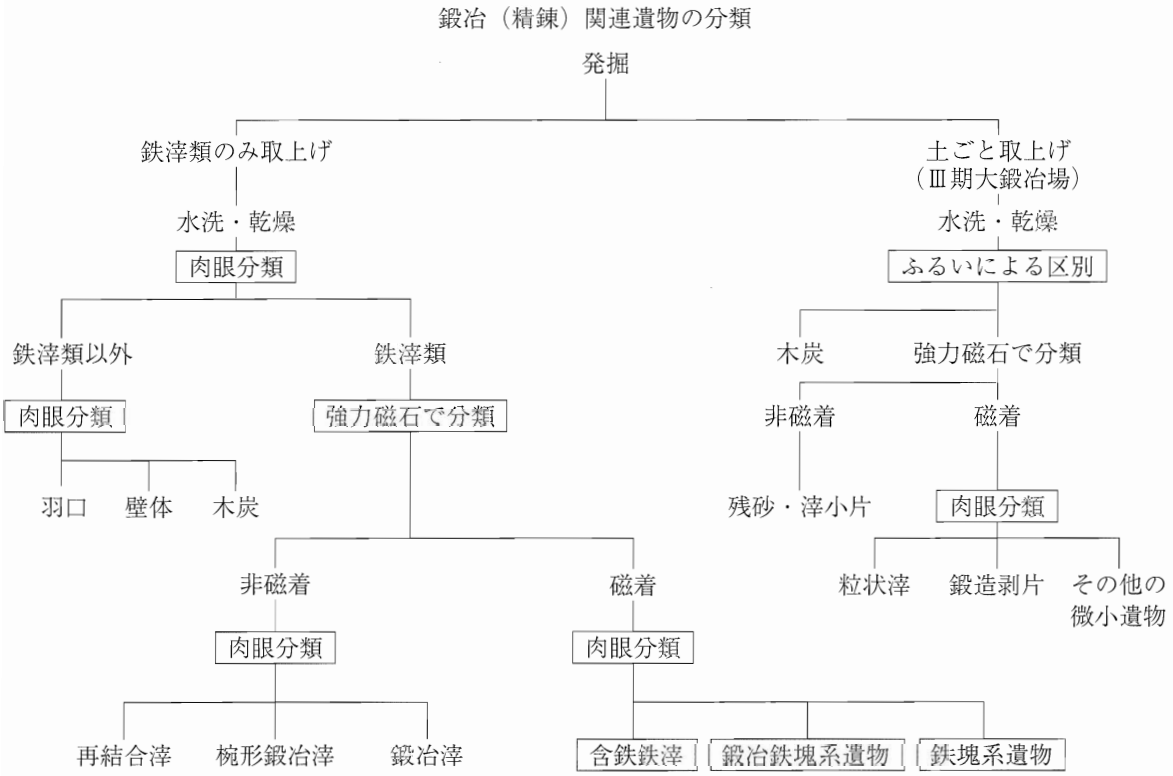
小坏（92－10）も出土しているが、広東碗（92－14）など18世紀末～19世紀前半の遺物も含まれている。

G群（図版34）には、肥前系磁器の皿（92－16）のほか、18世紀代～19世紀代と思われる在地系の陶器灯明皿（92－6・7）が出土している。灯明皿は金屋子祭祀に使用されたと見られる。また、近代以降の磁器も多く、金屋子祭祀が大鍛冶の操業を終えた後も続けられたことを窺わせる。

H群（図版33）の陶器には、17世紀初頭の肥前系陶器で胎土目の残る鉄絵皿（図版33上段の左最上部）、17世紀後半～18世紀前半の碗や内面銅緑釉の施された皿、18世紀代の肥前系の陶胎染付碗、在地系の擂鉢・土瓶・灯明皿、産地不明の碗などが出土している。磁器には17世紀後半～18世紀前半の肥前系の小坏や、18世紀末～19世紀前半の広東碗・蓋（92－12）や碗（92－15）、湯呑、合子などが出土している。

I群は南区の鉄滓堆積層から出土した遺物で、京焼系と思われる陶器土瓶や、在地系の陶器灯明皿、19世紀前葉～中葉の肥前系の磁器碗が出土している。

これらの遺物群から、大鍛冶場Ⅱ期の操業年代は18世紀末～19世紀中葉頃になると考えられ、Ⅲ期がこれより下る年代になると思われる。ただし、近代以降の陶器が金屋子遺構以外であまり出土していないところから見ると、大幅に新しくなることはないと思われる。大鍛冶場Ⅰ期については、遺構との明確な共伴関係はつかめなかったが、遺跡内で17世紀後半～18世紀前半の遺物がまとまって出土しており、この頃までさかのぼる可能性が考えられよう。



アミ部分の遺物については、特殊金属探知器による分類を実施

第95図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物分類模式図

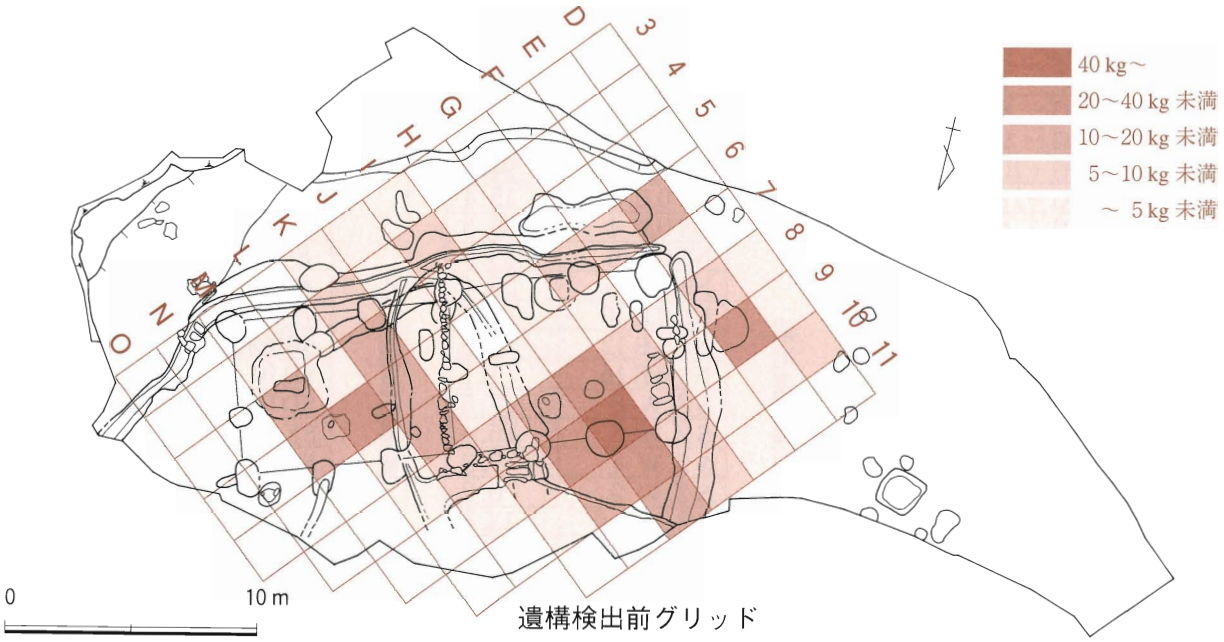
2　古銭・銅製品（第 94 図）

本遺跡では銅銭 5 点（1・2・4～6）、板状銅製品（3）1 点が出土している。1 は新寛永銅一文銭、2・4・5 は古寛永銅一文銭である。6 は火熱を受けているため文様はよく見えない。3 は用途不明の銅製品で、現存長 3.81cm、幅 0.94cmの板状銅製品で左端部は丸くなっており、側縁は直線的にのびている。

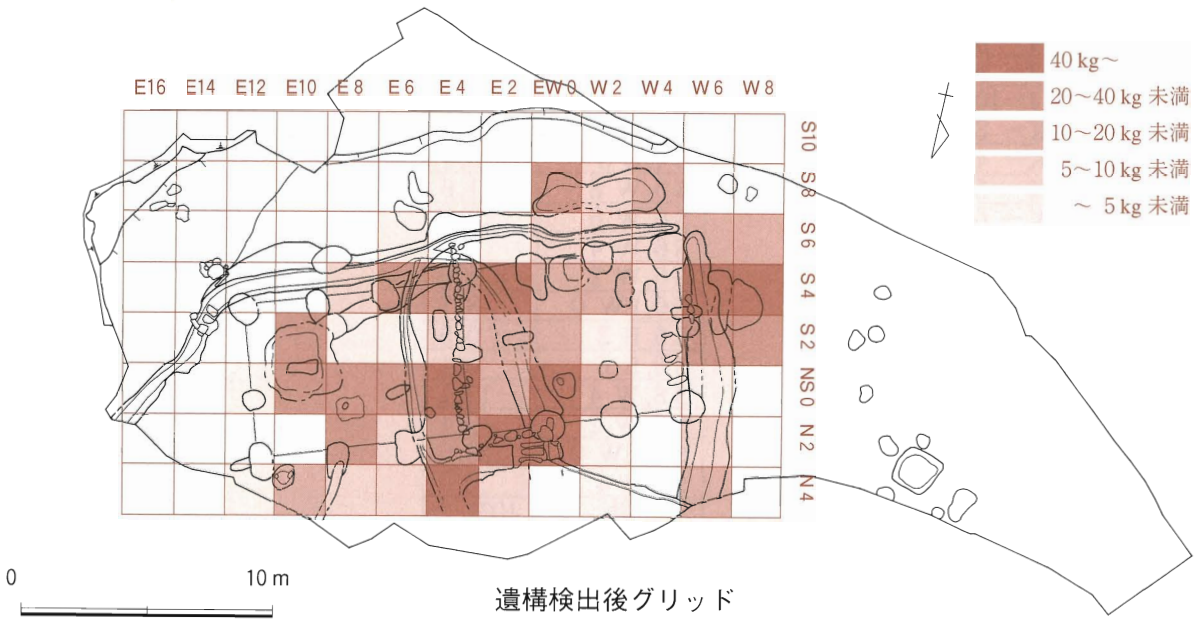
3　鍛冶関連遺物

遺物の整理方法

獅子谷遺跡では全体量で 3000kgを超える鍛冶関連遺物が出土している。これらは本遺跡における



第96 図　獅子谷遺跡鉄滓分布図（1）（S＝ 1/300）



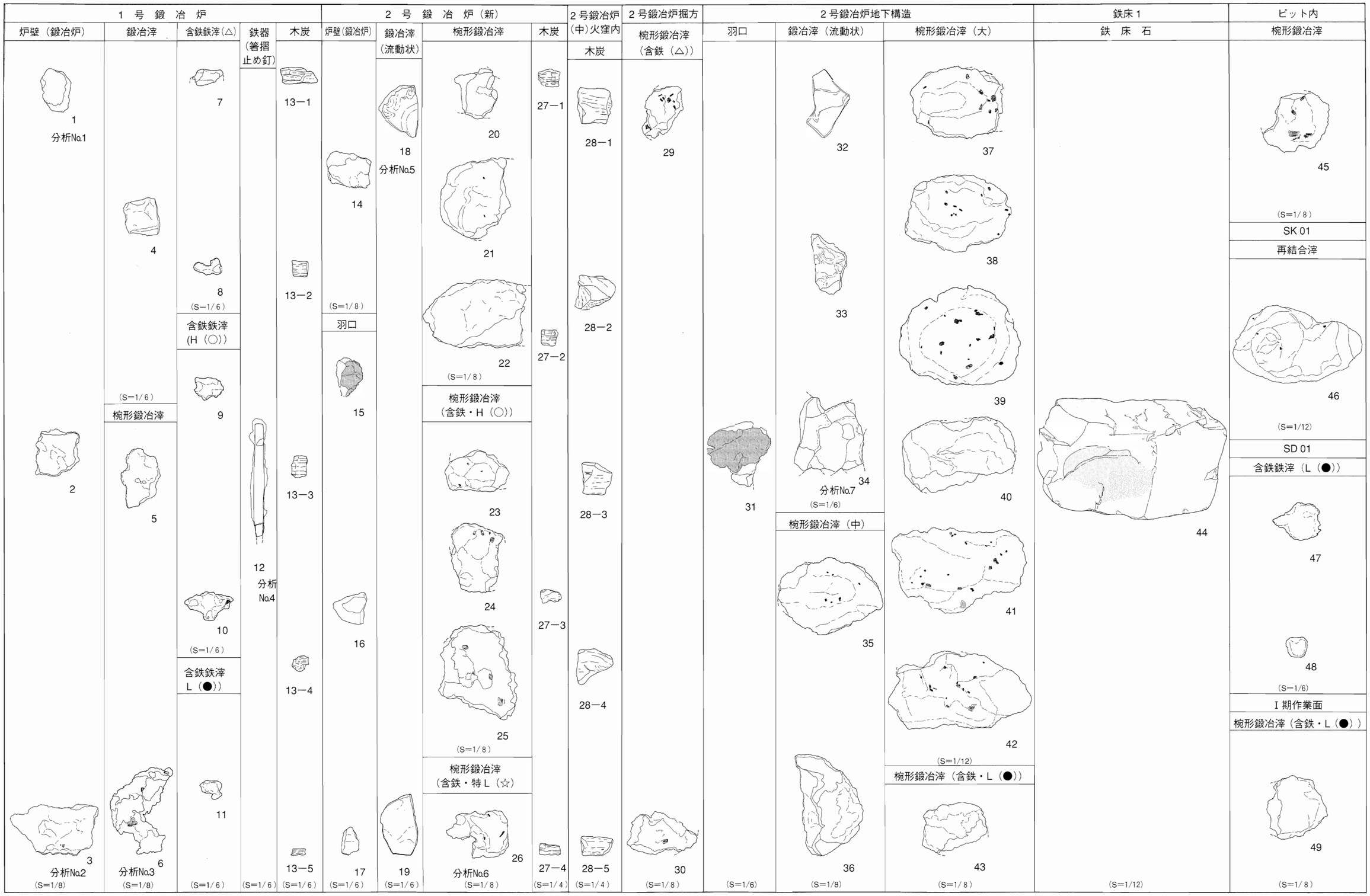
第97 図　獅子谷遺跡鉄滓分布図（2）（S＝ 1/300）

第27表　獅子谷遺跡　鉄滓出土地区・遺構別重量表

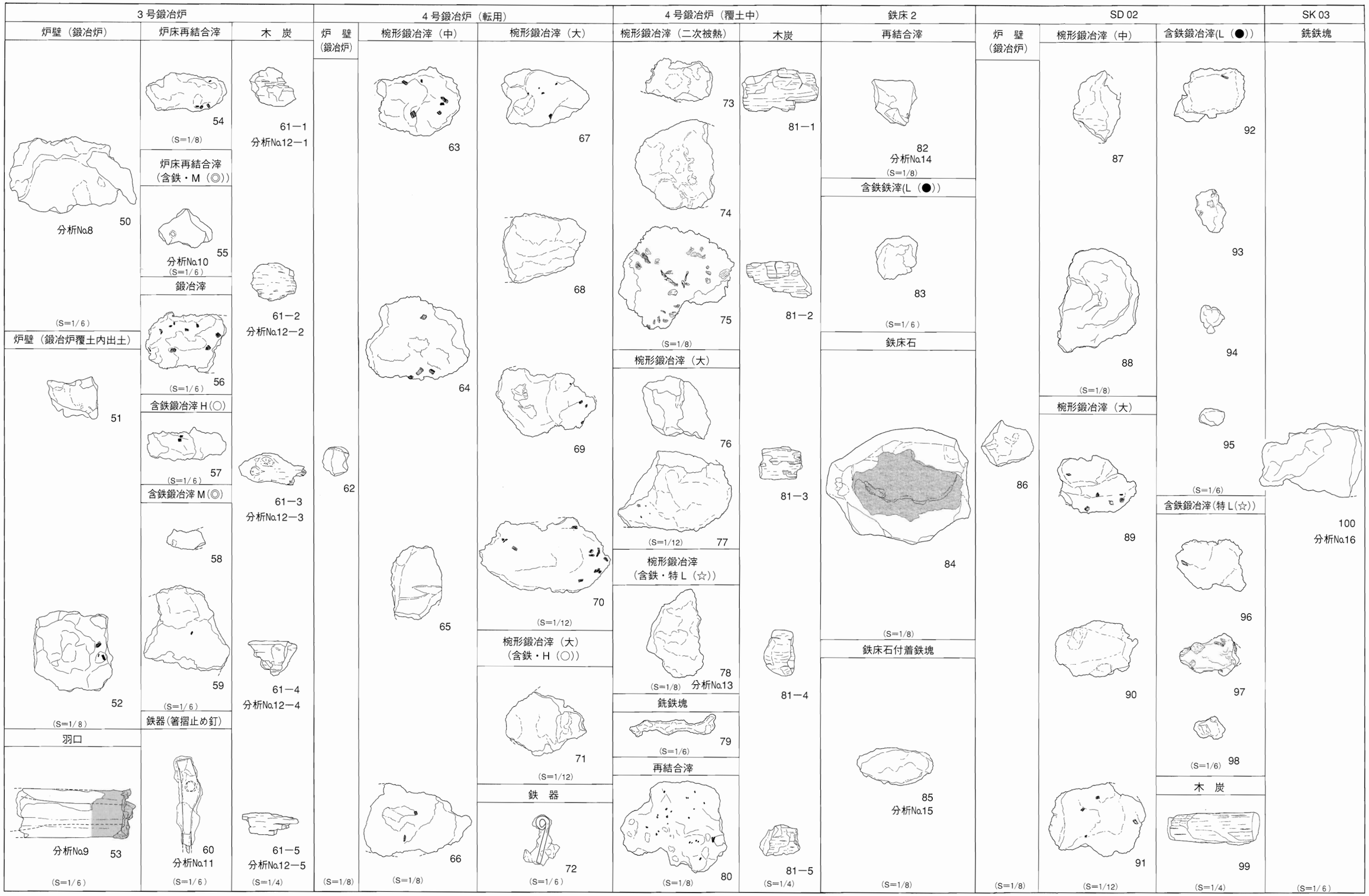
	出土位置	重量(kg)
鍛冶遺構検出前グリッド	D－ 8	1.1
	D－ 9	1.8
	D－10	6.3
	E－ 6	15.3
	E－ 7	0.4
	E－ 8	6.0
	E－ 9	25.4
	E－10	3.7
	F－ 6	5.5
	F－ 8	1.6
	F－ 9	2.1
	F－10	0.1
	F－11	1.5
	G－ 4	0.5
	G－ 6	6.5
	G－ 7	1.9
	G－ 8	7.2
	G－ 9	6.8
	G－10	8.5
	G－11	8.5
	H－ 4	0.5
	H－ 5	2.4
	H－ 6	2.0
	H－ 7	4.5
	H－ 8	24.7
	H－ 9	75.0
	H－10	22.8
	H－11	17.0
	I－ 3	0.5
	I－ 4	5.7
	I－ 5	0.5
	I－ 7	3.9
	I－ 8	12.7
	I－ 9	20.4
	I－10	10.7
	J－ 3	0.5
	J－ 4	1.0
	J－ 5	0.5
	J－ 6	2.6
	J－ 7	2.2
	J－ 8	5.3
	J－ 9	8.6
	J－10	1.0
	K－ 3	0.3
	K－ 4	5.1
	K－ 5	14.5
	K－ 6	10.7
	K－ 7	11.2
	K－ 8	5.6
	K－ 9	0.5
	L－ 4	1.5
	L－ 5	3.0
	L－ 6	20.4
	L－ 7	1.5
	L－ 8	1.2
	M－ 4	0.2
	M－ 5	16.9
	M－ 6	11.5
	小　計	439.8

	出土位置	重量(kg)
鍛冶遺構検出後グリッド	N 4, W 6	13.2
	N 4, W 2	2.9
	N 4, E 2	5.1
	N 4, E 4	43.7
	N 4, E 6	5.0
	N 4, E 8	9.1
	N 4, E 10	12.5
	N 4, E 12	0.2
	N 2, W 6	5.2
	N 2, W 2	0.5
	N 2, EW 0	49.3
	N 2, E 2	45.8
	N 2, E 4	35.3
	N 2, E 6	9.1
	N 2, E 8	38.3
	NS 0, W 6	0.1
	NS 0, W 4	1.2
	NS 0, W 2	18.5
	NS 0, EW 0	94.2
	NS 0, E 2	15.4
	NS 0, E 4	66.5
	NS 0, E 6	33.9
	NS 0, E 8	26.4
	NS 0, E 10	31.3
	NS 0, E 12	0.5
	NS 0, E 16	1.1
	S 2, W 8	37.5
	S 2, W 6	25.4
	S 2, W 4	7.3
	S 2, W 2	0.2
	S 2, EW 0	13.8
	S 2, E 2	19.4
	S 2, E 4	7.0
	S 2, E 6	3.7
	S 2, E 8	3.6
	S 2, E 10	35.5
	S 4, W 8	54.8
	S 4, W 6	47.7
	S 4, W 4	6.3
	S 4, W 2	13.9
	S 4, EW 0	15.6
	S 4, E 2	59.5
	S 4, E 4	33.7
	S 4, E 6	20.9
	S 4, E 8	8.1
	S 6, W 8	11.6
	S 6, W 6	10.8
	S 6, W 4	5.1
	S 6, W 2	6.0
	S 6, EW 0	8.7
	S 6, E 2	0.5
	S 6, E 6	0.1
	S 8, W 4	12.1
	S 8, W 2	9.1
	S 8, EW 0	28.5
	S 8, E 4	0.5
	小　計	1071.2

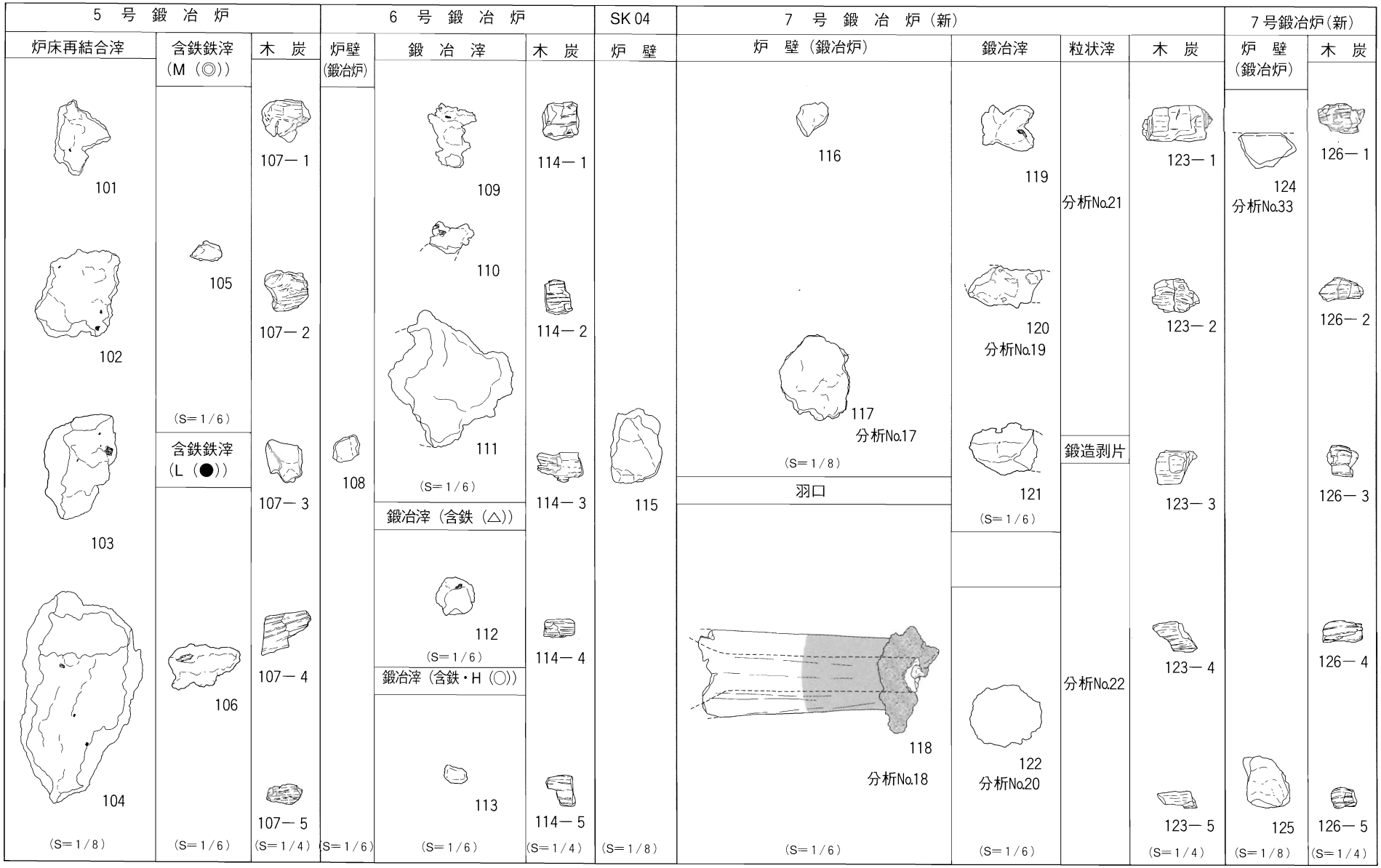
	出土位置	重量(kg)
大鍛冶場Ⅰ期遺構	1 号鍛冶炉	5.6
	2 号鍛冶炉	123.9
	鉄床 1	
	SK 01	17.1
	SD 01	0.2
	その他	
	小計	150.2
大鍛冶場Ⅱ期遺構	3 号鍛冶炉	8.9
	4 号鍛冶炉	137.0
	鉄床 2	3.0
	SD 02	45.1
	SD 03	2.0
	SK 02	1.0
	SK 03	3.1
	小計	200.1
大鍛冶場Ⅲ期遺構	5 号鍛冶炉	10.5
	6 号鍛冶炉	3.4
	7 号鍛冶炉	9.0
	8 号鍛冶炉	2.9
	水場遺構	108.9
	石列 2	9.2
	SB02柱穴内	36.7
	SD 04	15.3
	SD 05	1.8
	SK 04	0.7
	SK 05	0.2
	SK 06	0.1
	SX 02	0.6
	その他	10.0
	小計	209.3
金屋子石組遺構周辺		6.8
時期不明の遺構	SK 11	0.4
	その他	0.8
	小計	1.2
表土		114.4
南区	1 トレンチ	461.1
出土位置不明		369.7
遺跡出土総重量		3023.8



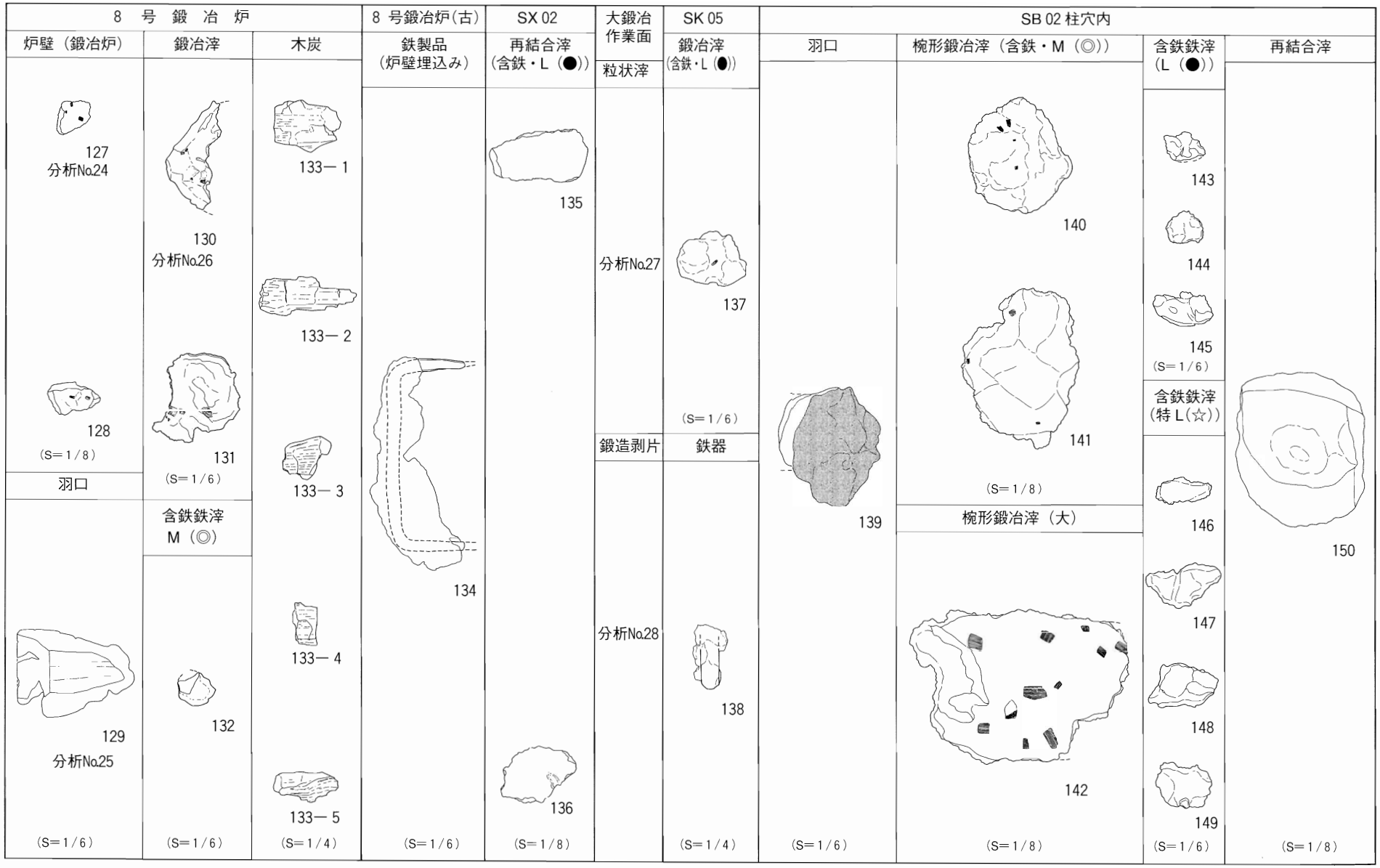
第 98 図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（1）



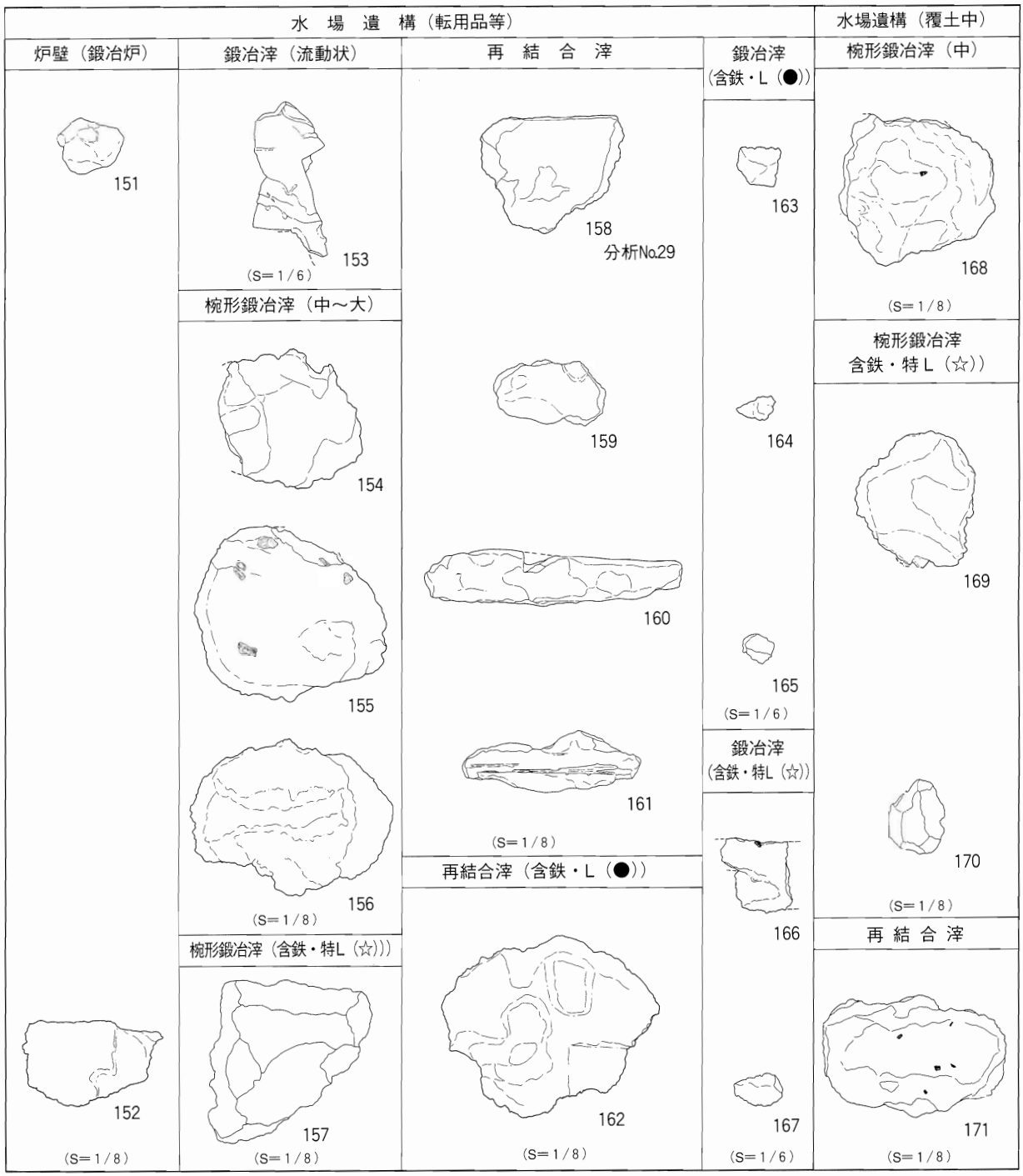
第99図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（2）



第100図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（3）

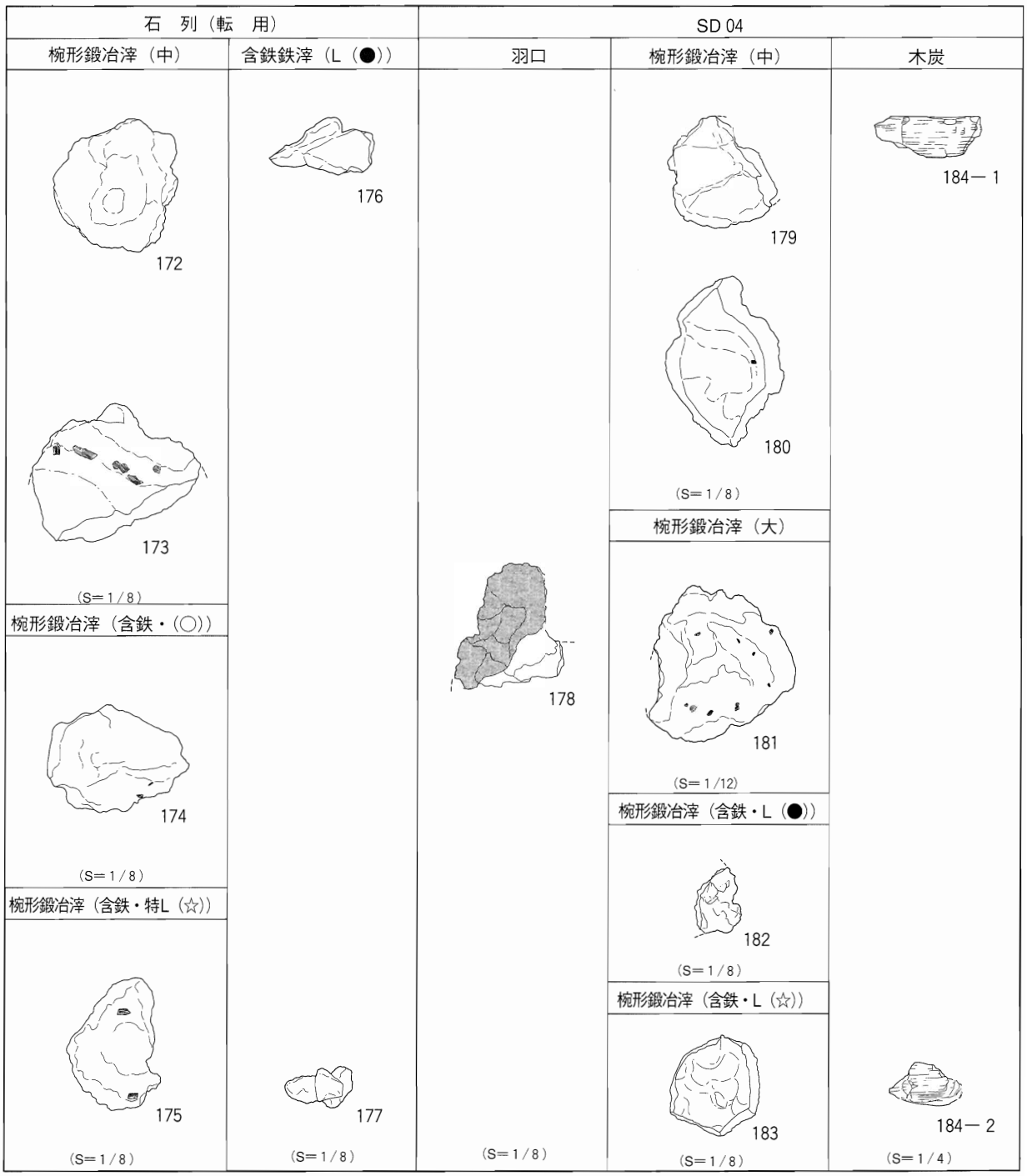


第101図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（4）



第102図　獅子谷遺跡鍛冶関連構成図（５）

大鍛冶の操業状況を知る上で有効な情報を持っていると考え、遺跡中心部の平坦面で出土したものについては基本的に全量回収することにした。遺物の回収にあたっては表土掘削時にはグリッド設定をしておらず一括で取り上げていたが、水田床土の高さまで掘り下げたところで多くの遺物が出土してきたため任意の２ｍグリッドを設定して遺物の取り上げを行った（第96図）。その後、Ⅲ期の大鍛冶場跡が検出されたため、この軸にあわせて２ｍのグリッドを設定し直した。Ⅲ期の大鍛冶場跡の南北の中心近くを通るNS０ラインと、東西のほぼ中心を通るEW０ラインとを基準線とし、NS０ラインから北（南）へ２ｍごとにＮ２、Ｎ４、Ｎ６…（Ｓ２、Ｓ４、Ｓ６…）と呼び、EW

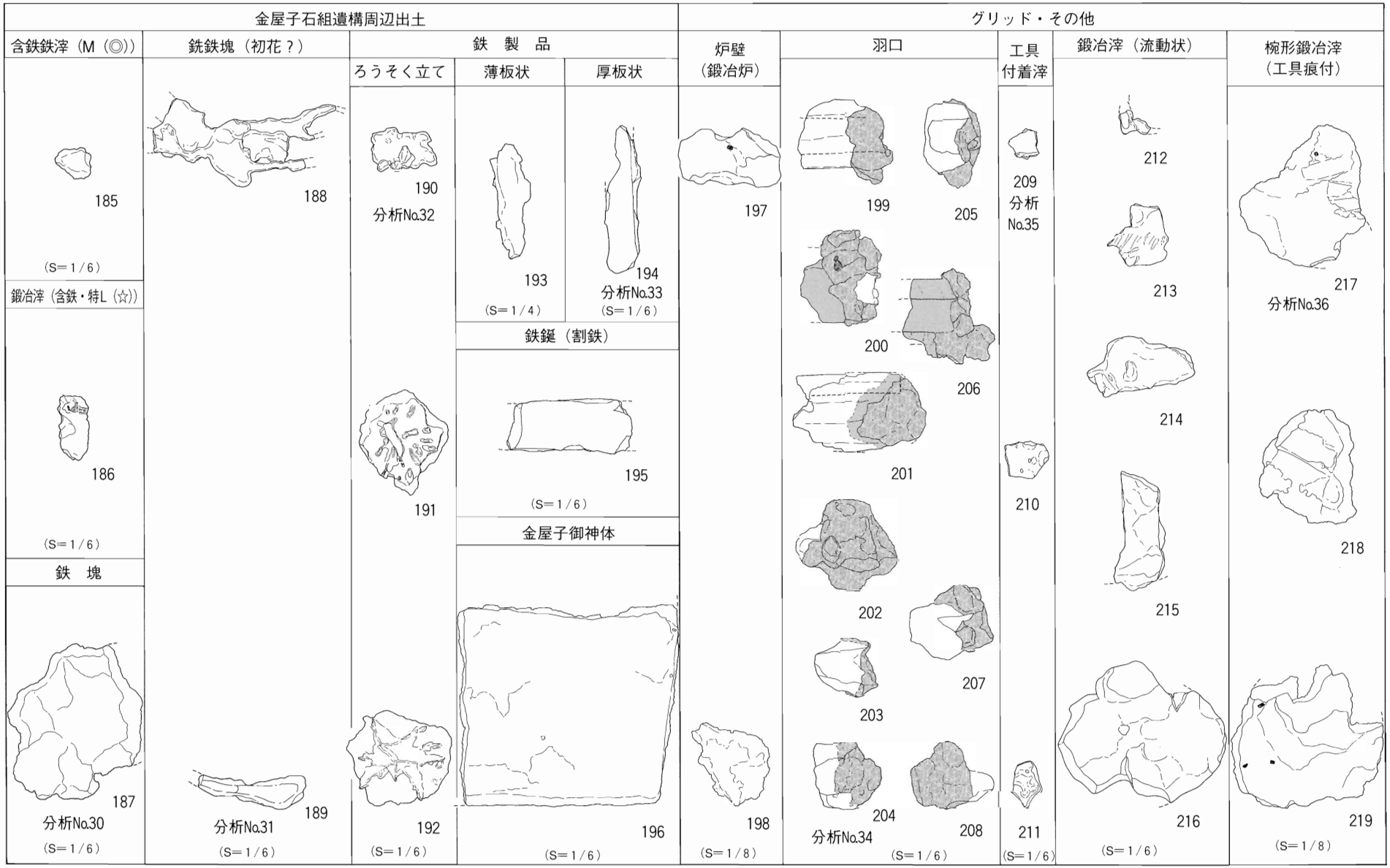


第103図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（6）

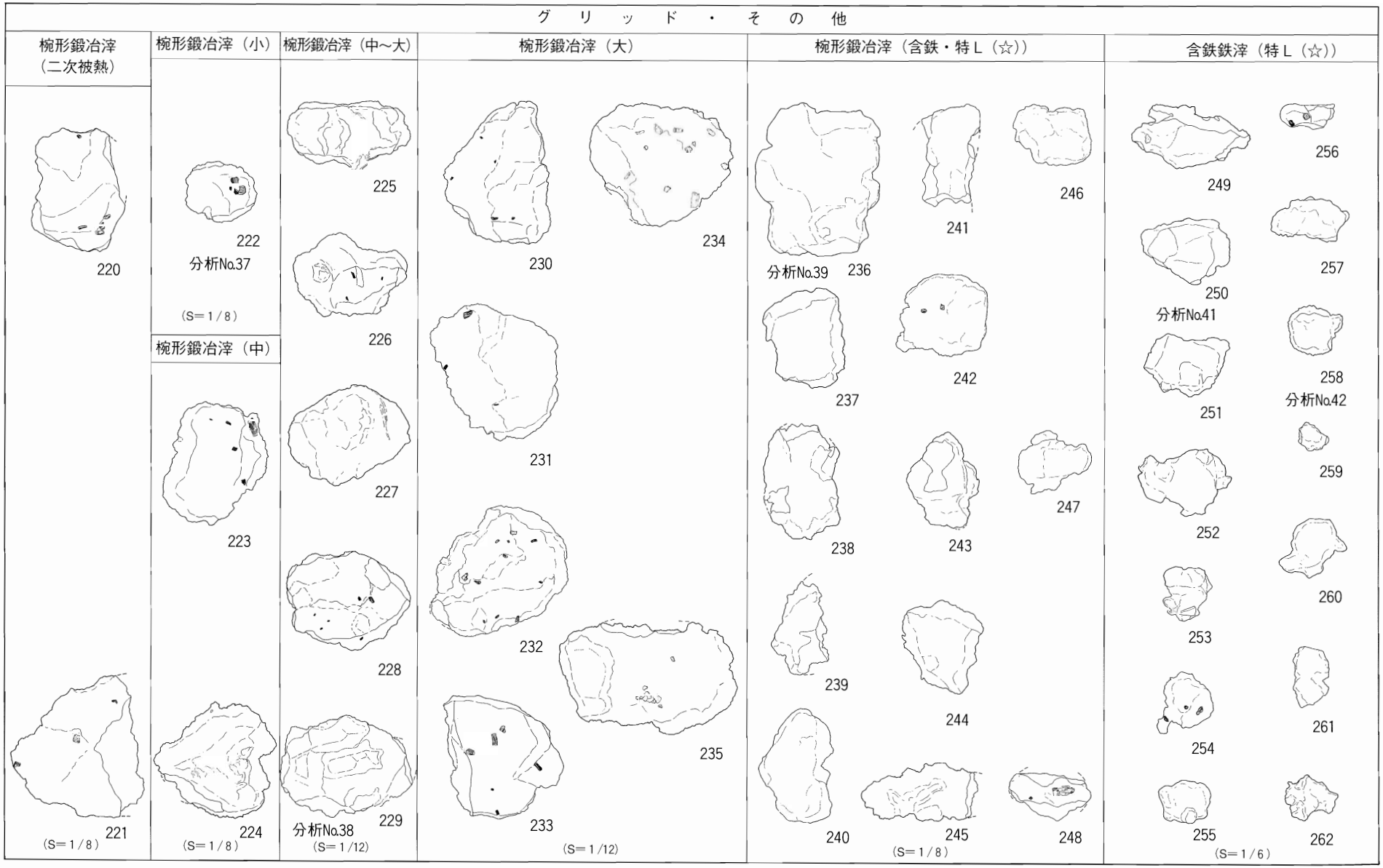
0ラインから東（西）へ2mごとにE2、E4、E6…（W2、W4、W6…）と呼ぶこととした。グリッド名はグリッドの南東地点をもとに（例えばNS 0, EW 0）つけている（第97図）。

南区については、摩滅が著しく、銹化・再結合が進んでおり、遺物の遺存状態はよくなかったため1トレンチ出土のもののみを一括で取り上げた。

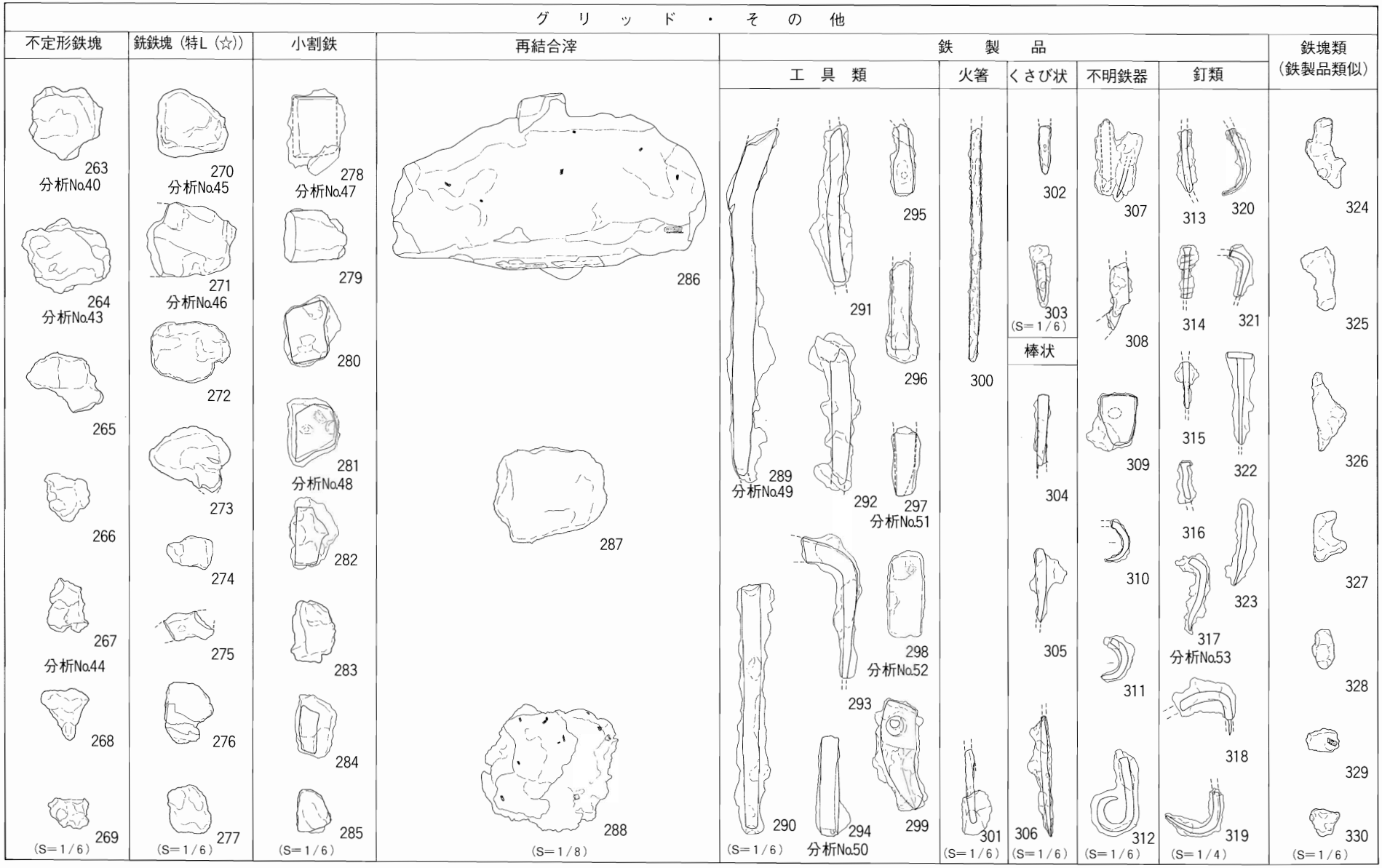
回収した遺物については、第95図に示した手順で分類・整理作業を進めた。水洗作業については基本的に現地で進めたが、分類については現地で終えることができなかったため、一旦全てを埋蔵文化財調査センターに持ち帰って作業を続けた。この過程で、情報量が多く重要性が高いと考えられる遺物と情報量の少ない遺物に選別し、重要性の高いものから分析遺物、報告書掲載遺物、屋内



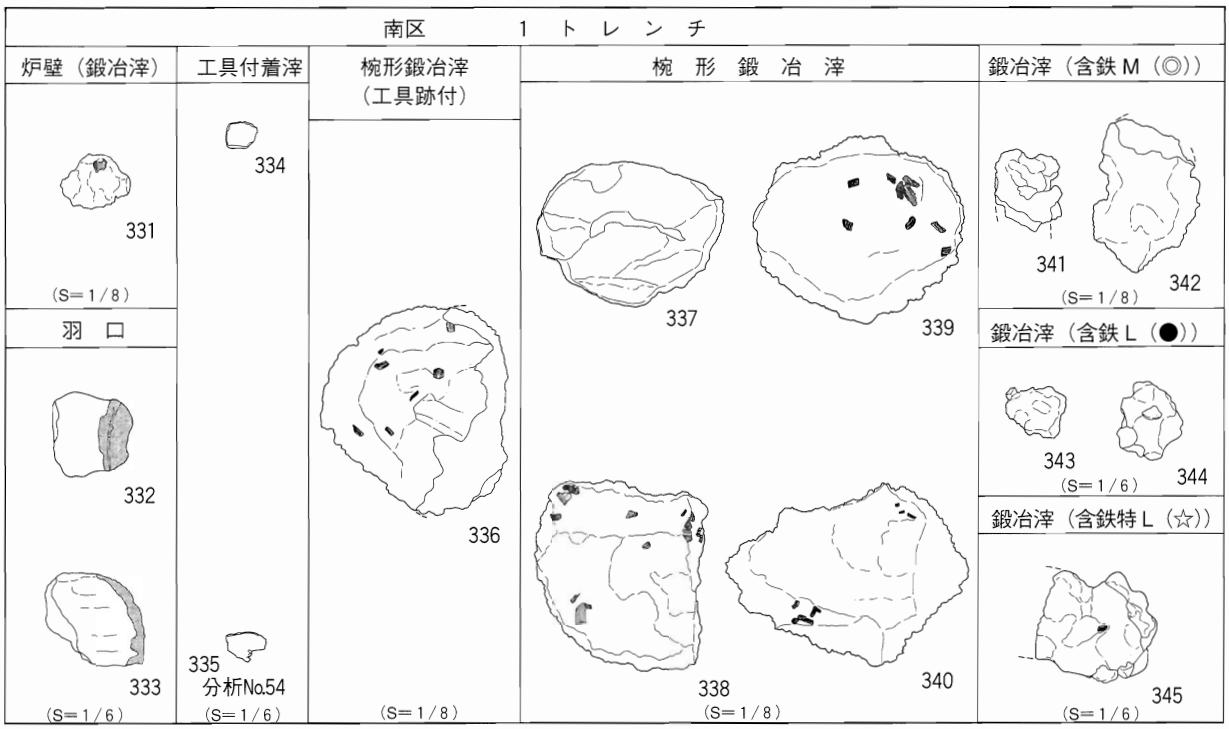
第104図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（7）



第105図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（８）



第106図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（9）



第107図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物構成図（10）

保管遺物、屋外保管遺物にそれぞれ仕分けした。分析遺物については金属学的な分析調査を委託し、屋外保管遺物については最終的に屋外に埋納した。

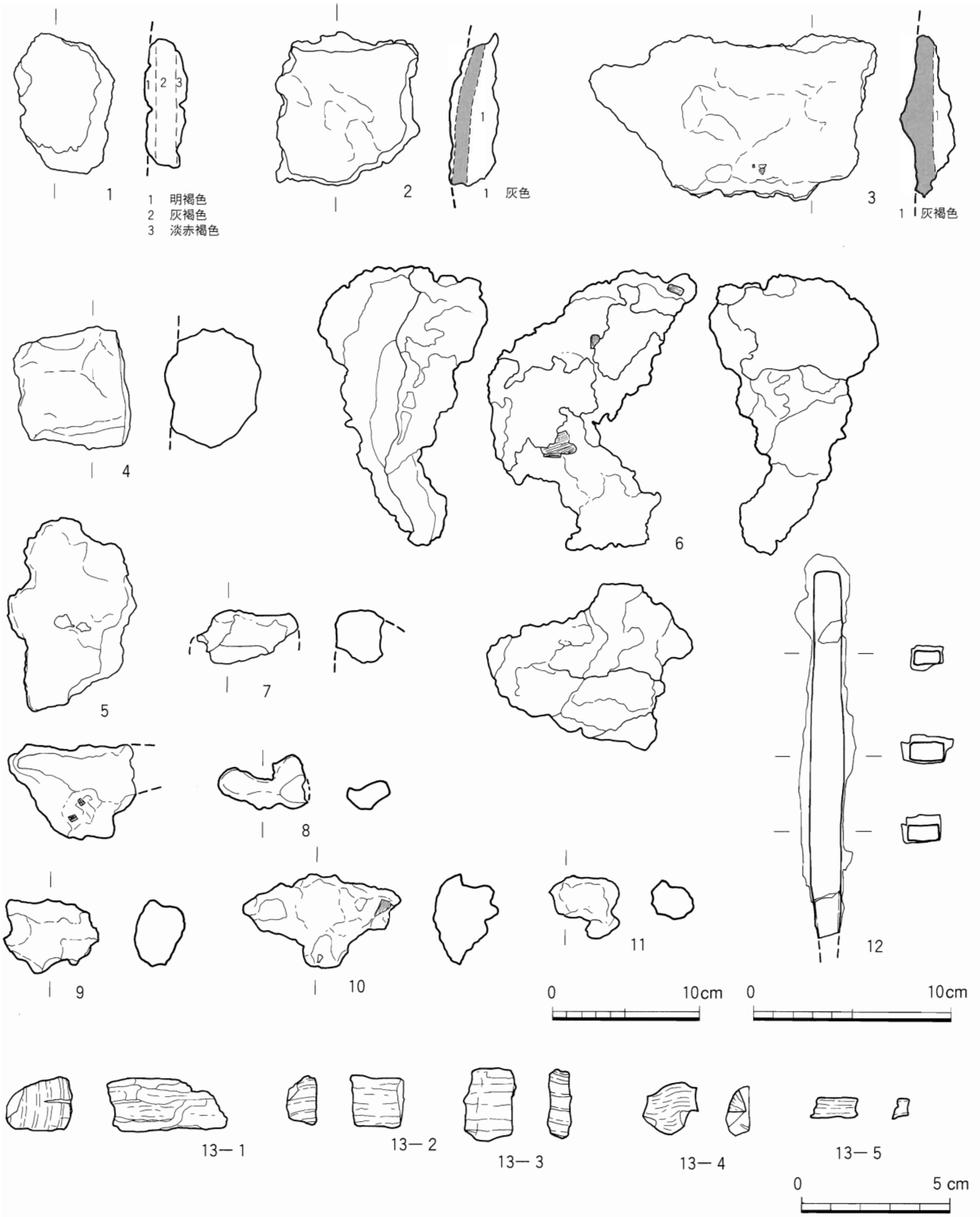
遺物の分布状況（第96・97図、第27表）

第27表で出土地区別に鍛冶関連遺物の重量を示し、第96・97図でグリッドごとの分布を表している。ただし、遺物の取り上げにあたって、遺構から出土したものの中にはグリッド名・遺構名の両方を併記して取り上げたものと、グリッド名のみで取り上げたもの、遺構名のみで取り上げたものがあり、取り上げ方に統一がとれなかった。また、取り上げ時にグリッド名の記録が漏れたり、取り上げ後にラベルが破損・腐敗したため出土位置が分からないものがかなり見られる。このように取り上げ方法に問題は残るが、現状で確認できる鉄滓の分布の傾向について以下にまとめておく。

鍛冶遺構検出前のグリッドでは、H－9 グリッドを中心とする部分で鉄滓が集中している。これについては大鍛冶の操業と関連するものではなく 2 次的にこの部分に集められた可能性も考えられる。ただし、Ⅲ期の大鍛冶場の北側建物外部で鍛造剥片の密度が高かった部分と近くこの周辺に捨てられた鉄滓がH－9 グリッド付近に動かされたのかもしれない。

大鍛冶遺構検出後のグリッドを見てみると、NS 0, EW 0・S 4, E 2 周辺で多くの遺物が出土している。これは主にⅡ期の SD 02 内で出土したものである。SD 02 内での鉄滓の出土は、SB 01 の西側になる部分で多く、南側ではあまり多くない。このことについては、Ⅱ期の操業中にできた鉄滓が建物北側に捨てられた可能性と、Ⅱ期の大鍛冶場からⅢ期の大鍛冶場に造り替えられるときに鉄滓で溝が埋められた可能性が考えられる。SB 02 の北側の S 4, W 8・S 4, W 6 周辺でも遺物が多く出土しており、これは 5・6・8 号鍛冶炉から捨てられた可能性が高いと思われる。また、S 8, EW 0 でも比較的まとまった量で鉄滓が見られるが、6・8 号鍛冶炉から排出されたものと思われる。

このほか鉄滓が転用された石列 2 周辺（N 2, EW 0・N 2, E 2・N 2, E 4）や 4 号鍛冶炉（NS 0, E 8・NS 0, E 10・S 2, E 10）でまとまった量の鉄滓が出土している。またグリッドでの取り上げは

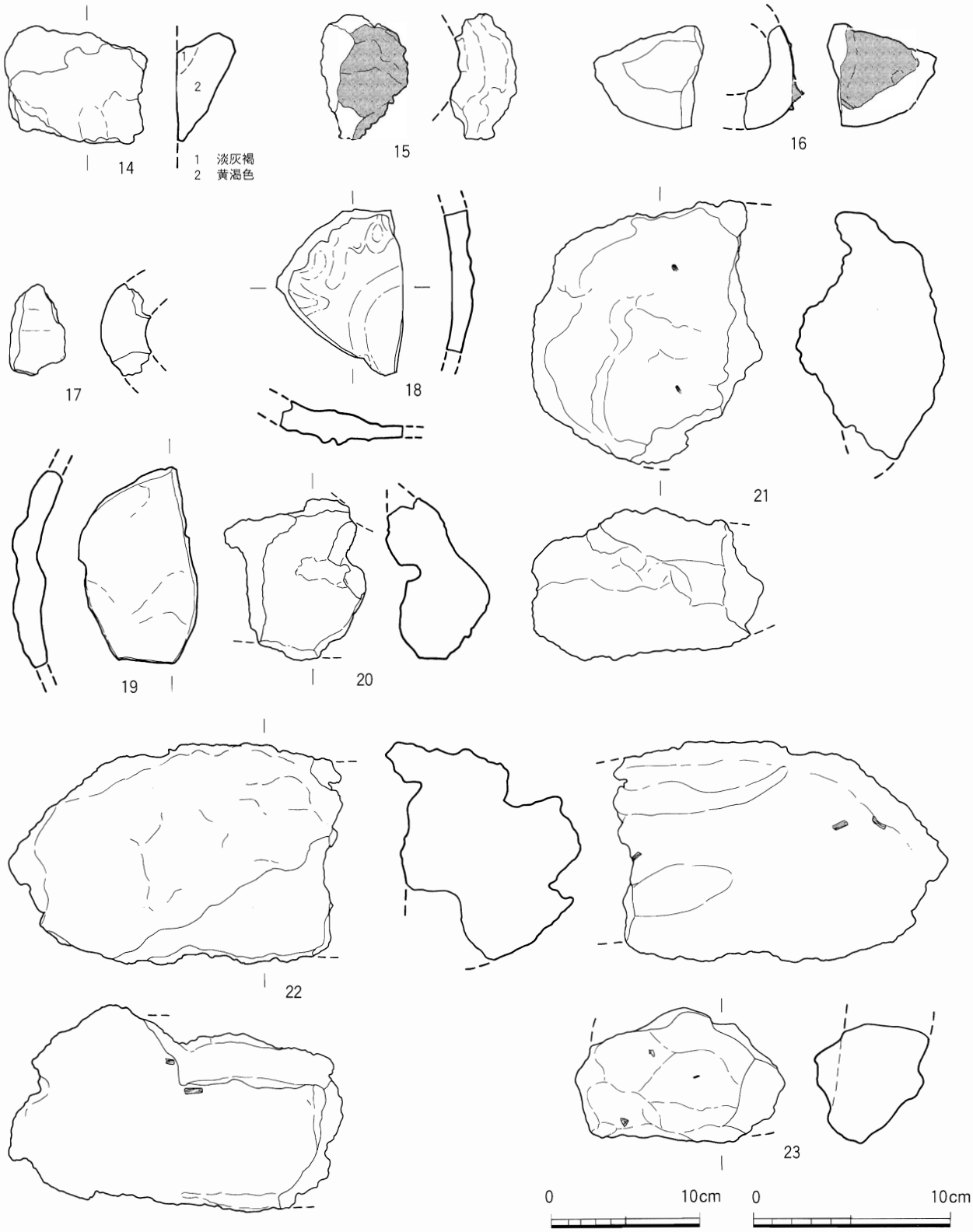


第108図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（1）
（1～3・5・6　S＝1/4、4・7～12　S＝1/3、13　S＝1/2）

されていないが、2号鍛冶炉の地下構造では転用された鉄滓が多く出土している。

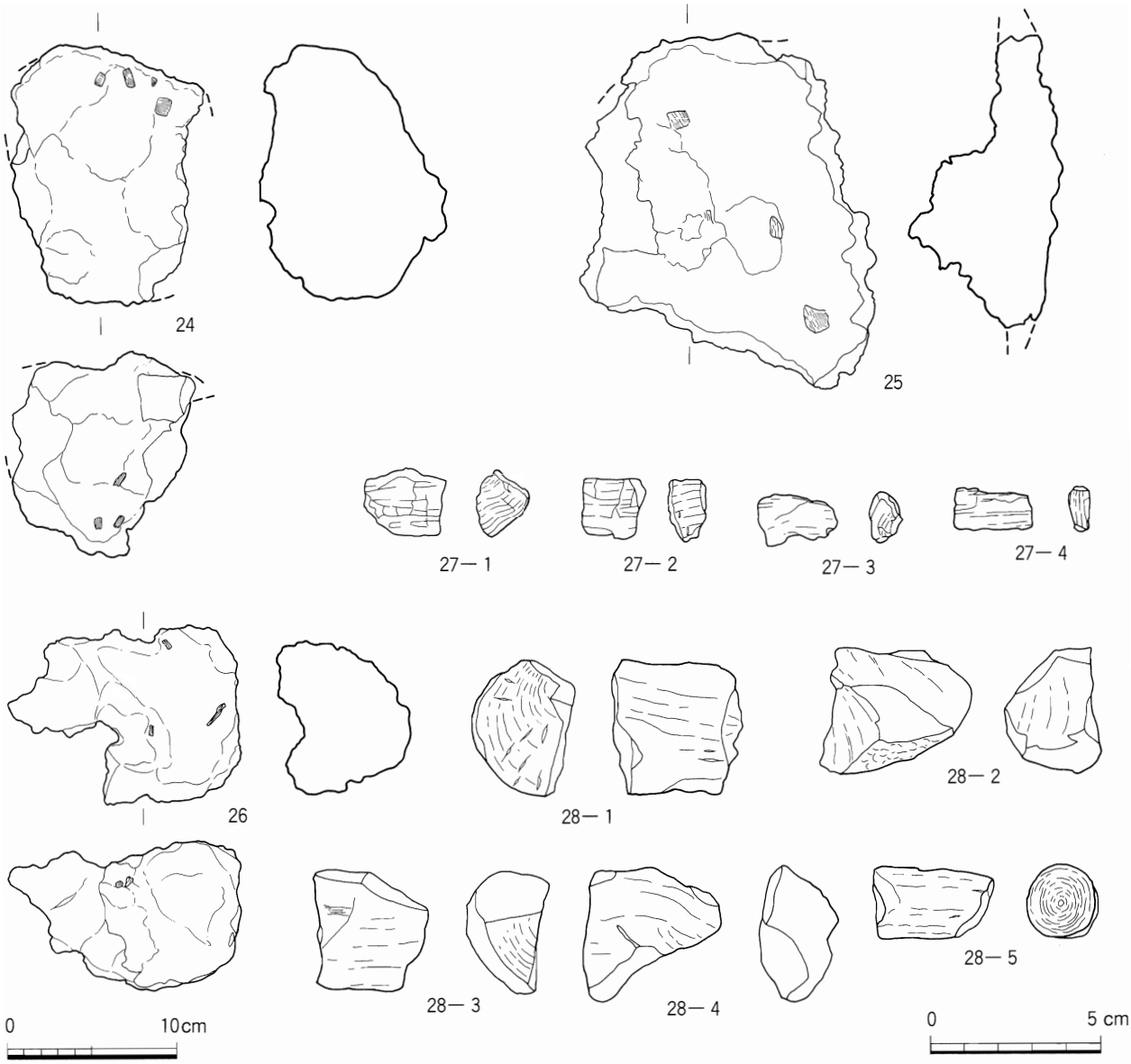
なお、南区では二次堆積による鉄滓堆積層が確認でき、1トレンチだけで461kgも出土した。このことから、大鍛冶場から東の川側へ向かって廃棄されたものも相当数あったと思われる。

獅子谷遺跡の鍛冶関連遺物は、羽口、鉄滓類（椀形鍛冶滓・鍛冶滓など）、鉄塊系遺物、木炭など



第109図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（２）
（14・20～23　S＝ 1/４、15～19　S＝ 1/３）

に分けられる。これらの遺物には、遺構や他の遺物と伴って出土するものもあるが、遺構・遺物の性格を考える上では一つのまとまりとしてとらえる必要がある。このようなことから、以下に各遺構の出土遺物についてⅠ～Ⅲ期の順に記述し、ついでグリッド出土遺物について述べたい。

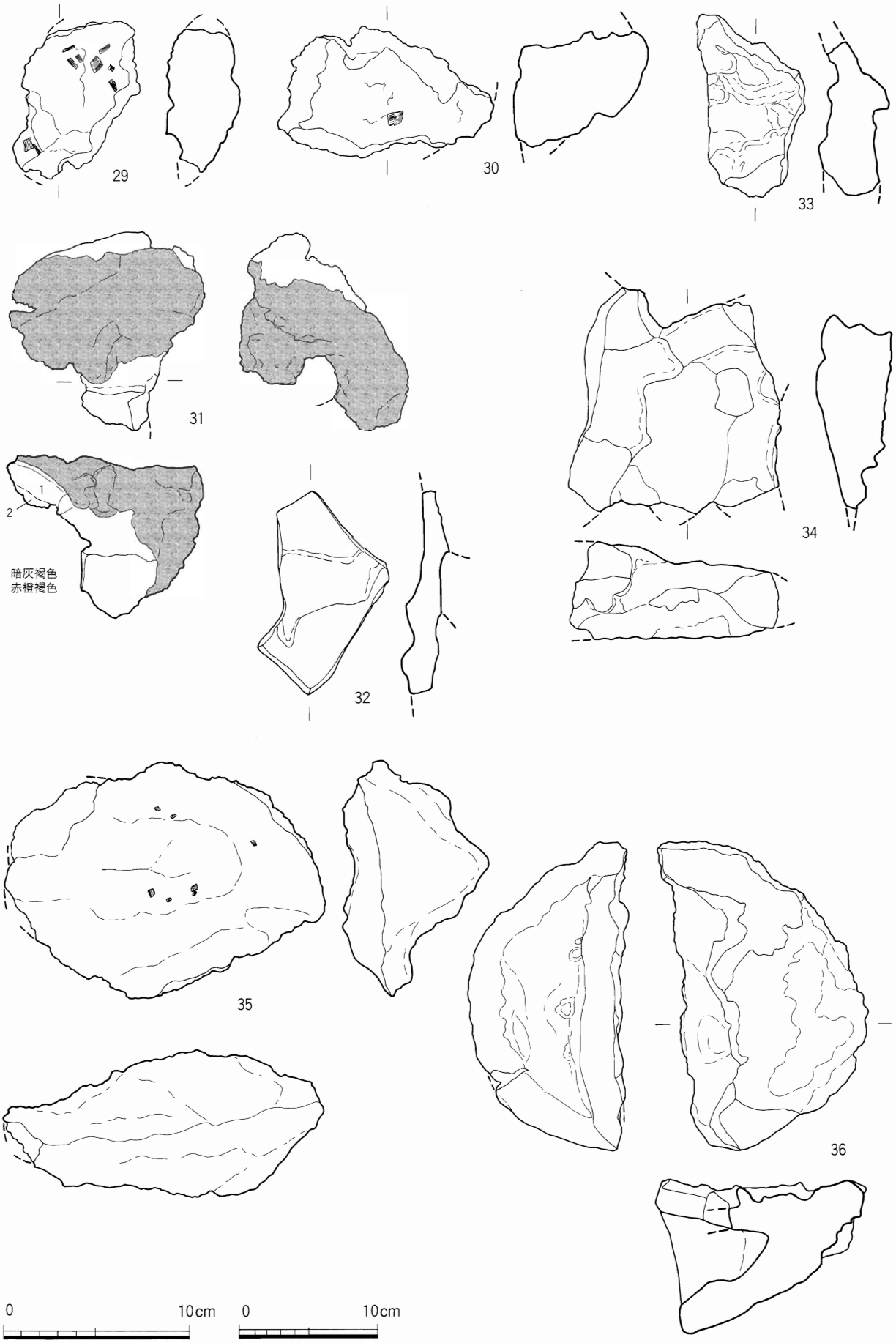


第110図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（３）
（24～26　S＝ 1/４、27・28　S＝ 1/２）

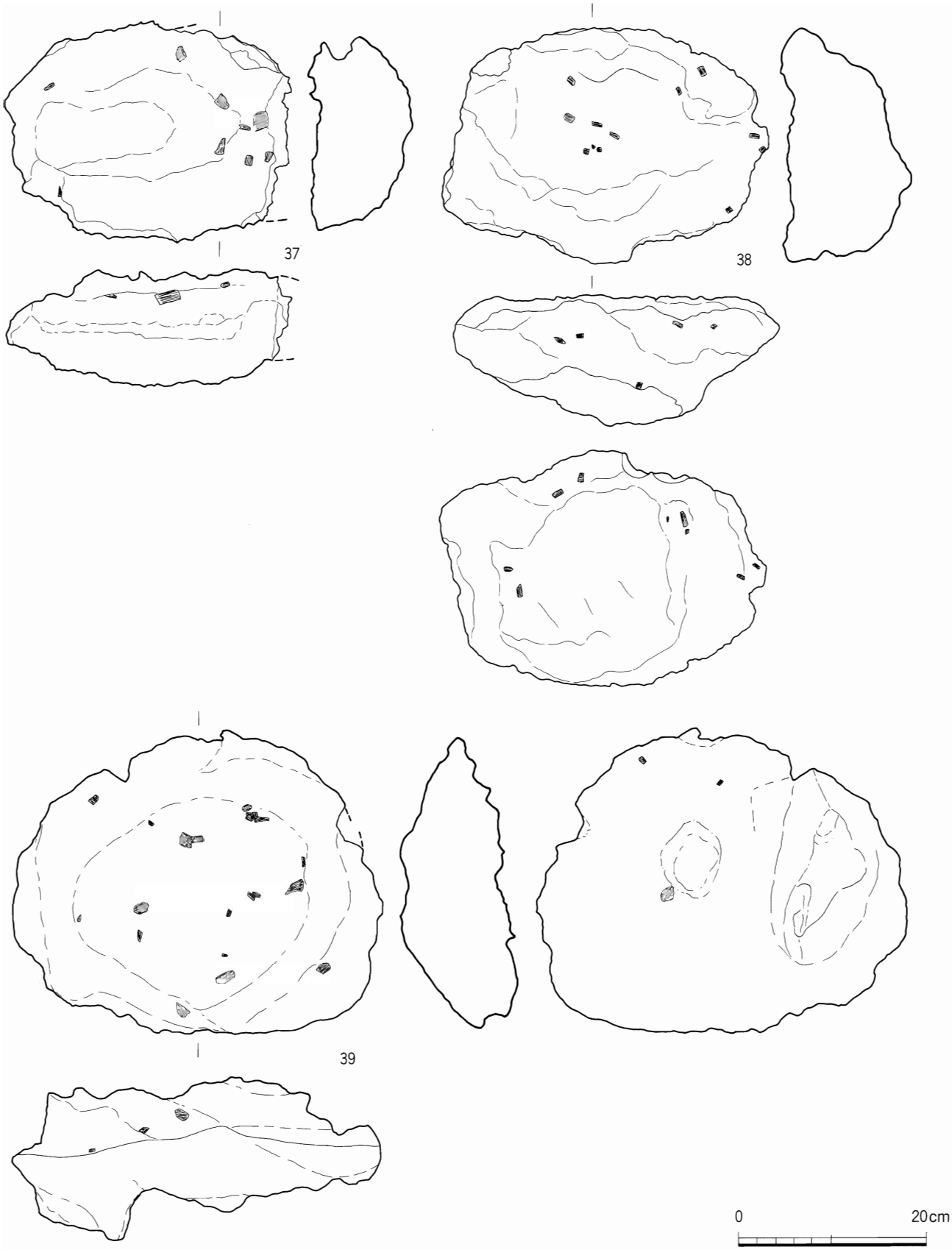
大鍛冶場Ⅰ期の遺物（第 98・108～114 図）

1 号鍛冶炉出土遺物（第 108 図）　１～３ は鍛冶炉の炉壁土で、火窪から削り取ったものである。１・３ は分析資料である（SIS－１・２）。１ は胎土が均質で、被熱は弱く火窪の外側の土になる。分析資料である。２・３ は火窪の内側の土で、熱を強く受け内面は滓化している。胎土中に木炭を含む。４・５ は覆土中から出土したものでこの鍛冶炉に直接関わるものか分からない。４ は緻密質な鍛冶滓、５ は椀形鍛冶滓である。６ は鍛冶炉の原位置に残っていた椀形鍛冶滓で、全面に木炭痕が顕著に見られる。分析に用いている（SIS－３）。７～11 は含鉄鉄滓である。12 は鍛冶炉の原位置に残っていた「箸摺止め釘」と思われる棒状の鉄製品である。断面形は長方形で、炉内の熱影響からベンガラ色に酸化している。分析資料（SIS－４）とした。13－１～13－５ は火窪内から採取された木炭で、１～３・５ は針葉樹、４ は広葉樹と思われる。燃料には ２ 種類以上の材が含まれていたことが分かる。

2 号鍛冶炉出土遺物（109～113 図）　14～27 は新段階の鍛冶炉に伴う遺物である。14 は鍛冶炉の炉

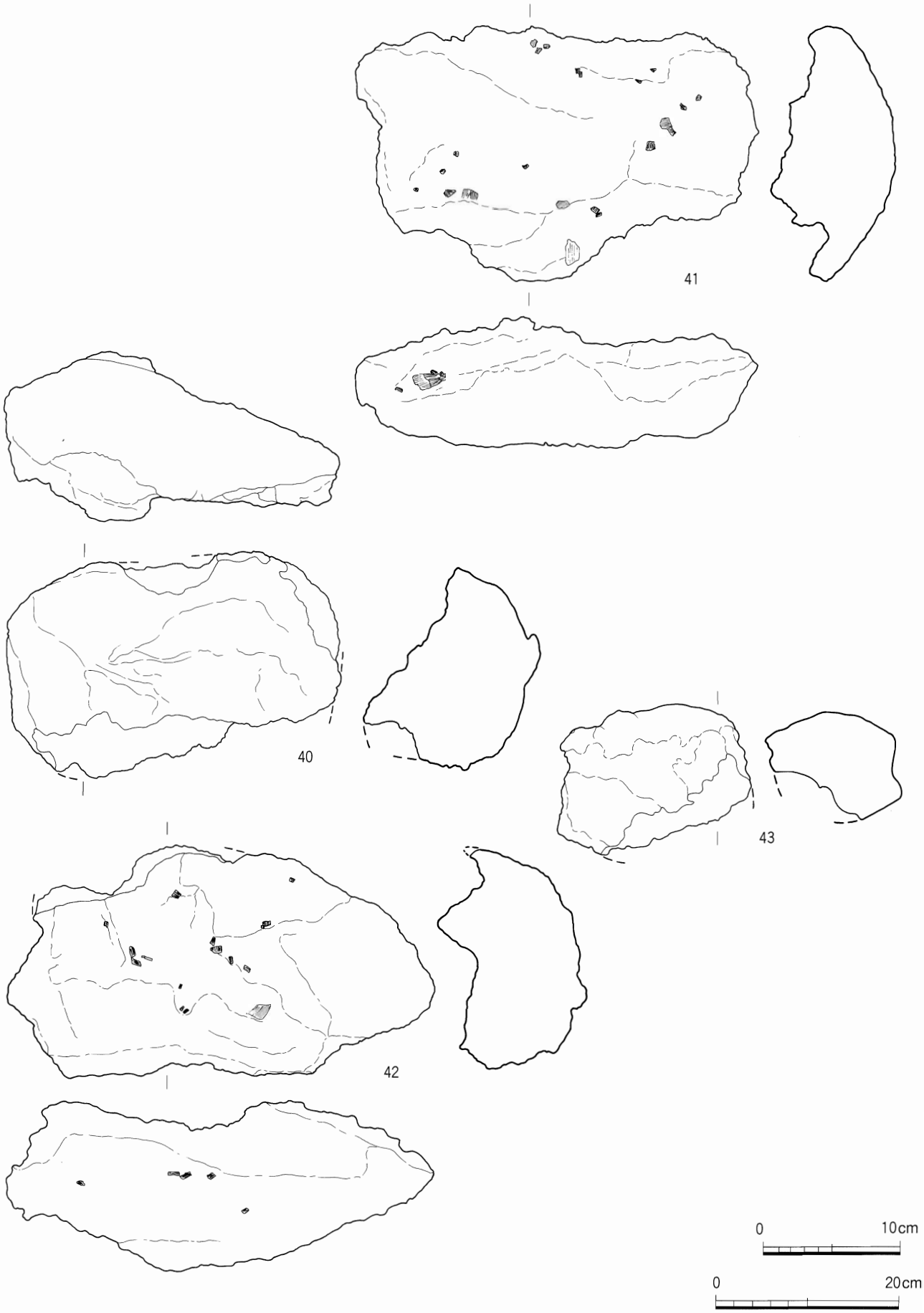


第111図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（４）
（29・30・35・36　S＝ 1/４、31～34　S＝ 1/３）

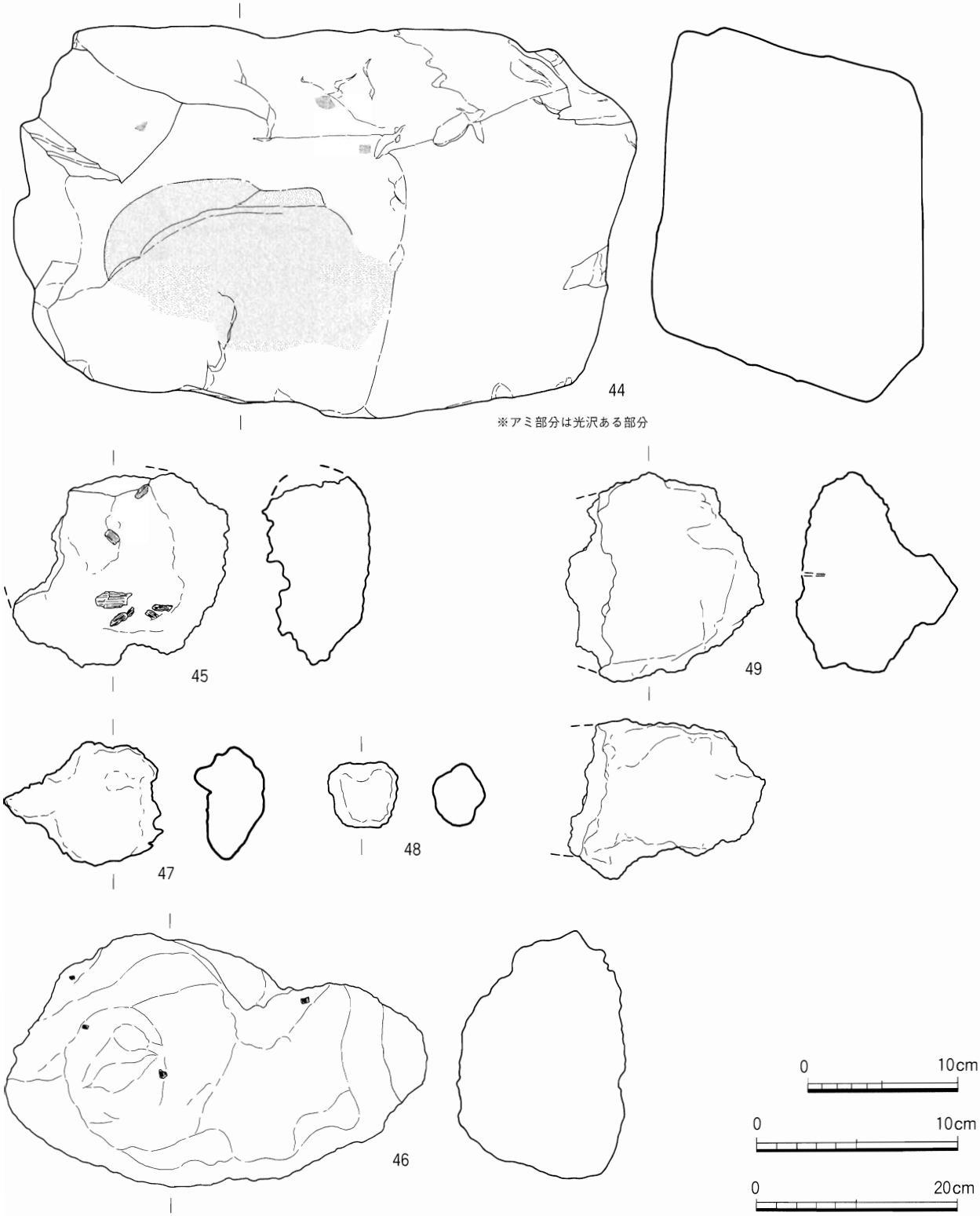


第112図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（５）（S＝ 1/６）

壁土で、火窪から削り取った。木炭をわずかに含む。15～17は羽口片で、火窪の東端付近の覆土中から出土した。15・16は外面の先端側が滓化している。15・17は胎土中にわずかながら炭粉を含んでいる。18・19はやや流動状の鍛冶滓で、炉床に接していたためか下面は緩やかな弧状になってい

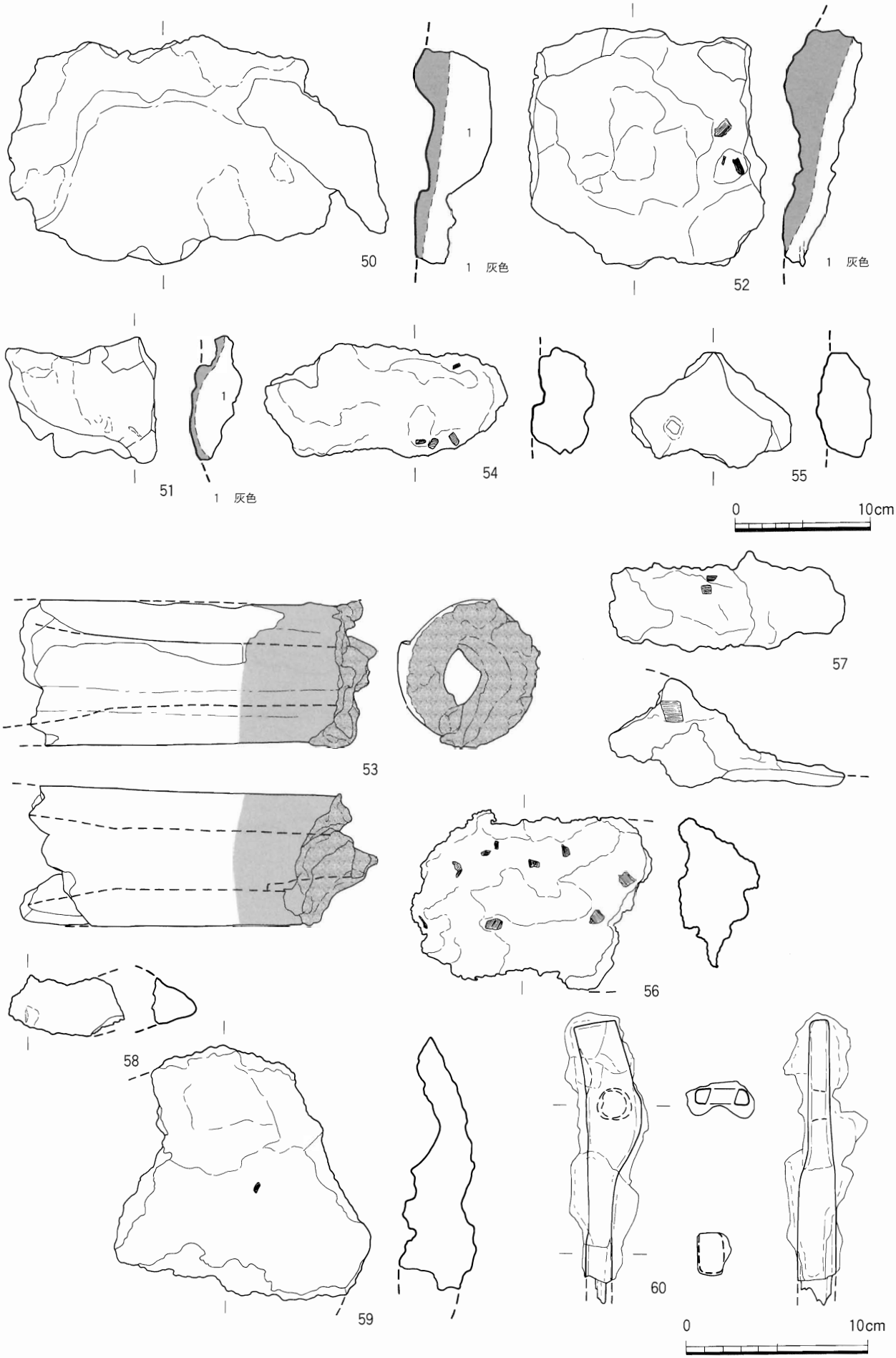


第113図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（６）
（40～42　S＝ 1/６、43　S＝ 1/４）

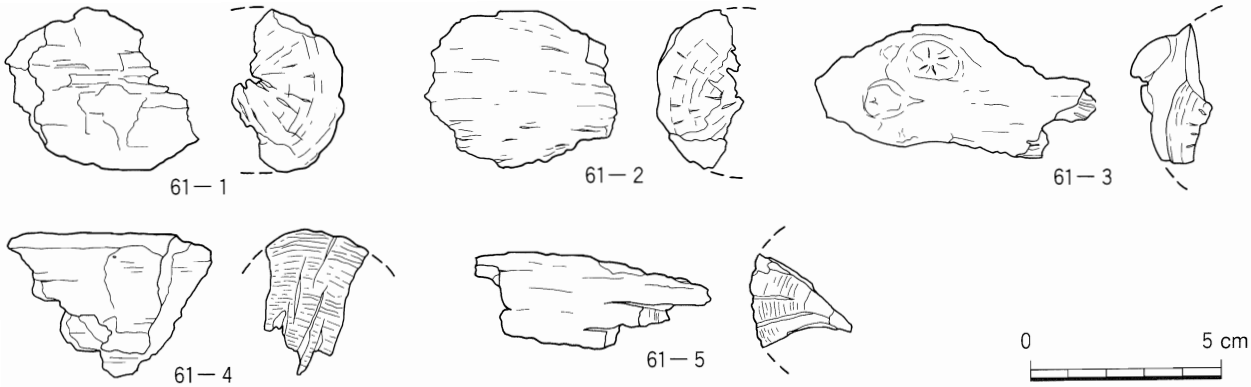


第114図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（７）
（44・46　S＝ 1/６、45・49　S＝ 1/４、47・48　S＝ 1/３）

る。18は分析資料である（SIS－５）。20～26は覆土中から出土した椀形鍛冶滓で、直接この鍛冶炉に伴うのか分からない。26はメタル度が特Ｌ（☆）であり、分析に用いた（SIS－６）。27－１～４は火窪から採取された木炭で、１・２・４は広葉樹の環孔材で、３は広葉樹の散孔材で２種類以上の材が用いられたことが分かる。



第115図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（８）
（50～52・54・55　S＝ 1/４、53・56～60　S＝ 1/３）



第116図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（９）（S＝ 1/２）

28は中段階の火窪内から採取された木炭で、３・５は類似材である。２の表面には樹皮が残る。

29・30は鍛冶炉の掘り方内から出土した椀形鍛冶滓であり、他の鍛冶炉か２号鍛冶炉古段階で生成されたと思われる。２点とも鉄部は銹化しており、大半は欠損している。

31～43は鍛冶炉の地下構造に転用された遺物であり、これらについても他の鍛冶炉か２号鍛冶炉古段階で生成されたと考えられる。31は羽口からその前面の炉壁片で滓化が進んでいる。32～34は流動状の鍛冶滓と考えられるが、外見上は製錬滓のようにもみえる。34は分析資料（SIS－７）。35・36は長さ20cm前後の中型の椀形鍛冶滓で、35は長楕円形で上面に断面方形の工具痕が残る。36は半円形をしており、縦断面形は「フ」の字形になる。37～42は長さ30cmを超える大形の椀形鍛冶滓で、42は長さが46.5cmもある。これらの表面や破面には木炭痕が目立つ。38の下面左には工具痕流入滓部のような突出が見られる。43はやや小形の椀形鍛冶滓で、メタル度はＬ（●）である。

鉄床１出土遺物（第114図）　44は長さ62.1cm、幅39.6cm、厚さ27.1cmの鉄床石である。上面は平坦で、中央には長さ22cm前後の小判形の窪みがあり、この周りは光沢を持ち、被熱のためか赤みを帯びていた。この部分は鉄床をおいた痕跡か、もしくはこの上で鍛打された鉄の痕跡と思われる。

ピット内出土遺物（第114図）　45は中～小形の椀形鍛冶滓で、木炭痕が多く見られる。

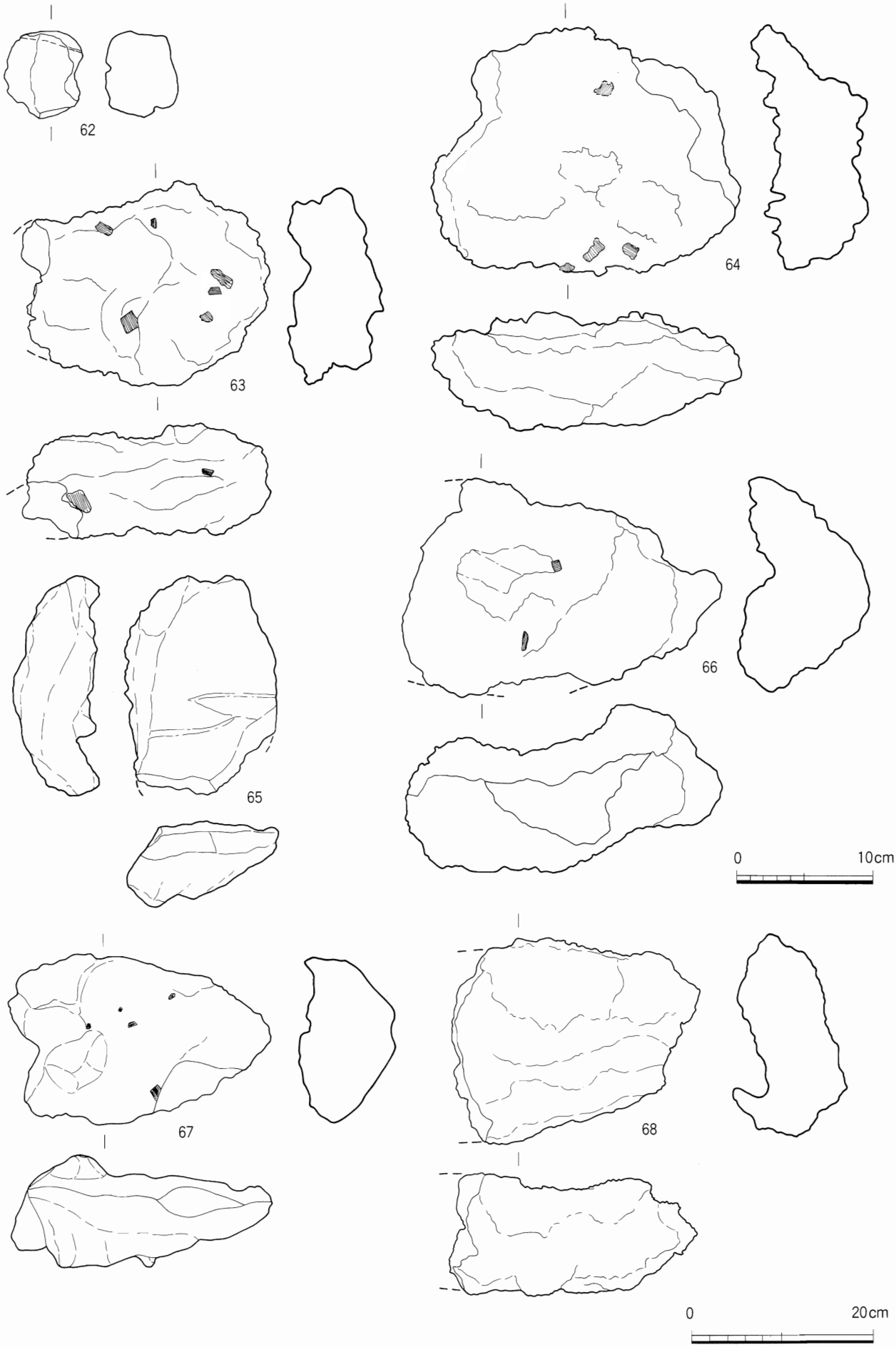
SK 01 出土遺物（第114図）　46は木炭や滓分、粒状滓・鍛造剥片を含む土砂からなると思われる。

SD 01 出土遺物（第114図）　47・48はメタル度Ｌ（●）の含鉄鉄滓である。

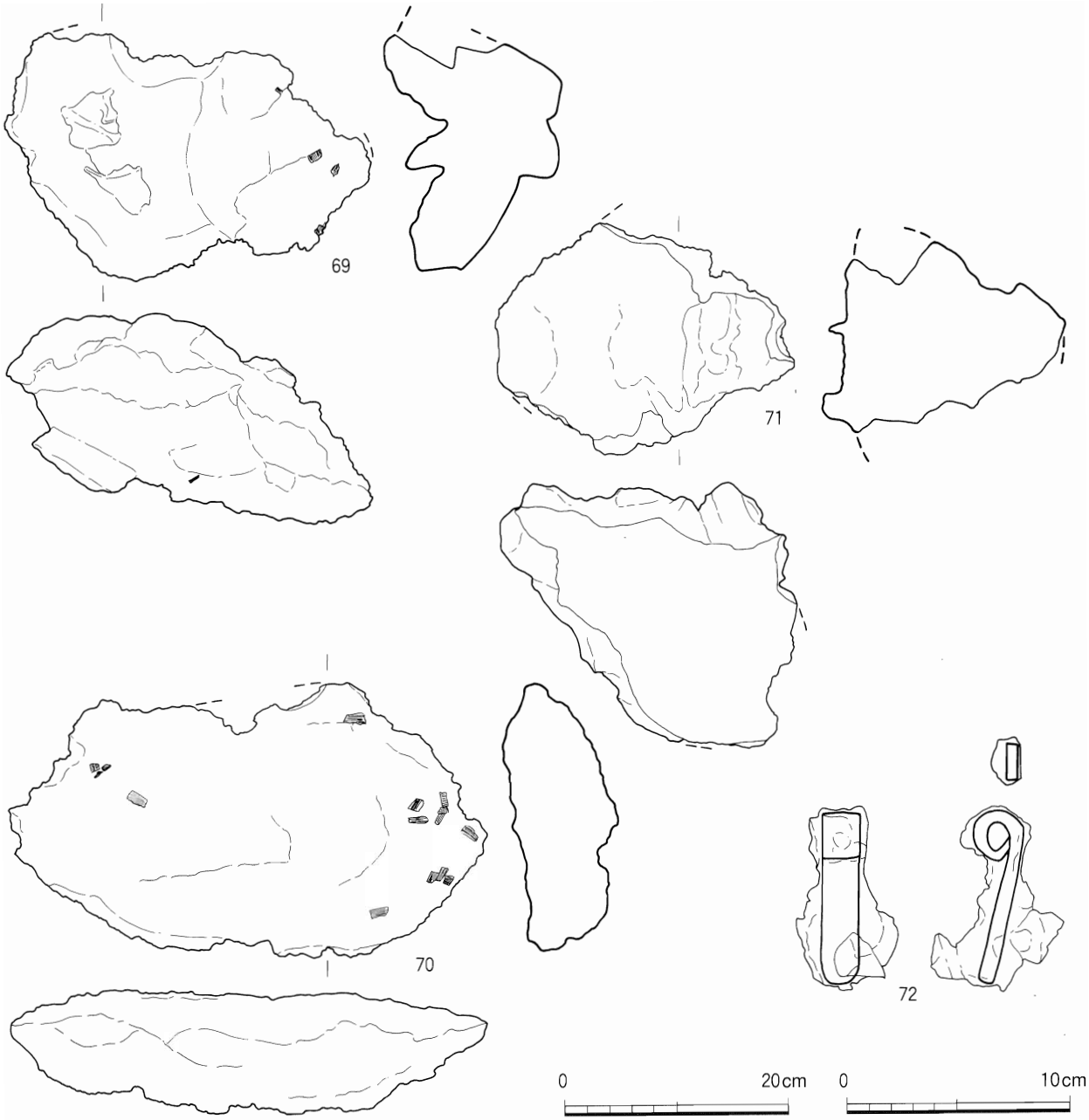
作業面（第114図）　49はⅠ期の作業面上から出土した含鉄椀形鍛冶滓で、左半分は欠損している。

大鍛冶場Ⅱ期の遺物（第99・115～123図）

３号鍛冶炉出土遺物（第115・116図）　50は鍛冶炉の西側長辺の羽口に近い部分の炉壁で、滓化していた部分を火窪からはがし取ったものである。胎土には粉炭が混和されていたが、焼失して木炭痕となったものが観察できる。分析資料（SIS－８）である。51・52は火窪の覆土中から出土した炉壁片だが、いずれも内面が滓化しており、火窪の内壁がはがれ落ちたものと思われる。50と同様、胎土に１cm以下の木炭痕が観察できる。52は下部で滓化層が二重になっており、一度操業した後、炉壁の補修がされたと思われる。53は鍛冶炉の原位置に残存していた羽口片で、先端部は滓化が進んでいる。特に下半部はえぐれるように溶損しており、滓が羽口の内側に逆流している。羽口の孔径は先端部で3.2cm、基部側で４cm程度である。基部側は内面がハの字状に広がるかたちでえぐられている。53も分析に用いる（SIS－９）。54・55は鍛冶炉の炉床で形成された炉床再結合滓である。肉眼観察によれば木炭や滓分、粒状滓などを含む土砂が再結合したように思われる。このような再結

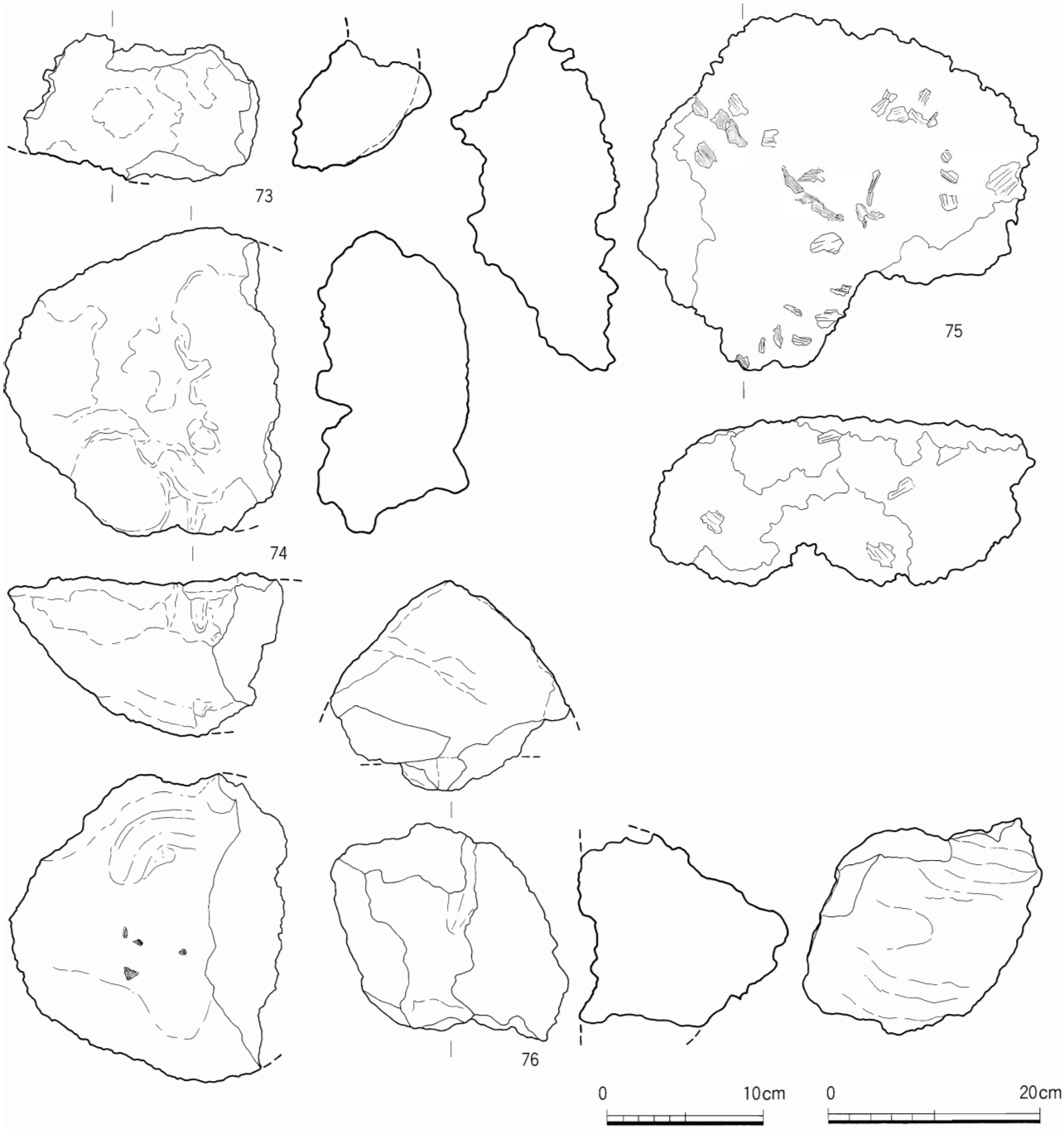


第117図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（10）
（62～66　S＝ 1/4 、67・68　S＝ 1/6 ）



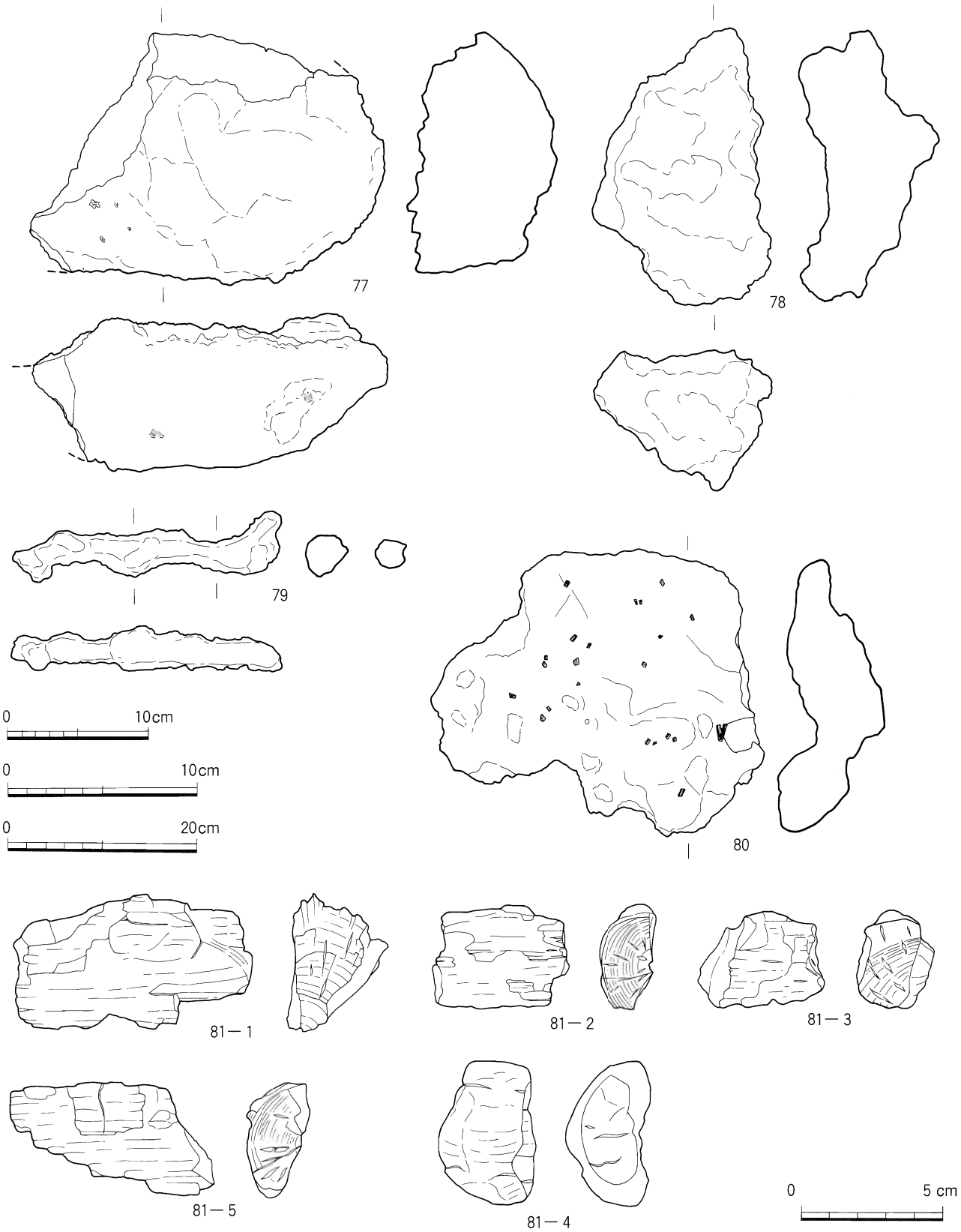
第118図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（11）
（69～71　S＝ 1/6、72　S＝ 1/3）

合滓が何を母体とし、どのように形成されるのか興味深いところである。55はメタル度M（◎）である。55を分析に用いた（SIS－10）。56は長さ 2㎝前後の木炭が顕著に見られる鍛冶滓で、小形の椀形鍛冶滓の欠損品と思われる。57～59は含鉄鍛冶滓で、57はメタル度H（◎）、58・59はメタル度M（◎）である。60は鍛冶炉原位置に残っていた「箸摺止め釘」と思われる鉄製品である。足部から頭部の中間で屈曲しており、ここで厚みがねじれたように変わっている。屈曲部のやや上には径1.4㎝前後の円孔が穿たれており、この部分に「箸摺」もしくは「箸摺止め釘」と「箸摺」とをつなぐ金具が取り付けられたと考えられる。1号鍛冶炉の「箸摺止め釘」と思われる鉄製品（108－12）とは形態が大きく異なっている。60は分析資料（SIS－11）である。61－1～5は3号鍛冶炉の火窪下半部から出土した木炭である。いずれも広葉樹の環孔材と思われる。1～3は同一材もしくは類似材、4・5は類似材である。これらは分析資料（SIS－12－1～5）である。



第119図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（12）
（73～75　S＝ 1/4、76　S＝ 1/6）

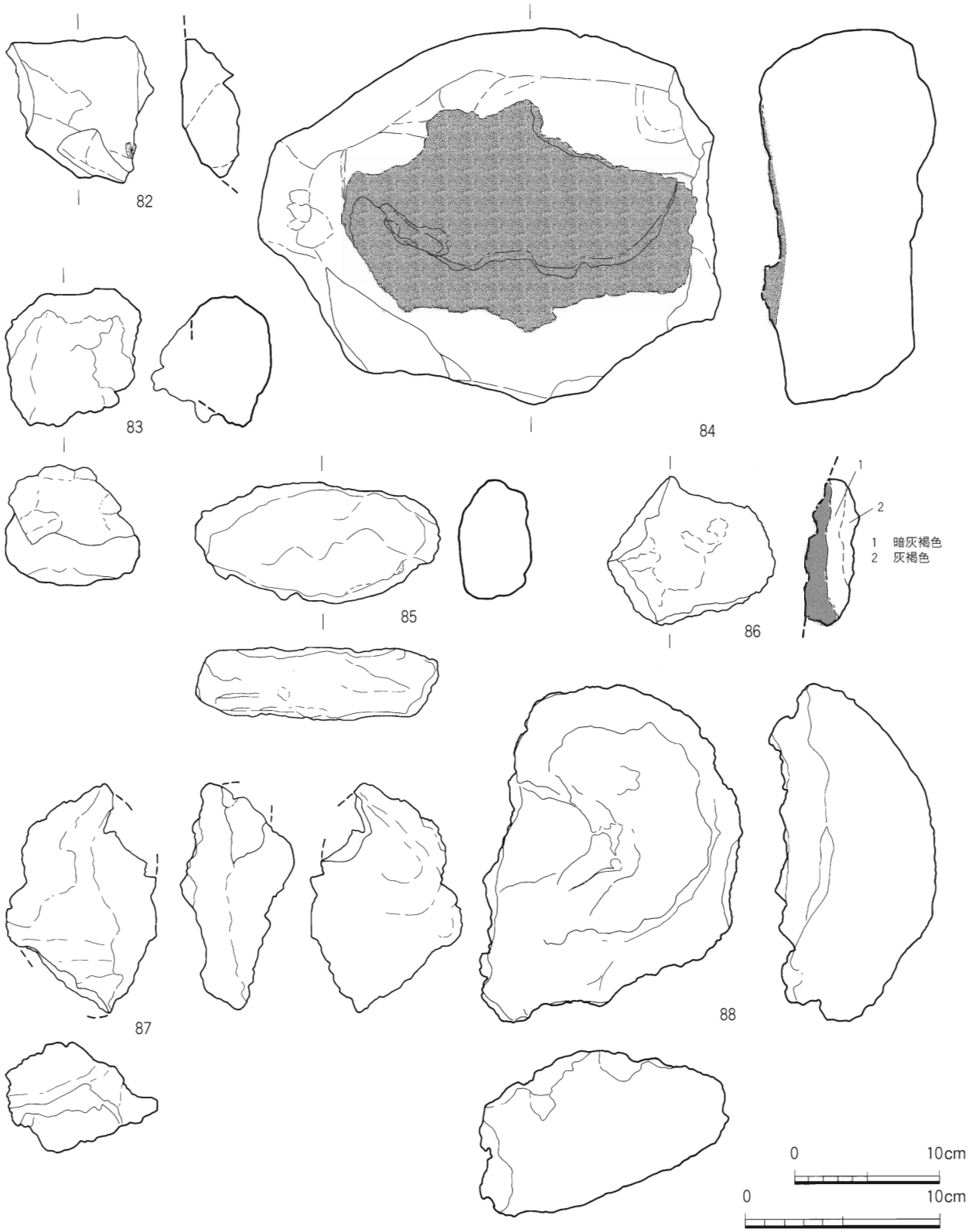
4 号鍛冶炉出土遺物（第 117～120 図）　62 は鍛冶炉地下構造の壁面の構築する際に鉄滓の間に詰められた粘土塊である。被熱により若干酸化している。胎土はきめ細かく、約 5 ㎜の木炭を少し含む。63～72 は鍛冶炉の地下構造に壁面に転用された遺物で、4 号鍛冶炉で作られたのではなく、それ以前に生成されたものである。63～66 は長さもしくは幅が 20㎝前後の中型の椀形鍛冶滓である。63・64・66 が縦長であるのに対し、65 は幅広で左側面が途切れた形をしている。67～71 は大形の椀形鍛冶滓で、長さが 30㎝近いものから 40㎝を超えるものまで見られる。いずれも木炭痕が顕著である。67 は下面に丸棒状の工具痕流入滓部が見られる。71 は大部分が欠損しているが、上下に厚みの滓である。72 は厚さ 7 ㎜の板を「9」の字状に曲げて作られた用途不明の鉄製品で、下端部は丸くなっている。



第120図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（13）

（77　S＝ 1/6、78・80　S＝ 1/4、79　S＝ 1/3、81　S＝ 1/2）

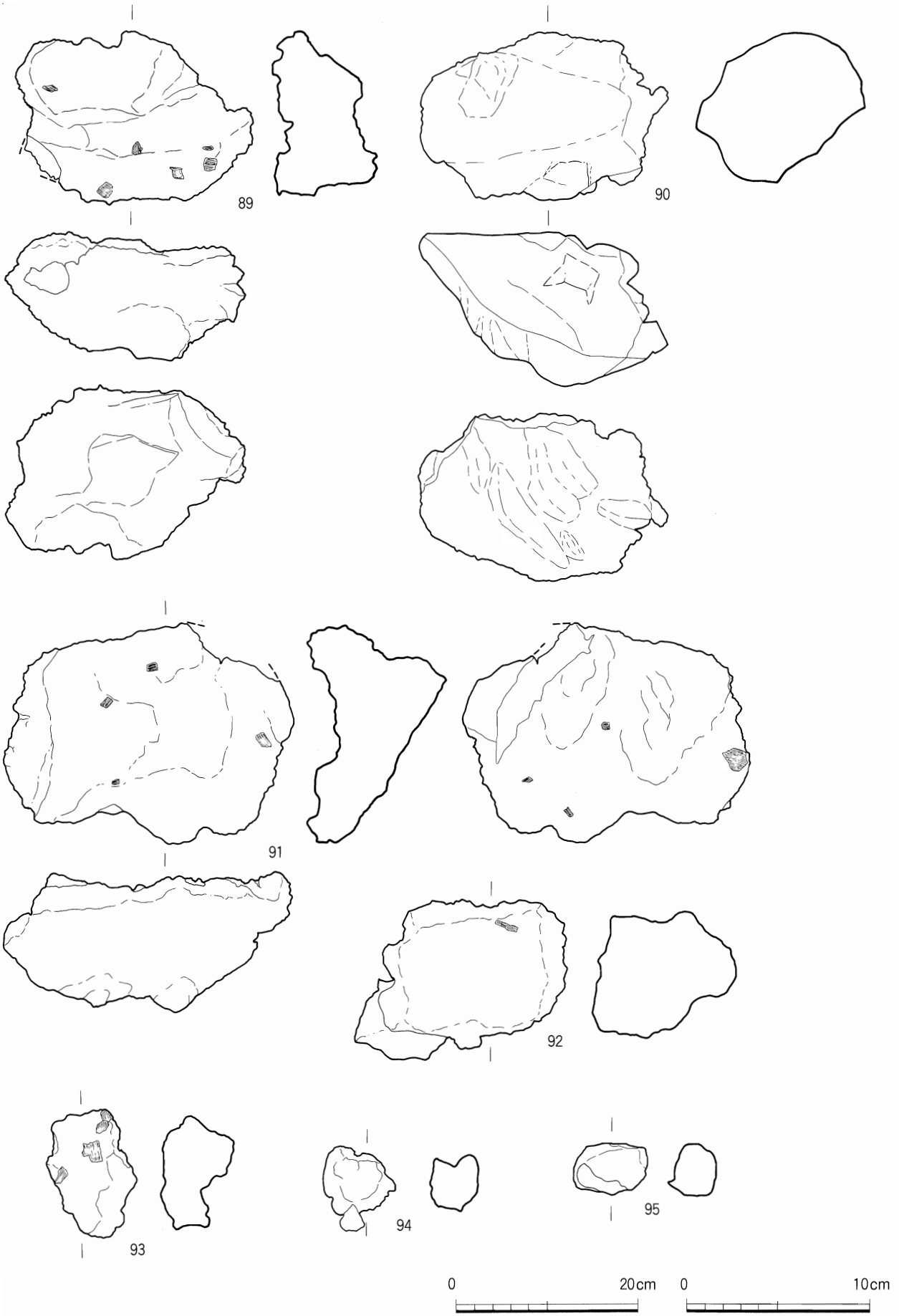
73～80は 4 号鍛冶炉が壊された後に埋め戻された土の中から出土しており、4 号鍛冶炉と直接関連する遺物かどうかは分からない。73～75は二次的に熱を受けた跡が見られ、4 号鍛冶炉の地下構造に転用された可能性がある。74の下面には丸棒状の工具痕流入滓部が見られる。76・77は大形の椀形鍛冶滓である。76の下面には工具痕流入滓部が見られる。78は半円形の椀形鍛冶滓で、右側



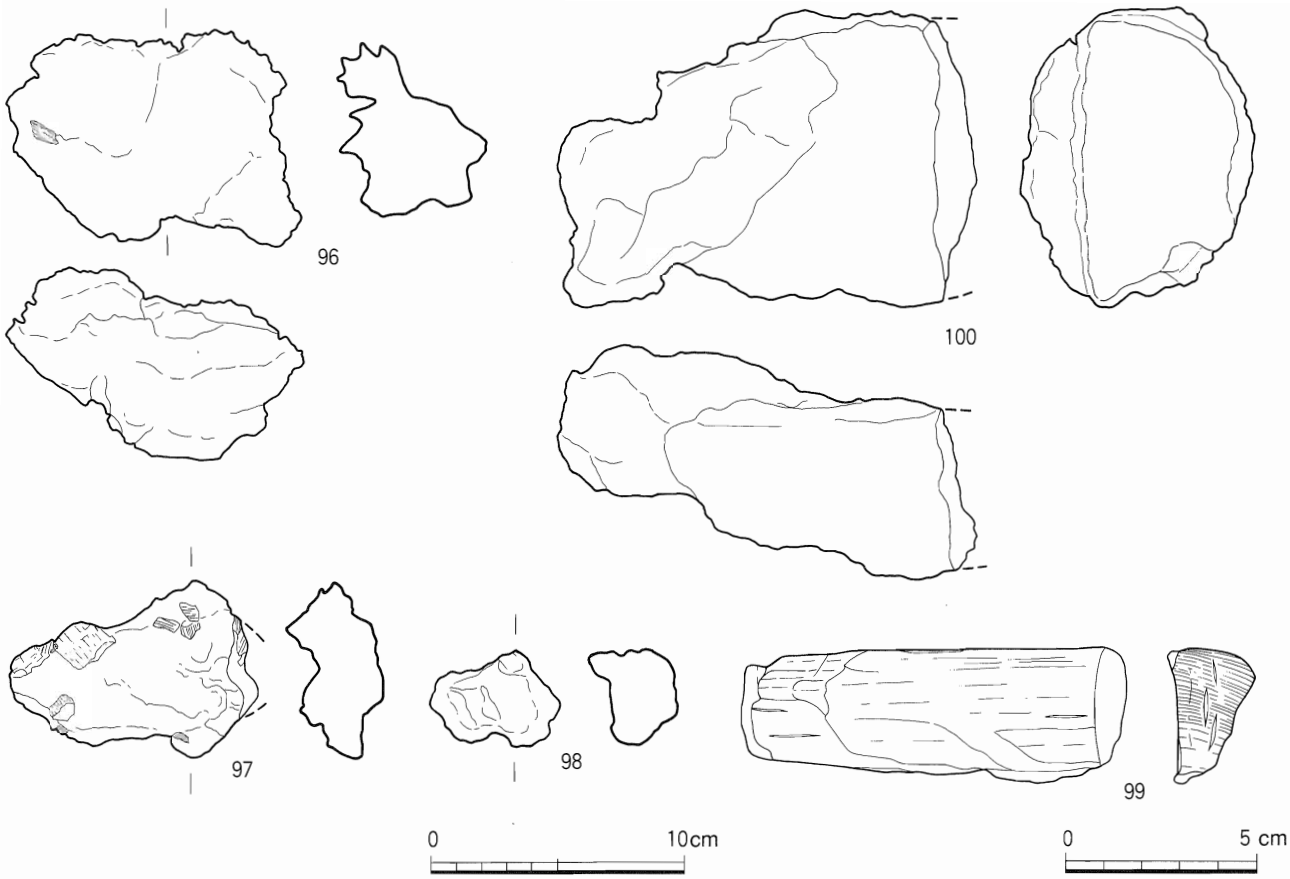
第121図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（14）
（83　S＝ 1/3、82・84～88　S＝ 1/4）

面は直線的に途切れた形になっている。上面や中核部に鉄部があり、メタル度は特L（☆）である。分析資料（SIS－13）である。79は鉄塊系遺物で、細長い流動状の銑鉄塊と思われる。80は再結合滓で、木炭を多く含み、鉄滓・粒状滓も少し入る。炉床再結合滓と似ている。

81－1～5は4号鍛冶炉の地下構造内から採取された木炭である。1～3・5は類似材でいずれも広葉樹の環孔材、4は広葉樹の散孔材である。



第122図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（15）
（89～91　S＝ 1/6、92～95　S＝ 1/3）

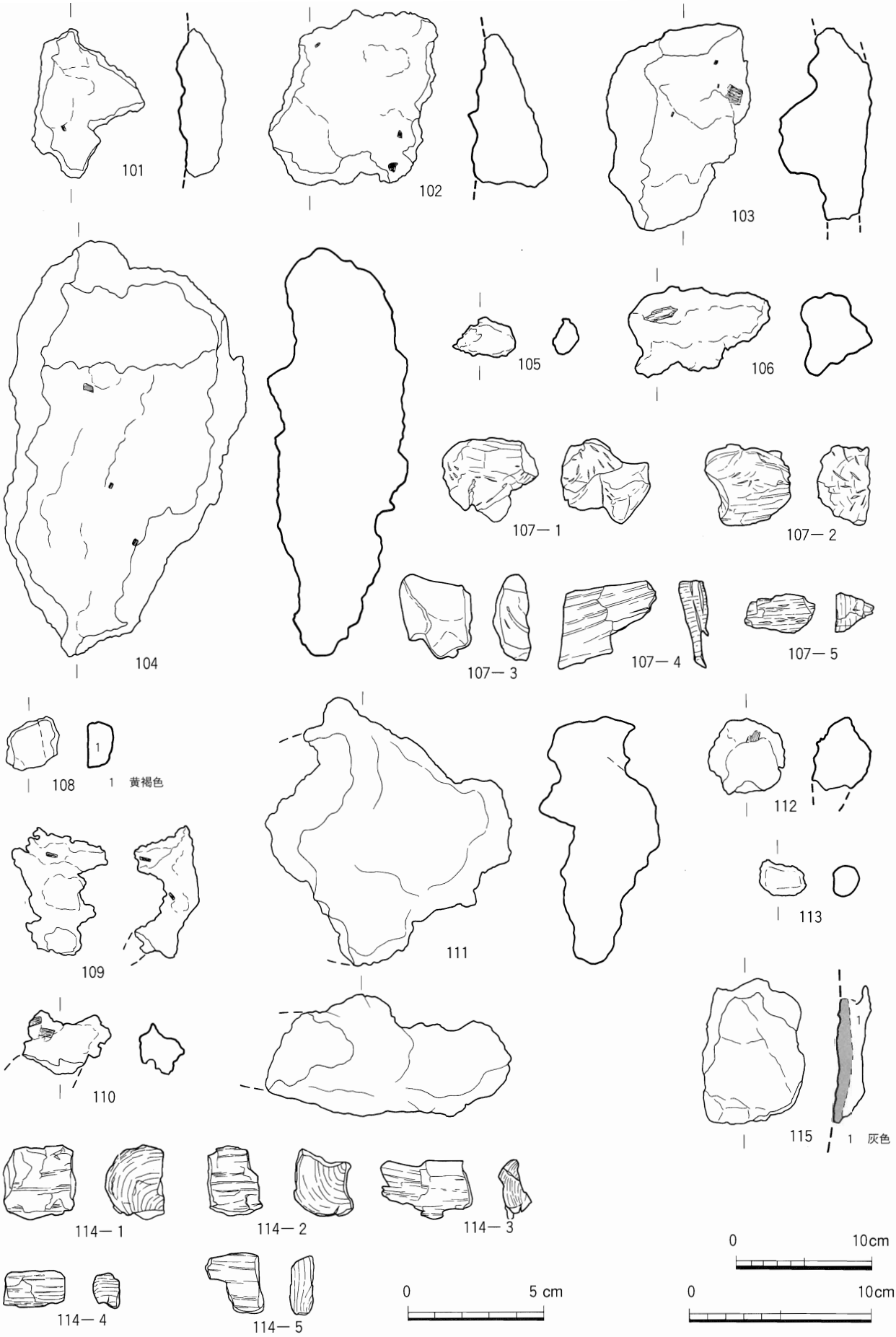


第123図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（16）
（96～99・100　S＝ 1/3、99　S＝ 1/2）

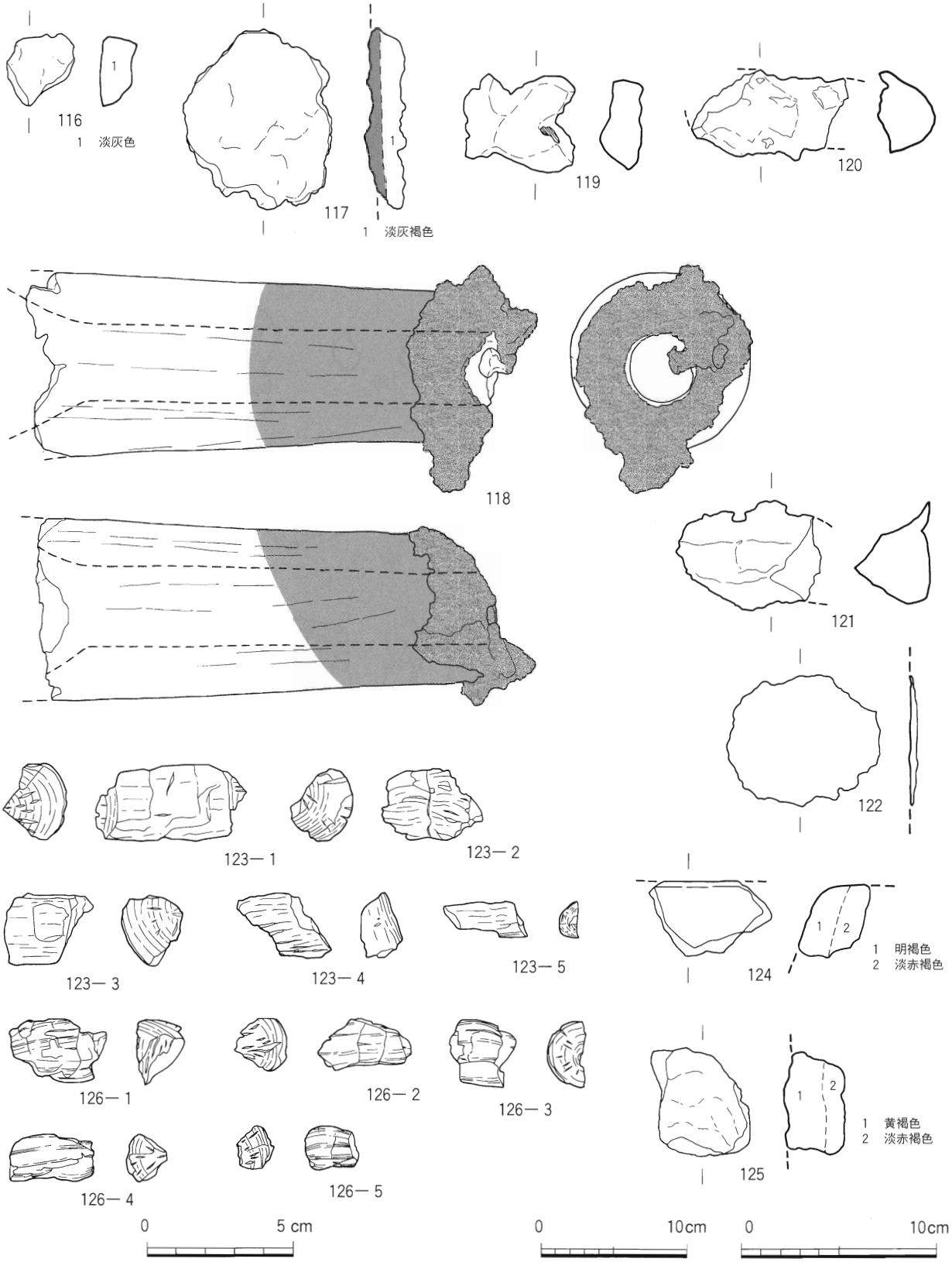
鉄床 2 関連遺物（第121図）　82は鉄床石の周囲に形成された再結合滓で、粒状滓や鍛造剥片、滓分、木炭などが再結合したものと思われる。分析資料である（SIS－14）。83はメタル度L（●）の含鉄鉄滓である。上面に酸化土砂が厚く固着し、下面に鉄部が集中している。鉄部は比較的滑らかで、丸みを持つことからあるいは銑鉄系の鉄塊になるのかもしれない。84（図版36）は鉄床 2 の下層で検出された鉄床石である。長さ31.5cm、幅25.9cm、厚さ13.4cmで、上面には長さ20cm、現状での高低差1.2cmの小判形の窪みを持つ再結合滓が付着している。窪みの長辺には凸形に小さく張り出した部分が 2 ヶ所見られる。この窪みについては、石の上に置かれた鉄床の痕跡か、この上で鍛打された鉄の痕跡を示していると思われる。85は鉄床 2 で出土したものではなく、大鍛冶場Ⅲ期の作業面のイ，0.5グリッドで採取されたものである。長さ16.7cm、幅8.4cm、厚さ5.1cmの長楕円形の鉄塊で、84の小判形の窪みと大きさや形が似ている。84の上で鍛打された鉄の可能性も想定されることからここに図示した。分析資料（SIS－15）である。

SD 02 出土遺物（第121～123図）　86は鍛冶炉の火窪内側の炉壁片で、内面は滓化している。胎土には粉炭や砂礫を含む。87・88は中形の椀形鍛冶滓である。いずれも幅広で、平面形は半円に近い。88（図版37）は左側面が途切れた形で、上面左側が半円形にえぐれたようになっており、左側から送風されたと思われる。89～91は長さ25cmを超える大形の椀形鍛冶滓で、下面にはいずれも丸棒状の工具付着滓が見られる。90は右側面が斜めに途切れたような面を持つ。92～95はメタル度L（◐）の含鉄鉄滓、96～98はメタル度特L（☆）の含鉄鉄滓である。97・98は酸化土砂の付着が著しく、鉄塊系遺物になる可能性もある。99は木炭で、広葉樹の環孔材である。

SK 03 出土遺物（第123図）　100（図版41）は下面が椀形をした鉄塊である。左端部に再結合滓が



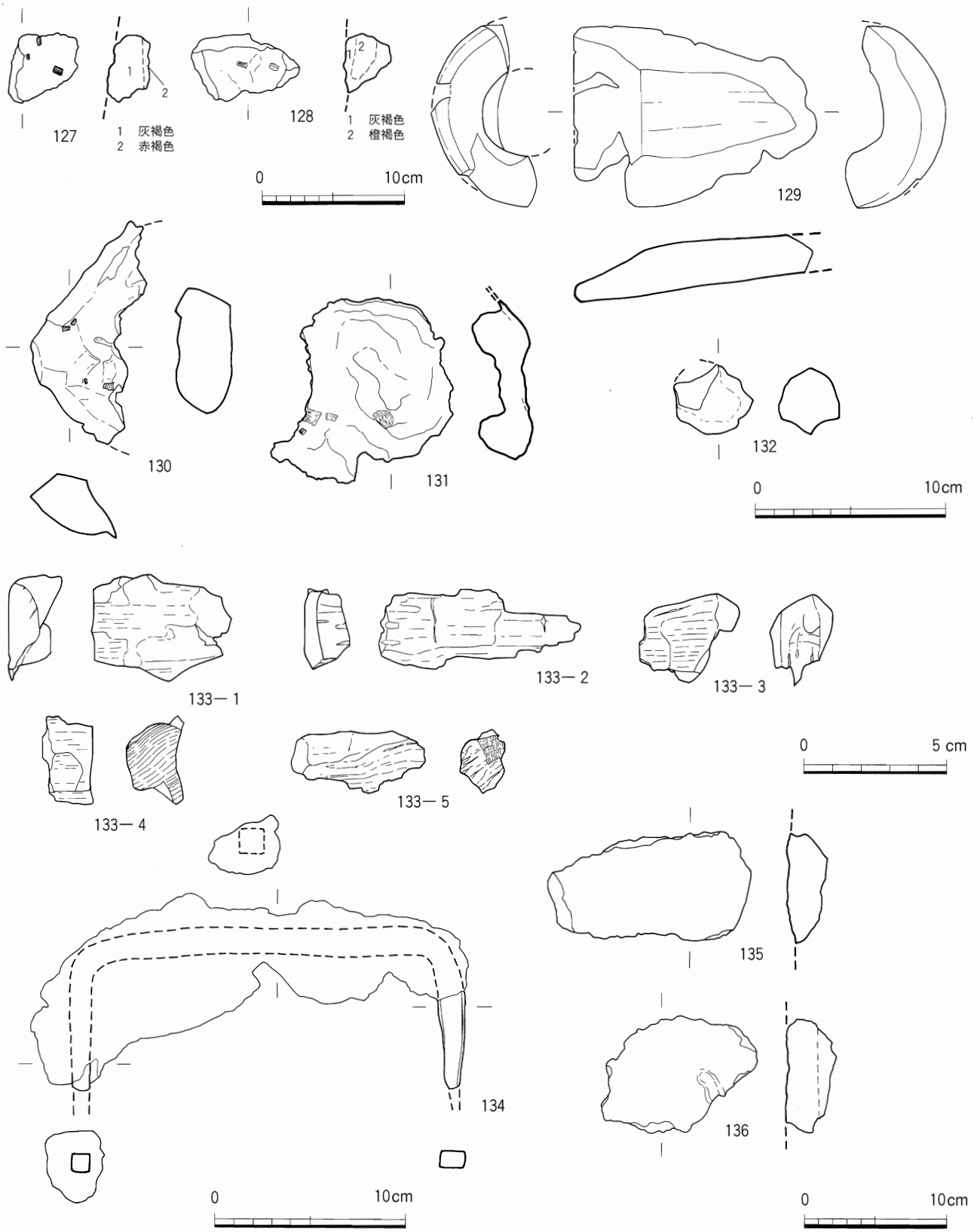
第124図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（17）
（101～104・105　S＝ 1/ 4 、105・106・108～113　S＝ 1/ 3　107・114　S＝ 1/ 2 ）



第125図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（18）

（116・117・124・125　S＝ 1/4、118～122　S＝ 1/3、126　S＝ 1/2）

付着しているが、ほかでは滑らかな面を持っており、銑鉄塊になりそうである。右側面は直線的な面になっているが、荒割りされたためと思われる。分析資料（SIS－16）である。

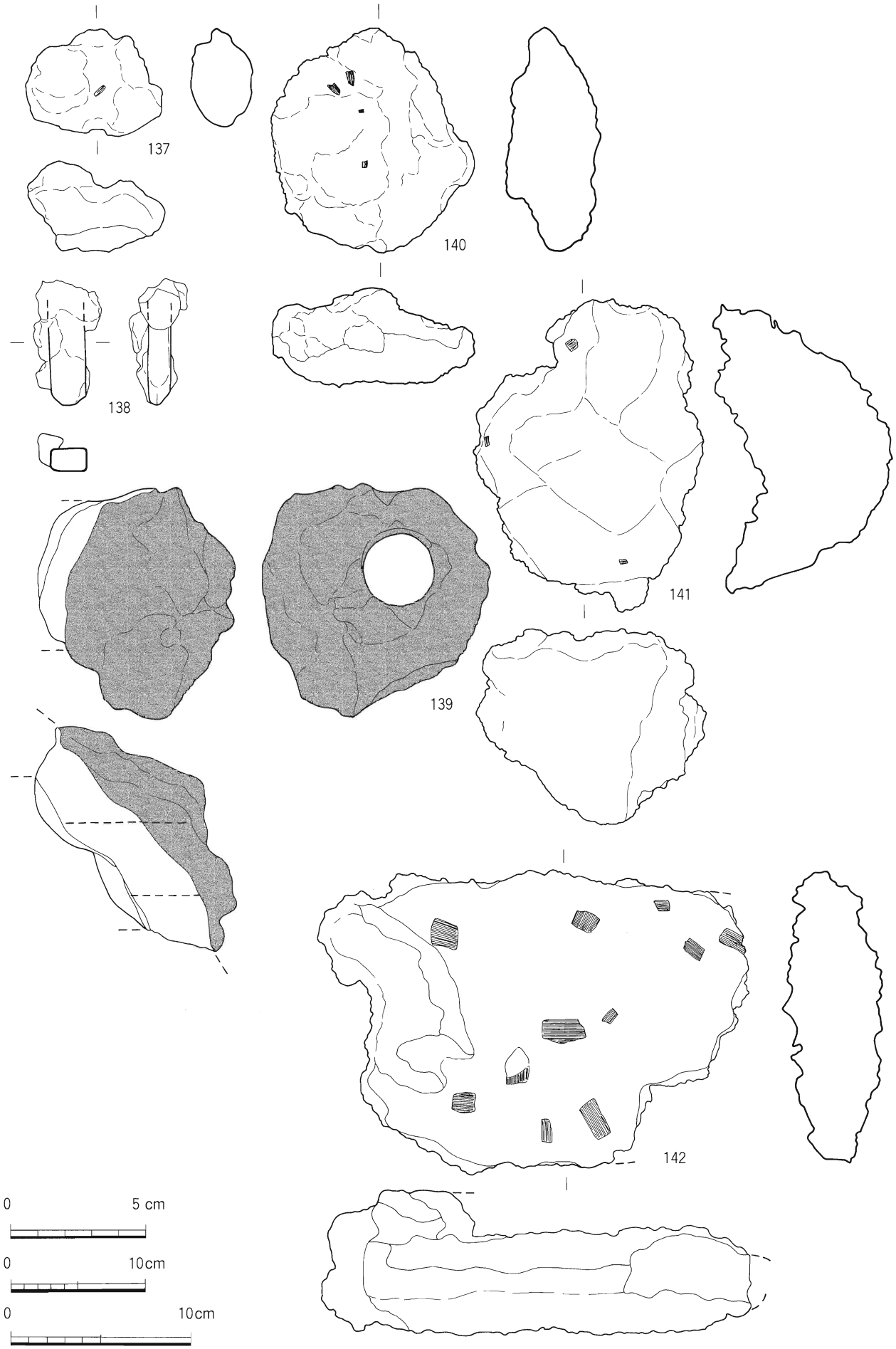


第126図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（19）

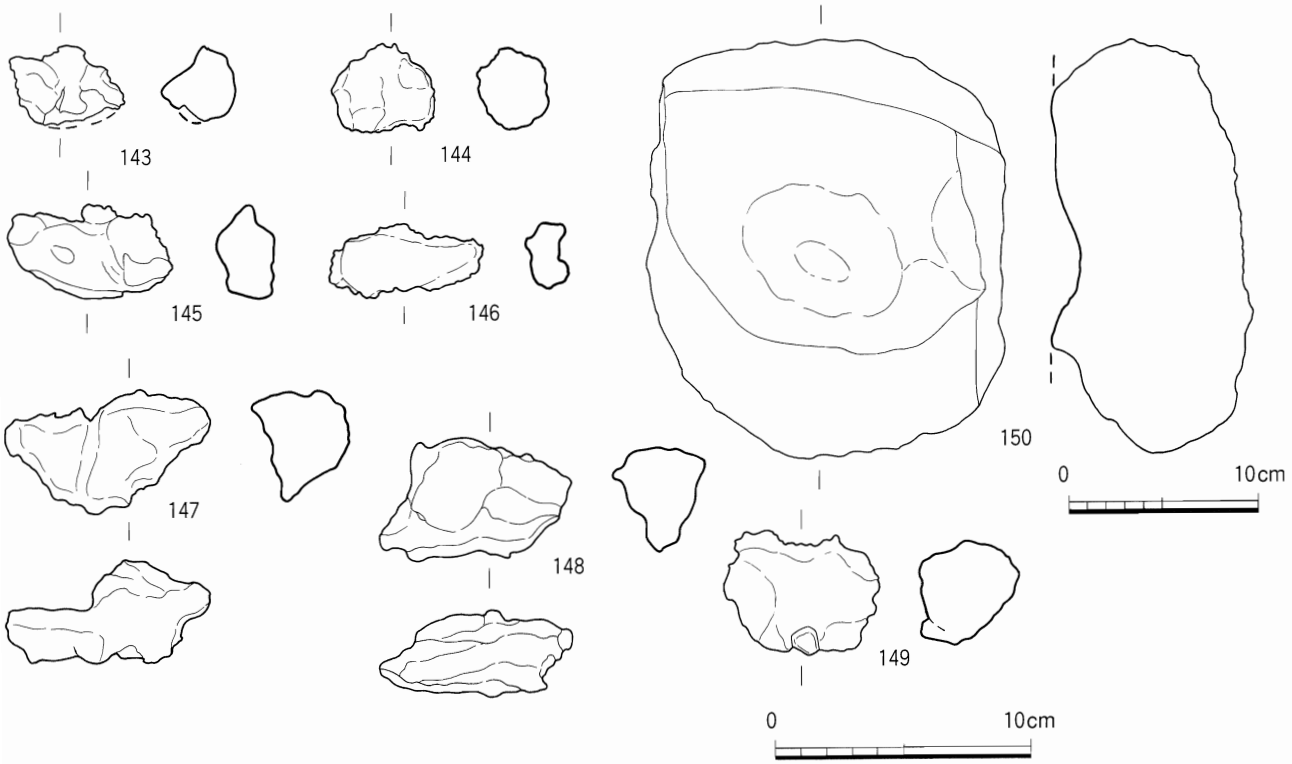
（127・128・135・136　S＝ 1/4、129～132・134　S＝ 1/3、133　S＝ 1/2）

大鍛冶場Ⅲ期の遺物（第100～103・124～135図）

5 号鍛冶炉出土遺物（第124図）　101～104は炉床再結合滓である。いずれも土っぽく木炭を多く含み、中には粒状滓を含むものもある。101・102はメタル度がH（○）で、小さな鉄部も存在する。105・106は含鉄鉄滓で、105はメタル度M（◎）、106はメタル度L（●）である。107－1～5は火



第127図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（20）
（137・139　S＝ 1/3、138　S＝ 1/2、140～142　S＝ 1/4）



第128図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（21）
（143～149　S＝ 1/3、150　S＝ 1/4）

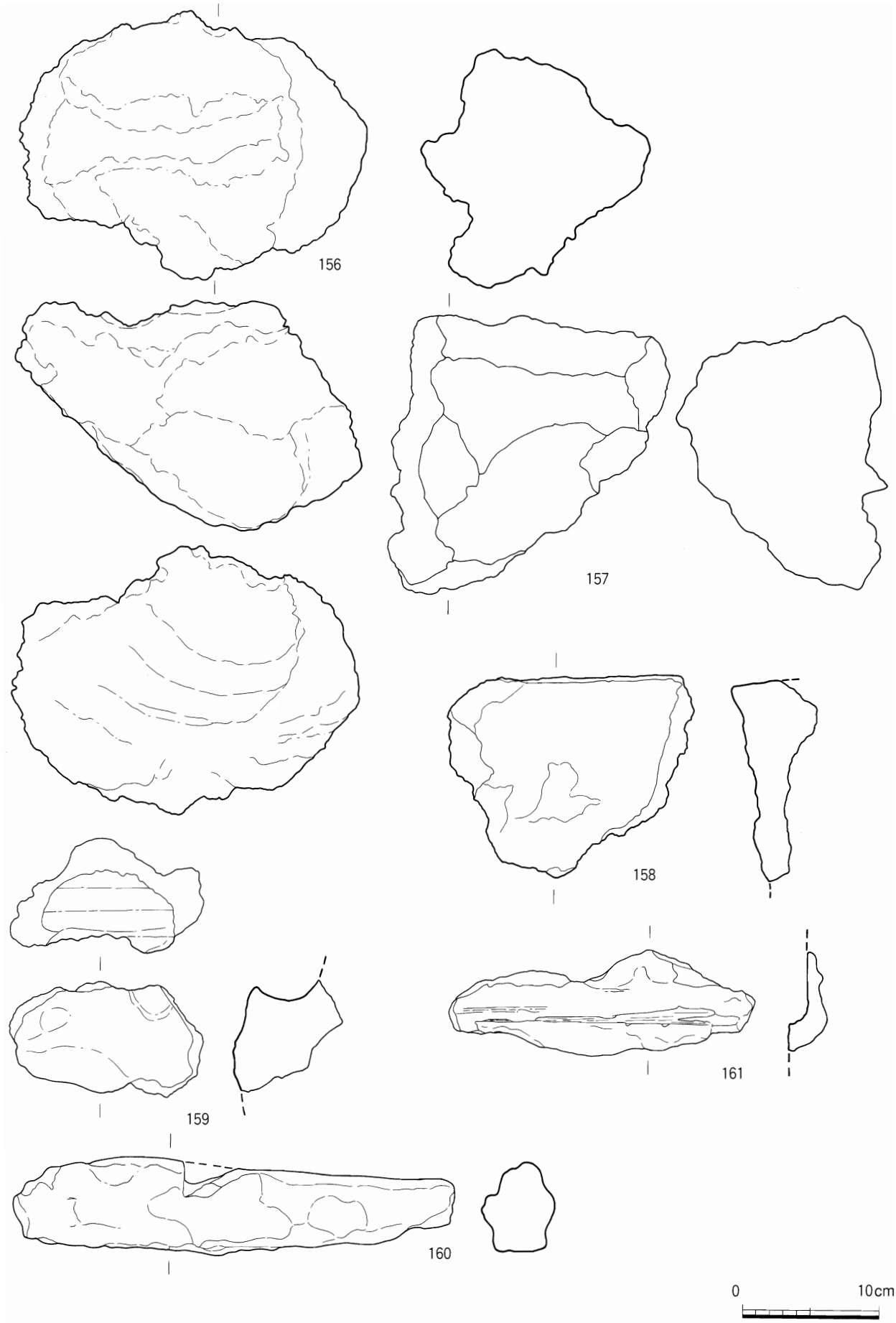
窪内から出土した木炭である。1・3 は広葉樹の散孔材、2・4・5 が広葉樹の環孔材と思われる。3 種類の樹種があるようだ。

6 号鍛冶炉出土遺物（第 124 図）　108 は鍛冶炉の炉壁土で、胎土に木炭粉を含む。109～113 は鍛冶滓である。109～112 には木炭痕が見られる。112 は鉄部が銹化し、113 はメタル度 H（○）である。これらは炉床の下の土層から出土しており、6 号鍛冶炉で生成されたものではない可能性が高い。114－1～5 は炉床下の木炭層から出土したもので、1～3 が広葉樹の散孔材と思われ、4・5 は広葉樹の環孔材である。2 種類以上の材が鍛冶炉に用いられたことが分かる。

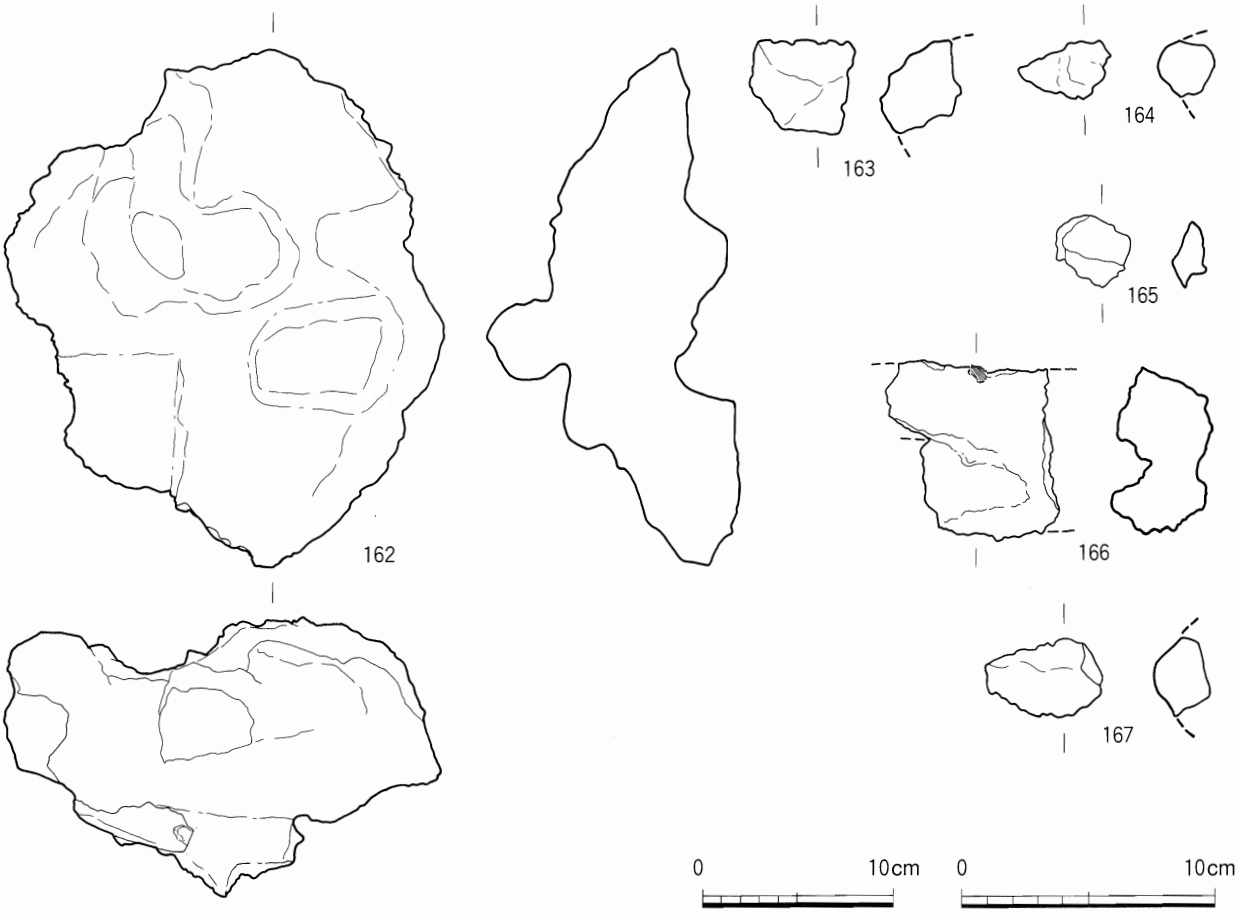
SK 04 出土遺物（第 124 図）　115 は内面が滓化しており、火窪内側の炉壁片と思われる。

7 号鍛冶炉出土遺物（第 125 図）　116～123 は新段階の鍛冶炉に伴う遺物である。116・117 は鍛冶炉の炉壁土で、ともに遺構から切り取ったものである。116 は火窪の外周部分にあたり、やや還元気味に熱を受けている。胎土は木炭を含まず、緻密で均質である。117 は火窪の内壁にあたる部分で、内面は滓化している。胎土中には粉炭を含む。117 は分析資料（SIS－17）である。118（図版 35）は鍛冶炉の原位置に残存していた羽口で、現存長は 26.1cm、孔径は先端部で 3.5cm、基部側で 4 cmである。基部側は内面がハの字に開くような形でえぐられている。先端部は斜めに溶損しており、3 号鍛冶炉に残存していた 115－53 とは様相が異なる。118 も分析に用いた（SIS－18）。119～121 は鍛冶炉の火窪底部から出土した鍛冶滓で、椀形鍛冶滓から遊離したものと思われる。滓質はいずれも緻密である。120 については分析に用いた（SIS－19）。122 は鍛冶炉西端部に残されていた板状の鉄製品である。被熱によりベンガラ色に変化し、剥離が進んでいる。この鉄製品の用途は今のところ分からない。これも分析資料（SIS－20）である。123－1～5 は火窪内から出土した木炭で、樹種はいずれも広葉樹の環孔材である。これらのうち 1・3・4 は類似材もしくは同一材で、2 は材の表面まで菊割れが進んだ材、5 は小枝状の材で、少なくとも 3 種類の材が用いられたと考えられる。

第129図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（22）
（151・152・154・155　S＝ 1/4、153　S＝ 1/3）



第130図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（23）（S＝ 1/ 4 ）

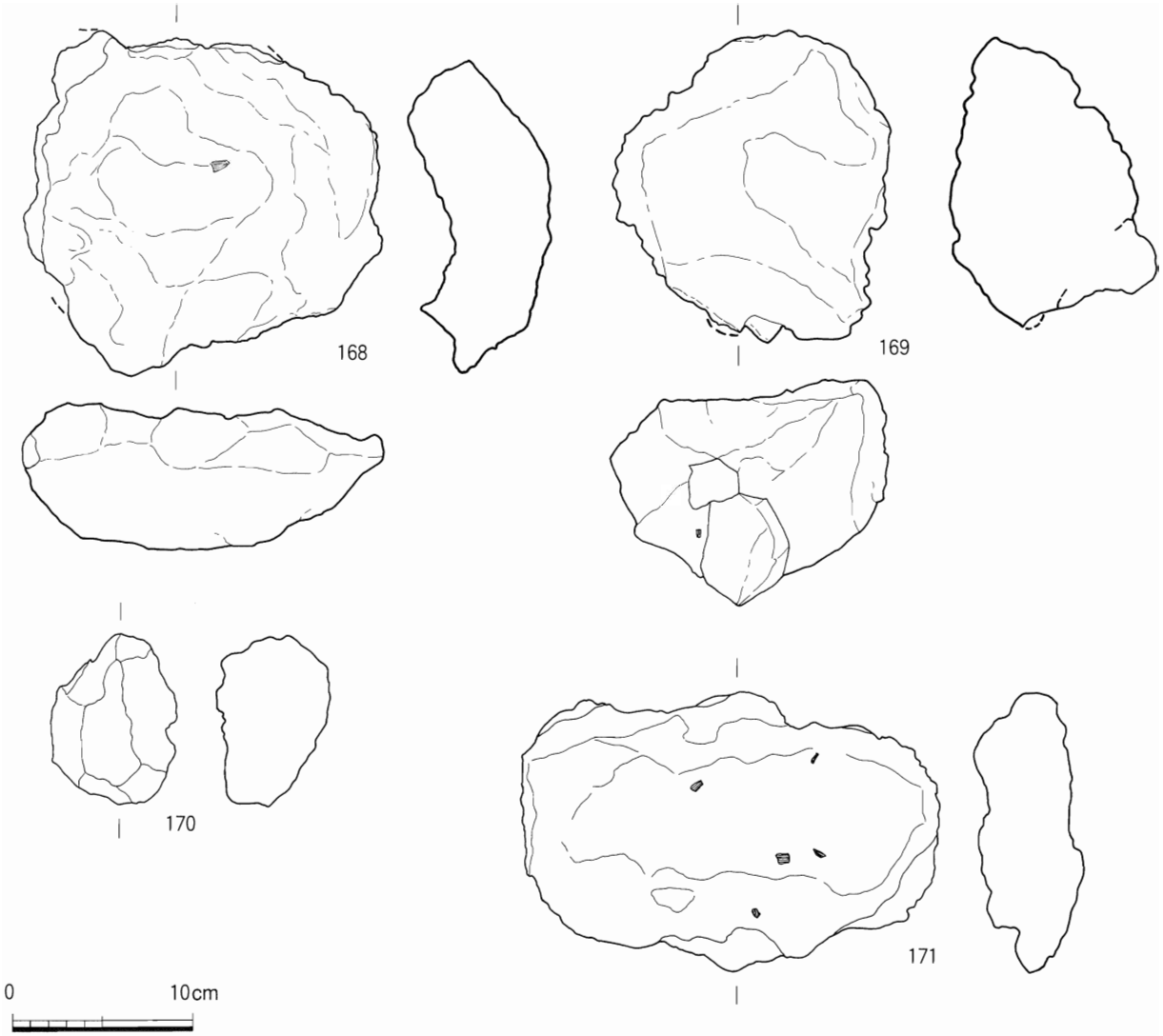


第131図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（24）（162　S＝ 1/4、163～167　S＝ 1/3）

なお、これらの遺物のほかに、新段階の火窪内の土から粒状滓・鍛造剥片を回収しており、これらを分析に用いている（SIS－21・22）。

124～126は 7 号鍛冶炉古段階に伴うものである。124・125は鍛冶炉の炉壁土で、いずれも遺溝から切り取ったものである。胎土には炭を含まない緻密な土が用いられている。125は分析資料である（SIS－23）。126は火窪内から出土した木炭で、1・2・4・5 は広葉樹の環孔材、3 は広葉樹の散孔材のように思われる。1 と 2、及び 4 と 5 は類似材と思われ、古段階では少なくとも 3 種類以上の材が用いられたと考えられる。

8 号鍛冶炉出土遺物（第126図）　127～133は 8 号鍛冶炉の 5 段階に伴う遺物である。127・128は火窪内側の炉壁土で、いずれも遺構から切り取ったものである。2 点とも被熱により灰褐色に還元している。胎土には粉炭が多く含まれている。127は分析資料（SIS－24）である。129は鍛冶炉の南端にほぼ原位置で残っていた羽口基部側の破片である。孔径は基部側で4.5cm前後と推定される。基部側の内面はえぐられてハの字状に開いている。胎土中にはわずかに粉炭が含まれているほか、粒状滓も入っており、大鍛冶場周辺で作られたことが窺われる。分析資料である（SIS－25）。130・131は火窪内から出土した鍛冶滓である。130は分析資料（SIS－26）で、表面には木炭痕が多く認められる。131は上部が炉床再結合滓のように土っぽく木炭を含み、下部は薄く緩やかな弧状になっており、炉壁もしくは炉床に接していたと思われる。132は球状の含鉄鉄滓で、メタル度はM（◎）である。133－1～5 は木炭である。1・2 は年輪が見えない広葉樹の散孔材と思われるもの、3 は年



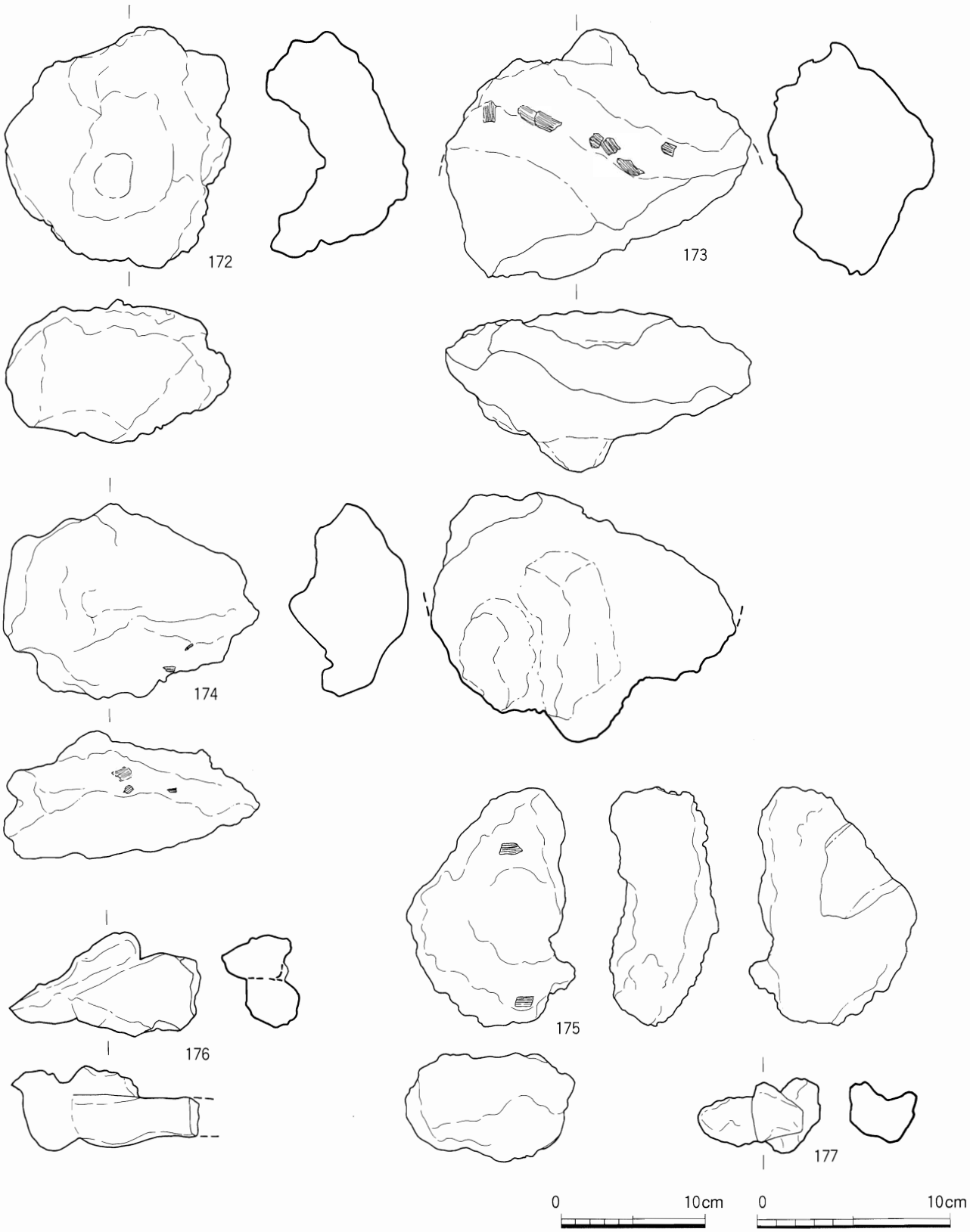
第132図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（25）（S＝１／４）

輪が見える広葉樹の散孔材と思われるもの、4 は針葉樹の散孔材と思われるもの、5 は広葉樹の環孔材で、この遺構では 4 種類以上の材が用いられたと考えられる。

134 は 8 号鍛冶炉の 3 段階の炉壁土に埋め込まれた鉄製品、かすがいである。遺構検出時には炉壁土中に完全に隠れており、どのような意図で埋め込まれたものか分からない。

SX 02 出土遺物（第 126 図）　135・136 は SX 02 の灰白色粘土面の下から採取された再結合滓であり、SX 02 とは直接関連する遺物ではないかもしれない。破面では木炭や滓分が認められ、粒状滓も入るようである。メタル度はＬ（●）で、ある程度の鉄部も含まれていることが分かる。

Ⅲ期大鍛冶場作業面　遺構の部分でふれたようにⅢ期の大鍛冶場跡では作業面の土を 50㎝のグリッドで採取し、そこから粒状滓・鍛造剥片を抽出し、大きさごとに分類している。各分類の合計重量で見た場合、粒状滓は径 1 ～ 2 ㎜前後のものが最も多く、1 ㎜未満のものもかなりの量を占める。鍛造剥片は 1 ㎜未満のものが最も多く、2 ㎜以上のものはわずかである。粒状滓・鍛造剥片で 5 ㎜を超えるものはない。獅子谷遺跡と同様の方法で粒状滓・鍛造剥片が抽出されている頓原町中原遺跡[5]の大鍛冶場では、5 ㎜以上の粒状滓・鍛造剥片も検出される一方で、1 ㎜未満の粒状滓・鍛造剥片は少なく、両遺跡の粒状滓・鍛造剥片の重量分布には大きな違いがあることが分かる。なお、粒状

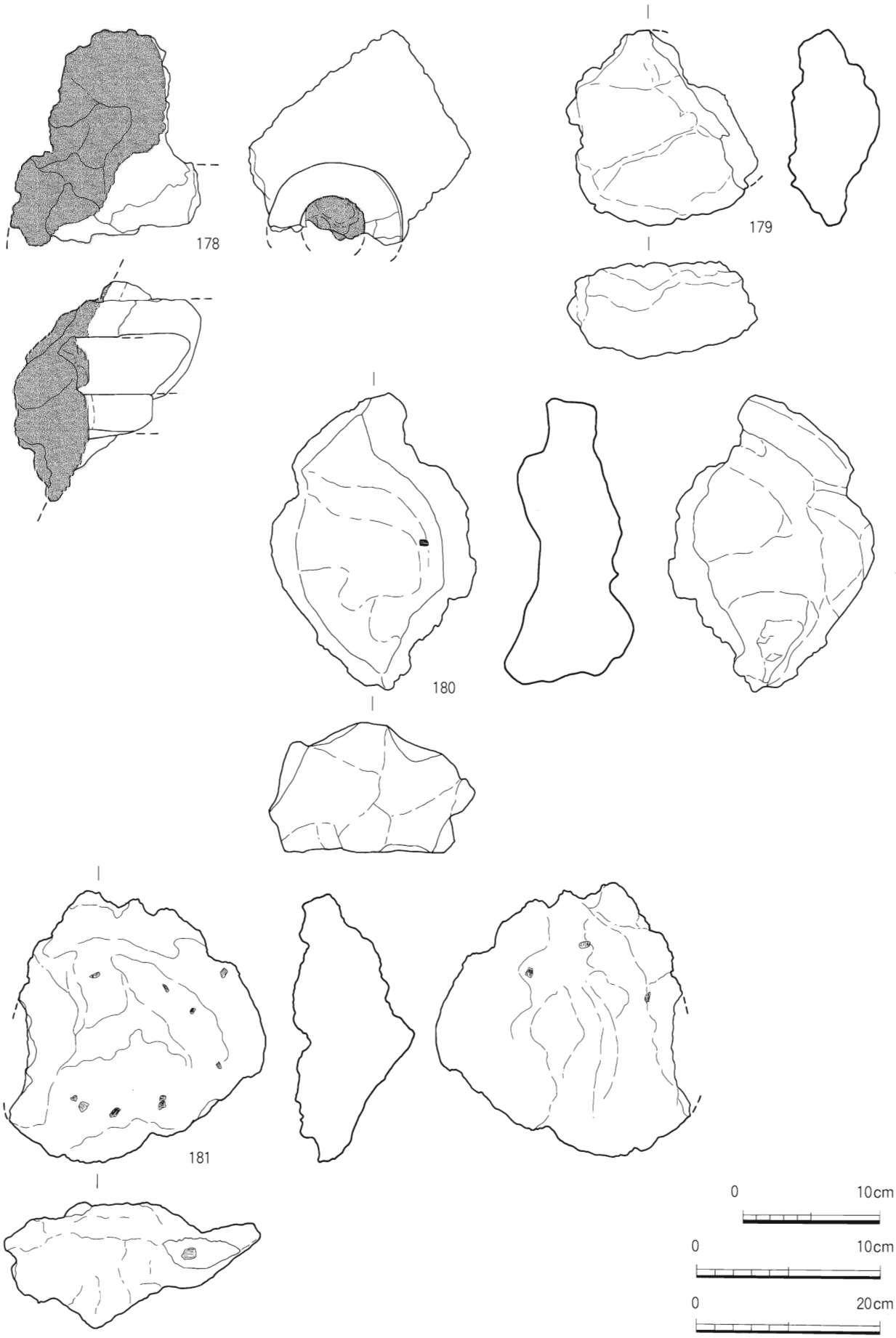


第133図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（26）
（172～175　S＝ 1/4、176・177　S＝ 1/3）

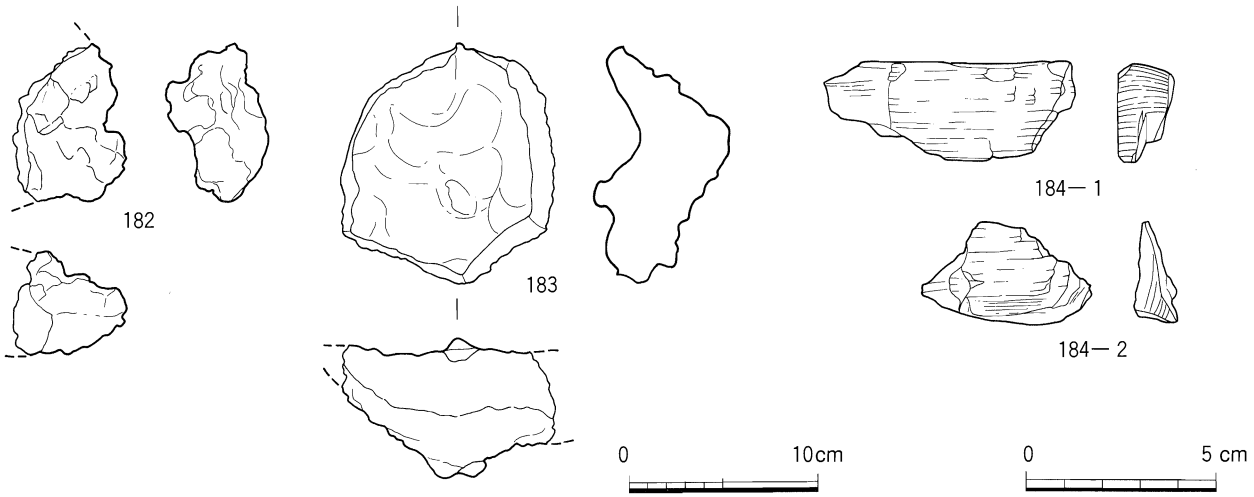
滓・鍛造剥片の中からそれぞれ分析資料（SIS－27・28）を選択した。

SK 05 出土遺物（第 127 図）　137 はメタル度 L（●）の鍛冶滓で、鉄部は上面に見られるようである。138 は厚さ 0.8cmのくさび状、もしくは板状の鉄製品で、下端部が丸くなっている。

SB 02 柱穴内出土遺物（第 127・128 図）　139～150 はⅢ期の SB 02 の柱穴内から出土した遺物であ



第134図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（27）
（178　S＝ 1/3、179・180　S＝ 1/4、181　S＝ 1/6）



第135図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（28）
（182・183　S＝ 1/4、184　S＝ 1/2）

り、これらが実際に生成されたのはSB 02が建てられるよりも前の段階である。

139は羽口の破片で、外径は8.3cm、孔径は3.9cmである。先端部は滓化し、側面から見ると斜めに溶損している。胎土は 2㎜以下の砂粒を含む緻密な粘土が用いられている。140・141は含鉄椀形鍛冶滓で、メタル度はM（◎）である。140はやや横長の楕円形で、141は平面形が半円形で、右側面は直線的に途切れたような面を持つ。142は大形の椀形鍛冶滓で、右側面は欠損しているが現存長は31.9cmある。破面には木炭痕が顕著に認められる。143～145はメタル度L（●）、146～149はメタル度特L（☆）の含鉄鉄滓である。これらは酸化土砂の付着が著しく鉄部の状態は分かりにくい。146～149は大きさの割にはメタル度や磁着度が高く、鉄塊系遺物とすべきかもしれない。150は再結合滓で、上面は窪んでいる。土砂に含まれた粉炭や滓分・粒状滓が固結したものである。

水場遺構出土遺物（第129～132図）　151～157・162～167は水場遺構を造る際に壁体などに転用された遺物で、Ⅲ期よりも前に生成された物である。151・152は火窪内側の炉壁が剥離したもので内面は滓化している。152の上面には平坦な面があり、鍛冶炉の炉壁上部に何かがあったと思われる。153は流動状の鍛冶滓で、滓質は緻密である。154～156は長さが20cm前後かそれ以上の中形からやや大形の椀形鍛冶滓である。それぞれ下面には丸棒状の工具痕流入滓部が見られる。155は左側面が直立気味に立ち上がる。また、156（図版38）は右側面で滓が途切れて、斜めに立ち上がっている。157はメタル度特L（☆）の含鉄椀形鍛冶滓の破片で、大形の椀形鍛冶滓の外面側が欠損したものと思われる。鉄部は上面に集中する。162は鉄滓や鉄分、礫、木炭が再結合したもので、メタル度はL（●）である。163～165はメタル度L（●）の含鉄鉄滓で、含鉄椀形鍛冶滓などの欠損品と思われる。166・167はメタル度特L（☆）の含鉄鉄滓である。

158～160は水場遺構の西側の外部に形成されていた再結合部分を割り取るなどしたものである。158・159には足場に置かれたと思われる木材の痕跡が残っている。これらは、礫・粉炭などが固結した部分や、粒状滓・滓片・礫片を含む部分、鍛造剥片様の薄膜、鉄滓様の部分が層状に再結合している。なお、158は分析資料（SIS－29）である。

161は水場遺構の底面で形成された再結合滓で、この部分に置かれた木材の痕跡が残されている。砂状の鉄分や滓分、木炭、土砂などが再結合したものである。

168～171は水場遺構の覆土中から出土した遺物で、本来は石列 2 に転用されたものが崩れて、水

場遺構内に落ちた可能性が考えられる。168～170は椀形鍛冶滓で、169・170はメタル度が特L（☆）である。169は半円形で右側は途切れたような面をもつ。170はほぼ全面が破面である。171は再結合滓で、木炭を多く含む部分と砂粒や滓分を中心とする部分が層状になっている。粒状滓・鍛造剥片も多く含まれる。

石列 2 出土遺物（第133図）　172～177はいずれも石列 2 に転用された遺物で、大鍛冶場Ⅲ期よりも前に生成されたと考えられる。172～175は椀形鍛冶滓で、174はメタル度H（○）、175はメタル度特L（☆）である。173・174が縦長であるのに対し、172・175は平面が半円形で、幅広になっている。173の下面には丸棒状の工具痕流入滓部が見られる。また、175の下面には幅約 5 cmの、断面方形もしくは板状の工具痕が残っている。176・177はメタル度がL（●）で、含鉄鉄滓としているが、酸化土砂の付着が著しく鉄部は十分な観察ができなかった。176は外面が滑らかで 2 つの鉄塊系遺物が銹着しているようにも見える。

SD 04 出土遺物（第134・135図）　178は羽口片で、孔径は3.2cmである。羽口先端部は滓化し、側面から見ると斜めに溶損している。羽口の通風孔部には上方から垂れ落ちたとみられる滓が詰まっている。羽口周辺の炉壁土は粉炭を含んでいる。179～183は椀形鍛冶滓で、182はメタル度L（●）、183はメタル度特L（☆）である。180は平面が、ラグビーボール形の特異な形をしており、下面側の右縁に沿って丸棒状の工具痕流入滓部が認められる。181は長さが27.8cm、幅が29.9cmの大形のもので、下面に工具痕流入滓部が見られる。183は滓質が緻密で、やや流動状になっている。磁着の程度から鉄部は上面にあるように思われる。184は木炭である。1・2 ともに広葉樹の環孔材で、同一材もしくは類似材と思われる。

金屋子石組遺構周辺出土遺物（第104・136・137図）

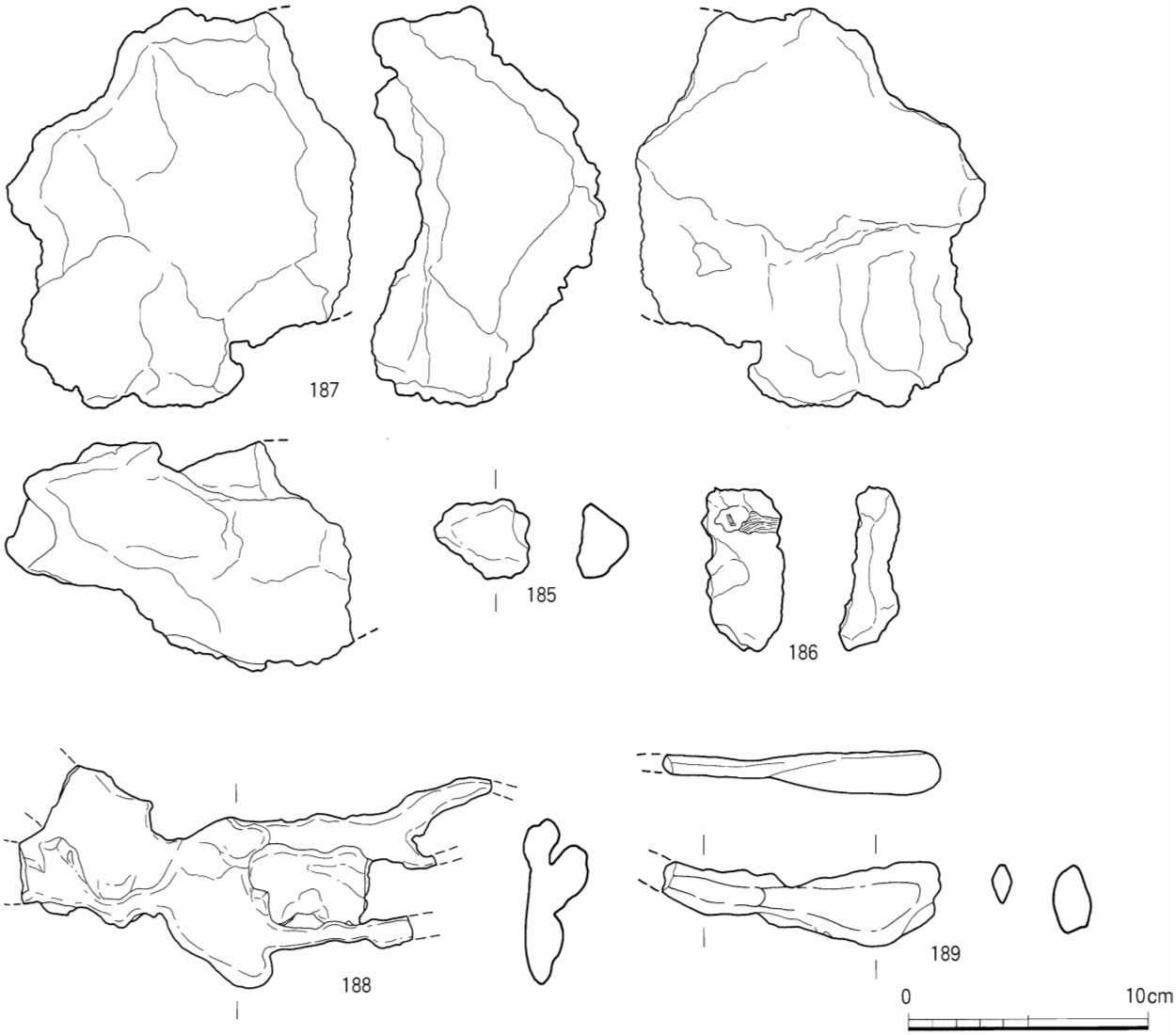
185～196は金屋子石組遺構周辺で出土した遺物である。これらは本遺跡の遺物群の中でも特徴的なものが多く、金屋子祭祀と深く関わったものと思われる。

185はメタル度M（◎）、186はメタル度特L（☆）の含鉄鉄滓である。186は大きさの割に重量があるようであり、鉄塊系遺物とすべきかもしれない。

187は一見すると椀形鍛冶滓のように見えるが、比重が大きく、各面とも磁着が強いため鉄塊と判断された。上面の一部でやや流動状になっている部分があるが、全体として表面はごつごつとした質感を持っている。図手前側、左側、奥側の各面には丸棒状の工具痕が認められる。右側面は直線状の面が見られ、破面になる可能性もある。全体が均質な状態になってはいないが、滓部は少ないことから、既に除滓が行われ炭素量が調整されつつある鉄と思われ、大鍛冶工程における左下鉄になる可能性が考えられる。この遺物は分析に用いている（SIS－30）。

188・189は流動状の銑鉄塊である。188は数条の流動単位が重層したり、枝分かれしている。189は 2 本の流動単位が重なっており、右側で流れが止まっている。鈩では最初にできた鉄滓（ノロ）や銑鉄を「初花」といい、金屋子神に供える風習がある。これらの銑鉄塊は鈩からもたらされて、金屋子神に奉納されたと思われる。なお、189は分析資料（SIS－31）である。

190～192は銑鉄製のろうそく立てである。大小があるが、不整形な板状の基部と上方に立ち上がる立体部からなる。こうしたろうそく立ては丸太状の木炭の割れ目に流動状の銑鉄を上から流し込んで作られる。190は高さ4.5cmで、立体部が小さく、銑鉄の流れはあまりよくなかったと思われる。



第136図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（29）（S＝ 1/ 3 ）

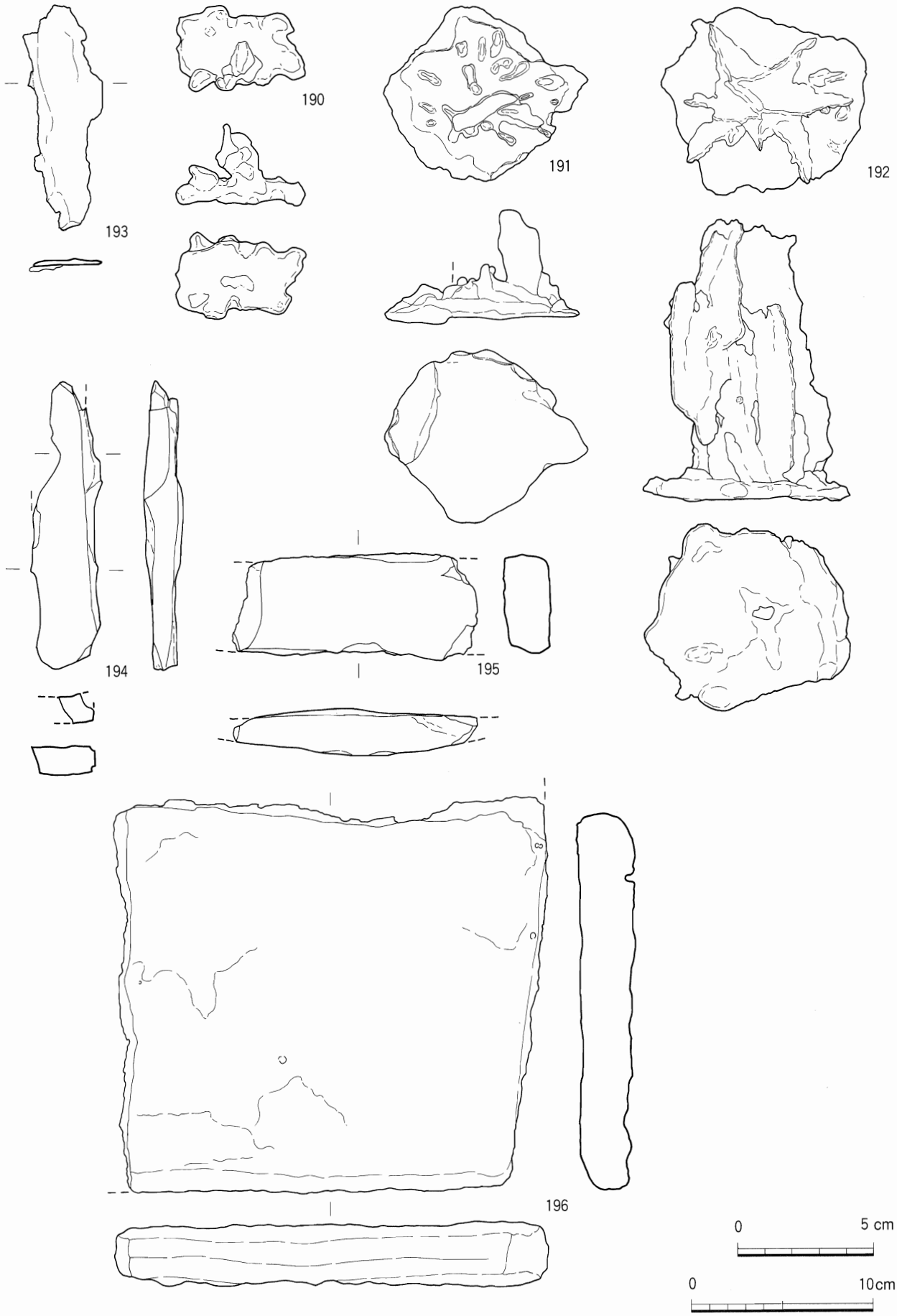
191 は現存高 6.3cmだが、中央の立体部が欠損しており、これより若干高かったかもしれない。ただし、木炭の放射状の割れ目には銑鉄はあまり流れ込んでいない。192 は高さ 15.5cmとこれらの中では最も大きく、銑鉄の流れがよかったと思われる。立体部は放射状に大きく広がっており、この部分には格子目状の凹凸が見られ、木炭の割れ目に銑鉄が流れ込んでいることが分かる。部分的にろうと思われる白色の付着物も見られる。なお、190 については分析に用いた（SIS－32）。

193 は薄板状の鉄製品で、長さ 8.3cm、幅 2.9cm、厚さは 0.2cmである。用途は不明であるが、これも金屋子祭祀に関連する可能性が考えられる。

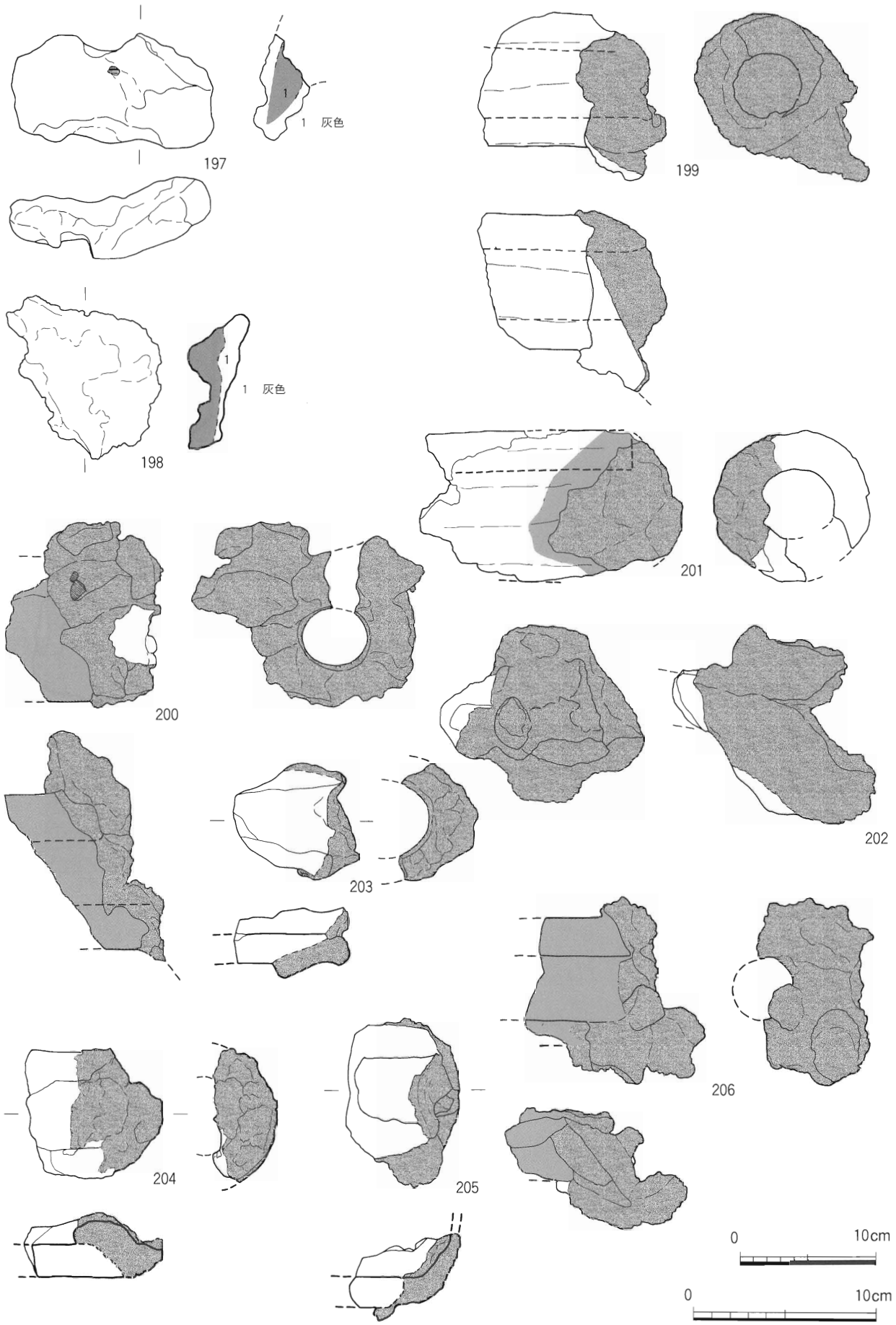
194 は厚板状の鉄製品で、長さ 15.9cm、幅 3.6cm、厚さは 2.2cmである。全体として層状の剥離が進んでおり、先端部はえぐれた形になっているが、ここも破面と思われる。厚みはえぐれの入るあたりが最も厚く、基部側に向けて徐々に薄くなっている。庖丁鉄の端部、もしくは何らかの鉄製品が破損したものと思われる。分析に用いた（SIS－33）。

195 は割鉄と考えられる。左右の端部は上下面に対して斜めに面を持つが、破面のように思われる。表面には小さな凹凸が目立ち鍛打は粗いように思われる。

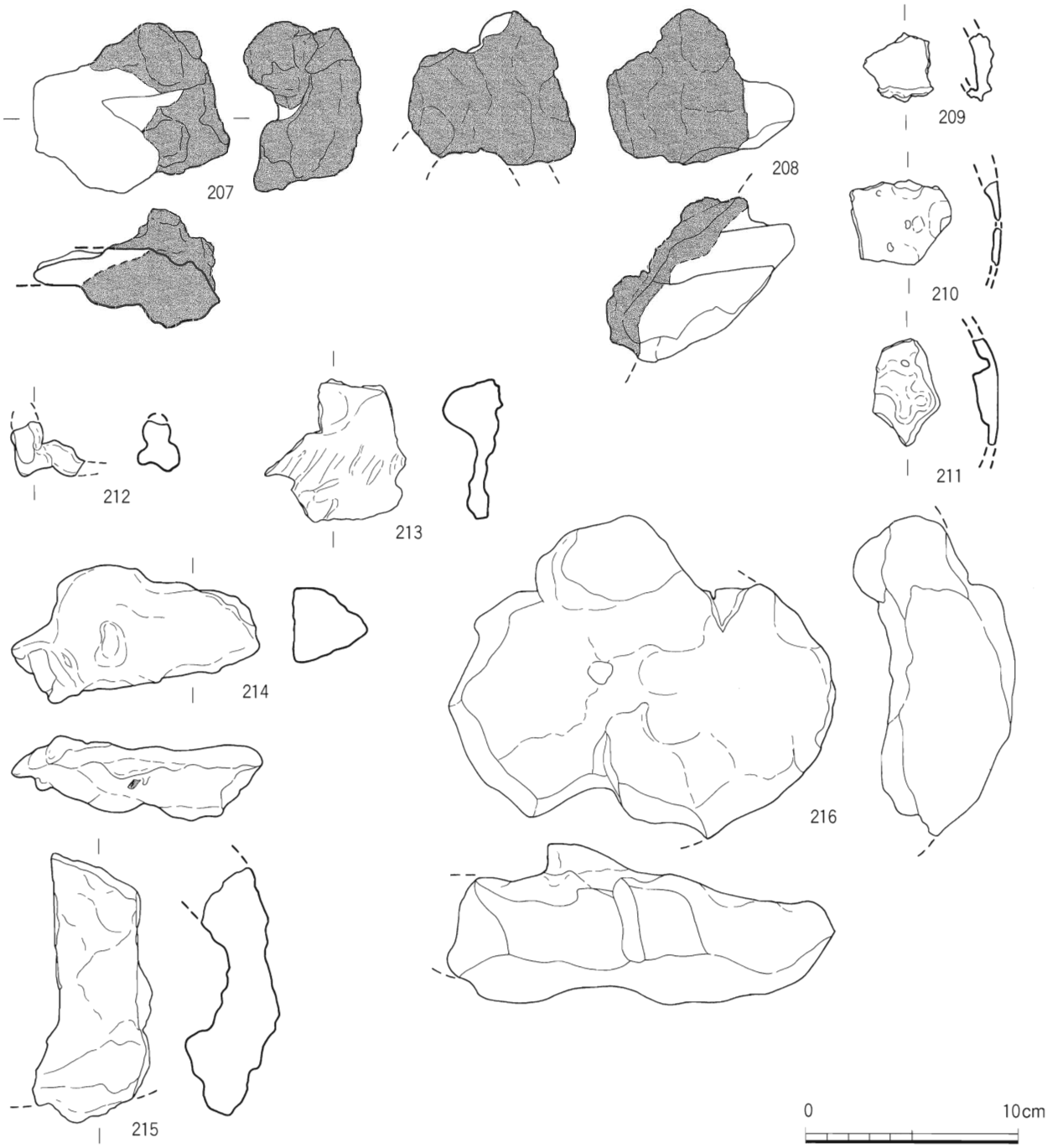
196 は長さ 23.8cm、幅 21.8cm、厚さ 3.2cmの方形の板状鉄製品である。左側面及び図奥側は破面と



第137図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（30）
（190～192・194～196　S＝ 1/3、193　S＝ 1/2）



第138図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（31）
（197・198　S＝ 1/ 4 、199～206　S＝ 1/ 3 ）



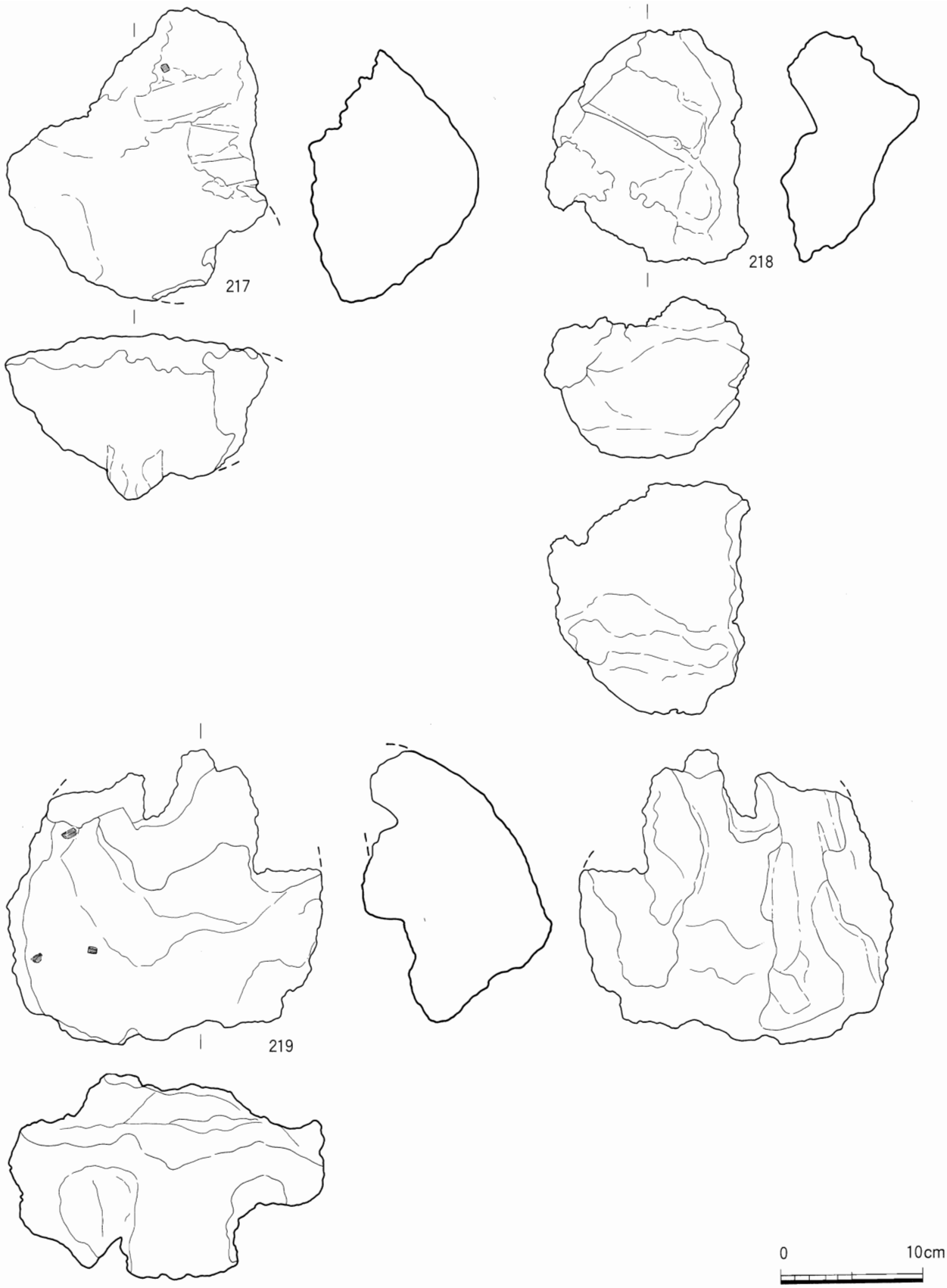
第139図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（32）（S＝ 1/ 3 ）

思われる。全体として所々に丸い気孔が見られ、上面・手前側・右側面は整った面を持っている。こうした点から銑鉄を鋳型に流し込んで作られた可能性が考えられる。遺跡付近の住民の話によると、この遺物が金屋子の御神体として祭られたとのことである。

遺構外出土遺物（第 104～106 図・第 138～152 図）

炉壁（第 138 図）　197・198 はともに火窪内側の炉壁がはがれたもので、内面は滓化している。胎土中には木炭や木炭痕が観察でき、砂礫も含まれる。

羽口（第 138・139 図）　199～208 は羽口の破片である。先端部はいずれも滓化・溶損している。199 は孔径 3.6cmで先端部は側面から見て垂直に近い角度で溶損している。200 は孔径 3.4cm前後、201 は孔径 3.9cmで、先端部は斜めに溶損しているようである。202・204・205 は先端部に滓が詰まりかかっ

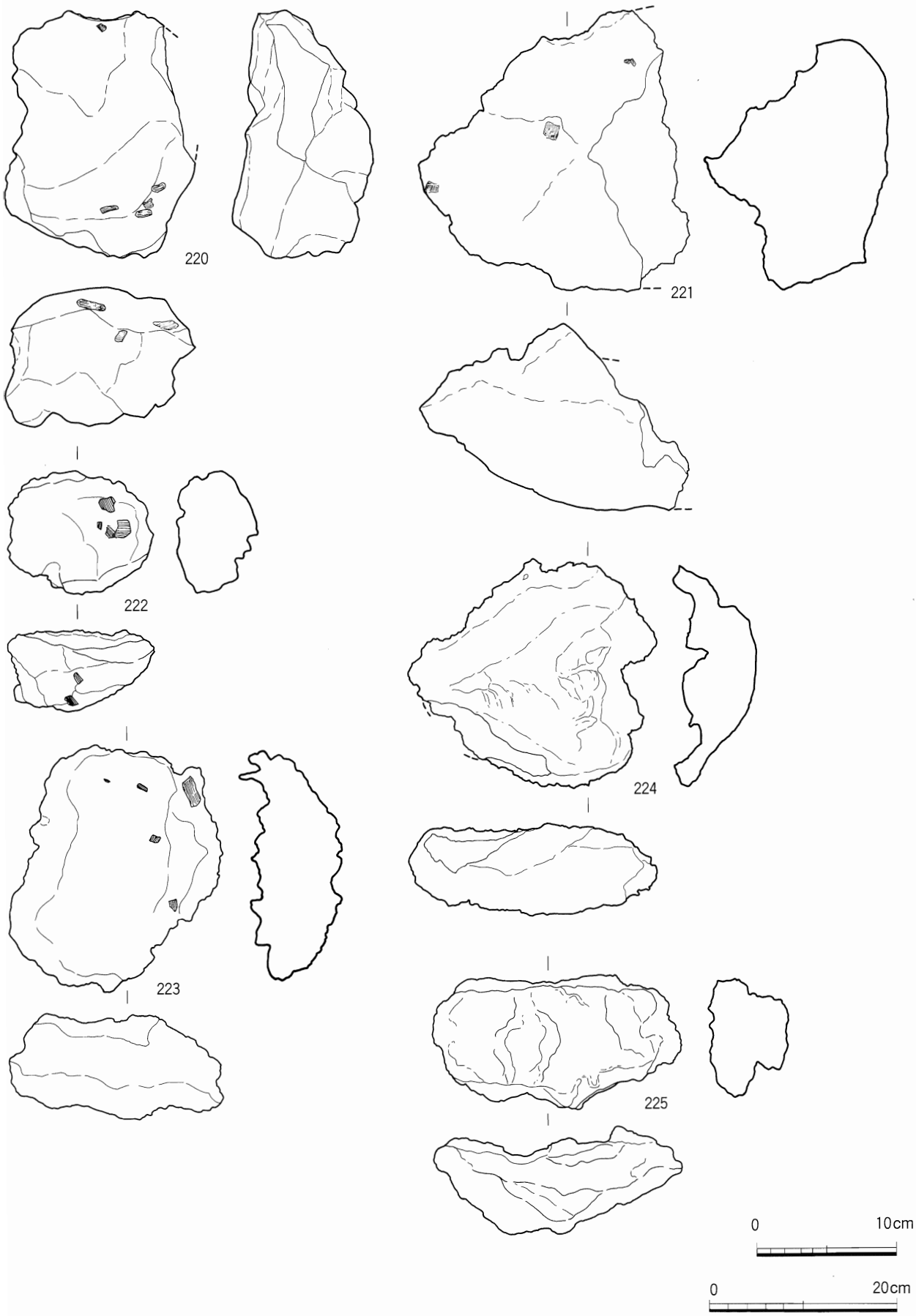


第140図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（33）（S＝ 1/ 4 ）

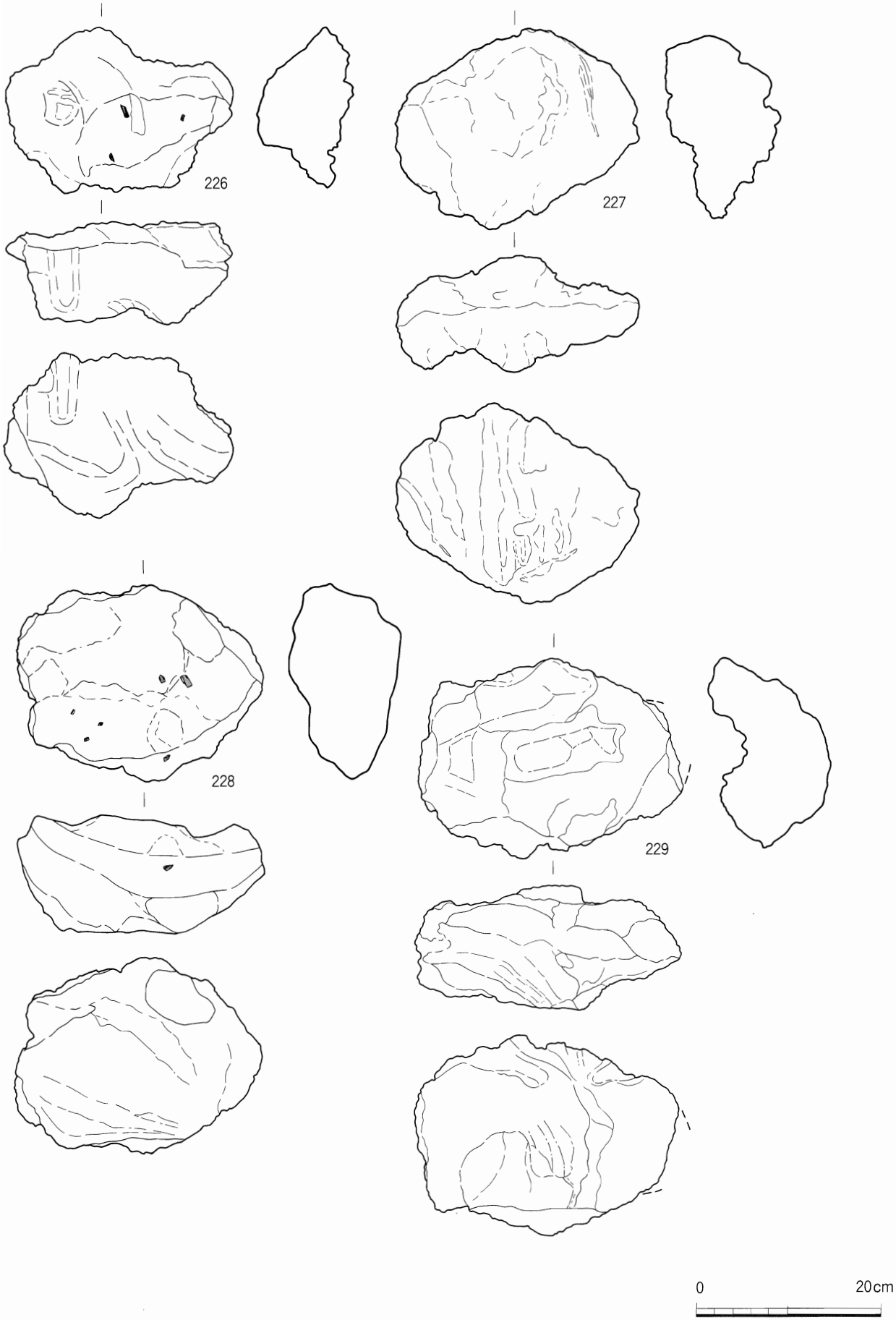
ている。204 は分析資料（SIS－34）である。

工具付着滓（第 139 図）　209～211 は工具付着滓。209 は分析資料（SIS－35）で、板状の工具の痕跡が残る。210・211 は下面が弧状で、緩やかにへこんだ面を持つ工具に付着したと思われる。

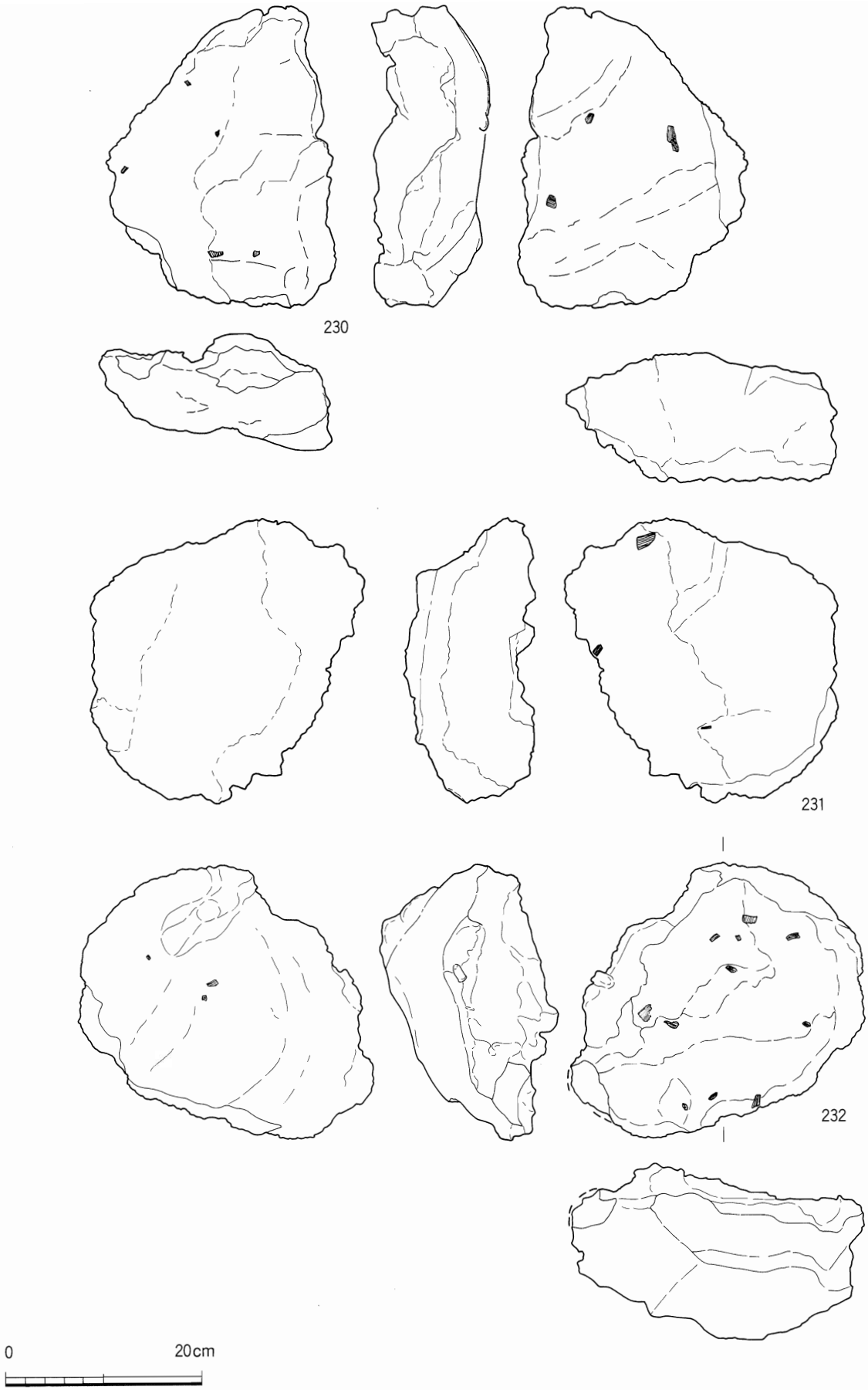
鍛冶滓（流動状）（第 139 図）　212～216 は表面が流動状になっている鍛冶滓である。215 は椀形鍛



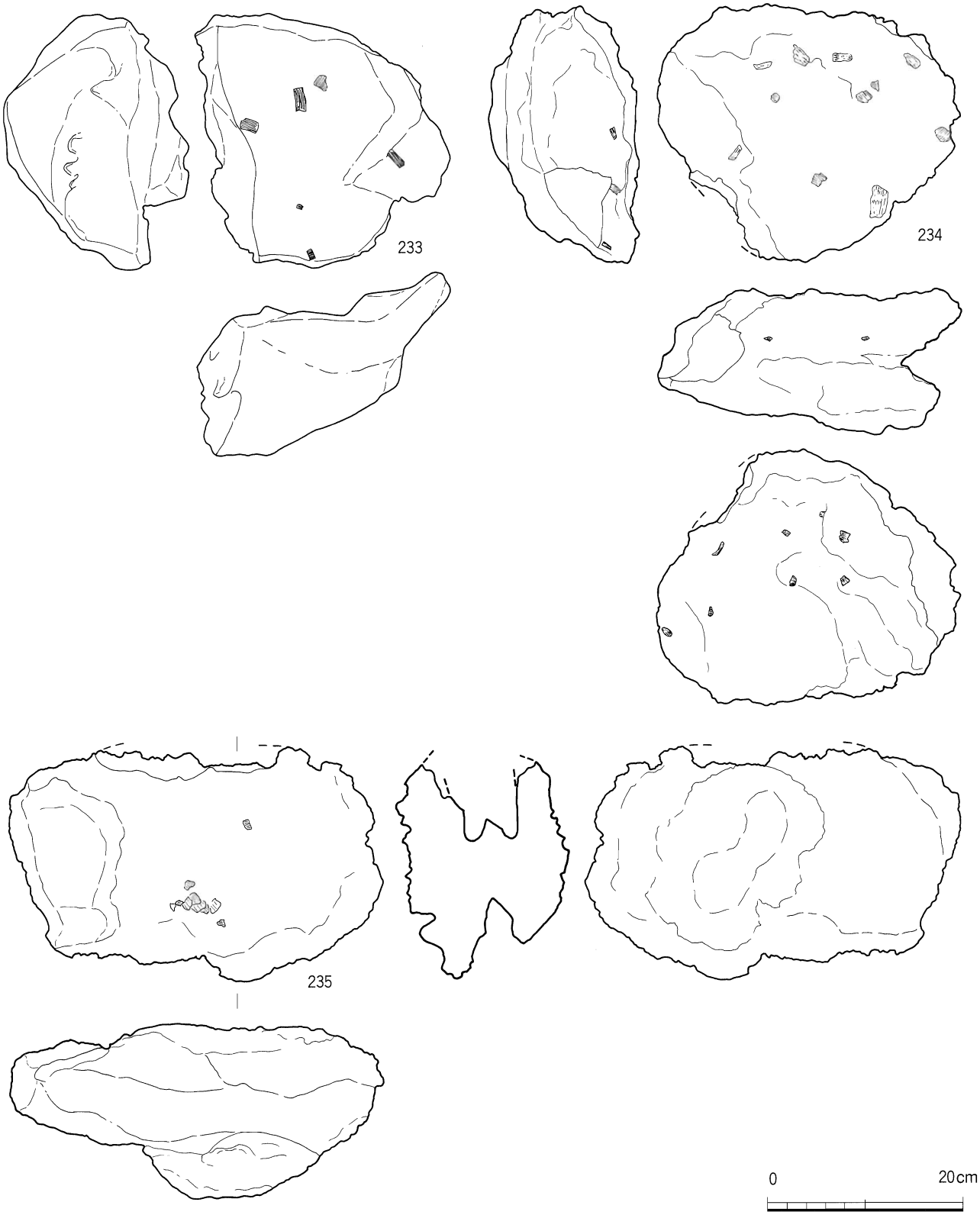
第141図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（34）
（220～224　S＝ 1/4、225　S＝ 1/6）



第142図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（35）（S＝ 1/ 6 ）



第143図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（36）（S＝ 1/6）

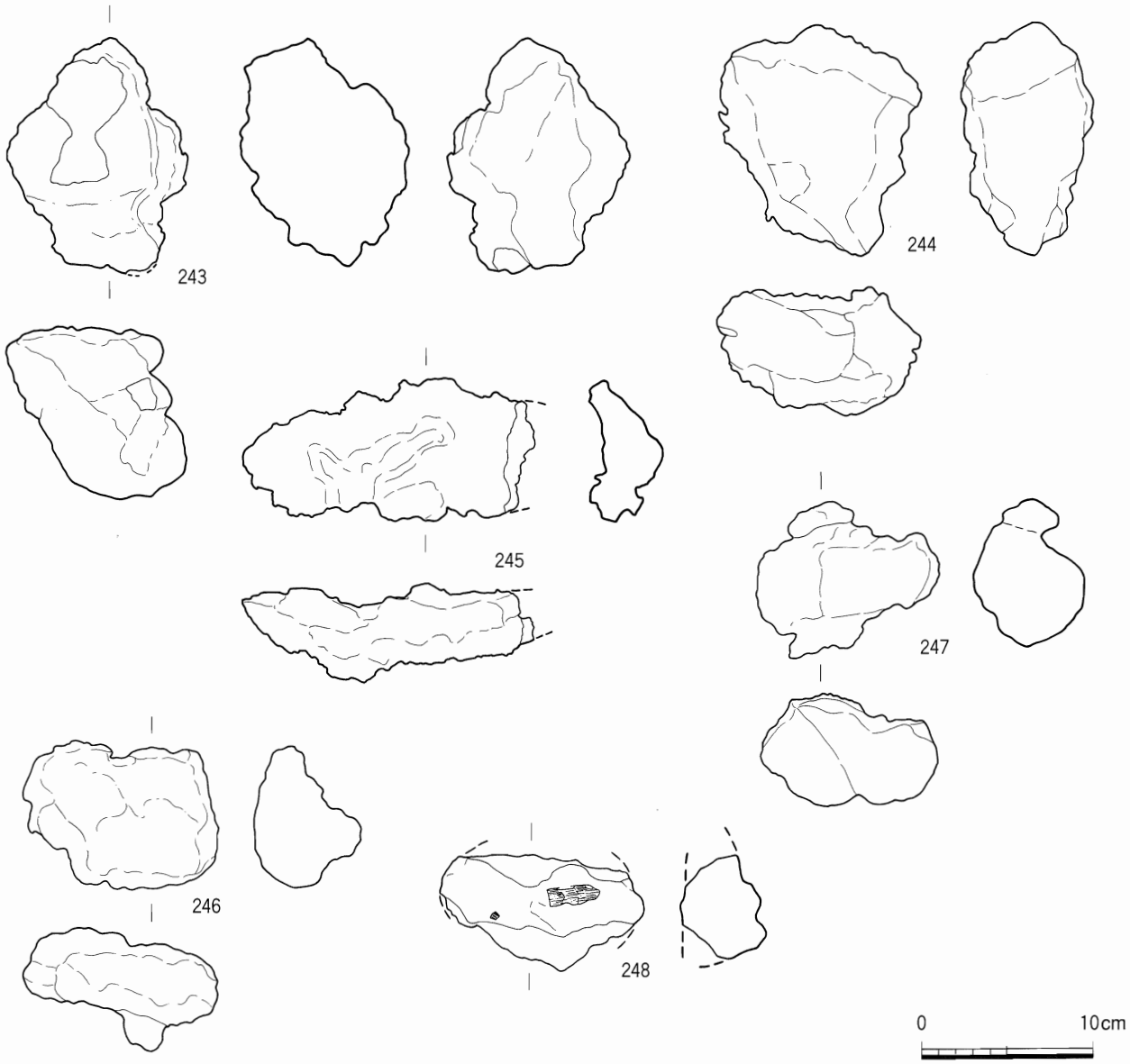


第144図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（37）（S＝ 1/ 6 ）

冶滓の破片、216 は中形の椀形鍛冶滓で、上面は流動状になっている。

椀形鍛冶滓（第 140～146 図）　217～219 は工具痕付の椀形鍛冶滓である。217・218（図版 39）には上面に断面方形の工具痕が見られ、下面には丸棒状の工具痕流入滓部がある。217 は分析資料である（SIS－36）。220・221 は二次被熱の見られる椀形鍛冶滓で、4 号鍛冶炉の地下構造に転用されたのか

第145図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（38）（S＝ 1/ 4 ）

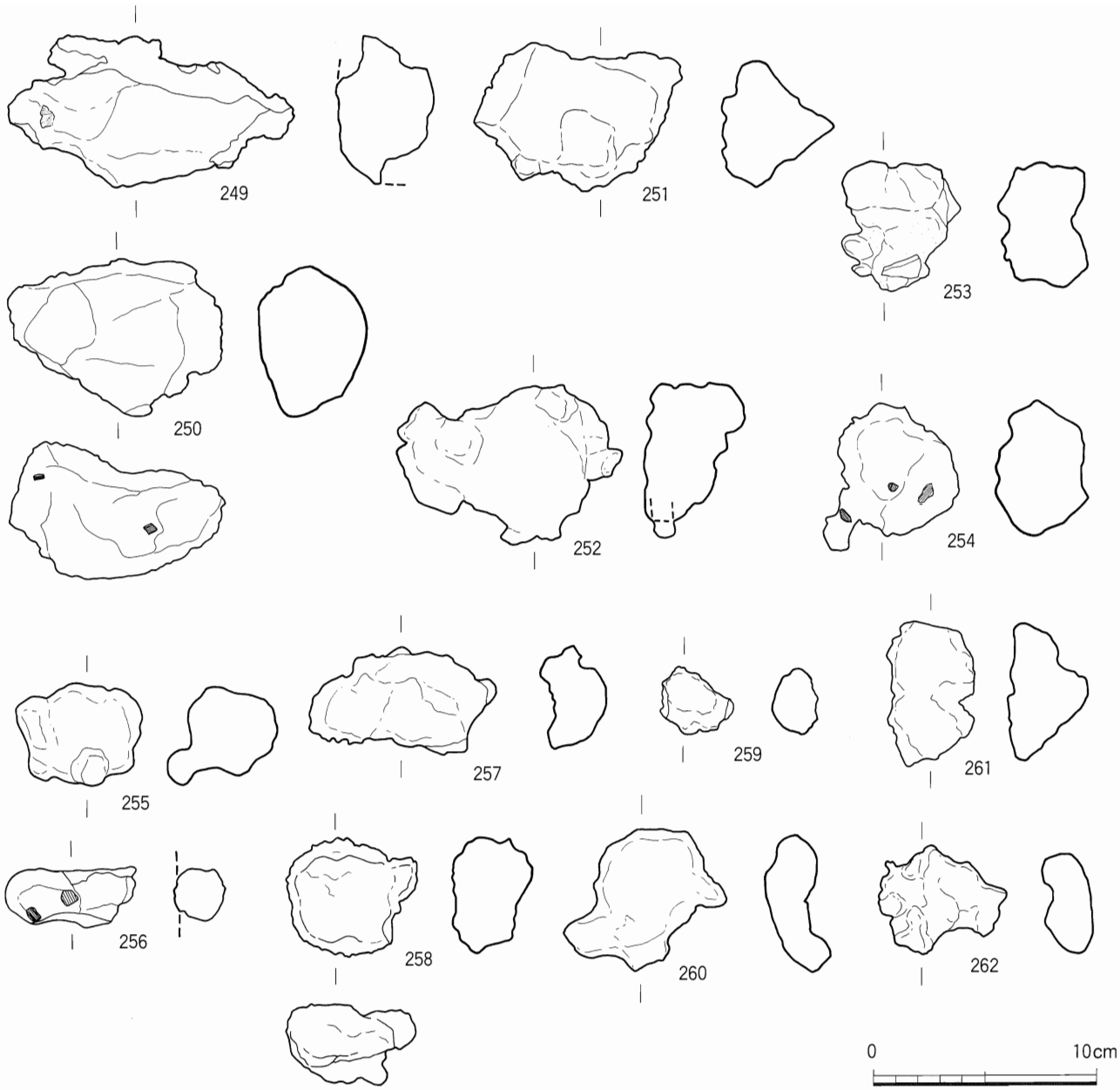


第146図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（39）（S＝ 1/ 4 ）

もしれない。222は長さ10.5cmの小形の椀形鍛冶滓で、分析資料（SIS－37）である。223・224は長さ・幅が17cm前後の中形の椀形鍛冶滓である。225～229は長さが25cm前後から30cm前後の中形からやや大形の椀形鍛冶滓で、226～229には下面に丸棒状の工具痕流入滓部が見られる。229は分析資料（SIS－38）である。230～235は長さ・幅が30cm前後からそれよりも大形の椀形鍛冶滓である。230は右側面に、231～234は左側面に途切れたような面を持つ。234・235（図版38）は二重椀形鍛冶滓である。236～248はメタル度特L（☆）のものである。メタル度の高いこれらの椀形鍛冶滓は、外面に木炭痕のあまり目立たない、比較的緻密なものが多いようで、大きさは中形から小形のものが主である。236は分析資料（SIS－39）で、右側面に面を持っている。

含鉄鉄滓（特L（☆））（第147図、図版40）　249～262はメタル度特L（☆）の含鉄鉄滓で、250・258は分析資料（SIS－41・42）である。これらは外見上での区別するは難しいが、中には製錬段階の滓を含んだ鉄塊で、鍛冶原料となるものが含まれるかもしれない。

不定形鉄塊（第148図、図版40）　263～269は不定形鉄塊で、263・264・267は分析資料（SIS－40・43・44）である。いずれも酸化土砂の付着が著しい。264は製錬系の鍛冶原料となる鉄塊になるか



第147図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（40）（S＝ 1/ 3 ）

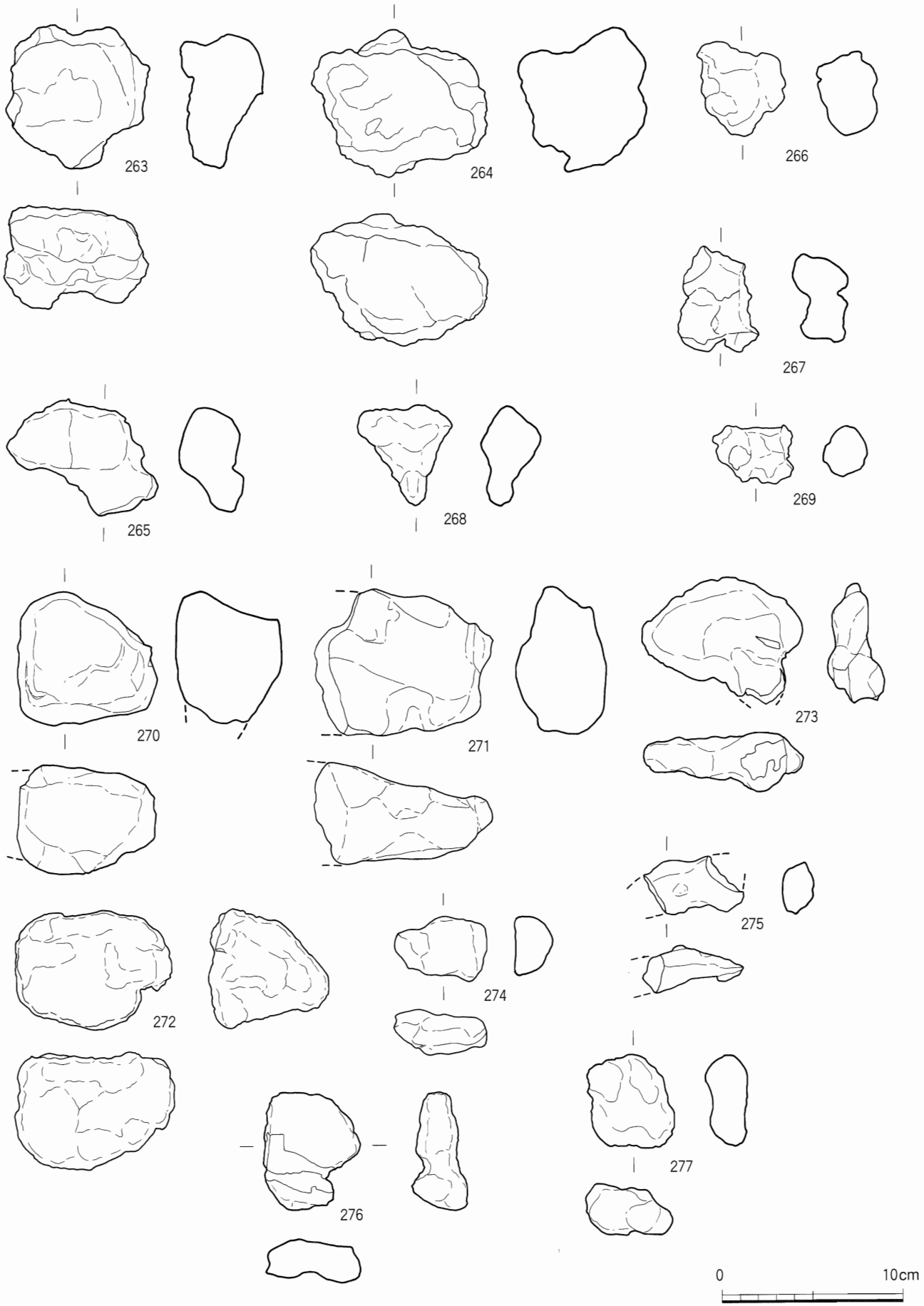
もしれない。265・266はあるいは小割りされた銑鉄塊になるようにも思われる。

銑鉄塊（第148図、図版40）　270～277は銑鉄塊と思われるもので、これらは鈩から大鍛冶場へ鍛冶原料としてもたらされたものと思われる。270・271は分析資料（SIS－45・46）である。

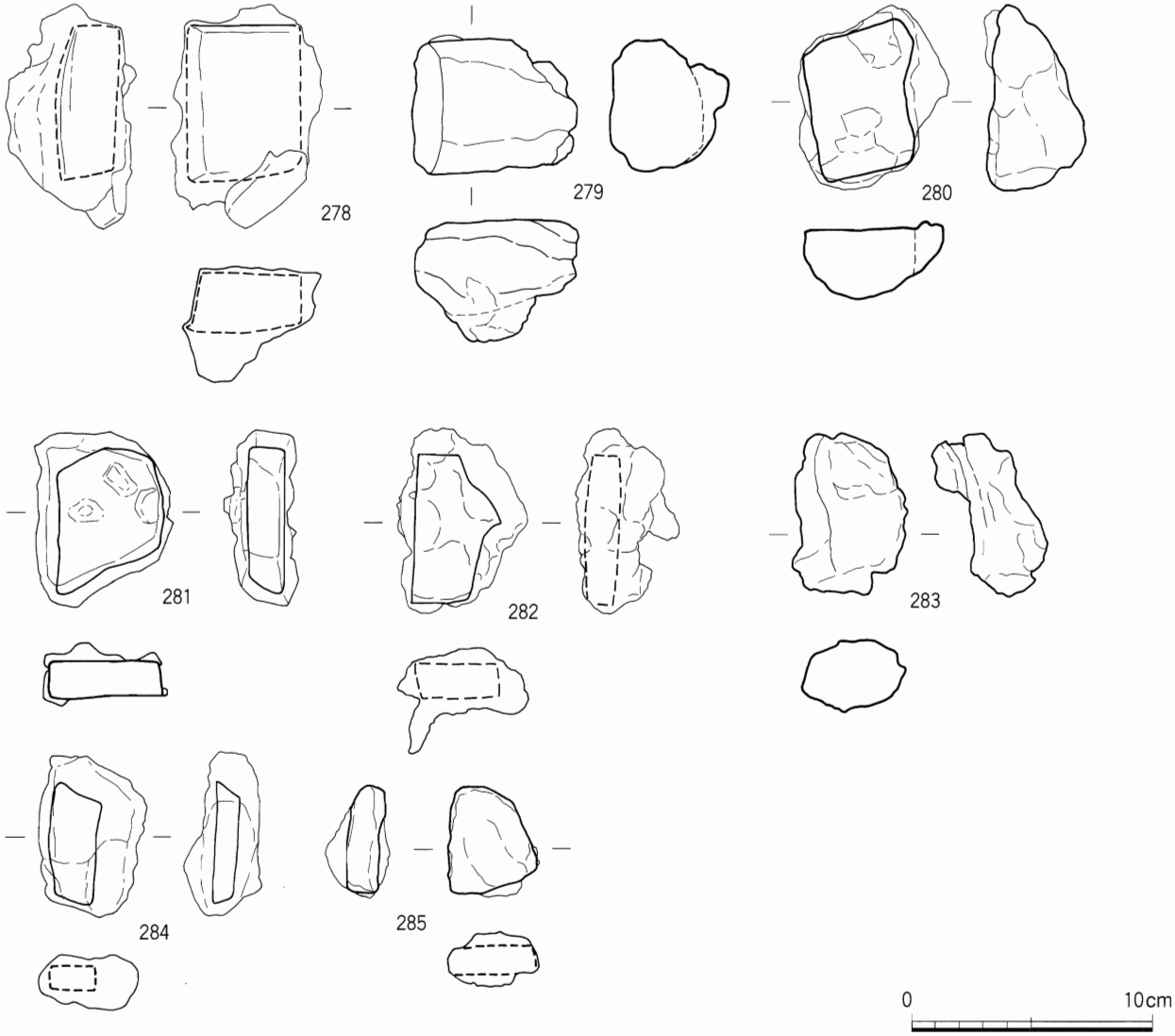
小割鉄（第149図、図版41）　278～285は小割鉄と考えられるもので、278・281は分析資料（SIS－47・48）である。278は切餅状で、図手前・奥側、左側面は鏨による切断痕が見られる。279は左側面は鏨による切断面、上下面は丸みを持ち、右側は不整形である。281は板状になっている。

再結合滓（第150図）　286～288は再結合滓である。288の手前側には丸太状の木材の痕跡が残されている。289は粒状滓・鍛造剥片・木炭などを含み、木炭などが小塊状になって再結合している。

鉄製品（第151、152図、図版42、43）　289～299は工具類で、これらのうち289・294・297・298は分析資料（SIS－49～52）である。289（図版42）は径 3㎝の丸棒状の工具で、基部側・先端部側の両方とも欠損している。基部側に近いところで屈折しているが、これは使用による折れと考えら



第148図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（41）（S＝ 1/ 3 ）

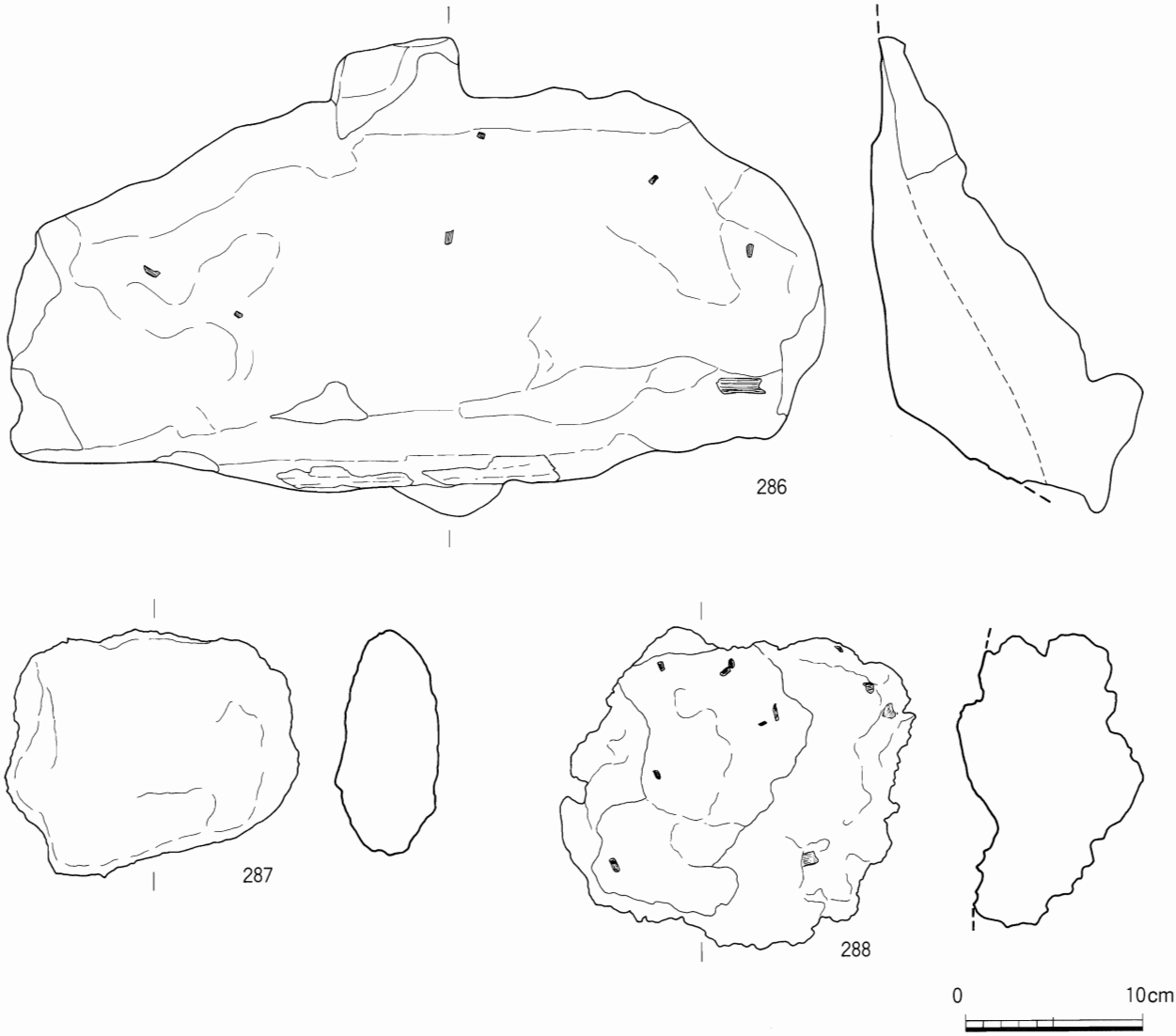


第149図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（42）（S＝ 1/ 3 ）

れ、X 線写真で見るとひびが入っているのが分かる。156・217・218 の下面に見られる工具痕や工具痕流入滓部と太さや形状が類似しており、炉底にたまった椀形鍛冶滓や鉄塊の下に、このような工具を差し込んだり突き動かしたりしたと思われる。291・292 は断面方形の棒状の工具と思われる。293 はカギ状に曲がった工具で、292 もカギ状に曲がっていたものが欠損したのかもしれない。295 は手前側が広くなり、穴があいている。296 は断面方形で、先端部付近で小さく屈曲し、細くなっている。297・298 は板状の鉄製品である。299（図版 42）は図奥側が穴があけられた板状になっており、手前側はこれに対してねじれた方向に厚み方向をもち、先端に向かうにつれて薄くなっている。図奥側が欠損していると考えるなら、鉄鋏の鋏部になるかもしれない。

300・301 は火箸状の鉄製品である。断面は円形で、直径は 1.1 cm 前後である。302・303 は断面方形のくさび状鉄製品で、先端は尖る。304～306 は細長い棒状の鉄製品である。304 は図奥側が板状で薄く、図手前側ほど厚くなる。305 は図手前側が細くなる。

307～312 は用途不明の鉄製品である。307 は 2 つの鉄製品が錆着しているようである。308 は板状の鉄がねじ曲げられている。309 は板状の鉄製品で、中央に穴があいている。310・311 は丸くカギ状に曲がり、先端が尖っている鉄製品である



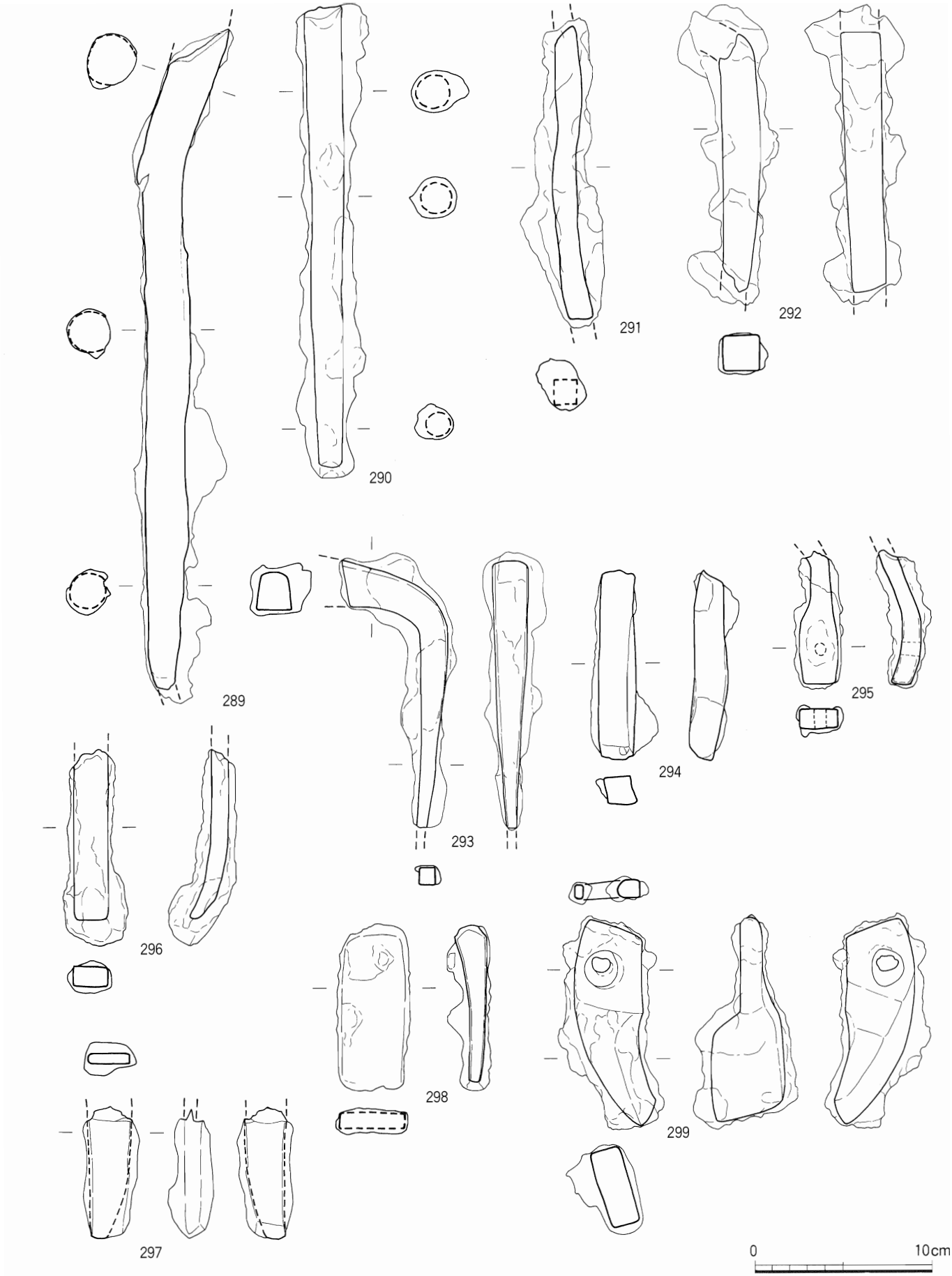
第150図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（43）（S＝ 1/ 4 ）

313～323 は釘類で、319 は分析資料（SIS－53）である。

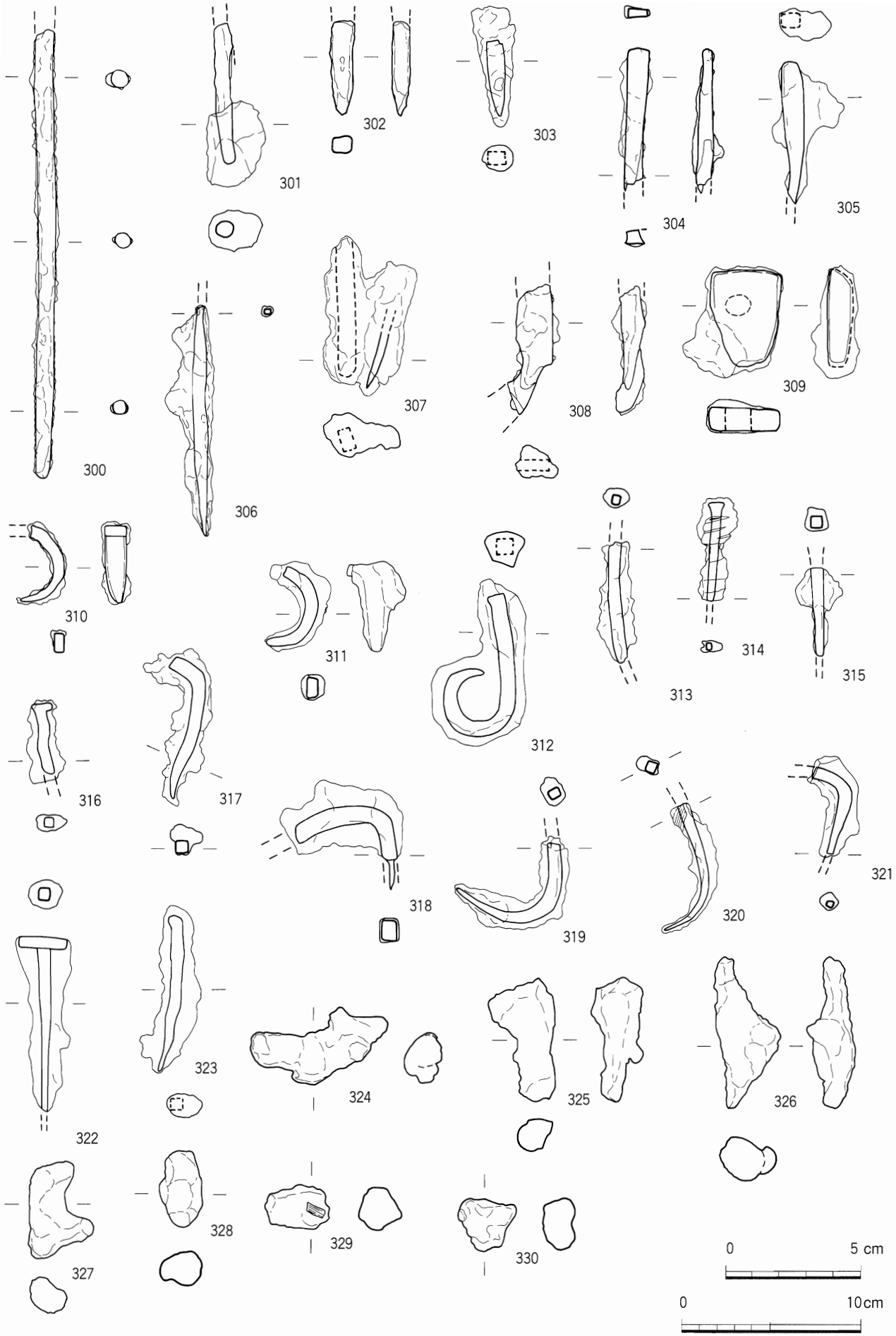
鉄塊類（鉄製品類似）　324～330 は鉄製品類似の鉄塊類である。326 はメタル度特 L（☆）で鉄部がしっかり遺存しているが、他はメタル度が弱く、鉄部がはっきり分からないことから含鉄鉄滓の可能性もある。

南区 1 トレンチ出土遺物（第 153・154 図）

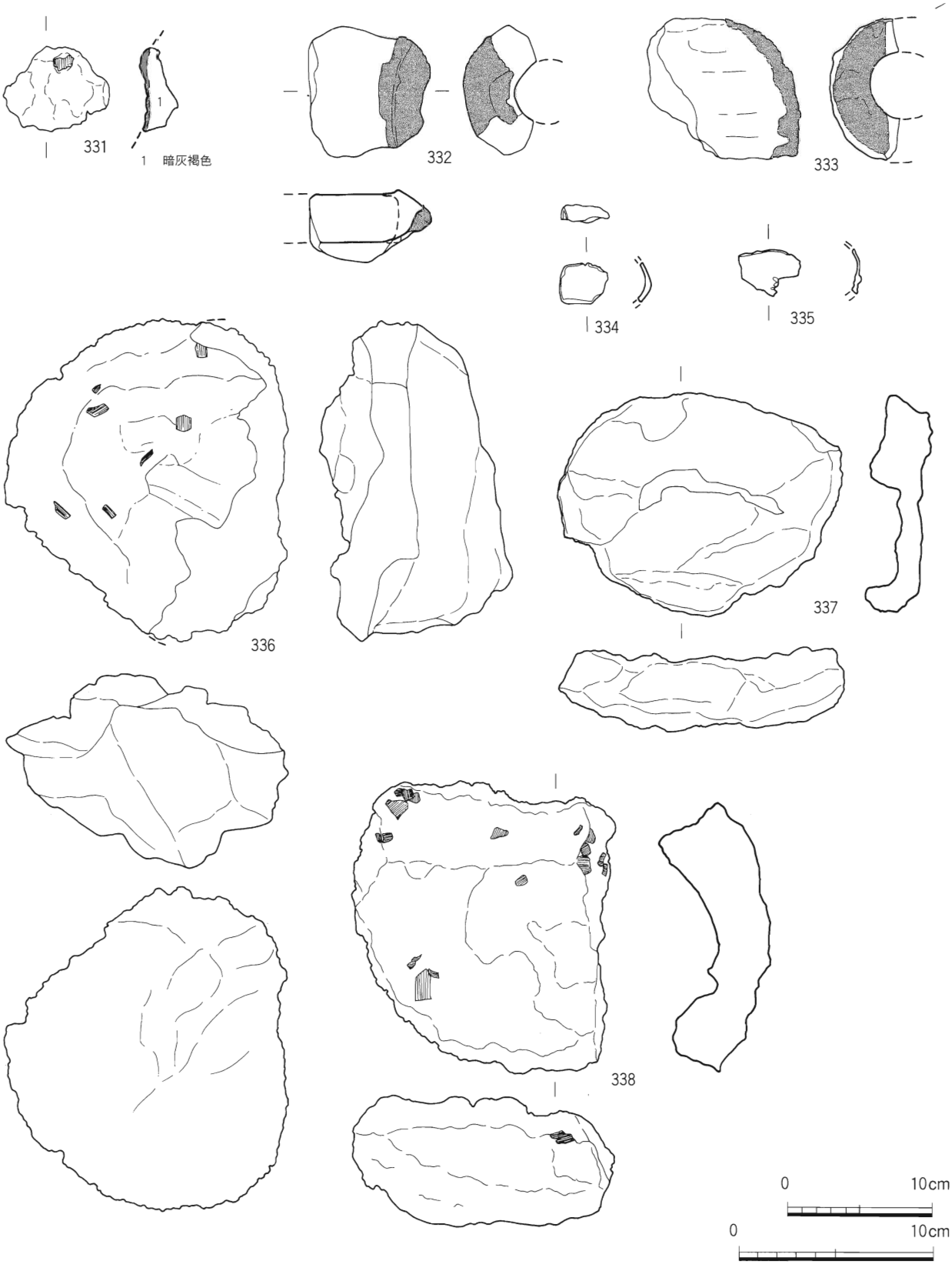
331 は火窪内側の炉壁片で内面は滓化しており、胎土には粉炭を含む。332・333 は羽口先端部の破片である。333 は先端部が斜めに溶損している。334・335 は工具付着滓で、ともに丸棒状の工具に付着したものである。335 は分析資料である（SIS－54）。336～340 は椀形鍛冶滓である。336 の上面には長方形の工具痕が穴があいたようについている（図版 39）。341～345 は含鉄鍛冶滓で、341・342 がメタル度 M（◎）、343・344 はメタル度 L（●）、345 はメタル度特 L（☆）である。



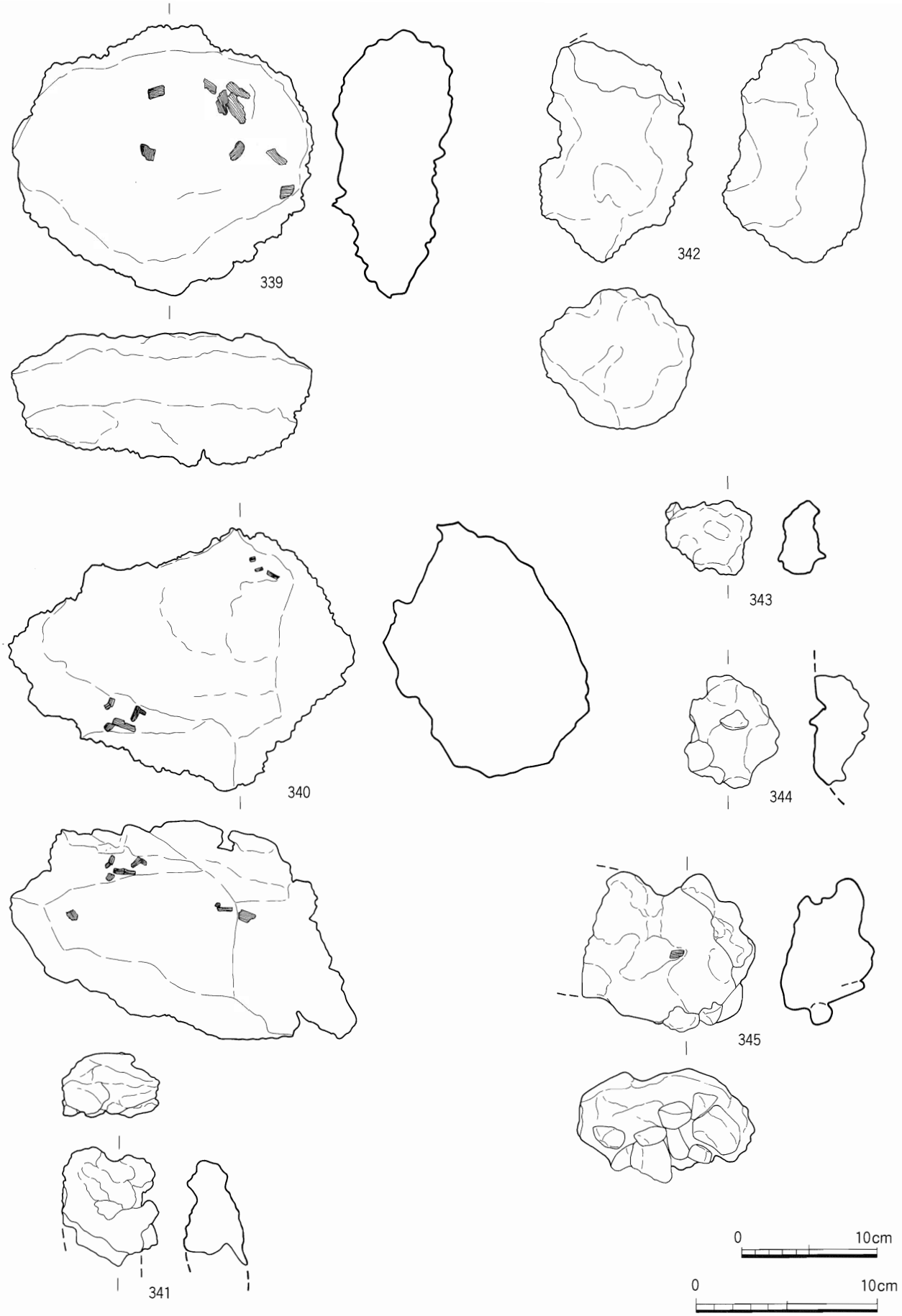
第151図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（44）（S＝ 1/ 3 ）



第152図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（45）
（300～311・324～330　S＝ 1/3、312～323　S＝ 1/2）



第153図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（46）
（331・336～338　S＝ 1/4、332～335　S＝ 1/3）



第154図　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物実測図（47）
（339～342　S＝ 1/4、343～345　S＝ 1/3）

第28表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（1）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
108		1	炉壁		1号鍛冶炉	6.8	9.5	3.0	140.0	2	なし	鍛冶炉から切り取った炉壁。炭はあまり含まない。	1
108		2	炉壁（鍛冶）		1号鍛冶炉	9.6	10.5	3.5	280.0	3	なし	胎土に炭粉含む。断面中央に滓化面が見られる。	
108		3	炉壁		1号鍛冶炉	19.3	11.3	3.9	520.0	3	なし	胎土中に長さ 1 cm 以下の木炭、礫を含む。	2
108		4	鍛冶滓		1号鍛冶炉	5.9	6.2	5.2	290.0	2	なし	上面以外は（あるいは上面も）全面破面のようである。滓質はきわめて緻密で密度が高い。椀形鍛冶滓の周囲が欠損したものか。	
108		5	椀形鍛冶滓		1号鍛冶炉	8.6	13.2	6.3	490.0	3	なし	破面には木炭痕がみられる。	
108		6	椀形鍛冶滓		1号鍛冶炉	13.8	19.0	11.4	710.0	2	△	鍛冶炉の原位置で出土。木炭痕目立つ。	3
108		7	含鉄鉄滓（含鉄銹化）		1号鍛冶炉	5.1	2.7	3.0	41.0	3	△	緻密な滓。	
108		8	含鉄鉄滓（含鉄銹化）		1号鍛冶炉	4.5	2.8	2.2	22.0	3	△	酸化土砂の付着著しい。	
108		9	含鉄鉄滓		1号鍛冶炉	4.8	3.8	2.6	48.0	3	H（○）	酸化土砂の付着著しい。	
108		10	含鉄鉄滓		1号鍛冶炉	7.9	4.8	4.2	75.0	6	H（○）	全面に木炭痕見られる。	
108		11	含鉄鉄滓		1号鍛冶炉	3.7	3.2	2.1	27.4	3	L（●）	酸化土砂の付着著しい。	
108	35	12	鉄器（箸摺止め金）		1号鍛冶炉	18.6	17.5	10.0	200.0	7	特L（☆）	鍛冶炉の原位置で出土。断面長方形。	4
109		14	炉壁鍛冶		2号鍛冶炉（新）	8.1	9.7	4.8	224.0	1	なし	胎土には 5 mm 以下の石英粒などを含む。炭粉はわずかに含む程度。	
109		15	羽口		2号鍛冶炉（新）	4.4	6.5	3.4	73.0	3	なし	外面は滓化が進み、内面には顆粒状に滓が付着している。	
109		16	羽口		2号鍛冶炉（新）	5.5	5.2	2.8	45.0	3	なし	胎土には長さ 6 mm 以下の木炭をまばらに、φ2 mm の長石粒を多く含む。下面は滓化している。	
109		17	羽口		2号鍛冶炉（新）	2.8	4.6	2.6	25.0	1	なし	2 mm 以下の砂粒、2 mm 以上の粉炭含む。先端付近の破片と思われ、右破面は黒色である。	
109		18	鍛冶滓（流動滓）		2号鍛冶炉（新）	8.4	5.3	2.3	160.2	1	なし	下面、緩やかな弧状。	5
109		19	鍛冶滓（流動滓）		2号鍛冶炉（新）	6.0	10.1	1.4	126.2	2	なし	緻密な流動状の鍛冶滓。下面はゆるやかなカーブをもつ。	
109		20	椀形鍛冶滓		2号鍛冶炉（新）	9.5	11.1	7.3	960.0	3	△	やや小ぶりの椀形鍛冶滓。長さ 3 cm くらいの大きな気泡も入るが全体として緻密な滓である。	
109		21	椀形鍛冶滓		2号鍛冶炉（新）	15.6	18.0	10.5	3500.0	2	なし	中形の椀形鍛冶滓の 1／2 くらいが残存。滓上部には約 5 mm 木炭痕が多く見られる。下部は緻密である。	
109		22	椀形鍛冶滓		2号鍛冶炉（新）	22.7	15.1	13.2	5400.0	3	△	中形の椀形鍛冶滓。外面はイガイガしているが内面はかなり緻密である。木炭痕少しみられる。	
109		23	椀形鍛冶滓（含鉄）		2号鍛冶炉（新）	14.2	9.2	7.9	1070.0	3	H（○）	右側の芯部に鉄部をもつ。	
110		24	椀形鍛冶滓（含鉄）		2号鍛冶炉（新）	11.3	15.5	12.4	1800.0	3	H（○）	上面の左側の肩部に木炭痕がみられる。	
110		25	椀形鍛冶滓（含鉄）		2号鍛冶炉（新）	17.2	21.0	9.8	2000.0	2	H（○）	全体に長さ 2 cm くらいの大粒の木炭痕が多くみられ、滓の密度は低い。下面は緩やかな椀形になっている。	
110		26	椀形鍛冶滓（含鉄）		2号鍛冶炉（新）	13.7	10.6	8.8	1121.0	6	特L（☆）	右側の芯部に鉄部をもつ。	6
111		29	椀形鍛冶滓（含鉄銹化）		2号鍛冶炉掘り方	9.1	11.5	5.4	470.0	4	△	下面は丸みをもつ。	
111		30	椀形鍛冶滓（含鉄銹化）		2号鍛冶炉掘り方	15.5	9.5	9.9	1060.0	4	△	中形の椀形鍛冶滓の破片と考えられる。破面には滓の中～下部は大粒の木炭痕が多くみられるが、上部は木炭痕あまりみられず、やや緻密質になる。	

第29表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（2）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
111		31	羽口		2 号鍛冶炉地下構造	10.5	10.8	8.9	310.0	1	なし	羽口先端部の炉壁片。炉内側は強く溶けて滓化し、黒褐色から暗紫色をしている。羽口先端の孔径は 3 cm くらいでないかと思われる。	
111		32	鍛冶滓（流動滓）		2 号鍛冶炉地下構造	7.0	11.0	2.0	196.4	2	なし	緻密質で流動状の鍛冶滓。外面は光沢がある。	
111		33	鍛冶滓（流動滓）		2 号鍛冶炉地下構造	5.9	9.9	3.9	237.9	2	なし	上面は流動状になっている。滓の質は緻密で、光沢がある。	
111	39	34	鍛冶滓（流動滓）		2 号鍛冶炉地下構造	11.4	12.2	5.2	832.80	3	なし	複数の流動単位が重層。	7
111		35	椀形鍛冶滓（中）		2 号鍛冶炉地下構造	22.8	17.2	10.6	3600.0	2	なし	ほぼ完形。平面、長楕円形。上面に断面、方形の工具痕。	
111		36	椀形鍛冶滓（中）		2 号鍛冶炉地下構造	15.2	22.4	11.5	2100.0	2	なし	平面形は半月形で、縦断面形は「フ」の字形をしている。ほぼ完形。表面は赤紫色。破面には 1 cm 以下の木炭痕がまばらに見られる。	
112		37	椀形鍛冶滓（大）		2 号鍛冶炉地下構造	30.4	23.8	12.4	8800.0	1	なし	ほぼ完形。大きな木炭痕入る。ごつごつした印象をうける。	
112	37	38	椀形鍛冶滓（大）		2 号鍛冶炉地下構造	34.8	25.5	14.3	9600.0	2	△	ほぼ完形。平面は楕円形。各面には木炭痕みられる。ややごつごつした印象をうける。	
112		39	椀形鍛冶滓（大）		2 号鍛冶炉地下構造	39.5	32.4	17.5	13600.0	1	なし	平面、不整楕円形。下面、二重椀形鍛冶滓のような突出。	
113		40	椀形鍛冶滓（大）		2 号鍛冶炉地下構造	36.7	25.0	19.1	14200.0	4	なし	平面、長楕円形。木炭痕は表面（生きている面）ではあまり見られないが、破面では 1.5 cm くらいのものが見られる。	
113		41	椀形鍛冶滓（大）		2 号鍛冶炉地下構造	44.0	28.2	14.5	12600.0	4	△	平面、不整長方形。ほぼ完形。上面には長さ 1.5 cm くらいの木炭痕よく見られる。少しイガイガした印象うける。	
113		42	椀形鍛冶滓（大）		2 号鍛冶炉地下構造	46.5	25.8	19.0	16000.0	1	なし	平面、長楕円形の大形の椀形鍛冶滓。ほぼ完形。各面には大粒の木炭痕多く見られ、ややごつごつした印象をうける。	
113		43	椀形鍛冶滓（含鉄）		2 号鍛冶炉地下構造	14.4	11.0	10.0	2300.0	5	L（●）	平面、不整方形で、やや小形。破面には小さな木炭痕が少し見られる。	
114		44	鉄床石		鉄床 1	62.1	39.6	27.1		―	なし	上面に長さ 22 cm 前後の小判形のくぼみがあり、この周辺は光沢あり。被熱のため赤く変色、鉄滓が部分的に付着している。。	
114		45	椀形鍛冶滓		ピット内	14.6	13.0	7.7	903.4	4	なし	中～小形の椀形鍛冶滓。木炭痕多く含む。	
114		46	再結合滓		SK 01	42.1	25.8	18.1	15100.0	1	△	木炭、滓分を多く含む土砂が固結したものか。粒状滓、鍛造剥片もかなり含むようである。	
114		47	含鉄鉄滓		SD 01	8.0	6.3	3.55	160.0	8	L（●）	丸餅もち状の含鉄鉄滓。酸化土砂の付着目立つ。	
114		48	含鉄鉄滓		SD 01	3.5	3.4	2.7	52.0	5	L（●）	平面、隅円台形の含鉄鉄滓。	
114		49	椀形鍛冶滓（含鉄）		工期作業面	13.4	14.1	10.5	1830.0	5	L（●）	平面、半円形。左半分は欠損している。中形よりもやや小さめ。表面に放射状の割れがみられる。	
115		50	炉壁（鍛冶炉遺存）		3 号鍛冶炉	27.9	17.0	5.6	1620.0	3	なし	内面　滓化。胎土には粉炭多く含む。	8
115		51	炉壁（鍛冶覆土）		3 号鍛冶炉	9.4	11.1	3.8	230.0	2	なし	内面うすく滓化している。胎土には 5 mm～1 cm 大の木炭がふくまれていたが、焼けた痕跡のみ残る。	
115		52	炉壁（鍛冶覆土）		3 号鍛冶炉	17.5	17.9	6.7	1330.0	3	なし	内面、滓化。炉壁下部では滓化層が二重になっている。胎土には 1 cm以下の木炭痕が観察されるほか、スサの痕跡もあるよう。	
115	35	53	羽口		3 号鍛冶炉	19.6	8.5	7.9	980.0	7	なし	鍛冶炉の原位置に遺存。先端部下半がえぐれるように溶損。	9
115		54	炉床再結合滓		3 号鍛冶炉	17.8	8.5	4.7	425.0	5	H（○）	上面以外（あるいは上面も含めて）全て破面。木炭・滓分・土砂などが、再結合したと思われる。	
115		55	炉床再結合滓（含鉄）		3 号鍛冶炉	11.7	8.7	4.1	260.0	5	△	炉床で粉炭や粒状滓が再結合したものか。	10

第30表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（3）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
115		56	鍛冶滓		3号鍛冶炉	13.3	10.0	4.5	400.0	4	なし	平面、長楕円形の小形の椀形鍛冶滓。長さ 2 cm 以下の大粒の木炭粒顕者にみとめられ、いがいがした印象をうける。	
115		57	鍛冶滓（含鉄）		3号鍛冶炉	1.3	6.0	6.1	142.0	4	H（○）	炉壁もしくは炉床の破片とそれに付着した鍛冶滓。	
115		58	鍛冶滓（含鉄）		3号鍛冶炉	6.3	3.4	2.4	50.0	9	M（◎）	木炭痕はみられない。緻密質の滓。	
115		59	鍛冶滓（含鉄）		3号鍛冶炉	14.1	14.2	4.3	790.0	3	M（◎）	椀形鍛冶滓の破片か。上面は比較的なめらかで、滓質はかなり緻密。下面には 2 cm 以下の木炭痕が多くみられる。	
115	35	60	鉄器（箸摺止め釘）		3号鍛冶炉	15.7	4.3	2.1	310.0	8	特L（☆）	鍛冶炉原位置に遺存。上半部に穴があく。	11
117		62	炉壁		4号鍛冶炉(転用)	5.8	6.5	5.3	120.0	2	なし	地下構造の鉄滓の間につめた粘土塊である。全面破面。きめこまかな土を用い、胎土中に長さ 5 mm くらいの木炭を少し含む。	
117		63	椀形鍛冶滓（中）		4号鍛冶炉(転用)	18.3	15.3	8.5	1920.0	3	なし	中形かやや小ぶり。完形に近い。長 2 cm 以下の大粒の木炭痕多くみられる。表面はごつごつしている。	
117		64	椀形鍛冶滓（中）		4号鍛冶炉(転用)	22.8	18.6	8.7	3000.0	3	H（○）	中形かやや小ぶり。ほぼ完形。長さ 2 cm 以下の木炭痕多くみられる。ややいがいがした印象をうける。	
117		65	椀形鍛冶滓（中）		4号鍛冶炉(転用)	11.1	16.3	6.4	1450.0	3	なし	平面、横長の楕円形。中形かやや小ぶりの大きさ。	
117		66	椀形鍛冶滓（中）		4号鍛冶炉(転用)	23.5	16.3	9.7	3700.0	6	なし	上面に断面半円形の工具痕のようなくぼみがみられる。	
117		67	椀形鍛冶滓（大）		4号鍛冶炉(転用)	28.9	19.2	13.5	4900.0	2	なし	平面、不整三角形。下面に 3 カ所の丸棒状の工具痕流入滓部。	
117		68	椀形鍛冶滓（大）		4号鍛冶炉(転用)	27.4	22.9	13.6	5000.0	5	なし	木炭痕顕著に見られる。	
118		69	椀形鍛冶滓（大）		4号鍛冶炉(転用)	32.8	19.4	19.2	8000.0	2	なし	木炭痕顕著に見られる。	
118		70	椀形鍛冶滓（大）		4号鍛冶炉(転用)	42.9	25.2	11.4	9000.0	4	なし	平面、長楕円形。下面はゆるやかな椀形。上・下面とも木炭痕が観察される。	
118		71	椀形鍛冶滓（大）		4号鍛冶炉(転用)	26.8	21.0	24.0	9000.0	6	H	大部分が欠損するが、かなりの厚みをもつ。二次被熱をうけている。	
118		72	鉄器		4号鍛冶炉(転用)	7.9	1.7	0.7	111.2	5	L（●）	酸化土砂の付着著しい。鉄板を曲げてつくられた「9」の字形の鉄製品。	
119		73	椀形鍛冶滓（二次被熱）		4号鍛冶炉(覆土中)	14.8	9.6	8.9	1100.0	7	M（◎）	上面は二次的な被熱で赤紫色に変化。粘土が付着。破面に木炭痕顕著にみられ、密度はあまり高くない。	
119		74	椀形鍛冶滓（二次被熱）		4号鍛冶炉(覆土中)	17.6	19.8	9.8	4200.0	5	L（●）	右側が欠損。中形の大きさ。上面はやや流動状になっている。下面に丸棒状の工具痕流入滓部みられる。	
119		75	椀形鍛冶滓（二次被熱）		4号鍛冶炉(覆土中)	25.4	22.9	10.7	4000.0	4	なし	全体として 2 cm 以上の大粒の木炭痕顕著にみられる。いがいがした印象をうける。	
119		76	椀形鍛冶滓（大）		4号鍛冶炉(覆土中)	22.5	21.0	20.1	9500.0	2	なし	側面は、全面破面。下面には工具痕に流入した滓部がみとめられる。下面は深い椀形で厚みは大きい。滓質は緻密である。	
120		77	椀形鍛冶滓（大）		4号鍛冶炉(覆土中)	37.6	26.8	15.9	15500.0	5	L（●）	左側部を欠くが、平面、長楕円形の椀形鍛冶滓。木炭痕上面に少しみられる。滓質は緻密である。	
120		78	椀形鍛冶滓（含鉄）		4号鍛冶炉(覆土中)	12.7	19.6	10.0	2500.0	7	特L（☆）	右側面はとぎれたような面をもつ。上面・中核部に鉄部。	13
120		79	銑鉄		4号鍛冶炉(覆土中)	14.2	3.8	2.5	107.6	7	特L（☆）	細長い棒状の銑鉄塊。	
120		80	再結合滓		4号鍛冶炉(覆土中)	23.5	20.4	7.6	2040.0	4	なし	長さ 1 cm 以下の木炭を多く含む。表面に丸みのある鉄滓や粒状滓も少し入りこむ。炉床再結合滓と似ている。	
121		82	再結合滓		鉄床2	10.15	10.05	4.3	365.3	4	△	鉄床石周辺で粒状滓・鍛造剥片が再結合。	14
121		83	含鉄鉄滓		鉄床2	7.0	7.1	6.1	349.1	5	L（●）	上面、酸化土砂が厚く固着し、下部に鉄部がある。銑鉄塊かもしれない。	

第31表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（4）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
121	36	84	鉄床石		鉄床 2	31.5	25.9	13.4	15500.0	2	なし	上面に小判形にくぼんだ再結合滓が付着。	
121		85	鉄床石付着鉄塊	イ．0.5	鉄床 2 関連か？	16.7	8.4	5.1	1320.0	8	特L（☆）	形状から鉄床石。	15
121		86	炉壁（鍛冶）		SD 02	11.5	10.3	3.9	280.0	3	なし	胎土には 5 mm 以下の木炭や、2 cm 以下の礫、砂粒が含まれる。	
121		87	椀形鍛冶滓（中）		SD 02	10.3	15.8	7.8	820.0	2	なし	平面、不整半円形でやや小形。完形に近い。下面に丸棒状の工具痕流入滓部。また上面にも幅約 4 cm の丸棒状の工具痕と思われるくぼみが 1 ヶ所みられる。	
121	37	88	椀形鍛冶滓（中）		SD 02	18.1	23.1	11.4	3500.0	2	なし	平面、半円形の椀形鍛冶滓。下面には長さ 2 ～ 4 cm の小枝状の木炭痕がみられる。	
122		89	椀形鍛冶滓（大）		SD 02	26.2	19.3	12.5	4600.0	2	△	平面、不整五角形。上面右肩部に木炭痕顕著に見られる。下面には丸棒状の工具痕流入滓部が 1 ヶ所。	
122		90	椀形鍛冶滓（大）		SD 02	27.3	18.5	17.1	7700.0	4	なし	下面には丸棒状の工具痕流入滓部が 5 ヶ所以上。また、図面手前側面には断面板状もしくは方形の工具痕。	
122		91	椀形鍛冶滓（大）		SD 02	31.8	24.6	15.7	9000.0	3	なし	平面、不整長方形。上面には木炭痕顕著に見られる。下面には、工具痕流入滓部がみとめられる。	
122		92	含鉄鉄滓		SD 02	11.6	8.8	8.6	930.0	7	L（●）	平面、隅円の長方形で下面に丸みをもち、図左側には他の鉄滓が再結合。	
122		93	含鉄鉄滓		SD 02	5.0	7.2	4.1	230.0	7	L（●）	1 cm 前後の木炭多く含む。銹化のため放射状の割れが入る。	
122		94	含鉄鉄滓		SD 02	4.0	4.7	2.7	55.0	4	L（●）	平面、不整五角形の含鉄鉄滓。外見はややいがいがしている。	
122		95	含鉄鉄滓		SD 02	4.1	2.9	2.7	45.0	6	L（●）	平面、長楕円形の含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物。外面がはがれるように割れている。	
123		96	含鉄鉄滓		SD 02	11.7	8.6	5.9	487.4	6	特L（☆）	滓の上部は 1 cm 以下の木炭や木炭痕がみとめられる。下部は丸みを持った鉄部がみられる。銹化により放射状の割れが顕著。	
123		97	含鉄鉄滓		SD 02	9.8	7.0	3.9	230.7	8	特L（☆）	外面、酸化土砂が付着。銑鉄塊のようにも思える。	
123		98	含鉄鉄滓		SD 02	5.2	3.8	3.6	83.3	5	特L（☆）	平面、不整五角形。鉄塊系遺物かもしれない。表面には酸化土砂が付着している。	
123	41	100	銑鉄塊		SK 03	16.4	11.4	9.3	2500.0	6	特L（☆）	下面、椀形になる。湯だまりに流された銑鉄塊か。	16
124		101	炉床再結合滓		5 号鍛冶炉	8.3	10.9	3.7	191.0	5	H（○）	木炭を多く含む	
124		102	炉床再結合滓		5 号鍛冶炉	12.2	12.9	5.9	660.0	5	H（○）	土っぽく木炭多く含む。粒状滓も少しみられる。	
124		103	炉床再結合滓		5 号鍛冶炉	10.6	15.4	7.0	790.0	6	なし	土っぽく木炭多く含む。	
124		104	炉床再結合滓		5 号鍛冶炉	17.7	30.5	10.8	4500.0	5	なし	土っぽく木炭多く含む。	
124		105	含鉄鉄滓		5 号鍛冶炉	3.5	2.25	2.0	14.0	4	M（◎）	椀形鍛冶滓などから遊離したものか。	
124		106	含鉄鉄滓		5 号鍛冶炉	7.75	5.05	4.0	127.2	5	L（●）	外面には木炭痕が観察される。	
124		108	炉壁（鍛冶炉）		6 号鍛冶炉	2.9	2.9	1.5	3.0	1	なし	炭粉を胎土中に含む。	
124		109	鍛冶滓		6 号鍛冶炉	5.3	7.0	3.5	85.0	2	なし	5 mm くらいの木炭痕まばらにみえる。	
124		110	鍛冶滓		6 号鍛冶炉	4.9	5.3	2.5	15.0	2	なし	1 cm くらいの木炭痕みられる。表面はごつごつして凹凸が大きい。	
124		111	鍛冶滓		6 号鍛冶炉	13.5	14.7	6.8	730.0	4	なし	平面、不整台形の小～中形の椀形鍛冶滓で、左半分は欠損。破面には長さ 1.5 cm 以下の木炭痕がみられる。	

第32表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（5）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
124		112	鍛冶滓（含鉄銹化）		6 号鍛冶炉	4.2	4.2		67.0	5	△	1 cm 以下の木炭痕みられる。	
124		113	鍛冶滓（含鉄）		6 号鍛冶炉	2.6	2.0	1.4	10.0	4	H（○）	豆粒状の含鉄鉄滓。	
124		115	炉壁		SK 04	10.8	7.5	3.0	170.0	1	なし	内面滓化。胎土に木炭痕見られる。	
125		116	炉壁		7 号鍛冶炉（新）	5.0	4.7	2.8	39.0	2	なし	4 mm 以下の砂礫まばらに含むが、胎土は緻密で粉炭は含まない。	
125		117	炉壁		7 号鍛冶炉（新）	10.2	12.4	2.9	209.8	2	なし	鍛冶炉から切り取ったもの。内面滓化し、粉炭含む。	17
125	35	118	羽口		7 号鍛冶炉（新）	26.1	11.7	9.3	1596.7	3	なし	鍛冶炉原位置に遺存。先端部斜めに溶損。	18
125		119	鍛冶滓		7 号鍛冶炉（新）	5.5	5.0	2.3	50.0	2	なし	平面、不整台形。長さ 1 cm 以下の木炭痕わずかに見られる。	
125		120	鍛冶滓		7 号鍛冶炉（新）	8.0	4.6	3.0	113.0	4	H（○）	下面、樋状になり、粒状滓のようなもの付着。	19
125		121	鍛冶滓		7 号鍛冶炉（新）	7.5	5.2	3.9	151.0	5	なし	7 号炉内に残存。緻密質な鍛冶滓。	
125		122	鉄器（炉遺存：板状）		7 号鍛冶炉（新）	7.8	6.8	3.0	79.7	4	(△)	鍛冶炉の原位置に遺存。ベンガラ色に酸化。	20
125		124	炉壁（地貼り）		7 号鍛冶炉（古）	8.3	6.0	4.9	140.0	2	なし	鍛冶炉から切り取ったもの。粉炭ほとんど含まない。	23
125		125	炉壁		7 号鍛冶炉（古）	7.4	6.8	4.4	152.0	2	なし	胎土 2 mm 以下の砂粒含む緻密な粘土。(No 138 と同じ)	
126		127	炉壁（鍛冶）		8 号鍛冶炉	5.0	5.0	3.0	75.0	2	なし	鍛冶炉から切り取ったもの。粉炭多く含む。	24
126		128	炉壁		8 号鍛冶炉	4.8	7.6	3.5	51.0	3	なし	表面以外全て破面。胎土には 5 mm 前後の炭粉を多量に含む。	
126		129	羽口		8 号鍛冶炉	12.7	9.5	2.3	300.0	1	なし	胎土はかなり緻密な粘土で、0.3 mm 以下の石英、長石を少し含む。4 mm×2.5 mm の木炭がまばらに入る。	25
126		130	鍛冶滓（含鉄鉄化）		8 号鍛冶炉	6.1	11.75	3.4	180.0	5	△	椀形鍛冶滓の端部から遊離したものか。	26
126		131	鍛冶滓		8 号鍛冶炉	9.5	9.7	3.0	200.0	3	△	上部は、黒褐色で土っぽく木炭を含み、いわゆる炉床再結合滓によく似る。下部は暗褐色の鉄滓で厚さは薄い。	
126		132	含鉄鉄滓		8 号鍛冶炉	4.1	3.7	3.2	49.0	9	M（◎）	球状の含鉄鉄滓。銹化のためか放射状の割れが入る	
126	35	134	鉄器（かすがい）		8 号鍛冶炉（古）	20.5	8.5	1.4	680.1	3	L（●）	8 号鍛冶炉 3 段階の炉壁に埋め込まれていた。外面には炭まじりの炉壁土と錆が厚く固着している。	
126		135	再結合滓（含鉄）		SX 02	14.2	7.7	3.3	319.1	4	L（●）	破面中には木炭、鉄滓片など見られ、少量だが粒状滓も入る。	
126		136	再結合滓（含鉄）		SX 02	11.0	8.2	3.5	258.6	4	L（●）	破面中には木炭、鉄滓片など見られる。	
127		137	椀形鍛冶滓		SK 05	7.6	6.0	5.0	211.4	5	L（●）	小形の長楕円形をした椀形鍛冶滓。鉄部は上面に特に存在するようである。	
127		138	鉄器		SK 05	4.4	1.35	8.5	20.0	4	M（◎）	銹化が著い。断面長方形、下端部が丸みもつくさび状の鉄器。	
127		139	羽口		SB 02 柱穴内	12.7	13.0	11.0	790.0	3	なし	先端部はななめに溶損。口径 3.9 cm、外径 8.3 cm。胎土は 2 mm 以下の砂粒含むがきめこまかな粘土用いている。	
127		140	椀形鍛冶滓（中）		SB 02 柱穴内	15.1	16.7	7.2	1620.0	9	M（◎）	平面、横長の楕円形で、やや小ぶり。完形。下面緩やかな椀形。	
127		141	椀形鍛冶滓（中）		SB 02 柱穴内	17.2	23.4	14.7	4100.0	6	M（◎）	平面、半円形。右側面は直線的に立ち上がる。	
127		142	椀形鍛冶滓（大）		SB 02 柱穴内	31.9	22.7	10.9	5100.0	2	なし	図の左側面はまっすぐに立ち上がるような面を持つ。上面の左側で段ができているが、割れの可能性高い。上面の破面では大粒木炭痕が顕著にみられる。下面は浅い椀形。	
128		143	含鉄鉄滓		SB 02 柱穴内	4.5	3.2	2.0	44.3	8	L（●）	平面、不整台形。	

第33表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（6）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
128		144	含鉄鉄滓		SB 02 柱穴内	4.0	3.5	2.9	57.1	8	L（●）	酸化土砂の付着著しい。大きさのわりに磁着度は強いようである。	
128		145	含鉄鉄滓		SB 02 柱穴内	6.5	3.7	3.1	82.7	7	L（●）	酸化土砂の付着著しく詳細不明。	
128		146	含鉄鉄滓		SB 02 柱穴内	6.0	3.0	1.8	47.7	6	特L（☆）	酸化土砂・錆の付着著しい。小ぶりなわりにメタル度高く、鉄塊系遺物とすべきかもしれない。	
128		147	含鉄鉄滓		SB 02 柱穴内	8.1	5.0	4.1	123.2	9	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。上面に大きな鉄部があるようである。	
128		148	含鉄鉄滓		SB 02 柱穴内	7.5	5.0	3.7	145.0	9	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。鉄塊系遺物に酸化土砂が厚く固着したものか。小割鉄のようにも思える。	
128		149	含鉄鉄滓		SB 02 柱穴内	6.1	5.0	3.9	186.7	9	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。図左側の下面に鉄部は集中する。	
128		150	再結合滓		SB 02 柱穴内	18.3	21.3	10.7	5200.0	3	なし	上面除いて（もしくは上面も含め）全て破面。上面の中央がくぼんでいる。土砂を主体とし、炭粉、鉄滓、粒状滓などが固結しているよう。	
129		151	炉壁		水場遺構（転用品等）	7.1	8.4	2.3	115.0	2	なし	内面、滓化。胎土は 5 mm 以下の礫を多く含む。木炭はあまり含まない。	
129		152	炉壁		水場遺構（転用品等）	17.9	11.0	4.5	567.5	6	L（●）	内面、滓化。上部に平坦な面を持つ。	
129		153	鍛冶滓（流動滓）		水場遺構（転用品等）	7.1	14.8	4.1	405.0	3	なし	流動状の鍛冶滓。外面は光沢あり、滓質はかなり緻密である。	
129		154	椀形鍛冶滓（中～大）		水場遺構（転用品等）	18.0	17.7	9.9	3000.0	4	なし	平面、不整楕円形。滓質は破面を見るかぎり緻密質である。下面の数ヶ所に丸棒状の工具痕流入滓部。	
129		155	椀形鍛冶滓（中～大）		水場遺構（転用品等）	23.9	22.2	13.7	5600.0	8	M（◎）	平面、隅丸の三角形。左側面は直線的に立ち上がる。下面に工具痕流入滓部。	
130	38	156	椀形鍛冶滓（中～大）		水場遺構（転用品等）	25.5	19.8	17.0	7500.0	2	なし	平面、長楕円形。完形。右側面、急角度に立ち上がる。下面には幅 4 ～4.5 cm くらいの丸棒状の工具痕流入滓部。	
130		157	椀形鍛冶滓（含鉄）		水場遺構（転用品等）	20.5	20.6	15.6	5150.0	3	特L（☆）	大形の椀形鍛冶滓の欠損品と思われる。上面に鉄部が特に集中するようである。	
130		158	再結合滓（含鉄）		水場遺構（転用品等）	18.2	15.1	7.3	1400.0	8	H（○）	粒状滓・滓片・粉炭などが層状に再結合。	29
130		159	再結合滓		水場遺構（転用品等）	14.2	8.6	8.5	750.0	9	H（○）	丸太状の材の痕跡残す。木炭・滓片・土砂からなる。	
130		160	再結合滓		水場遺構（転用品等）	32.2	7.3	5.4	1420.0	5	H（○）	滓分や、粒状滓、鍛造剥片、木炭などが再結合。	
130		161	再結合滓		水場遺構（転用品等）	22.6	7.8	2.9	262.0	4	△	砂鉄のような鉄分や、木炭、滓分含む砂が水場の底面で再結合したもの。粒状滓もまばらに含まれる。上面に材の痕跡残る。	
131		162	再結合滓（含鉄）		水場遺構（転用品等）	27.5	23.1	14.8	6000.0	3	L（●）	鉄滓・鉄分のほか、礫や土砂、木炭などが再結合したと考えられる。	
131		163	鍛冶滓（含鉄）		水場遺構（転用品等）	4.2	3.8	3.2	55.0	4	L（●）	上面以外は全面破面。含鉄椀形鍛冶滓などの破片。	
131		164	鍛冶滓（含鉄）		水場遺構（転用品等）	3.7	2.3	2.3	30.0	6	L（●）	上面以外は全面破面。含鉄椀形鍛冶滓などの破片。	
131		165	鍛冶滓（含鉄）		水場遺構（転用品等）	2.9	3.0	1.5	20.0	5	L（●）	全面破面。椀形鍛冶滓などの破片。	
131		166	含鉄鉄滓		水場遺構（転用品等）	6.8	7.3	3.8	222.5	6	特L（☆）	表面には、長さ 5 mm くらいの木炭痕や木炭まばらに見られる。鉄分や滓分、木炭などが再結合したようにも見える。	
131		167	含鉄鉄滓		水場遺構（転用品等）	4.6	2.2	2.2	49.7	6	特L（☆）	上面以外、全て破面。含鉄の椀形鍛冶滓などの破片と思われる。	
132		168	椀形鍛冶滓（中）		水場遺構（覆土中）	19.9	19.2	8.2	3500.0	2	なし	下面浅い椀形をしている。左側に小さな破面みられるがほぼ完形。	
132		169	椀形鍛冶滓（含鉄）		水場遺構（覆土中）	15.2	17.5	12.6	3500.0	6	特L（☆）	平面、半円形。下面に石や再結合滓が癒着している。	
132		170	椀形鍛冶滓（含鉄）		水場遺構（覆土中）	7.0	9.5	6.9	623.9	5	特L（☆）	ほぼ全面破面。2 mm 以下の気孔がまばらにみられる。	

第34表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（7）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
132		171	再結合滓		水場遺構（覆土中）	23.2	15.6	8.4	2300.0	5	なし	木炭を多く含む部分と砂粒、滓分を中心とする部分が層状になっている。鍛造剥片、粒状滓も多く含まれている。	
133		172	椀形鍛冶滓（中）		石列（転用）	15.7	17.0	10.1	2500.0	5	なし	平面は不整半円形。完形。上面中央部には大きなくぼみがみられる。	
133		173	椀形鍛冶滓（中）		石列（転用）	21.1	17.5	11.5	3200.0	7	なし	手前半分は欠損。下面に丸棒状の工具痕流入滓部が 2 ヶ所。	
133		174	椀形鍛冶滓（含鉄）		石列（転用）	17.7	13.8	8.9	1660.0	6	H（○）	平面、不整五角形。	
133		175	椀形鍛冶滓（含鉄）		石列（転用）	11.8	16.8	7.7	1566.1	5	特L（☆）	平面、半円形。下面に断面方形、もしくは板状の工具痕。	
133		176	含鉄鉄滓		石列（転用）	9.9	5.5	4.5	190.3	5	特L（☆）	2 つの鉄塊系遺物もしくは含鉄鉄滓が銹着したものと思われる。両方とも外面は酸化土砂に覆われているが、凹凸少なくなめらかである。	
133		177	含鉄鉄滓		石列（転用）	6.4	3.9	3.7	78.0	5	L（●）	酸化土砂や錆の付着著しい。もとは平面形が長方形の含鉄鉄滓もしくは鉄塊系遺物と思われる。	
134		178	羽口		SD 04	10.3	11.7		380.0	2	なし	内径 3.5 cm、外径 7.3 cm。先端部に滓がつまっている。	
134		179	椀形鍛冶滓（中）		SD 04	13.8	14.3	7.2	1500.0	5	H（○）	右側面は波面。滓質は緻密である。	
134		180	椀形鍛冶滓（中）		SD 04	15.0	21.6	9.5	3000.0	4	なし	平面、ラグビーボール形の椀形鍛冶滓。下面の右側の側縁にそって 3 条の工具痕流入滓部がみとめられる。	
134		181	椀形鍛冶滓（大）		SD 04	27.8	29.9	13.9	8000.0	2	なし	平面、不整半円形。上面に木炭痕顕著に見られる。下面に工具痕流入滓部。	
135		182	椀形鍛冶滓（含鉄）		SD 04	6.0	8.4	5.5	187.3	7	L（●）	図左側の大半は欠損している。木炭や石が銹着している。	
135		183	椀形鍛冶滓		SD 04	11.3	12.8	7.4	985.1	6	特 2（☆）	滓は緻密で、やや流動状。上面に鉄部が見られるようである。	
136		185	含鉄鉄滓		金屋子石組遺構周辺	4.0	3.4	2.2	34.0	5	M（◎）	小さな気孔目立つ。	
136		186	鍛冶滓（含鉄）		金屋子石組遺構周辺	3.6	7.0	2.5	112.7	6	特L（☆）	小ぶりなわりには比重がある。鉄塊系遺物とすべきかもしれない。木炭痕が見られる。	
136	36	187	鉄塊		金屋子石組遺構周辺	14.5	16.7	9.7	3300.0	8	特L（☆）	左下鉄に相当する鉄塊か。	30
136	36	188	鉄塊		金屋子石組遺構周辺	19.7	9.5	2.7	470.0	6	特L（☆）	金屋子に供えられた初花と思われる銑鉄。数条の流動単位が重層。	
136		189	鉄塊		金屋子石組遺構周辺	11.5	3.2	1.6	134.2	7	特L（☆）	金屋子に供えられた初花と思われる銑鉄塊。	31
137		190	鉄器（ろうそく立て）		金屋子石組遺構周辺	7.1	4.8	4.5	137.1	7	特L（☆）	銑鉄製。立体部小さく。流動化弱い。	32
137		191	鉄器（ろうそく立て）		金屋子石組遺構周辺	9.6	11.2	6.3	340.0	6	特L（☆）	銑鉄製。立体部が放射状に広がって立ち上がる。中央の立体部は割れている。	
137	36	192	鉄器（ろうそく立て）		金屋子石組遺構周辺	10.2	11.4	15.5	1120.0	8	特L（☆）	銑鉄製。立体部は放射状に広がり、表面には木目のような格子状の凹凸が見られる。ロウが流れた痕跡あり。	
137		193	鉄器（薄板状）		金屋子石組遺構周辺	2.9	8.3	0.2	11.6	6	特L（☆）	薄板状の鉄片。上下面とも小さな凹凸ある。	
137		194	鉄器（厚板状）		金屋子石組遺構周辺	15.9	3.6	2.2	331.0	7	特L（☆）	庖丁鉄もしくは鉄製品の柄か？	33
137	37	195	鉄鑿（割鉄）		金屋子石組遺構周辺	13.5	5.9	2.6	780.0	8	特L（☆）	上下面はやや弧状に膨らんでいる。両短辺は斜めのやや鈍い面を持つが、破面のようにも見える。小さな凹凸が目立ち鍛打はあまい様に思われる。	
137	37	196	鉄器（御神体）		金屋子石組遺構周辺	23.8	21.8	3.2	6400.0	8	特L（☆）	金子屋の御神体と考えられる板状の鉄塊（鉄製品）である。	

第35表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（8）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
138		197	炉壁（鍛冶炉）	N 2, E 2		14.8	8.5	6.1	410.0	4	△	胎土には 5 mm 以下の礫や木炭痕が観察される。内面の滓化部分の断面は「レ」字形になっている。	
138		198	炉壁（鍛冶炉）	S 4, E 4		11.3	12.0	4.6	393.5	3	△	内面、滓化。胎土には 1 cm 以下の木炭、3 mm 以下の砂礫多く含み鉄滓片も混入する。	
138		199	羽口	S 4, E 4		10.3	9.2	9.5	401.0	3	なし	胎土は 2 mm 以下の砂礫を含む胎土で、やや粗い印象をうける。外径約 7.5 cm、孔径 3.6 cm	
138		200	羽口	表土		8.5	10.3	12.7	400.0	2	なし	先端部が斜めに溶損。胎土中にはまばらに炭粉含む。孔径 3.2～3.5 cm。	
138		201	羽口	H－5		14.4	8.3	8.7	928.2	3	なし	孔径 3.9 cm。外径 8.3 cm。先端部は斜めに溶損している。	
138		202	羽口	NS 0, E 8		11.2	9.8	11.0	580.0	3	なし	先端部に滓が目詰まり。滓の上半は炉壁が溶けたようなガラス質で、下半は結晶化の進んでいる。胎土はきめこめやかな土を用い木炭は含まない。	
138		203	羽口	表土		6.9	6.4	4.3	85.0	2	なし	下面が斜め方向に溶けて滓化。胎土は、2 mm 以下の石英粒など含む粘土。羽口内径 3.9 cm	
138		204	羽口	E－7		7.7	7.2	3.5	144.0	2	なし	先端部溶融し、滓がつまりかかる。	34
138		205	羽口	E－7		6.2	9.3	5.5	194.0	3	なし	先端部に流動状の滓が目詰まり。羽口内径は復元で 4.4 cm。	
138		206	羽口	K－3		9.9	10.3	6.5	281.0	3	なし	胎土はきめこまやかな粘土を用い、1 mm 以下の砂粒を若干含む。外径 7.0 cm、羽口内径 3.6 cm	
139		207	羽口	表土		9.3	8.0	5.7	291.0	5	M（◎）	先端には鉄滓が付着しているが、これは別の鉄滓が二次的に付着したもののようにも見える。	
139		208	羽口	S 4, E 4		8.8	7.2	5.8	210.0	5	なし	先端部ななめに溶損。2 mm 以下の砂粒含む。	
139		209	工具付着滓	表土		3.2	3.2	1.2	9.4	1	なし	幅 2.3 cm 以上の平板な工具が付着。	35
139		210	工具付着滓	表土		4.8	4.0	0.9	14.4	1	なし	側面は全面破面。下面は緩やかな弧状になっている。	
139		211	工具付着滓	表土		3.2	5.1	1.5	19.6	1	なし	厚み薄く下面緩やかな弧状になっている。	
139		212	鍛冶滓（流動状）	M－4		3.5	2.3	2.0	15.0	1	なし	2 本の単位が重なりあったような流動状の鍛冶滓。	
139		213	鍛冶滓（流動状）	S 4, W 8		6.7	6.7	2.9	84.6	2	なし	流動状の鍛冶滓。滓質はかなり緻密である。	
139		214	鍛冶滓（流動状）	S 2, E 6		11.8	6.6	3.5	230.0	2	なし	下面には長さ 5 mm くらいの木炭痕が見られる。	
139		215	鍛冶滓（流動状）	J－6		12.7	5.7	4.4	260.0	2	なし	下面弧状になっている。緻密な滓。椀形鍛冶滓の破片か？	
139		216	鍛冶滓（流動状）	こ, 2		18.2	15.1	7.6	1848.0	2	なし	中形かやや小ぶりの椀形鍛冶滓。上面はやや流動状になっている。下面は 5 mm 以下の木炭痕目立つ。	
140	39	217	椀形鍛冶滓（工具痕付）	H－8		18.3	20.4	11.8	3500.0	4	なし	ほぼ完形。上面には断面長方形の工具痕 2 箇所、下面には丸棒状の工具痕に流入した滓部が見られる。	36
140	39	218	椀形鍛冶滓（工具痕付）	H－8		14.2	16.5	9.7	2500.0	3	なし	平面、半円形。上面には断面方形の工具痕みられ、下面には丸棒状の工具痕流入滓部が認められる。	
140		219	椀形鍛冶滓（工具痕付）	G－6		22.0	20.7	14.5	4500.0	3	なし	下面には丸棒状の工具痕や工具痕流入滓部。	
141		220	椀形鍛冶滓（二次被熱）	S 4, W 8		14.2	18.0	10.1	2500.0	3	なし	平面、幅広の不整台形。破面を見る限り外面はいがいがしている。滓質は比較的緻密に思われる。	

第36表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（9）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
141		221	椀形鍛冶滓（二次被熱）	L−6		19.4	20.3	13.6	3100.0	3	△	1／2くらい残存。木炭痕多く見られる。外面の一部は二次的な被熱のため赤紫色に変色している。下面に工具痕流入滓部。	
141		222	椀形鍛冶滓（小）	K−6		10.5	8.9	6.0	465.0	3	△	平面、長楕円形。木炭痕が目立つ。	37
141		223	椀形鍛冶滓（中）	G−10		15.3	17.9	7.7	1540.0	2	△	上面には長さ2cm以下の木炭痕がまばらに見られる。表面の凹凸は大きい。下面は2cm以下の木炭痕顕著にみられ浅い椀形の面をもつ。	
141		224	椀形鍛冶滓（中）	I−8		17.9	16.6	6.8	1350.0	2	なし	平面、ハート形。上面は流動状になっている。下面は浅い椀形。	
141		225	椀形鍛冶滓（中～大）	S4,W6		26.7	14.7	11.8	3800.0	4	なし	平面、長楕円形。上面はやや流動状になっている。	
142		226	椀形鍛冶滓（中～大）	K−5		24.5	18.1	11.5	3900.0	4	H（○）	平面、不整多角形。下面には丸棒状の工具痕や工具痕流入滓部。	
142		227	椀形鍛冶滓（中～大）	H−9		26.5	22.1	12.9	5500.0	3	△	平面、楕円形。下面に2カ所の丸棒状の工具痕流入滓部。	
142		228	椀形鍛冶滓（中～大）	K−5		26.8	21.5	12.7	7000.0	2	△	平面、不整五角形。下面に丸棒状の工具痕や工具痕流入滓部。	
142	37	229	椀形鍛冶滓（中～大）	S4,E6		28.7	22.0	13.7	6900.0	4	H（○）	平面、長楕円形。下面に工具痕や工具痕流入滓部。	38
143		230	椀形鍛冶滓（大）	I−4		30.7	23.1	12.0	5200.0	2	△	平面、半円形。ほぼ完形。上、下面に長さ1.5cmくらいの木炭痕みられる。下面には工具痕流入滓部。	
143		231	椀形鍛冶滓（大）	不明		27.6	29.4	13.8	9100.0	3	なし	平面、不整半円形の大形の椀形鍛冶滓。	
143		232	椀形鍛冶滓（大）	S2,W8		29.8	28.3	18.2	11000.0	2	なし	平面やや横長の不整半円形。ほぼ完形。上面には2cm以下の木炭痕顕著にみとめられる。下面に工具痕流入滓部。左側面はなめ方向に直線状にのびるとぎれた面になる。	
144		233	椀形鍛冶滓（大）	H−9		26.2	26.4	19.0	9500.0	2	H（○）	平面、半円形。ほぼ完形。大粒の木炭痕が多くみられ、滓質はいがいがした印象をうける。	
144		234	椀形鍛冶滓（大）	S2,W8		31.3	27.0	15.4	9500.0	2	なし	平面、不整半円形。下面の右側は椀形鍛冶滓が二重になっているように見える。	
144	38	235	椀形鍛冶滓（大）	M−5		38.6	24.4	17.8	13400.0	2	△	長楕円形ないし隅円の長方形。上下二段二重椀形滓になっている。上下とも木炭痕多くみられる。	
145		236	椀形鍛冶滓（含鉄）	N2,E6		18.0	22.2	13.1	5000.0	5	特L（☆）	右側面は途切れたような面をもつ。右図奥側に鉄部。	39
145		237	椀形鍛冶滓（含鉄）	NS0,EW0		14.4	12.0	12.0	2600.0	6	特L（☆）	平面、やや幅広の不整方形。長さ、幅に対して比較的厚みがある。	
145		238	椀形鍛冶滓（含鉄）	H−9		16.7	11.2	8.3	1861.7	5	特L（☆）	平面、幅広の不整方形。	
145		239	椀形鍛冶滓（含鉄）	H−9		8.4	13.5	6.9	1719.4	5	特L（☆）	錆化のためわれ欠損。破面には木炭痕が観察される。	
145		240	椀形鍛冶滓（含鉄）	表土		10.9	16.5	8.4	1521.3	6	特L（☆）	平面、幅広の不整三角形。表面に木炭痕はみられず、比較的、表面の凹凸は小さく見える。下面側にメタルが存在する。	
145		241	椀形鍛冶滓（含鉄）	F−11		8.6	14.9	7.2	1500.0	5	特L（☆）	右側面はとぎれたような面。錆化のため割れがすすんでいる。比較的緻密な滓で特に上面に大きな鉄部が存在するようである。	
145		242	椀形鍛冶滓（含鉄）	NS0,E6		13.3	11.9	8.6	1403.5	6	特L（☆）	平面、楕円形。下面後部に別の鉄滓が再結合。	
146		243	椀形鍛冶滓（含鉄）	I−8		10.5	14.0	10.3	1386.2	7	特L（☆）	平面、半円形。鉄部は各面に散在するようである。	
146		244	椀形鍛冶滓（含鉄）	表土		13.6	11.9	7.7	1082.3	8	特L（☆）	平面、不整三角形。外表面には木炭痕みられず、凹凸はあるものの比較的なめらかな印象うける。	
146		245	椀形鍛冶滓（含鉄）	表土		17.0	8.5	5.9	654.6	5	特L（☆）	平面、縦長の楕円形。外面には木炭痕あまりみられない。	
146		246	椀形鍛冶滓（含鉄）	S4,W6		11.4	8.9	7.3	636.4	7	特L（☆）	平面、不整台形。上面手前側に特に鉄部が集中するようである。下面の突出は再結合によるものか。	

第37表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（10）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
146		247	椀形鍛冶滓（含鉄）	J−8		10.8	9.3	6.5	567.6	7	特L（☆）	平面、不整楕円形。かなり緻密質である。	
146		248	椀形鍛冶滓（含鉄）	表土		11.8	6.8	5.2	417.8	9	特L（☆）	小形の椀形鍛冶滓。両側面大きく欠損。	
147	40	249	含鉄鉄滓	S 2, W 6		12.9	7.0	5.0	437.0	5	特L（☆）	比較的大型の再結合滓の欠損したもの。図化した部分に限ればかなりの鉄が集中する。再結合滓部は土砂・木炭・滓片などで構成される。	
147		250	含鉄鉄滓	G−9		9.7	7.2	6.2	445.6	9	特L（☆）	下面丸みもち椀形鍛冶滓状である。	41
147	40	251	含鉄鉄滓	G−9		9.3	6.7	5.2	391.7	8	特L（☆）	断面、三角形の含鉄鉄滓。酸化土砂付着のため詳細は不明。	
147	40	252	含鉄鉄滓	不明		10.2	7.3	4.7	268.0	9	特L（☆）	酸化土砂の付着はげしい。上部に鉄部が集中している。	
147	40	253	含鉄鉄滓	S 4, W 4		5.4	6.0	4.1	164.5	6	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。鉄部は図面奥側の一部に限られるようである。	
147	40	254	含鉄鉄滓	J−7		6.2	6.7	4.1	162.1	7	特L（☆）	酸化土砂の付着が顕著。部分的にチェッカーの反応の強弱がある。	
147	40	255	含鉄鉄滓	L−8		5.8	4.7	5.0	151.7	9	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。上面の突起部は磁着度弱く再結合滓と思われる。	
147		256	含鉄鉄滓	H−8		5.9	2.8	2.3	150.3	6	特L（☆）	6 mm 以下の木炭痕観察できる。錆化のため欠損。	
147	40	257	含鉄鉄滓	N 2, E 8		8.6	5.0	3.1	144.3	8	特L（☆）	上面は酸化土砂の付着が著しい。下面は酸化土砂少なく、樋状になっている。	
147		258	含鉄鉄滓	N 4, W 2		5.9	5.4	3.7	141.8	6	特L（☆）	滓含みの鉄塊となる可能性あり。	42
147		259	含鉄鉄滓	N 2, E 4		3.3	3.1	2.0	135.8	5	特L（☆）	銹化のためひび割れ顕著。	
147	40	260	含鉄鉄滓	J−7		7.4	6.5	3.0	121.4	8	特L（☆）	酸化土砂の付着が著しいが、丸みをもった面がみられることから銑鉄塊のようにも思われる。	
147	40	261	含鉄鉄滓	NS 0, EW 0		4.1	6.3	3.6	101.7	6	特L（☆）	酸化土砂の付着著しく詳細不明。上面の方がメタル度高い。	
147	40	262	含鉄鉄滓	表土		5.8	5.0	2.4	76.2	6	特L（☆）	含鉄の鍛冶滓と思われる。上面に鉄部あり。	
148		263	不定形鉄塊	F−9		8.0	7.9	5.7	451.8	7	特L（☆）	製錬系の鍛冶素材となる可能性ある。	40
148		264	不定形鉄塊	表土		9.6	8.2	7.3	686.2	6	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。製錬系の鉄塊となる可能性あり。	43
148	40	265	不定形鉄塊	表土		8.4	6.6	3.6	206.5	7	特L（☆）	酸化土砂著しく付着している。下面は丸みおびており、銑鉄塊のように思われる。	
148	40	266	不定形鉄塊	NS 0, EW 0		4.9	5.2	3.4	120.4	7	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。下面樋状になっており、小割された銑鉄塊のようにも思える。	
148		267	不定形鉄塊	表土		4.3	5.8	3.7	112.1	7	特L（☆）	製錬系の鉄塊小片かもしくは精錬鍛冶段階での成分調整中の破片か？	44
148	40	268	不定形鉄塊	G−9		5.3	5.6	3.7	108.2	6	特L（☆）	平面、不整三角形。	
148	40	269	不定形鉄塊	G−11		4.4	3.3	3.5	62.9	7	特L（☆）	平面、不整五角形をした小形の鉄塊。	
148		270	銑鉄塊	H−6		7.8	6.45	5.9	848.6	8	特L（☆）	銑鉄塊が割られたものか。	45
148		271	銑鉄塊	G−8		9.8	8.2	5.7	729.5	10	特L（☆）	端部丸みをもった丸餅状の銑鉄塊。	46
148	40	272	銑鉄塊	G−7		8.7	6.6	6.6	616.3	7	特L（☆）	図面の上手側から下面は丸みを持ち、その上面、左側面、図前手前側の面は、平坦な面になっている。小割されたものか。	
148	40	273	銑鉄塊	G−11		8.8	6.6	3.3	204.8	6	特L（☆）	酸化土砂著しく付着。流動状の厚みのうすい銑鉄塊か。	

第38表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（11）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
148	40	274	銑鉄塊	く－2.5		5.1	3.7	2.1	64.6	5	特L（☆）	上面、平坦で下面は丸みをもっている。小割されたものかどうかははっきりしない。	
148	40	275	銑鉄塊	表土		5.5	3.3	1.8	50.6	6	特L（☆）	流動状の銑鉄塊で左右側面は破面である。	
148	40	276	銑鉄塊	G－9		5.4	6.5	3.1	139.9	5	特L（☆）	外面に酸化土砂が著しく付着。小割鉄のようにも見えるが、鉄部に気孔が多く認められることから銑鉄塊と思われる。	
148	40	277	銑鉄塊	表土		5.2	4.8	2.8	90.2	6	特L（☆）	酸化土砂著しく付着。	
149	41	278	小割鉄	N2,E4		6.6	4.8	2.5	492.9	6	特L（☆）	切餅状の小割鉄。タガネで切断されたような面持つ。	47
149	41	279	小割鉄	I－7		6.8	5.7	5.0	365.7	3	特L（☆）	切餅状の小割鉄。左側面はタガネで切断されたような面をもつ。丸みをもち、上下に厚みがある。右面は不整形。	
149	41	280	小割鉄	J－7		5.9	4.8	3.1	276.7	4	特L（☆）	平面、不整長方形。上面は平坦で下面は樋状になっている。酸化土砂の付着著しく、切断痕等はよく分からない。	
149		281	小割鉄	J－6		6.2	4.4	1.6	217.3	4	特L（☆）	酸化土砂の付着著しい。板状で小割鉄になる可能性あり。	48
149	41	282	小割鉄	K－7		6.2	3.6	1.4	182.2	3	特L（☆）	酸化土砂著しく付着。左側面はタガネで切断か。	
149	41	283	小割鉄	K－7		6.8	4.8	4.8	136.9	5	L（●）	左側面にタガネ切断痕のような面が見られる。錆化が進み層状の剥離がおこっている。	
149	41	284	小割鉄	J－6		5.1	1.9	1.0	115.7	6	特L（☆）	平面、長平行四辺形。酸化土砂の付着著しい。	
149	41	285	小割鉄	G－8		4.5	3.7	1.5	56.2	8	L（●）	平面、不整五角形。左側面は直線的でタガネ切断痕か？	
150		286	再結合滓	N4,E8		45.6	27.1	15.3	12500.0	3	H（○）	上層は木炭、滓分を多く含み粒状滓なども入る。下層は 2 mm 以下の砂礫を多く含んだ土が主体で、10 cm 以下の礫も混入する。図面手前側面には木の痕跡が残る。	
150		287	再結合滓	N2,E4		16.5	14.1	5.9	1490.0	5	H（○）	鍛造剥片、粒状滓、鉄滓、木炭、土砂が固結した再結合滓。	
150		288	再結合滓	N4,W6		19.8	18.3	10.5	2680.0		△	4 cm 以下の木炭などが再結合して形成されたもの。	
151	42	289	工具類	F－8		38.2	2.7	3.3	1218.3	7	特L（☆）	基部・先端とも破面。基部側折れ曲っている。	49
151	42	290	工具類	K－4		26.9	2.1	2.0	573.3	8	特L（☆）	酸化土砂の付着と、錆化はげしい。断面円形の鉄製品。	
151	42	291	工具類	表土		16.5	1.4	1.4	246.6	5	特L（☆）	断面方形の太さ 1.4 cm くらいの棒状の鉄製品。若干反り曲っている。大鍛冶場以降の遺物の可能性もある。	
151	42	292	工具類	NS0,E4		14.7	2.2	2.2	437.7	6	特L（☆）	断面方形の鉄製品。先端部、基部とも欠損している。基部は折れ曲っていた部分で欠損したのかもしれない。	
151	42	293	工具類	表土		15.2	6.0	2.0	286.5	6	特L（☆）	先端部がカギ状に折れ曲がった工具の欠損品と思われる。	
151		294	工具類	G－8		11.7	2.2	1.9	181.9	7	特L（☆）	断面方形の棒状鉄製品。	50
151	42	295	工具類	J－7		7.8	2.9	3.2	80.4	7	特L（☆）	図手前側が羽子板状に広がり、中央に穴があいている。側面から見ると弧状にそっている。大鍛冶場にともなわない可能性あり。	
151	42	296	工具類	K－7		9.6	1.95	1.1	148.1	6	特L（☆）	断面長方形。基部が欠損している。先の方が反り返るように曲がる。	
151		297	工具類	H－9		7.4	3.2	2.7	95.3	6	特L（☆）	板状もしくは扁平な棒状の鉄製品。	51
151		298	工具類	J－6		9.0	3.6	1.8	179.3	6	特L（☆）	板状の鉄製品。側面から見るわずかに反り返っている。	52
151	42	299	工具類	S2,W6		11.7	4.0	4.1	436.2	8	特L（☆）	上部は厚さ 1.3 cm の板状で径約 2 cm の穴が開けられている。下部は上部に対してねじれた形で厚み方向をもつ。厚さ 1.8 cm の板状で先端のむかうにつれてうすくなる。	

第39表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（12）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
152	43	300	火箸	表土		25.2	1.1	1.1	82.4	6	特L（☆）	細長い棒状の鉄製品。断面円形。	
152	43	301	火箸	H－9		7.9	1.2	1.0	68.2	4	特L（☆）	断面、円形の棒状鉄製品。	
152	43	302	鉄製品（くさび状）	表土		5.3	1.4	1.0	53.2	8	L（●）	断面方形で、先端はとがる。外面は錆化のため剥離。	
152	43	303	鉄製品（くさび状）	K－4		4.3	1.0	1.0	32.1	6	L（●）	断面方形で、先端はとがっている。	
152	43	304	鉄製品（棒状）	E－11		8.2	1.2	0.8	34.9	4	特L（☆）	断面、方形。図面手前の方が厚くなっている。	
152	43	305	鉄製品（棒状）	表土		8.0	1.1	0.9	40.0	3	M（◎）	断面は方形で、先端に向って細くなる。	
152	43	306	鉄製品（棒状）	I－5		12.9	0.8	0.4	49.0	6	L（●）	断面方形で中ほどが膨らみ、両端は細くなる。先端は尖る。	
152	43	307	不明鉄器	表土		8.9	5.2	2.5	119.6	4	L（●）	2本の鉄製品が錆着しているようである。	
152	43	308	不明鉄器	表土		7.3	2.5	1.3	26.5	6	特L（☆）	幅約2cm、厚さ1cmの鉄板をねじって加工している。	
152	43	309	不明鉄器	S4,EW 0		6.3	5.6	1.9	132.9	6	特L（☆）		
152	43	310	不明鉄器	D－9		4.3	2.5	1.0	24.0	8	L（●）	かぎ状に曲った金具。先端は尖っている。	
152	43	311	不明鉄器	N2,E 6		4.6	2.9	0.6	20.0	2	△	かぎ状に曲がった鉄製品。断面は台形。	
152	43	312	不明鉄器	K－5		5.4	2.7	0.6	27.0	4	△	先端がかぎ状に曲がっている。	
152	43	313	釘類	H－5		4.6	0.4	0.4	5.0	1	△	酸化土砂の付着、錆化著しい。断面方形。	
152	43	314	釘類	イ－2		3.7	0.5	0.4	4.0	1	△	断面方形の釘。先端部は欠損。X線写真では頭部が確認できる。横方向に材の木目跡が見られる。	
152	43	315	釘類	K－7		3.4	0.5	0.5	3.0	1	△	断面方形の釘。基部、先端は欠損。	
152	43	316	釘類	K－7		2.7	0.6	0.4	4.0	1	△	断面方形。頭部は8×8mmの方形。錆化、酸化土砂の付着著しい。	
152		317	釘類	S2,W 6		5.4	0.5	0.5	19.3	6	L（●）	断面方形。引き抜かれたためか折れ曲っている。	53
152	43	318	釘類	J－6		3.8	0.6	0.8	30.8	4	L（●）	断面方形の釘。引き抜きのためか曲っている。	
152	43	319	釘類	表土		3.1	3.9	0.4	10.0	1	△	引き抜かれたためか折れ曲がった釘。断面方形。	
152	43	320	釘類	F－6		4.9	0.5	0.4	4.0	1	△	断面、方形。引きぬかれたためか曲っている。一部に木の痕跡残る。	
152	43	321	釘類	G－8		3.3	1.4	0.5	6.0	1	△	引き抜かれたためか折れ曲がっている。	
152	43	322	釘類	J－3		6.6	1.8	0.7	15.0	2	△	断面方形の釘。頭部は1.8cm×0.7cmの長方形。	
152	43	323	釘類	J－6		5.9	0.4	0.8	12.0	2	△	頭部が残っている。	
152	43	324	鉄塊類	H－6		7.7	4.4	2.1	50.0	3	△	酸化土砂の付着、錆化著しく、鉄部はしっかり残っていない。	
152	43	325	鉄塊類	S2,E 8		7.0	3.7	2.9	50.0	2	△	錆化と酸化土砂の付着のため詳細不明。鉄部はあまり残っていない。	
152	43	326	鉄塊類	J－6		8.5	3.8	2.5	61.7	6	特L（☆）	図面の中程が最も厚く膨らみ両端へゆくにつれ細くなっている。鉄製品か？	
152	43	327	鉄塊類	J－6		3.7	5.5	2.6	40.0	5	△	かぎ状に曲がっている。鉄部がしっかりしていない。	
152	43	328	鉄塊類	G－8		4.2	2.4	1.9	24.0	6	△	酸化土砂の付着著しく詳細不明。鉄製品かどうか分らない。	
152	43	329	鉄塊類	NS0,E 4		3.7	2.5	2.5	20.0	7	H（○）	破面に気孔が見られる。含鉄鉄滓とすべきか。木炭痕見られる。	
152	43	330	鉄塊類	NS0,E 2		3.3	3.1	1.8	15.0	3	△	酸化土砂の付着著しく詳細不明。	

第40表　獅子谷遺跡鍛冶関連遺物観察表（13）

挿図番号	図版番号	遺物番号	遺物名	地区名	遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
153		331	炉壁（鍛冶炉）	1 トレンチ		5.8	7.3	3.3	60.0	3	なし	内面、滓化。胎土には炭粉。礫や砂粒が含まれる。	
153		332	羽口	1 トレンチ		6.3	6.7	3.7	119.0	2	なし	胎土は 2 mm 以下の砂粒まばらに含みきめこまかい。2 mm 以下の炭粉もまばらに入る。	
153		333	羽口	1 トレンチ		7.8	7.2	3.5	151.0	3	なし	先端部ななめに溶損。胎土に 2 mm 以下の砂粒や鉄滓片を含む。	
153		334	工具付着滓	1 トレンチ		2.5	2.0	0.7	3.6	1	なし	丸棒状の工具に付着した滓。小さな気孔が目立つ。	
153		335	工具付着滓	1 トレンチ		3.1	2.4	0.7	3.5	1	なし	丸棒状の工具に付着した滓。	54
153	39	336	椀形鍛冶滓（工具痕付）	1 トレンチ		19.5	22.3	13.3	3500.0	1	△	上面に断面方形の工具痕。下面には丸棒状の工具痕流入滓部。	
153		337	椀形鍛冶滓	1 トレンチ		19.7	15.4	6.0	1370.0	3	H（○）	平面、楕円形。下面は平らな面をもつ。	
153		338	椀形鍛冶滓	1 トレンチ		18.0	20.2	9.1	3000.0	3	△	平面、幅広の不整台形。上面の右側に大きなくぼみがみられる。右側面はまっすぐに立ち上がるような面になっている。	
154		339	椀形鍛冶滓	1 トレンチ		22.0	20.0	9.8	3100.0	2	なし	平面、楕円形。各面に大粒の木炭痕、木炭が多く見られる。	
154		340	椀形鍛冶滓	1 トレンチ		25.5	19.3	16.0	4600.0	3	なし	平面、不整菱形。滓の厚みが大きい。上、下面とも 2 cm 以下の木炭痕観察できる。	
154		341	鍛冶滓（含鉄）	1 トレンチ		7.1	8.9	4.8	260.0	5	M（◎）	小～中形の椀形鍛冶滓の破片と思われる。酸化土砂の付着顕著。	
154		342	鍛冶滓（含鉄）	1 トレンチ		11.3	16.4	10.7	1850.0	5	M（◎）	椀形鍛冶滓の破片。図奥側の側面が欠損するがどの程度の欠損か分からない。酸化土砂、礫の付着著しい。	
154		343	鍛冶滓（含鉄）	1 トレンチ		4.8	4.0	2.8	49.2	5	L（●）	酸化土砂の付着著しく詳細不明。	
154		344	鍛冶滓（含鉄）	1 トレンチ		5.2	6.2	3.3	301.1	5	L（●）	鉄滓の破片がさびて再結合したもので、表面に礫も固着している。	
154		345	含鉄鉄滓	1 トレンチ		9.5	8.7	5.1	447.0	6	特L（☆）	礫が下面に付着。外面に 1 cm くらいの木炭や木炭痕確認できる。外面の凹凸は大きい。いがいがした感じで鍛冶滓であろう。	

第41表　獅子谷遺跡出土木炭観察表（1）

挿図番号	遺物番号	地区名・遺構名	計測値(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	樹種	年輪	炭化	菊割れ	木取り	分析番号
108	13－1	1 号鍛冶炉	4.1	1.8	2.2	3.35	針葉樹の環孔材	厚さ 2.2 cm の間に 6 本	あまい	やや有り	ミカン割りもしくは縦割り	
108	13－2	1 号鍛冶炉	1.8	1.7	1.0	0.85	針葉樹の環孔材	幅 1.7 cm の間に 5 本	あまい	なし	縦割り	
108	13－3	1 号鍛冶炉	1.7	2.5	0.8	0.72	針葉樹の環孔材	幅 2.5 cm の間に 6 本	あまい	なし	縦割り	
108	13－4	1 号鍛冶炉	1.9	1.8	0.8	0.47	広葉樹の散孔材	なし	やや良	なし	ミカン割り 1／3 もしくは平割り	
108	13－5	1 号鍛冶炉	1.6	0.7	0.6	0.31	針葉樹の環孔材	幅 7 mm の間に 2 本	あまい	なし	縦割り	
110	27－1	2 号鍛冶炉（新）	2.4	2.0	1.6	2.60	広葉樹の環孔材	厚さ 1.5 cm の間に 11 本	あまい	なし	ミカン割り 1／6	
110	27－2	2 号鍛冶炉（新）	1.9	1.8	1.1	1.82	広葉樹の環孔材	幅 1.8 cm の間に 6 本	あまい	少し有り	縦割り	
110	27－3	2 号鍛冶炉（新）	2.3	1.5	1.0	0.99	広葉樹の散孔材	厚さ 1.0 cm の間に 3 本以上	あまい	なし	ミカン割り 1／3	
110	27－4	2 号鍛冶炉（新）	2.3	1.2	0.7	0.71	広葉樹の環孔材	厚さ 0.7 cm の間に 4 本	あまい	なし	平割り	
110	28－1	2 号鍛冶炉	3.8	4.0	3.1	23.77	広葉樹の環孔材	厚さ 2.5 cm 間に 9 本	良好	あり	半割り	
110	28－2	2 号鍛冶炉	4.5	3.7	2.8	18.21	広葉樹の散孔材	なし	あまい	なし	1／3 ミカン割り	
110	28－3	2 号鍛冶炉	3.4	3.5	2.4	13.80	針葉樹の散孔材？	厚さ 1.7 cm の間に 6 本？	あまい	なし	半割り	
110	28－4	2 号鍛冶炉	4.0	4.0	2.3	12.85	針葉樹の散孔材？	不明	あまい	なし	縦平割り	

第42表　獅子谷遺跡出土木炭観察表（2）

挿図番号	遺物番号	地区名・遺構名	計測値(cm)			重量(g)	樹種	年輪	炭化	菊割れ	木取り	分析番号
			長さ	幅	厚さ							
110	28－5	2 号鍛冶炉	3.5	2.2	2.1	9.54	針葉樹？の散孔材	9 年生	あまい	なし	丸のまま	
116	61－1	3 号鍛冶炉	5.0	4.3	3.0	13.90	広葉樹の環孔材	9 年生	やや不良	強い	半割り	12－1
116	61－2	3 号鍛冶炉	5.0	4.1	2.3	13.35	広葉樹の環孔材	6 年生以上	やや不良	強い	半割りないしは 1／3 の縦割り	12－2
116	61－3	3 号鍛冶炉	7.3	3.6	2.1	12.94	広葉樹？の環孔材	1.7 cm の間に 5 本以上	やや不良	有り	たて平割り	12－3
116	61－4	3 号鍛冶炉	5.3	3.8	2.3	12.64	広葉樹の環孔材	3.8 cm の間に 26 本以上	良好	わずか	たてミカン割り	12－4
116	61－5	3 号鍛冶炉	6.2	2.6	2.7	8.48	広葉樹の環孔材	28 年生	良好	やや有り	たてミカン割り	12－5
120	81－1	4 号鍛冶炉（覆土中）	8.5	4.8	3.5	24.36	広葉樹の環孔材	14 年生	良好	あり	1／6 ミカン割り	
120	81－2	4 号鍛冶炉（覆土中）	7.2	4.0	2.2	12.82	広葉樹の環孔材	18 年生	良好	あり	半割もしくは 1／3 縦割り	
120	81－3	4 号鍛冶炉（覆土中）	4.8	3.7	2.0	8.50	広葉樹の環孔材	厚さ 2.0 cm の間に 11 本	良好	あり	半割もしくは 1／3 縦割り	
120	81－4	4 号鍛冶炉（覆土中）	3.5	5.1	3.0	5.49	広葉樹の散孔材	なし	やや良好	やや有り	半割り	
120	81－5	4 号鍛冶炉（覆土中）	4.5	3.4	2.7	4.87	広葉樹の環孔材	幅 3.4 cm の間に 11 本以上	良好	あり	縦割り	
123	99	SD 02	10.2	3.6	2.3	34.24	広葉樹の環孔材	幅 3.6 cm の間に 25 本	良好	やや有り	ミカン割 1／6	
124	107－1	5 号鍛冶炉	3.5	3.1	3.3	6.59	広葉樹？の散孔材	不明	良	あり	ミカン割り 1／4	
124	107－2	5 号鍛冶炉	3.2	3.0	1.95	4.43	広葉樹の環孔材	5 年生以上	やや良	あり	半割り	
124	107－3	5 号鍛冶炉	2.7	3.1	1.4	2.96	広葉樹の散孔材	不明	あまい	なし	縦平割り？	
124	107－4	5 号鍛冶炉	3.6	3.2	1.1	2.94	広葉樹の環孔材	幅 3.2 cm の間に 19 本	良好	やや有り	（剥片状）縦割り	
124	107－5	5 号鍛冶炉	2.6	1.4	1.4	2.84	広葉樹の環孔材	厚さ 1.4 cm の間に 5 本以上	良好	やや有り	縦割り？	
124	114－1	6 号鍛冶炉	2.7	2.7	2.2	3.14	広葉樹？の散孔材	13 年生	あまい	なし	半割り	
124	114－2	6 号鍛冶炉	2.0	2.5	2.15	1.76	広葉樹？の散孔材	11 年生	あまい	なし	1／3 ミカン割り	
124	114－3	6 号鍛冶炉	3.3	2.2	1.2	1.05	広葉樹？の散孔材	厚さ 1.2 cm の間に 9 本	ややあまい	少し有	ミカン割後平わり	
124	114－4	6 号鍛冶炉	2.3	1.35	1.0	0.63	広葉樹の環孔材	幅 13.5 cm の間に 8 本	ややあまい	なし	たてわり	
124	114－5	6 号鍛冶炉	2.2	2.2	0.85	0.54	広葉樹の環孔材	厚さ 8.5 cm の間に 6 本	ややあまい	なし	平割り	
125	123－1	7 号鍛冶炉（新）	5.2	2.6	2.2	5.12	広葉樹の環孔材	9 年生	ややあまい	あり	ミカン割り 1／4	
125	123－2	7 号鍛冶炉（新）	3.4	2.5	2.1	3.46	広葉樹の環孔材	厚さ 1.8 cm の間に 11 本以上	良好	強い	ミカン割り 1／3	
125	123－3	7 号鍛冶炉（新）	3.1	2.4	2.1	2.65	広葉樹の環孔材	8 年生	ややあまい	あり	ミカン割り 1／6	
125	123－4	7 号鍛冶炉（新）	3.3	2.3	1.4	1.35	広葉樹の環孔材	厚さ 1.4 cm の間に 5 本以上	あまい	やや有り	平割り	
125	123－5	7 号鍛冶炉（新）	2.9	1.2	0.7	0.74	広葉樹の環孔材	6 年生	ややあまい	やや有り	半割り	
125	126－1	7 号鍛冶炉（古）	3.3	2.2	1.7	1.62	広葉樹の環孔材	幅 2.2 cm の間に 4 本以上	やや良好	あり	ミカン割り 1／6	
125	126－2	7 号鍛冶炉（古）	3.2	1.8	1.8	1.15	広葉樹の環孔材	厚さ 1.8 cm の間に 5 本以上	ややあまい	あり	ミカン割り 1／4	
125	126－3	7 号鍛冶炉（古）	2.3	2.3	1.3	0.98	広葉樹？の散孔材	5 年生	あまい	ややあり	半割り	
125	126－4	7 号鍛冶炉（古）	2.9	1.6	1.4	0.94	広葉樹の環孔材	厚さ 1.4 cm の間に 3 本	あまい	あり	ミカン割り 1／6	
125	126－5	7 号鍛冶炉（古）	1.85	1.5	1.25	0.50	広葉樹の環孔材	厚さ 1.25 cm の間に 5 本	あまい	あり	ミカン割り 1／6	
126	133－1	8 号鍛冶炉	4.9	3.7	1.9	5.23	広葉樹？の散孔材	不明	あまい	少しあり	ミカン割り後平割り	
126	133－2	8 号鍛冶炉	7.2	2.8	1.6	5.21	広葉樹？の散孔材	不明	あまい	やや有り	平割り	
126	133－3	8 号鍛冶炉	3.5	3.2	2.2	3.39	広葉樹？の散孔材	幅 3.2 cm の間に 3 本以上	あまい	なし	2／3 縦割り	
126	133－4	8 号鍛冶炉	1.8	3.1	2.0	2.75	針葉樹？の散孔材	幅 2.9 cm の間に 21 本	あまい	なし	1／6 ミカン割りか？	
126	133－5	8 号鍛冶炉	4.7	2.2	1.6	2.17	広葉樹の環孔材	厚さ 9 mm の間に 13 本	良好	強い	1／6 ミカン割り	
135	184－1	SD 04	6.6	2.6	1.5	9.67	広葉樹の環孔材	厚さ 2.6 cm の間に 16 本	良好	なし	縦割り	
135	184－2	SD 04	4.5	2.7	1.2	2.69	広葉樹の環孔材	厚さ 1.2 cm の間に 6 本	良好	なし	剥片状	

第 5 節　小　結

近世の大鍛冶場では、鈩で生産された銑鉄や歩鋼を原料とし、これらを庖丁鉄・割鉄と呼ばれる鉄素材に加工している。大鍛冶場内には通常「左下場」、「本場」と呼ばれる 2 基の鍛冶炉があり、「左下場」では銑鉄の脱炭作業を行って左下鉄を作り、「本場」では左下鉄と歩鋼を加えて除滓や炭素量の調整を行い、鉄床で鉄を鍛打して庖丁鉄に仕上げたといわれている。

本遺跡ではこのような大鍛冶場遺構が層位的に見て 3 時期に分かれるかたちで確認でき、また多くの鍛冶関連遺物が出土した。

ここでは、獅子谷遺跡の遺構の変遷や、遺構の性格についてまとめ、また遺物についてはその内容について整理し、課題となることや金属学的な分析で解明が期待される点を挙げておきたい。なお、ここでまとめた内容は現段階での認識であって、遺跡の総合的なまとめについては自然科学的な分析結果をまって次巻の分析・総括編で報告することとしたい。

1　遺構の配置と変遷

大鍛冶場Ⅰ期　本遺跡で最も古い段階は、1・2 号鍛冶炉を中心とする大鍛冶場Ⅰ期の遺構である。鍛冶炉の主軸方向は、1 号鍛冶炉がN－59°－E、2 号鍛冶炉がN－57°－Eとほぼそろっており、しかも両者はこの主軸線をあわせて直線的に配置されている。両者の間隔は約 6 m ある。1・2 号鍛冶炉とも炉内への送風は東側からされたと考えられる。鉄床 1 は 2 号鍛冶炉の北西に設けられており、1 号鍛冶炉が「左下場」、2 号鍛冶炉が「本場」になると考えられる。

大鍛冶場Ⅱ期　Ⅰ期の大鍛冶場の上に整地土・貼床をして作業面が造られている。東西 3 間×南北 2 間の掘立柱建物（SB 01）内に、3・4 号鍛冶炉が直交方向に配置され、4 号鍛冶炉の北西に鉄床 2 が設けられている。鍛冶炉の主軸方向は 3 号鍛冶炉がN－14°－W、4 号鍛冶炉はN－75°－Eであり、Ⅰ期の炉の主軸方向から向きを変えている。建物内の西辺中央付近には焼土遺構であるSX 01 がある。鉄床石との位置関係などから 3 号鍛冶炉が「左下場」、4 号鍛冶炉が「本場」に相当すると考えられる。建物外の北側には溝底に鉄分が沈澱したSD 03 があり、水場の遺構になる可能性がある。

大鍛冶場Ⅲ期　Ⅱ期の大鍛冶場の上層に整地土をし、Ⅱ期の大鍛冶場から西側に場所を移して造られている。東西 3 間×南北 2 間の掘立柱建物内（SB 02）に、7・8 号鍛冶炉が直交方向に配置され、7 号鍛冶炉の北西に鉄床 3、そのやや西に鉄床 4 が設けられている。鉄床石との位置関係や粒状滓・鍛造剥片の分布などから 8 号鍛冶炉が「左下場」、7 号鍛冶炉が「本場」に相当すると考えられる。建物内の西辺中央には焼土遺構であるSX 02 があり、建物外の北側には水場遺構が設けられている。また建物の南側には炭置き場があったと考えられる。SB 02 の東辺の柱穴はⅡ期のSB 01 の西辺の柱穴と重複している。また、鍛冶炉の主軸方向はⅡ期のものを受け継いでいる。こうしたことから、Ⅱ期の大鍛冶場がまだその形をとどめているうちに造り替えられたと考えられる。遺構の配置は、基本的にⅡ期の配置を受け継ぎながらさらにこれを充実させている様子がうかがえる。この大鍛冶場の遺構配置は鉄山必用記事に見られる鍛冶屋の構造と極めて類似している。

なお、Ⅲ期としている 5 号鍛冶炉、6 号鍛冶炉については層位的に考えるとその時期的な位置づ

けは困難であるが、ここでは遺構の配置や構造から以下の可能性を想定した。

まず一つは、7・8 号鍛冶炉が作られる以前に、5 号鍛冶炉と 6 号鍛冶炉が共存するかたちの、鍛冶炉を直交方向に配置した大鍛冶場が営まれた可能性である。ただしこの可能性については、2 基の鍛冶炉の間隔が他の時期のそれと比べてかなり小さいことに問題点がある。また、他の時期では 2 基の鍛冶炉のうち、一方の鍛冶炉の地下構造や掘り方が、もう一方の鍛冶炉の地下構造・掘り方と比べて複雑で大きくなっているのに対し、5・6 号鍛冶炉は同様の構造・規模である。こうしたことから、5・6 号鍛冶炉の共存関係は成り立ちにくいように思える。

もう一つの可能性として、最初に 5 号鍛冶炉と 7 号鍛冶炉がセットとして大鍛冶場が造られたが、5 号鍛冶炉が廃止された後、SB 02 が建てられて 6 号鍛冶炉→8 号鍛冶炉という順に 7 号鍛冶炉とセットとなる鍛冶炉が造られた状況が想定される。5 号鍛冶炉と 7 号鍛冶炉とはほぼ主軸方向を同じくし、しかも直線的に並んでいることがそのように考える理由である。この場合、5 号鍛冶炉の使用された段階の大鍛冶場建物は、SB 02 の西端からさらにもう 1 間分西へのびる可能性があると考えられる。今回の調査でこれに見合う柱穴は検出できていないが、この部分の遺構基盤層は暗褐色から黒褐色の砂礫層で、柱穴の埋土と類似しているため認識できなかったのかもしれない。なお、頓原町中原遺跡では、当初は「左下場」・「本場」の鍛冶炉が直交する方向に配置されていたが、建物の建て替えに伴い「左下場」の鍛冶炉だけが造り替えられ、「本場」の鍛冶炉と直線的な配置になるように変更されている[(6)]。獅子谷遺跡で想定される遺構配置と比較すると、鍛冶炉を直交する配置から直線的な配置へ転換する点で逆であるが、建物の建て替えに伴い一方の鍛冶炉だけが造り替えられる点においては共通している。現時点ではこのように鍛冶炉が造り替えられた可能性が高いと考えており、5・6 号鍛冶炉はⅢ期の古段階の位置づけられるものとみている。

大鍛冶場廃絶後　Ⅲ期の大鍛冶場は操業停止直後に大鍛冶場とは別の機能を持つ民家、山小屋などの施設に造り替えられたようであり、作業面の上面を覆う形で土間の粘土面が貼られた。

金屋子遺構　平坦面の南東隅に残丘状の遺構があり、その北側の麓に石組が設けられていた。周辺から近世～近代の陶磁器、石製品のほか、御神体となる鉄製品や奉納されたと思われる鉄塊など特徴的な鉄関連遺物も出土している。こうした資料は鉄山に働く人々の信仰・習俗を知る上で興味深いものである。発掘調査事例のほかに民俗例の調査も必要となろう。

大鍛冶場の年代　各時期の年代について出土した陶磁器から以下のように考えられる。

Ⅰ期の大鍛冶場は、遺構内出土のもので明確に時期を特定できないが、遺跡全体では 17 世紀後半～18 世紀前半の陶磁器がまとまって見られることから、この頃までさかのぼる可能性がある。

Ⅱ期の大鍛冶場の整地土や貼床土、4 号鍛冶炉の埋め戻し土に 18 世紀末～19 世紀前半の遺物が含まれ、Ⅲ期の大鍛冶場の柱穴内や整地土には 19 世紀中葉まで降る遺物が含まれている。このことから、Ⅱ期は 18 世紀末～19 世紀中葉、Ⅲ期は 19 世紀中葉以降になると考えられる。

2　鍛冶炉について

本遺跡では造り替えを除いて全部で 8 基の鍛冶炉が確認できた。これらの中には、特異な地下構造をもつものや、羽口が原位置で残存しているものも見られ、鍛冶炉の構築方法や地下構造、送風方法について多くの情報が得ることができた。

鍛冶炉の構造　鍛冶炉の火窪の部分いずれも長さが 1.2 m 前後、幅は 0.4～0.5 m で、鍛冶炉によっ

て大きな違いは見られない。鉄が実際に加熱された部分は炉床や炉床再結合滓、遺構に伴って出土した椀形鍛冶滓から、深さ20～30cm程度であったと考えられる。鍛冶炉は、掘り方の内側に均質な粘土が貼られ、さらに火窪内壁となる部分に粉炭を含む粘土が貼られ、造られている。1・3号鍛冶炉には「箸摺止め釘」と思われる鉄製品が炉壁の長辺の端に刺さって残されていた。

同時期の2基の鍛冶炉のついて比べた場合、一方が、地下構造の複雑な鍛冶炉で、掘り方が大きく、鉄床石との距離などから考えると、こちらの方が「本場」の炉になると推測される。2号鍛冶炉は伏樋状の地下構造を持っていたが、これは鈩の地下構造と共通するものであり、両者に技術的な交流があったことが窺える。

送風方法　3・7・8号鍛冶炉では鞴の羽口が原位置で確認できた。羽口はいずれも火窪の短軸側に装着されており、7・8号鍛冶炉では羽口を装着するために溝が掘り込まれている様子が確認できた。羽口の設置角度は「左下場」と推測される3号鍛冶炉で5°、「本場」と推測される7号鍛冶炉で7°で、両者に大きな違いは認められない。ただし、羽口が装着された短軸の炉壁面は、3号鍛冶炉の場合ほぼ垂直に立ち上がっているのに対し、7号鍛冶炉は内側に向かって擂鉢状に傾斜しており、両者の機能差を示しているのかもしれない。

羽口の装着された側の鍛冶炉外部には浅い窪みがあり、この部分には粘土が貼られていた。ここは羽口との位置関係から考えて鞴座になると思われる。7号鍛冶炉では「鞴座」の北側に黒色の土が硬化した部分があり、鞴指が作業した場所と思われる。6号鍛冶炉南側のSK 03も粘土で覆われた浅い窪みであり、6号鍛冶炉に伴う鞴座と考えられる。

3　鍛冶関連遺物

炉壁、羽口、鉄滓、鉄塊系遺物など多くの遺物が採取されている。

炉壁については、粉炭を多く含んだ火窪内壁の土と、緻密で均質な土を用いた火窪外側の炉壁土が採取されている。なぜこのような土の使い分けがされたのか検討課題となろう。また『鉄山必用記事』では炉壁胎土に塩を混和したという記述が見られるが[7]、本遺跡でこのような例が分析で確認できるのか興味深いところである。

羽口は先端部が斜め方向に溶損しているものと、垂直気味あるいは下半部がえぐれるように溶けているものが見られる。装着方法の違い、もしくは炉内で鉄を加熱した位置の違いを示すものかもしれない。また、分析により羽口の耐火度の違いが見られるのか、その結果が炉の機能とどのように結びつくのか検討すべき点である。

鉄滓については、鍛冶炉に伴う滓がどのような工程のものか、またどのような鉄素材が用いられたのか、金属学的な分析結果をまって検討したい。椀形鍛冶滓の形態を見ると平面形が縦長の楕円形のものと、幅広の半円形で片側が途切れたような面をもつものがある。長さが30cm前後もしくはそれよりも大形のものと、中形の20cm前後のもの、小形で10cmを超える程度のものと大小に分けられるようである。これらがどのような工程に伴うのか分析によって明らかにしたい。

鉄塊系遺物の中には、鍛冶原料となったと推測される銑鉄塊や不定形な鉄塊、大鍛冶作業の途中の鉄塊、小割鉄と思われるものなどが多く回収されている。これらの遺物を分析することで作業工程のどの段階にあるか位置づけるとともに、この遺跡で用いられた原料の性質や鍛冶技術の内容について検討していきたい。また、原料となる鉄や大鍛冶場で加工された鉄がどのような形態で流通

していたのか、知ることのできる手がかりも得られよう。

獅子谷遺跡では、大鍛冶に使用されたと思われる道具類が見つかっている。今後これらの類例を発掘資料や、民俗例から見出すとともに、椀形鍛冶滓などに残された工具痕と比較し、道具の使用された工程について検討したい。また、金属学的な分析から、鉄製品の性質や、鍛冶道具がどのように生産されたのか（自家生産か他から取り寄せたのか）なども明らかにできるかもしれない。

4　獅子谷遺跡の歴史的背景

本遺跡では、高殿鈩の成立期にあたる17世紀後半～18世紀前半に操業が始まるようであり、このことから近世大鍛冶場は高殿鈩とともに成立したと推測される。高殿鈩で大量の鉄類が生産されたため、それに見合う量の鉄類を処理・加工する必要性の増大が近世大鍛冶場の出現する背景になったと考えられる。また鈩の地下構造の発達や送風力の向上により、以前よりも高温の操業が可能となった結果、鈩で主要に生産される鉄の質に変化が起こり、これに応じた鉄の処理方法が求められたことも、大鍛冶場の成立する要素になったと思われる。

獅子谷遺跡について考える上で、弓谷鈩[8]との関連性は重要な問題となる。文献では、弓谷鈩は寛政12（1800）年から天保10（1839）年まで39年間稼働し、一旦操業を終えた後、文久元（1861）年に再興され明治時代中期までは続いていたことが分かっている。弓谷鈩 2 度目の操業にあたって「獅子谷鍛冶屋」が弓谷鈩付属の鍛冶屋として設けられたことが文献上で記されているが、遺物の年代から、獅子谷遺跡のⅢ期がこれに相当するものと考えられる。

ここでもう一つ注目すべき点は弓谷鈩の最初の操業と獅子谷遺跡Ⅱ期が同時期になることである。この時期の両者の関係は、文献では今のところ見出せないが、この段階までさかのぼる可能性も想定される。弓谷鈩の第 2 期に「獅子谷鍛冶屋」が設けられたのは、それ以前から弓谷鈩に付属する鍛冶屋として操業していたことが背景にあったのではないかと推測される。

（1）炉内で生成された滓などを動かす際に梃子の原理が用いられたが、「箸摺」は梃子の支点となる棒状の作業工具で、「箸摺止め釘」はこれを固定する役割を果たしたと考えられる。「箸摺」についての記述は近世の技術書である鉄山必用記事（下原1784）に見られる。発掘調査例としては戸井谷尻遺跡（島根県教育委員会2001）で報告されている。

A　下原重仲1784『鉄山必用記事』（館充　2001　『現代語訳　鉄山必用記事』丸善株式会社）

B　島根県教育委員会　2001　『戸井谷尻遺跡・長老畑遺跡』

（2）A　（1）Aに同じ

B　俵國一　1933　『古来の砂鐵製錬法』　丸善株式会社

（3）鍛冶炉の炉床で、木炭や滓分、粒状滓、鍛造剥片などが再結合したもの。土っぽい印象を受けることからこれらと炉床に貼られた粘土が一体になっているのかもしれない。分析によって内容を把握したい。

（4）岡山県古代吉備文化センター　1999　『大成山たたら遺跡群』

（5）島根県教育委員会　1999　『中原遺跡』

（6）（5）に同じ。

（7）（1）Aに同じ。

（8）島根県頓原町教育委員会　2000　『弓谷たたら』

図　版

殿淵山遺跡遠景
（南東より）

同　Ⅰ区
（東より）

同　Ⅰ区 SB 01
（北より）

殿淵山遺跡Ⅰ区
SK 01 礫検出
（南より）

同　Ⅰ区 SK 01 完掘
（南より）

同　Ⅰ区 SK 02
（西より）

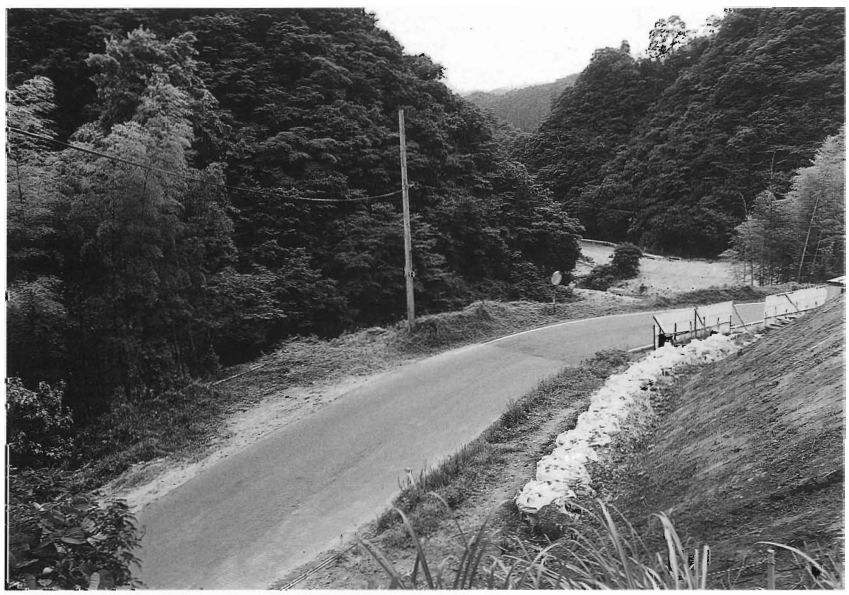
殿淵山遺跡Ⅰ区
SK 03
（西より）

同　Ⅰ区
SK 03 粘土面断面
（西より）

同　Ⅰ区西側調査後
（東より）

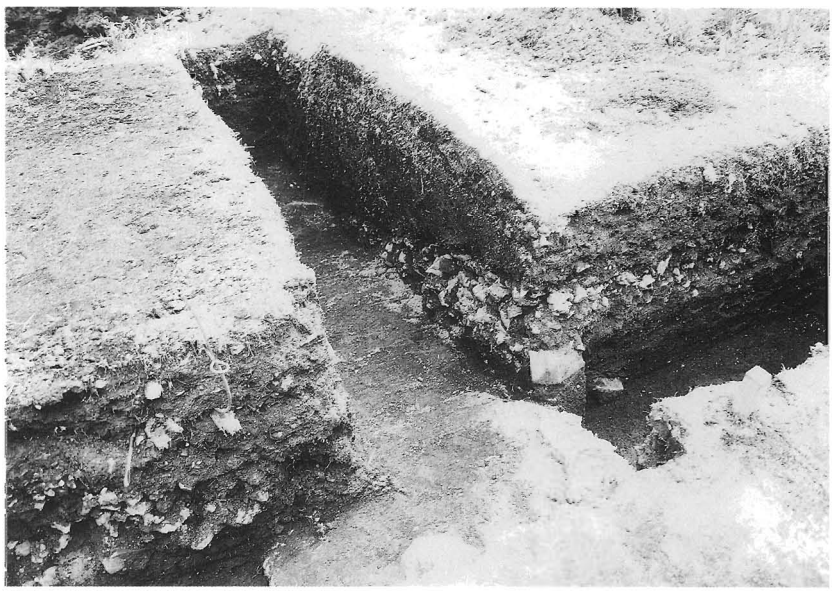
殿淵山遺跡Ⅰ区
東側調査後
（西より）

同　Ⅰ区炭窯跡
（南より）



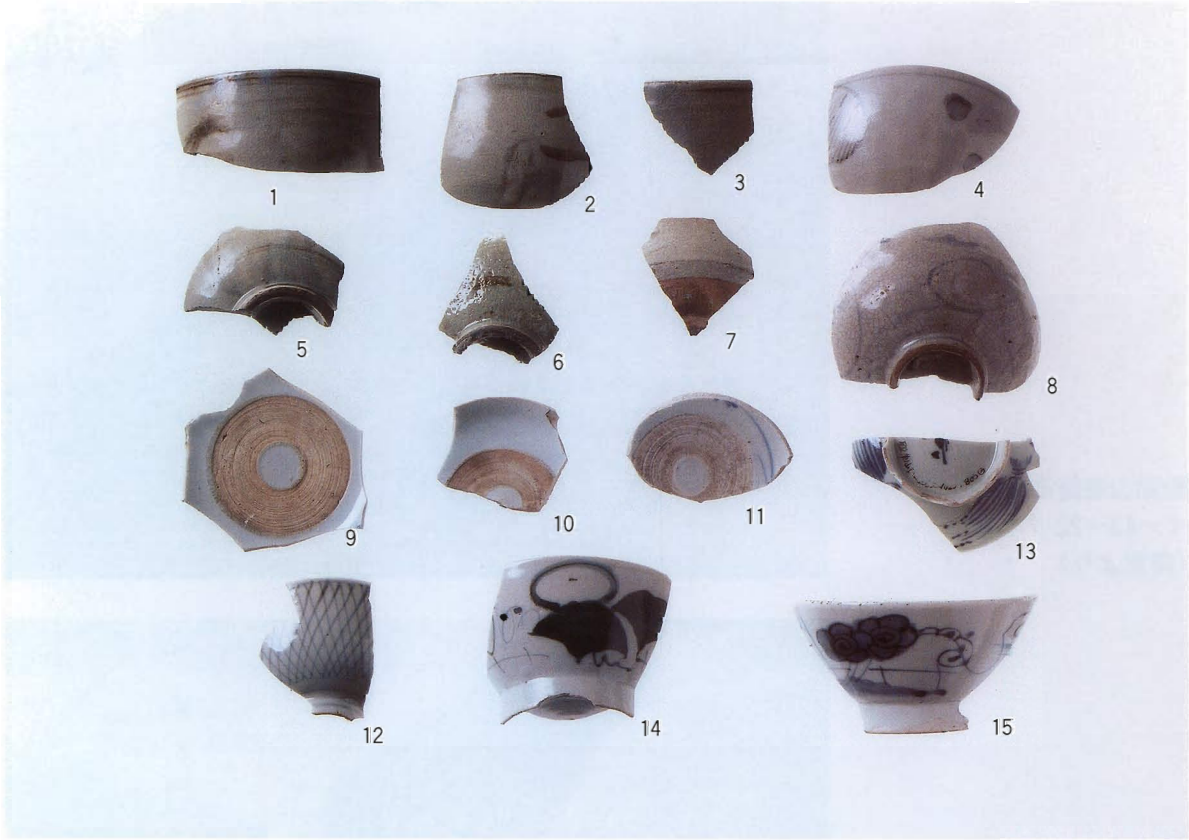
同　排滓場調査前近景
（北東より）

殿淵山遺跡排滓場断面
イ―13～22 グリッド
（南東より）



同　排滓場断面
ウ～カ―15 グリッド
（東より）

同　排滓場断面
ア―１～12 グリッド
（北より）



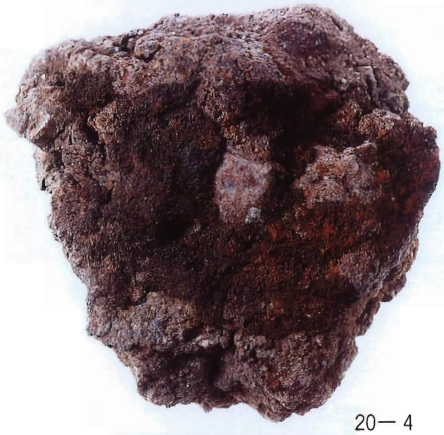
殿淵山遺跡出土陶磁器

炉壁上段（被熱弱）

20－2

20－2（側面）

炉壁中段
（被熱やや弱、砂鉄焼結）



20－4

20－4（側面）

炉壁中段
（滓化、砂鉄焼結）

21－18

21－18（側面）

炉壁下段
（通風孔上）

22－30

22－30（側面）

殿淵山遺跡製鉄関連遺物

殿淵山遺跡製鉄関連遺物

炉壁最下段　21－77

流出孔付　26－77（裏面）

炉壁最下段　27－80

炉底付近
の炉壁
（炉底塊付）　29－92

29－92（裏面）

鉄塊の切断面　39－194

39－195

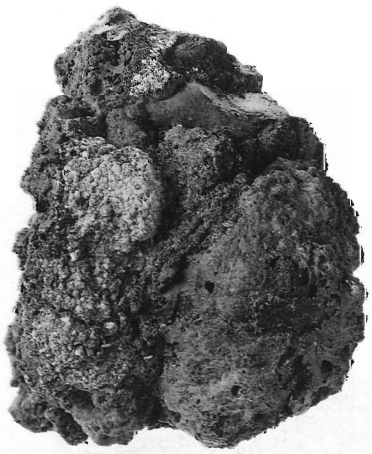
殿淵山遺跡製鉄関連遺物

30—95
砂鉄焼結塊

30—105
単位流動滓

30—120
工具付着滓

30—109
工具痕付着滓



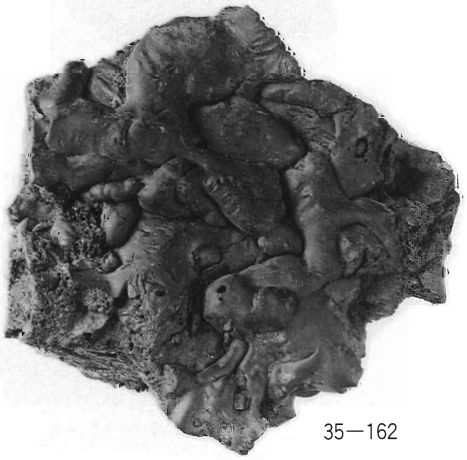
31—122
炉底塊～流出孔滓

31—126
流出孔滓（ガス質）

25—69（側面）

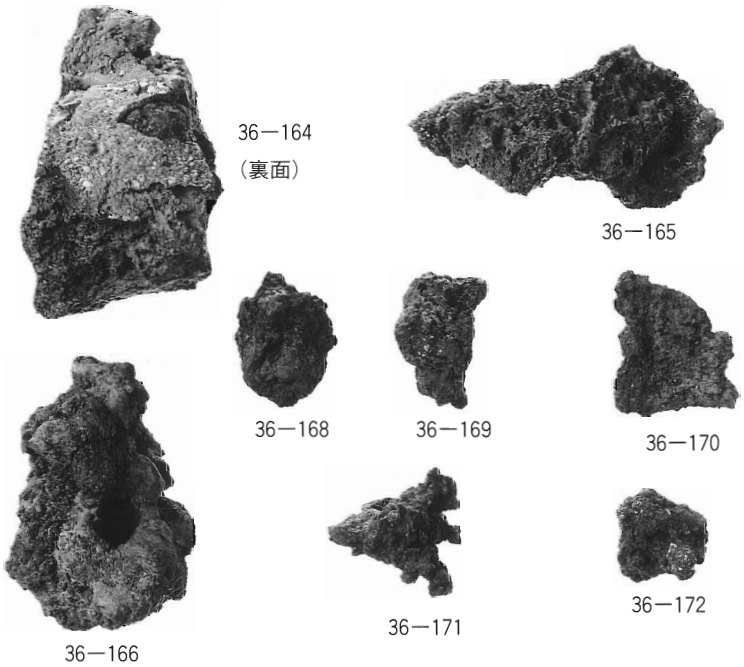
32—143
流出溝滓（ガス質）

34—150
流出孔滓（緻密質）

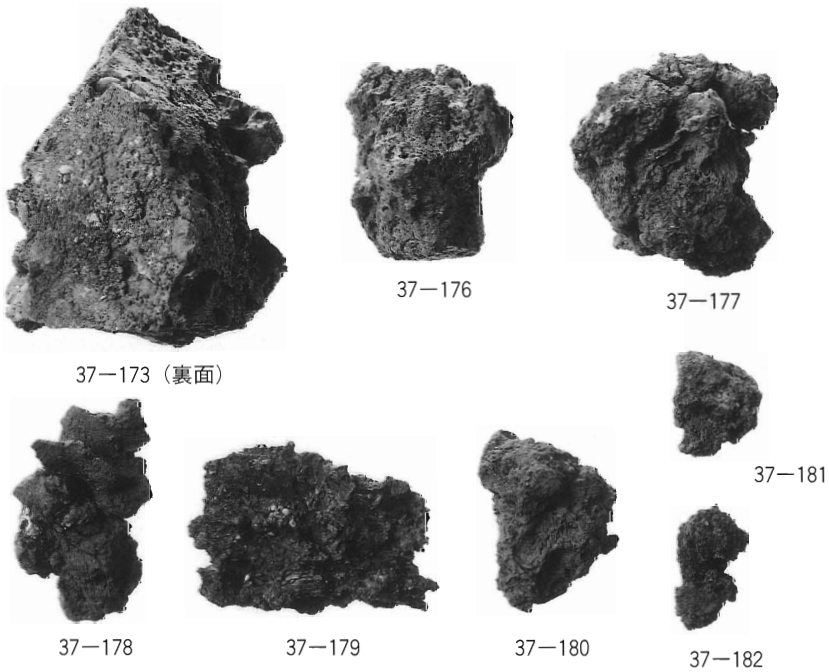


35—162
流出溝滓（緻密質）

殿淵山遺跡製鉄関連遺物



含鉄鉄滓（特Ｌ・（☆））



含鉄鉄滓（Ｌ・（●））

38—183

38—185

38—186

38—187

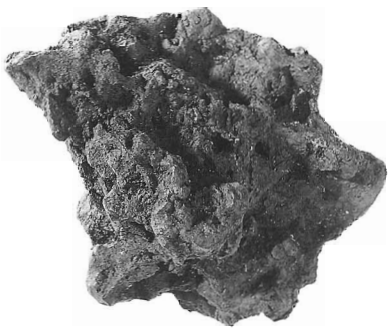
38—189

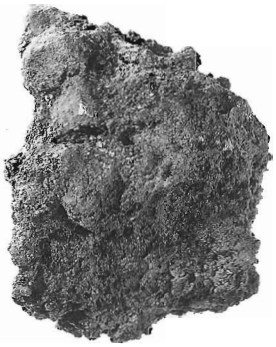
38—190

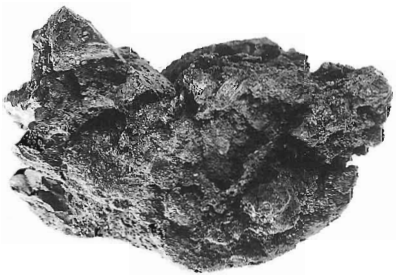
38—191

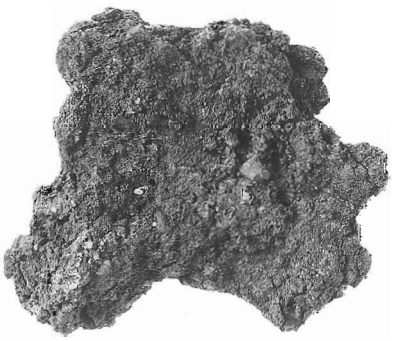
38—192

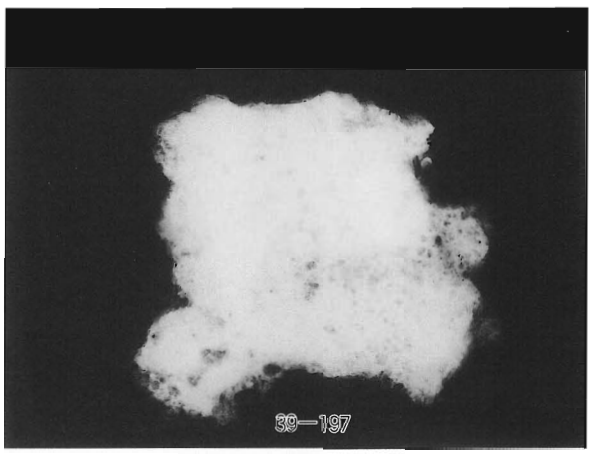
含鉄鉄滓（M・(◎)，H（○））


39—193

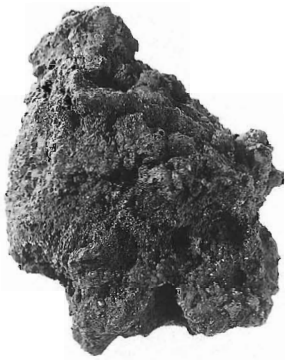

39—194


39—195（側面）

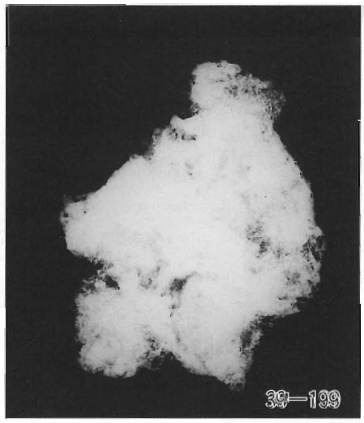

39—197

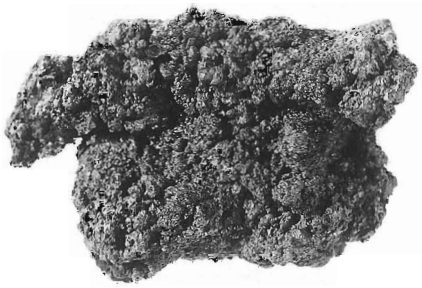


鉄塊系遺物

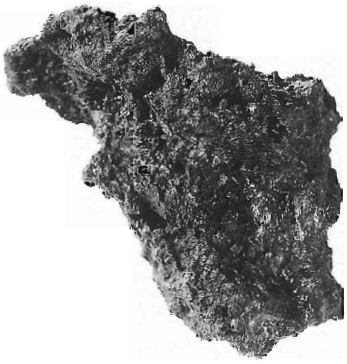


39—199





39—200



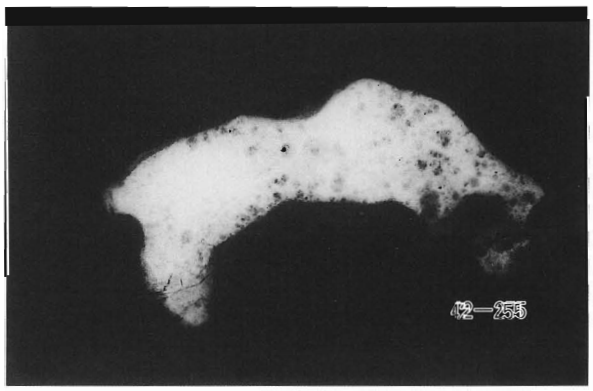
40—206

40—210

41—237

42—271

42—255



殿淵山遺跡鉄塊系遺物

獅子谷遺跡遠景（北東上空より）

獅子谷遺跡俯瞰写真

同　調査状況（東上空より）

獅子谷遺跡調査前近景（南より）

同　調査後写真

獅子谷遺跡 1 号鍛冶炉検出状況（西より）

同　1 号鍛冶炉（西より）

同　1 号鍛冶炉断面（西より）

同　1 号鍛冶炉掘り方（西より）

同　2 号鍛冶炉（東より）

同　2 号鍛冶炉縦断面（南より）

同　2 号鍛冶炉横断面（南より）

同　2 号鍛冶炉と鉄床 1

獅子谷遺跡 2 号鍛冶炉地下構造（南より）

同　2 号鍛冶炉地下構造掘り方（蓋石除去後）

同　2 号鍛冶炉地下構造（東より）

同　2 号鍛冶炉地下構造掘り方（南より）

獅子谷遺跡 2 号鍛冶炉掘り方完掘（東より）

同　鉄床 1（東より）

同　鉄床 1 上面

同　鉄床 1 掘り方

同　3 号鍛冶炉（北より）

獅子谷遺跡 3 号鍛冶炉検出（北より）

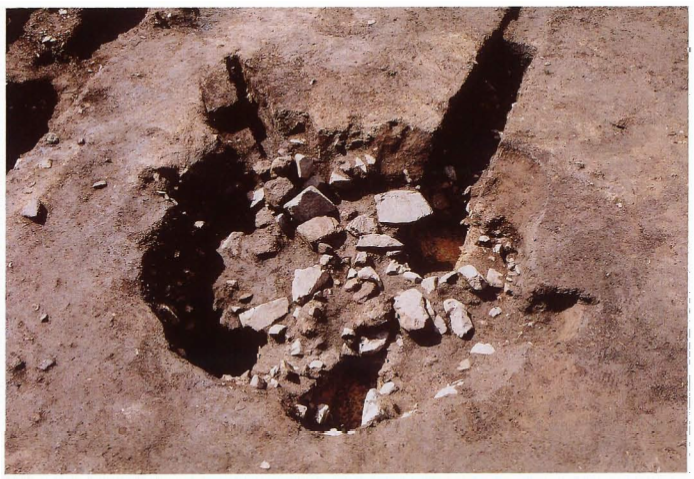
同 3 号鍛冶炉縦断面（西より）

同　3 号鍛冶炉横断面（北より）

同　3 号鍛冶炉羽口装着状況（西より）

同　3 号鍛冶炉羽口装着状況（北より）

同　3 号鍛冶炉掘り方（北より）



同　4 号鍛冶炉上層（東より）

同　4 号鍛冶炉地下構造木炭層

獅子谷遺跡 4 号鍛冶炉（東より）

同　4 号鍛冶炉地下構造内壁（北より）

同　4 号鍛冶炉北側横断面

同　4 号鍛冶炉縦断面

同　4 号鍛冶炉南側横断面

獅子谷遺跡 4 号鍛冶炉掘り方（東より）

同　鉄床 2 上層焼土面（西より）

同　鉄床 2 断面（南より）

同　SX 01（東より）

同　鉄床 2（西より）

獅子谷遺跡Ⅲ期大鍛冶場跡（東より）

同　SB 02（東より）